研究紀要 No.33

平成14年6月6日・6月7日
教育研究会要録

豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造

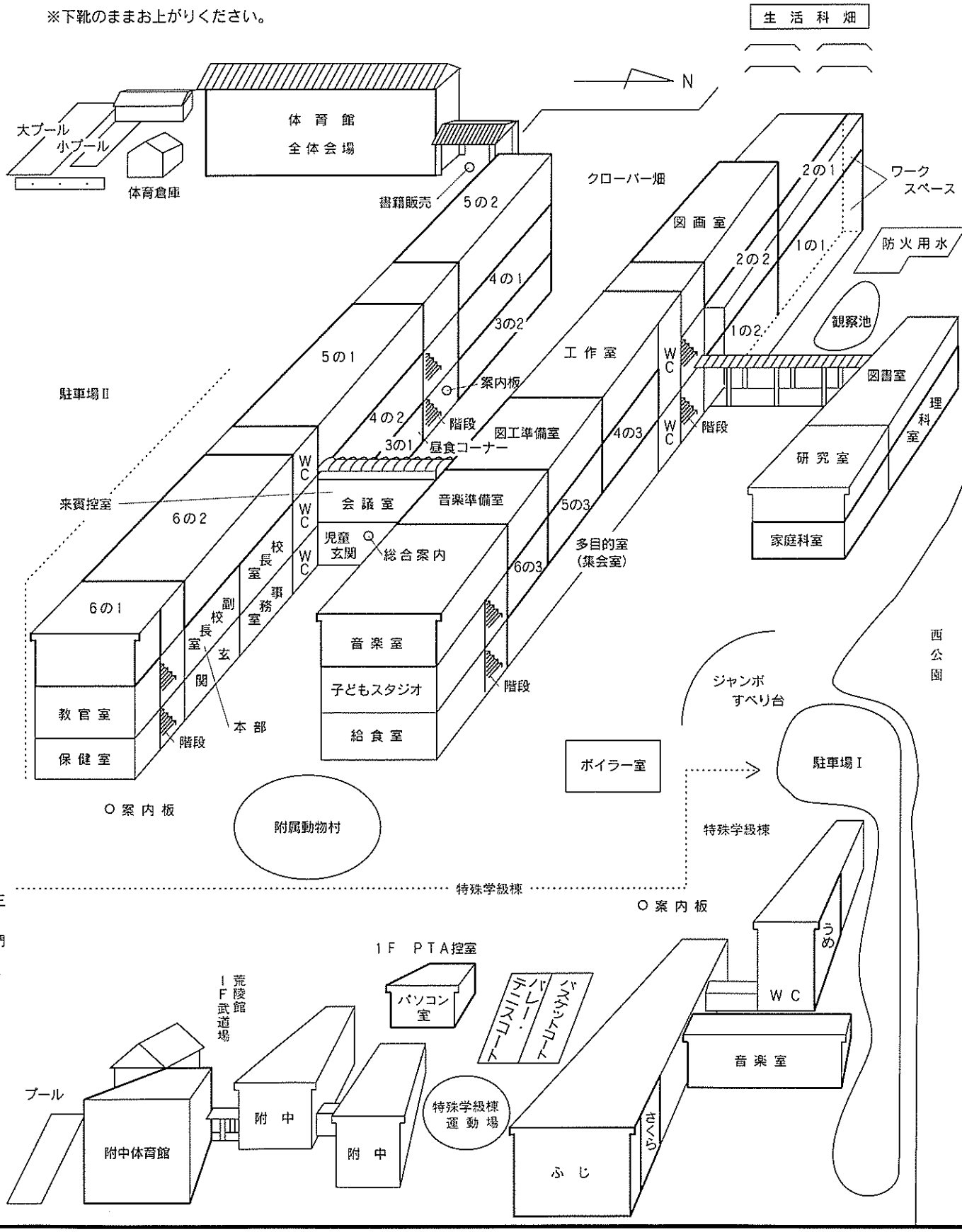
教科・総合の学びを連動する〈ふくおかプラン〉の展開



福岡教育大学教育学部附属福岡小学校

研究会会場図

※下靴のままお上がりください。



ご あ い さ つ

福岡教育大学　学　長　　松　尾　祐　作

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校の平成１４年度研究発表会の開催にあたりまして，ひとことごあいさつを申し上げます。

現在，各附属学校は，その役割についても，先行研究実験校としての任務を確かに果たしていくことが何よりも大切なことの一つであると考えております。なかでも，大学と連携した研究開発はますます必要であり，その成果が，この研究発表会を通して，それぞれの公立学校に還元されるものであることが強く求められています。

本年度の研究発表会は，主題を「豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造　－教科・総合の学びを連動する＜ふくおかプラン＞の展開－」と設定して，その研究成果を世に問うものであります。公開授業はもちろん，大学教官との共同授業，教科等の発表，学習指導協議会，大学教官による教育シンポジウム，全体講演と，２日間にわたる，多彩な内容となっております。昨年度の副主題「－調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化－」を発展的に継続研究してきた成果が発表されるものと期待しています。

今回の研究発表会が地域の学校のみならず，わが国における初等教育実践の進展に少しでも寄与できれば，これに優る喜びはありません。ご参会された皆様方のご指導・ご助言を切にお願いする次第であります。

最後になりましたが，ご多用のなか，ご講演をお引き受けくださいました国立教育政策研究所の工藤文三先生に深く感謝申し上げます。また，司会者・指導助言者としてご協力くださいました諸先生方にもお礼申し上げます。今回の研究発表会を機会に附属学校を中心に，大学と各地域の公立学校及び教育関係機関との連携を深めてまいりたいと願っております。関係する皆様のより一層のご支援をお願い致しまして，ごあいさつと致します。

はじめに

教育内容の厳選や「総合的な学習の時間」の創設などが盛り込まれた新学習指導要領が全面実施となりました。新世紀における新しい教育改革を，各学校では，特色ある教育活動づくり・学校づくりとして具現化していかねばなりません。

本校では，この完全実施に向けて，かなりの年数をかけ，研究実践を積み重ねてきました。

平成６年度から３年間，文部省の研究開発学校の指定を受け，子供たちに「生きる喜びを生み出す」教育課程の創造をめざし，教科の再編，内容の改訂を試みて参りました。この成果につきましては，著書「21世紀の教科・領域への挑戦『新時代の授業を創る』」（明治図書）として，既に発刊しています。

平成９年度からは，これらの研究をもとに，人間教育の在り方に目を向け，「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」という主題を掲げて研究に取り組んで参りました。そのなかでは，「知恵と心情を育む教科・総合的学習の調和的展開」という副主題を設定し，知恵と心情を併せて培う学習の在り方の究明に取り組んで参りました。特に，文化の拡充を担う教科と，生活の更新を担う総合的学習とに，共通する学習方法原理を取り入れることで，調和的な展開を図ってきました。これらの研究の成果につきましては，著書「調和的に展開する教科・総合的学習『新世紀の学力づくり』」（明治図書）を，昨年度発刊しています。

本年度は，さらにこうした研究を発展すべく，「教科・総合の学びを連動する＜ふくおかプラン＞の展開」を副主題に「豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造」に取り組んでいるところです。

この研究発表会が多くの方々のご指導・ご支援のもとに開催できていることを深く感謝申し上げますとともに，今後とも各方面からのご助言やご協力をお願いする次第でございます。

平成１４年６月

校　長　　中　谷　雅　彦

目　　次

ごあいさつ …… 1
はじめに …… 2
目　　次 …… 3
日程と内容（第１日目）…… 4
日程と内容（第２日目）…… 6
本校研究の歩み …… 7

公開授業及び全体会の部（第１日目）

学習指導案（午前）…… 9
全　体　会 …… ２６
学習指導案（午後）…… ２７
学習指導協議会…… ５４
教育シンポジウム…… ５４

公開授業及び全体会の部（第２日目）

学習指導案（午前） …… ５５
全　体　会 …… ７６
提案学習指導案（午後）…… ７７
提案学習指導協議会 …… ９４
全体講演 …… ９４

研　究　紀　要　の　部

研究紀要の部目次 …… ９５
研究全体構想 …… ９６
各教科等部要項 ……１２４
障害児教育研究部要項 ……２２４
帰国子女教育研究部要項 ……２４２

おわりに ……２４９
平成14年度研究同人 ……２５０

第1日目　6月6日（木）の日程

▼ 学　習　指　導（9：15～10：00）

学年　組	教科領域等	単　元　・　題　材　・　主　題　名	授　業　者	会　場
3年1組	国　　語　　科	わたしの町自まんをわかりやすく伝えよう	田　渕　　聡	3年2組教室
3年2組	あらつ学習（総合）	あらつカッパ伝説 -むかし話からたんけん!あらつの町・福岡の町-	吉　田　正　樹	子供スタジオ
4年2組	算　　数　　科	およその数で表そう	野　田　真　功	4年1組教室
5年2組	あらつ学習（総合）	どう思う？自動販売機って便利！？	髙　野　誠　一	5年2組教室

▼ 大学教官との共同学習指導（9：15～10：00）

4年1組	音　　楽　　科	曲の感じを生かして　ーひきだそう楽器のみカー	木村次宏助教授 豊　村　雅　義	音　楽　室
5年1組	算　　数　　科	しきつめもようをつくろう	山口武志助教授 澤　村　重　則	6年1組教室

▼ 通常学級と障害児学級との交流学習指導（9：15～10：00）

1年1組 ふ じ 組	体　　育　　科	はらはら！ドキドキ！　あてっこ・にげっこゲーム	稲　津　一　徳 舛　元　俊　文	附中体育館

▼ あ　い　さ　つ（10：30～10：45）

福岡教育大学学長　　松　尾　祐　作

学　校　長　　中　谷　雅　彦

▼ 主　題　発　表（10：50～11：10）

・豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造

ー教科・総合の学びを連動する＜ふくおかプラン＞の展開　　研究主任　　吉　田　正　樹

▼ 障害児教育発表（11：10～11：30）

・豊かな生活を営む子供をめざす教育課程の創造

ー各教科及び領域・教科を合わせた指導における役割を明確にしてー　　障害児教育部　　谷　崎　和一郎

▼ 教　科　等　発　表（11：30～11：50）

・音楽的な感受力と構想力を育む音楽科学習

ー音楽に多文化的にアプローチする音楽科学習プランー　　音楽科部　　原　　クミ

▼ 児　童　発　表（11：50～12：00）

・創り出そう！私達のハーモニー　　指導者　　豊　村　雅　義

▼ 学 習 指 導（１３：００～１３：４５）

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
１年２組	生活学習（生活科）	なかよしひろばをつくろう	北 島 孝 徳	１年２組教室
２年１組	道徳学習（道徳の時間）	植物にやさしい心で	大 近 正 博	２年１組教室
２年２組	算 数 科	つかみ取りゲームをしよう -1000までの数のあらわし方やじゅんじょをしらべて-	塩 田 利 彦	２年２組教室
３年１組	理 科	カブトムシからのぞく小さな命 -昆虫と仲良くなろう-	野 口 信 介	理 科 室
3年2･3組	図 画 工 作 科	つくろう！教室の中のふしぎなせかい	北 田 尚 雄	工 作 室
４年１組	国 語 科	生き物のふしぎを読み取ろう！ヤドカリとイソギンチャク！	平 島 健 二	４年１組教室
４年２組	社 会 科	これからの福岡市の水 -節水型都市をめざして-	藤 野 俊 明	３年２組教室
５年１組	学級活動（特別活動）	学級成長記録を見直そう！-電子アルバムでつづる学級成長記録-	矢 野 俊 次	５年２組教室
5年2･3組	音 楽 科	ひびけ！フォルクローレ-ふしや音色のよさを味わおう-	原 クミ	音 楽 室
6年1･3組	体 育 科	バスケットボールのプレーの秘密を探ろう！	岩 城 一 磨	附中体育館
６年２組	家 庭 科	和風の朝食にチャレンジしよう-私の自慢の健康みそ汁-	木 村 真 美	家 庭 科 室

▼ 障害児教育学習指導（１３：００～１３：４５）

さくら組	国 語 科	わくわく えはがきを つくろう	原 口 和 美	さくら組教室
梅 組	生 活 単 元 学 習	なかよし すいぞくかんを つくろう	谷 崎 和一郎	特殊学級棟音楽室

▼ 学習指導協議会（１４：００～１５：００）

会 場	教科領域等	司 会 者	指 導 助 言 者	
４年１組	国 語 科	古賀市立青柳小学校 教諭 光 延 正次郎	久山町立山田小学校 校長 古 川 千 年	福岡教育大学 教授 前 田 眞 證
３年２組	社 会 科	福岡市立警固小学校 教諭 石 橋 剛 克	前原市立南風小学校 校長 家宇治 正 幸	福岡教育大学 教授 中 野 和 光
２年２組	算 数 科	甘木市立秋月小学校 教諭 大 坪 和 之	前原市立前原南小学校 校長 吉 富 修	福岡教育大学 助教授 飯 田 慎 司
理 科 室	理 科	大野城市立下大利小学校 教諭 日永田 浩 明	八女市立福島小学校 校長 近 本 輝 雄	福岡教育大学 教授 中 村 重 太
１年２組	生 活 科	福岡市立七隈小学校 教諭 松 田 伸 治	太宰府市立水城小学校 校長 平 石 信 敏	福岡教育大学 助教授 森 藤 義 孝
音 楽 室	音 楽 科	前原市立波多江小学校 教諭 林 田 靖 子	大刀洗町立菊池小学校 校長 大 橋 鉄 雄	福岡教育大学 助教授 木 村 次 宏
図 画 室	図画工作科	春日市立春日北小学校 教諭 中 山 朗	福岡市立愛宕小学校 校長 田 中 和 隆	福岡教育大学 講 師 草 尾 和 之
附属中学校 体 育 館	体 育 科	粕屋町立仲原小学校 教諭 緒 方 勝 彦	太宰府市立太宰府東小学校 校長 大 橋 直 徳	福岡教育大学 講 師 兄 井 彰
家庭科室	家 庭 科	福岡市立八田小学校 教諭 篠 原 裕 子	福岡市立室見小学校 校長 田 中 光 子	福岡教育大学 教授 柳 昌 子
５年２組	特 別 活 動	古賀市立千鳥小学校 教諭 堤 一 浩	北筑後教育事務所 指導主事 中 原 浩	福岡教育大学 教授 高 田 清
２年１組	道 徳	前原市立怡土小学校 教諭 石 硯 昭 雄	柳川市立柳河小学校 校長 松 石 正 夫	福岡教育大学 助教授 堺 正 之
体 育 館	総合的な 学習の時間	福岡市立博多小学校 教諭 今 林 康 治	瀬高町立南小学校 校長 堤 直 樹	福岡教育大学 助教授 大 坪 靖 直
特殊学級棟 梅組教室	障害児教育	福岡市立弥永西小学校 教諭 坂 田 佳 美	前原市立雷山小学校 教頭 谷 口 慎 二	福岡教育大学 助教授 藤 金 倫 徳

▼ 大学教官と本校教官による，教育シンポジウム（１５：２０～１６：４５）

新教育課程に求められる教科の学び・総合の学び －今，その役割・立場を問い直す！－

福岡教育大学 教 授 中 野 和 光 先生
助教授 飯 田 慎 司 先生
助教授 堺 正 之 先生
助教授 大 坪 靖 直 先生

本校研究副主任 稲 津 一 徳
本校総合部主任 野 口 信 介

▼ あ い さ つ

副校長 久 門 隆

第2日目　6月7日（金）の日程

▼ 学　習　指　導（9：15～10：00）

学年　組	教科領域等	単　元　・　題　材　・　主　題　名	授　業　者	会　場
1年1組	算　数　科	たしざんえほんをつくろう	澤　村　重　則	1年1組教室
1年2組	音　楽　科	リズムで遊ぼう　ー教生先生となかよしー	豊　村　雅　義	音　楽　室
3年2組	算　数　科	わり算をかたちで考えよう -もようづくり-	塩　田　利　彦	3年2組教室
5年1組	社　会　科	大きく育て！福岡のとらふぐ	藤　野　俊　明	5年2組教室
5年2･3組	家　庭　科	家族を喜ばせるものを布で作ろう！	木　村　真　美	家庭科室
6年1･3組	理　科	ものの燃え方と空気の関係を探ろう	手　島　宏　樹	理　科　室
6年2組	国　語　科	読書から考えを広げ深めよう！「宇宙からツルを追う」	平　島　健　二	6年1組教室

▼ 保健養護部提案学習指導（9：15～10：00）

3年1組	体育科／特別活動	けんこうな毎日Ⅱ -よりよいけんこうプランをつくろう-	体育担当 岩城一磨 養護教諭 森田常子	4年2組教室

▼ 障害児教育学習指導（9：15～10：00）

さくら組	算　数　科	さくらぐみランドをつくってあそぼう	園　田　洋　一	特殊学級棟音楽室
梅　組	国　語　科	よんで　つくって　くみたてよう	原　口　和　美 舛　元　俊　文	特殊学級棟 梅組教室

▼ あ　い　さ　つ（10：30～10：45）

初等教育委員長

学校長　　中　谷　雅　彦

▼ 主　題　発　表（10：50～11：10）

・豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造

ー教科・総合の学びを連動する＜ふくおかプラン＞の展開ー　　研究副主任　　稲　津　一　徳

▼ 教　科　等　発　表（11：10～11：50）

・自ら運動を構想する力を育む体育科学習

ー動きや作戦を分析的に探る体育科学習プランー　　体育科部　　岩　城　一　磨

・自己の生き方を創るあらつ学習

ー本校の総合的な学習の時間の単元づくり・カリキュラムづくりー　　総合部　　髙　野　誠　一

▼ 児　童　発　表（11：50～12：00）

・創り出そう！私達のハーモニー　　指導者　　豊　村　雅　義

▼ 提案学習指導（13：00～13：45）

学年 組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
2年1組	学級活動(特別活動)	教生先生とやってみたいこと	矢野俊次	2年1組教室
2年2組	生活科・図画工作科（合科）	外国人さんとおめんカーニバルをひらこう！	北田尚雄	工作室
4年1組	あらつ学習（総合）	つくろう！あらつふれあいウォーキングコース	原クミ	4年1組教室
4年2組	体育科	つなごう!ねらおう!4の2オリジナルバウンドゲーム	稲津一徳	附中体育館
6年1組	あらつ学習（総合）	レッツ・エンジョイ・コミュニケーション	野口信介	子供スタジオ
6年2組	社会科	日本文化の源流を探ろうⅠ	髙野誠一	6年1･2組教室

▼ 帰国子女教育提案学習指導（13：00～13：45）

4～6年3組合同	国際交流タイム（総合）	楽しもう！世界のメルヘン	野田真功	5年2組教室

▼ 障害児教育提案学習指導（13：00～13：45）

ふじ組 さくら組 梅組	合同生活単元学習	みんなでフルーツパーティーをしよう	谷崎和一郎・舛元俊文 原口和美・園田洋一	特殊学級棟 音楽室

▼ 保健養護部実践提案部会（13：00～15：00）

会場	提案者	司会者	指導助言者
4年2組教室	本校養護教諭 森田常子	志摩町立志摩中学校 養護教諭 今村由香	福岡県立看護専門学校 講師 筑紫咏子　福岡教育大学 教授 照屋博行

▼ 提案学習指導協議会（14：00～15：00）

会場	協議会	協議会テーマ	提案者	指導助言者
2年1組教室	低学年教科等	低学年の子供の発達段階を大切にした合科・関連的指導をどう工夫するか	矢野俊次 北田尚雄	春日市立春日西小学校 教頭 安永純二
4年1組教室	中学年教科・総合	教科の基礎・基本，総合の基礎・基本をどう明確化して個に応じたきめ細かな学習指導を行っていくか	稲津一徳 原クミ	福間町立福間南小学校 校長 西邦彰
体育館	高学年教科・総合	一人一人の個性を大切にした深化・発展学習を，教科と総合でいかに展開するか	野口信介 髙野誠一	国立教育政策研究所教育課程研究センター 基礎研究部 総括研究官 工藤文三
5年2組教室	帰国子女教育	一人一人の課題に応じ特性伸張をめざす帰国子女教育単元づくりや年間計画の立て方について	野田真功 木村真美	福岡市立三筑小学校 校長 山田耕司
特殊学級棟さくら組教室	障害児教育	一人一人のニーズに応える生活単元学習単元設定と年間計画の立て方について	舛元俊文 谷崎和一郎	福岡市立福岡中央養護学校 教頭 髙井敏雄

▼ 全体講演（15：15～16：45）

「今，求められる カリキュラム開発と評価」

国立教育政策研究所　教育課程研究センター

基礎研究部　総括研究官　**工藤文三** 先生

▼ あいさつ　　副校長　久門　隆

本校研究のあゆみ

年度	
23	○学習効果判定の理論と実際
24	○カリキュラムの構成と実際
25	（発表会なし）
26	○学習深化の指導
27	○学習深化の指導
28	○学習深化をめざす指導
29	○学習指導における諸問題の再検討
30	○学習指導における新課題の再検討
31	○学習指導深化をめざす新課題の究明
32	○組織化をめざす学習指導法の究明
33	○組織化をめざす学習指導法の究明
34	○学習指導の系統化
35	○改訂指導要領による学習指導の諸問題
36	○考える子どもを育てる指導法の究明
37	○考える力をのばす学習指導法の考察
38	○考える力をのばす学習指導法の考察
39	○考える力をのばす学習指導法の考察
40	○考える力をのばす学習指導法の考察
41	○考える力をのばす学習指導法の考察 「授業における思考訓練」（明治図書から出版）
42	○教科の本質に立脚した学習指導法の考察 「思考をのばす学習過程の評価」 （明治図書から出版）
43	○（発表会なし）
44	○現代化をめざす指導法の究明 ― 教材の現代的価値と児童の実態と 反応に基づく指導内容の検討 ―
45	○現代化をめざす指導法の究明 ― 基本的内容にせまらせる学習の開発 ―
46	○現代化をめざす指導法の究明 ― ひとりひとりを生かす 合理的な学習指導のしくみ ―
47	○現代化をめざす指導法の究明 ― 学習の連帯化をはかる指導のしくみ ―
48	○現代化をめざす指導法の究明 ― 連帯性を育てる学習指導のしくみ ―
49	○現代化をめざす指導法の究明 ― 連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる 学習指導のしくみ ― 「学習を連帯化する指導法」 （明治図書から出版）
50	○現代化をめざす指導法の究明 ― 学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ ―
51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 ― 操作を通した学習の構造化 ―
52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 ― 操作を通した学習指導の展開 ― 「できるまで育てる」　（秀巧社から出版）
53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 ― 交流でよりよい操作を身につける 学習指導 ― 「自由活動の時間」　（秀巧社から出版）
54	○現代化をめざす指導内容と指導法の実証的究明 ― 教材の価値にせまらせる操作学習の評価 ―
55	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 ― 見直し活動を生かした操作学習の深化 ―
56	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 ― 自己を見直し、考えを深める 指導のしくみ ―
57	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 ― 自ら見直し活動に取り組み、 自己を深める指導のしくみ ― 「学ぶ喜びを生み出す授業」 （北大路書房から出版）
58	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 ― 個が生きる課題づくり ―
59	○自己実現の喜びを生みだす学習内容の検討 ― 学習実態の多様性に即応する学習指導 ―
60	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 ― 子どもの個性が生きる指導 ―
61	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 「学習の個性化をめざす指導法の開発」 （明治図書から出版）
62	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 ― 学習の個性化をめざす学習過程 ―
63	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 ―「学習の個性化」をめざす授業の改造 ― 「感動体験を中核とした生活科の授業づくり」 （明治図書から出版）
平成元年	○個が生きる授業の創造 ― 自己理解の学習過程 ―
2年	○個が生きる授業の創造 ― 考えを確かにする活動構成 ―
3	○個が生きる授業の創造 ― 考えを深める自己吟味活動を通して ― 「個が生きる授業づくり」 （北大路書房から出版）
4	○生きる喜びを生み出す授業の創造 ― 思い・願いをもって問いつづける 活動づくり ―
5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 ― 思いをあらわしていくよさを 実感する活動の展開 ―
6	○生きる喜びを生み出す学習の創造 ― 自分のよさを実感する表現活動の展開 ―
7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 ― 新しい教育課程における教科領域の 学習の具体化 ―
8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 ― 子供主体の活動からみる教育課程の編成 ― 「新時代の授業を創る」（明治図書から出版）
9	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 ― 子供主体の活動からみる教育課程の編成 ―
10	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 ― 活動や体験を基盤にした学習の総合化― 「学習創造」（算数・人間・障害児教育）出版
11	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 ― 子供と創る教科・総合的学習の展開 ― 「学習創造」（理科・図画工作・音楽）出版
12	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 ― 知恵と心情をはぐくむ教科・総合の 調和的展開 ― 「学習創造」（国語・体育）出版
13	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 ― 調和的に展開する教科領域・総合的 学習像の明確化 ― 「新世紀の学力づくり」（明治図書）」出版
14	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 ― 教科・総合の学びを連動する〈ふくおかプラン〉の展開 ―

公開授業及び全体会の部

第１日目　午前の部

公開授業指導案

▼ 学 習 指 導（９：１５～１０：００）

学年　組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
３年１組	国　語　科	わたしの町自まんをわかりやすく伝えよう	田 渕　聡	３年２組教室
３年２組	あらつ学習（総合）	あらつカッパ伝説 -むかし話からたんけん!あらつの町・福岡の町-	吉 田 正 樹	子供スタジオ
４年２組	算　数　科	およその数であらわそう	野 田 真 功	４年１組教室
５年２組	あらつ学習（総合）	どう思う？自動販売機って便利！？	髙 野 誠 一	５年２組教室

▼ 大学教官との共同学習指導（９：１５～１０：００）

４年１組	音　楽　科	曲の感じを生かして　ーひきだそう楽器のみカー	木村次宏助教授 豊 村 雅 義	音　楽　室
５年１組	算　数　科	しきつめもようをつくろう	山口武志助教授 澤 村 重 則	６年１組教室

▼ 通常学級と障害児学級との交流学習指導（９：１５～１０：００）

１年１組 ふ じ 組	体　育　科	はらはら！ドキドキ！　あてっこ・にげっこゲーム	稲 津 一 徳 舛 元 俊 文	附中体育館

個の動きに応じ，仲間意識を広げる体育科学習（1・2年ふじ組との交流学習）

第1学年1組　体育科学習指導案

指導者　稲津一徳(T1)　舛元俊文(T2)

単元　はらはら!どきどき!あてっこ・にげっこゲーム

指導観

○　本単元は，攻守の２チームに分かれ，宝島への複数のコースから１本を選び，コース外から投げられるボールを避けたり捕らえたりしながら走り抜け，得点を重ね，勝敗を競い合うドッジボール型のゲームである。単元を通して，ボールの動きに応じて避けたり，捕らえたりする動きや相手の動きに応じて転がしたり，投げたりする動きを発揮し，仲間と協力してゲームを楽しむ力を高めることをねらいとしている。具体的には，①コースの障害物，ボールに応じて姿勢を変えながら避けたり，捕らえたりする動きや相手の動き，障害物に応じて転がしたり，投げたりする動きを広げること，②規則を守り，チームの仲間と動きや声かけなどの協力をしてゲームを楽しむことが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，就学前の遊びを通して，ボールを投げたり，避けたりする経験を広げてきている。そのなかで，得点をつけたり，勝敗を競ったりする楽しさも味わってきている。しかし，これまでの運動経験の違いから，ゲームに対する一人一人の動き，楽しみ方の個人差は大きく，個人の動きや楽しみ方に応じた学習活動が必要である。また，特殊学級の児童とのかかわりについては，日常の遊びや行事のなかで少しずつ見られるが，さらに学習活動にまで広げていきたい。そこで，協力することでより高い得点をねらえる本単元は，共に運動する楽しさを味わい，互いのかかわりや動きを広げていく上で価値がある。

○　本単元の指導においては，ゴールまでのコースやコース内の障害物を変化させ選択させるなかで，避ける，捕らえる，転がす，投げる動きを広げると共に，仲間意識を広げながらゲームを楽しむことができるようにする。であう段階では，障害物を置いた直線コースと出合わせ，うまくボールを避けたり，捕らえたり，投げ当てたりする楽しさを体験させ，追究目的と課題を捉えさせる。つくる段階では，直線から曲線，ジグザグへとコースを変化させ，そのなかで，障害物を減らしながら多様な動きを身に付けさせていく。また，コースの変化に応じてコース別配点やボーナス点などの得点方法も工夫させ，仲間との協力が生まれるように支援する。いかす段階では，障害物のない３種類のコースでゲーム大会を行い，広げた動きや仲間との協力を発揮し，学習への効力感を味わえるようにする。

目　標

1　障害物やコースの変化に応じて得点方法を工夫したり，避ける，捕らえる，転がす，投げる動きを工夫したりして，ゲームを楽しむことができる。（主体性・創造性）

2　得点の獲得に向けて自分の動きや楽しみ方に合ったコースを選び，１組やふじ組の仲間と工夫した動きを教え合ったり，声をかけ合ったりすることができる。（主体性・社会性）

計　画　（約６時間）

<table>
<tr><th>階</th><th>であう段階（２時間）</th><th colspan="3">つくる段階（３時間）</th><th>いかす段階（１時間）</th></tr>
<tr><td rowspan="2">活動と内容</td><td>1　直線コースの場でゲームを行う。
○　追究目的，課題の明確化
（追究目的）
たくさん得点できるゲームにしよう。
（追究課題）
・避ける，捕らえる動きづくり
・声かけ，動きの教え合い等の協力づくり</td><td colspan="3">2　みんなで楽しくあてっこ・にげっこゲームを行う。
(1) 障害物のある直線コースでゲームを行う。①
○　コースを選択し，避ける・捕らえる動きを見出すこと
○　得点・協力を工夫すること
(2) 障害物のある曲線コースでゲームを行う。（本時）①
○　コースを選択し，避ける・捕らえる動きを広げること
○　協力を工夫すること
(3) 障害物のあるジグザグコースの場でゲームを行う。①
○　コースを選択し，避ける・捕らえる動きをさらに広げること
○　協力を工夫すること
ゲーム１　動き・協力を見出す　←全体交流 繰り返し→　ゲーム２　動き・協力を試す</td><td>3　あてっこ・にげっこゲーム大会を開き広げた動きや協力を発揮して，楽しく総当たり戦のゲームを行う。
○　避ける・捕らえる動きの広がりを味わうこと
○　仲間との声かけや動きの教え合いのよさを味わうこと</td></tr>
<tr><td>支援</td><td>※　あてっこ・にげっこゲームの教材化と出合いの場の設定</td><td colspan="3">※　避ける・捕らえる動きを広げるコース・障害物の設定
※　動き・協力づくりのよさを取りあげる交流活動</td><td>※　３つのコースを設定したゲーム大会</td></tr>
</table>

本時の目標

1　曲線コースの場で自分に合ったコースを選び，障害物やボールに応じて姿勢を変えて避ける・捕らえる動きを広げ，ゲームを楽しむことができる。

2　より多くの得点の獲得に向けて，１組やふじ組の仲間と声かけや動きの教え合いをすることができる。

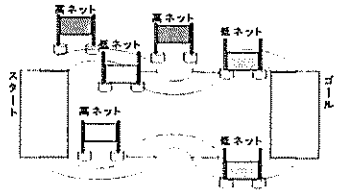
準　　備

障害物（ネット高・低），ボール，得点板など

本時の主張点

本時指導にあたっては，跳んだり，しゃがんだり，左右に動いたりして避ける・捕らえる動きを広げ，得点の獲得に向けて，声かけや動きの教え合いができるようにする。そのために，ネットの高さや障害物の数を変えた曲線コースを２本設定し，ペアでゴールしたり，障害の少ない曲線コースを選択したりした場合は，得点を高くするように仕組む。

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　前時と本時の場を比べ，本時のめあてについて話し合う。 ○　本時のめあてを把握すること （めあて）　くねくねこーすの　あてっこ・にげっこげえむに　ちょうせんし，　みんなで　たくさん　てんを　とろう。 ※　場の図や実際のコートをもとに，前時の場との違いに気付かせ，得点方法の違いへとつなぎ，本時のめあてをつかませる。	○　前の時間は，隠れ家にうまく隠れて点数がとれたので，今日はもっとたくさん点数をとりたいな。でも，前はコースがまっすぐだったけど，今日はくねくねになっているね。 ○　くねくねだと，得点するのが難しそうだな。でも，２点とれるコースもあるからがんばるぞ。
2　新たな曲線コースの場で，楽しくゲームをする。 (1) 曲線コースを選びながら，ゲーム１を行う。 ○　障害物やボールに応じて避ける・捕らえる動きを意識すること ・跳んで避ける，捕らえる ・しゃがんだり左右に動いて避ける，捕らえる ○　自分の楽しみや動きに応じたコースを選択すること ○　１組・ふじ組の仲間との声かけ，動きの教え合いを意識すること ※　ネットの高さや障害物の数を変えた曲線コースを設定し，ペアでゴールしたり，障害物の少ないコースを選択したりしたら得点を高くする。	○　ぼくは，ネット（隠れ家）の少ないくねくねコースでＢ君といっしょにゴールして，３点をねらうぞ！ ○　くねくねコースは，まっすぐコースより走るのが難しいから，うまくボールを避けないといけない。隠れ家をうまく使ってゴールしよう。 ○　高い隠れ家の所では，ボールが転がってくるのをよく見て，タイミングよく跳んで避けよう。 ○　低い隠れ家の所では，素早く小さくしゃがんで避けよう。ゆるいボールなら両手でとってみよう。 ○　ぼくは，くねくねコースの高い隠れ家の所で，Ｂ君に「跳ぶよ！」と言ってボールが当たらないようにしました。 ○　Ｂ君も低い隠れ家の所で「今，しゃがんで！」とタイミングを教えてくれて，３点がとれました。
本時のゲームの場と主なルール  ・障害の少ないくねくねコースは２点とする ・ペアでゴールしたら１点加える ・当たったらスタートゾーンからやりなおす	
(2) 得点につながった動きや協力について話し合う。 ○　障害物やボールに応じて避ける・捕らえる動きを見出すこと ○　１組・ふじ組の仲間との声かけ，動きの教え合いを見出すこと ※　得点につながった動きを，障害物やボールの状況を具体的に示して出させる。また，協力についてはペア得点のチームを中心に出させる。	○　今度のゲームは隠れ家が少なくなったんだな。でも，みんなが教えてくれた動きを試して当たらないようにしよう。Ｂ君とも声をかけ合ってがんばろう。
(3) 見出した動きや協力を発揮しながら，ゲーム２を行う。 ○　障害物やボールに応じて避ける・捕らえる動きを広げること ○　自分の楽しみや動きを意識してコースを選択すること ○　１組・ふじ組の仲間への声かけ，動きの教え合いを広げること ※　障害物を減らし，見出した動きや協力を対応させる。	
3　工夫した避ける・捕らえる動きや協力のよさについて話し合う。 ○　避ける・捕らえる動きのよさや広がりを認め合うこと ○　１組・ふじ組の仲間への声かけ，教え合いのよさを感じること ※　得点につながった動きや協力について，板書をもとに出し合わせ，本時を振り返らせる。	○　今日は，難しいコースだったけど動きをいろいろ工夫してたくさん点がとれたぞ。Ｂ君が教えてくれてうれしかったな。次の時間もがんばって，もっとたくさん点をとるぞ。

お互いのがんばりを認め合い，かかわりを育む体育科学習（1年1組との交流学習）

第1・2学年ふじ組　体育科学習指導案

指導者　舛元俊文(T2)　稲津一徳(T1)

題材　はらはら!ドキドキ!あてっこ・にげっこゲーム

指導観

○　本学級の子供たちは精神年齢３歳から５歳程度の１年生(男子1名・女子2名)，２年生(男子3名・女子1名)の計７名で構成されている。子供たちはこれまでに，基本の運動を中心に，固定施設やマットを使ったり，折り返しリレー遊びをしたりしながら多様な運動経験をしてきている。ゲームについては，追いかける・逃げるなどの簡単なきまりは，１対１の関係であれば，ある程度理解することができる。ボールを使った遊びに対する興味・関心はあるが，目標に向かってボールを投げる，障害物をよけながら走ったり，とんでくるボールやころがってくるボールをよけるなどの技能は不十分である。

○　本題材「はらはらドキドキ，あてっこにげっこゲーム」は，きめられたコースをスタートからゴールまで走り抜けるゲームである。その際，攻める（投げる，転がす）側と避ける（走る，止まる，しゃがむ，跳ぶ）側の分かれてボールを当て，時間内にたくさんコースを通ることができた方が勝ちというドッジボール型（攻守分離交代型）のゲームである。ねらいとしては，１年生とのゲームを通したふれあいを行うことにより，小集団の中で相手やボールを意識できるような動作補助や声かけを受け入れたり，人とのかかわりを広げたりしながら，投げる，ころがす，避けるという動きを広げ必要なきまりを守りながら，友達と一緒に楽しく運動することである。具体的な学習内容は，①小集団での行動に慣れ親しみ協調的にかかわること，②教師や友達の働きかけを受け入れること，③投げる，ころがす，走るしゃがむ，跳ぶ，避けるといった多様な運動経験をすること，④手順や方法，勝ち負けのきまりなどを守ってゲームをすることである。以上のことは，子供たちの日常的な運動経験や他のクラスの友達とのかかわりを広げることになり生涯体育の基礎を培い，人とのかかわりを広げる上で意義深い。

○　本題材の支援としては，①子供たちが視覚的にも分かりやすく，意識できるような手順や方法，勝ち負けなどのきまりを提示すること，②コースが増えていくという変化した場に出会い，友達とふれあい場に馴れる試しのゲームをする。その後で，試しのゲームの中でできるようになった動きを取り出し交流する。そして，そこで交流した動きを次のゲームを行う中で生かしていく。このような交流活動を位置づけた一連の活動を繰り返し，最後に全部のコースを使ってゲーム大会を行うといった活動を構成すること，③実態に応じて子供の要求を代弁するなど，教師が媒介となり子供のかかわりをつなぐ働きかけをするなどの支援を行う。このように，教材，活動構成，教師の働きかけという３点から支援の工夫を行っていく。

目　標

1　１組の友達と一緒に楽しくゲームをするなかで，お互いのがんばりを認め合いながら，人とのかかわりを広げることができる。

2　場が変化していく中で，投げる・ころがす・走る・しゃがむ・跳ぶ・止まるといった動きを広げることができる。

計　画　（約６時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>であう段階(2時間)</th><th colspan="3">つくる段階（３時間）</th><th>いかす段階(1時間)</th></tr>
<tr><td>活動と内容</td><td>1　新しいゲームを体験する。
○　手順や方法勝ち負けのきまりを知ること
○　ころがしてあてるという動きを知ること</td><td colspan="3">2　みんなで楽しくあてっこにげっこゲームをする。</td><td>3　学習してきたことを生かして３つのコースでゲーム大会をする。
○　できるようになった動きや人とのかかわり方をゲームでいかすこと</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>(1) 直線コースの場で楽しくゲームをする。　①
○ 避ける動きを体験すること</td><td>(2) 曲線コースの場で楽しくゲームをする。　(本時)①
○ 避ける動きを広げること</td><td>(3) ジグザグコースの場で楽しくゲームをする。　①
○ 避ける捕らえる動きを広げること</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td colspan="3">ためしのゲーム　変化した場に馴れる　⇔　動きの交流　繰り返し　⇔　交流後のゲーム　動きを広げる</td><td></td></tr>
<tr><td>支援</td><td>※　走り抜けるコースの設定
※　走り方，投げ方の動作補助</td><td colspan="3">※　走る，しゃがむ，跳ぶ，止まる　避けるなどの身につけさせたい動きを引き出せるような変化したコースや場の設定，及び声かけ，手を引いての動作補助
※　人とのかかわりが広がるような働きかけ</td><td>※　今まで体験してきた場の設定
※　動きへの賞賛励ましの声かけ</td></tr>
</table>

本時の目標

○　曲線のコースに沿って走ったり，跳んだり，しゃがんだりりしながら，友達と楽しくゲームをすることができる。ＡＧ：働きかけを受けてコースを走ることができる。ＢＧ：声かけを受けてスタートし，コースを走り，跳んだりすることができる。ＣＧ：自分でスタートし跳んだりしゃがんだりすることができる。

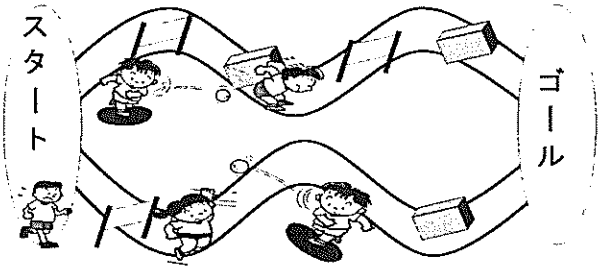
準　　備

ボール，得点板，障害物（ネット高・低）など

本時の主張点

本時指導にあたっては，子供たちがきまりを意識し，変化したコースに応じて走ったり，跳んだりしゃがんだりしながら移動する動きを広げることができるようにする。その際，実態に応じて教師が子供たちの媒介となり，スタートの仕方や走り方，しゃがみ方など，子供たちが働きかけを受け入れながらかかわりを広げることができるようにする。

展　　開

活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
1　本時学習のめあてについて話し合う。 ○　前時行った直線コースでのゲームを想起し，手順や方法きまりや動きを想起すること ○　変化した場に出会い，本時学習のめあてについて話し合い見通しをもつこと （めあて）　くねくねコースをはしって，たくさんてんをとろう。	1　ゲームへの意欲を引き出す支援 ○　前時活動を想起できる場の設定 ○　きまりやゲームのやり方が意識できるモデル演示 ○　変化した曲線のコースの場の設定 （試しのゲームの後に，障害の数が減っていく） 
2　新しくできた曲線のコースの場で，みんなで楽しくゲームをする。 (1) 曲線コース場で試しのゲームをする。 ○　曲線に沿って走ること	2　友達とかかわりながらゲームをする個に応じた支援 ○　個に応じた教師の働きかけ Ａグループ：教師が子供の働きかけを回りの友達に伝えたり，回りの友達からの働きかけを伝えたりする。動きの声かけの仕方や，動きが広がるように手を引いての動作補助など，友達の働きかけを受け入れるような声かけをする。 Ｂグループ：回りの友達からの働きかけを受け入れるような声かけをする。走り方を教えるモデル演示や，相手を意識させることで，動きが広がるような投げ方やころがしかたのモデル演示や，動作補助を行う。 Ｃグループ：相手を意識したり，周りの友達に働きかけるような促す声かけをする。自分で投げてくる相手を意識してスタートしたり，相手を意識し，ねらって投げたり，ころがしたりするような声かけを行う。 ○　教師が子供の様子を見ながら代弁者となって要求を伝えたりしてかかわりが広がるようにする。 ○　かかわり方を意識できるような手をつないでの動作補助のしかたや，声のかけ方などかかわり方を紹介する。

Ａグループ	Ｂグループ	Ｃグループ
・教師の動作補助を受けながら曲線のコースに沿って走ること	・教師や友達の声かけを受けながら曲線のコースに沿って走ること	・自分で曲線のコースを選び，コースに沿って走ること

(2)　試しのゲームの後に動きの交流をする。
○　かかわり方について意識すること
※　走っているときの様子や，避けているときの様子を取り上げ，ふじ組の子供たちのがんばりを紹介する。
(3) 走るコースを選んでゲームをする。
○　走りながら動きを変化させること

Ａグループ	Ｂグループ	Ｃグループ
○ 声かけを受けてスタートし，曲がったコースに沿って走ったり，動作補助を受けて，跳んだりしゃがんだりして走ったりすること	○ 声かけを受けたり自分でスタートしたりして，ゴールを意識しながらその途中で，走ったり，しゃがんだり跳んだりすること	○ 自分でスタートし，障害物を意識して，走ったり，ボールをよけようとして，しゃがんだり跳んだりすること

3　本時学習のまとめをする。
○　得点板で，ゲームを振り返ること
※　ゲームをして楽しかったことや教えてもらったことを発表する。

3　学習への達成感・成就感を味わわせる支援
○　得点板や発表の場の設定
○　友達と一緒にできた動きに対する賞賛

相手に応じて伝えたいことを明確にしていく国語科学習

第３学年１組　国語科学習指導案

指導者　　田　渕　　聡

単　元　わたしの町じまんをわかりやすく伝えよう

指　導　観

○　本単元は，自分が住んでいる場所について，「意外と知らないことがあるぞ。もっと教えてほしい」という友達の願いに応えてわかりやすく伝えるための方法を追究していく国語科学習である。自分の住んでいる町の自慢を文章に書いていく活動を通して，伝えたい事柄をいくつかのまとまりに分けて書く力を高めることをねらいとしている。具体的には，①相手に自慢したい事柄を収集して内容のまとまりごとに分類すること，②まとまりごとに段落をつけ，つながりに気をつけながらに書くことが主な内容である。

○　本学級の子供たちは，相手や目的を考えながら書くことに必要な事項を集めたり，それを順序よく並べて書いたりすることができるようになっている。また，言語活動への意欲も高い子が多く，積極的に取り組んでいる姿が見られる。しかし，書きたい事柄をいくつかのまとまりに分けて段落を意識して文章を書いているわけではない。そのため，自分の伝えたいことが相手に適切に伝わらないといった状況も見られる。そこで，自分の住んでいる町の自慢を友達にわかりやすく伝えていこうという課題を明確にして，文章の作成に取り組んでいく中で，伝えたいことが明確になるように段落を分けて書く力が身に付いていくようにしたい。

○　本単元の指導にあたっては，友達にわかりやすく伝えるために，写真や図を使って自分の町の自慢を伝える活動を展開していく。まず，つかむ段階では，学級の友達がいろいろなところから学校へ通っている事実を知り，それぞれの町の特色について発表し合う中で，「もっと詳しく教えてほしい」という願いをもたせ，学習課題を設定する。次に，つくる段階では，自慢したいと思っている場所等の写真や図などを準備させ，その写真や図をもとに知らせたいことを短冊に書いていき，書く事柄ごとに封筒に分け，写真・図と文，段落と段落のつながりを考えながら「わたしの町じまん」を説明する文章を記述していく。そして，いかす段階では，よりわかりやすく伝わるように相互に評価し，修正した後，写真や図なども効果的に用いながら各自の書いた文章を「わたしの町じまん」ブックに製本し読み合っていく。

目　　標

１　学級の友達に自分の町の自慢がわかるように，書く事柄を収集選択したり，まとまりごとに区切って文章を書くことができる。

２　よりわかりやすく伝えるための方法について，友達と考えを出し合ったり，相互に評価し合ったりすることができる。

→相手の求めに応じた表現の方法を工夫する創造性
→自らの文章を見直す主体性
→相互に評価し合う社会性

計　　画　（約１４時間）

段階	第１次　つかむ段階（４時間）	第２次　つくる段階（５時間）	第３次　いかす段階（５時間）
活動と内容	１　自分の住んでいる町について発表し合い，学習課題を設定する。 (1) 自分の住んでいる町について発表し合う。　② ○　「知りたい」という関心の高まり (2) 「わたしの町じまん」の計画を立てる。　② ○　相手意識や目的意識を明確にもつこと ○　モデルの文章をもとに見通しをもつこと	２　「わたしの町じまん」の文章を各自で作成していく。 (1) 自分が教えたい「じまん」について取材する。　② ○　観点をもって取材すること ○　書く事柄ごとにまとめること (2) 構成や記述を工夫して，文章を書く。　（本時２／３）③ ○　写真や図を使って１つの事柄に１段落の構成にすること ○　相手に「わたしの町じまん」がよりわかりやすく伝わるように，再取材・再構成を行うこと	３　できあがった文章を発表し合い相互に評価する。 (1) 友達と交互に発表して，相互に評価し合う。　② ○　写真・図のどこについての説明かわかるようにすること (2) 評価してもらったことをもとに修正し完成させる。　① ○　つくりあげた達成感・成就感 ４　「わたしの町じまん」ブックをつくり，みんなで読み合う。　② ○　伝え合うことができた有用感・効力感
支援	※　子どもの居住地を示す地図 ※　学習への見通しを持たせるモデルの提示	※　取材する観点の明確化 ※　取材・構成の活動をしていくためのノートの工夫	※　写真と文，段落と段落の結びつきに着目させる評価観点の工夫 ※　伝え合う喜びを味わわせる処理

本時の目標

1　自分が取材・構成したことの不十分さに気づき，相手によりわかりやすく伝わるように進んで再取材・再構成することができる。　（主体性・創造性）

2　自分の取材・構成について自己評価・相互評価して相手によりわかりやすく書けるように，工夫することができる。　（社会性）

本時の主張点

本時指導にあたっては，もっとわかりやすく伝えるためにはどのようにすればよいか，教師のモデルや友達の作例を比較しながら，自分の取材・構成したものについて見直す必要性やその観点を見つけ出す。さらに，自己評価・相互評価しながら，書く内容の付加や選択，事柄ごとに段落をつくって書いてある内容を明確にすることができるようにする。

準　備

教材文，構成のモデル，子供の作例

展　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　「わたしの町じまん」について前時までに書く事柄を決め，取材してきたことを話し合い，本時学習のめあてを確かめる。 ○　前時学習の想起と本時学習のめあての把握 ・観点を決めて，書くことを取材して短冊に書いたこと ・観点ごとにまとまりとしての封筒をつくって短冊を分けて入れていったこと （めあて）短冊や封筒に書いたことを見直して，もっと友達にわかりやすく伝わるようにしよう。 ※　教材文と構成のモデルを提示して，その必要性を確かめさせる。	○　友達に教えてあげたい「わたしの町じまん」のについて，書くことを集めて短冊に書き，書く事柄ごとに封筒にまとめていった。 ○　「わたしの町じまん」が友達にわかってもらえるだろうか。 ○　どうすれば，自分が知らせたいことをもっとわかりやすく伝えられるのだろう。自分の知らせたいことがもっと相手によく伝わるようにみんなで考えてみよう。
2　教材文と構成のモデルをもとに見直す観点について，話し合う。 (1) 教材文と構成のモデルを比較して，記述する前に修正した点について話し合う。 ○　書く内容の付け加えがあること ○　取材したことが全て書かれず，選択されていること ○　同じような意味の封筒がまとめられていること ※　構成のモデルと教材文との比較提示によって，修正点を明確にする。 (2) 教師のモデルと友達の作例を比べながら，よりわかりやすく伝わるようにする方法を考える。 ○　場面の様子や事例等，より具体的に書くこと ○　羅列的にならないように，収集したことを選択すること ○　事柄ごとにまとまり（段落）をつくって，書いている内容を明確にすること ・同じ事柄の封筒→一つの段落にまとめること ※　モデルと作例は典型的なものを並列提示して，収集したことを選択することのよさや観点ごとにまとまりをつくって段落に分けることのよさを「読みやすさ」ということから感じ取れるようにする。	○　短冊や封筒に書いてあることと，実際に書いた文章とでは，いくつかの違いがあるぞ。 ○　どうして，このように修正していったんだろう。相手にわかりやすく伝えるために，何か効果があるのだろうか。 ○　具体的な事を入れて書くとわかりやすくなる。 ○　書くことが多すぎるとかえって何を伝えたいのかわかりにくくなる。 ○　書く内容のまとまりごとに区切って，段落を分けて書くと伝えたいことがよくわかるようになる。 ○　どのようにすれば，もっとわかりやすく書けるかわかってきた。やってみよう。
3　話し合った観点で，自分が取材・構成したものを見直す。 (1) 自分の取材・構成について，自己評価する。 ○　自分の伝えたいことがよくわかるように，内容を収集選択したり，まとまりをつくったりして書くこと ※　話し合った観点で自己評価してみて，変更する点について付加修正していく。 (2) 友達とよりわかりやすく伝える方法を話し合う。 ○　読み手から意見を受けることによる付加修正 ※　自己評価して，改善する方法が自分だけではわからない場合は，読み手である友達に尋ねるようにする。	○　自分が取材・構成したものを見直してみよう。 ○　書き足りなかったり，書きすぎたりしているところがあった。もう一度取材してみよう。 ○　書く事柄ごとにまとまりに分けて書いてあることが明らかになるようにしよう。 ○　自分でわからないところは，友達に尋ねてみよう。

土曜休日を利用した自分の学び・地域の学びへの連動を広げる総合的な学習の時間

第３学年２組　あらつ学習指導案

指導者　　吉　田　正　樹

単　元　あらつカッパ伝説（でんせつ）　－むかし話からたんけん！あらつの町・福岡の町－

指　導　観

○　本学級の子供たちは，２カ年の生活学習を通して，地域あらつの町への親しみを強めてきた。さらに３学年社会科学習では，その学びのフィールドを福岡市へ広げながら，地域の理解と観察・調査や資料活用の技能等を高め，地域とかかわる意欲をさらに高めている。また，日本の昔話等についての読書経験も豊富で，地域の伝承や古くから残る事物などに興味を示す子供も多い。こうした子供の育ちを踏まえ，伝承といった違った側面から地域を探索する活動を展開することは，あらつ学習の基本的な学び方を理解させるとともに，知の総合化を図り３特性を高める上で価値がある。

○　本単元は，通学路にある親子河童像とその伝承への気がかりから，追究を立ち上げるあらつ学習（総合的な学習の時間）である。主な学習内容は，①あらつの町の河童伝説にまつわる気がかりから自分の課題を設定して，これまでに学んだ知識や技能（生活学習，社会科，国語科など）を活用しながら進んで課題追究すること，②様々な事物や人々に積極的にかかわったり文献・資料を活用したりしながら情報収集を行い，自分なりの考えをまとめること，③あらつ学習の基本的な学び方を身に付けるとともに，課題を各居住区の伝承話に広げ，継続的に追究しようとすること，等である。

○　学習展開にあたっては，課題をつかむ過程では，親子河童像についての気がかりを，地域の方等と一緒に話し合う場を設定し，町の河童伝説を自分たちの手で詳しく調べる意欲を抱かせる。追究する過程では，地図や資料を活用させながら，エリア毎の見学や情報収集活動を進めさせる。その際，子供の求めに応じた人との交流の場や資料，学び方の手引きを提供し，具体的な追究ができるように支援する。また，河童とかかわりの深い方を招聘した交流会を設定し，子供の追究内容と方法がより深化するように仕組んでいく。広げ追究する過程では，学校五日制での活用をめざし編集された資料「福岡市の昔話(鶴陽会編)」をもとに，自分の居住区での伝承話に興味・関心を広げさせ，土曜休日を利用した自己追究へと学びを広げさせる。

目　　標

１　地域の伝承話(河童伝説)への気がかりをもとに追究課題と計画をつくり，あらつ学習の基本的な学び方を身に付けながら具体的な事物や様々な人とかかわり，自分なりの応えを見出すことができる。　（創造性・社会性）

２　地域の伝承と人々の結びつきについての理解を深めるとともに，さらに居住区の事物・事象へと課題を広げ，あらつ学習の基本的な学び方を応用・発展しながら追究を継続できるようにする。　（主体性・社会性）

計　　画　（約23時間＋課外）

離	課題をつかむ（５時間）	課題を追究する（16時間）	課題を広げ追究する(２時間＋課外)
活動と内容	１　あらつの町の河童伝説を追究する課題と計画をつくる。 (1) 黒門川の親子河童像や清龍院の河童の手や伝承話などについて話し合う。　② ○　伝説から地域の事物・事象に興味・関心を抱くこと (2) 自分が抱いた疑問をもとにあらつの町を探索して，追究計画を話し合う。　③ ○　疑問から課題を設定して追究計画を具体化すること	２　あらつの町の事物・事象を調べたり町の人達に尋ねたりして，河童伝説について追究し自分の応えをまとめる。 (1) 追究計画をもとに，エリア毎に情報を収集し考えをまとめる。　⑧ あらつの町周辺→福岡市→市外へ ○　見学・調査・ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ技能等の活用 ○　地図活用や地域についての理解 (2) 随時交流会を行い，不足する内容新たな疑問について再追究する。⑧ ○　自らかかわる人や場を広げること ○　伝承と人々の願いの関係の理解	３　自分の居住区の伝承話を調べ土曜休日を利用して追究する。 (1) 地域の方等を招聘し河童伝説発表会を開くとともに，各居住区の伝承話を調べ，追究計画を立てる。**本時１/２**　② ○　各自の追究のよさの感受と各伝承を追究する課題設定 (2) 各居住区で追究を続け，朝の会等で発表し合う。(課外) ○　家族や地域に自ら働きかけ課題追究を継続すること
支援	※　河童像を作った方や地域の方を招き話し合う場の設定 ※　調べる場所や尋ねる人を明確にするフィールドワーク	※　各エリア毎に調べる対象に応じた学び方の支援(あらつ学習ガイドの活用) ※　子供の求めに応じたゲスト・ティーチャー(河童にかかわる人等)の招聘	※　学習ファイル(ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ)を活用した発表と肯定的評価の場 ※　居住区の伝承話の資料提示と保護者や各地域と連携した支援

本時の目標

1　河童についてそれぞれが調べ考えたことをもとに，全体課題(河童と人間の関係)を話し合い，自分の学びへの自信を高め，さらに課題を広げることができる。

2　地域の古い伝承や事物と人々の願いとの強いつながりとその追究の価値の理解を深めることができる。

準　　備

児童：学習ファイル，発表に必要な資料等

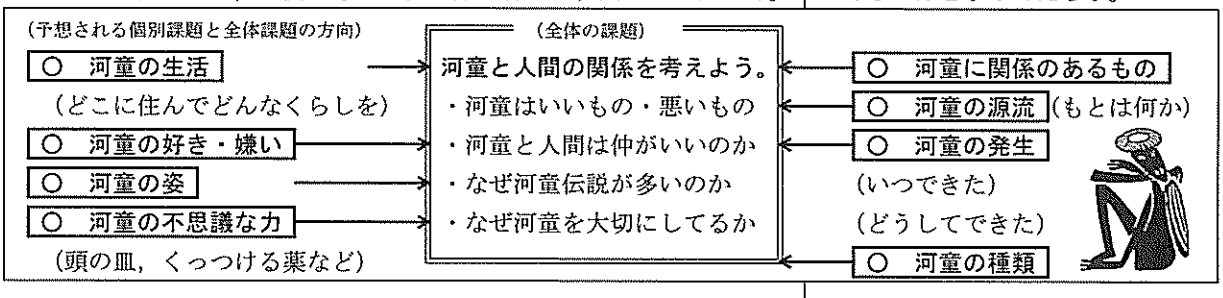
教師：ゲストの先生方の招聘，拡大地図・資料等

本時の主張点

本時は，学校での学びの成果を交流しながら，土曜休日を利用した自分の学び・各居住区における地域の学びへとつないでいく学習である。そのために，重要なことは，自分たちが調べ見出した応えとさらにそれを継続し追究していくことの価値を実感させることである。そのために，これまでにかかわった方々を招聘した交流の場と資料活用の場を設定する。

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　調べる場所やかかわる人を広げながら，どのように河童伝説を調べてきたか，そして今日何を話し合うのかをゲストの先生方に説明する。 ○　本時までの学習経過と本時学習のめあてを確かめること ※　これまでの学習にかかわってくださった先生方を招聘する。 ・河童伝説を書いた人，河童を研究している（河童に詳しい）人 ・河童を大切にしている人，河童像をつくった人　等 ※　課題をつくる段階において，それぞれの個別課題と，最終的にみんなで考える全体課題とを整理して追究してきたことを確かめさせる。 ※　前時までの追究の様子の写真記録などを用いながら説明させる。 （めあて）　河童伝説について調べたこと・考えたことをもとにして，河童と人間の関係についてみんなで話し合おう。	○　今日は，学習を進めるなかでお世話になった先生方をお招きして，ぼくたちが調べたこと・考えたことを聞いていただこう。 ○　それぞれ調べたことは違うけど，それをもとにみんなで考える課題を決めていたよね。 ○　みんなが河童伝説をどのように調べて，河童と人間の関係をどのように考えているかを比べてみよう。すごいことが分かるかもしれないな。
2　河童伝説について調べたこと・考えたことをもとに話し合う。 (1) それぞれの課題をもとに，調べたこと・考えたことを発表し合う。 ○　資料等を活用しながら効果的に発表すること ○　友達の発表のよさや必要な情報をみつけながら聞き合うこと ※　時間を限定し学習ガイドを用いさせることで，要点や中心点（本時学習のめあてに特に関係する部分）を発表できるようにする。 ※　写真や資料等を活用した発表ができるように支援する。 (2) 河童と人間の関係（全体課題）についてみんなで話し合う。 ○　それぞれが調べたことを関係づけ，全体課題について考えること ○　伝承と人々の生活のつながりや，込められた願いを理解すること ※　調べたことを根拠にした話し合いを組織し，考え方を明確にさせる。 ※　ゲストの先生には，必要に応じ子供の話し合いに参画していただく。	○　河童は水に関係がある生き物だ。水は昔から人々の役に立つ大切なものだったけど，川や海でおぼれたり洪水になったりして困ることもあったんだな。 ○　いい河童・悪い河童はそれに関係があるかもしれない。 ○　どの河童もなぜかおもしろいのはどうしてだろう。 ○　すごく人間ににている生き物だ。 ○　いろんなところににたような話があるのはどうしてだろう。
3　これから自分で調べていきたい言い伝え（伝承）について話し合う。 ○　各居住地域での追究課題や方法についての見通しをもつこと ※　調べたいことをカードにまとめさせておき，それを拡大地図に位置づけることで，追究内容の違いや広がりの分布を視覚的にとらえさせる。 ※　ゲストの先生には，河童伝説の追究のよさとこれから各地域で継続的に学習を進めていくことの価値の２点から肯定的評価を行ってもらう。	○　古くからの言い伝えには，それぞれに何か大切な意味がある。生活ともすごく関係がある。言い伝えを大切にした人の心が詰まっている。 ○　河童だけでなく，他の言い伝えにもきっと大切な意味があるはずだ。



大学教官の専門性を生かして表現と鑑賞を一体的に進める音楽科学習

第４学年１組　音楽科学習指導案

指導者　木　村　次　宏（大学教官），豊　村　雅　義(本校教官)

題　材　**曲の感じを生かそう**　－引きだそう！楽器の魅力－

指　導　観

○　本題材は，器楽アンサンブルを中心とした表現と，楽器の音色の特徴や音の組合せを感じ取って聴く鑑賞を一体的に進め，楽器の音色に気を付けて表現したり様々な楽器への関心を高めながら鑑賞したりして，音楽の楽しみ方を広げていく音楽科学習である。その中で楽器の音色の違いで音楽の表情が変わることを感じ取る感受力や，それを生かして表現しようとする構想力を育てることをねらいとしている。具体的には，①様々な楽器の音色の違いに関心をもちアンサンブルを楽しむこと，②曲想を感じ取り，楽器の音色に気を付けて表現したり鑑賞したりすること，③グループで心を合わせて演奏すること，などが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，表現への高い意欲をもっており，楽曲のよさを自分なりにとらえて表現したり自分の感じ方や考え方を生かしながら鑑賞したりしようとする姿が見られる。しかし，楽曲に合わせた声や音色で表現したり，表現媒体や奏法の違いによる音色の特徴に気を付けて鑑賞したりすることは不十分である。これは，同じ楽曲を表現方法や表現媒体を変えて，じっくり表現したり鑑賞したりする経験が少ないからである。そこで，心身の発達が著しくリズム感の発達に加えて旋律の美しさに対する感受性も増してくるこの期に本題材を設定する。そして，楽曲に合わせて一つの楽器の音色を追究しながらじっくり表現したり，様々な楽器によって演奏される教師や友達の表現に耳を傾けたりする音楽的時間を経験させたい。そのことが感受力や構想力の育ちにつながっていくと考える。

○　本題材の指導においては，大学教官や音楽科の大学生とともに演奏したり，その演奏を聴いたりすることを中心に，楽器のもつ表現の可能性の広がりを感じ取らせていく。であう段階では，ミュージカル「サウンド オブ ミュージック」と出合わせ，その中の楽曲を歌ったり楽器で演奏したりして，よりよく表現したいという求めをもたせる。ふかめる段階では，楽器による表現を中心に，グループで楽曲の美しさをよりよく表現する方法を追究させる。そのために，大学教官とともに演奏したり，その演奏を聴いたりする場を設定し，音色を中心に自分の表現を見直したり，友達や大学教官の表現のよさを見つけたりさせる。あじわう段階では，大学教官も交えての発表会を行い，お互いの表現のよさを交流させ，音色を追究して表現していく音楽活動についての期待と意欲を高めさせていく。

目　　標

1　楽器の違いや演奏の仕方の違いによる音色の変化に着目して，楽曲の感じに合ったよりよい音色を追究しながら演奏したり，音色の特徴に気を付けて鑑賞したりすることができる。　（創造性）

2　様々な楽器で表現したり，一つの楽器で音色を追究したりして表現する楽しみ方を創り出しながら，心を合わせてアンサンブルをしたり，お互いの演奏のよさを見つけたりすることができる。　（主体性・社会性）

計　　画　（約６時間）

段階	第１次　であう段階（２時間）	第２次　ふかめる段階（３時間）	第３次あじわう段階（１時間）
活動と内容	１　ミュージカル「サウンド オブ ミュージック」と出合いその中のいくつかの楽曲を歌や楽器で演奏してみる。 ○　ミュージカルで演奏される楽曲への関心の高まり ○　表現への意欲の高まり	２　大学教官とともに，音色を工夫し器楽アンサンブルを中心に表現を深める。 (1)『エーデルワイス』の表現を工夫したり，鑑賞したりする。（本時2/2）② ○　音色に着目して表現・鑑賞すること (2) 編成や楽曲を変えて表現する。　① ○　音色の美しさを生かした表現の工夫	３　工夫してきたことの発表会を開き，お互いのグループの表現を聴き味わう。 ○　楽器の音色を工夫することのよさの感受 ○　様々な楽器を使って表現していく意欲の高まり
支援	※　「サウンド オブ ミュージック」の福岡公演のポスターやＶＴＲ等の提示 ※　ミュージカルや楽曲について，大学教官の話を聴く場の設定	※　大学教官や音楽科の学生のアンサンブルを聴いたり，一緒に表現したりする場の設定 ※　よりよい音色を創り出すための楽器の演奏の仕方についての資料提示や助言 ※　楽器や楽曲を選択させての活動の促し	※　大学教官や音楽科の学生を交えての発表会の設定 ※　楽曲の感じと音色の美しさを観点にした相互評価を行えるノートの工夫や交流の場の設定

本時の目標

1　『エーデルワイス』の曲の流れの美しさが生かされる音色でリコーダーを演奏したり，様々な楽器が加わり音色が変化することで曲の表情が変化していくことを感じ取って聴いたりすることができる。

2　大学教官とともに表現したり，音色に気を付けて大学教官の演奏を聴いたりして楽しむことができる。

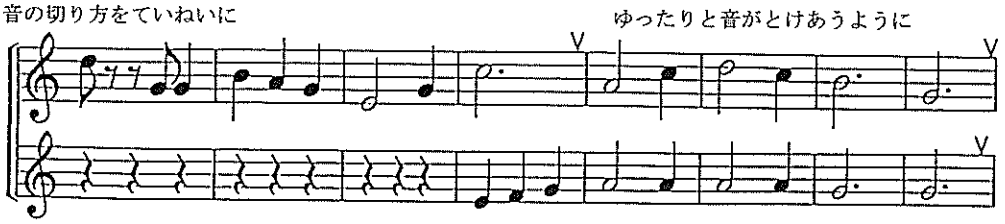
本時の主張点

本時指導にあたっては，大学教官による様々な楽器を用いた演奏を聴いたり，大学教官とともにアンサンブルをしたりさせる。そこで，自分が奏でるリコーダーの音色を見直したり，様々な楽器の音色が加わることで同じ楽曲でも表情が変わることを感じ取ったりして，楽器の音色に気を付けて表現・鑑賞を進める楽しみ方を創り出させていくものである。

準　　備

旋律楽器・打楽器，学習ノート

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　大学の木村先生や音楽科の学生の『エーデルワイス』のアンサンブルを聴き，自分の演奏を見直し本時学習のめあてを確かめる。 ○　前時学習の想起と本時学習のめあての把握 ・ギターやチェロなどで和音伴奏を入れてのアンサンブルの鑑賞 ・美しく流れるような表現に高めていく意欲 （めあて）　きれいな音でリコーダーを演奏して大学の木村先生や教生先生と楽しくアンサンブルをしよう。 ※　大学教官・音楽科の学生・教師によるリコーダーを交えたアンサンブルを行う。その際，リコーダーの音色に気を付けた演奏とそうでない演奏を行い，聴き比べさせることで，音色に気を付けてリコーダーを演奏するめあてをとらえさせる。	○　大学の木村先生や教生先生が楽器を加えて伴奏すると，『エーデルワイス』が一段ときれいだね。 ○　リコーダーの音が美しくなると，とてもいい感じになるね。 ○　リコーダーの音があまりよくないと，せっかく伴奏が入っているのにいい演奏にはならないな。 ○　私もリコーダーできれいな音を出して，大学の先生達と一緒に演奏してみたいな。
2　大学教官と一緒にアンサンブルをしたり，質問したり助言を受けたりしながら，『エーデルワイス』の表現を工夫する。 (1) グループごとに分かれて，表現を工夫する。 ○　美しい音でリコーダーを演奏すること ○　フレーズを感じ取って演奏すること ※　大学教官と音楽科の学生に各グループを回っていただき，一緒に演奏してもらったり，助言してもらったりする。 (2) それぞれのグループごとに演奏を発表しあい，お互いの表現のよいところを見つけ，発表する。 ○　楽器の音色を生かした表現のよさの感受 ※　大学教官から，肯定的な評価をしていただく。	○　リコーダーで音が切れないように演奏したらもっといい演奏になりそうだぞ。 ○　曲のまとまりごとに演奏するようにしたらいいね。 ○　きれいな伴奏に合うよう，きれいな音を出す演奏の仕方を大学の木村先生に尋ねてみよう。 ○　音の出し方を考えて演奏すると，さらによい曲になるね。大学の木村先生もほめて下さって嬉しいな。
【表現の工夫の例】 ・伴奏の変わり目に合うように，曲のまとまりを考えて息つぎをする。 ・ギターやチェロなどの伴奏の音に合うように，お互いの響きを聴き合ってとけ合うような音で演奏する。 音の切り方をていねいに　　ゆったりと音がとけあうように 	
3　大学教官と音楽科の学生のアンサンブルを鑑賞し，楽器の音色と曲の感じについて感想を出し合う。 ○　音色を変えると曲の感じが変わることの感受と関心の高まり ※　様々な楽器を用いたアンサンブルをしていただく。	○　音色が変わると，同じ曲でも曲の感じが変わるね。 ○　いろいろな楽器を使うと，同じ曲でもたくさん楽しめるね。これからもいろいろな楽器で演奏したいな。

単位のとり方を工夫しながら数量の処理の仕方について考察していく算数科学習

第4学年2組　算数科学習指導案

指導者　　野　田　真　功

単　元　およその数で表そう　－歩いて通学している道のりの長さくらべ－

指　導　観

○　本単元は，自分たちの通学する道のり（徒歩部分）についての長さ比べを行うなかで，概数の意味を理解し，数を手際よくとらえたり処理したりすることができるようにするとともに，目的に応じて概数を用いることができるようにしていく算数科学習である。具体的には，①概数の存在や仕組みに興味をもち，身近なものの中からそれらを見つけたり用いたりすること②「四捨五入」の用語を知り，「切り捨て」や「切り上げ」の仕方と関連付けながらその意味について理解し，用いることができること③概数処理が必要であるかどうか考え，目的に応じてどの程度の概数にしたらよいか判断できること，が主な学習内容である。四捨五入をして概数をとると，手際よく処理したり用いたりする場合に便利になるよさがある。これらの経験を通して概数を用いることの有効性を理解させ，能率的に処理し見通しをもって問題解決を行う態度を育成する。

○　本学級の子供たちは，長さや重さの測定において，測定する数量が物差しや秤の目盛りからずれている場合，近い方の目盛りで測定値を読み取る経験をしている。また，計算をするときに見当をつけて計算し，大きな誤りがないようにするなどの経験をしてきている。ただ，これまで正確であることをよさとしてとらえてきているために，概数は信頼性に欠ける数であるというとらえ方をしており，概数を使って処理することに抵抗を示す子供もいる。そこで，概数を用いた処理が必要な具体的場面に出合わせ，子供自らが目的に応じて適切な概数を求めていくことで概数のよさを十分に感じ，場面や目的に応じて概数を用いながら能率的に処理することができるようにしていくものである。

○　本単元の指導においては，概数が信頼できない数ではなく，目的によっては有効なものであるということに気付かせ，概数を用いて能率的に処理したり見通しをもったりすることができるようにする。まず，つかむ段階では，徒歩で通学している道のりの長さ比べの場面を設定する。測定する度にその結果が一定とはならない歩幅を使って道のりを測ることで，数をまるめておよその数で測定結果をみていく必要性を感じさせる。次に，調べる段階では，測定値の表し方を工夫しながら道のり（徒歩部分）を比較していく。その際，道のりを棒グラフに表し比較するなかで四捨五入を用いた概数処理の仕方や，目的に応じた概数のとり方について追究させる。最後に，ひろげる段階では，自分たちが求めた道のりの誤差の範囲について振り返る。概数がもっている数範囲を数直線上に正確に表現し直すことで，概数の範囲に対する見方をひろげ，その用い方についての理解を深めさせていく。

目　　標

1　概数の意味や用い方について理解し，四捨五入によって数をとらえたり処理したりしながら，目的に応じて概数を用いることができる。 ----→ 概数を用いて的確かつ能率的な処理をつくり出していく創造性

2　身の回りで使われている概数の意味や概数で表すことのよさに気付き，進んで生活に生かそうとすることができる。 ----→ 進んで概数を用いる主体性 / 友達とよさを認め合う社会性

計　　画　（約８時間）

段階	第１次　つかむ段階（３時間）	第２次　調べる段階（３時間）	第３次　ひろげる段階（２時間）
活動と内容	1　通学の道のり（徒歩部分）比べについて追究することや，測定方法について話し合う。　③ ○　歩幅を使った測定方法についての理解 ○　数をまるめる見方の必要性と「切り上げ」「切り捨て」による数処理の仕方	2　測定値の表し方を工夫しながら道のり（徒歩部分）を比較する。 (1) 各自の道のり（徒歩部分）を棒グラフを用いて表す。　本時２／２ ○　四捨五入による数処理の仕方 (2) 多様な目盛りのグラフに表す。① ○　測定値とグラフの目盛りの大きさに応じた概数のとり方	3　概数で表した道のり（徒歩部分）の数値が示す範囲について調べる。　② ○　四捨五入を行い概数処理した数範囲についての理解 ○　概数にする桁数の違いによる数範囲の拡がりの違い ○　概数処理するよさの感得
支援	※　計器による測定が不可能で，結果が一定でない場面の設定 ※　実測する活動の設定	※　精細な測定値の表示が困難な目盛り ※　多様な目盛りの大きさをもつグラフ用紙の準備	※　多様な目盛りをもつ数直線の準備 ※　棒グラフと関係付ける活動

本時の目標

1　対象とする数の大きさと，グラフ用紙の目盛りの大きさから概数を用いることを判断し，四捨五入による数処理を行いながら棒グラフに表すことができる。

2　友達の発表と比べながら，概数処理の仕方のよさや改善点について話し合うことができる。

本時の主張点

本時指導にあたっては，徒歩で通学している道のりをグラフに表す際に，測定値とグラフ用紙や目盛りの大きさとの関係から，詳細に測定結果をグラフ用紙に表すことが困難となる場面を設定することで概数を用いる必然性を感じ取らせる。さらに，四捨五入を用いて概数処理することについて，切り上げや切り捨てと比較させながら意味をとらえさせたい。

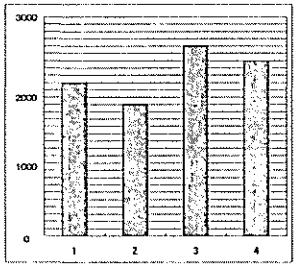
準　　備

学習プリント，グラフ用紙（測定値を詳細に表すことができるものと，そうでないもの）

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　各自の道のり（徒歩部分）を概数に表しながら比較してきたことについて話し合い，本時学習のめあてを確かめる。 (1) 徒歩部分の道のりについて調べてきたことについて話し合う。 ○　概数を用いて測定値を表す意味について想起すること ※　前時学習までの流れ図を用いてこれまでの学習を振り返らせる。 (2) 測定値を視覚的に表す方法について話し合い，本時学習のめあてをつかむ。 ○　徒歩による道のりを視覚的にわかりやすくするために，棒グラフに表す見通しをもつこと ※　それぞれの道のりの差をとらえやすくするため，目盛りのある棒グラフにすることがよいことに気付かせる。 （めあて）　歩いている道のりのちがいがわかりやすいように，ぼうグラフに表そう。	○　自分たちの歩いて通学している道のりを調べてきたな。 ○　正確にしようとして何度も歩数を数えて道のりを調べてきたな。 ○　自分の歩いている道のりについてはわかるようになったな。 ○　数字だけがたくさん並んでいるのは，わかりにくかったな。 ○　ばっと見てわかりやすいのはグラフに表したものだったな。 ○　棒グラフにするとわかりやすくなるはずだな。 ○　どんなグラフ用紙を使っていけば正確に道のりを表していけるかな。 ○　大きなグラフ用紙だったら，正確に表していくことができそうだな。 ○　用紙が小さいから目盛りも小さくなっているな。 ○　概数を使わないと，そのままグラフにすることはできないな。 ○　どの位までの概数にすればいいのか，はっきりさせないといけない。 ○　グラフ用紙の一目盛りの大きさはいくつになっているかな。 ○　一目盛りが１００になっているから，何千何百という表し方にしないといけないな。 ○　２６４５の４５のところは，どういうふうにまるめればいいかな。 ○　４５は１００より０のほうが近いから，０にすればいいと思う。 ○　切り上げと切り捨ての境は，５０でいいんじゃないかな。 ○　概数を使うと，目盛りにきちんとないような数でも棒グラフに表すことができたな。 ○　概数を使うと，できなかったことでもできるようになるんだな。
2　学級のそれぞれが，自分の自宅から学校まで通学する道のりのなかで徒歩による道のり部分を棒グラフに表す方法について調べる。 (1) 通学する道のり（徒歩部分）を比べるために棒グラフに表す用紙の目盛りの大きさについて調べる。 ○　グラフ用紙の目盛りと測定値の関係から詳細には数値をグラフ化しにくいことに気付くこと ※　最小目盛りが１００の単位で，目盛りの間をとることが難しいグラフ用紙を配布し，概数処理を行う必要があることに気付かせる。 (2) 概数処理を行う位について話し合い，棒グラフに表す。 ○　目盛りの大きさに応じて概数処理をする位を決定していくこと ○　概数処理のために四捨五入を行うこと ※　１００未満の数の処理の仕方として，切り上げやすい９０付近の数と切り捨てやすい１０付近の数と比較させな　がら５０以上を切り上げていく処理方法（四捨五入）をつくりあげさせていく。	

名　前	歩く道のり(m)
○○君	２１４５
□□君	１７６５
△さん	２６４５
☆さん	２３７７



3　概数を用いて棒グラフに表した本時学習活動についてまとめる。 ○　４以下は切り捨てて５以上を切り上げることを四捨五入ということ ※　棒グラフをかく手順とともに概数を用いるよさや，四捨五入することのよさについて振り返らせまとめさせる。	

図形の敷き詰めをしながら角の和が一定であることを見つけていく算数科学習

第５学年１組　算数科学習指導案

指導者　本校教官　澤　村　重　則
大学教官　山　口　武　志

単　元　しきつめもようをつくろう！

指　導　観

○　本単元は，三角形や四角形のもつ特徴である角の和が一定になっていることを追究していく算数科学習である。三角形や四角形を敷き詰めていく模様づくりの活動を通して，三角形や四角形においては角の和がそれぞれに一定であることを見抜き，図形の性質として一般化していく力を育てることをねらいとしている。具体的には，①三角形の形が変わっても敷き詰めることができることから三角形の角の和が１８０度であることに気付くこと，②四角形の形が変わっても敷き詰められることができることから四角形の角の和が３６０度であることに気付くこと，③他の図形を並べ，三角形や四角形と比較することで，角の和が１８０度や３６０度になるときに敷き詰められることに気付くことが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，正三角形や二等辺三角形の学習において，それらの図形を敷き詰めることを経験してきている。本単元ではこの敷き詰めの経験を基にいろいろな形の三角形や四角形を敷き詰めたり，多角形を並べたりしながら，敷き詰めることができる理由を追究する中で，角の大きさに着目して共通点や違いを比較することができるようにしていきたい。そして，敷き詰められる図形の不思議さ，面白さを味わうことができるようにしたい。

○　本単元の指導においては，三角形や四角形などの図形を敷き詰める模様づくりをする中で，図形の性質である角の和が一定であることを敷き詰めることができる理由として追究する。つかむ段階では，正三角形や直角三角形を敷き詰めた模様との出合いを通して，敷き詰め模様づくりをする活動目的をもつ。そして，他の三角形でも敷き詰めができることから形を変えても敷き詰めができるかといった追究課題をつかませる。しらべる段階では，まず，いろいろな三角形を敷き詰めていくようにする。そして，どの形も敷き詰めることができる理由を三角形の並び方で比較し，共通点として３つの角が集まっていることや集まった角が一直線になることを取り出させる。さらに，三角形を組み合わせて四角形をつくり，それらを敷き詰めていく中で，一点に４つの角が集まっていることを取り出す。いかす段階では，三角形や四角形を組み合わせた五角形や六角形を並べ，敷き詰めることができる場合とそうでない場合があることから敷き詰められる理由をとらえさせる。

目　　標

１　図形を敷き詰める模様づくりを通して，図形が敷き詰められる理由として，内角の和が一定であることをとらえることができる。
２　友達のつくった敷き詰め模様と形や図形の並び方を比べながら，共通することを取り出すことができる。

→ いろいろな形を敷き詰めながら図形の性質を見つけ出す創造性
→ つくり出した形で模様をつくる主体性
→ 友達の作った模様と比較し合う社会性

計　　画　（約８時間）

段	第１次　つかむ段階（２時間）	第２次　しらべる段階（４時間）	第３次　いかす段階（２時間）
活動と内容	１　三角形の敷き詰め模様づくりをして，形を変えても敷き詰めができるのかといった課題をつかむ。 (1) 正三角形や直角三角形を敷き詰める。　① ○　目的の把握と意欲の喚起 (2) 他の三角形を敷き詰め，課題をつかむ。　① ○　追究課題の把握	２　いろいろな形の三角形や四角形を敷き詰めて模様づくりをする。 (1) いろいろな形の三角形を敷き詰めて模様づくりをする。　① ○　三角形の３つの角の和が１８０度であることに気付くこと (2) 三角形を組み合わせて四角形をつくり敷き詰める。　本時３／３③ ○　四角形の４つの角の和が３６０度であることに気付くこと	３　五角形や六角形を使って敷き詰め模様をつくる。　② ○　五角形では１８０度や３６０度がつくれないことをとらえること ○　正三角形でできた六角形や同じ四角形を２つ組み合わせた六角形は敷き詰められることをとらえること
支援	※　三角形を変えての敷き詰めの場の設定	※　いろいろな三角形を組み合わせて四角形をつくる場の設定	※　つくった三角形や四角形を組み合わせて提示

本時の目標

1　凹四角形の４つの角を１つの点に集めるようにして敷き詰めることができる。

2　いくつかの凹四角形の敷き詰め方を比較することで，四角形の角の和が３６０度であることをとらえることができる。

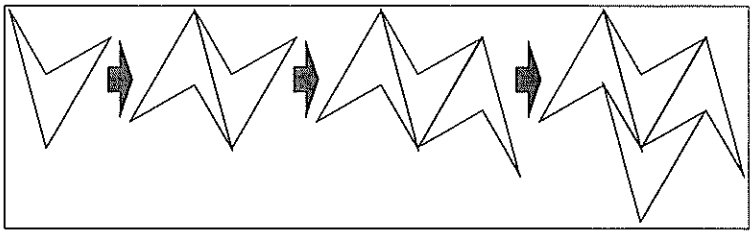
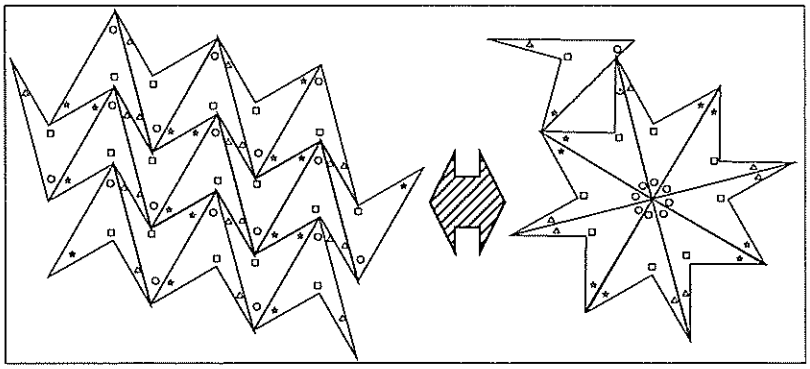
準　　備

三角形を組み合わせてできる凹四角形のカード
提示用凹四角形のカード

本時の主張点

本時指導にあたっては，三角形を組み合わせて出てきた凹四角形を使って敷き詰め模様がつくれるかを追究する。まず４枚の凹四角形を並べ，敷き詰め方の見通しを持ち，敷き詰める。そして，凹四角形の並び方から４つの角が１箇所に集まっていることに気付かせ，四角形の性質として，角の和が３６０度になることをとらえることができるようにしたい。

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　前時に出てきた凹四角形を並べて，本時学習のめあてをつかむ。 ○　前時学習の想起と本時学習のめあての把握 ※　前時学習に三角形を組み合わせてつくった凹四角形４枚を提示し，凹四角形の隙間がないような並べ方を考えさせ，見通しをもたせる。 （並べ方の例）  （めあて）　角のところを合わせて，へこんだ四角形でしきつめもようをつくろう。	○　前の時間は，いろいろな四角形を敷き詰めたな。 ○　今日はへこんだ四角形を敷き詰めてみよう。 ○　敷き詰められるかな。 ○　４枚のカードを並べてみよう。 ○　他の四角形が敷き詰められたからできると思うな。 ○　同じ長さの辺を付けるようにするとうまく並べられるよ。 ○　四角形の角が集まるようにするとうまく合わせられるな。 ○　これで，しきつめもようをつくってみよう。
2　凹四角形のカードを使って，敷き詰め模様づくりをし，他の四角形の並べ方と比べ，並べ方のきまりを見つける。 (1) 凹四角形のカードを並べて，敷き詰め模様をつくる。 ○　できた模様のつながった部分がどこも四角形の４つの角が集まっていることに気付くこと ※　凹四角形の４つの角に違った色のシールを貼ったものを与える。 (2) 凹四角形でできた模様について話し合う。 ○　どの凹四角形でも，つながった部分に四角形の４つの角が集まっていることに気付くこと ※　敷き詰めることができなかった並べ方と比較させる。 	○　同じ辺の長さのところをくっつけてならべていったらうまく並べられたよ。 ○　違う角を集めるようにしていくとうまく並べられたよ。 ○　こんな四角形でもうまく並べられるな。 ○　他の四角形もしきつめられたのかな。 ○　どのへこんだ四角形もしきつめられているな。 ○　どうしてうまくしきつめられるのかな。 ○　どのへこんだ四角形も４つの角が１つの所に集まっている。 ○　角をつなげた所は，どこも四角形の４つの角が集まっている。 ○　前の時間の四角形も見てみよう。 ○　四角形の４つの角が１つの所に集まっている。 ○　四角形の角はどれも３６０度だ。
3　敷き詰められる理由について話し合う。 ○　四角形の角の和が３６０度になることをとらえること ※　前時の四角形の並べ方や三角形を組み合わせたことから見直させる。	○　三角形を２つ組み合わせてつくったから，四角形は三角形の２倍の角度になっている。

身近なものから社会課題に挑戦する総合的学習（あらつ学習）

第５学年２組　あらつ学習指導案

指導者　　髙　野　誠　一

単　元　どう思う？ 自動販売機って便利!?

指　導　観

○　本学級の子供たちは，今までにアジアの諸外国の文化にふれたり，カブトムシを西公園で復活させるなどの活動に取り組んできた。そのなかでは，取り上げた対象の特色を調べたり，実践の目的をもった活動にかかわる課題を追究したりしてきている。また，自分の課題を追究する過程で，自分の追究内容について自信をもつ姿も見られるようになってきた。そこで，出合った対象のまわりや背景との関係を関係的に追究できるようになるこの期に本単元を設定し，共生社会へ向かう社会課題を背景とした対象に出合い，追究課題をこだわりをもって追究することで，教科の知を再構成しながら生活更新につながるようにしたいと考える。

○　本単元は，自分の利用経験や学校周辺の自動販売機調べの活動から自動販売機と消費生活にかかわる課題をもち追究する総合的な学習の時間である。そのなかで，各教科の知が総合化され，環境とエネルギーや福祉といった社会課題に対する自分なりの応えをつくっていくことをねらいとしている。具体的には，①自分の追究について応えと手段の関係から評価することができること，②自動販売機の歴史や種類，仕組みなどの課題を設定し，自動販売機と消費生活との関係や環境問題，福祉社会との関係などを考えること，③自動販売機をめぐる社会課題について考え，環境保護や福祉の視点からの実践活動や自動販売機の今後を考えた発信活動を行うことが主な学習内容である。

○　本単元の指導においては，自動販売機の設置についての社会課題と自分たちの自動販売機の利用経験から学習課題を設定し，身近なものから環境や福祉といった社会課題に向かう学習を進めたい。そのために，まず，全国の自動販売機の数と自動販売機設置を見直す運動が行われている事例を取り上げ，自分たちの身の回りにもある自動販売機について見直す課題を設定する。次に，自動販売機の仕組みや種類，利用の状況などを製作社や利用者，販売店などで調べる。このなかで，各教科の知を活用できるように支援していく。そして，調べたことから自動販売機の工夫や社会課題となっている点を比較・検討し，自動販売機と自分たちの消費生活という観点から生活を見直させたい。

目　　標

１　自分の課題に対する応えを想定し，追究方法との比較検討をしながら追究を進め，自分の追究を客観的に自己評価するとともに，自分の生活を見直していこうとすることができる。（主体性・社会性）

２　自動販売機が社会的におかれている状況から気がかりとなる課題を設定し，各教科の知を使いながら，環境とエネルギーや福祉社会について長所・短所などから多面的に考えることができる。（主体性・創造性）

計　　画　（約２５時間）

過程	第１次　課題設定　（５時間）	第２次　課題追究　（１５時間）	第３次　課題実現　（５時間）
活動と内容	１　全国の自動販売機をめぐる動きや身の回りの自動販売機調べから課題を設定する。 (1) 利用経験や自動販売機の全国の動向を調べる。　② ○　自動販売機問題への気付き (2) 身の回りの自動販売機を観察・調査する。　③ 本時2/3 ○　追究課題の設定	２　自動販売機の仕組みや現状についての課題を調べる。 (1) 自分の課題追究の計画を立てる。 ○　追究内容と方法からの計画立案 ・仕組み　・利用の様子　・問題の原因等 (2) 自分の課題について追究する。 ○　課題追究と自動販売機の必要性や価値に対する応え (3) 追究したことを表現・交流する。 ○　表現方法としての各教科の知の活用と自動販売機の是否についての応え	３　自動販売機の未来を考えるシンポジウムを開く。 (1) シンポジウム開催の準備をする。 ○　開催の見通し (2) 「自動販売機」の未来について考えるシンポジウムを開く。 ○　自動販売機の可能性と消費生活，社会課題とのかかわり
支援	※　自動販売機の現状の資料提示(設置制限等の動き) ※　学校周辺の自動販売機の数や種類の調査	※　追究課題別の小集団編成 ※　あらつガイドや自動販売機の会社，店等の追究場所にかかわる支援 ※　表現方法についての各教科の学習内容	※　自動販売機会社や販売，消費者等を招聘してのシンポジウムの開催 ※　追究の発信の場の設定

本時の目標

1　自動販売機をめぐる動きから，自分と自動販売機とのかかわりを見直すとともに，観察・調査から得たことを気がかりとして課題設定することができる。

2　自動販売機の現状と社会課題とのかかわりを認識し，自分が調べていくことを具体化して設定することができる。

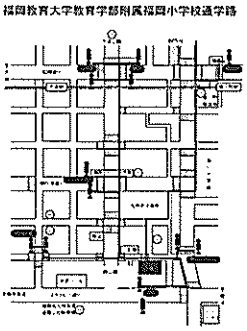
本時の主張点

本時指導にあたっては，自動販売機をめぐる社会的な動きに出合い身の回りの自動販売機について見直したことの気がかりから課題を設定していくようにする。このとき，子供たちの身近な生活の見直しが起こるように，自分や家族の自動販売機の利用経験や学校周辺での観察・調査の結果や自動販売機の必要性について全体や小集団での交流を図る。

準　　備

学習の流れ図，学校周辺の地図，自動販売機の写真等

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　自動販売機をめぐる動きについて振り返るとともに，前時までの観察・調査から，本時のめあてをつかむ。	
○　自分の利用経験や観察・調査などから自動販売機やその必要性にかかわることについて考える本時のめあての確認 ・全国の自動販売機をめぐる動き（国税庁，環境省，各都道府県など） ・利用経験や学校周辺の自動販売機	
（めあて）　身の回りの自動販売機調べから，自動販売機が必要なのかどうか考えよう。	
※　学習の流れ図や観察調査している写真をもとに，本時学習のめあてを話し合わせる。	
2　身の回りの自動販売機調べなどから気がかりになることを話し合う。 (1) 自分や家族の利用経験調べや学校周辺の自動販売機調べの結果について話し合う。 ○　自分や家族などの身の回りの自動販売機とのかかわりの見直し  福岡教育大学教育学部附属福岡小学校通学路 学校周りの自動販売機は，全部で175台もあるよ。（台数の多さ） 飲み物が一番多くて116台，次にたばこが43台もあるけど，アイスクリームなどめずらしいものもあったよ。（種類） わたしの家では，わたしも使うけど，お父さんが毎日のように自動販売機を利用しているそうよ。（身の回りの生活）	○　日本全国で600万台以上の自動販売機が設置されているのには驚いたな。ぼくも，自動販売機を使うことは多いから，たくさん置かれているんだろうな。 ○　たくさんの自動販売機はいらないという意見やいろいろな問題がありそうだと言われている。本当に必要なのかな。 ○　わたしは，学校の周りを種類ごとに分けながら調べていきました。たくさんあったのは，大きな道沿いで特に，黒門川通り沿いやよかトピア通り，明治通り沿いに多かったよ。 ○　種類別に見ると，やっぱり飲み物が一番多くて，次にたばこ，そしてお酒という順序だった。 ○　ぼくは，家の人に聞いてみたよ。家の中ではお父さんが一番多く利用していた。お父さんは，いろいろな自動販売機の種類があって，選べて楽しいと言っていたよ。 ○　今まで気付かなかったけど，改めて見ると，身の回りには，こんなに自動販売機があったんだね。
※　自分が調べてきたことや思ったことを地図を活用したり，写真を活用したりしながら，発表できるようにする。 (2) 自動販売機設置の見直しの動きについての自分の考えについて話し合う。 ○　自動販売機縮小の動きと自分や身の回りの人々の利用状況を比べ，必要性について考えること 自動販売機は必要 【削減】数の多さ　資源・エネルギー　景観　ごみ 【必要】利用者の数　販売店のくらし　便利な消費	○　こんなにたくさんあって，本当に必要なのかな。日本全国やいろいろな県で言われているように，見直さないといけないのかな。 ○　わたしは減らすことに賛成です。学校の周りの自動販売機を調べたときに，自動販売機が置かれている周りに缶がよく落ちていたから，まちをきれいにするためには，いらないのでは。
※　「必要」と「減らそう」のカードを示して話し合わせる。 3　気がかりとなったことを友達と話し合う。 ○　自動販売機にかかわることについて調べていきたい方向性をもつこと ※　気がかりの傾向性が分かるようにカード等で類型化して小グループを編成し，ポートフォリオを活用しながら話し合わせる。	○　でも，自動販売機を置いて商売をしている人もいる。もっと調べないと判断できないな。

全体会（１日目）

▼ あ い さ つ（１０：３０～１０：４５）

福岡教育大学学長　松 尾 祐 作

学 校 長　中 谷 雅 彦

▼ 主 題 発 表（１０：５０～１１：１０）

・豊かな人間の育成をめざす

教育課程の創造

－教科・総合の学びを連動する

＜ふくおかプラン＞の展開－

研究主任　吉 田 正 樹

▼ 障害児教育発表（１１：１０～１１：３０）

・豊かな生活を営む子供をめざす

教育課程の創造

－各教科及び領域・教科を合わせた指導における

役割を明確にして－

障害児教育部　谷 崎 和一郎

▼ 教 科 等 発 表（１１：３０～１１：５０）

・音楽的な感受力と構想力を育む

音楽科学習

－音楽に多文化的にアプローチする

音楽科学習プラン－

音楽科部　原　　ク ミ

▼ 児 童 発 表（１１：５０～１２：００）

・創り出そう！私達のハーモニー

指導者　豊 村 雅 義

第１日目　午後の部

公開授業指導案

▼ 学 習 指 導（１３：００～１３：４５）

学年　組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
１年２組	生活学習（生活科）	なかよしひろばをつくろう	北島幸徳	１年２組教室
２年１組	道徳学習（道徳の時間）	植物にやさしい心で	大近正博	２年１組教室
２年２組	算数科	つかみ取りゲームをしよう -1000までの数のあらわし方やじゅんじょをしらべて-	塩田利彦	２年２組教室
３年１組	理科	カブトムシからのぞく小さな命 -昆虫と仲良くなろう-	野口信介	理科室
3年2･3組	図画工作科	つくろう！教室の中のふしぎなせかい	北田尚雄	工作室
４年１組	国語科	生き物のふしぎを読み取ろう！ヤドカリとイソギンチャク！	平島健二	４年１組教室
４年２組	社会科	これからの福岡市の水 -節水型都市をめざして-	藤野俊明	３年２組教室
５年１組	学級活動（特別活動）	学級成長記録を見直そう！-電子アルバムでつづる学級成長記録-	矢野俊次	５年２組教室
5年2･3組	音楽科	ひびけ！フォルクローレ-ふしや音色のよさを味わおう-	原クミ	音楽室
6年1･3組	体育科	バスケットボールのプレーの秘密を探ろう！	岩城一磨	附中体育館
６年２組	家庭科	和風の朝食にチャレンジしよう-私の自慢の健康みそ汁-	木村真美	家庭科室

▼ 障害児教育学習指導（１３：００～１３：４５）

さくら組	国語科	わくわく　えはがきを　つくろう	原口和美	さくら組教室
梅　組	生活単元学習	なかよし　すいぞくかんを　つくろう	谷崎和一郎	特殊学級練音楽室

自分のよさや可能性に気付く生活科学習

第１学年２組　生活科学習指導案

指導者　北　島　孝　徳

単　元　みんなだいすき　ふぞくふくおかしょうがっこう！

－なかよしひろばをつくろう－

指　導　観

○　本学級の子供たちは，入学以来，いろいろな友達や人に出会い，期待と気がかりに包まれながら学校生活を送ってきている。単元「ぼく・わたしのふぞくしょうがっこう」においては，探検活動を行ったり，表現活動を行ったり意欲的に活動し，附属福岡小学校のもの・人・ことへの気付きや親しみをもつことができた。そして，「がっこうってたのしいね。もっとあそびたいな，いろんなひととはなしをしたい。」という思いを膨らませてきている。このような子供たちの願いを出発点として，学校の中に，自分たちで楽しめる空間を作りだし表現していこうする活動は，身近な学校生活と自分自身とのつながりを深めながら，楽しい学校生活を送っていこうという意欲を高めていく上で価値がある。

○　本単元は，これまで単なる生活空間だったワークスペースに，自分たちの力で「なかよしひろば」をつくり楽しく遊ぶ活動を通して，主体的に学校に働きかけ，自分たちの力で，自分たちの学校生活をより楽しくできるということに気付くことをねらいとしている。ここでの主な学習内容は，①身の回りにある材料を利用して，みんながなかよく遊べるものをつくること，②自分の思いをもって友だちと進んでかかわること，③制作活動や遊びの活動を通して，自分自身のよさや友だちのよさに気付くこと，などである。

○　本単元の指導においては，「なかよしひろば」をつくる活動を中心に，附属福岡小学校や友だちに対して自己意識を高めていけるようにしていく。そのために，であう段階では，ワークスペースに対する思いについて話し合わせ，自分たちの手でワークスペースを楽しいものへと変えていくという見通しと活動の意欲をもたせるようにする。ひたる段階では，まず，自分たちでなかよし広場をつくり，試しのなかよしひろばを開いてみる。次に，楽しさ，なかよしという観点から振り返らせることによって，自分たちの広場をよりよい広場につくりかえることができるようにする。また，自分たちの広場のよさをＰＲすることもできるようにする。生かす段階では，まずはじめに，なかよしひろばを開いて学級みんなで楽しむ。次に，１年１組との「なかよしひろば交流会」を行い，なかよしの輪を広げていくようにする。それらの中で，楽しさやよさを発表し合い自他のよさに気付くことができるようにする。

目　　標

１　身近にある物を使い，友だちと協力して学校の中に楽しい広場を創り出すことによってこれからの学校生活を豊かにすることができる。

２　広場をつくって遊ぶという活動を通して，進んで友だちとかかわり自分自身のよさや友だちのよさに気付くことができる。

→ 自分なりの思いをもって意欲的に活動する主体性
→ 気付きや工夫の獲得の創造性
→ 他者への愛着を感じる社会性

計　　画　（約１０時間）

段階	第１次　であう段階（２時間）	第２次　ひたる段階（６時間）	第３次　生かす段階（２時間）
活動と内容	１　ワークスペースについて話し合い，どんななかよしひろばをつくるか話し合う。　②	２　グループごとにみんなで楽しむ広場をつくる。	３　なかよしひろばを開く。
	○　なかよしひろばへの期待と見通しをもつこと	(1)　必要な材料や道具を用意して，友だちと協力して広場をつくる。　③	(1)　なかよしひろばで楽しく遊ぶ。　①
	○　なかよしひろばの条件に気付くこと	○　制作への見通しと期待をもつこと	○　楽しさを享受すること
	○　ワークスペースの公共性に気付くこと	(2)　試しのなかよしひろばを開き，活動を振り返り，もっと楽しくなるように工夫する。　本時3/3　③	○　自他のよさに気付くこと
		○　友だちや自分のよさへに気付くこと	(2)　１年１組と一緒になかよしひろば交流会を開く。　①
		○　工夫するよさへに気付くこと	○　自他のよさの感得すること
支援	※　日頃のワークスペースの様子をＶＴＲで視聴させる。	※　楽しさ，なかよしという点から振り返らせ，工夫する観点を明確にしておく。	※　互いのよさを認めあうことのできる場作りを行う。

本時の目標

1　自分たちの広場を工夫して，もっと楽しいなかよしひろばをつくることができる。　（主体性・創造性）

2　グループで協力して役割分担を行い，自分の役割を果たすことができる。　（社会性）

準　　備

・ 自分たちで作った広場の道具

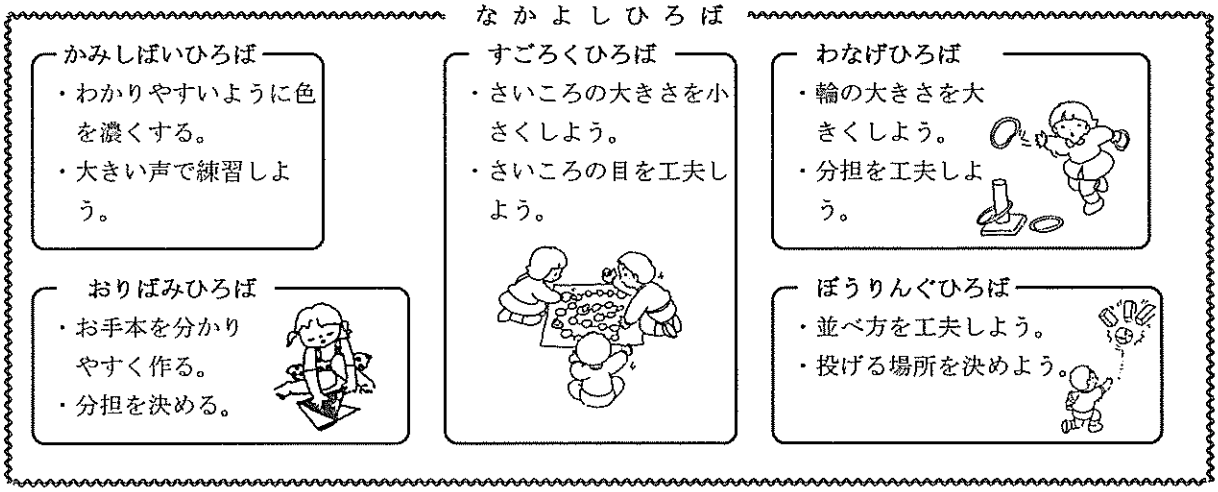
・ 流れ図

本時の主張点

本時指導にあたっては，試しのなかよしひろばで課題となったことをもとに，もっと楽しいなかよしひろばにしてみんなと仲良く遊びたいという思いをもって活動することにより，友だちのアイデアや活動のよさに気付き，それらを認め合う中で，自分のよさに気付き自信をもって活動できるようにすることをねらっている。

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　これまでの活動から本時のめあてをつかみ，本時学習の見通しをもつ。 (1)　前時を振り返り，めあてを確認する。 ○　もっと楽しい広場にするという意欲の高まりをもつこと （めあて）　もっと　たのしい　なかよしひろばにしよう。 (2)　すごろくグループの発表を聞き，本時学習の見通しをもつ。 ○　本時学習での活動の見通しをもつこと ※　なぜ，その活動をするかについて尋ね，価値ある活動の観点に気付かせる。	○　もう少し工夫すると楽しいなかよしひろばができそうだ。がんばろう。 ○　今日は，この前よりもっといい工夫をしよう。 ○　ほかのグループは，どんな工夫をしているのかな。 ○　すごろくグループは，どんな工夫をしているのか楽しみだな。 ○　みんなの安全を考えているだな。それに，みんなで協力するようにしているな。ぼくたちもまねしよう。
2　グループごとに，自分たちの広場をつくりかえる。 (1)　もっと楽しく遊べるように，工夫して広場をつくりかえる。 ○　協力するよさへの気付きをもつこと ○　楽しく広場になることへの期待感をもつこと ※　価値ある活動の観点に気付くように，個別に語りかける。	○　みんなが楽しく喜んでくれるように工夫しよう。 ○　本当に楽しいか，自分たちでもやってみよう。
(2)　つくった広場で遊んでみる。 ○　みんなのがんばりや工夫への気付きをもつこと ※　音楽を流して，楽しく移動できるようにする。	○　前よりも楽しくなっているね。みんな頑張ったんだな。約束も守っているね。
3　本時学習を振り返り，感想を発表する。 ○　仲良く協力できたこと，みんなのことを考えていたこと，自分たちで頑張ったことへの気付きをもつこと ○　なかよしひろばが開けることへの期待感 ※　協力のよさに気付いている子供を取り上げ価値付けていく。	○　協力して工夫したから，前より楽しくなったんだな。 ○　ぼくも頑張ったよ。なかよしひろばで遊ぶのが楽しみだな。 ○　誉めてもらってうれしいな，もっと工夫したいな。



体験を資料化し，役割演技を取り入れた心に響く道徳学習

第２学年１組　道徳学習指導案

指導者　大　近　正　博

主　題　植物にやさしい心で

指　導　観

○　本主題は，身近な自然に親しみ，植物等に優しい心で接する態度を育てることをねらいとしている。特に生活科などの各教科や学校行事などにおいて自然や植物などと直接ふれあうことを通してそれらに対するやさしい心を養うことを求めている。具体的には，①「自分の花への思いをかなえるためにはどんな気持ちが大切になるのだろうかと一人一鉢の活動のときにつかんだ課題を確かめること②資料「さかせよう，心の花」をもとに，主人公の植物に対する優しい気持ちや心の葛藤を共に感じ，その葛藤を乗り越えた喜びを味わうこと③この主題のねらいにつながる道徳的価値の大切さに気づき，その道徳的価値と照らし合わせながら学習や日常生活における自分と生き物とのかかわり方について内省する。そして，道徳的価値の自覚を深めながら一人一鉢や生活科などで栽培している植物をはじめあらゆる動植物に対して優しい心で接していこうとする道徳的実践力を育んでいくことが主な学習内容である。本主題は，中学年の３－(1)の「自然のすばらしさや不思議さに感動し，自然や動植物を大切にする。」に，高学年の３－(1)の「自然の偉大さを知り，自然環境を大切にする」に発展していく。

○　本学級の子供たちは，１年生の時に生活科で朝顔を育てたり，一人一鉢で花の苗を育てたりしている。いずれもそれぞれの植物への願いを明らかにし，その願いをもってお世話を続けることができている。その子供たちは，今年も行われる一人一鉢に対する興味・関心を高め，「早くしたい。」と意欲的である。また，子供たちの一人一鉢への思いも「去年よりたくさんの花を咲かせたい。」「きれいな花を咲かせたい。」といったものに集中している。このことから，今までの栽培活動で培ってきた自信をもとに，もっとこうありたいといった新たな課題をもっていることがわかる。

しかし，「暑いからやりたくないな。」や「先に遊びたいな。」といった人間の弱さを感じさせる気持ちを有する面もあり，心の中で「水やりに行くか，どうしようか。」と迷った経験がある子供もかなりいることが分かっている。そのような子供たちに，道徳の時間としての本時で，生活科や学校行事の中での道徳的実践をもとに，計画的，発展的な指導により，これを補充・深化・統合し，本主題のねらいとしての道徳的価値の自覚を深めながら，道徳的実践力を育成することによって，子供たちに豊かな道徳性を養うことができると考える。

○　本主題の指導にあたっては，次の3点に留意しながら，本校がめざす自己追究の姿を生み出していきたい。まず，第1点は夢や希望をもって自らの強い求めを土台にした学習を展開することである。そのためには，子供たちが一人一鉢の活動で栽培しているポーチュラカの満開の写真の提示や既に花芽をつけている子供の鉢の紹介を通して，各自が「いいなあ。自分もこうなりたいな。」といった憧れとともに「そのためにはどんな心が大切なの。」と自ら課題をとらえていけるようにしていきたい。第2点は，自分の力を発揮して追究する学習を展開することである。そのためには，役割演技を取り入れていく。第3点は，自分なりの応えを見出す学習を展開することである。そのためには自己評価機能を含み，道徳的価値の自覚を深めるために自分の苗への手紙を書く活動を設定していく。

目　　標

一人一鉢の体験の中で感じた自分の心の動きをもとに役割演技などを通して，身近な自然に親しみ，植物などに優しい心で接する態度を育てることができる。

計　　画　（約２時間）

	特　別　活　動　「一人一鉢」	道　　徳
活動と内容	1　学校をきれいにするための一人一鉢の活動をする。 ○　一人一鉢の意義についての理解 ○　土づくり，苗植えをすること ○　自分の苗への思いを確かめること	2　自分の花への思いをかなえるために大切な心について自分に問いかける。 ○　夢をもちながら自分の苗への思いを高めること ○　役割演技によって自分のあり方を見つめること ○　道徳的価値の自覚を深めること
支援	※　昨年の活動を振り返る資料の提示 ※　自分の苗への思いを表現するカードの活用	※　低価値から高価値へ移行していく役割演技 ※　感得した道徳的価値の自覚を深める手紙書き活動

本時の目標

1　一人一鉢における自分の課題をつかみ，その課題を解決するために大切な心について考えながら動植物に優しい心で接する態度を育てることができる。
（主体性・創造性）

2　自らの価値意識や規範意識を周囲とのかかわりの中で見直し，自他共によりよく生きる上で大切な行為を積極的に実践しようとする。　（社会性）

本時の主張点

本時指導にあたっては，一人一鉢の体験を生かしながら夢や希望に満ち溢れた子供自らの課題をつかませる。そして，役割演技などを通して主人公の心の葛藤をしたり，その葛藤を乗り越えたときの感動を共有したりしながら道徳的価値の理解を図る。さらに，心のノート等の活用によって自らの行いを振り返り道徳的実践力の育成を図っていきたい。

準　　備

紙芝居，苗の図，じょうろ，写真，道徳ノート，VTR

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　一人一鉢での活動を振り返り，本時学習のめあてを確かめる。 (1) ポーチュラカの満開の写真や花芽がついている友達の鉢を見て，一人一鉢における自分の願いを考える。 ○　一人一鉢での活動を想起しながら自分の苗に対する思いを確かめること ※　ポーチュラカの満開写真や花芽をつけている子供の鉢を提示し，夢や希望をもたせる。 (2) 本時のめあてについて確かめ合う。 ○　みんなの花をたくさん咲かせるためにはどんな気持ちが大切なのか話し合っていくことを確かめ合うこと。 （めあて）みんなの花をたくさんさかせるためにはどんなきもちでそだてていったらいいかはなしあおう。	○　一人一人の花が一つに集まるととてもきれいだね。みんなの花を早く咲かせたいね。 ○　わたしも，○○君のように早く花芽をつけたいなあ。そのためにはどんな気持ちで育てればいいのだろう ○　ぼくだって，早く花が咲いてほしいと思っているよ。そのためにはどんな気持ちで育てていけばいいのだろう。 ○　わたしは，大切に育てるからお友達になろうねと言っていると思う。
2　資料「さかせよう，心の花」を読み，主人公の心情について話し合う (1) 花子さんは花の苗を植えるとき何と苗に話しかけたか話し合う。 ○　苗を育てるときの思いを一人一鉢の活動における子供自身の思いと重ねながら花子の心情を考えること ※　自分の苗の場所に行き実際に植えたときのことを学習ノートなどで想起しながら，苗への思いを語りかけれるようにしていく。 (2) 水やりに行くかどうか迷っている花子の心の葛藤を経験する。 ○　「今，水やりに行かないといけない。」，「しかし今は学校へ来たばかりだしきついので後にしたい。」という2つの心理葛藤をする。 ※　3パターンの役割演技のパターンを決めておき，そのパターンにそって役割演技をさせ，同質性の追究ができるようにする。 (3) 勢いよく水が土の中にすい込まれていく音を聞いたときの花子の心情について話し合う。 ○　水やりをしてよかったという道徳的価値の理解を図ること ※　効果音を取り入れ，音の心地よさを感じ取ることができるようにする ※　花を咲かせるために大切な気持ちについてまとめていく。 (4) 今までに生き物に優しくした経験を出し合う。 ○　感得した道徳的価値に照らし合わせて，自分の行いを内省すること ※　生き物への優しい心は花子の心と同じであることを伝え実践意欲を育成していく。	○　ぼくは，きっと一生懸命そだてるから早くたくさんの花を咲かせてほしいと言っていると思うよ。 ○　わたしは，早く大きくなって，そして，昨年よりたくさんの花をつけてほしいと願っていると思うわ。 ○　わたしは1つ目の演技の花子の気持ちはわかるが，植物を枯らすかもしれないことからあまり賛成はできないわ。 ○　ぼくは3番目の演技が一番スッキリしたよ。 ○　水の音を聞いて，本当に水やりにきてよかったと思っているんだな。 ○　花を咲かせるためには，一日も忘れないようにお世話をする気持ちが必要だと思います。 ○　わたしは蝉の幼虫が車にひかれそうになっていたから家に連れて帰って木に放してあげたら次の日の朝抜け殻だけになっていました。 ○　ぼくは弟と思って大切にこれからも育てるよ。だからたくさんお花を咲かせてね。
3　教師の体験談を聞く。 ○　獲得した道徳的見方・考え方・感じ方によって自己を更新すること ※　心のノートＰ４９を参考に自分の苗について発見したことや思いを手紙に書くことによって道徳的価値の自覚を深めさせる。	

ゲームを発展し，数を多様に表現する算数科学習

第２学年２組　算数科学習指導案

指導者　　塩　田　利　彦

単　元　つかみ取りゲームをしよう－１０００までの数のあらわし方やじゅんじょをしらべて－

指　導　観

○　本単元は，第１学年の１００までの数の学習を基にしながら，１０や１００などを単位にして，それらのいくつ分で数の大きさをとらえる数の相対的な見方を培う算数科学習である。お金などの具体物を数える活動を通して，１０００までの数のよみ方，表し方，大小，順序などについて理解することがねらいである。具体的には，①操作をもとに１０や１００のまとまりをつくり，１０００の数のよみ方，表し方を理解すること，②１０００までの順序，系列を表や数直線へ記入する仕方を理解すること，③数を十や百を単位としてみたりすることが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，１学年で１００までの数を学習して，３位数の初歩は理解している。また，日常生活では，「何千円」，「何万円」といった言葉も使っている。また，３位数を数字で正しく書ける子供も多い。しかし，これまでの学習を受けて，４位数までの数の構成，よみ方，かき方が理解されているとはいいがたい。１００ぐらいまでの数は，１０ずつにまとめて数えるよりも１つ１つ数えた方が速く，正確にできると考える子供が多い。１０００という数は知っていても，それを数える体験をもつ子供は少ない。本題材によって，大変と感じる数える体験を通して，それが，次第に数が大きくなることで，子供自ら１０ずつまとめ，１００を束とした考えに気付かせ，子供が工夫して数え，数の仕組みを理解するようにしていきたい。

○　本題材の指導においては，位取りの仕組みから大小・順序，数の抽象化への３段階につかみ取りゲームを発展させ，１０００までの数の意味を考える。つかむ段階では，つかみ取りゲームにおいて，お金の仕組みを生かし，１０のまとまりで表すよさに気づかせる。調べる段階では，つかみ取りゲーム２において，一・十・百の位を色でとらえ，数の比較の範囲を学級全員に広げる設定から，数直線を使って数の系列や順序の関係を考えさせる。そして，段階的な数直線の設定により，数と数相互の関係を考え，数の相対的な見方を深めさせる。生かす段階では，つかみ取りゲームをさらに発展させ，数カードを取り出して，大小の数をつくり，簡単な加減の計算をさせて，一般化を図る。

目　　標

１　つかみ取りゲームで取り出した数を，位ごとのまとまりで表したり，数直線に置き示したり，数をつくり出したりして，ゲームを進めることができる。

２　数のまとまりのつくり方や表し方，数直線の目盛りの読み方等を，友達と話し合い，１０００までの数の意味を理解し生かすことができる。

→ 十のまとまりで新たな数を生み出す創造性

→ 進んでゲームに関わる主体性

→ 考えを生かし合う社会性

計　　画　（約７時間）

段階	第１次　つかむ段階（２時間）	第２次　調べる段階（３時間）	第３次　生かす段階（２時間）
活動と内容	１　つかみ取りゲームを通して１０００までの数の表し方をお金の仕組みからつかむ。 (1) ３位数の数の一円玉を数え，よみ方を話し合う。① ○　十円玉や百円玉でまとめることのよさに気付く。 (2) お金を数え棒に置き換え位の表し方を話し合う。① ○　十や百のまとまりで表しいくつ分でとらえること	２　つかみ取りゲーム２を通して，位の表し方の決まりをつくり数の仕組みを調べる。 (1) ３色のチップの位について話し合う。① ○　３色の色チップに一，十，百の位から３種類の位をつけて考えること (2) ２色のチップの位について話し合う。① ○　チップに一，十，百の位をつけること (3) ゲームをグループから学級に広げ，数直線で順位の表し方を考える。　本時① ○　数直線の読み方・表し方と大小のそれぞれの勝敗の決め方を変えること	３　つかみ取りゲーム３を通して，数の大小を考え，比べる。 (1) 数カードを３枚つかみルールに応じて数字をつくり比べる。① ○　３枚の数字の組合せで大小を考え数を作ること (2) 数カードを２回取り，加減をして比べる。① ○　位を考え加減すること
支援	※　まとまりに気付く十円玉，百円玉の提示の工夫 ※　十ごとのまとまりを異なるものに生かすゲーム設定	※　色を生かして位を決める教具の工夫 ※　３色を２色にして空位をつくる設定 ※　グループから学級へ対象を広げ全体で比べるための数直線の必要性を引き出す設定	※　ルールに応じて数をつくるゲーム設定の工夫 ※　カードで位を意識して合わせる教具の工夫

本時の目標

1　つかみ取りゲーム２を通して，各自がつかんだチップの数を比べるために，数直線に置き換えて考えることができる。

2　数直線の目盛りの大きさに着目し，１０００までの数の系列や順序を理解することができる。

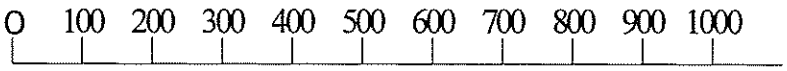
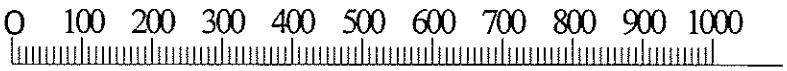
準　　備

つかみ取り箱，掲示用の３段階の大数直線，３色のチップ，位取り数板，各自の数を示す数カード

本時の主張点

本時指導にあたっては，つかみ取りゲームを発展させ，比べる意識を学級全体に広げることで，順番に数を並べようという求めが生まれる。３段階の数直線の設定は，必要な目盛りを話し合わせた結果から自分たちの力で，十や一の小さい目盛りを考え出す追究ができる。自分たちで，全員の数を順番にとらえる課題から，考えを生み出す喜びを味わわせる。

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　つかみ取りゲーム２の勝敗を学級全体に広げることから，比べ方を話し合い，本時のめあてを確かめる。 (1) チップをつかみ，各自の数を学級全体で比べる方法を話し合う。 ○　大きい順や小さい順に並べると比べられること ※　黒板に自由に並べさせ，順に並べる考えを交流する。 (2) 数直線を使った比べ方から勝敗を見通し，本時のめあてをつかむ。 ○　数直線を使うと並べやすく，簡単に比べられること ※　並べ方の不十分さから，１００ごとに区切った数直線を提示する。 （めあて）　みんなで数のせんに並べて，つかみ取りゲームをしよう。	○　ペアで比べて勝ち抜いていけばできるかな。おかしいみたいだ。 ○　みんなで比べるためには，順番に並べないと分かりにくいみたいだ。 ○　数直線の目盛りを使えば，順番に並べられそうだ。 ○　数直線のめもりのどこに置いたらいいのだろう。 ○　置き方を考えて，つかみ取りゲームの勝敗を決めよう。
2　数直線をもとに，順番に数を並べる方法を話し合い，ゲームをする。 (1) 第１回戦の１色で百の位のチップを設定し，数直線のおき方を話し合い，勝敗を決める。 ○　各自の数字の大きさをとらえ，数直線と対応して考えること ※　１００ごとの目盛りの数直線を提示し，表し方を交流する。  (2) 第２回戦の２色で百と十の位のチップを設定し，どんな数直線がよいか話し合い，勝敗を決める。 ○　１０の位の小さな目盛りがあれば表しやすいことに気付くこと ※　１０の目盛りの必要性を交流した後，数直線を提示する。  (3) 第３回戦の３色で百と十，一の位のチップを設定し，どんな数直線がよいか話し合い，勝敗を決める。 ○　一の位の小さな目盛りがあれば表しやすいことに気付くこと ※　１の目盛りの必要性を交流した後，数直線を提示し表し方を交流する  ※　0から1000までの幅を同じにする。	○　百ずつ目盛りがあるので，百のチップのいくつ分で０から目盛りを数えれば分かるみたいだ。 ○　数直線にみんなが置けば，すぐに順番がわかるし，勝ち負けもすぐに決められるよ。 ○　十の位のチップが混ざったから，数直線の百ごとの目盛りの間に小さな目盛りがあれば便利だ。 ○　百ごとの間は，１０個で分けないといけないみたいだ。 ○　この数直線だったら，並べられて勝ち負けもすぐに決められるよ。 ○　チップが一の位まで混ざったので数直線の十の間の目盛りを，また同じように１０個で分けるといいよ。 ○　この数直線なら何百何十何まで順番に表すことができて，勝ち負けを決めることができるよ。 ○　数直線は，たくさんの数字を順番に並べて表すのに便利だ。
3　数直線を使って，大きい数を順番に並べられることをまとめる。 (1) 数直線に数を置いたり，目盛りから数を読み取ったり，数の順番についてまとめる。 ○　数直線を使って，具体的な数を読み取ったり，確かめたりすること ※　３種類の数直線を使い，数カードを置いたり，目盛りを読んだりする。 (2) 数直線の百と十，一の関係をまとめる。 ○　１０ずつのまとまりで表されていること ※　３種類の数直線を使い，一と十，十と百，一と百の関係を発問する。	○　この目盛りは，１０００より２０少ないから９８０だ。 ○　９９９は，１０００より１つ少ないところになる。 ○　数直線は，１０のまとまりごとで分かりやすく表され，順番に数を並べることができる。

あらつ学習でかかわっているカブトムシから比較する対象を広げていく理科学習

第３学年１組　理科学習指導案

指導者　野口信介

単　元　「カブトムシからのぞく小さな命」－昆虫と仲良くなろう－

指導観

○　本単元は，第３学年あらつ学習「カブトムシ牧場をつくろう」の中で育まれてきている生き物に対する見方や考え方と連動し，昆虫の体の仕組みや成長の様子を追究していく理科学習である。ここでは，身近な昆虫を探したり育てたりして，成長の過程や体のつくりを比較して追究する能力や生き物を愛護する態度を育てることをねらいとしている。具体的には，①昆虫の卵や幼虫を探し，それらの飼育を通して昆虫の育ち方には一定の順序があることをとらえること，②昆虫の体は，頭部，胸部，腹部という共通のつくりをしていることをとらえること，③昆虫には，植物を食べたり，植物をすみかにしたりして生きているものがいることをとらえることが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，生活科の学習において学校の近くの自然公園である西公園の植物や動物とかかわりを深めてきている。また，第３学年になって取り組んでいるあらつ学習「カブトムシ牧場をつくろう」では，カブトムシの飼育やカブトムシを育てている人の思いや願いに触れながら自然の大切さや生き物の命の尊さに気付いてきている。しかし，昆虫とは小さな生き物であるという見方をしている子供の姿や昆虫の体のつくりには目が向いていない子供の姿も多く見られる。そこで，カブト虫に対する興味や関心を大切に，他の昆虫と比較していくことで得られた情報を，昆虫の特徴として関係づけていく力の育成を図っていきたい。

○　本単元の指導においては，子供たちが昆虫として認識し，あらつ学習でも飼育しているカブトムシを中心に扱い，育ち方が同じモンシロチョウや育ち方が異なるバッタなどを比較させながら，昆虫の体のつくりや育ち方の規則性をとらえさせていく。見出す段階では，西公園や校庭に生息している昆虫探しの活動を通して，昆虫とはどんな生き物なのかということに課題意識をもたせていく。調べる段階では，昆虫の体のつくりに対する自分のイメージを検証していくために，イメージ図を用いながら日常の生活で培ってきている考えを比較させ観察の視点を明らかにする。その上で，幾種類かの昆虫を比較し観察させることで共通点や差異点をもとに体のつくりをとらえさせていく。生かす段階では，昆虫の飼育の計画を立てさせ，あらつ学習と連動を図りながら成長の仕方を継続的に観察させていく。

目　標

１　昆虫の体のつくりや成長の仕方をこれまでの生活経験をもとに予想し，幾種類かの昆虫を比較しながら共通点や差異点を追究することができる。 --> ２つ以上のものを比較し，特徴を関係づけていく創造性

２　生き物が生活していく上での食べ物と生活場所とを関係づけながら，昆虫と植物とのかかわりについての考えをもつことができる。 --> 自分の方法を見直す主体性，命の巧みさを感じる社会性

計　画　（約１０時間）

段階	第１次　見出す段階（３時間）	第２次　調べる段階（５時間）	第３次　生かす段階（２時間）
活動と内容	１　昆虫探しを行い，昆虫に対する疑問を話し合う。 (1) 西公園や校庭で見られる昆虫の種類について話し合い，昆虫探しを行う。　② ○　昆虫探しに対する意欲の喚起と学習対象の明確化 (2) 見つけた生き物が昆虫といえるか話し合い，学習課題について話し合う。　① ○　学習課題の設定	２　昆虫の体のつくりと成長の仕方のきまりについて話し合う。 (1) 昆虫の体のつくりについて話し合い，２種類以上の昆虫の体のつくりを比較しながら確かめる。　本時２／３③ ○　昆虫の体のつくりについての把握 ○　比較による共通点と差異点の明確化 (2) 昆虫の成長について話し合う。　② ○　これまでに飼育した経験のある昆虫の成長の様子などから昆虫の成長の仕方の共通点や差異点について予想すること	３　自分で育てていきたい昆虫の飼育の仕方について調べ，成長の仕方を調べるための継続観察に対する計画を立てる。　② ○　昆虫が生活するために必要な環境や食べ物についての把握 ○　成長の仕方を追究するための計画を立てること あらつ学習との連動
支援	※　昆虫が生息する植物の栽培 ※　集めた生き物の特徴を話し合う場の設定	※　体のつくりが顕著な昆虫の用意 ※　カブトムシの幼虫，さなぎ，成虫を用意し，他の昆虫を調べる観点をつかませる。	※　図書資料の準備 ※　飼育しやすい昆虫についての紹介

本時の目標

1　昆虫の体のつくりのイメージ図を比較しながら昆虫の体のつくりの特徴を調べる観点を見出し，頭部，胸部，腹部といった体のつくりを観察することができる。

2　２種類以上の昆虫の体のつくりについて観察し，共通点や差異点を話し合うことで，昆虫の体のつくりのきまりについての考えをもつことができる。

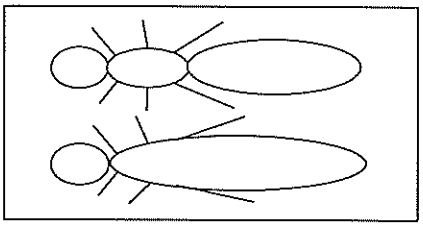
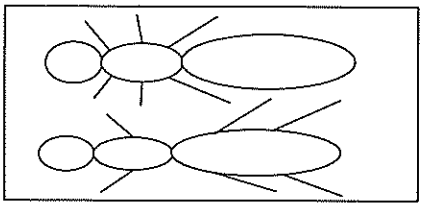
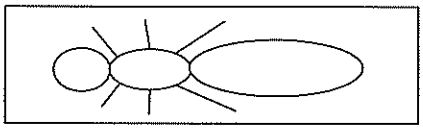
準　　備

昆虫の体を描いたイメージ図，採取した昆虫

本時の主張点

本時指導にあたっては，見通しをもった観察によって昆虫の体のつくりに対する考え方を構築していく学習を展開する。そのために，子供たちが描いた昆虫の体のイメージ図を比べ，頭部・胸部・腹部といった体のつくりや足のつきかたに対する考えの曖昧さから観察の視点を見出させていく。そして，観察の結果を比較しながら応えを導き出させていく。

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　前時学習で描いたカブトムシやありのイメージ図をもとに昆虫の体のつくりについて曖昧な点を話し合い，本時学習のめあてを設定する。 (1) イメージ図に表されている体のつくりで違う点がどのようなところに現れているか話し合う。 ○　体のつくり（頭部，胸部，腹部）について意識すること ○　足の数やつきかたについて意識すること ※　前時に描いたイメージ図をおおまかに類型化し掲示しておく。 (2) 観察する視点について話し合い，本時学習のめあてを設定する。 ○　昆虫の体のつくりを調べていくことを明確につかむこと （めあて）　こん虫の体のつくりがどのようになっているか，いくつかのこん虫をかんさつしてはっきりさせよう。	 ○　体の部分が違うよ。 
2　体のつくりについて自分のイメージ図と比較しながら観察を行う。 (1) 自分のイメージ図をもとに，頭部，胸部，腹部といった体のつくりや足のつきかたについて観察を行う。 ○　自分の考えを検証するための観察を行うこと ○　観察の結果をわかりやすくノートに記録すること ※　カブトムシやありを飼育箱に用意しておき，必要に応じて虫眼鏡等で観察できるようにしておく。 ※　生きている昆虫であることを確認し，扱い方に配慮を要することを伝えておく。 (2) ありやカブトムシ以外の昆虫の体のつくりについて調べる。 ○　昆虫の体のつくりの共通性に対して気付くこと ※　カブトムシやありの観察が終わった子供からチョウ等を観察させる。 (3) 観察した結果をもとに，昆虫の体のつくりの共通点や差異点について話し合う。 ○　昆虫の体は頭部，胸部，腹部の３つの部分からできていることをとらえること ○　昆虫の足は胸部から３対出ていることをとらえること ※　子供が描いたイメージ図と比較しやすいように，絵図にまとめていくようにする。	○　足のつきかたが違うよ。 ○　昆虫の体をつくっている部分はいくつに分かれるのだろう。 ○　足のつきかたはどのようになっているのだろう。 ○　体のつくりは昆虫によって違うかもしれないよ。 ○　何種類かの昆虫を調べてみるとはっきりするはずだよ。 ○　カブトムシの体のつくりもありと同じようになっているよ。 ○　チョウは羽があるけれど，体の部分や足のつきかたは似ているね。  ○　どの昆虫も，体が３つの部分からできているよ。 ○　足は胸から出ているね。 ○　昆虫は，体のつくりに共通するところがあるといえるよ。
3　カブトムシの幼虫も昆虫の特徴が見られるか観察を行い，昆虫の体のつくりについてまとめる。 ○　成虫の体のつくりから得られた考えを幼虫に適用すること ※　カブトムシの幼虫を飼育箱に用意しておき，実際に手にとって観察できるようにしておく。 ※　体のつくりについては色の違いなどから判断するように促していく。	○　幼虫の体のつくりも成虫と同じようになっているのかな。 ○　見かけは違うけれど，よく見ると幼虫の体も成虫と同じようになっているといえるね。

場所のよさから材料を選択し組み合わせ方を工夫する図画工作科学習を

第3学年2・3組　図画工作科学習指導案

指導者　　北　田　尚　雄

題材名　つくろう！教室の中のふしぎなせかい

指　導　観

○　本題材は，机の下や棚の中など普段気にかけて見ないような空間と五感を通して出合い，その場所の特徴から，ホイルチューブや透明カップ，球形スチロールなどの材料を組み合わせ，その形や色のおもしろさから，発想を広げ，自分なりの不思議な空間をつくりだしていくことがねらいである。具体的には，①普段気を付けて見ようとはしない机の下や棚の中などをいろいろな角度から見つめたり，材料を組み合わせてみながら，自分のつくりたいものを発想し，楽しく造形活動すること，②ホイルチューブや透明カップと机の下や棚の中，一つの空間をつくることができる場所との組み合わせ方を工夫し，できた形や色から自分なりの表現内容を発想すること。③自分の求めに応じて，材料を分解・再構成したり，材料や用具を選択し活用したりすること，④自分や友達の表現のよさに気付き，お互いに表現の参考にしていくことである。

○　本学級の子供たちは，これまで，場所と材料を生かした造形遊びでは，場所の広さを生かして，カラフルな紙コップを切ったり，つないだり，ならべたりしながらその形や色の変化から発想を広げ楽しく造形活動する経験をしている。しかし，場所を変化させたり，自ら空間をつくっていったりという表現活動までには至っていない。そこで中学年の場所を生かした造形遊びにおいて，様々な材料と場所の組み合わせから，自分なりの意味のある空間をつくり出すことは，子供たちの創造性を培う上で価値があると考える。

○　本題材の指導においては，大きく３つの段階で展開する。まず「つかむ段階」では，机の下や棚の中などの空間に目を向けさせるために，教室の中にある不思議さを感じさせる場所を探す設定をする。そこで，見つけた空間の特徴について見つめ，ふしぎな場所をつくっていくための材料について話し合う交流を設定する。次に「生かす段階」では，自分が選んだ場所に，自分が収集した，また提供された材料から選択し，形や色のおもしろさを工夫しながら場所と組み合わせていく。自分の表現をふり返ることで新たな発想を促したい。最後に「高める段階」では，できた空間のよさから，新たな表現を発想させるために，付加材料を提供し，自分たちの空間がさらにおもしろくなるようにしていきたい。

目　　標

1　机の下や棚の中などの空間の特徴から，材料を選択・活用したり，自分の求めに応じて用具を活用したりすることができる。 ------→ 表し方を発想したり，工夫したりする創造性

2　場所と材料の組み合わせのよさに気付きながら，自分や友達のよさに気付いたりしながら楽しく造形活動することができる。 ------→ 自ら求め表現する主体性 / ------→ 自他のよさに気付く社会性

計　　画　（約８時間）

段階	第１次　つかむ段階（２時間）	第２次　生かす段階（４時間）	第３次　高める段階（２時間）
活動と内容	1　場所をいろいろな角度から見つめその特徴をつかむとともに，使いたい材料について話し合う。 (1) 教室の中の不思議な世界を探しながら場所の特徴をつかむ。　① ○　場所のおもしろさに気付くこと (2) 場所の特徴から，ふしぎな世界をつくるのに使いたい材料について話し合う。　① ○　場所の特徴から，材料を選択すること	2　自分が選んだふしぎな場所に形や色のおもしろさを生かして材料で空間を形づくる。 (1) 材料と場所を組み合わせ，空間を形づくる。　(本時２／２)② ○　材料と場所の組み合わせのよさを生かして，形の構成をすること (2) 組み合わせのおもしろさについて友達と交流し，新たな発想からさらに表現する。　② ○　表現のよさから発想すること	3　自分の表現内容から，付加表現をしていく。 (1) 空間がもっとふしぎな感じになるように新たな材料で表現する。　① ○　自分の求めに応じて材料を選択活用すること (2) できた作品を，友達に紹介する。　① ○　自分や友達の作品のよさに気付くこと
支援	※　場所の特徴をつかむストーリーにもとづいた遊びの設定 ※　自分の空間をつくっていくことのできる材料の提案や話し合いの設定	※　場所との組み合わせで調和や対比が生まれる多様な材料の提供 ※　多様な組み合わせの方法を発想するためのヒント資料の提示	※　求めに応じた付加材料や用具の提供 ※　表現の達成感をもつための交流活動の設定

本時の目標

1　机の下や棚の中などの不思議な感じの場所のよさを生かして，ホイルチューブや透明カップ，球形スチロールなどの，材料の組み合わせを工夫しながら，自分なりのふしぎな空間をつくることができる。

2　自分なりの表現方法を見つけ，その求めに応じて，材料を分解したり，構成したり，場所と組み合わせたりしながら，楽しく造形活動することができる。

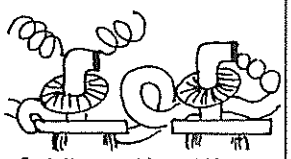
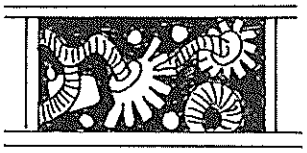
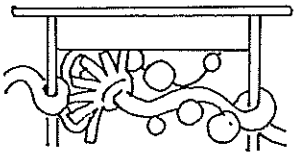
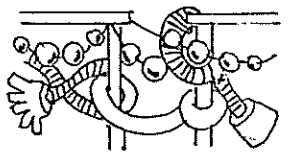
本時の主張点

本時指導にあたっては，前時までに，場所のよさから選択した材料や，場所との組み合わせ方についての交流活動を設定し，自分や友達の表現のよさから新たな発想をし，材料や組み合わせ方を工夫しながらさらに空間を形づくっていくようにする。そして，できた空間の形について，自分なりの題名をつけて，表現内容を考え，その内容に合わせた新たな表現を発想させていく。

準　　備

ホイルチューブ，透明カップ，球形スチロール，
万能はさみ，ペンチ，針金，制作ファイル，デジタルカメラ

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　前時までの活動で，自分が見つけたふしぎな場所と，その場所に合った材料の組み合わせ方について話し合い，学習のめあてを確認する。 ○　前時までの追究の想起と，本時学習のめあての把握をすること ・自分が選んだ場所のよさから選んだ材料や，提案されたホイルチューブや透明カップ，球形スチロールと場所との組み合わせのおもしろさや，組み合わせてできた空間のおもしろさについて交流する。 （めあて）　自分がえらんだ場所と，いろいろなざいりょうの組み合わせ方をくふうして，ふしぎな空間をつくろう。 ※　友達の表現のおもしろさについても，交流させることで，今後の自分の表現の参考にできるようにする。	○　前の時間は，机の下や棚の中などふしぎな世界を探しながら，仕切られた空間や暗い感じや，なにかいそうな感じの特徴を見つけたぞ。 ○　暗くてなにかいそうな机の下に，材料を組み合わせるといつもの場所とは違うふしぎな空間ができそう。 ○　先生が提案したホイルチューブや透明カップ，球形のスチロールを組み合わせてみても，ふしぎな世界ができそうだよ。
【子供に提供する材料】 ・ホイルチューブ ・透明カップ ・球形スチロール ・ビニールチューブ ・カラーアルミ ・アルミ皿 ・スチロール描画材	
2　選んだ材料と場所を組み合わせて，自分のふしぎな空間を形づくっていく。 (1) 場所のよさに合わせて材料を分解し場所に再構成しながら，空間を形づくる。 ○　場所のよさを生かし，材料との組み合わせ，自分なりの空間を構成していくこと ※　材料と場所の組み合わせについて，多様な組み合わせができるように，様々な材料の提供	○　ぼくは，机の柱に，ホイルチューブを巻き付けたり，球形スチロールをつるしたりしてみよう。 ○　わたしは，球形スチロールに，描画材で色をつけてカラフルな世界をつくっていこう。 ○　大きな机の下に，ホイルチューブや透明カップを組み合わせていくとなんだか宇宙空間みたい。
【予想される子供たちの活動】	
 【電動のこぎりが並んでいる場所に色々なチューブをまきつけていこう】	 【棚のなかにチューブを巻き付けたり，カップを組み合わせると宇宙みたいだ】
 【材料に色をつけていくと暗い机の下がカラフルでおもしろい空間にかわった】	 【机の下と机の下を，ビニルチューブやホイルチューブでつなげよう】
(2) 見つけたおもしろい表現方法について話し合い，自分や友達の表現のよさから，新たな方法を発想し，さらに表現していく。 ○　自分や友達の活動のよさに気付き新たな表現方法の発想をすること ※　選んだ材料のおもしろさや色や形のおもしろさを観点に交流させる。	○　ぼくも，○○くんみたいに，色セロハンやビニルチューブをつかってもっとふしぎで，カラフルな世界をつくっていきたいな。 ○　友達の場所と材料をつかってつなげていくと，もっとおもしろい大きな不思議ワールドができそうだ。
3　本時の活動を振り返り，次の活動の課題について話し合う。 ○　これまでの活動や表現物のよさを見つけ，表現内容を吟味するとともに，これからの活動の見通しをもつこと ※　自分の作品をデジタルカメラで撮影し，制作の記録をとらせる。	○　ぼくの作品は，このアングルからデジタルカメラでとっていこう。

自ら事例を補いながら，情報を広げる読書力を高める国語科学習

第4学年1組　国語科学習指導案

指導者　平島健二

単元　生き物のふしぎを読み取ろう!「ヤドカリとイソギンチャク」

指導観

○　本単元は，「ヤドカリとイソギンチャク」の秘密を読み深めていく活動を通して，段落相互の関係を読み取るとともに，課題を発展させながら第二教材を通して，考えを書きまとめていくことをねらっている。具体的には，①共通教材の段落相互の関係を考えて書かれている事柄を正しく読み取ること，②共通教材を通して発展課題をもつこと，③発展課題を解決するために第二教材を選択し，ヤドカリとイソギンチャクについて興味をもって読むこと，④第二教材から情報を読み取り，関心のある事柄をくわしくすること，⑤ヤドカリとイソギンチャクの共生について感想を深めることが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，「段落」の存在と形式・意味を知り，まとまりに気を付けて書かれている内容を読み取ることができるようになってきている。また，あることばに注目してそこに書かれている内容を正確に読む読み方を学んできている。しかし，段落が結びついて一つの文章を作り上げていることや自分の関心点を中心に文章をより豊かにとらえ直し，感想を深めていくような読み方はまだできていない。そこで，文章にかかわらせながら疑問を生み出し解決するという読み方で段落相互の関係を明らかにさせたい。さらに，課題に応じて必要な情報を効果的に判断・選択し文章の内容をくわしくしながら感想を深めていくような理解・表現の力が高まるようにしていきたい。

○　本単元の指導にあたっては，共通教材の文章の中心をとらえ，第二教材を通して感想を豊かにすることができるようにしたい。つかむ段階では，題名とまとめの文から「ヤドカリとイソギンチャクの利益は，釣り合った助け合いになっているのだろうか」という読書課題をもたせる。深める段階では，段落相互の関係を明らかにしながら助け合いを読み深める。そして題名の「ヤドカリとイソギンチャク」に返り，ソメンヤドカリとベニヒモイソギンチャク以外の関係ではどうか予想させたり，別の文章に出合わせたりして課題を発展させる。広げる段階では，他のヤドカリとイソギンチャクの関係を百科事典など文種を広げて追究し，感想を深め，読みを評価し充実感を味わわせていきたい。

目　標

1　「ヤドカリとイソギンチャク」を通して段落相互の関係を考えて，書かれている事柄を正しく読み取った上で第二教材を選択し，情報を集め，自分の考えをつくりながら感想を深めることができる。（創造性）

2　「ヤドカリとイソギンチャク」を読み，事例を正しく知ろうとする課題から事例をくわしくしていく課題へ発展させ，第二教材を通してもった自分の考えを表現することができる。（主体性・社会性）

計　画　（約１０時間）

段階	第１次　つかむ段階（2時間）	第２次　深める段階（４時間）	第３次　広げる段階（４時間）
活動と内容	1　題名から疑問をもち，通読して読書課題をもつ。 (1) 題名から疑問をもち，通読して感想をもつ。① ○　助け合いについての感想をもつこと (2) 感想をもとに読書課題をもつ。① ○　本当に釣り合った助け合いになっているのかという課題をもつこと	2　読書課題をもとに段落相互の関係を読み深め，課題を発展する。 (1) ヤドカリの利益とイソギンチャクの利益が釣り合った助け合いになっているのか読み深める。③ ○　お互いに釣り合った助け合いになっていることを読み取ること (2) 両者の助け合いを整理し，課題を発展させる。**本時①** ○　助け合いを整理し，課題を発展させること	3　第二教材を選択し，情報を収集しながら自分の考えを広げる。 (1) 課題に応じて第二教材を選択し，情報を集める。③ ○　課題に応じて文章を選び，課題に対する情報をもつこと (2) 発展課題に対する自分の考えを作り，書きまとめる。① ○　ヤドカリとイソギンチャクについて感想を深めること
支援	※　共通教材との出合わせ方の工夫（疑問→通読→課題） ※　一人一人の感想を大事にした話し合い	※　段落のつながりに気づかせる学習ノートの工夫 ※　疑問を蓄積させるカード化 ※　ズレを起こさせる補助教材の提示	※　読み方の手引きの準備（第二教材の選択方法，収集の方法） ※　第二教材を選択しやすいような図書選択コーナーの設置

本時の目標

1　読書課題の読み取りを通して，ヤドカリとイソギンチャクの共生の関係を段落相互の関係を明らかにしながらまとめることができる。

2　題名に返ったり，他の文章に出合ったりすることを通して，「ヤドカリとイソギンチャク」という文章を豊かにしていく発展課題をもつことができる。

本時の主張点

本時指導にあたっては，段落相互の関係を明らかにしながらヤドカリとイソギンチャクの共生を読みまとめるとともにさらにその関係を豊かにする課題へと発展させたい。そのために，お互いの利益を読みまとめ，文章の中心をとらえさせる。そして，題名に返って一般化していいのか予想させ，他の助け合いの文章に出合わせ，発展課題へと高めていく。

準　　備

板書用カード，拡大本文，学習ノート，流れ図，

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　読書課題について前時までに読み取ってきたことを話し合い，本時学習のめあてを確かめる。 ○　前時学習の想起と本時学習のめあての把握 （めあて）　読書課題「お互いの利益が釣り合った助け合いになっているのか」をまとめよう。 ※　ヤドカリとイソギンチャクの利益を比べてきたこと，お互いに望んでいっしょになっていたことを想起させる。	○　ヤドカリの利益とイソギンチャクの利益を比べて，釣り合った助け合いになっているか読んできたな。 ○　敵から身を守ってもらったり，えさをとる助けをしてもらったりお互いに助け合っていたな。 ○　ヤドカリが移すとき，イソギンチャクも気持ちよさそうで，はりもださないで，助け合っていたな。
2　お互いの利益を整理し命にかかわるという意味で釣り合った助け合いになっていることをとらえるとともに題名に返り，読書課題から発展課題へ高める。 (1) お互いの利益を読み取り，助け合いの意味を話し合う。 ○　ヤドカリとイソギンチャクの助け合いを整理し，釣り合った助け合いになっていることを読みまとめること ※　釣り合った助け合いであることが段落相互の関係からわかるような図化をさせる。 (2) 題名「ヤドカリとイソギンチャク」に返って，他のヤドカリとイソギンチャクでも同じことがいえるのか話し合う。 ○　ソメンヤドカリとベニヒモイソギンチャクの一例ということから，その他の「ヤドカリとイソギンチャク」にもいえるのだろうかという課題へ発展させること ※　題名に返って話し合わせたり，他のヤドカリとイソギンチャクに書かれた文章を提示したりする。	○　一つ目のまとまりにヤドカリの利益があって，三つ目のまとまりにイソギンチャクの利益があったな。 ○　それをつなぐお互いの助け合いを書いてあるのが二のまとまりだな。 ○　どちらも命にかかわることで助け合っているぞ。 ○　他のヤドカリやイソギンチャクも助け合っているのかな。 ○　他の種類のヤドカリやイソギンチャクでも色や見かけは違っても，助け合いは同じじゃないかな。 ○　助け合いの仕方が違うのがいるのか。他にはないのかな。
読書課題「ヤドカリとイソギンチャクの助け合いは釣り合っているか」 ①ヤドカリがイソギンチャクをつけるのはなぜか。 ②敵から身を守るため（ソメンヤドカリ） ③イソギンチャクも気持ちよさそうに（お互いに）＝命にかかわる ④えさをとる機会が増える（ベニヒモイソギンチャク） ⑤ヤドカリとイソギンチャクは助け合って生きている。 題名に返って 「ヤドカリとイソギンチャク」 ヤドカリのすみかを作り出してしまうキンカライソギンチャクを書いた文章 ＜発展課題＞　他の助け合い方をしているヤドカリやイソギンチャクはもういないのだろうか。	
3　発展課題を解決できそうな文章があることを知り，解決への見通しをもつ。 ○　発展課題を解決できそうな文章を知り，解決への意欲を高めること ※　第二教材のブックリストを提示したり，百科事典など発展課題が解決できそうな図書を考えさせたりする。 ※　図書館や家にある本を探してみるように促す。	○　他のヤドカリやイソギンチャクも調べてみたいな。 ○　他の本や百科事典などで調べられそうだぞ。 ○　図書館でいろいろな本を探して，調べてみたいな。

他地域との関係，海水淡水化，節水運動から水量確保を見つめ直す社会科学習

第4学年2組　社会科学習指導案

指導者　藤野俊明

小単元　これからの福岡市の水－節水型都市をめざして－

指導観

○　本小単元は，歴史的・慢性的に水不足に悩まされてきている福岡市の水量確保の取り組みやこれからの水に対する取り組みについて調べることを通して，健康な市民生活を維持・発展のための計画的・組織的，協力的な取り組みについて考えることがねらいである。具体的には①水資源の確保のための施設や節水運動の促進，安全な上水道の仕組みについて主体的に調べること，②これからの福岡市の上水道の取り組みについて，安全性や味といった側面から見学調査を通して調べること，③節水型都市福岡市の機能を維持発展していく方法を自分の生活と結びつけて考えることが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，水が生命の維持に大切であることを日常生活の中で感じ取ってきている。しかし，福岡市が節水型都市確立のために様々な努力を行い，自分たちの生活がその上に成り立っていることには気付いていない。また，社会的事象との出合いで生じた問題を社会的事象にかかわる人々の営みから調べ，人々の工夫や努力について話し合うことを通して，これからの社会のあり方を判断するようになってきている。そこで，節水型都市福岡確立にかかわる人々の取り組みから自分たちの健康な生活が守られていることを判断し，これからの生活に生かす態度を育てていきたい。

○　本小単元の指導にあたっては，福岡市の水源確保の取り組みを他地域との関係や節水運動，淡水化という側面から調べて，これからの生活についての役割を考えさせ，生活へと結びつけたい。そのためにまず，生活と水とのかかわりを調べさせる。次に節水型都市福岡確立までの経緯や取り組みについて調べさせ，これからの水量確保について考えさせる。そして水道局の取り組みについて，他地域との関係や節水運動，淡水化という側面からとらえさせていく。さらに，これからの水確保で大切にしたいことを話し合わせ，他地域とのつながりや節水運動，淡水化の側面から話し合わせる。最後に，水資源確保のための自分の役割について話し合わせ，生活へと結びつけていく。

目　標

1　福岡市が我が国でも代表的な節水型都市になっていることを水不足の歴史や現在の取り組みから気付き，豊富な水量確保のために福岡市水道局の人々が計画的・組織的に努力していることをとらえるとともに，これからの取り組みを他地域との関係，節水運動，淡水化の側面から考えることができる。　（主体性・創造性）

2　豊富な水量の確保のための人々の取り組みや工夫について，他地域との関係，節水運動，淡水化の側面から調べることを通して，節水型都市福岡市の特色を伸ばしていこうとすることができる。　（主体性・社会性）

計　画　（約１４時間）

階	第１次　みいだす段階（７時間）	第２次　さぐる段階（５時間）	第３次　いかす段階（２時間）
活動と内容	1　福岡市の水源確保のための取り組みについて調べ，これからの水源確保について考える見通しをもつ。 (1) 家庭や学校の使用量から上水道の仕組みを調べる。　⑤ ○　生活から社会的事象との出合い (2) 福岡市の水不足の歴史と対策について調べ，今後の水源確保に向けての観点を見出す。　② ○　節水型都市としての特徴と経緯今後に向けての観点を見出すこと	2　福岡市の水源確保の取り組みを調べ，今後の方向性について考える。 (1) 水源確保のための取り組みを調べる。　④ ○　節水運動や海水淡水化の取り組みを調べること (2) これからの福岡市の水源確保の方法について長期的展望からＧＴとともに話し合う。　本時① ○　他地域との関係，節水，淡水化の側面から検討すること	3　これからの水資源のために自分たちでできることを発信する。 (1) 水資源へのかかわり方について話し合う。　① ○　節水運動や他地域との連携，施設の充実の検討 (2) 自分の行動計画や啓発物を作成し，発信する② ○　自分の生活の更新と学習の有用感を味わうこと
支援	※　家庭や学校での使用量調べ ※　ダムや浄水場の調査や水質実験 ※　水不足の様子についての聞き取り ※　平成22年度までの計画の提示	※　節水運動に携わるＧＴの招聘 ※　淡水化事業について話すＧＴ ※　これからの水源確保をＧＴとともに話し合う場の設定	※　福岡市の啓発冊子などの資料の提示 ※　行動の計画や発信内容を評価するＧＴ

本時の目標

1　福岡市のこれからの水量確保を他地域との関係，節水運動，淡水化という側面から話し合うことを通して，今後も計画的協力的な取り組みが必要であることをとらえることができる。

2　これからの福岡市の水量について見学や聞き取りをしたことをもとに，友達やＧＴと話し合ったりすることができる。

本時の主張点

本時指導にあたっては，節水型都市としてのよさを生かし，これからの福岡市の水量の確保について，他地域との関係，節水運動，淡水化の側面から話し合う活動を設定する。そこで子供たちはこれからの水量確保についても協力的な活動や他地域とのつながりによって効果を高めることができることを生活とかかわらせて考え，これからの水づくりについて自分にできそうな役割を見出すことができる。

準　　備

福岡市の水道計画の一覧，学習プリント，流れ図

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　前時までの学習を振り返り，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　前時学習の想起とこれからの福岡市の水資源について話し合うめあての確認 ・　福岡市は慢性的に歴史的に水の不足に悩まされている。 ・　人々は節水型都市確立のため計画的に努力を続けている。 （めあて）　これからも福岡市の水が安定したものになるためには，どんなことをすればいいのかを話し合おう。 ※　流れ図から前時までの学習を想起させ，本時学習のめあてをとらえさせる。 2　節水型都市福岡市の水量確保について話し合う。 (1) これからの福岡市の水量確保について，他地域との関係，節水運動，淡水化事業の側面から話し合う。 ○　これからの福岡市の水量確保の方法について，他地域との関係，節水運動，淡水化事業の側面から検討し合うこと	○　福岡市は地形上，気象上の理由から水が十分に確保できない。 ○　福岡市は何度も水不足に悩まされているので節水型都市として施設を充実させたり，市民運動を展開したりしてきた。 ○　市民の協力も得られ，節水運動も浸透してきた。 ○　平成２２年度までの水量確保についての見通しは立ってきたが，最近の小雨傾向を見ると安心できない。 ○　これからも水の確保を考えていく必要がある。 ○　筑後地方からの導水を増やせばいい。１日２３万㎥を増やせば安定供給になる。 ○　節水運動を充実させればいい。日常の蛇口を締めたり，管理システムを高めるといい。節水運動は簡単だし，すぐにでも修理を行って水漏れ率が減ってきている。 ○　海水の淡水化を５万㎥からあげれば安定供給になる。海水淡水化は天気に左右されず，安定供給が可能だから，もっと行うべきだ。 ○　福岡市だけのことを考えていては他地域とのズレが生じる。福岡市独自の方法を考えないといけない。 ○　洲さんは計画的に水不足のおそれをなくすことが先決といった。そのためにも自分が使う水だから自分が大切にしないといけない。１日に８リットル以上の節水を心がけないといけない。 ○　節水運動に協力したり，緑のダムによる自然での水の確保の必要性ををもっと広げたりしよう。

側面	方　法	根拠となる事実
他地域との関係	筑後地方からの水量を増やす	筑後川からの139800㎥ 甘水からの93500㎥
節水運動の促進	節水を一層呼びかける 管理システムの向上	日常点検の強化 水管理センターでの管理
淡水化事業	海水の淡水化量を増やす	50000㎥の淡水化量の増加 13000㎥をもっと増やす

※　代表児童の考えを資料をもとに話し合わせ，それぞれの取り組みの効果について発表できるようにするとともに，今後の方策についての実現性について話し合わせる。 (2) 福岡市水道局の洲さんとこれからの水量確保の方向性について話し合う。 ○　水量確保のためには，それぞれの側面を組み合わせることが効果的になることをとらえること ※　将来的には可能な方法も長期的展望に立たなければ効果がないことを評価していただき，福岡市の人口や周辺地区の上水道計画と合わせながら日常的な取り組みの必要性を話していただく。 3　これからの水資源の確保についての見直した考えを話し合う。 ○　日常的継続的な取り組みの効果から生活を見直すこと ・　これから僕たちの生活の中で必要なのは，どれくらい水が必要なのかを考えて，何らかの行動を起こすことなんだ。 ・　毎日の生活の中でどれくらい水を節水できるかを考えながら続けていくことが大切なんだ。

自分たちの学級生活を見直し，さらに向上させようとする学級活動

第５学年１組　学級活動指導案

指導者　　矢　野　俊　次

題　材　**学級成長記録を見直そう！**－年間題材　電子アルバムでつづる学級成長記録－

指　導　観

○　本学級の子供たちは，学級の成長の記録を写真や言葉を使い，電子アルバムとして綴ってきている。これまでに，学級目標や係を話し合ったときの様子，藤見学芸会に向けて練習に取り組んだときの様子，学級の友達と仲良くなる集会活動を自主的に計画・実践した様子などを残してきている。しかし，電子アルバムとして綴っていく際に，どんな活動が成長の証なのかといった問題や，もっと成長の証が分かる電子アルバムの作成の仕方はないかといった問題が生じてきている。そこで，本題材を通して，これまでに作成した学級成長記録を見直し，その内容や方法について再検討し，学級の成長の証をより効果的に残していける電子アルバムに改良していきたい。

○　年間題材「電子アルバムでつづる学級成長記録」は，学級の成長を記録として残していきたいという子供の求めによって立ち上がった題材である。電子アルバムで記録を残すよさとして，文や写真，映像などのマルチメディアを一つの記録媒体に収められ，活動に発展性があること，記録を残すということで教科や総合の学習，学校行事などの活動に対する意欲を高めることが期待できること，電子アルバムづくりを通して，仕事を分担し継続して行っていく大切さや，学級が成長していることの喜びを味わっていくことができる。本題材「学級成長記録を見直そう！」のねらいは，学級成長記録を綴っていく際の問題点を解決することである。具体的には，①どんな活動を学級の成長の証とするか明らかにすること，②より効果的な記録方法を考えること，③記録を残していくための役割分担を再検討し，実践していくことである。

○　本題材の指導においては，学級成長記録の活動を実践していく際に生じている問題を自主的に解決させていきたい。そのために，つくる段階では，問題を集約し，全体で話し合う事柄を精選し議題として提案させていく。決める段階では，①「どんな活動が学級成長の成長の証なのか」，②「成長の証をより分かりやすく残していく方法」について話し合っていく。その際には，問題を焦点化するための助言や，成長の証としてのモデルを提示する。行う段階では，話合いによって決定した内容や方法に従って，分担の仕方を再検討して責任もって活動を継続させていく。その際には，学級成長記録を綴る活動自体も，学級が成長している証であることを賞賛していく。

目　　標

1　学級成長記録を残す活動の過程で生じた問題を自分たちの手で解決し，活動目標の達成に向けて，役割を分担し協力して実践していくことができる。 --> 自分の役割を責任もって行おうとする主体性

2　学級が成長している姿を見直すとともに，その姿を記録していく効果的な方法や分担の仕方を話し合って決めることができる。 --> 活動の仕方を検討する創造性 / --> 友達とよさを認め合う社会性

計　　画　（約２時間＋課外）

年間題材「電子アルバムでつづる学級成長記録」

１学期（学級の成長とは何か）	２学期（成長のための活動を）	３学期（電子アルバム発表会）

段階	第１次　つくる段階（事前）	第２次　決める段階（２時間）	第３次　行う段階(事後)
活動と内容	1　活動の問題を集約し，議題として提案する。 (1) 成長記録を綴っていく際の問題を集約する。 ○　問題の把握 (2) 問題を精選し全体で話し合う議題を提案する。 ○　議題の選定と承認	2　学級の成長を電子アルバムで綴っていく際の問題を解決する話合いをする。 (1) 成長記録を見直し，問題の解決の方策を話し合う。　(本時)① ○　学級の成長を確かめ，問題の解決策を考えること (2) 役割分担を再検討する。　① ○　分担の仕方を再検討し決定すること	3　改良した方法や分担に従って，学級成長記録を継続して実践していく。 ○　自分の役割を責任もって果たすこと ○　友達や学級のよさを発見し，学級の成長を確かめていくこと
支援	※　問題を集約する，議題ポストの活用	※　問題を焦点化する提案 ※　成長を記録する方法のモデルの提示	※　記録を発表する場の設定 ※　新たに生じる問題の解決

本時の目標

1　友達の意見を共感的に受け入れながら，自分の考えを積極的に述べたり，自分の意思を明らかにしたりして話合いに参加することができる。

2　４月からつづってきた電子アルバムを振り返り，そのよさを確かめるとともに，学級の成長の証とは何なのかを見つめ，その証がもっとよく分かる電子アルバムにするにはどうしたらよいか考えることができる。

本時の主張点

本時指導にあたっては，４月からつづってきた電子アルバムを振り返り，これまでにつくった電子アルバムのよさを実感させる。また，電子アルバムをもとに学級の成長の証とは何かをみつめ，その成長の証を電子アルバムの中に残していく方法を考えさせていく。このことで，自分たちの活動を見直し，活動を行う際の視点をとらえることができる。

準　備

パソコン，プロジェクター，学級会ノートなど

展　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　学級成長記録の活動を進めていく上で，前時に明らかになった問題について話し合い，本時の議題について確認する。 ○　前時に明らかになった問題の想起と本時の議題の確認 ・成長の証を本当に残せているのだろうか。 （議題）　電子アルバムを見直そう。 （話し合いの進め方） ①これまでつづった電子アルバムを振り返り，よさと問題点を明らかにする。 ②今後の学級成長記録の残し方について検討する。 ※　事前に，学級会の議題や進め方について計画委員会と教師で打ち合わせを行い，助言を与えておく。	○　ぼくたちは，４月から学級の成長の証を電子アルバムに残していく活動をしている。本当に，成長の証を残せているのだろうか。 ○　今日は，これまでの電子アルバムのよさと問題点について話し合ってもっとよい電子アルバムにしていきたいな。 ○　今の電子アルバムは，いつ，どんな活動をしてきたのかがよく分かるぞ。 ○　顔の表情などもよく分かるから，一生懸命な様子がよく分かる。 ○　何をしたかはよく分かるけど，この電子アルバムでぼくたちの成長の証が残せているのだろうか。 ○　成長の証というのは，どんなことなのかな。 ○　ドッジボールをしたときボールを回したり，声を掛け合って楽しくできたことは成長の証じゃないかな。 ○　藤見学芸会のときも，休み時間なども使って，一生懸命練習してきたことも成長の証だと思うよ。 ○　そうだよね。目標に向かってみんなでがんばってきたことが成長の証だよね。 ○　今の電子アルバムでは，そのような成長の証は十分残せていないね。どうしたらもっと成長の証が電子アルバムに残せるかな。 ○　もっと言葉を増やしてどんなことをがんばってきたのかを電子アルバムの中に書き込んだらどうかな。 ○　これから，たくさん成長の証が残せるように，いろいろな活動にがんばっていくぞ。
2　これまで作成した電子アルバムを振り返り，今後の学級成長記録の残し方について話し合う。 (1)　４月からつづってきた電子アルバムを振り返り，よさと問題点について話し合う。 ○　今の電子アルバムのよさと問題点を明らかにすること （予想されるよさ） ・５年１組が，いつ，どんなことをしてきたのかが分かる。 ・顔の表情などからそのときの様子が分かる。 （予想される問題点） ・ほんとに成長の証が記録として残せているのだろうか。 ※　実際に電子アルバムを使って，どのような電子アルバムができているのか，代表児童が説明を行うようにする。 (2)　よりよい電子アルバムにするために，今後どうしていくのかについて話し合う。 ○　成長の証とは何なのかについて話し合うこと ・声を掛け合ったことや，努力したことが成長の証ではないか。 ○　成長の証を記録する方法について考えること ・成長の証が分かる言葉を入れたらどうだろうか。 ※　これまでの活動の具体的な場面を通して，成長の証とはどんなことなのか見つめさせる。	
3　教師の話を聞き，学級会ノートに本時の反省を書く。 ○　今後の成長の記録を残す活動に意欲をもつこと ※　本時の話合いが，学級目標の達成のための話合いであったことを示唆し，今後の活動への期待を話す。	

歴史や自然とのかかわりをとらえながら，フォルクローレのよさを味わう音楽科学習

第５学年２・３組　音楽科学習指導案

指導者　　原　クミ

題　材　ひびけ！フォルクローレ　－ふしや音色のよさを味わおう－

指導観

○　本題材は，音楽の背景をとらえながら，その音楽を特徴づけている音色の響きのよさやふしの流れのよさを味わい，感じ取った音色のよさやふしの流れの特徴を生かして自分たちの表したい音楽表現をすることをねらっている。教材は，ケーナやサンポーニャなどの笛の音色の響きが特徴的なフォルクローレの中から，「コンドルは飛んでいく」「花祭り」「風とケーナのロマンス」を用いる。主な学習内容は①フォルクローレの背景にある人々の生活や自然の様子などのアンデス文化の様相をとらえながら聴いたり演奏したりして，音色や旋律の流れ，リズムなどの音楽を特徴づけている要素を感じ取ること②旋律楽器やリズム打楽器を用いてフォルクローレの少人数アンサンブルをすること③表したい音楽にするために，強弱や速度，奏法などを工夫して演奏し，音楽のよさを味わうことである。

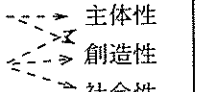
○　本学級の子供たちは，これまでの学習で出合った音楽の人々の生活や祭りなどの音楽の背景をとらえながら，楽しさという点での音楽のよさを味わってきている。また，表したい音楽をつくるために，リズムパターンを組み合わせたり，強弱や速度などの表現の要素を工夫したりする活動を行ってきている。このような学習を通して，リズムやふしの流れのよさを感じ取って表現する音楽的な感受力や構想力を発揮することができるようになってきている。本題材において，音楽とその歴史的な背景や自然とを同時に出合わせることで，音楽のかたちを思い描き，それを実現するために表現する構想力を高め，フォルクローレのふしの流れのよさや音色の響きのよさを感じ取りながら，それを自分たちの表現の工夫へと活用する学びを展開させることができる。これは，文化としての音楽の価値をとらえる創造性を高めることにつながるものである。

○　本題材の指導においては，フォルクローレの背景にある他の文化的要素をとらえながら行う多文化的にアプローチする音楽活動を通して，フォルクローレのよさに気づき，味わう過程を大切にした学びを展開させていきたい。そのために，であう段階ではアンデスでの生活経験をもつ方が演奏する音楽に出合わせたり，民族楽器の演奏体験を位置づけたりする。また，ケーナと他の楽器で演奏する音楽を聴かせ，音色が変化すると音楽の表情が変わることから，自分たちも音色の工夫をしてフォルクローレを演奏したいという思いをもたせる。その思いをふかめる段階において実現させるために，３つの楽曲をアレンジしてつくった教材曲のふし・リズム伴奏・低音伴奏の楽譜を提示し，３つの楽曲から自分が表現したい教材曲を選択したアンサンブルができるようにする。あじわう段階では，自分たちのつくりだした音楽の発表会を開き，つくった音楽のよさや活動に対する満足感を味わわせていきたい。

目　　標

１　アンデスの人々の生活や自然の様子と音楽とを結びつけて，曲想を味わって聴いたり音楽を特徴づけている要素に気をつけて聴いたりして，フォルクローレのよさをとらえる。

２　表したい音楽のかたちを思い描き，自分なりの思いをもって表現するとともに，フォルクローレに対する興味・関心を深めながら，友達とアンサンブルする喜びを味わうことができる。



計　　画　（約８時間）

段階	第１次　であう段階（２時間）	第２次　ふかめる段階（５時間）	第３次あじわう段階(1時間)
活動と内容	１　教材曲を鑑賞する。 (1)　教材曲を聴いたり，ケーナを演奏したりする。① ○　音色のよさを味わうこと (2)　いろいろな笛で演奏する教材曲を鑑賞する。　① ○　音色の違いと音楽の表情の変化を感じ取ること	２　音楽と自然や歴史とのかかわりから表したい音楽のかたちを思い描き，教材曲を演奏する。 (1)　表したい音楽を思い描き，音色を工夫して教材曲をアンサンブルする。（本時4/4）　④ ○　音色のよさを生かして表現すること (2)　繰り返しを工夫してふしや音色の特徴を生かし，自分たちの音楽を完成させる。　① ○　ふしの繰り返しを工夫して表現すること	３　フォルクローレ発表会を開く ○　自分のつくった音楽のよさや活動に対する達成感・成就感を味わい，音楽の価値をとらえること
支援	※　アンデス文化をとらえるためのＧＴの招聘と資料の提示	※　フォルクローレの表情を感受するＧＴの招聘 ※　アレンジした教材曲や教師のモデル提示	※　評価カードの活用 ※　発表の場の設定

本時の目標

1　これまでに自分たちがつくってきた音楽を聴き合い，強弱や速度などを工夫して表現することができる。

2　ＧＴや友達とともに，音楽の表情を確かめ合い，アンサンブルを楽しむことができる。

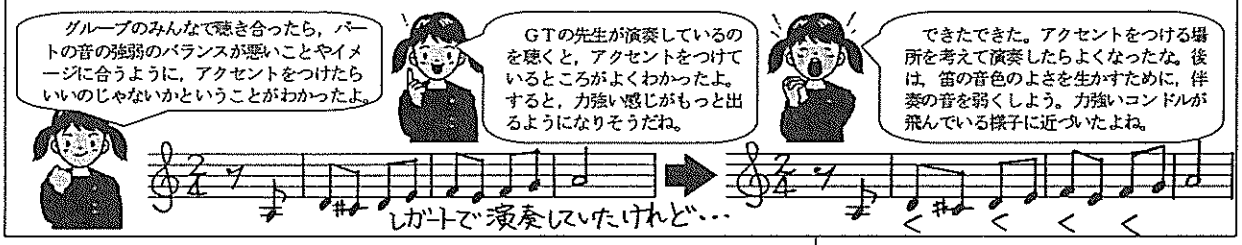
本時の主張点

本時指導にあたっては，前時までに表したい音楽にするために表現してきた音楽が，フォルクローレらしくなっているかどうかを聴き合い，表現を練り上げていくことをねらっている。そのために，ＧＴとともに音楽活動したり，アドバイスを受けたりする活動を中心にし，自分たちのつくった音楽を自己評価することができる活動構成を行う。

準　　備

３つの教材曲の拡大楽譜，アンデスの情景写真，グループ活動のための支援ボード，キーボードなどの旋律楽器や打楽器，学習の流れ図

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　前時までの活動をふり返り，本時学習のめあてをつかむ。 ○　前時学習までの表現の想起と本時学習のめあての把握 （めあて）　表したい音楽になるように，強弱や速度などの演奏の仕方を工夫しよう。 ※　本時学習において，強弱や速度を工夫しようとする見通しをもたせるための２通りのモデル演奏を聴かせる。	○　私たちは，「コンドルは飛んでいく」の演奏をしています。ずいぶん演奏ができるようになってきて嬉しいです。 ○　ＧＴの演奏を聴くと，２回目のはイメージにあっているけれど１回目のはあっていないし，フォルクローレらしくないな。同じ曲なのにな。
2　グループの友達と表現した音楽を聴き合ったり，アンデスでの生活を経験しているＧＴとともに演奏しながら，強弱や速度などの表現の工夫をする。 (1) グループの友達と表現した音楽を聴き合って課題をつかみ，表したいイメージをもとに表現の工夫をする。 ○　ふしの流れや演奏する音色に気をつけて聴き，課題を見いだし，表現を練り上げる視点を明らかにすること ※　自分たちの課題を明確にもつために学習ノートを活用させるとともにグループで十分に聴き合うことができるように活動の場を設定する。 ○　感受力と構想力を発揮してイメージに合う音楽にするために強弱や速度を工夫したり，フォルクローレらしさを感じ取ったりすること ※　各グループの表したい音楽のイメージや支援ボードを提示する。 ※　アドバイスを受けたり，共に演奏する喜びを味わうＧＴを招聘する。	○　そうか，強弱の付け方や速さが違うからだな。私たちのも工夫するともっとよくなりそうだね。 ○　まずは，一度演奏してみよう。 ○　ヒントカードを見ると，フォルクローレらしさを出すには「ズンチャズンチャ」のズンの部分を強くするといいと書いてあるよ。 ○　よくなったね。後は，どうするかな。ＧＴの先生に一緒に演奏してもらおう。きっと何かヒントになるものがわかるかもしれないな。
【予想される音楽活動の流れ】  	
(2) 表現を工夫した音楽を全体で聴き合う。 ○　他のグループがつくった音楽をふしの流れや音色などの構成要素と強弱や速度などの表現要素に気をつけて聴き，高まった表現のよさを感じ取ること ※　前時までの表現をＶＴＲで視聴させ，本時学習の音楽と比較させる。	○　～さんたちのグループは，前の時間と比べると，伴奏の音を小さくして，笛の音色のよさを生かそうとしているね。ふしが目立つからイメージもわかりやすいね。
3　本時学習の感想を出しあい，次時学習について確かめる。 ○　これまでの音楽に比べ，表したい音楽に近づいた喜びを共有し，次時学習へと自己追究への意欲をつなげること ※　ＧＴに感想を聞く場を設定すると共に，最後にＧＴとともに演奏する音楽活動を位置づける。	○　自分たちの演奏もよくなったけど他のグループの人たちの演奏もよくなっていて嬉しいな。ＧＴの先生と一緒に演奏したのも，とてもよかったなと思いました。フォルクローレらしい演奏の仕方もわかりました。

動きと作戦を分析的に探り，動きや作戦を構想する力を高める体育科学習

第6学年1・3組　体育科学習指導案

指導者　岩城一磨

単元　バスケットボールのプレーの秘密を探ろう!

指導観

○　本単元は，子供一人一人が，チームの作戦を成功するための動きを高めたいという目標意識をもち，そのためにバスケットボールの流れのある動きを捉え，もった動きや作戦の課題を，友達と協力して分析的に追究していく活動を通して，より高い動きや作戦へとつくりかえ，生み出すことができるようにすることがねらいである。具体的には，①ゲームを単純化した３オン３を用い，チームの作戦を成功させるための動きの課題をルールや場の工夫から分析的にもつこと，②作戦を成功させるために，タスクゲーム（課題ゲーム）をつくり，練習を繰り返し行うこと，③交流で高まった動きや作戦を相互評価し合うことが主な内容である。

○　本学級の子供たちは，ゲーム場面においては，チーム内で役割分担をし，互いに協力してゲームを進めたり，ルールや作戦，技能についての意見を交流させる姿が見られる。また，パスやドリブルを巧みに使ってボールを運び，シュートを打つことができる子供も数名見られる。基本的なルールや反則については，他のボール運動の経験から，十分な理解ができている。しかし，パスを受けるために位置取りをしてシュートにつなぐという空間的な動きを用いたり，作戦につながったりする動きは十分でない。また，子供たちは，チームの特徴に気付き攻・守を考え工夫することができつつある。そこで，状況に応じた作戦を支える基本的技能についても高めていきたい。

○　本単元の指導においては，５年生の３オン３をもとにチームの作戦を支える動きを高めていく。みいだす段階では，３オン３を行い，作戦を成功させたいという目標意識をもつ，そして，チームで協力する動き（作戦）が得点に結びつくことをＶＴＲを用いてつかみ，動きの課題を作戦づくりに具体的に設定できるようにする。次に，ひろげる段階では，自らタスクゲームをつくることでルールや場を工夫して練習し，チームの作戦にかかわる動きを身に付け高めていく。そのためには，分析表で調べたり，作戦の遂行を作戦ボードで確認しながら動きの視点を空間的に広げることで戦術能力（作戦をつくり出す力）を高めていく。新たな課題が生まれた場合は，再度，追究を繰り返し，チームの作戦を支える空間的な動きの大切さを実感していく。最後にたかめる段階では，チームの作戦とそれに伴う動きを自己・相互評価をさせることで，その高まりを味わわせる。そのためには，「６－１・３バスケットボール大会」を開き，作戦を支える集団の動きを発揮し，分析表によって振り返らせ実感させていく。

目　標

１　コートや人数を制限したゲームでチームの作戦を支える動きの課題を見出し，自ら練習を工夫してゲームに生かすことができる。

２　作戦を支える基本的な集団技能を身に付けながら，友達と協力して，他のチームと得点を争うオールコートのバスケットボールを楽しみ，チームの作戦に生かすことができる。

→　動きの分析から課題設定し

→　作戦・動きを構想する創造性

→　運動の楽しさや喜びを味わおうとする主体性

→　友達と協調する社会性

計　画　（約９時間）

段階	第１次 みいだす段階（２時間）	第２次　ひろげる段階（６時間）	第３次 あじわう段階（１時間）
活動と内容	１　バスケットボールに出合い作戦づくりからチームの動きの課題を把握する。 ○　バスケットの動きの分析的な捉えと作戦・動きづくりの追究課題の把握 ・３オン３を用いての把握	２　作戦を支える動きを高めるためにタスクゲームをつくり課題追究を繰り返す。 ○　チームの空間的な動きの捉えとチームで協力する攻守の動きの高まり (1) タスクゲームを用い空間的な視点を明確にし高める。（本時２／３）③ (2) ゲームで実践的に動きを高める。③	３　作戦や課題とした動きの高まりを実感する６－１・３バスケットボール大会を行う。 ○　作戦の高まりとそれを支える動きの高まりの評価 ・自己・相互評価による総合的評価をし合う
支援	※　課題の把握：場や人数を限定したり，ＶＴＲの集団の動きを比較したりして分析的に動きの課題を把握させる。	※　作戦を支える動きの追究：作戦を成功させるために動きを限定し，タスクゲームを行い，空間的な動きを分析的に解決させる。対抗戦を行い実践的にためす。	※　作戦・動きの評価：バスケットボール大会により，総合的に評価させ，作戦・動きの高まりの実感をさせる。

本時の目標

1　バスケットボールのシュートまでの流れと相手意識から作戦を支える動きを空間的な視点で捉え，自らタスクゲームをつくり，動きを追究していくなかで作戦を構成する力，新たな動きを身に付けることができる。

2　友達と協力してチームの作戦に応じた攻め，守りの動きや場を工夫して練習し，チームの特徴やチームの作戦を生かしてゲームを楽しむことができる。

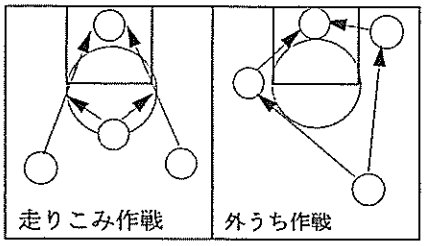
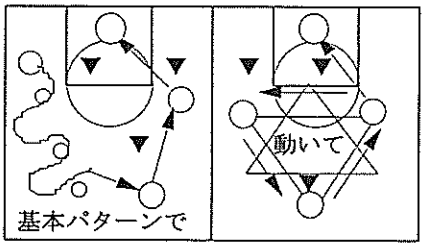
本時の主張点

本時指導にあたっては，分析表のデータをもとにつくり出した作戦や動きを高めるために相手を意識した動きで自らタスクゲームをつくらせていく。そのことで，ゲームを通して作戦を支える動きを空間的視点で高めることの大切さに気付き，チームの作戦をつくりかえていく構想力を身に付け，発揮することができるであろう。

準　　備

ボール，得点板，ストップウォッチ，分析表，作戦表

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　前時までの課題把握をもとに本時の学習について話し合う。 (1) チームの作戦から動きを分析的に追究する学習の流れを把握する。 ○　前時に設定した作戦とシュートまでの空間的な動きの想起 ・ＶＴＲ，分析表，ノートファイルなどによる課題の確認 ※　前時学習の流れ図を提示し，本時の学習での追究内容を把握する。 (2) ためしのゲームを行い，本時学習のめあてをつかむ。 ○　本時追究するバスケットボールのめあての把握 （めあて）チームの作戦が成功するように，練習を工夫し，ゲームでたくさん得点できるようになろう。 **【バスケットボールのルール】** ・シュートが決まった時，エンドラインからスローイン ・ラインから出たら，出たところからスローイン ・得点は，１ゴール２点　・ゲーム時間は，３分間 ※　ＶＴＲの動きや分析表から，得点するための作戦を支えるバスケットボールのフロアを上手に使った空間的な動きの必要性を把握させる。	○　今日は，目標の達成に向けてチームの課題をもとに練習の場を工夫し作戦が成功するようにしよう。 ○　どんな作戦なら得点できてゲームで勝つことができるのかな。 ○　チームの作戦を成功させるためにのどんな動きを高めれば得点できるようになるのかな。 〔作戦の例〕  ○　作戦が成功するようフロアを広く使ったタスクゲームをつくり，繰り返しチームで動きを高めよう。
2　作戦をもとに工夫したコートで練習したり，ゲームでチームプレーを発揮したりするタスクゲームを自らつくり，チームの動きを追究する。 (1) 作戦を支える動きを分析的に捉えながら追究活動を行う。 ○　相手を加えたタスクゲームによる空間的な動きの捉えと動きのデータからの新たな作戦，動きの課題の把握 ※　相手を加えた場合のタスクゲームがつくれるように分析表でのデータ把握を提示し，空間的な動きを分析できるようにする。 (2) 交流タイムでチームの作戦の動きづくりの内容・方法を吟味する。 ○　作戦を支える空間的な動きの課題の把握 ・相手ありのタスクゲームでの攻撃プレーの空間的な気付き ・相手の得点を阻むタスクゲームでの防御プレーの空間的な気付き ・動きを組み合わせ，フロアを活用した流れのある作戦やプレー ※　課題の追究・吟味をすすめるために，タスクゲームのアイデアやチームのプレー分析表，作戦ボードでの交流タイム設定する。 (3) バスケットボールを行い，作戦をためし，動きを評価する。 ○　ゲームによる作戦を支えるチームの動きの課題の明確化 ・兄弟チームで３分間のバスケットボールのゲームを行う。	〔タスクゲームの例〕  ○　友達と分析表を活用してお互いに評価しながら課題を決めよう。 ○　△△チームは，ドリブル，パス，シュートをつないで，フロアを広く使う作戦を考えていたのか。 ○　バスケットボールのプレーの秘密は，シュートの動きの流れやチームで協力して動く作戦にあるのだな。
3　作戦を支えるチームの動きの追究方法をもとに本時学習を振り返る。 ○　作戦やプレーの動きの高まりが身に付く追究方法や方向性の把握 ※　児童の演示による交流をもち，チームの課題解決の意欲をもたせる。	○　もっと練習の場を工夫して，空間的な動きのチームプレーを高め，もっと得点できるようになりたいな。

共通課題で解決したことをもとに個人課題を解決していく家庭科学習

第6学年2組　家庭科学習指導案

指導者　　木　村　真　美

題　材　**和風の朝食にチャレンジしよう**　－私の自慢の健康みそ汁－

指　導　観

○　本題材は，家族に贈る朝食作りの調理学習を続けてきたことで生じてきた，もっと自分ができるメニューを増やしていきたいという求めに応じて，調理の工夫を追究していく家庭科学習である。栄養のバランスを考えたみそ汁の調理を追究する活動を通して，調理操作などの基礎的な技能を身に付け，家族の一員として日常生活に活用できる力を育てることをねらいとしている。具体的には，①だしのとり方，実の切り方や入れ方，みそ汁の味や香りを損なわない扱い方などを調べ，みそ汁の調理ができること，②みそ汁や手作りのよさから友達のみそ汁と比べながら，栄養のバランスや家族の好みを考えたみそ汁を作る方法を見出すことが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，家族の役に立ちたい・楽しませたい・喜ばせたいという思いから，家族に贈るものを作る活動に取り組んできた。家庭生活について見直し，身近な生活の課題を見つけ，その解決をめざして考え工夫する力が育ってきている。しかし，日常生活に必要な基礎的な知識や技能が定着しているわけではない。自分で作ったことに対する自己満足で終わる状況もみられる。家庭実践を目指した調理を工夫する活動を通して，家族の一員としての自覚をもって，自己の学びを見つめる学習を進める力が，より一層高まるようにしていきたい。

○　本題材の指導においては，家族とかかわりながら家族の健康や好みを考えたみそ汁の作り方を追究する。つかむ段階では，多様なみそ汁を比較させる活動を取り入れ，手作りのよさやみそ汁のよさから自分の工夫を考えさせる。その際，家族にみそ汁を作れるようになるための個人の課題を既習と未習の内容を整理していくことで，誰にも共通する課題をつかませる。さぐる段階では，共通課題を解決する調理実習することで，個人課題解決の見通しや自分の課題を見直させる。その際，評価活動を位置付け，自分の技能や解決方法を振り返らせる。つくる段階では，さぐる段階で作成した改善レシピをもとに，家庭で作るみそ汁の試しの調理実習をすることで，個人課題を解決し家庭実践ができるようにする。

目　　標

1　だしのとり方，実の切り方や入れ方，みそ汁の味や香りを損なわない扱い方などを調べたりみそ汁を作ったりしながら，家族のために作るみそ汁を工夫することができる。　→　基礎的な調理の技能を身に付け，生活に生かす工夫を考える創造性

2　みそ汁のよさや手作りのよさが分かり，栄養のバランスや家族の好みを考えたみそ汁をつくることができる。　→　自らの方法を見直す主体性　家庭生活に協力する社会性

計　　画　（約８時間）

段階	第１次　つかむ段階（２時間）	第２次　さぐる段階（３時間）	第３次　つくる段階（３時間）
活動と内容	1　自分のみそ汁作りの課題を考え，共通課題をつかむ。 (1) 家族のためにつくるみそ汁作りについて話し合う。　① ○　課題把握と解決の見通しをもつこと (2) 既習内容と未習内容を整理し，共通課題をつかむ。　① ○　新しい知識を習得すること ・だしのとり方や実の入れ方やみその扱い	2　共通課題を解決するための調理実習をし，解決する方法を話し合う。 (1) だしを取り，みそ汁の味や香りを損なわないようにみそ汁を作る。　② ○　新しい技能を習得すること ・だしのとり方，実やみその入れ方 (2) 家族のためのみそ汁作りの手順を考えて，調理計画を見直す。　本時① ○　習得した技能を活用して，自分が計画した実の入れ方を見直すこと ・実を入れる順序	3　試しの調理実習を行い，家庭実践の計画を立てる。 (1) 共通課題で解決したことをもとに，家庭で作るみそ汁の調理をする。② ○　家庭に合った実の切り方や入れ方ができること (2) みそ汁作りの家庭実践の計画を立てる。　① ○　学習を生かすこと
支援	※　色つき付箋紙の活用 ※　家族への思いが書けるレシピ ※　多様なみそ汁の比較活動	※　手順表の活用 ※　ペア学習による一人一実習 ※　自己評価，相互評価の場の設定	※　課題別学習の場の設定 ※　家庭実践カードの作成 ※　家庭科だよりの発行

本時の目標

1　家族の健康や好みを考えて選択したみそ汁の実の切り方や入れる順序が分かり，自慢のみそ汁の計画を見直すことができる。

2　自分の調理の仕方を振り返りながら，みそ汁作りの改善点を見つけることができる。

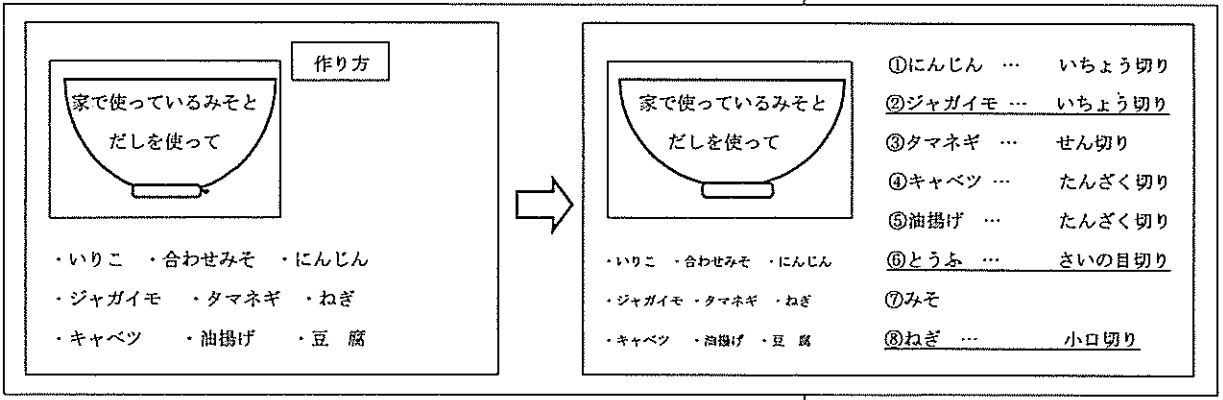
準　　備

みそ汁作りの手順表，レシピカード，チェックカード，流れ図，煮え方の違いの表，ビデオ

本時の主張点

本時指導にあたっては，共通課題で解決したことを振り返ることで，自慢の健康みそ汁の実の切り方や入れる順序の調理計画を見直しレシピをつくることがねらいである。そのために，教師がつくろうとするモデルみそ汁に入れる実の順序を考えたり，付箋に書いた自分が選択したみそ汁の実の順序を入れかえたりする活動を通して，レシピを見直させる。

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　共通課題で解決したみそ汁作りを振り返り，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　だしのとり方やみそ汁の香りや味を損なわない作り方が分かり，家族の健康や好みを考えて選択した実の切り方や入れ方をつかむこと （めあて）　みそ汁に入れる実の切り方や入れる順序を見直して，自慢の健康みそ汁のレシピをつくろう。 ※　ビデオなどで前時までの学習を振り返り，自分のみそ汁の作り方や自慢の健康みそ汁になるための本時のめあてにつなぐ。 共通に解決したみそ汁 ・いりこだしのとり方 ・みそ汁の作り方 ①ジャガイモ（いちょう切り） ②とうふ（さいの目切り） ③溶いたみそを入れる ④ねぎ（小口切り） 2　自慢の健康みそ汁に入れる実の切り方や入れ方を見直して，レシピをつくる。 (1) 共通課題で解決したことをもとに，作ろうとするみそ汁の実を入れる順序について話し合う。 ○　水から入れるもの，沸騰してから入れるもの，みその後に入れるものの順序が分かること ※　モデルみそ汁として教師が考えたみそ汁を提示したり煮え方の違いを比較したりして，実を入れる順序について話し合う場を設定する。 (2) 話し合ったことをもとに，自分が選択したみそ汁の実の切り方や入れる順序を見直して，自慢の健康みそ汁のレシピをつくる。 ○　手順を考えた調理計画を立てること ※　栄養素の働きにより色分けした付箋にみそ汁に入れる実を書かせておき，入れる順序を付箋紙を貼りかえながら見直させていく。	○　私の計画したみそ汁の自慢したいことは，家族の好きな実を入れたり健康を考えて野菜をたっぷりと入れたみそ汁を考えたことです。家族が食べたくなるように見た目の色合いも考えたことです。 ○　この前は，だしのとり方や一人分の量やみそ汁の作り方が分かったので，実を増やしても作れそうだ。 ○　水から入れるものと沸騰してから入れるものとみその後に入れるものがあるから，ジャガイモ，にんじん，タマネギ，キャベツ，とうふ，油あげ，ねぎの順番でいれたらいいな。 ○　ジャガイモとにんじんはいっしょに入れてもいいと思ったけれど，どっちを先に入れたらいいのかな。 ○　同じ切り方で，同じ時間煮てもにんじんの方が固いんだな。そういえば，スープを作ったときににんじんが一番煮えなかったな。 ○　にんじん，ジャガイモ，タマネギ，キャベツ，油あげ，とうふ，みそ，ねぎの順番で入れていこう。
	
3　本時学習の感想を出し合い，次時学習について確かめる。 ○　自分のみそ汁作りへの自信や次時学習への見通しをもつこと ※　数人に発表させ，自分の自慢点や気を付けることを確かめさせる。	○　次の時間には，家族のための健康みそ汁を実を入れる順番に気を付けて作りたい。煮えたか味見をすることも忘れないようにしたい。

言葉を並べて楽しく文づくりをする国語科学習

第3・4学年さくら組　国語科学習指導案

指導者　　原　口　和　美

題材　わくわく　えはがきを　つくろう

指　導　観

○　本学級の子供たちは，３年生男子２名，４年生男子１名，４年生女子２名，計５名で構成されている。子供たちは，日常生活の中で，したことやしたいこと等，２・３語文で自分のことを話すことができる。しかし，使う言葉が限定していたり，文法的に言葉のつなぎ方が違っていたりする。そのため，普段接することのない人との関係においては，自分のことを伝わるように言葉で表現したり，相手の言っている事や状況を正確に理解することが難しかったりする。そこで，伝えたい内容を焦点化することや，主語・述語・修飾語の組み立てを意識した文を表現すること，伝えたい内容をより詳しく表現する言葉を使って文をつくることを身に付けさせることが重要と考える。

○　本題材は，子供たちの学校生活を伝える絵はがきづくりをして，文づくりを楽しむ国語科学習である。言葉カードを並べて文づくりの活動をすることで，文の表現力をつけることをねらいとしている。この学習における具体的な学習内容は，①自分の作りたい場面の絵を選び表現したい内容を決めること，②場面にあう言葉を選ぶこと，③主語・述語・修飾語を考えて正確な文を作ることである。以上のような学習内容を身につけることにより，文法的に正確な文づくりができるようになれば，より多くの人に，より伝わりやすく話せるようになると考える。このことは，子供たちの豊かな言語生活を支えるものとなり，将来の自立した豊かな生活においては，重要であり意義深いと考える。

○　本題材の指導にあたっては，「転出された先生に絵はがきを送ろう」という目的のもと，伝えたい西公園の場面を選び，言葉を並べて文をつくる活動に繰り返し取り組んでいけるようにする。そのために，であう段階では，転出された先生のビデオレターを見て，絵はがきづくりをする活動への意欲と見通しをもたせる。ふかめる段階では，繰り返し絵はがきづくりの活動をする中で，伝えたい場面にあった主語・述語・修飾語を考えた文づくりができるようにしていく。具体的には，まずビデオと写真を見て場面の様子を話し合う。次に，伝えたい場面の写真を各自選び出すことで，伝えたい内容を焦点化させる。そして，その場面にあう言葉カードを選ぶことで，伝えたい内容をより詳しく表現できる言葉を考えさせる。さらに言葉カードを並べて，個に応じて２文節の文から複数の単文づくりに段階的に取り組ませることで，相手に伝わりやすい文の表現を身に付けさせる。いかす段階では，各自の絵はがきを発表し，文づくりの達成感を味わわせる。

目　　標

１　書きたい場面を選び，書く内容を決めることができる。
２　西公園探検で見たこと，聞いたこと，遊んだことを単文で表現できる。
　Ａグループ…主語と述語で構成される３文節の単文を２文使って表現すること
　Ｂグループ…主語と述語で構成される３文節の単文を複数使って表現すること
　Ｃグループ…主語と述語と修飾語で構成される４文節の単文を複数使って表現すること

計　　画　（約５時間）

段階	第１次　であう段階（１時間）	第２次　ふかめる段階（３時間）	第３次　いかす段階（１時間）
活動と内容	１　絵はがきづくりをする見通しをもつ。　①	２　繰り返し文をつくり，絵はがき作りをする。　本時２／３③	３　絵はがきの発表をする。　①
	(1) ビデオレターを見る。	(1) 西公園探検の書きたい場面を選ぶ。	○　西公園探検の様子を表す文を，声に出して表現すること
	○　絵はがきづくりをする意欲・関心をもつこと	○　書く内容を決めること	○　活動に対する達成感や成就感を味わうこと
	(2) 試しの活動をする。	(2) 西公園探検のことを書く。	
	○　活動の見通しをもつこと	○　場面にあった言葉を選ぶこと	
		○　言葉を正しく並べて文をつくること	
支援	※　転出した先生のビデオレターを視聴する場の設定	※　個に応じた文と言葉の選定と支援	※　絵はがきを拡大して見せるための視聴覚機器の準備
	※　試しの活動の場の設定	※　文づくりのヒントとなる個に応じた支援	※　作品に対する賞賛
		※　繰り返し活動に取り組むように，文づくりの難易度を段階的にあげる。	

本時の目標

1　西公園探検で遊んだことを話すことができる。
2　西公園探検の様子を単文で表現することができる。
Aグループ：主語と述語で構成される３文節の単文。Bグループ：主語と述語で構成される３文節の単文を２文。Cグループ：主語と述語と修飾語で構成される４文節の単文を２文。

本時の主張点

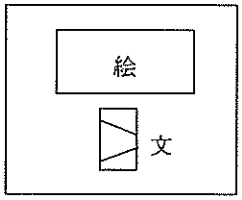
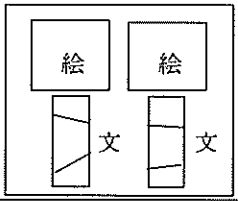
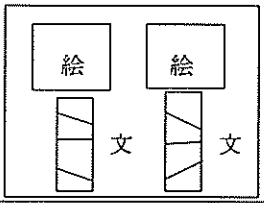
本時指導にあたっては，主語・述語がはっきりした文づくりや，様子がよく伝わるよう修飾語を使った文づくりをさせていくことをねらいとする。絵はがきづくりを西公園で遊んだことに焦点化し，個に応じた言葉の選定とランゲージカードによる支援をして，文づくりに繰り返し取り組ませていく。

準　　備

言葉カード，絵はがきの台紙，場面の写真カード等

展　　開

<table>
<tr><th>活　動　と　内　容</th><th>個の活動を促す支援</th></tr>
<tr><td>1　ビデオを見て，本時学習のめあてを確かめる。
○　西公園探検の遊びの場面を想起すること
○　活動の見通しをもつこと
（めあて）　にしこうえんたんけんで　じぶんや　ともだちが
あそんだことを　えはがきにしよう

2　西公園探検の遊びの場面の絵はがきづくりをする。
(1)　伝えたい場面の写真や人物を選んではり，様子を話す。</td><td rowspan="3">1　活動への意欲や見通しをもたせる支援
○　西公園探検の遊びの場面のビデオを提示（一時停止させ場面確認）
○　遊びを焦点化した写真の提示
2　個に応じた文づくりをする支援
Aグループ
○　場面カードには，ランゲージカードをつけ，音声化した文をヒントとして聞くことができるようにする。
○　主語が誰か意識づけるため，場面カードに人物のカードをはらせる。
○　言葉カードの読みが不確実のときは，同じ言葉を記入したランゲージカードを聞いて，読みの確認ができるようにする。
Bグループ
○　主語が誰か意識づけるため，場面カードに人物のカードをはらせる。
○　言葉カードの読みが不確実のときは，同じ言葉を記入したランゲージカードを聞いて，読みの確認ができるようにする。
Cグループ
○　主語が誰か意識づけたり，詳しく修飾語で説明させるため，「だれが」「どんな」等の質問をする。
※　言葉カードや絵カードは，複数枚用意して，何度も文を作ることができるようにする。また，一場面の絵に対して，いろいろな表現の文ができるよう，単語カードを用意する。
※　言葉カードは正しく並べないと完成しないように切り込みの入れ方を工夫する。
3　学習の達成感を味わわせる支援
○　作品の発表の場の設定
○　実物投影機で拡大して作品提示</td></tr>
<tr><td>
<table>
<tr><th>Aグループ</th><th>Bグループ</th><th>Cグループ</th></tr>
<tr><td>○　ランゲージカードの音声を手がかりに，様子を言葉で表現すること</td><td>○　ランゲージカードの音声を手がかりに，に，２つの場面の様子を，言葉で表現すること</td><td>○　ランゲージカードの音声を手がかりに，修飾語を使って様子を言葉で表現すること</td></tr>
</table>
(2)　伝えたい場面の様子を文にする。
<table>
<tr><th>Aグループ</th><th>Bグループ</th><th>Cグループ</th></tr>
<tr><td>○　自分や友だちの遊んだことを３文節の文であらわすこと
○　「誰が」「何を」「どうした」とそれぞれの言葉カードのかごから言葉を選び出し，主語・述語を明確にして文を作ること
・○○くんはブランコをしました。
 
</td><td>○　自分や友だちのことを３文節の文を２文であらわすこと
○　「誰が」「何を」「どうした」とそれぞれの言葉カードのかごから言葉を選び出し，主語・述語を明確にして文を作ること
・ぼくはブランコをしました。○○くんは滑り台をしました。
 
</td><td>○　自分や友だちのしたことを４文節の文を２文であらわすこと
○　「誰が」「どんな」「何を」「どうした」とそれぞれの言葉カードのかごから言葉を選び，主語・述語・修飾語を明確にして文を作ること
・私は長い滑り台を滑りました。○○君はタイヤのブランコをしました。
 
</td></tr>
</table>
3　自分の作った絵はがき発表する。
○　文づくりの達成感を味わうこと
○　次時の文づくりの期待をもつこと</td></tr>
</table>

身近な自然事象にかかわるための課題を解決する生活単元学習

第5・6学年　梅組　生活単元学習指導案

指導者　　谷　崎　和一郎

単　元　なかよし　すいぞくかんをつくろう

指　導　観

○　本校特殊学級の子供たちは，精神年齢３歳程度から８歳程度の５年生３名と６年生３名の計６名で構成されている。子供たちは，これまでに，花やさつまいもの苗を植え，主に水やりや草取りなどをしながら育ててきている。また，中庭のハーブガーデンでハーブの香りを楽しむなど，身近な自然とかかわってきている。その中で，苗を慎重に取り扱ったり，土や葉っぱの様子を見て水やりが必要なことに気づいたりするなど，植物を育てるために必要な知識・技能を身に付けてきている。水族館については，校外学習や家族との外出で見学した経験をもっており，水の生き物への興味・関心が高い。さらに，友達と活動する中で，共にやり遂げる喜びも感じてきている。

○　本単元のねらいは，校外学習で行ったマリンワールド（福岡市の施設）を振り返り，カエルや金魚などの身近な生き物の飼育活動に取り組み，みんなが楽しめる「なかよし　すいぞくかん」を作ることである。水族館作りに取り組む活動を通して，飼育活動や看板などの制作活動，生き物を紹介する新聞作りなどの活動に取り組ませていきたい。主な学習内容は，①水族館作りへの目的意識をもち，見通しをもって課題解決に取り組むこと，②カエルやサワガニ，金魚の飼育の仕方を身に付けること，③板材や発砲スチロールなどを切ったり貼ったりすること，④友達の促しに応じたり，友達に教えたりしながら活動すること，⑤自分たちが作った水族館に友達を招待して，目的達成の満足感や成就感を味わうこと，などである。

○　本単元の指導においては，子供たちが目的意識を共有して活動に取り組み，目的達成の喜びを味わうための活動構成，友達とかかわりながら取り組むためのグループ構成や場の設定，一人一人が課題に主体的に取り組み，首尾よく解決できるための手順パネルの提示や個に応じた動作補助，声かけなどの支援を行う。

具体的には，①マリンワールドのＶＴＲをもとに話し合い，ふじ・さくら・梅組の友達が楽しめる水族館を作る目的と課題を意識する活動，②カエル，サワガニ，金魚を３つのグループでそれぞれ分担し，飼育や紹介する看板作り，新聞作りの活動，③友達を招待して，水族館見学を楽しむ活動，といった活動の構成，双方向に相手とのかかわりが生まれるためのグループ構成と場の設定，水槽の設置やえさやり，水替えなどのやり方，看板の作り方などを示す手順パネルの提示と個に応じたモデル演示や動作補助，促し，声かけなどの支援を行う。

目　　標

１　なかよし水族館をつくろうという目的意識をもち，意欲的に課題に取り組み，目的達成の満足感や成就感を味わうことができる。

２　なかよし水族館作りを通して，同じグループの友達と協力したり，飼育の仕方や看板の作り方，新聞の作り方にかかわる知識や技能，態度を身に付けることができる。

計　　画　（約６時間＋課外）

階	第１次　であう段階（1時間）	第２次　深める段階（４時間＋課外）	第３次　広げる段階（1時間）
活動と内容	１　マリンワールド見学を想起し，水族館作りについて話し合う。① ○　育てたい生き物を決めること ○　水族館を作る目的や課題を意識すること	２　なかよし水族館をつくる。 (1) 水の生き物を飼育する。　（本時２／２）② ○　生き物が生活するための条件を意識すること ○　友達とえさやりや水替えなどをすること (2) 生き物を紹介する看板やカードを作ったり，説明を分担したりする。　② ○　板材や発泡スチロールを切ったり，貼り付けたりすること	３　友達を水族館に招待して，生き物を紹介する。① ○　目的達成の満足感や成就感を味わうこと ○　飼育した生き物について分かりやすく紹介すること
支援	※　校外学習の想起 ※　生き物の様子や設備を意識させるＶＴＲの提示	※　課題への取り組み方や集団性を考慮したグルーピングの工夫 ※　活動の手順やポイントを示すパネルの提示 ※　個に応じた動作補助や促し，声かけ	※　ふじ組やさくら組の友達に紹介する場の設定 ※　今までのグループでの活動を振り返る場の設定

本時の目標

1　水槽を作るための課題を意識し，友達と一緒に，ねばり強く活動することができる。

2　水槽作りを通して，生き物が生活するために必要な条件をとらえたりするとともに，水替えの仕方やえさのやり方など，飼育にかかわる知識・技能，態度を身に付けることができる。

準　　備

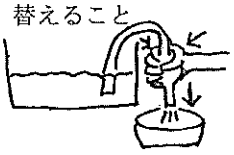
水槽，手順パネル，捕獲網，ミニ釣り竿，えさなど

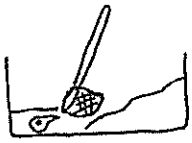
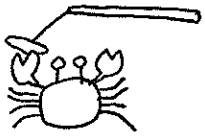
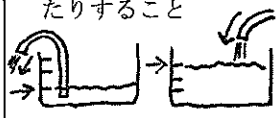
本時の主張点

本時指導にあたっては，なかよし水族館作りに取り組んでいる子供たちが，水槽の水替えやえさやりといった飼育活動にかかわる課題に友達とともに取り組むことができるようにする。そのために，双方向的なかかわりを生み出すグルーピングや力を合わせる場の構成といった支援を行う。さらに，必要な情報を提供するパネルの提示を行う。

展　　開

<table>
<tr><th colspan="3">活　動　と　内　容</th><th>個の活動を促す支援</th></tr>
<tr><td colspan="3">1　水槽の水の汚れ具合について話し合い，本時学習のめあてをもつ。
○　水槽の汚れから，水を新しいものに変える必要性を意識すること
○　生き物の気持ちを想起し，活動への意欲を高めること
（めあて）
カエルとカニときんぎょさんがよろこぶいえにしよう。

2　グループごとに水槽の掃除をする。
(1) 水槽の掃除のやり方を示す手順絵を見る。
○　工程や動作，必要な器具を大まかにとらえること
(2) 手順パネルをもとに，グループの友達と水槽の掃除をする。
○　水槽をきれいにするための活動をとらえ，友達と協力すること</td><td rowspan="2">1　目的意識や意欲をもたせる支援
○　水族館作りの計画表の提示
○　３つの水槽の水の色を意識させる投げかけやきれいな水の色と比較する場の設定
2　友達と一緒に，ねばり強く活動に取り組む支援
○　大まかな活動の手順や必要な用具材料を示す手順絵の提示
○　水替えのやり方や動作のポイントを示した手順パネルの提示
○　個に応じた動作補助や促し，声かけ，動作の補助
<u>カエルグループ</u>
・　水槽とバケツの位置（高さ）を意識させる声かけ（ｄ児）
・　網を静かに近づけるモデル演示（ｃ児）
<u>サワガニグループ</u>
・　カニが自分から網を離れるのを待つモデル演示と声かけ（ｆ児）
・　カニのはさみにえさを近づける声かけ（ａ児）
<u>金魚グループ</u>
・　水の位置が水槽の目盛りのどのあたりにあるかを意識させる声かけ（ｅ児）
・　濾過装置の汚れを意識させる声かけ（ｂ児）
○　課題への取り組み方や集団活動への参加の仕方を考慮したグループ編成</td></tr>
<tr><td>カエルグループ
（ｄ児）
・　ポンプの使い方をとらえて，水を取り替えること
 
・　ｃ児に活動を促す声かけをすること

（ｃ児）
・　網でオタマジャクシをつかまえること
 
・　ｄ児の促しに応じること</td><td>サワガニグループ
（f児）
・　カニを網でつかまえたり，はさみに気をつけて扱うこと
 
・　ａ児に活動を促したり励ましたりすること
（ａ児）
・　カニをひもで釣り上げたり，はさみに気をつけて扱うこと
 
・　ｆ児の働きかけに応じること</td><td>金魚グループ
（ｅ児）
・　目盛りを意識して水を捨てたり，入れたりすること
 
・　ｂ児に活動を促したり，補助したりすること
（ｂ児）
・　濾過器についた苔などの汚れを丁寧に取り除くこと
 
・　ｅ児の促しに素直に応じること</td></tr>
<tr><td colspan="3">3　きれいにした水槽を見せ合い，本時の学習を振り返る。
○　水槽をきれいにするための課題を解決することができた満足感や成就感を味わうこと
○　今後の飼育活動や水族館作りへの意欲や期待感を高めること</td><td>3　活動への満足感や成就感を味わわせる支援
○　きれいにした水槽を見せ合う場の設定
○　汚れた水と比較する場の設定</td></tr>
</table>

学習指導協議会

教育シンポジウム

テーマ

「新教育課程に求められる
教科の学び・総合の学び」
－今，その役割・立場を問い直す！－

福岡教育大学　教　授　中　野　和　光　先生
助教授　飯　田　慎　司　先生
助教授　堺　正　之　先生
助教授　大　坪　靖　直　先生

本校研究副主任　稲　津　一　徳

本校総合部主任　野　口　信　介

第２日目　午前の部

公開授業指導案

▼ 学 習 指 導（９：１５～１０：００）

学年　組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
１年１組	算数科	たしざんえほんをつくろう	澤村重則	１年１組教室
１年２組	音楽科	リズムで遊ぼう　ー教生先生となかよしー	豊村雅義	音楽室
３年２組	算数科	わり算をかたちで考えよう -もようづくり-	塩田利彦	３年２組教室
５年１組	社会科	大きく育て！福岡のとらふぐ	藤野俊明	５年２組教室
5年2･3組	家庭科	家族を喜ばせるものを布で作ろう！	木村真美	家庭科室
6年1･3組	理科	ものの燃え方と空気の関係を探ろう	手島宏樹	理科室
６年２組	国語科	読書から考えを広げ深めよう！「宇宙からツルを追う」	平島健二	６年１組教室

▼ 保健養護部提案学習指導（９：１５～１０：００）

３年１組	体育科／特別活動	けんこうな毎日Ⅱ ーよりよいけんこうプランをつくろうー	体育担当 岩城一磨 養護教諭 森田常子	４年２組教室

▼ 障害児教育学習指導（９：１５～１０：００）

さくら組	算数科	さくらぐみランドをつくってあそぼう	園田洋一	特殊学級棟音楽室
梅　組	国語科	よんで　つくって　くみたてよう	原口和美 舛元俊文	特殊学級棟 梅組教室

いろいろな絵を組み合わせてたし算の場面をつくりだしていく算数科学習

第１学年１組　算数科学習指導案

指導者　　澤　村　重　則

単　元　たしざんえほんをつくろう！

指　導　観

○　本単元は，合わせる場面や増える場面を言葉化したり，式化したりしながら場面に共通する２つの集合を１つの集合に合わせることを見抜き，一般化を図る算数科学習である。場面の状況を考察し，その要所を抜き出し，算数の言葉として記号を用いた式に表していくことをねらいとしている。具体的には，①加法の意味をとらえ，記号（＋，＝）を使って表すこと，②加法の計算ができること，③０を含む加法の意味をとらえ，計算ができること，④お話づくりに親しませることが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，１０までの数について数の表し方，大小関係，系列についてとらえてきている。また，数を分解したり，合成したりして数の構成についてもとらえてきている。ここでは，これらの理解の上に立って，課題が発生している場面に当面したとき，その場面の状況をつかむために具体物を用いて操作化する。そうすることで数の構造と同一構造をもつことに気付かせる。そして，２つの数を合わせることで解決できることをとらえ，記号化して式に表し，計算できるようにしていく。

○　本単元の指導においては，具体的な場面（合併，増加）を自らつくりだし，加法の意味を追究する。そのために，たし算絵本づくりをしながら合併や増加，いろいろな数の式になるお話づくりをしていく。つかむ段階では，絵カードで表された場面でお話づくりをする。そして，２つのものの集合が合わされて１つの集合になることをとらえる。このとき，絵図で表されたものを本にすることができることを知り，目的をもつ。しらべる段階では，たし算絵本をつくる中で，お話をつくったり，記号（＋，＝）を用いて式化したりすることを繰り返す。その中で，増加の場面と合併の場面の違いや共通点をとらえる。そして，合わせる場面や増える場面を意識してお話をつくっていく。いかす段階では，０を含む場面の絵のお話をつくり，０のあるたし算の式に表したり，式からたし算の場面（合併，増加）の絵本をつくったりする。

目　　標

１　たし算絵本づくりを通して，たし算のお話をつくったり，記号（＋，＝）を用いてたし算の式に表したりすることができる。

２　合併の場面や増加の場面の共通点や相違点をとらえたお話づくりをすることができる。

→ 場面を構成し記号（＋，＝）を用いた式に表す創造性
→ お話をつくる主体性
→ 友達とよさを認め合う社会性

計　　画　（約６時間）

段階	第１次　つかむ段階（２時間）	第２次　しらべる段階（２時間）	第３次　いかす段階（２時間）
活動と内容	１　絵図に表された３つの場面のお話をつくり，合わせたり増えたりするお話をつくる課題をつかむ。 (1) 絵図に表された場面に合わせて，お話をつくる。① ○　２つの集まりを合わせる場面に気付くこと (2) 絵図に表された場面のお話をつくり，おはじきを操作して，合わせるお話と増えるお話を分ける。　① ○　合併と増加の違いに気付くこと	２　たし算の場面（合併，増加）の絵本づくりを，絵を選択して組み合わせながら繰り返す。 (1) 絵を選択しながら合併の場面の絵本づくりをする。　① ○　合併の場面を記号（＋，＝）を用いて表すこと ○　合併の場面を拡げること (3) 絵を選択しながら増加の場面の絵本づくりをする。　本時① ○　増加の場面を記号（＋，＝）を用いて表すこと ○　増加の場面を拡げること	３　０のある場面のお話をつくり，たし算の式に表したり式から問題をつくったりする。 (1) ０のある場面のお話をつくり，たし算の式に表す。　① ○　０の加法の意味をとらえること (2) たし算の式に合った絵を選択したり，自分でかいたりしながら問題づくりをする。　① ○　式をよむこと
支援	※　合併や増加の場面を段階的に表す絵図の提示	※　数の違ういろいろな動物や人，物の絵図の提示 ※　合併，増加を区別する絵本用紙の提示	※　０を含む絵図の提示 ※　式にあった合併，増加の絵の提示

本時の目標

1　絵図に示された動物，人，物などを選択しながら，たし算絵本をつくることができる。

2　被加数や加数を変えて，増える場面のたし算のお話づくりをして，たし算の式に表すことができる。

準　　備

増加用の絵本用紙，ブロック，数の違ういろいろな動物，人，物の絵図

本時の主張点

本時指導にあたっては，前時までの絵本をもとに増える場面を絵本に表したり，式に表したりすることができるようにする。そのために，増加の場面も２つの集まりを１つにすることからたし算の式に表せることをとらえ，絵本づくりをする活動をとり入れる。そして，できた絵本を紹介し合う中で，増加の場面を拡げていくようにする。

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　前時までの活動から，本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 前時までの流れ図を見て，合わせるお話と増えるお話ができたことや合わせるお話を式に表したことを話し合う。 ○　前時までの学習の想起 (2) いろいろな動物，人，物の絵を見て，増えるお話をつくることや増えるお話がたし算の式で表せることについて話し合う。 ○　本時学習のめあての把握 （めあて）　ふえるおはなしのたしざんえほんをつくろう。 ※　同じ動物，人，物で数の違う絵図を提示する。 ※　試しの増えるお話をつくらせ，ブロックを動かし，２つのまとまりが集まって，１つのまとまりができることからたし算の式で表せることに気付かせる。 □□□□ ← □□ 2　絵を選択しながらお話をつくり，たし算の式をかく。 (1) 絵を選択してお話をつくり，たし算の式をかく。 ○　たし算のお話にできるものを組み合わせて選択すること ※　選択した絵を紙に貼ったり，式に書いたりさせる。 ２つの絵を貼る → たし算の式をかく → １つになった絵を貼る キリンが３頭いて４頭歩いている絵を貼る。 / ３＋４ 裏に答えのついた式を書く。 / キリンが７頭になった絵を貼る。 ※　属性が違うものでできた場面を提示し，たし算のお話ができるか確かめさせ，場面を拡げさせる。 赤い風船の絵を貼ったもの ↔ 青い風船の絵を貼ったもの (例) 赤い風船が２つありました。黄色い風船を４つもらいました。風船はみんなで６つになりました。 (2) グループでつくったお話を紹介し合い，選択した絵でたし算ができることや数が合っているかを確かめる。 ○　たし算の場面が同じ動物や人，物でできていることをとらえること ※　グループの中で順番を決めてさせておく。 ※　ブロックを操作して，増えるお話であることを確かめさせる。 3　できたお話を絵本にして紹介し合う。 ○　たし算の場面の拡張 ※　場面の違うお話をつくった子の絵本を紹介させる。	○　前の時間は合わせるお話の絵本をつくったな。 ○　合わせるお話がたし算の式にかけたよ ○　今日は増えるお話をつくるよ。 ○　どんなお話にしようかな。 ○　いろいろな絵があるな。 ○　傘や風船の絵もあるよ。 ○　傘と風船で増えるお話はつくれないな。 ○　同じものを選んでお話をつくろう ○　増えるお話もたし算の式になるのかな。 ○　ブロックをくっつけるからたし算の式でかけるよ。 ○　キリンの絵でつくってみよう。 ○　お話ができたよ。 「キリンさんが３頭いました。キリンさんが４頭やってきました。キリンさんは何頭になったでしょう。」 ○　子供が遊んでいる絵でもお話をつくれるよ。 ○　つくったお話は○＋△＝□になるな。 ○　違う色の風船はどうかな。 ○　色は違うけど，同じ風船だからお話がつくれるよ。 ○　他にもお話がつくれそうだ。 ○　つくったお話を教えてあげよう。 ○　いろいろなたし算のお話ができているな。 ○　ブロックを動かして，増えるお話か確かめてみよう。 ○　つくったお話をみんなに教えてあげたいな。 ○　他にもいろいろなお話ができているな。

生活上の求めから活動の目的をもち音楽活動の楽しさを見出す音楽科学習

第１学年２組　音楽科学習指導案

指導者　　豊　村　雅　義

題　材　**リズムで遊ぼう**　－教生先生となかよし－

指　導　観

○　本題材は，教育実習という学校での行事で生じてきた，教生先生と仲良く学習したり遊んだりしたいという求めを生かし，リズム遊びを中心に教生先生とともに楽しく音楽活動を行い音楽の楽しさにひたっていく音楽科学習である。リズム問答をしたり，楽曲に合わせてリズムうちをしたりして，様々なリズムのおもしろさに気付く感受力やまとまりのあるリズムをつくっていく構想力を育てることをねらいとしている。具体的には，①相手のリズムをとらえリズム模倣やリズム問答を楽しむこと，②リズムのおもしろさをとらえて簡単なリズムをつくって表現すること，③拍の流れにのって他の人と合わせてリズムうちをすること，などが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，音楽に合わせて体を動かしたり歌を歌ったりして体全体で反応して音楽を楽しみたいという求めを潜在的にもっている。それが学芸会などの音楽表現が求められる場で発揮されている。しかし，必ずしも音楽的に価値のある表現をしているわけではない。それはリズムのまとまりや，拍の流れを意識して表現する心地よさを味わう経験が不十分だからである。リズムのまとまりを感じたり拍にのったりする心地よさは，他の人と一緒にリズム模倣やリズム問答等をしていくことで感じ取ることができる。そこでリズム感覚を中心として他の諸感覚を伸ばしながら基礎的な表現力を伸ばしていくことができるこの期に本題材を設定する。そして，音楽によってコミュニケーションができる楽しさを感じ取らせながら，リズムに関する感受力と構想力を高めていきたい。

○　本題材の指導においては，リズム遊びを教生先生とともに楽しむ場を設定し，心を合わせてリズムをつくり音楽的時間を共有する心地よさを体験させていく。であう段階では，教生先生と一緒に行う簡単なリズム遊びと出合い，教生先生と楽しくリズム遊びをしたいという求めをもたせる。ふかめる段階では，身体表現を付け加えたり，楽曲に合わせたりして，工夫したリズム遊びを体験させる。その際，①一対一のリズム問答やリズム模倣から，②複数の人と楽しむリズムリレーなどへと，易から難へ往復的に活動させていく。そこで，拍の流れにのったりリズムパターンを繰り返したりすると楽しくなることに気付かせていく。あじわう段階では，今まで出てきた好きなリズム遊びで教生先生と楽しく活動させていく。

目　　標

1　リズムのまとまりを感じ取りながら，拍の流れにのってリズムパターンを繰り返したり簡単なリズムをつくったりしながらリズム遊びを楽しむことができる。（創造性）

2　自分が楽しめるリズム遊びを見出しながら，意欲的にリズムを模倣したりつくったりしながら，教生先生や友達と心を合わせてリズム遊びをするよさを感じることができる。（主体性・社会性）

計　　画　（約４時間）

段階	第１次　であう段階（１時間）	第２次　ふかめる段階（２時間）	第３次あじわう段階（１時間）
活動と内容	1　教生先生と遊ぶいろいろなリズム遊びに出合い，もっと教生先生と仲良くなるリズム遊びについて話し合う。 ○　いろいろなリズム遊びへの関心の高まり ○　他の人とリズム問答やリズム模倣などを楽しむこと	2　もっと教生先生と楽しく過ごせるように工夫したリズム遊びを行う。 (1) いろいろなリズム遊びを楽しむ。① ○　リズムのまとまりをとらえた表現 (2) リズムリレーも取り入れながら遊びを工夫して楽しむ。（本時）① ○　拍の流れにのって他の人と合わせてリズム遊びを楽しむこと	3　工夫した遊び方で教生先生とリズム遊びを楽しむ。 ○　拍の流れをとらえてリズム遊びを楽しむこと ○　皆と心を合わせてリズムを刻む楽しさの感受 → 学級活動（集会）などへの発展が考えられる。
支援	※　教生先生と一緒に歌ったりリズム遊びをしたりする場の設定 ※　簡単なリズムパターンによるリズム問答や模倣の提示	※　楽曲に合わせた身体表現などを取り入れたリズム遊びの工夫 ※　一対一の遊びだけでなく，リレー形式の遊びの導入 ※　互いに聴き合う場の設定（相互評価）	※　自分が好きなリズム遊びや楽曲の選択 ※　工夫したリズム遊びをしている子への賞賛

本時の目標

1　拍の流れを意識してリズム遊びをするよさを感じ取りながら，簡単なリズムをつくってリレー形式のリズム遊びを楽しむことができる。

2　友達や教生先生とリズムパターンや速度等を合わせてリズム遊びをする心地よさを感じることができる。

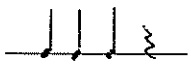
準　　備

リズム絵カード，リレー形式の遊びに使う道具，
打楽器類

本時の主張点

本時指導にあたっては，問答形式の一対一のリズム遊びから，複数の人でリズムをつないでいくリレー形式のリズム遊びを取り入れて，より拍の流れを意識したリズム遊びが楽しめるようにしていく。そこで，教生先生と仲良くなるよさを感じさせながら音楽活動にひたらせ，みんなで音楽的時間を共有する楽しさを味わわせていくのである。

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　教生先生と楽しくリズム遊びをしてきた前時までの活動を振り返り，本時学習のめあてを確かめる。 ○　前時学習の想起と本時学習のめあての把握 ・教生先生と仲良くなるためのリズム遊び ・もっとたくさんの教生先生と仲良くなる遊びの工夫 （めあて）　きょうせいせんせいとなかよくなるように，いろいろなりずむあそびをしよう。 ※　前時に行った教生先生と一緒にリズム問答やリズム模倣をさせた後，新しい遊びを提示するなどしてリズム遊びの工夫への意欲化を図る。	○　教生先生と一緒にリズム遊びをすると楽しかったよ。 ○　もっとたくさん遊んで教生先生と仲良くなりたいな。 ○　もっといろいろなリズム遊びがあるみたいだね。いろいろやってみたいな。 ○　リズムがピッタリ合うと気持ちがいいから，今日もピッタリ合うようにしたいな。
2　教生先生と一緒に，リズムパターンを難しくしたり，リレー形式のリズム遊びをしたりなど，遊び方を工夫して様々なリズム遊びを行う。 (1) 一対一，一対多の問答形式のリズム遊びを行う。 ○　リズムのまとまりをとらえて表現する楽しさの感受 ※　リズム絵カードを提示し，リズムパターンをつくりやすくする。 【リズム問答の例】  ま さ よ し さん  は ー い 言葉とリズム打ちを合わせて問答する。 (2) リレー形式のリズム遊びを行う。 ○　拍の流れをとらえてリズムをつくって表現すること ※　楽曲に合わせたリズムリレーなど，人数を増やしてリズム遊びを行わせることで，同じテンポで拍を刻むよさを感じ取らせる。	○　相手のリズムをよく聴いておかないとうまく応えられないね。 ○　黒板に貼ってある教生先生が打った手拍子のリズムカードをまねしてみよう。 ○　先生が教えてくれたリズムリレーは，合ったときは気持ちがすっきりするけど心を合わせないとうまく合わないね。 ○　同じ速さで心の中でリズムを歌うと教生先生とピッタリそろって楽しいよ。
【リズムリレーの遊びの例】 ・　楽曲に合わせて，強拍と弱拍を分担して打ったり，一拍ずつ分けて打ったりする。 ・　手拍子の代わりに身体表現（身振り）を入れて，動きを合わせて楽しむ。 ・　『ぶんぶんぶん』に合わせて  のリズムを打つ。そして，そのリズムに合う言葉をリレーでつないでいく。 ・　一つのリズムパターンを楽器や手拍子など役割を分けて，複数で分担してきざむ。 ・　同様の活動で，教師がカードで「青信号」「赤信号」を出し，赤信号の時は心の中でリズムをきざみ，青信号が出たところだけ音を出し，全グループがそろうかどうか競う。	
3　お互いのリズム遊びを発表し合うなどして，教生先生と仲良く遊ぶために頑張ったことを出し合う。 ○　拍をとらえてリズムをつくって表現するよさの感受 ○　自分や友達の表現のよいところを見つけること ※　リズム遊びを発表し合う場を設定する。	○　リズムがぴったり合うと，すっきりするね。 ○　音楽で教生先生と仲良くなれたから楽しかったね。 ○　これからも楽しくリズム遊びをしていきたいな。

健康の課題を探り，自分の生活を豊かにしていく保健学習

第3学年1組　体育科(保健)／学級活動学習指導案

指導者　森田常子(T1)　岩城一磨(T2)

単元　けんこうな毎日Ⅱ　～よりよい健康プランをつくろう～

指導観

○　本単元のねらいは，健康の大切さを認識すると共に，健康によい生活の仕方を食事，睡眠，運動のバランスから理解し，給食において実践していくことができるようにすることである。具体的な内容としては，毎日を健康に過ごすためには特に食事にかかわる体をつくる，体の調子を整える，力を出す効果が大切であること，自分の給食の実態から見直しよりよい健康プランをつくっていくことである。また，子供たちは，自分なりの生活のリズムをもっており，その生活習慣は，健康と深くかかわっている。そこで健康の保持増進を考えるとき，一日の生活の仕方を健康プランとしてまとめることは必要であると考える。また，食事を取り上げ，給食を見直すことの大切さを考えさせることは，健康で安全な生活を営む実践力を育てる上で意義深い。

○　本学級の子供たちは，毎日の健康観察では，大きな声で「はい，元気です」と応え，休み時間には，サッカーやなわとびなど外で元気に遊ぶ子供が多い。給食の時間においては，給食を楽しみにしている子供が多く嫌いなものでも努力して食べている。また，子供たちに自分の生活を振り返らせると，４分の３の子供が健康な生活を送っているという意識があり，家族と健康について話をしたり，話を聞いたりしたことがある子供は半数程度いる。しかし，起床時刻や就寝時刻，食事時間，運動，入浴，排便など，普段何気なく行っている自分たちの生活行動が健康につながっていると考える子供はほとんどいない。そこで，健康への意識が芽生え，志向していこうとするこの期に本単元を取り上げ，自分なりの食を通じての健康への考えをもたせ，実践していこうとする意識や意欲をもたせたい。

○　本単元の指導においては，まず，「健康ビンゴ」で必要な生活習慣を発表し合い，健康に暮らしたいという子供たちの願いから健康であるためにはどんなことが大切かを考えさせ，自分たちで実践可能な食生活についての課題を明確にもたせる。次にＧＴから栄養についての話を聞き，毎日を健康に過ごすには，バランスのとれた食生活が大切であることを理解させ，自分の食生活の振り返りから健康プラン見直しの追究活動に結びつけていく。ここでは，学級活動の給食指導と重ねて知識理解を深めるとともに，作成した健康プランを実践し，自己の給食を評価し見直して，自分のプランの改善点を発見し，よりよい健康プランを作成していく。最後に，健康な生活についての実践に基づく知識理解を交流で十分に深め，自分たちのよりよい健康プランを完成させ，報告し合い学習をまとめる。

目　標

1　自分の生活を振り返り，自分の生活と健康に関心をもち，健康によい生活の適切な方法を考え，進んで健康な生活を送ろうとすることができる。

2　毎日を健康に過ごすために，自分の食生活の行い方の問題点を捉え，作成した健康プラン改善のための計画を立案し，実践することで改善を繰り返し自分のよりよい健康プランを完成させ他者に報告することができる。

自己の生活から課題設定し健康をつくり出す創造性
調和のとれた生活を理解し実践しようとする主体性
友達と協調する社会性

計　画　（約３時間＋学級活動１時間）

段階	第１次 みいだす段階（１時間）	第２次　ひろげる段階（１＋１時間）	第３次 あじわう段階（１時間）
活動と内容	1　自分の健康生活を振り返りよりよい健康プランづくりを栄養の視点で把握する。 ○　自分の健康や日常生活チェックからの課題の把握をもとに食生活への焦点化，実践化への見通し	2　食生活に焦点化した健康プランを作成し，ＧＴに話を聞き見直す。 ○　給食の役割の理解 保健・給食について知り，プランを見す。（本時１/２）① 学活○　健康の実践的な理解と態度の形成① ・健康プランを実践し，改善する。	3　課題の解決を実感する３－１健康プラン報告会を行う。 ○　健康プランの実践による高まりの総合的な評価 ・自己・相互評価による総合的評価をし合う。 ・ＧＴにも評価いただく。
支援	※　健康ビンゴをしたり，データを比較したりして健康に何が大切かを調べ，食生活についての課題を把握させる。	※　健康になるための秘密をＧＴとの交流を通して食生活から追究し，ＧＴとの交流を通して総合的な視点で解決することや，実践していく大切さに気付かせる。	※　よりよい健康プラン報告会により内容・方法を総合的に評価させ，健康への視点や意識の高まりの実感をさせる。

本時の目標

1　自分の食生活を振り返り，調べたことをもとに，つくった健康プランの交流やＧＴの栄養についての話を聞くことで食事の大切さを理解することができる。

2　自分の健康や食生活のデータをもとに健康な食生活についての秘密を探る追究課題を明確にもち，健康プランをつくっていくための意欲をもつことができる。

本時の主張点

本時指導にあたっては，自己の給食などの食生活をもとに作成した健康プランを友達と交流したり，栄養士のＧＴに評価してもらったりすることで，自ら新たな課題を見いださせていく。そのことで，健康を総合的な視点でみることや知識だけではなく，実践の大切さに気付き，自己の健康や生活をつくりかえていく力を身に付けることができるであろう。

準　　備

健康ビンゴのデータ，保健学習ファイルノート

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　栄養についての追究をもとに本時の学習について話し合う。 (1) 健康ビンゴのデータをもとに学習する流れを把握する。 ○　食生活についての自分の健康についての考えの想起 ・学習の流れ図，ノートファイルによる視点の確認 ※　前時学習の流れ図を提示し，本時の学習での追究内容を把握する。 (2) どんな視点で調べたかを発表させ，本時学習のめあてをつかむ。 ○　本時追究する学習のめあての把握 （めあて）　本村先生の話を聞き，きゅう食のやくわりとけんこうにについて調べよう。 **【子供たちが調べた給食のやくわり】** ・体をつくる…成長に関係があるのではないか ・力を出す…運動や勉強するときのエネルギーになるのではないか ・体の調子を整える…病気に負けないようにするのではないか ・心の健康…栄養が少ないと気持ちに元気がなくなるのではないか ※　子供なりの給食の役割の予想を交流させる。	○　今日は，自分なりに調べた給食の役割や栄養について分かったことを交流し，理解を深めよう。 ○　まとめたことがちゃんと友達に伝わるかな，他に必要な内容はないかな見直そう。 ○　友達は食生活や食品の栄養についてどんなことを調べたのかな。 ○　健康プランをもとに自分たちの調べた食生活について交流し，自分たちの健康プランを見直そう。 ○　他のグループはこんな内容で調べていたのか，どんな関係があるのだろう。それも知りたいな。 ○　さあ，本村先生の話を聞くときには，なぜいろいろな食べ物が必要なのか理由をしっかりと聞くぞ。
2　栄養士の本村先生の給食の話から，食べ物の大切さの理解を深める。 (1) 昨日の給食のメニューをもとに給食の役割を知る。 ○　給食にはいろいろな食べ物が使われていることへの気付きと把握 ・体の血や肉となる食べ物 ・熱や力となる食べ物 ・体の調子を整える食べ物 ※　好き嫌い食べ物アンケートを活用し自己の給食の課題を把握させる。 Ｔ１・Ｔ２は，担当を分け，グループ間の指導をする。 (2) 給食をもとにグループで話し合いをもち全体で交流し，よりよい健康プランへの改善の目標と計画について話し合う。 ○　健康を支える食生活の問題点の把握 ・いろいろな食べ物を食べることが大切なこと ・嫌いなものにも役割があることへの気付き ・給食は全て食べることで栄養のバランスがとれること ・給食に限らず，食事は大切で，家での実践も考えていくこと ※　課題の追究・吟味をするために，ＧＴ（栄養士の先生）・ＴＴ（養護教諭，体育科教官）の話により，健康を支える食生活の大切さや実践化の大切さを確認できる交流タイムを設定する。	○　食事は，毎日３回することなので栄養のバランスをよく考えて食べないと今の僕たちの成長にかなりの影響がありそうだな。 ○　食事は，体をつくるという面で必要だし，成長にももちろん関係しているとも思うな。 ○　食事をきちんととらないと勉強に身も入らないし，気分が悪くなったり，倒れたりしたことがあるよ。 ○　栄養士の本村先生は，僕らの栄養のことを考えて給食をつくって下さっているんだ。そして，運動をしないと栄養が体に行き渡らないのか。 ○　養護の森田先生や体育の岩城先生の話を聞くと，栄養の話が健康にとても関係しているし，考えてみる必要に気が付いたぞ。
3　交流活動やＧＴの話で気がついたことをもとに本時学習を振り返る。 ○　よりよい健康プランの作成・実施のための実践内容や方向性 ※　次時は，実践・評価する学級活動の予告をし解決の意欲をもたせる。	○　次の時間に学級活動で実践・評価してみて僕たちの健康プランを見直さないといけないな。

模様づくりを通して，除法の意味を深める算数科学習

第３学年２組　算数科学習指導案

指導者　　塩　田　利　彦

単　元　わり算をかたちで考えよう　－もようづくり－

指　導　観

○　本単元は，これまでの計算の学習を基にしながら，色板を分ける操作を位置づけた模様づくりを行い，乗法の演算の見方に関係づけて，アレイ図や言葉の式に置き換え，わり算の意味としての１つ分やいくつ分を追究する算数科学習である。全体の色板の数と基本の模様の色板の数の関係から，等分除と包含除のわり算の意味を考え，同じ図や同じ式で示すことから一般化してとらえることができるようにすることをねらいとしている。具体的には，①色板などの具体物を同じ数ずつに分ける操作ができること，②分ける操作の後をアレイ図で残し除法の意味を理解すること，③第２学年の乗法の学習を基に，乗数や被乗数に当たる数を求める演算として，除法の意味を理解すること，④除法の計算の仕方を理解することが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，乗法九九にもかなり習熟し，問題から１２÷３などと立式できなくても，直観的に答えを求められる。乗法九九の構成についての理解や乗法の交換法則についても十分理解できている。また，具体物などを使って，具体的な操作から答えを求めることもできる。しかし，操作の違いや既習のかけ算を活用して，答えの求め方を考え，図や式を生かして説明できるまでには至っていない。意味の違いを具体的な操作から抽象的な図や式に発展させ，自ら考えを生み出せるようにしたい。

○　本単元の指導においては，模様づくりの活動を通して，既有の分けて並べる操作や既習の倍の考え方を基に，色板の数や模様の数を考える。模様１つ分の枚数やいくつ模様ができるかを求め，除法の意味をとらえる。つかむ段階では，包含除の意味を３つに分けて１つ分の模様の枚数を考えさせる。１つの模様が５，７，９枚の場合へと広げて深める。調べる段階では，等分除の意味を色板３枚の模様のいくつ分で考えさせる。１つの模様の色板の枚数を４，６，８枚の数で考え，模様づくりを進める。生かす段階では，模様をアレイ図に表し２つの意味を比べさせる。包含除と等分除の意味の違いを，かけ算のかける数とかけられる数に置き換えて，異なるかけ算の式になることで理解を深める。２つのわり算の意味は，かけ算九九表や図等を活用し各自が模様づくりを通して，具体的な操作から式へと一般化してまとめることができるようにする。

目　　標

１　模様づくりでの色板の数について話し合い，除法の意味としての１つ分（等分除）やいくつ分（包含除）についてまとめることができる。

２　等分除と包含除の相違点を話し合い，模様を基に表した図やかけ算の式への置き換えから，意味の違いを一般化することができる。

分け方の違いからわり算の意味をとらえる創造性

模様の数を求める主体性

相違点を話し合う社会性

計　　画　（約６時間）

階	第１次　つかむ段階（２時間）	第２次　調べる段階（２時間）	第３次　生かす段階（２時間）
活動と内容	１　１つの模様の枚数を求める場面から色板を使って分け方を考える。 (1) ３つに分けて１つの模様の色板の数を求め，模様をつくる。　① ○　１つの模様の枚数とらえること ○　わり算の式を知ること (2) 全体の模様を色々な場合に分けて１つの模様の枚数を求め，模様をつくる。　① ○　１つの模様の結果が，５，７，９枚になる場合を考えること	２　１つの模様がいくつ分か求める場面から色板を使って分け方を考える。 (1) 色板３枚の模様がいくつ分かを求め，模様をつくる。　① ○　同じ模様がいくつできるかをとらえること (2) １つ分の模様の枚数を変えて，全体の模様にいくつ分かを求め，模様をつくる。　① ○　１つの模様が，４，６，８枚になる場合を考える。	３　２つの分け方を比べ，わり算の意味をまとめる。 (1) 同じ式で２つの意味になる模様を作る。本時① ○　分け方は違っても同じ式で表せること (2) 生活事象に置き換えてわり算の意味をまとめ，図や式でまとめる。　① ○　分け方の違いをとらえわり算で計算できること
支援	※　基本的な操作を基に，等分除の意味をとらえる設定 ※　かけ算九九表を使って，全体数と除数の関係をとらえやすくする設定	※　基本的な操作を基に，包含除の意味をとらえる設定 ※　複数のかけ算九九を含む数で多様に広げる設定	※　同じ図やかけ算で２つのわり算の意味を考える設定 ※　２つの意味を図の式から違いでまとめる活動と交流

本時の目標

1　これまでの模様づくりを生かして，同じ式で１つ分やいくつ分を求め，アレイ図に置き換えて，意味を説明できる。

2　等分除と包含除のアレイ図やかけ算の式から，わり算の意味の違いを一般化して考えることができる。

準　　備

既習図，包含除の模様台紙（児童用・教師用）・等分除の模様台紙，アレイ図（教師用・児童用）

本時の主張点

本時指導にあたっては，具体的な模様づくりの場において，１つの模様の枚数や１つの模様のいくつ分を具体的な操作によって考え，模様をつくり出す。その分け方を交流によって，全体と部分の枚数や言葉の式とかけ算を関係づけてとらえることにより，わり算の等分除と包含除の意味の違いを図や式などに一般化して考えることができる。

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　同式で等分除と包含除の意味になる模様から本時のめあてをつかむ。 (1) これまでの模様づくりを振り返る。 ○　「２０枚の模様を４つに分けました。１つの模様は５枚になる。」２０÷４＝５（等分除） ○　「１つの模様を４枚でつくる。２０枚で５つ模様ができる。」　２０÷４＝５（包含除） ※　既習の模様から同式の２つの意味を取り出す。 (2) ２つの意味を同じ式で表すことからめあてをつかむ。 （めあて）　同じもようで，１つぶんやいくつぶんの分け方を比べて，わりざんをまとめよう。 ※　全体数を示し，基になる模様から１つ分やいくつ分を調べさせる。	○　模様の１つ分の色板の枚数を求めるわり算を学習したよ。 ○　１つの模様がいくつできるかを求める学習もしたよ。 ○　同じ模様なのに２つの分け方のわり算があるみたい。 ○　１つ分やいくつ分の違いを比べてわり算をまとめてみよう。 ○　これまでの学習でかけ算九九を生かして考えたぞ。 ○　１８枚の模様を選んで，やってみよう。
2　基になる模様１つ分の枚数や，基になる模様のいくつ分になるかを調べて，分け方を比べる。 (1) ２つの分け方を自分なりの模様を選んで調べる。 ○　全体数と模様の数が分かり，１つ分の色板の数を求めること ・　全体が１８枚で，同じ模様で３つに分けると，１つ分の模様が三角色板の何枚になるかを求める。（等分除）１８÷３＝６　　６枚 ※　各自で模様を選択させ，３つに分ける補助線を書き表す。 ○　全体数と１つ分の色板の数が分かり，模様のいくつ分を求めること ・　全体が１８枚で，１つの模様を３枚で作ると，いくつ分の模様が入るかを求める。 （包含除）１８÷３＝６　６つ分 ※　１つ分の模様を与え，当てはめて区切り，いくつ分を表す。 (2) 各自の模様と式を交流し，アレイ図，言葉の式に置き換えて話し合い，わり算の意味の違いを考える。 ○　同じ１８÷３＝６であっても，図に表すと異なるところを示していること ○　かけ算のかけられる数やかける数の言葉の式に置き換えると２つの意味は，異なる式になること ※　敷き詰め模様をアレイ図や言葉の式を使って，式に表させたり，説明させたりする。	○　色板はみんなで１８枚あって，３つの模様ができるよ。１つの模様の枚数を求めるわり算だ。 ○　色板はみんなで１８枚あって，３枚で１つの模様を作るといくつできるかを求めるわり算だ。 ○　同じ１８枚の模様の１つ分といくつ分を求める式は，同じになる。 ○　図に置き換えて考えると求めているところの違いがわかるよ。 ○　図を見ているとかけ算が関係あるみたいだ。 ○　かけ算は１つ分の枚数×いくつ分＝全体の枚数になる。 ○　１つ分のわり算は６×３＝１８になるよ。 ○　いくつ分のわり算は３×６＝１８になるよ。 ○　２つの分け方のわり算は，かけ算に直すと違いがわかるよ。 ○　図で表したときの答えを示す位置は違っていても，同じわり算の式になるよ。
3　各自の模様と式を図や言葉の式に置き換えて，本時のまとめをする。 ○　図や言葉の式から違いをとらえてまとめること ○　２つのわり算の意味は，同じわり算の式で表すこと ※　等分除・包含除の意味の相違点を各自の追究した模様でまとめる。	○　みんなが考えた模様は，１つ分といくつ分を求める問題に分けられ，同じわり算の式で表している。

栽培業や養殖業の促進，漁場整備という側面から水産業のあり方を考える社会科学習

第5学年1組　社会科学習指導案

指導者　藤野俊明

小単元　大きく育て!福岡のとらふぐ

指導観

○　本小単元は，これからの水産業のあり方を漁獲量，貿易，流通という側面から追究し，地域の代表的な水産業の維持発展を願う態度を養うことがねらいである。具体的には①福岡県の高級魚であり，名産の一つであるとらふぐと生活とのかかわりを見出し，とらふぐの栽培や養殖の様子を主体的に追究しようとすること，②とらふぐの漁獲量減少で，とらふぐ漁が先行き不安になってきていること，③栽培漁業センターで栽培や養殖の様子を見学したり，取材したりすること，④福岡県のとらふぐ養殖や栽培の様子を調べ，追究内容をもとに打開策を考えることが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，前小単元の学習で米作りに従事する人々の工夫や努力を消費者が求める安全で安価な農作物という観点から追究してきている。そこで，本小単元では，博多の水産業の中でも漁獲量が減少しているとらふぐの栽培の努力に焦点をあて，漁獲量を増やすために栽培技術の向上，漁場整備，他地域とのつながりという側面から追究させ，現在の水産業のよさを残そうとする判断をさせたい。

○　本小単元の指導にあたっては，福岡県の代表的な水産物であるとらふぐの漁獲量を増やす取り組みについて調べ，特に栽培漁業に従事する人々の工夫をとらえ，これからの水産業のあり方を考えさせることをねらいとしている。そのためにまず，福岡県ではとらふぐの漁獲がさかんであることを生活や自然環境との関わりから調べさせる。次に，とらふぐの漁獲量が減少してきていることを調べさせ，とらふぐの漁獲量を増やす方法を栽培業の促進，養殖業の促進，漁場整備という側面から調べさせていく。そして，漁獲量を増やす方法を栽培に従事する人々と話し合わせる。最後に栽培漁業や養殖漁業の取り組みについて調べさせ，取り組みのよさを発信させて，まとめさせる。

目　標

1　福岡県のとらふぐの漁獲量減少の現状をとらえ，漁獲量向上のために従事する人々が栽培業や養殖業の技術を向上させたり，漁場を整備したりしていることに気づき，これからの水産業のあり方を考えることができる。
（主体性・創造性）

2　とらふぐの漁獲量を高めていこうとする人々の取り組みを，とらふぐ漁の仕組みや栽培や養殖の仕組み，人々の連携から見学や取材を通して調べ，これからの水産業についてのかかわり方を話し合うことができる。
（主体性・社会性）

計　画　（約１５時間）

段階	第１次　みいだす段階（６時間）	第２次　さぐる段階（６時間）	第３次　いかす段階（３時間）
活動と内容	1　福岡県のとらふぐ漁の概要を調べ今後を考える学習の見通しをもつ。 (1) 福岡県における漁業の概要を自然環境や生活のつながりから調べる。　② ○　生活とのつながりや概要の把握 (2) とらふぐ漁や運輸の概要を調べる。　② ○　とらふぐ漁や運輸の概要の把握 (3) とらふぐの漁獲量減少について調べ，追究の見通しをもつ。　② ○　漁獲量を高める問題の見出し	2　とらふぐの漁獲量を高めるための人々の取り組みを調べ，とらふぐの漁獲量を増やす方法を話し合う。 (1) とらふぐの漁獲量を増やす取り組みを調べる。　⑤ ○　栽培の仕組みや漁場整備の仕組みを調べること (2) とらふぐの漁獲量を増やす方法について話し合う。　本時① ○　とらふぐを増やす方法を栽培技術の向上，漁場整備，他地域との関係の側面から検討すること	3　近海の魚種の漁獲量を増やすための取り組みを調べ発信したりする。 (1) 近海魚種の漁獲量を増やす方法を調べる。　① ○　栽培業の促進，養殖業の促進，漁場整備から考えを見直すこと (2)　近海の魚種の漁獲量を増やすための取り組みを発信する。　② ○　有用感を味わうこと
支援	※　福岡県の漁獲量を示す資料 ※　とらふぐ漁をしているＧＴへの見学取材や回遊範囲を示す資料 ※　漁獲量減少を示す資料	※　福岡県栽培漁業センター等への見学取材 ※　栽培者と漁業者の立場からのＧＴの招聘	※　エビ，カニ，のりなどの漁獲量を示す資料 ※　栽培や養殖の仕組みを示す資料の提示

本時の目標

1　福岡県のとらふぐの漁獲高を高める方法を栽培業の促進，養殖業の促進，漁場整備という側面から話し合うことを通して，自然環境や社会環境を生かした取り組みが必要なことを判断することができる。

2　とらふぐの漁獲量を増やす方法を見学や聞き取りを根拠に話し合うことができる。

本時の主張点

本時指導にあたっては，福岡県の代表的な水産物であるとらふぐの漁獲量を増やす方法を栽培業の促進，養殖業の促進，漁場整備という側面から話し合う活動を設定する。ここで子供たちは，地域の名産を守るには自然環境や社会環境を生かした取り組みが今後も必要であることをとらえることができるだろう。

準　　備

漁獲量を示すグラフ，流れ図，学習プリント

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　前時までの学習を振り返り，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　前時学習の想起ととらふぐの漁獲量を増やす方法を話し合うめあての確認 ・　とらふぐは福岡県の代表的な水産物だ。食べたこともある。 ・　とらふぐ漁に従事する人々は工夫しながら延縄漁に励んでいる。 ・　近年，漁獲が減ってきている。特に天然物の減少が著しい。 （めあて）　福岡県のとらふぐの漁獲量を増やすにはどんなことをしていけばいいのかを話し合おう。 ※　流れ図を活用して前時学習を想起させたり，とらふぐの漁獲量を示すグラフを提示して，本時学習のめあてをとらえさせる。 2　福岡県のとらふぐの漁獲量を増やす方法を栽培業の促進，養殖業の促進，漁場整備という側面から話し合う。 (1) 福岡県のとらふぐの漁獲量を増やす方法を栽培業の促進，養殖業の促進，漁場整備という側面から話し合う ○　とらふぐの漁獲量を増やす方法を栽培業の促進，養殖業の促進，漁場整備という側面から考え合うこと	○　最近，とらふぐの漁獲量が減ってきている。 ○　山口県と並んで福岡県の代表的な海の幸であるとらふぐが食べられない可能性もある。 ○　県の代表的な水産業をこれからも守って，自慢のままにすることはできないだろうか。 ○　福岡県海洋水産技術センターや栽培漁業センターではとらふぐの栽培をしていて効果をあげている。 ○　市場に出るとらふぐの約４割は栽培された魚。尾がちぎれているのでわかるよ。 ○　効果があるから，どんどん栽培量を増やせば売れるのではないか。 ○　それだけではなくて，放流された稚魚が育ち安い環境になっていないといけない。ゴミをなくしたり，魚礁を設置したりするともっと稚魚が育つのではないか。 ○　栽培の取り組みは山口県や長崎県とも協力をしている。お互いに情報を交換し合っていいとらふぐの品種をつくってはどうか。 ○　吉村さんはこれから中国からの輸入が増え，栽培でのとらふぐがもっと増えると言われた。そのためには稚魚が育つ場所を多くしたり，卵をもっと採りやすくしたりする研究が必要だ。 ○　実際に漁師さんや吉村さんたちは海をきれいにする取り組みもしている。 ○　とらふぐの漁獲量をあげるためには，ただ採るだけでなくて，育てて採ること，そしてもっと育ちやすい場をつくることが必要だな。

	発表される方法	根拠となる事実
栽培業の促進	卵を多く採って栽培をする。	卵を多くとれるペレットの開発と市場のシェア
養殖業の促進	陸上で養殖し，安全性を高める。	陸上での養殖技術 市場での養殖魚の価格
漁場整備	魚礁を設置したり，浅瀬の清掃を行う。	稚魚の成育に必要な漁場の条件や海の汚染の事実

※　代表児童の考えを資料をもとに話し合わせ，対策の実現性や有効性について話し合わせる。

(2) とらふぐの栽培や養殖にかかわる吉松さんや吉村さんと対策について話し合う。

○　栽培業や養殖業についてには限界があり，天然魚が生息しやすい環境を整えていくことが大切であることをとらえること

※　栽培業については種の多様性といった面からの限界があること，養殖業については中国からの輸入が増えるという先行きの不透明感があることを話して頂き，天然魚を育ちやすい環境づくりが先決で，その後に栽培や養殖の技術があることを話していただく。

3　とらふぐの漁獲量を増やしていくための見直した考えを話し合う。

○　自然環境や社会環境を生かした取り組みを考え直すこと

・　海をきれいにして稚魚が大きく育つようなことが必要になってくるな。海をきれいにする取り組みが必要になるな。

※　吉松さんや吉村さんの話をもとにしながら考えを見直させる。

共通課題を通して，家族とのかかわりを追究する家庭科学習

第5学年2・3組　家庭科学習指導案

指導者　　木　村　真　美

題　材　家族を喜ばせる物を布でつくろう！　ーネームプレートへ広がる家族への思いー

指　導　観

○　本単元は，自分の家庭生活へのかかわり方を考える学習のなかで生じてきた，家族を喜ばせたいという願いを実現するために，布を用いた生活に役立つ物の製作方法を追究していく家庭科学習である。生活に役立つ物の製作の方法を追究する活動を通して，縫うなどの製作に関する基礎的な技能を身に付け，家族の一員として家庭生活への参画の仕方を工夫していくことをねらいとしている。具体的には，①生活の中で役立っている物は使う人や場面などを考えて形が作られていることが分かり，家族を喜ばせるために布を用いた物の製作計画を立てること，②形や大きさを工夫し，手縫いによる目的に応じた簡単な縫い方で製作ができることが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，家族の一員として家庭生活を工夫するために，家庭科の学習に取り組んでいることを意識している。しかし，家族を喜ばせたり楽にしたりするための知識や技能が身に付いているわけではない。自分が家族のために作ろうとする思いがあっても，自分が思った通りの物ができないのであきらめる状況もみられる。生活に役立つ物の製作の体験的活動を通して，作る楽しさや日常生活に活用する喜びを味わうことを大切にし，製作に関する基礎的な技能を身に付け活用する力が，より一層高まるようにしていきたい。

○　本単元の指導においては，作り上げる過程や必要な作業を考えながら，布を用いた生活に役立つ物の製作を追究する。つかむ段階では，手作りのよさに触れる活動を通して，家族の生活に役立つ物を製作するために必要な個人課題をつかませる。その際，個人課題を解決するために，丈夫な縫い方やずれない縫い方を共通の課題として位置付ける。さぐる段階では，生活に役立つ物を製作する。その際，玉止め・玉結び，なみ縫い・返し縫いを使って製作をし，丈夫に縫えたか見直しをさせる。つくる段階では，自分が計画した生活に役立つ物に形や縫い方を工夫したネームプレートを付けることによって家族のために作る物を完成できるようにする。

目　　標

1　布を用いた物の製作計画を立て，使う人や場面などを考えた生活に役立つ物を工夫できる。

2　形や大きさ，縫い方を友達と比べながら，布を用いた物の計画を立て手縫いによる簡単な縫い方を理解し工夫できる。

→ 生活に役立つ物を工夫して創り出す創造性
→ 自らの方法を見い出す主体性
→ 工夫のよさを認め合う社会性

計　　画　（約８時間）

段階	第１次　つかむ段階（３時間）	第２次　さぐる段階（３時間）	第３次　つくる段階（２時間）
活動と内容	1　家族の一員として自分が工夫できることを考える。 (1) 布を用いた物について話し合い製作するものを考える。　① ○　布を用いた生活に役立つ物のよさが分かること　（個人課題） (2) 家族を喜ばせるために，自分の思いを表現するための製作計画を立てる。（共通課題）　② ○　丈夫な縫い方をすること ○　ずれない縫い方が分かること ○　必要な技能が分かること	2　手縫いによる丈夫な縫い方（共通課題）が分かり，生活に役立つ物を自分なりに工夫する。 (1) 家族への思いを表現した物を，手縫いによる丈夫な縫い方で縫う（共通課題の解決）　② ○　玉止め，玉結び，なみ縫い，返し縫いやまち針をうてること (2) 共通課題で解決したことから自分の製作計画を見直す。　本時① ○　ネームプレートを工夫すること ○　縫い方の計画を見直すこと	3　家族の生活に役立つ物につけるネームプレートを工夫して製作する。 （個人課題の解決） ○　自分で考えた物を作り上げる過程や必要な作業が分かり，できること ○　工夫して物を作り上げる達成感の感受 ↓ 家庭で活用する
支援	※　布のよさに触れる活動の設定 ※　個人課題から共通課題を見通す模擬体験の場の設定 ※　チェックカードの作成	※　手順表の作成 ※　縫い方見本の提示 ※　段階見本の掲示 ※　チェックカードによる評価の設定	※　完成見本の掲示 ※　チェックカードでの評価 ※　家庭科だよりの発行 ※　家庭実践カードの作成

本時の目標

1　出来上がった生活に役立つ物について丈夫な縫い方の観点から話し合い，自分の製作計　画やネームプレートの工夫を見直すことができる。

2　友達や自分の計画のよさを感じ，家族のための工夫を考えることができる。

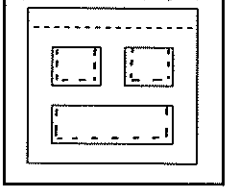
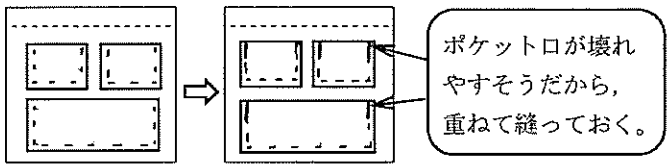
本時の主張点

本時指導にあたっては，手縫いによる丈夫な縫い方をした生活に役立つ物の製作を振り返ることからネームプレートや縫い方を見直すことで家族を喜ばせるものを工夫することがねらいである。そのために，チェックカードをもとに丈夫な縫い方から見直させる。また，ネームプレートの計画を自分なりの技能に合った工夫から見直すことできるようにする。

準　　備

縫い方見本（なみ縫い，返し縫い，玉どめ，玉結び）
ネームプレート見本，チェックカード，

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　家族の生活に役立つ物の縫い方について話し合い，本時学習のめあてを確かめる。 ○　前時学習の想起と本時学習のめあての把握 ・なみ縫い，返し縫いなどによる手縫いによる丈夫な縫い方 ・ネームプレートの製作 （めあて）　丈夫な縫い方について話し合い，生活に役立つ物の縫い方やネームプレートの計画を見直そう。 ※　前時のチェックカードを使って，自分の縫い方の課題を見直させる。 ※　完成予想図を提示し，ネームプレートをどこにどんな付け方をするのか確かめさせる。	○　みんなが物を片付けなくてお母さんが一人でみんなの物を片付けて大変そうだから，みんなの使う小物が入れられるウォールポケットを作って，お母さんの仕事が少なくなるようにしたい。 ○　ポケットから物が落ちたりしないように丈夫に縫えたか友達に見てもらおう。
ウォールポケット 	
2　丈夫な縫い方について話し合い，生活に役立つ物の計画を見直す。 (1) 製作した生活に役立つ物の縫い方について話し合い，縫い方を見直す。 ○　丈夫な縫い方ができたか振り返ること ※　製作した物の縫い目を見たり，物を入れたり，友達の縫い方と比較したりして丈夫な縫い方になっているかチェックカードをもとに確かめさせる。 (2) ネームプレートの工夫について話し合い，計画を見直す。 ○　家族への思いを表現したり，形や縫い方を工夫すること ※　完成見本を掲示したり，児童の実態に合わせたネームプレートの例を紹介したりする。	○　ポケットの口のところが物を入れるとあいてしまうから，もう少し細かいなみ縫いで縫った方がよかったな。でも，縫い直すのは時間がかかるから，見本にあるように重ね縫いをしようと思う。 ○　お父さんはメガネを入れるので，メガネの形のネームプレートしたいメガネのところはなみ縫いで縫う予定だったけれど，レンズもフェルトで作ることにして，なみ縫いで縫い合わせよう。 ○　レンズをつけるときは，まち針で止めてずれないようにしよう。
予想される例　（ウォールポケットの場合）　（ネームプレートの場合） 	
3　ネームプレートや生活に役立つ物の縫い方の計画を見直して，製作計画を完成させる。 (1) 生活に役立つ物の縫い方を見直したことについて発表する。 ○　自分の技能に合った縫い方やじょうぶな縫い方を考えること ※　糸の色を変えたり，重ね縫いをしたモデル作品を提示する。 (2) ネームプレートの工夫について発表する。 ○　丈夫な縫い方をするための自分の課題や製作した物から作品を完成させるための解決の見通しをもつこと	○　細かい縫い目で縫うことは苦手だけれど，重ね縫いすると丈夫な物を自分で仕上がることができることがよく分かった。ネームプレートも布を合わせて作りたいな。 ○　次の時間にはウォールポケットがもっと丈夫になるようにポケット口を重ねて縫ってから，ネームプレートを付けて作品を完成させたい。

物が燃えるときの現象から，燃焼の仕組みを空気との関係で問い続ける理科学習

第６学年１・３組　理科学習指導案

指導者　　手　島　宏　樹

単　元　ものの燃え方と空気との関係を探ろう！

指　導　観

○　本単元は，紙や木片，ろうそくなどを缶や瓶の中で燃やし，物が燃えたり消えたりする現象を空気との関係で追究していく理科学習である。ものの燃え方の違いを空気の入れ替わりや空気の量，質的変化などに着目して多面的に追究する科学的追究力を育てることをねらいとしている。本単元での主な学習内容は，①植物体が燃えるときには，空気中の酸素の一部が使われ二酸化炭素ができること，②酸素には物を燃やす働きがあることなど，燃焼の仕組みや空気の性質についての考えをもつことである。

○　本学級の子供たちは，自然事象と要因とを関係づけて定量的に追究したり，計画的に追究したりなど課題意識を明確にもち意欲的に観察，実験に取り組んでいる。実験結果と自分の見通しとのズレを感じると再追究したり，友達との話し合いで吟味したりしている。内容面については，車の排気ガスなど物が燃えると空気が汚れ大気汚染等の環境問題につながりがあることには気づいている。しかし，物が燃えるとすべてが汚れた空気に変わるというとらえ方をしており，物の燃焼の仕組みと空気の質的変化については十分にとらえているとはいえない。

○　本単元の指導においては，物が燃える前後の空気の質的変化という視点で燃焼の仕組みについての考えを深めることができるようにする。そのために，まず，つかむ段階では，缶や瓶の中で，さらには，缶に穴を開けたり空気を送ったりして物を燃やす。そして，新しい空気にふれたときとふれないときの燃え方の違いから燃焼前後の空気についての課題をつかませる。次に，調べる段階では，燃焼前後の空気の質的変化を調べさせる。その際，より定量的に調べさせることにより燃焼の仕組みについての考えを深めさせる。最後に，まとめる段階では，ものづくりを行わせる。

目　　標

１　自分の見通しをもとに，ものの燃え方と空気の変化との関係を調べ，燃焼の仕組みについての考えをもつことができる。 ⇢ 物の燃え方と空気との関係をとらえていく創造性

２　自分の見通しや働きかけを実証性・合理性の観点から見直したり，調べた結果や考えを友達と話し合ったりして燃焼の仕組みを共有することができる。 ⇢ 働きかけを見直す主体性 ⇢ きまりを共有する社会性

計　　画　（約１１時間）

段階	第１次　つかむ段階（４時間）	第２次　調べる段階（４時間）	第３次　まとめる段階（３時間）
活動と内容	１　缶や瓶の中で物を燃やす。 (1) 缶の中で紙等を燃やす① ○　底の物は燃えないこと (2) 缶に穴を開けたり空気を送ったりして燃やす。① ○　新しい空気にふれると物はよく燃えること (3) 物が燃えるときの空気の動きを調べたり閉じた瓶の中で物を燃やしたりする② ○　空気の入れ替わりがあるところでは燃え続け，ないところでは消えること ○　物を燃やす働きのある空気とない空気への焦点化	２　物を燃やす前後の空気の質的変化を調べる。 (1) 物を燃やす働きのある空気について調べる。② ○　酸素には物を燃やす働きがあり，酸素が減ると物が燃えなくなること (2) 物を燃やす前後の空気を石灰水をつかって調べる。① ○　物を燃やすと二酸化炭素ができ，二酸化炭素は物を燃やす働きがないこと (3) 物を燃やす前後の空気の質的変化を定量的に調べる。（本時）① ○　物が燃えるときには，酸素の一部が使われて減り，後に二酸化炭素ができること	３　ガスバーナーやコンロなど身のまわりの道具の仕組みを調べたり，ものづくりを行ったりする。 (1) 身のまわりのものを燃やすための工夫や仕組みを調べる。① ○　空気の出入りを考えた工夫があること (2) 燃焼の仕組みを利用したものづくりを行う。② ○　身のまわりの材料をつかってのコンロ，ランプ，ろうそく，酸素づくりなど
支援	※　縦長のアルミ缶，ガラス管線香などの器具の準備 ※　イメージ図への表現の促し	※　過酸化水素水，二酸化マンガン，石灰水，気体検知管などの器具の準備と提供 ※　燃焼前後のイメージ図への表現の促し	※　ガスバーナー，コンロ，ランプなどの道具の準備 ※　ものづくり計画書作成

本時の目標

1　物が燃えるときには，酸素の一部が使われて減り，後に二酸化炭素ができるという燃焼による質的変化についての考えを深めることができる。

2　気体検知管をつかって，燃焼後の酸素量，二酸化炭素量を定量的に調べることができる。

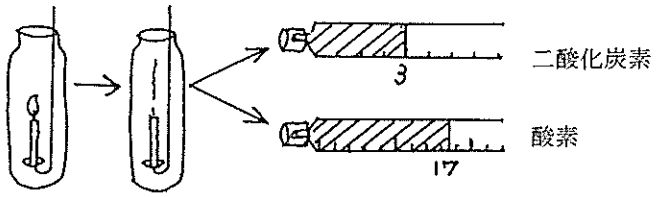
準　　備

集気瓶での燃焼実験に関する器具，酸素検知管，二酸化炭素検知管，大型水槽

本時の主張点

本時指導にあたっては，物が燃えると酸素がなくなるととらえている子供たちに，物が燃えると酸素の一部が使われ二酸化炭素に変化すること，一定量の酸素がないと物は燃えないことをとらえさせる。そのために，燃焼後の空気組成をモデル図に表現させ話し合わせる。そして，気体検知管を使って燃焼後の酸素量と二酸化炭素量を調べさせる。

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　前時までの学習を想起し，本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 前時までの学習内容について確認する。 ○　物が燃えると酸素が使われ二酸化炭素ができること (2) 蓋をした集気瓶の中でろうそくの炎が消えていく様子を観察して，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　ろうそくが消えた後の集気瓶の中の気体についての課題意識 ・集気瓶の中の酸素が使われたから火が消える。 ・二酸化炭素ができているから，再び火のついたろうそくを入れても火が消える。 ※　ろうそくの火が消えた理由をもとに，物を燃やした後の集気瓶の中の気体の様子に絵図で焦点化させる。 （めあて）　ろうそくが消えた後の集気ビンの中の気体の様子について話し合い，調べよう。	○　酸素が発生しているときは物が激しく燃えた。発生がなくなると消えた。酸素には物を燃やす働きがあった。 ○　物が燃えた後の集気瓶に石灰水を入れると白く濁った。物が燃えた後には二酸化炭素ができる。 ○　ろうそくの火が消えたのは酸素が全部使われたからだ。 ○　一度ろうそくを燃やした集気瓶の中に，再び火のついたろうそくを入れてもすぐに火が消えるのは，酸素がなくなっているからだ。そして，二酸化炭素になっているからだ。
2　物が燃えた後の集気ビンの中の気体の様子について予想し，話し合い物の燃焼による空気の質的変化を定量的に調べる。 (1) 物が燃えた後の集気ビンの中の気体について予想し，話し合う。 ○　物が燃えた後の酸素や二酸化炭素の有無，及び質的変化に対する考えの表出 ※　物が燃えた後の空気の組成をモデル図に表現させ話し合わせる。窒素は燃焼には関係しないことを事前に指導しておく。また，酸素量や二酸化炭素量を測定する気体検知管の使い方を絵図で知らせる。 (2) 気体検知管を使って物が燃えた後の酸素と二酸化炭素量を調べる。 <ろうそくの火が消える　→　気体検知管での測定>  ○　物の燃焼による空気の質的変化についての考えの深まり	○　物が燃える前の空気には，窒素がおよそ4/5(78%)で酸素が1/5(21%)くらいで，二酸化炭素や水蒸気がほんの少し(1%)だった。 ○　物を燃やしたら，酸素がなくなって(0%)，空気中にあった酸素が全部二酸化炭素に変わると思う。だから二酸化炭素の量が増える(21%)ことになるだろう。 ○　この考えをイメージ図に表そう。 ○　ぼくと同じ考えの友達が多いぞ。 ○　気体検知管で量が調べられるのかさっそく調べよう。 ○　あれっ。まだ酸素がこんなに(17%)残っている。でも物は燃えないんだ。 ○　全部，二酸化炭素に変わるんじゃないのか。
3　実験結果について話し合い，学習のまとめをする。 ○　物の燃焼の際には酸素の一部が使われること。そして，使われた酸素が二酸化炭素に変化すること ○　空気中に一定量の酸素がないと物は燃焼しないこと ※　集気ビンでの燃焼実験と絵図を使い，一定量の酸素がないと物が燃えないことをまとめる。	○　物が燃えるときには酸素の一部が使われるんだ。それが二酸化炭素に変化しているんだ。 ○　酸素の量が一定量ないと物は燃えないんだ。

筆者の考えを確かに受け止め，自分の考えを広げ深める読書力を高める国語科学習

第6学年2組　国語科学習指導案

指導者　平島健二

単元　読書から考えを広げ深めよう!「宇宙からツルを追う」

指導観

○　本単元は，「宇宙からツルを追う」なぞを読み深めていく活動を通して，文章の構成や表現の仕方に注意して要旨を読み取り，課題を発展させながら第二教材を読み，考えを書きまとめていくことをねらっている。具体的には，①共通教材の文章構成や表現の工夫などから筆者の考えを読み取ること，②共通教材を通して発展課題をもつこと，③発展課題を解決するために第二教材を選択し，ツルや湿原の保護について興味をもって読むこと，④自分の立場や考えをはっきりさせながら，第二教材から情報を読み取り，発展課題に対する自分の考えを作ること，⑤筆者の考えについての感想を深め，発表することが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，段落相互の関係を考えて，文章の中心的事柄を読み取り，要旨をとらえることができるようになってきている。また，筆者の考えを補うような課題で共通教材を深めていく読み方，自分の必要な情報を第二教材から探して読むという読み方を学んできている。しかし，自分の関心点を中心に筆者の考えをより豊かにとらえ直し，感想を深めていくような読み方はまだできていない。そこで，自分に引き寄せた課題で文章にかかわらせ，課題に応じて情報を集めたり，必要な情報を効果的に判断・選択し筆者の考えを確かにしたりしながら感想を深めていくような理解・表現の力が高まるようにしていきたい。

○　本単元の指導にあたっては，共通教材で筆者の考えを文章構成や表現の工夫などからとらえ，第二教材を通して自分の考えを創造することができるようにしたい。つかむ段階では，「宇宙からツルを追う」という題名に出合い，共通教材への関心を高め，筆者の論を追究する読書課題をもたせる。深める段階では，事例を通して文章構成とともに要旨を読み取った上で，筆者の主張とシンクグローバリー（地球規模で考える）についての補助教材に出合わせ，筆者の考えをより深め広げるための発展課題をもたせる。深め広げる段階では，発展課題に必要な文章を選択し，筆者の考えをさらに追究していく。その中で「地球規模」に対する自分の考えを判断していく。最後に考えを整理し書きまとめて読みを評価し，充実感を味わわせていきたい。

目　標

1　「宇宙からツルを追う」で筆者の考えを文章構成や表現の工夫などからとらえ，自然環境の保護について関心をもって第二教材を選択し，集めた情報を想像し，思考し，判断して感想を深めることができる。　（創造性）

2　「宇宙からツルを追う」を読み，筆者の考えを明らかにしようとする課題から筆者の考えをよりよくわかるための課題へ発展させ，第二教材を通してもった自分の考えを表現することができる。　（主体性・社会性）

計　画　（約１４時間）

段階	第１次　つかむ段階（2時間）	第２次　深める段階（７時間）	第３次　深め広げる段階（５時間）
活動と内容	1　「宇宙からツルを追う」の筆者の考えについての読書課題をもつ。 (1)　「宇宙からツルを追う」という題名から気がかりをもち，通読する。　① ○　通読し，気がかりに対する感想をもつこと (2)　気がかりを話し合い，読書課題をもつ。　① ○　読書課題をもつこと	2　読書課題を読み取りながら要旨をとらえ，さらに課題を発展させる。 (1)　読書課題をもとに筆者の考えを読み深める。　⑥ ○　筆者の考えと事例を結びつけ，文章構成をとらえること (2)　筆者の主張を読み取った上で，さらに広がっていく課題に発展させる。　① ○　筆者の主張を読み取り，課題を発展させること	3　第二教材を選択し，情報を収集しながら自分の考えを広げたり深めたりする。 (1)　課題に応じて第二教材を選択し，情報を集める。　**本時４／４④** ○　課題に応じて文章を選び，情報から想像・思考・判断すること (2)　発展課題に対する自分の考えを作り，書きまとめる。　① ○　筆者の考えに対して，自分なりの応えをもつこと
支援	※　共通教材との出合わせ方の工夫 ※　友達の感想の違いを明らかにした話し合い	※　段落相互の関係をとらえる学習ノートや板書の工夫 ※　筆者の述べている事例にズレを起こさせる補助教材の提示	※　個を生かす話し合いの仕方の工夫（同じ追究課題でのグループ化） ※　第二教材を選択しやすいような図書選択コーナーの設置

本時の目標

1　「地球規模で考えなくてはならないとはどういうことか」という発展課題の読みをもとに小集団で話し合い，選択した情報を想像し考えたことから自分なりに判断する読み方をすることができる。

2　環境問題の現状や影響，原因，対策を調べた上で，環境問題が解決できるか自分の立場や意図をはっきりさせて友達の考えと比べながら話し合うことができる。

本時の主張点

本時指導にあたっては，それぞれの課題で情報を集め，想像・思考してきたことから筆者のいう「地球規模」に対する考えを深めさせたい。環境問題を解決できるのか友達と知恵を出し合いたいという求めから小集団活動の必然性をもたせたい。そして全体で，個人レベルと国レベルという側面から「地球規模」という意味について考えを広げ深めさせたい。

準　　備

板書用カード，拡大本文，学習ノート，流れ図

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　発展課題について前時までに読み取ってきたことを話し合い，本時学習のめあてを確かめる。 ○　前時学習の想起と本時学習のめあての把握 発展課題（例） 筆者が主張している「地球規模で考えなくてはならない」とは，どういうことか他の自然環境の保護を調べて考えよう。 ※　環境問題を解決できるのか，同じ環境問題を調べているもので知恵を出し合う必然性をもたせ，めあてを導く。 （めあて）　どんなふうに「地球規模」で考えれば環境問題が解決できるのか，同じ環境問題を調べている友達と話し合おう。	○　地球上では，いろいろな問題が起こっていたんだな。 ○　自分が選んだ環境問題について，調べてきたぞ。 ○　環境問題を何とか解決したいぞ。 ○　解決する方法を考えてきたけど，本当に解決できるのかな。 ○　同じ環境問題を調べてきた人と相談して知恵を出し合いたいな。 ○　筆者がいっている地球規模で考えると解決できるのかな。グループで確かめてみよう。
2　発展課題をもとにそれぞれの環境問題についてグループで話し合い，全体で考えを出し合う。 (1) 発展課題について読み調べてきたことをグループで話し合う。 ○　お互いに調べてきたことをもとに考えを広げ深めること ※　同じ問題を調べてきた者どうしでグループを構成し，話し合わせる。 ※　①本当に解決できるのか，②地球規模で考えるとはどういうことかという話し合いの柱で話し合わせる。	○　本当に解決できるのか，ぼくの疑問を友達に聞いてみよう。 ○　友達と話し合ってみるといい考えが出てくるかもしれないな。 ○　筆者がいっている地球規模で考えるということをはっきりさせよう。

予想される環境問題グループの例　A地球温暖化の問題　Bオゾン層破壊の問題　C酸性雨　D熱帯林の減少

A　「地球温暖化の問題」グループ	予想されるグループでの話し合い
（現象）地球の温度が上がる （影響）異常気象（干ばつ，大洪水など） 海面の上昇（海に沈む国など） （原因）二酸化炭素など温室効果ガスの増加 （対策）化石燃料（石油など）を燃やさない 無駄な電力を使わない 地球サミット・条約・NGO	①C：石油を使わないというのは無理だから解決できない。 C：だから，電気の無駄遣いをやめて少しでもと書いてある。 C：でも，それぐらいではあまり変わらないのでは？ C：世界の人，一人一人が気をつければずいぶん違うと思う。 ②C：世界の人，一人一人が気を付けて協力することが地球規模で考えることだと思う。 C：国際会議や条約など国レベルでの取り組みも必要だ。

(2) 筆者が主張している「地球規模で考えなくてはならない」とはどういうことかについて，全体で話し合う。 ○　「地球規模で」という筆者の考えに対する感想を深め広げること ※　どの環境問題も国レベルと個人レベルの面があることに気づかせる。	○　ぼくが調べていない環境問題でも同じことが言えそうだな。 ○　少しでも環境をよくするために努力していくことが大事なんだな。 ○　地球規模で考えるということは，国どうしの取り組みと一人一人の取り組みが大切なんだな。
3　筆者が主張している「地球規模で考えなくてはならないこと」について，自分の考えを書きまとめる。 ○　いろいろな環境問題を調べた立場の友達の考えを受け止め，自分の考えを書きまとめること ※　筆者が主張している地球規模で考えるという見方を広げ深めさせる。	○　筆者がいっていた「地球規模」というのは，二つの取り組み方があったんだな。

具体的操作を通して，たのしく数にかかわる算数科学習

第3・4学年さくら組　算数科学習指導案

指導者　園田洋一

題　材　さくらぐみランドをつくって，あそぼう!

指導観

○　本学級の子供たちは，３年男子２名，４年男子１名，４年女子２名の，計５名で構成されている。子供たちの数を数える実態は，①ものと数詞を１つずつ対応させて数える，②既に数えたものと数えていないものが区別できる，③数詞を順番に唱え，ある数の次の数が決まっていることが分かる，④ものを数えた場合に，最後に唱えた数が集合の大きさを示していることなどに気づくことができてきている。しかし，数字をもとに，数をまとまりでとらえて数えることについては，個人差が大きく見られる。そこで，５や１０のまとまりをいかして数を数えたり，２ずつ数を数えたりすることができるようにしたい。

○　本題材は，さくらぐみランドづくりの活動を通して，個の実態に応じて，まとまりをいかして数を数えたり，２ずつかぞえたりすることをねらいとしている。本題材には，①数字から数を数えること，②５から数えること，②１０といくつ分で数を数えること，③２ずつ数えること，④まとまりをいかして数えたり，２ずつ数えたりすることで人形の乗り物を用意し，さくらぐみランドの場で遊ぶことなどが主な学習内容である。このような学習を通して，子供たち自らが生活の中に生きた数の知識や技能を身に付け，数という学習対象にかかわる力を育む上からも意義深い。

○　本題材の指導において，「さくらぐみランドで遊びたい。」という意識のもとに数の操作活動に繰り返し取り組んでいけるようにする。そのために，であう段階では，遊園地や乗り物の写真，乗り物コーナーを提示したり絵話をしたりして，人形を乗り物に乗せ，さくらぐみランドで遊びたいという興味・関心や目的意識をもてるようにする。つくる段階では，さくらぐみランドを作り上げるために，①人形の数を確かめる，②人数に合う乗り物を用意する，③人形を乗り物にのせ正誤に気づく，間違った場合は，②にもどる，④ドットをもとに休憩所をさがし，人形を休ませるなどの操作活動を繰り返し行う。このとき，ＡＧは５のまとまりをいかして数を数える，ＢＧは１０といくつ分で数える，ＣＧは２ずつ数えることができるようにする。いかす段階では，いろんな乗り物の遊具やコーナーを使って遊び，活動達成の成就感や，まとまりで数えたり２ずつ数えたりするよさを味わえるようにする。

目　標

１　進んでさくらぐみランドづくりに取り組み，５や１０のまとまりをいかして数えたり，２ずつ数えたりしてランドの人形を乗り物に乗せ，さくらぐみランドをまわって，楽しく遊ぶことができる。

２　数字をもとに，５のまとまりをいかして数を数えたり（AG），１０といくつ分で数えたり（BG），２ずつ数えたり（CG），して数字と数対象を対応できる。

計　画　（約５時間）

段階	第１次　であう段階（１時間）	第２次　つくる段階（３時間）	第３次　いかす段階（１時間）
活動と内容	１　遊園地の写真や，さくらぐみランドのコーナーにであい目的意識や今後の見通しをもつ。 ○　遊園地や乗り物の写真，遊具を使って遊ぶコーナーから目的意識をもつこと ○　絵話をもとに，今後の活動の見通しをもち，意欲を高めること	２　さくらぐみランドの乗り物に人形を乗せることを通して，乗り物を数える。 (1) ゴーカートに乗せる。① ○　小さい数範囲 A：６・７，B：11・12，C：10まで (2) 汽車に乗せる。①（本時） ○　大きい数範囲 A：８・９，B：13・14，C：20まで (3) ジェットコースターに乗せる。① ○　全ての数範囲	３　全ての乗り物とコーナーを使って，さくらぐみランドで遊ぶ。 ○　さくらぐみランドで遊ぶことで，活動を達成した成就感を味わうこと ○　５や１０のまとまりで数を数えたり，２ずつ数えたりすることのよさを感じること
支援	※　遊園地や乗り物の写真，コーナーの提示 ※　今後の活動を示唆する絵話の提示	※　遊具を作り遊ぶ場の設定 ※　個に応じた教材・教具（乗り物の遊具・人形・数える補助具） ※　個に応じた声かけや補助	※　完成したさくらぐみランドで遊ぶ場の設定 ※　賞賛の声かけ ※　活動を振り返る場の設定

本時の目標

1　大きい数範囲で，８・９の数字をもとに，５のまとまりをいかしながら数を数える（AG），１３・１４までの数字をもとに，１０といくつ分で数を数える（BG），１１～２０までの数字をもとに２ずつ数える（CG），などをして数字と対応づけながら，汽車に人形を乗せて遊ぶことができる。

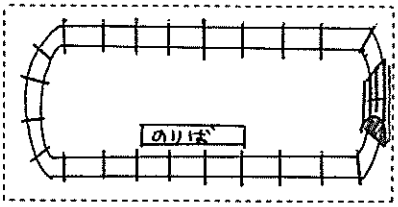
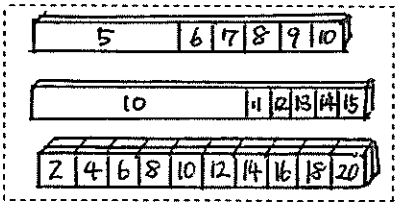
本時の主張点

本時指導にあたっては，個の実態に応じて，５のまとまりをいかしながら数を数えたり，１０といくつ分で数を数えたり，２ずつ数えたりする。そのために，さくらぐみランドの乗り物に人形を乗せる活動を位置づける。また，汽車をまとまりで選び，数えるなどの具体的操作を通して，数にかかわる力を育んでいく。

準　　備

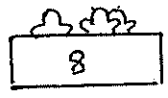
手順表，汽車，人形，数える補助具，休憩所

展　　開

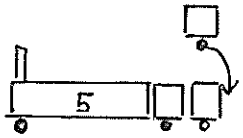
活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
1　前時までの活動を振り返り，本時学習のめあてを確かめる。 ○　汽車作りへの意欲を高めること ○　数字をもとに数えて，人形を遊具に乗せて遊ぶこと （めあて）きしゃをかぞえて，にんぎょうをのせて　あそぼう。 2　汽車を作る。 (1) 汽車への人形の乗り方を示す手順表や教師のモデル演示を見る。 ○　活動の手順や操作方法への見通しをもつこと (2) 汽車を連結する。	1　活動への目的意識や意欲をもたせる支援 ○　汽車コーナーの提示 ○　絵話の提示  ※　本時に提示するコーナー 2　個の操作活動を促す支援 ○　手順表とモデル演示の提示 ○　個に応じた教材・教具 Aグループ ・　５と１ずつ合わせる汽車 ・　操作の補助と，数唱の最後の数を意識させるような声かけ ・　ドットの休憩所 Bグループ ・　10といくつ分で合わせる汽車 ・　操作の部分補助と，数唱の最後の数を意識させるような声かけ ・　ドットの休憩所 Cグループ ・　２ずつの汽車 ・　操作の促しの声かけ ・　ドットの休憩所 ○　分からない場合の数表箱  ※　数表箱 3　活動を達成した成就感を味わわせる支援 ○　本時の活動をふり返る場の設定

Aグループ

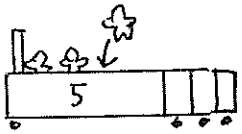
①人形のお客さんの数を読みとる。



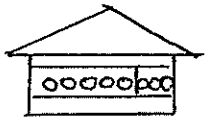
②5のまとまりの数をいかして汽車を数える。



③人形を汽車に乗せ，違いを感じる。

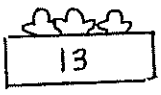


④ドットをもとに休憩所に人形を降ろす。

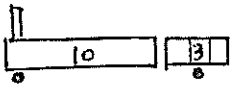


Bグループ

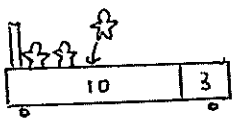
①人形のお客さんの数を読みとる。



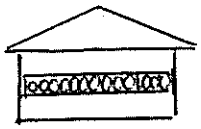
②１０といくつ分で汽車を数える。



③人形を汽車に乗せ，違いに気づく。

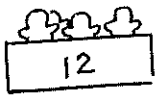


④ドットをもとに休憩所に人形を降ろす。

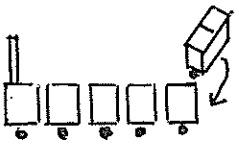


Cグループ

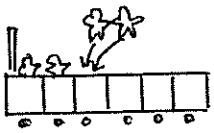
①人形のお客さんの数を読みとる。



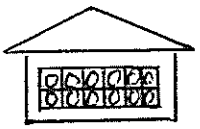
②２つずつで汽車を数える。



③人形を汽車に乗せ，正誤を判断する。



④ドットをもとに休憩所に人形を降ろす。



※　①～④を繰り返し行い，③を間違えた場合には，②へ戻る。

3　本時の活動を振り返り発表する。

○　数を数えて人形を乗せて遊んだ成就感を味わう。

おもちゃを作りたいという求めを生かして，読みの学習に取り組む特殊学級国語科学習

第5・6学年梅組　国語科学習指導案

指導者　舛元俊文（T1）　原口和美（T2）

題材　よんで　つくって　くみたてよう（読む）

指導観

○　本学級の子供たちは，精神年齢２歳から３歳程度の５年生男子２名女子１名，６年生男子１名女子２名の計６名で構成されている。読むことに関する実態は，これまでの学習から，読むことへの興味・関心が高まり，自分から絵本などを読もうとする姿が見られるようになってきた。しかし，１字１字文字を指さしながら読む子供から語句のまとまりとして読む子供，文のまとまりを意識して読む子供までと，その段階には幅がある。また，なかなか一つのことに対して意欲が持続せず，興味・関心をもって日常的に本を読もうとするまでには至っていない。

○　本題材のねらいは，おもちゃづくりの過程において，語句や文を正しく読みとらせることである。この学習における具体的な学習内容は，①おもちゃづくりに意欲的に取り組むこと，②作り方を書いてあるカードを読むことで，文字を音に置き換えて読んだり，文字をことばとしてとらえ意味を理解したり，語のつながりを文としてとらえて読んだりすることで，読むための基礎となる力を身につけること，③語と語を関連づけて読みとること，などである。以上のような学習内容を身につけることにより，①読むことに対する興味・関心，②文字を読む力や語彙力，文をまとまりとして理解する力，③言語を媒介とした表現力などを育てることができ，子供たちの現在及び将来の豊かな言語生活を考える上で意義深い。

○　本単元の指導にあたっては，子供たちの興味・関心の高い動くおもちゃを取り上げ，そのおもちゃづくりの過程においておもちゃづくりに必要な語句や文を意欲的に読みとることができるようにしていきたい。そのために，一人ひとりの興味・関心，読みの段階に応じた指導を行っていく。具体的には，「であう」段階で楽しいおもちゃづくりと出合わせ，ものを指すことばや，その操作の仕方を表すことばに出合わせ，作り方を意識させる。る。「つくる」段階では，おもちゃの作り方についての説明カードを読みとらせ，製作段階ごとに行動化と，音声化を繰り返させながらおもちゃを作らせていく。「いかす」段階では，作り上げたおもちゃを友達に紹介し，みんなで遊ぶことで，作り上げたことや，友達と一緒に楽しく遊んだことへの達成感や成就感を味わわせる。

目　標

1　おもちゃづくりに対する意欲をもち，簡単な語句や文を読むことに興味・関心をもって，楽しく動くおもちゃづくりをすることができる。

2　おもちゃづくりの説明カードを読み，おもちゃの作り方についての語句や文を正しく読みとり，動くおもちゃを作り，楽しく遊ぶことができる。

計　画　（約５時間）

段階	第１次つかむ段階（１時間）	第２次　つくる段階（３時間）	第３次　いかす段階（１時間）
活動と内容	1　うごくおもちゃと出合い楽しく遊ぶ。 ○　ゆれるおもちゃ，転がるおもちゃ，まわるおもちゃなどのうごくおもちゃと出会い，その遊び方や作り方を知り，学習に対する通しをもつこと	2　おもちゃづくりをする。 (1) おきあがり人形づくりをする。　① ○　はる・つける・とおすといったことばの意味を理解すること (2) 転がるおもちゃづくりをする。（本時）① ○　つける・とおす・つなげるといったことばの意味を理解すること (3) 回るおもちゃづくりをする。　① ○　かさねる，はさむ，さしこむといったことばの意味を理解すること	3　自分が作りあげたおもちゃの発表を行い，作り上げたことに対する達成感・成就感を味わうこと。 ○　つくったおもちゃを使って遊ぶこと ○　つなげる・とおすといったことばを使って発表し，学習の達成感・成就感を味わうこと
支援	※　うごくおもちゃの提示 ※　実際にうごくおもちゃで遊ぶ場の設定	※　個に応じたおもちゃづくりカードの提示 ※　うごくおもちゃの作り方に対する道具操作の技能に対する個に応じた支援 ※　作り上げたものを試す場の設定。	※　今まで作り上げてきたおもちゃで遊ぶ場の設定 ※　作り上げたことに対する賞賛や励まし

本時の目標

1　簡単な語句・文・文章を読んで，意欲的にうごく車を作ることができる。

AG：「ぼう」「とおす」などの語句を絵や音声を手がかりに読みとることができる。BG：「ぼうをとおす」などの２語文を絵や音声を手がかりに読みとることができる。CG：「ぼうをとおしましょう。そしてタイヤを・・・。」などの文章を読みとることができる。

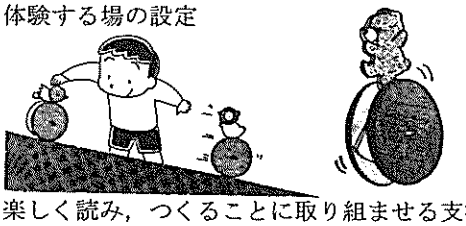
本時の主張点

本時指導にあたっては，前時行ったおきあがり人形作りを想起させ，その作り方の手順と方法を想起させる。その後で，本日つくるうごく車に出合わせ，そのおもしろさに十分浸らせ，自分も作りたいという思いをもたせる。個に応じたランゲージカードや，絵を手がかりとした説明カードを手がかりとし，製作段階ごとの行動化と音声化を繰り返し行う。

準　　備

ころがるおもちゃの部品，転がすコース６台など

展　　開

活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
1　本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 前時のおもちゃづくりを想起する。 ○　説明カードを読みとり，はったり，ぬったりしておきあがり人形を作ったこと (2) ころがるおもちゃを見て，めあてについて話し合う ○　説明カードを読んで，うごく車をつくること （めあて）　せつめいかあどをよんで，ころがるおもちゃをつくろう	1　本時学習の意欲を引き出す支援 ○　前時作ったおもちゃの提示 ○　説明カードを読んで作ったことを意識させる作り方の説明 ○　ころがるおもちゃを意識できるような提示と体験する場の設定 
2　ころがるおもちゃづくりをする。 (1) ころがるおもちゃづくりの説明カードを読みとる。 ○　語句カードや文カードを読むこと	2　楽しく読み，つくることに取り組ませる支援 ○　個に応じた説明カード

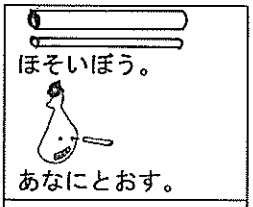
Aグループ	Bグループ	Cグループ
○　「ぼう」「とおす」などの語句を絵や音声を手がかりに読みとること	○　「ぼうをとおす」などの文を絵や音声を手がかりに読みとること	○　「ぼうをとおしましょう。そしてタイヤを・。」などの文章を読みとること

(2) ころがるおもちゃづくりをする。
○　読みとったことをもとに行動化すること

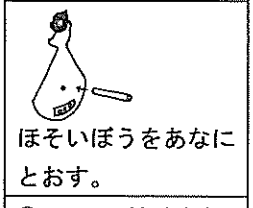
Aグループ	Bグループ	Cグループ
○　絵や音声を手がかりにして，「ぼう」と具体物を結びつけ，取り出すこと ○　声かけを受けて「とおす」という具体的な操作と結びつけ組み立てること	○　音声を手がかりにして文と具体物を結びつけること ○　「とおす」という操作の仕方を絵を手がかりにして具体的な操作と結びつけること	○　文を読み，読みとったことを基に，具体物を選び，その操作の仕方を一連の活動として読みとり，具体的な操作をし，次の活動へ自分で取り組むこと

3　ころがるおもちゃづくりを振り返り，学習のまとめをする。
○　はこにぼうを通し，ころがるおもちゃを作り上げたことへの達成感・成就感を味わう。
○　自分が作り上げた車をもとに友達と一緒に楽しく遊んだこと

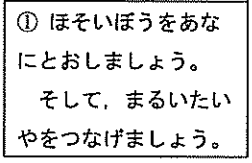
Aｸﾞﾙｰﾌﾟ：語句と音声を手がかりにした具体物とその操作の仕方が意識できるカード



Bｸﾞﾙｰﾌﾟ：操作を絵で意識できる説明カードや，その操作のしかたを意識できる絵の提示



Cｸﾞﾙｰﾌﾟ：組み立てる順番に沿った文で構成された説明カード



○　具体物とカードを結びつけることを意識できるような絵の提示
○　操作の仕方と行動を一致させることができるような動作補助
○　個に応じた声かけ，動作援助，モデル演示
○　つくりあげたころがるおもちゃを転がすことができる場の設定

3　活動への達成感・成就感を味わわせる支援
○　ころがるおもちゃを発表する場の設定
○　できあがったおもちゃについて，の個に応じた賞賛，励まし

全体会(2日目)

▼ あ い さ つ(10:30～10:45)

初等教育委員長　岩 﨑 洋 一

学 校 長　中 谷 雅 彦

▼ 教 科 等 発 表(11:10～11:50)

体 育 科

・自ら運動を構想する力を育む体育科学習

ー動きや作戦を分析的に探る体育科学習プランー

体育科部　岩 城 一 磨

▼ 主 題 発 表(10:50～11:10)

・豊かな人間の育成をめざす

教育課程の創造

ー教科・総合の学びを連動する

<ふくおかプラン>の展開ー

研究副主任　稲 津 一 徳

総合的な学習の時間

・自己の生き方を創るあらつ学習

ー本校の総合的な学習の時間の

単元づくり・カリキュラムづくりー

総合部　髙 野 誠 一

▼ 児 童 発 表(11:50～12:00)

・創り出そう！私達のハーモニー

指導者　豊 村 雅 義

第２日目　午後の部

提案学習指導案

▼ 提案学習指導（１３：００～１３：４５）

学年　組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
２年１組	学級活動(特別活動)	教生先生とやってみたいこと	矢野俊次	２年１組教室
２年２組	生活科・図画工作科（合科）	外国人さんとおめんカーニバルをひらこう！	北田尚雄	工作室
４年１組	あらつ学習（総合）	つくろう！あらつふれあいウォーキングコース	原　クミ	４年１組教室
４年２組	体育科	つなごう!ねらおう!４の２オリジナルバウンドゲーム	稲津一徳	附中体育館
６年１組	あらつ学習（総合）	レッツ・エンジョイ・コミュニケーション	野口信介	子供スタジオ
６年２組	社会科	日本文化の源流を探ろうⅠ	髙野誠一	6年1･2組教室

▼ 帰国子女教育提案学習指導（１３：００～１３：４５）

４～６年３組合同	国際交流タイム（総合）	楽しもう！世界のメルヘン	野田真功	５年２組教室

▼ 障害児教育提案学習指導（１３：００～１３：４５）

ふじ組 さくら組 梅　組	合同生活単元学習	みんなでフルーツパーティーをしよう	谷崎和一郎・舛元俊文 原口和美・園田洋一	特殊学級棟 音楽室

子供の願いを実現しよりよい学級生活をおくる，その楔となる学級活動

第２学年１組　学級活動指導案

指導者　　矢　野　俊　次

題　材　教生先生と やってみたいこと

指　導　観

○　本学級の子供たちは，昨年，教生先生と楽しく過ごした経験をもっている。そして，今年の教育実習でも教生先生と一緒に楽しい学級生活を送りたいという願いと期待をもっている。しかし，具体的にどんなことをしていきたいのかという意識はなく，一緒に遊びたい，一緒にお話をしたいといった漠然としたもので，自分から積極的にかかわって，自分たちで楽しい教育実習にしていこうとする意識は薄い。そこで，本題材では，教育実習中の学級生活を見通し，教生先生とどんなことをやってみたいか話し合うことで，学級生活に対する意欲や目標をもたせ，集団の一員として積極的に活動にかかわりながら，よりよい学級生活をつくっていくことができるようにしたい。

○　本題材のねらいは，教生先生と一緒に楽しい学級生活を送りたいという子供の願いをもとに，活動を考え，友達と協力して実践していくことである。具体的には，①教生先生と一緒に楽しく学級生活を送っていきたいという個々の願いを学級全員の願いとして共有化すること，②教育実習期間に教生先生と一緒にどんなことをしていきたいのか活動の見通しをもつこと，③各係で役割を分担し，活動の実現に向けて具体的な計画を立てること，④お世話する係を中心としながら，計画した活動をみんなで実践し楽しい学級生活を送っていくことが主な内容である。このことは，よりよい学級生活を自分たちの力でつくっていこうとする態度を育成していくことにつながる。

○　本題材の指導にあたっては，子供たちの願いを大切にしながら，子供たちが積極的に活動にかかわりながら，楽しい教育実習をつくっていくことができるようにしたい。そのために，まず，事前の活動で，教育実習に対する個々の願いを話し合い，学級共通の願いとして共有化する。次に，本時の活動において，各個人の活動のアイデアをもとに，学級として実践していきたい活動について話し合う。その際，教生先生側からも活動のアイデアを出してもらうことで，学習中も含めた活動を見通していく。そして，係活動を活用し，どの係がどの活動をお世話していくのか決めていく。事後の活動では，各係が具体的な活動計画を立て，教生先生の肯定的な評価を与えながら，みんなで協力して実践させていきたい。

目　　標

1　よりよい学級生活をめざして，友達と協力し合いながら，教生先生と一緒に楽しく活動を実践していくことができる。 ⇢ 自分の役割を責任もって行おうとする主体性

2　全員でどんなことをしていくのか話し合うとともに，その実現に向けて各係が具体的な活動の計画を立てることができる。 ⇢ 活動の仕方を検討する創造性 ⇢ 友達のよさを認め合う社会性

計　　画　（約２時間＋課外）

段階	第１次　つくる段階（事前）	第２次　決める段階（２時間）	第３次　行う段階(事後)
活動と内容	1　教育実習に対する願いを話合い，教育実習期間中にどんなことをしていきたいのかアイデアを考える。 ○　教育実習に対する願いの共有化 ○　願いを実現する自分なりのアイデアを考えること	2　教生先生と一緒にどんなことを行っていきたいのか話し合う。 (1) 教育実習期間にやってみたいことについて話し合う。(本時)① ○　どんなことをしていくのか決めること (2) 各係が具体的な活動計画を立て，活動の準備をする。① ○　活動を計画・準備していくこと	3　各係がお世話をしながら，教生先生と一緒に楽しく充実した学級生活を送っていく。 ○　協力して実践活動を行うこと ○　達成感，満足感を味わうこと
支援	※　昨年の活動の想起 ※　個々の思いや願いを引き出す支援	※　教生先生からの活動のアイデアの提示 ※　教育実習期間中の活動の見通しをもつ行事等の計画表の活用	※　活動に対する援助 ※　教生先生からの肯定的な評価

＜意欲を高めることが期待される教科や行事＞

音楽科「体でリズム，楽器でリズムを感じよう」　　体育科「宝島をぼうけんしよう」

生活科「おもちゃランドであそぼう」　　学校行事「スケッチ会」

本時の目標

1　教生先生とどんなことをやってみたいか話し合うことで，教育実習期間中の学級生活に対する見通しや意欲をもつことができる。

2　友達の意見をしっかりと聞いたり，自分の考えを積極的に述べたりして，学級の一員として学級生活を協力してよりよいものにしようと話し合うことができる。

本時の主張点

本時指導にあたっては，教育実習期間中の学級生活を楽しく充実したものにしていくために，教生先生とどんなことをやっていきたいか話し合わせる。このことで，教育自習期間中の学級生活に見通しと意欲をもち，教生先生と一緒によりよい学級生活をおくっていこうとすることができる。

準　　備

昨年の教育実習の写真，学級活動ノートなど

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　昨年の教育実習で教生先生と一緒にどんなことをしたか想起し，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　本時学習のめあてを把握すること ・去年は教生先生と一緒にいろいろなことをして楽しかったな。 ・今年も，教生先生と一緒にいろんなことをして楽しい教育実習にしていきたいな。 （めあて）　教生先生といっしょにどんなことをしていきたいか，みんなで話し合おう。 ※　昨年の教育実習での教生先生と一緒に楽しく活動している様子がわかる写真を提示することで，今年も教生先生と楽しく学級生活を過ごしたいという意識をもたせる。	○　去年は，スケッチ会で教生先生の絵を描いたな。教生先生からほめてもらったからうれしかったな。 ○　休み時間は，一緒に鬼ごっこやドッジボールをしたな。 ○　去年の教育実習では，教生先生と一緒にいろいろな活動をして楽しかったな。 ○　今年の教育実習も，教生先生と楽しく過ごしていきたいな。 ○　どんなことを教生先生と一緒にやったら，楽しい学級になるかな。
2　教生先生と一緒にどんなことをしていきたいか話し合う。 (1) 教育実習期間中に教生先生とどんなことしていきたいか話し合う。 ○　教生先生と一緒にできる活動のアイデアを表出すること ・休み時間は，教生先生と一緒に遊びたいな。 ・給食はいろいろな教生先生と一緒に楽しく食べたいな。 ・生活科では，動くおもちゃを一生懸命作りたいな。 ・最後には，お別れ集会を今年もやりたい。 ○　教生先生と一緒にする活動を決めること ※　本年度の教生先生からも，２の１の子供たちとどんなことをしていきたいのか話をしてもらうことで，学習中も含めた学級生活をよりよいものにしていく活動のアイデアを出す。 ※　決まった活動については，いつごろ実践していくのか行事計画に書き込んでいくことで教育実習期間中の見通しをもたせる。 (2) 決まった活動を実践していくために，自分の係はどんなことをして協力していけるかについて話し合う。 ○　みんなで協力して，よりよい学級生活を送っていくための自分の役割を明らかにすること ※　自分たちの係ではどんなことができるのか話し合わせ，積極的に活動にかかわっていけるようにする。	○　今年は，まだ４日しかたっていないので教生先生とあまり話をしてないから，いろんな教生先生といっぱいお話がしたいな。 ○　去年のように，教生先生と鬼ごっこをしたりドッジボールをしたりしたいな。 ○　最後に日は，教生先生とお別れするのは寂しいけど，プレゼントをやったり，一緒に歌を歌ったりしてお別れ集会をしたいな。 ○　教生先生は，国語と生活と図工と学級活動を教えてくれるのか。生活では動くおもちゃを作るから，それを一生懸命作りたいな。 ○　どんなことをするかは決まったけど，自分たちの係ではどんなことができるかな。 ○　ぼくは，「ふれあいあそび係」だから，教生先生と一緒に遊ぶことのお世話ができるぞ。
3　教育実習期間中の自分のめあてを書き，本時学習のまとめをする。 ○　自己のめあてをもち，これからの学級生活に意欲をもつこと ※　自分がどの活動のお世話をしていくのかノートに書かせ，学級の一員としての役割を明らかにさせる。 ※　教生先生から今後の学級生活に対する期待を話してもらうことで，今後の活動に対する意欲を高める。	○　教生先生と楽しく過ごしていくために，ぼくはいろいろな遊びを考えてみんなに呼びかけていこう。 ○　よーし，あと３週間，教生先生と楽しい学級をつくっていくぞ。

身近にあるものから，自分たちの遊びに使うものをつくりだす学習を

第2学年2組　生活科・図画工作科(合科)学習指導案

指導者　北田尚雄

単元　外国人さんとおめんカーニバルをひらこう！

指導観

○　本学級の子供たちは，普段から，おもちゃ作りなどを好む子供が多く，また，色や身近な材料に対する興味・関心は高い。また，これまで多くの人とのふれ合いから，学校の友達，先生や地域の方など自分に身近な人への気付きと親しみを深めてきている。そして，「もっと多くの人と仲良くなりたいな。」という思いをふくらませてきている。このような子供たち自身の求めから，外国人さんとふれ合う機会をつくり，いっしょに遊ぶためのものを，身近な材料をつかってつくったり，遊んだりすることで，身近なもの・人・ことに対する親しみがわいてくるという面で価値がある。

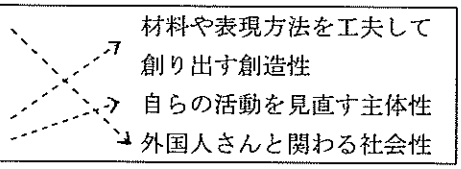
○　本単元は，外国人さんと共に外国のカーニバルでつかうお面をつくり，一緒に遊ぶ体験から図画工作科の創造性を高めるとともに，身近なものをつかってお面をつくり，みんなで遊びを楽しむことがねらいである。また，生活科と図画工作科との合科的な立場をとる単元である。具体的には，①外国人さんアーティストや外国のお面との出会いから，いっしょにお面をつくったりする造形活動を楽しむとともに，楽しいお面カーニバルをして遊びたいという意欲をもつこと，②外国人さんと一緒にお面をつくりながら，身近な材料や色を工夫して，もっと素敵なお面をつくっていくこと，③身近にある材料を使いながらお面をつくり，そのお面をつかった遊びを工夫することである。

○　本単元の指導において，活動内容としては，外国人さんと一緒にお面をつくり，実際に遊ぶ体験から，外国人さんにアドバイスをもらいながらつくり方を工夫し，もっと楽しいお面をつくって「お面カーニバル」を開くといった生活場面における設定を行う。次に活動構成については，３段階で展開する。まず「であう段階」では，外国人さんや外国のお面カーニバルと出合い，一緒に遊ぶ活動の体験。「ひたる段階」では，外国人さんといっしょにお面をつくりながら，外国人さんにアドバイスをもらい，もっと楽しい素敵なお面にならないかつくり方や材料を工夫する。最後に，「生かす段階」においては“お面カーニバル”を開き，外国人さんや友達と一緒にお面をつかって遊ぶようにする。

目　標

1　外国人さんと一緒に身近にあるものを使って，遊ぶためのお面をつくり，遊びを工夫することでみんなで遊びを楽しむことができる。

2　外国人さんにアドバイスをもらいながら，お面のつくりかたを工夫してもっと楽しい自分のお面をつくることができる。



計　画　（約１０時間）

段階	第１次　であう段階（２時間）	第２次　ひたる段階（６時間）	第３次　生かす（２時間）
活動と内容	1　外国人さんと出会い，外国のお面カーニバルを知るとともに，実際にお面をつかって遊ぶ体験をする。 (1) 外国のお面カーニバルやお面をつかった遊びについて知る。　① ○　お面カーニバルやお面をつかった遊びに関心をもつこと (2) お面を使って遊び，自分だけのお面をつくりたいという求めからどんなお面をつくるか考える。① ○　自分がつくりたいお面を考える	2　楽しいカーニバルになるように，自分のお面をつくる。 (1) 身近な材料を使って楽しいお面をつくる。　（本時４／４）④ ○　自分がつくってみたいお面を身近な材料を使いながらつくること (2) つくったお面で遊びながら，もっと楽しいカーニバルになるように衣装などを工夫する。　② ○　もっと楽しい遊びになるように身近な材料選択し表現すること	3　自分たちがつくったお面をつかって「お面カーニバル」を開き外国人さんもいっしょに遊ぶ。 (1) お互いのお面を見せ合ったり遊んだりする。① ○　お面を使った遊びを工夫すること (2) これまでの活動の感想を発表する。　① ○　活動の達成感をもつ
支援	※　外国のお面カーニバルや，外国人さんとの出会いの場の設定 ※　外国人さんとお面をつかって遊ぶ体験活動の設定	※　ペーパーマッシェのつくり方のヒント提示や参考作品の提示 ※　身近な材料を使った，飾り付けのヒント提示	※　お面をかぶった外国の遊びの活動の提案 ※　お互いのよさを認め合うことができる発表会の設定

本時の目標

1　お面を使った遊びがもっと楽しい遊びになるように，自分の思いに合わせて身近な材料や色を選択・活用しながら，お面に飾り付けをすることができる。

2　外国人さんに材料や表現方法についてアドバイスをもらいながらお面をつくるとともに，お面をつけて遊ぶことから，もっと楽しい遊びについて話し合うことができる。

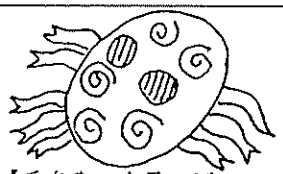
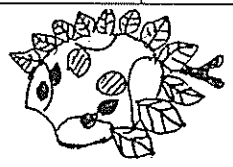
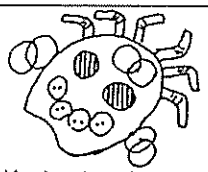
本時の主張点

本時指導にあたっては，お面を使ったカーニバルをもっと楽しい遊びにしたいという求めをもとに，お面に飾り付けをする活動を設定する。そこで，外国人さんＧＴから，身近な材料を使った付加材料の提案やカラフルな描画材などの提案をしてもらうことを通して，お面を飾り付けながら，楽しい遊びを工夫していく。

準　　備

お面，参考作品，飾り付けの材料，描画材，鏡

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　前時までにできたお面をもとに，お面を使った遊びがもっと楽しい遊びになるための工夫について話し合う。 ○　自分のお面に対する表現の思いと，外国人さんのアドバイスからもっと楽しいお面にしていくめあてをもつこと ・「お面カーニバル」が，もっと楽しいカーニバルになるように，お面の色や飾り付けの材料に関心をもつ。 （めあて）　もっと楽しいおめんカーニバルになるように，いろいろなざいりょうをつかっておめんにかざりつけをしよう。 ※　お面をつくる材料や表現方法について，身近な付加材料の提案や参考作品から飾り付けをしていく見通しをもたせる。	○　前の時間は，外国人さんのマイケルさんといっしょに，お面をつくっていったよ。 ○　もっと楽しいお面をつくったら，もっと楽しいお面カーニバルができると思うよ。 ○　外国人さんのお面は，もっと色がカラフルでとてもきれいだったよ。 ○　色だけではなく，いろいろな材料をつかって飾り付けしていっても，もっと楽しいお面ができるのではないかな。
2　外国人さんのアドバイスをききながら，身近な材料を使ってお面に飾り付けをしていく。 (1) お面に飾り付けをしていくための身近な材料や描画材を選択する。 ○　自分が表したい感じに合わせて，飾り付けをしていく身近な材料や用具の選択をしていくこと ※　外国人さんから参考作品をつかって色のヒントや，新たな材料のヒントをもらう。 (2) 自分が選んだ色や材料を使いながら，もっと楽しいお面になるように飾り付けをしていく。 ○　身近な材料の形や色などに関心をもち，好きな色を選んだり，おもしろい形をつくったりしてお面が楽しくなるように表現すること ※　色の組み合わせ方や，材料のつかいかたについて，外国人さんから，個別のアドバイスをしてもらう。	○　外国人さんのお面は，とてもカラフルだけど，どんな材料をつかっているのか聞いてみたいな。 ○　外国人さんがつかっている材料には，ぼくたちのまわりにもあるような材料がたくさんあるよ。 ○　ぼくも，外国人さんがつかっているような材料をつかってみたいな。 ○　ボタンや毛糸などの材料をたくさん使っても楽しいお面ができるよ。 ○　木の枝や木の葉などの自然のもので飾り付けしても，すてきなお面になったよ。
【予想される子供の飾り付けの工夫】  【もっとカラフルなお面にしたいから，プッシュペイントで色をつけていこう】  【毛糸や，カラービニルのひもなどをお面にくっつけていこう】  【外国人さんがやっているみたいに自然の材料をつけてもおもしろそう】  【輪ゴムやストロー，ボタンなどをつけてもおもしろい形ができるよ】	
3　できた自分のお面を，実際にかぶって遊びながら，お面カーニバルでの楽しい遊びについて話し合う。 ○　お面をつかった遊びを工夫するとことで，もっと楽しいカーニバルにしていく方法を見つけること ※　お面を使って踊ったりゲームをしたりする活動の設定	○　お面をかぶって外国のダンスをおどると，とっても楽しいよ。もっと他のダンスも踊ってみたいな。 ○　楽しいお面ができたから，これに簡単な衣装もあるともっと楽しいカーニバルができると思うよ。

知の総合化を促す支援をもとにあらつの事象をつなぎ，地域への愛着を深めるあらつ学習

第４学年１組　あらつ学習指導案

指導者　　原　クミ

単　元　つくろう！あらつふれあいウォーキングコース

指　導　観

○　本学級の子供たちは，これまでの総合の学びを経験するにあたって，あらつのもの・人・ことに出合い，その事象に対して抱いた気がかりをもとに課題をもち，実際にその場所に行って調べたり，人と直接ふれあったりして課題解決を行ってきており，あらつのもの・人・ことに対する自分なりの見方や考え方をもっている。本単元において，そのあらつのもの・人・ことをつなぎ，ウォーキングコースをつくるという追究を行わせることは，これまでにとらえたよさをさらに深めたり，新たな事象を発見したりすることにつながり，多面的な見方や考え方を広げることができると考える。さらに，表現物としてまとめていく際にはコースをマップに表すことになり，子供たちがこれまでに身に付けた地図の見方や道のりの出し方などの知を活用していくことになり，総合的な表現力の高まりも期待することができる。

○　本単元は，あらつの事象に対する点的な追究を面的な追究へと広げ，物事を多面的にとらえたり，適切な表現媒体を選んで人に伝えようする総合的な表現力を育むとともに，その過程を通してあらつへの愛着を深めることをねらいとしている。子供たちがつくり出す具体的な内容は，①あらつ界隈のウォーキング体験から，あらつのもの・人・ことへの気がかりをもち，追究したいコースづくりを設定すること②あらつのもの・人・ことに対する見方や考え方を深化・補充したり，新たな発見をしたりし，それらをつないでウォーキングコースをつくること③地図の見方や道のりの出し方などの既習経験を生かして，自分が発見した事象を地図上に総合的に表現することなどである。

○　本単元の指導においては，あらつのもの・人・ことのとらえを深化・補充・発展させ，それらをつないでウォーキングコースをつくるという実践的な課題を解決するために，体験をもとに課題を見いだすことや子供が自ら求め，既習の内容を活用するための個に応じた支援を大切にしていきたい。第１次では，教師が作成したウォーキングコースを用いて，あらつ界隈を散策するウォーキングの場を設定し，コースづくりの課題を設定できるようにする。第２次では，互いに見つけた事象をつないで歩いてみるという試しのウォーキングを設定し，そこから生まれた課題を解決するためにコースとしての条件を見いだし，マップに表現していくようにする。また，コースとして地図上に表すために，地図の見方や道のりの出し方，紹介文の書き方などを想起するヒントカードや確かめコーナーを設定する。第３次では，自分たちがつくったコースを使いながら，ウォーキングを実践する場を設定する。

目　　標

１　これまでに感じていたことや新たに発見したあらつのもの・人・ことへの気がかりからコースづくりの課題を設定し，課題解決のための情報を収集・選択・活用することができる。　----→ 主体性

２　これまでの生活や学習で身につけた知を生かしながら，コースをつくって「ふれあいウォーキング」を実践し，あらつへの愛着を深めることができる。　  創造性 / 社会性

計　　画　（約２３時間）

階	第１次　課題設定（１０時間）	第２次　課題追究（７時間）	第３次　課題解決（６時間）
活動と内容	１　あらつウォーキングを行い，あらつのもの・人・ことに対する新たな発見について話し合う。 (1)　あらつウォーキングの体験⑧ ○　新たな発見と気がかりの感受 (2)　自分が感じたよさや新たな発見について話し合う。　② ○　コースづくりの課題の設定	２　自分の課題についての情報を収集しウォーキングのコースをつくる。 (1)　試しのウォーキングを行う。　③ ○　ウォーキングの問題点から，コースづくりの条件を設定すること (2)　条件をもとにコースをつくり，表現を工夫する。（本時１／４）　④ ○　表現媒体を選択した総合的な表現	３　４の１あらつふれあいウォーキングを実践する。 (1)　ふれあいウォーキングを開く。　④ ○　活動への達成感の感受 (2)　マップを配布する。② ○　これまでの活動への肯定的な評価と自信の高揚
支援	※　気がかりを生み出すためのあらつウォーキングのコースの設定とマップの提示	※　あらつガイドの活用の促しと試しのウォーキングの場の設定 ※　知の総合化を促す資料の提示	※　ふれあいウォーキングの場の設定 ※　ポートフォリオの活用

本時の目標

1　これまでに身に付けた既習内容（地図の見方や道のりの出し方など）を生かし，コースをつくってマップに表現する。

2　よりよいマップにしようとする活動への意欲をもち，マップの完成への見通しをもつことができる。

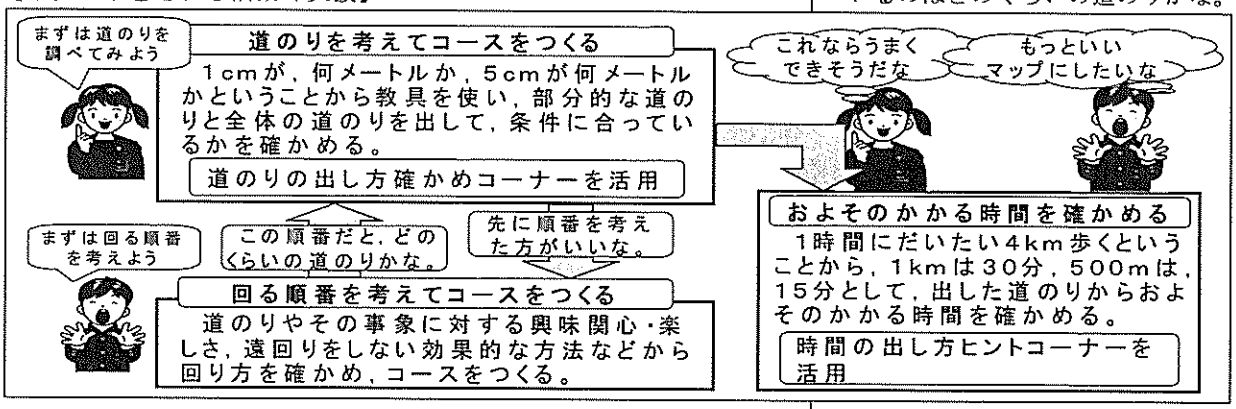
本時の主張点

前時において，自分が見つけたあらつの事象をまわる試しのウォーキングを行っており，問題点からのコースづくりの条件を設定している。そこで，本時では，その条件をもとに，道のりや回る順番を考えて実現可能なコースづくりをめざしていく。そのために，子供の求めに応じて道のりの出し方や地図の見方などの知の活用を促す支援を大切にする。

準　　備

個人のウォーキングマップ，学習ファイル，既習の内容を確かめる資料とコーナーの設定，流れ図

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　試しのウォーキング活動での課題をふり返り，本時学習のめあてを確かめる。 ○　コースづくりの条件の想起と本時学習のめあての把握 （めあて）　コースづくりの条件をもとに，道のりや回る順番を考えてコースをつくって表そう。 ※　学習の流れ図を提示し，条件を想起させるとともに，何を考えていけばよいのかを確かめさせる。	○　私は，古い建物に出合うコースをつくろうとしています。まずは，黒門の黒門飴や黒門橋の親柱を見つけて，実際の黒門や古い家並みを見つけました。他にも古いものがたくさんあります。でも，この前，～さんが，私コースを回ってくれたけど，時間に間に合いませんでした。
2　みんなが楽しめる実現可能なあらつのウォーキングコースにするために，道のりや回る順番を考えてコースづくりを工夫し，地図上に表す。 (1)　コースづくりの手順について確かめる。 ○　道のりの出し方の教具の使い方や確かめるためのコーナーの使い方を把握し，活動の見通しをもつこと ※　道のりの出し方を支援する教具の提示やその使い方，道のりの出し方を支援するコーナーの説明，地図の見方を確かめるコーナー，モデルとなるウォーキングマップの提示をする。 (2)　道のりや回る順番を考えてコースをつくり，地図に表す。 ○　既習の学習内容や生活経験で身につけた知を活用して，道のりや回る順番を考慮したコースをつくって表現すること ※　既習の内容をふり返ることができる確かめコーナーやヒントカードの活用を促す。	○　条件は，１時間までに回ること，立ち止まるポイントの数を４つまでにすること，そして，道のりを４kmまでにすることでした。 ○　道のりを出すときには，先生がやっているみたいに，この道のりカードを使って図ればいいのだな。これならできそうだ。 ○　先生がモデルのマップをつくっているから，それを参考にするといいな。それに，分からなくなったら，道のり確かめコーナーで確かめながらつくればいいのだな。今つくっているのはどのくらいの道のりかな。
【子供の予想される活動や支援】  	
3　本時学習の感想を出し合い，次時学習について確かめる。 ○　自分たちの活動に対する自信をもったり，これからのマップづくりへの見通しをもったりすること ※　ＧＴから肯定的な評価とこれからのマップづくりへのアドバイスをしてもらう場を設定する。	○　この前のウォーキングは，うまくいかなかったけれど，今，道のりを調べて時間を出したら，何だかできそうな気がしてきました。今度は場所の説明を入れていきたいです。

ゲームづくりの基礎・基本を獲得し，作戦・動きづくりへ深化・発展する体育科学習

第4学年2組　体育科学習指導案

指導者　稲津一徳

単元　つなごう!ねらおう!4の2オリジナルバウンドゲーム

指導観

○　本単元は，２つのチームがネットで区切られたコートで簡単な打つ・はじく動きを使ってボールをワンバウンドさせて相手コートに送り，勝敗を競い合うゲームである。単元を通して，そのゲーム固有の楽しさに向けて，ルール・場を工夫したり，空き空間を意識して攻守の作戦を立て，作戦に応じた動きを工夫したりする力を高めていくことをねらいとしている。具体的には，①つなぐ・ねらう楽しさが広がるように，動きの実態に応じたルール・場の工夫や空間を意識した攻守の作戦の工夫を行い，ルール・場，作戦に応じた簡単な打つ・はじく動きを広げること，②求める楽しさに向けて工夫したルール・場，作戦のよさを自分たちの動きの広がりから，チームで相互評価し，協力して練習やゲームを楽しむことが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，今もっている動きを発揮しながら意欲的にゲームを楽しもうとする姿が見られる。そのなかで，得点する楽しさにつながるルール・場，作戦や動きに対する関心は高く，それぞれに工夫する力も育ってきている。しかし，そのゲーム固有の楽しさを捉えたり，楽しさにつながるルール・場，作戦や集団の動きを互いに関係づけながら工夫したりしていく経験は，さらに積み上げが必要である。そこで，少人数の攻守分離型で，簡単な打つ・はじく動きを身に付け楽しむバウンドゲームにおいて，バウンドゲーム固有の楽しさに向けて動きの実態から，ルール・場，作戦，作戦に応じた動きを工夫する力を高めたい。

○　本単元の指導においては，求める楽しさに向けてルール・場，攻守の作戦を工夫するなかで，簡単な打つ・はじく動きを広げ，ゲームを楽しむことができるようにする。つかむ段階では，１人と２人で試しのバウンドゲームを比較させ，固有の楽しさや楽しさを広げる解決の方向を交流し，追究目的と課題を捉えさせる。つくる段階では，対抗戦を行い，つなぐ・ねらう楽しさが広がるルール・場をゲームチェック表をもとに相互評価しながら追究させる。さらに，攻めの有効空間や守りのポジションをゲームチェック表や作戦ノートで工夫し，相互評価しながら，作戦と集団の動きが高まるようにする。あじわう段階では，総当たり戦を行い，つくり出したゲームや作戦，動きのよさを実感できるようにする。

目　標

１　バウンドゲームの楽しさを広げるルール・場を工夫したり，空き空間を意識した攻守の作戦を立てたりして，打つ・はじく動きを広げ，楽しくゲームをすることができる。（主体性・創造性）

２　仲間と協力してつくったゲームを相互評価しながら，ルール・場や作戦，集団の動きのよさを楽しむことができる。（主体性・社会性）

計　画　（約９時間）

段階	第１次　つかむ段階（２時間）	第２次　つくる段階（５時間）	第３次 あじわう段階（２時間）
活動と内容	１　１人と２人のバウンドゲームを比較し，追究目的や課題を交流する。 ○　固有の楽しさの把握 ○　追究目的，課題の明確化 （追究目的） みんながつなぐ・ねらう楽しさを味わえるオリジナルバウンドゲームをつくろう。 （追究課題） ・ルールや場づくり ・作戦づくり，動きづくり	２　ゲームチェック表をもとに，求める楽しさを広げるルール・場，作戦，動きを工夫し，楽しくゲームを行う。 (1) ゲームチェック表をもとに，ルール・場を工夫し，対抗戦を行う。（本時２／２）② ○　求める楽しさに応じたルール・場の工夫，動きの拡大と相互評価 (2) 空き空間を意識した攻守の作戦を立て，練習や対抗戦を行う。③ ○　有効空間を捉えた作戦の立案，作戦に応じた動きの拡大と相互評価	３　４の２オリジナルバウンドゲーム大会を開き，これまでに工夫したバウンドゲームで総当たり戦を行う。 ○　作戦に応じた打つ・はじく動きの広がりの実感 ○　工夫したルール・場，作戦のよさの実感 ○　学習の達成感・成就感の感受
支援	※　１人と２人で行うバウンドゲームの比較活動と固有の楽しさを交流する活動の設定	※　各自の得点やパスのつながりなどを評価するゲームチェック表の設定 ※　攻めの有効空間を探る作戦ノート	※　リーグ総当たり戦で行うバウンドゲーム大会の設定

本時の目標

1　つなぐことからねらうことへとゲームの楽しさを広げるルール・場の工夫を行い，つなぐ動きからねらって打つ・はじく動きへと広げることができる。

2　新たなルール・場や動きのよさを認め合い，作戦づくりへの意欲を高めることができる。

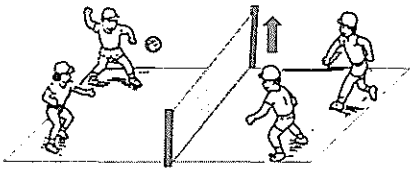
準　　備

可動式簡易ネット，ゲームチェック表，ボールなど

本時の主張点

本時指導にあたっては，ルール・場を工夫することを通して，一人一人が高さ，力加減，方向などを調節しながら打つ・はじく動きを広げ，空いている場所や返球しにくい場所をねらう作戦づくりへの意欲を高めていく。そのために，ネットの高さから２人組で打つ回数へとルール・場の工夫を試させ，ゲームチェック表で相互評価する活動を仕組む。

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　前時の場の工夫を振り返り，本時のめあてについて話し合う。 ○　前時の場の工夫について想起すること ○　本時のめあてを把握すること （めあて）　ネットの高さや打つ回数をくふうして，つなぐ楽しさやねらう楽しさが広がるバウンドゲームにしよう。 ※　場の図やルール表をもとに，前時の工夫のよさを振り返り，本時のルール・場の見通しを話し合う中で，本時のめあてをつかませる。	○　前の時間は，コートを広げてみると，ボールのつながりがよくなってつなぐ楽しさが広がったね。 ○　でも，エンドラインのボールや低めのボールは，つないでもなかなか返せなくて困ったよ。 ○　今日は，ネットの高さや打つ回数を工夫して，つなぐ楽しさやねらう楽しさを広げていこう。
2　つなぐ楽しさやねらう楽しさが広がるルール・場を工夫して，楽しくゲームをする。 (1) ネットの高さを上げたゲーム１を行い，そのよさについてチームで相互評価し，全体で話し合う。 ○　つなぐ楽しさが広がる場を工夫すること ○　パスを中心としたつなぐ動きを広げること ※　ゲームチェック表の２人でつないで打った回数をもとに，ネットの高さを工夫したことについて評価させ，そのよさをパスを中心としたつなぐ動きと関係させて捉えさせる。 (2) ネットの高さに加え，打つ回数を増やしたゲーム２を行い，そのよさについてチームで相互評価し，全体で話し合う。 ○　つなぐ楽しさからねらう楽しさへと広がるルールを工夫すること ○　空き空間や相手の返球しにくい場所をねらう動きを広げること ※　ゲームチェック表の２人でつないで打った回数や得点をもとに，打つ回数を工夫したことについて評価させ，そのよさをつなぐ動きからねらう動きへと関係づけて捉えさせる。	 ・ネット高４０㎝→５０㎝ ・交互に２回打つ→交互に３回まで可
【予想されるルール・場の工夫に応じた動きの広がり】 ネットの高さの工夫：  味方の打ちやすい高さ，力加減，方向，場所などについて打つ・はじく動きを工夫する。 打つ回数の工夫：  相手コートの空き空間や返球しにくい場所へ，高さ，力加減，方向などを工夫して打つ	【ルール・場の工夫例】 ○　ネットを１０㎝高くすると低いボールやネット際のボールが減り，つなぎやすかったね。 ○　でもネットが高いので，味方へのパスは打ちやすいように工夫しないといけないよ。 ○　打つ回数が増えると，とてもゆとりが出てきて，いいパスをつないで返せるようになったね。だんだんねらって打てるようになってきたぞ。 ○　相手の足下や利き手の逆側をねらうと相手は打ち返しにくいようだ。 ○　コートのエンドラインやサイドライン，ネット際ををねらうと得点につながったよ。 ○　ほんの少しルールや場を変えるだけでも，つなぐ楽しさやねらう楽しさがずいぶんと広がってきたね。 ○　次の時間は，もっとねらい方を考えて，たくさん得点するぞ。
3　工夫したルール・場や打つ・はじく動きのよさについて話し合う。 ○　工夫したルール・場のよさを互いに認め合い実感すること ○　ルール・場に応じたつなぐ・ねらう動きの広がりを実感すること ○　作戦づくりへの意欲を高めること ※　ルール・場の工夫によってできたねらう動きについて，板書をもとに出し合わせ，本時を振り返らせる。	

あらつタイムと連動しながらコミュニケーション力を深化・発展させていくあらつ学習

第6学年1組　あらつ学習指導案

指導者　野口信介

単元　レッツ・エンジョイ・コミュニケーション！

指導観

○　本学級の子供たちは，第５学年あらつ学習「あらつタイムプロジェクト」において，楽しく英語にかかわることができるあらつタイム（朝の活動）のプログラムづくりを行っている。また，６年生になり，よりよい学校生活のために積極的に学校行事や児童集会にかかわろうとする意識が高まってきている。一方，第６学年社会科では文化形成の歴史を調べながら，文化は生活環境やまわりの人々との関係によってつくられる固有のものであるという見方や考え方を培ってきており，外国の様子に対する関心も高まってきている。

○　本単元は，あらつタイムで行っている英語活動をよりよいものへと高めていくために，外国の方とコミュニケーションを図りながら英語活動づくりをおこなうあらつ学習である。本単元では，英語圏の様々な国の文化的要素である歌や遊びを追究しながら異文化の方とのコミュニケーション力を伸長するとともに，社会科で培ってきている文化的事象をとらえる視点を生かしながら異文化理解を深めることが可能であると考える。本単元の活動から生み出される具体的な内容は，①全校の児童が楽しめる英語活動づくりという視点から課題を設定し，教科学習で培ってきた学び方や見方・考え方を生かして課題を追究していくこと，②外国の方と簡単な英語を使いながら積極的にコミュニケーションを図ること，③生活圏の違いによってもののとらえ方や考え方が異なり，そのことが独自の文化の形成に深く関与していることに気付くこと，などである。

○　本単元の展開にあたっては，いろいろな国で親しまれている遊びや歌のよさを味わわせるとともに，異文化の方と英語を介してコミュニケーションを図ることのよさを感じ取らせていきたい。課題設定の過程では，学校生活をより楽しいものにするために英語活動をさらに発展できないか考える場を設定していく。ここでは実際に外国の方に英語活動を評価してもらうとともに，英語を使っている国が世界中に数多く広がっていることを伝えてもらい，英語活動プログラムが発展していく可能性に気付かせていく。課題追究の過程では，本校の帰国子女学級の子供たちやＣＩＲ，留学生の方たちの協力を得ながら簡単な英語を用いてそれぞれの国で親しまれている遊びや歌やその国の特徴などを追究し，英語活動のプログラムをつくりあげていく。発信の過程では，様々な国の歌や遊びを取り入れた英語活動プログラムをあらつタイムや児童集会などで実践し，全校の子供たちが喜ぶ姿から自分たちの学びの価値を振り返らせていく。

目　標

１　様々な国で親しまれている英語を用いた遊びや歌を英語活動に取り入れるという課題を設定し，インターネットやインタビューといった調査方法を駆使しながら追究することができる。（主体性，創造性）

２　簡単な英語を用いながら外国の方と交流したり追究したりすることで，異文化の人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度をもつことができる。（主体性，社会性）

計　画　（約２４時間）

題	第１次　課題設定（３時間）	第２次　課題追究（１６時間）	第３次　応えの発信（５時間）
活動と内容	１　５年生の時につくった英語活動を外国の方に体験していただき，さらに活動内容を充実させていくためにどうしたらよいか話し合い，課題を設定する。　③ ○　簡単な英語を用いてコミュニケーションを図ること ○　英語圏のいろいろな国に対して関心をもつこと	２　英語圏の国で親しまれている歌や遊びを追究し，活動プログラムを作成する。 (1) 課題に応じた追究計画を立てる。　② ○　課題追究の見通しをもつこと (2) 追究計画に沿って追究する。　⑩ ○　いろいろな国の遊びや歌を調べること ○　情報収集のための尋ね方を調べること (3) 中間交流会を開き，不足していることについて再追究する。　本時１／４④ ○　英語活動プログラムを完成すること	３　自分の追究を振り返る。 (1) 下学年や外国の方を交えた英語活動を行い，自分たちが立てた活動プログラムを振り返る。　③ ○　追究したことが生かされているか評価すること (2) これまでに追究してきた応えを発信する。　② ○　達成感・成就感の感受
支援	※　外国の方に英語圏の国について話していただく場の設定	※　自己追究を支援する学習ガイドの準備 ※　子供の追究に応じたＧＴや資料の紹介	※　児童集会等を活用した，最終報告会の場の設定

本時の目標

1　外国の方に対して簡単な英語を用いて挨拶や質問などの会話を行うことができる。　（主体性・社会性）

2　これまでに追究してきた外国の遊びや歌を組み込んだ英語活動プログラムを外国の人と一緒に行い，不十分な点や不明確な点を明確にすることができる。
（主体性・創造性）

本時の主張点

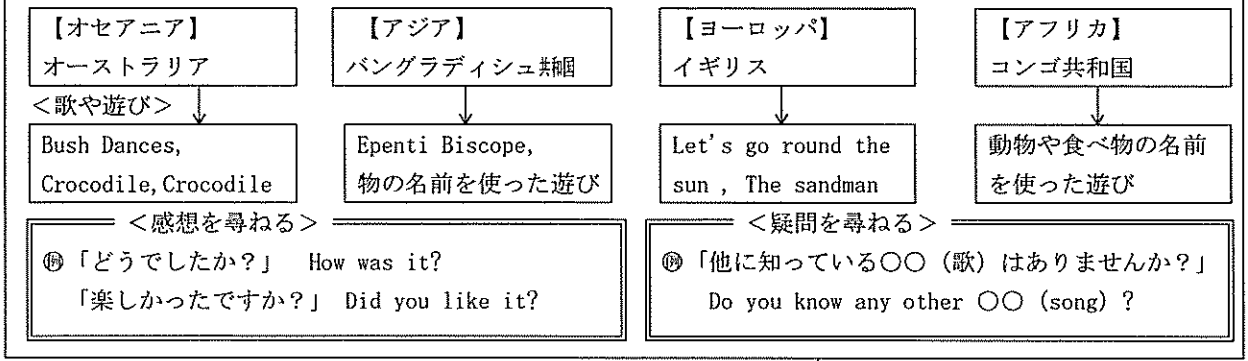
本時学習は，これまでにつくってきた英語活動プログラムを外国の方と一緒に行いながら振り返っていく学習である。ここでは，これまでの活動で生じてきた疑問を解決したいという思いや体験後の感想を尋ねたいという願いに支えられた個に応じたコミュニケーション活動が展開されると考える。その活動を通して，異文化に対する理解を深めていきたい。

準　　備

これまでの学習を表した掲示物，活動に必要な機器

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　これまでに取り組んできている自分たちの英語活動プログラム作成の目的について振り返り，中間交流会のめあてについて話し合う。 ○　これまでの活動を客観的に評価する場であることを確認すること ○　簡単な英語を用いて挨拶をすること ～Hello Mr. Abel. Good afternoon. How are you？～ ※　ＧＴの方に簡単な英語で自己紹介をしていただく。 （めあて）　外国の方と一緒に英語活動をして，英語を使いながら楽しめる活動プログラムになっているか見直そう。	○　これまでに考えた英語活動が，外国の方々にも楽しんでもらえるか楽しみだな。 ○　世界のいろいろな国で英語が使われているから，世界中で親しまれている歌やその国ならではの歌や遊びを組み合わせていくと楽しい英語活動になると思うよ。 ○　私たちの歌に合わせて外国の方が一緒に歌ってくれたよ。なんだか楽しくなってきたな。 ○　外国の方は歌うときや遊ぶときには本当に楽しそうに笑顔で活動しているし，手を取って優しく教えてくれるね。 ○　下級生に教えるときには，このようにかかわらないといけないな。 ○　歌や遊びは言葉がうまく使えなくても，一緒に楽しめるね。 ○　もっとその国ならではの遊びや歌を尋ねて，いろいろな国の特徴がでる英語活動をつくりたいな。
2　自分たちが調べてきている国の方と一緒に英語活動を行い，自分たちがつくった活動内容や英語の使い方等について感想を聞いたり，活動づくりにかかわる疑問点を質問したりする。 (1) 追究してきているグループに分かれ，自分たちが考えてきた英語活動をＧＴと一緒に行う。 ○　英語活動を行いながら英語でコミュニケーションを行うこと ※　できる限り英語でコミュニケーションを図っていくように促し，必要に応じて日本語を交えながらの会話を行わせるように指示していく。 (2) 自分たちのプログラムについて意見を聞いたり，質問したりする。 ○　疑問や感想を簡単な英語を用いて尋ねること ○　その国の特徴がでている遊びや歌の楽しい雰囲気を感じ取ること ※　ＧＴには活動の内容と英語の使い方や表情，動き方について身体表現を含みながら簡単に伝えていただくように依頼しておく。	
3　本時学習を振り返り，活動を通して生じた新たな気付きや今後の追究内容や方法について話し合う。 ○　疑問や気付きから今後自分が追究していく方向性を明確にすること ○　簡単な英語を用いてお礼や挨拶を行うこと ～Thank you Ms. Merissa. I'm happy to meet you. See you again.～	○　私たちが話した英語が外国の方に通じたのが嬉しかった。 ○　今日聞いたことを生かして活動をつくり直していけば，今よりもっと楽しい活動ができそうだね。



国風・室町文化の基礎・基本から天平・鎌倉文化への深化・発展へ向かう課題選択学習

第６学年２組　社会科学習指導案

指導者　髙野誠一(T1)　近藤暢威(T2)

単　元　日本文化の源流を探ろうⅠ－国風文化・室町文化から天平・鎌倉文化へ－

指導観

○　本単元は，我が国の歴史を文化という側面から眺め，私たちの生活の歴史的背景をさぐり，自国文化に対する理解と愛情をもつものである。具体的には，室町文化と国風文化という２つの文化を基礎・基本としながら，鎌倉文化・天平文化へと課題選択学習を深化・発展として展開することで，我が国の文化形成の因果関係をとらえさせたい。具体的には，①我が国の文化のルーツに関心をもち，主体的に追究しようとすること，②文化がつくられた背景を大陸との関係，政治との関係，文化を楽しんだ人々との関係などから考えること，③年表や史料等を活用しながら，文化の特色を調べること，④我が国の文化がそれぞれの時代の特色を背景に成立したことを理解することが主な学習内容である。

○　本学級の子供たちは，歴史上の人物や出来事に大変興味を示し，歴史学習を好んでいる。また，生け花や能楽などといった日本文化についても，日本らしい文化としてとらえてきている。また，学び方においても，自分で予想を立てて，資料を選択し，自分の考えをつくることができてきている。そこで，歴史的事象の背景を因果関係的に見ていくことができるようになるこの期に，本単元を設定し，文化という事象が我が国の外国との関係や政治などの世の中の動きとともにつくられていくという見方ができるようにしていきたいと考える。このことは，自国文化を理解し，国際理解・尊重の精神を育む上でも価値があると考える。

○　本単元の指導においては，現代に受け継がれる日本文化のルーツをさぐることを出発点として，室町・国風文化という日本らしさの原点となる文化と天平・鎌倉文化という大陸や政治との関係が強いものとを比較して追究するようにする。そのために，つかむ段階では，書院造や生け花といった日本文化に親しむことをきっかけとして，それらがどのように形成されていったか調べる学習問題を設定する。そして，さぐる段階では，室町文化・国風文化がつくられた背景を調べる。さらに，いかす段階では，文化形成の見方から天平と鎌倉の一方を選択して調べ，室町・国風文化と比較することにより，大陸との関係や日本の国内事情によって文化が形成された見方への発展を図りたい。

目　標

１　室町文化・国風文化と鎌倉・天平文化について，残されたものやことを資料や福岡市博物館で調べ，特色を比較して，我が国の現在の生活につながる文化がつくられてきた背景を考えることができる。（社会性・創造性）

２　我が国の文化形成についての課題に意欲的に取り組み，大陸との関係やその当時の人々の様子をもとに我が国の文化に対する理解と愛情を深めることができる。（社会性・主体性）

計　画　（約10時間）

段階	第１次　つかむ段階（２時間）	第２次　さぐる段階（４時間）	第３次　いかす段階（４時間）
活動と内容	１　現代の日本文化を体験し，学習問題を設定する。 (1) 書院造，十二単，生け花物語を体験する。　② ○　建物や衣服，芸術，物語等の日本文化を感じること (2) ルーツをさぐる学習問題について話し合う。　① ○　学習問題の設定 「日本らしい文化はどのように生まれたのだろう。」	２　体験してきた日本文化がどのように生まれてきたのか室町と平安のころの文化を調べる。 (1) 室町時代の文化と平安時代の文化を順序を選択して調べる。　② ・どんなことが　・どうして ○　公家文化と武家文化の融合や大陸文化との隔絶といった背景をとらえること (2) 文化のルーツについて話し合う。　② ○　わたしたちの文化が大陸との関係の様子によってつくられたことの理解	３　鎌倉文化と天平文化を選択して，文化の特色と背景を調べる。 (1) 鎌倉文化，天平文化を選択して調べ話し合う。 本時2/3　③ ○　大陸の関係，政治との関係からの選択 (2) ４つの文化を調べ，文化の背景をまとめる。① ○　文化形成の見方の深化
支援	※　建物，衣服，芸術，物語の観点からの体験的活動 ※　年表や今までの学習からルーツについて予想する活動	※　時代ごとの文化についての資料提示 ※　ビデオ資料の準備や福岡市博物館での見学・聞き取り活動 ※　奈良・鎌倉時代に着眼する年表提示	※　鎌倉時代の建造物や彫刻等，天平文化の正倉院の宝物等の資料提示 ※　課題別の交流活動

本時の目標

1　国風文化や室町文化の特色や生まれてきた背景を手がかりにして，鎌倉文化・天平文化の特色や生まれてきた背景を自分の見通しをもとに調べる文化を選択して追究を進めることができる。

2　我が国の文化の源流について，大陸との関係や当時の人々から考え，理解と愛情をもつことができる。

本時の主張点

本時指導にあたっては，国風文化と室町文化についての内容を基礎・基本として我が国における文化形成の背景を天平文化・鎌倉文化のいずれかを選択して深化・発展させる学習である。これら２つを取り上げることで，子供の個性をもとに我が国の文化形成における大陸との関係と当時の中心人物との関係から文化への見方を深化・発展できる。

準　　備

学習の流れ図，代表的な建造物，彫刻等の写真

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　国風文化や室町文化の学習をもとに，天平文化と鎌倉文化のいずれかを選択して調べてきたことを振り返り，本時学習のめあてを確認する。 ○　天平・鎌倉文化を調べて文化形成について話し合うめあての把握 ・　自分が天平・鎌倉文化を選択した根拠と文化形成の見方 （めあて）　日本文化がどのようにして生まれてきたのか，天平文化や鎌倉文化の特色やできてきたわけから考えよう。 ※　４つの文化の特色となる建造物・芸術等を写真で振り返らせる。	○　国風文化は，遣唐使を廃止したことで日本風の文化が生まれてきたことが分かりました。また，室町文化では武士と貴族がまざったような文化がつくられていきました。 ○　ぼくは，天平文化を調べようと思いました。このころは奈良の大仏を見ても分かるように，唐などの外国の影響を受けていたと思います。この天平文化の様子を調べることで，日本風の文化との違いが分かりやすくなると思うからです。 ○　わたしは，鎌倉文化を調べようと思いました。鎌倉時代は武士が中心になってきた時代です。文化はそのときの中心となった人々との関係があると思うからです。 ○　天平文化の代表的なものは，大仏をつくった聖武天皇の宝物が収められている正倉院の宝物があります。なかの琵琶の楽器やガラス細工など日本風ではないようなものがたくさんあります。 ○　鎌倉時代には，今にも残る彫刻がつくられました。とてもこわいような迫力のある様子をしています。武士が力をもってきた時代らしいなと思いました。 ○　天平文化が生まれたのには，遣唐使とのつながりがあると思います。遣唐使によって，唐だけでなく，世界の文化がシルクロードを通して入ってきて，それらを真似して，取り入れようと思っていたと思います。 ○　２つの文化を比べると，特色や生まれてきた様子が違うようです。今まで，文化を調べてきたことと比べて日本文化のもとを考えたいです。
2　天平文化と鎌倉文化について調べ考えたことを分かれて交流し合う。 **天平文化グループ(T2)** (1) 天平文化の遺産や特色について話し合う。 ○　天平文化の唐やイスラム，ヨーロッパの影響を受けた特色をとらえること ※　正倉院の宝物などを提示しておき，日本風とは異なる特色に気付かせる。 【具体的な文化遺産】 ・吉祥天画像 ・古事記　　など (2) 天平文化が生まれた背景について話し合う。 ○　遣唐使を中心に大陸との交流が盛んに行われ，影響を受けた文化であることを考えること ※　遣唐使の経路図やシルクロードの地図を提示する。 ※　カード操作をもとに話し合わせる。 **鎌倉文化グループ(T1)** (1) 鎌倉文化の遺産や特色について話し合う。 ○　武士らしい力強さと人間のはかなさを表す無常観があふれる特色をとらえること ※　金剛力士像等の彫刻や平家物語の一説を提示しておき，力強い感じに気付かせる。 【具体的な文化遺産】 ・彫刻(金剛力士像) ・平家物語　　など (2) 鎌倉文化が生まれた背景について話し合う。 ○　武士中心の世の中となり，源平の戦いや禅宗の影響を受けた文化であることを考えること ※　当時の年表や禅宗の教えを資料化したものを提示する。 ※　カード操作をもとに話し合わせる。 **国風文化・室町文化からの深化・発展** ・文化と大陸との交流の関係　・文化と政治上の中心人物との関係	
3　天平文化と鎌倉文化に分かれて追究してきたこと，それぞれの特色や背景について報告し合い，次時の学習について話し合う。 ○　次時において，２つの文化を比較していく見通しをもつこと ※　それぞれの文化の特徴的なものの写真や年表などを使いながら，文化の特色や背景について，互いに違いがあることに気付かせる。	

世界の民話と生活体験をつなぎながら国々の文化についての見方をひろげる国際交流タイム学習

第4・5・6学年3組　国際交流タイム学習指導案

指導者　野田真功

単元　楽しもう！世界のメルヘン

指導観

○　本学級の子供たちは，アメリカ合衆国，イギリス，フランス，ロシア，シンガポール，中華人民共和国，ミャンマーといった国々での生活体験をもち，それぞれの国の言語を身につけたり，生活習慣や文化に触れてきたりしている。そして，これからも海外の友達や文化と交流していきたいという願いをもっている。帰国後は，外国と日本の文化との違いや双方のよさを実生活のなかで感じたり，身につけてきた外国語を生かしていく経験をしたりしてきている。ここで，世界の様々な地域のメルヘンの特徴について追究し，それらが生じてきた背景や，そこに込められている人間の生き方について考えたり，メルヘンのおもしろさについて自分たちの家族や「おはなしの会」の人たちと一緒に交流したりしていくことで，世界の国々の文化についての見方をひろげるようにしていきたい。

○　本単元は，口承民話として伝承されてきたメルヘンの特徴について調べ，それぞれの国や地域の風俗・習慣などの文化を表している部分（独自性）やそれらに語り込められている人生を生きていく上での様々な知恵（共通性）について追究していく国際交流タイム学習である。善玉と悪玉が明確で，ハッピーエンドを基本とした世界を描くメルヘンは，人の心の肯定的な部分と否定的な部分の両面をなぞっていける世界があり，世界の国々に共通する人間として生きていく生き方に対する考え方を見つめていくことができると考える。具体的には，①各地のメルヘンから見える独特の風俗・習慣と普遍的な人生智についての見方をつくり出していくこと②海外と日本の両方のよさを知っている帰国子女としての自分を自覚し，見方を豊かにしている自分への自信を高めることが主な学習内容である。

○　本単元の指導においては，メルヘンがつくられた国や地域によってその特徴が異なっていることや，それらに込められている知恵には共通性があることを，物語の楽しさを広げていってある人たちとの交流を通しながらつくり出すことができるようにする。課題設定の過程では，日本と外国に語り継がれてきた同様なモチーフをもったメルヘンと出合わせ，世界のメルヘンを紹介し合っていくという課題をもたせる。課題追究の過程では，自分が生活していた国や地域のメルヘンを見つけ，それらが特徴的に表している生活習慣や文化について追究する。その際，自分のもつ海外へのネットワークを生かしたり，おはなし会の方と追究内容について交流する活動を位置付ける。課題達成の過程では，自分たちが見つけてきたメルヘンを紹介する場を設定し，登場人物や場面設定から見えてくるそれぞれの国や地域のもつ独自性や，それらを越えて共通する込められた人生知の存在についてまとめ，世界の文化に対する見方をひろげていけるようにする。

目　標

1　世界のメルヘンの特徴や，それらが生じてきた背景について情報機器や施設を適切に選択しながら追究し，まとめていくことができる。 ----> 国際人としての在り方や生き方を求める主体性

2　物語や童話のよさを広めようと努める人たちの交流しながら，自分のメルヘンについての考えを伝えていく方法を考えることができる。 ----> 自分たちの特性を見直す創造性 / 外国で暮らす人に共感する社会性

計　画　（約１６時間）

離	第１次　課題設定（３時間）	第２次　課題追究（９時間）	第３次　課題達成（４時間）
活動と内容	1　日本と外国のメルヘンに出合い追究する学習計画を立てる。 (1)「シンデレラ」と類似したメルヘンと出合う。　① ○　メルヘンについての概括的なとらえ (2) 課題追究の計画を立てる。② ○　学習に対する見通しをもつ	2　自分が住んでいた国や地域にあるメルヘンの特徴について追究する。 (1) 自分が選択したメルヘンの特徴について追究する。　⑤ ○　目的に応じた情報機器の活用 ○　海外体験をもとにした見方の創造 (2) 追究したことを表現物にまとめる ○　効果的な表現方法の創造　④	3　メルヘン発表会を行い，学習をまとめる (1) 世界のメルヘン発表会を開く。　本時1/2 ○　メルヘンの独自性 (2) HPやおはなし会でメルヘンの紹介をする。　② ○　自己肯定感の高まり
支援	※　異なる地域に存在する同様なモチーフをもつメルヘンとの出合い	※　おはなしの会の交流の場の設定 ※　総合図書館での調べ活動の設定	※　家族との交流の場の設定 ※　感想を集める場の設定

本時の目標

1　これまで自分が選択し，追究してきたメルヘンを紹介し合い，登場人物や場面設定などの特徴からそれぞれの国や地域の文化の独自性をとらえるとともに，生き方に対して勇気を与えるメルヘンのもつよさに対する見方をひろげることができる。

2　友達の発表を比べながら，よい点や改善点について話し合うことができる。

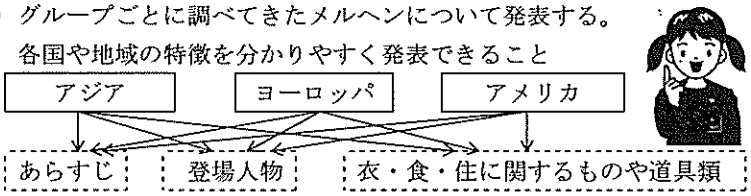
本時の主張点

本時指導にあたっては，自分たちが追究してきた国や地域のメルヘンについて紹介し合う活動を行う。そのなかで，海外で日本の昔話を紹介してきた体験をもつ自分たちの家族や，物語のよさを伝えてある福岡おはなしの会の人たちなどと交流する場を設定することで，メルヘンや世界の文化に対する自分たちの見方を広げていくことができるようにする。

準　　備

子供が自分の考えをまとめた表現物

展　　開

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　世界のメルヘンについて追究してきたことを話し合い，本時学習のめあてを確かめる。 (1) 自分たちが住んでいた国や地域のメルヘンについて追究したことについて振り返る。 ○　前時学習までの活動を想起すること ※　前時学習までの流れ図等を使いながら学習を振り返らせる。 (2) 本時学習のめあてを確かめる。 ○　メルヘンを紹介し合うことについての見通しをもつこと ※　それぞれの国や地域ごとに調べてきたメルヘンを取り上げ，互いに紹介し合っていくことへの意欲を高める。 （めあて）　世界のメルヘン発表会を開き，それぞれの国や地いきの特ちょうについて話し合おう。 2　自分たちが調べてきたメルヘンを紹介し合い，それぞれがもつ特徴について話し合う。 (1) グループごとに調べてきたメルヘンについて発表する。 ○　各国や地域の特徴を分かりやすく発表できること  ※　話のあらすじや登場人物，そこに語られている衣・食・住に関するものや道具類についての内容とともに，それらについてどのようにして調べてきたのかということについても発表させていく。 (2) それぞれの国や地域のメルヘンの特徴について話し合う。 ○　それぞれの国や地域に伝承されているメルヘンの特徴に気付くこと ○　メルヘンに存在している独自性の背景について自分なりの応えをもつこと ※　おはなし会の方が感じてある特徴ついての意見を尋ねたり，海外で日本の昔話を紹介した体験をもつ人たちと交流し合う場を設定する。 3　自分たちが調べたメルヘンについて見直した本時学習や，これからの学習について話し合う。 ○　国や地域が異なっていてもメルヘンに込められているものには共通するものがあることについての見通しをもつこと ※　独自性を追究していくなかで明らかになってきたメルヘンの普遍性について，子供たちが紹介したものを取り上げながら考えさせていく。	○　世界のメルヘンについていろいろ調べてきたな。 ○　日本にも世界のメルヘンと似たような話があったな。 ○　総合図書館にはたくさんのメルヘンの本がおいてあったな。 ○　いろいろな国の本があったな。 ○　自分たちが調べたメルヘンも，面白いと思ってもらえるだろうか。 ○　ふくおかおはなしの会の方の話を聞いてみたいな。 ○　他のグループが調べたことやふくおかおはなしの会の方の方の意見を参考にして，メルヘンについての考えの見直しをしよう。 ○　自分たちのとらえた特徴がわかりやすくなるよう発表していこう。 ○　日常の生活では起こらないようなことが起きる面白さがあるな。 ○　電子メールで外国の友達にいろいろ尋ねられたのでよかったな。 ○　外国にいたときに，こんなメルヘンを読んでくれる人がいたな。 ○　同じような話でも，日本の人と外国の人では受け取り方がちがうこともあるのだろな。 ○　小さいころから知っていた話のなかにもいろいろな意味がかくれていたのだな。 ○　国や地域がちがうと，同じような中身の話でも，でてくるものが全然違うのだな。 ○　たくさんのメルヘンが何百年も伝えられてきているのは，どのメルヘンにもよさがあるからだろうな。 ○　どのメルヘンにも共通しているところもあるのではないかな。

課題解決の力と集団性を育む生活単元学習

ふじ・さくら・梅組　合同生活単元学習指導案

指導者　舛元俊文　谷崎和一郎
原口和美　園田洋一

単元　みんなでフルーツパーティーをしよう

指導観

○　本校特殊学級の子供たちは，低学年ふじ組７名，中学年さくら組５名，高学年梅組６名の計１８名で構成されている。子供たちは，これまでの学習において，劇作りや栽培活動などに取り組み，友達と共に目的活動に取り組み，課題を解決する経験を積み重ねてきている。その中で，同学年や異学年の友達とかかわる力や目的や課題を意識する力が育ってきている。しかし，協同でのもの作りの経験はまだ少なく，友達と共に活動する喜びやよさを十分に味わうまでには至っていない。　そこで果実からジャムやジュースを作る，生産的な活動に集団で取り組むことを通して，集団での課題解決の経験を広げるとともに，友達とのかかわりを深めることができるようにしたい。

○　本単元のねらいは，卒業記念として植えられた果樹（夏みかん，ブルーベリー）に実った果実をジャムやジュースにして，みんなで味わうフルーツパーティーをすることである。果実をつぶしたり，しぼったりする活動を通して，友達と協力する力を育てることをねらいとしている。具体的には，①フルーツパーティーへの目的意識をもち，見通しをもって課題解決に取り組むこと，②ジャムやジュース，看板作りにかかわる知識・技能を身に付けること，③友達の促しに応じたり，友達に教えたりしながら活動すること，などが主な学習内容である。

○　本単元の指導においては，子供たちが目的意識をもって活動に取り組み，友達とかかわりながら活動するための，活動構成の工夫，協同で活動する場の設定，見通しをもったり，振り返ったりするための作業パネルの提示，個に応じた動作補助や声かけなどの支援を行う。具体的には，①熟した果実との出合いを通して，フルーツパーティーをする目的と課題をつかむ活動，異年齢で構成したグループで，果実をつぶしたり，しぼったりする活動，みんなでジャムやジュースを味わう活動，といった活動の構成，②異年齢（低・中・高学年）の小集団で活動する場の設定，③ジャムやジュースの作り方，必要な用具，材料をとらえるための写真や絵図，文で示したパネルの提示と個に応じたモデル演示や動作補助，促し，声かけなどの支援を行う。

目　標

1　フルーツパーティーをしようという目的意識をもち，意欲的にジャムやジュース作りに取り組み，目的達成の満足感や成就感を味わうことができる。

2　フルーツパーティーの準備を通して，自分の役割を意識したり，同じグループの友達と協力したりするとともに，ジャムやジュースの作り方にかかわる知識や技能，態度を身に付けることができる。

計　画　（約５時間）

段階	第１次　であう段階（１時間）	第２次　深める段階（３時間）	第３次　味わう段階（１時間）
活動と内容	1　卒業生が植えた記念樹に実った果実の利用の仕方について話し合い，フルーツパーティーの計画を立てる。　① ○　ジャムやジュースのよさを感じること ○　ジャムやジュースを作って，フルーツパーティーをする目的やそのための課題を意識すること	2　フルーツパーティーの準備をする。 (1) ブルーベリーでジャムをつくる。　① ○　果実を丸ごと使うジャムの作り方をとらえて，友達と協力して作ること (2) 夏みかんジュースを作る。（本時）① ○　ジュースの作り方をとらえること ○　友達と協力して作ること (3) 夏みかんの皮でジャムを作る。　① ○　果実の皮を使うジャムの作り方をとらえて，友達と協力して作ること	3　今まで作ったジャムやジュース味わうフルーツパーティーをする。　① ○　目的達成の満足感や成就感を味わうこと ○　フルーツを加工した食品のよさを感じること ○　みんなで協力することのよさを感じること
支援	※　記念樹を植える卒業生の写真やメッセージの提示 ※　果実を利用したジャムやジュースの写真の提示	※　課題への取り組み方や集団性を考慮した異年齢集団の構成 ※　作り方や材料を示すパネルの提示 ※　個に応じた動作補助や促し，声かけ	※　パンやクッキーなどの食材と一緒に味わう場の設定 ※　今までのグループでの活動を振り返る場の設定

本時の目標

1　夏みかんジュースを作るための課題（しぼる，こすなど）を意識し，ねばり強く活動することができる。

2　ジュース作りを通して，自分の役割を意識したり，友達とかかわりながら活動したりするとともに，ジュース作りにかかわる知識・技能，態度を身に付けることができる。

準　　備

夏みかん，搾り器，布，手順パネルなど

本時の主張点

本時指導にあたっては，低・中学年は高学年の促しに応じたり，やり方を尋ねたりする，高学年は低・中学年に活動を促したり補助をしたりするなど，友達とかかわりながら，課題解決に取り組むことができるようにする。そのために，課題解決の経験の度合いや人とのかかわり方をもとに構成した異学年グループでジュース作りの活動を仕組む。

展　　開

活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
1　前時までの活動を振り返り，本時学習のめあてを確かめる。 ○　フルーツパーティーに向けて，みんなで協力してジャムを作ったことを想起すること ○　ジュース作りへの意欲を高めること （めあて） みんなで　なつみかんジュースを　たくさんつくろう。	1　目的意識や意欲をもたせる支援 ○　卒業生の写真やメッセージの提示 ○　前時で作ったジャムや活動の様子を示す写真の提示 ○　フルーツパーティー計画表の提示 ○　グループ構成の写真やたくさんの夏みかんの提示
2　グループごとに夏みかんジュースを作る。 (1) ジュースの作り方を示す手順絵や教師のモデル演示を見る。 ○　工程や動作，必要な器具を大まかにとらえること (2) 手順パネルをもとに，グループの友達とジュースを作る。 ○　ジュースの作り方をとらえ，果実を搾ったりこしたりすること	2　友達と協力しながら活動に取り組む支援 ○　大まかな作り方や必要な用具，材料を示す手順絵の提示 ○　しぼったり，こしたりする動作のモデル演示 ○　ジュースの作り方の工程や動作のポイントを示した手順パネルの提示 ○　より多く汁をしぼり出すためのしぼり方を意識させるモデル演示 ○　個に応じた動作補助や促し，声かけ，しぼる動作の補助
Aグループ ・　搾り器に果実の切り口を当てることをとらえること ・　果実を両手や片手で押さえつけて果汁を出すこと  ・　果汁を入れた布を両手ではさんでこすこと 	Aグループ ・　果実を持つときの動作補助や果実を押すときの声かけ
Bグループ ・　果実の中心を意識して搾り器に当てること ・　体重をかけて力強く押さえつけ，果汁を出すこと  ・　果汁を入れた布を片手で握ってこすこと 	Bグループ ・　果実の持ち方のモデル演示や果汁の出具合いを知らせる声かけ
Cグループ ・　ナイフで果実を半分に切ること ・　果実をひねりながら搾り器に押し当てて果汁を出すこと  ・　果汁を入れた布を片手で上から下にこすこと 	Cグループ ・　果実のしぼり方や果汁のこし方を示すパネルを意識させる声かけ
○　友達とかかわりながら活動すること ・　高学年の友達の促しに応じること（低・中学年） ・　高学年の友達の補助を受けて一緒に活動すること（低学年） ・　低・中学年の友達に活動を促す声かけや励ましをしたり，モデル演示や動作補助をしたりすること（高学年）	○　低・中学年と高学年が一緒に活動するグループ編成 ○　高学年の児童に低・中学年の活動を意識させる声かけ
3　出来上がったジュースを試しに飲んで，本時の学習を振り返る。 ○　課題を解決することができた満足感や成就感を味わうこと	3　活動への満足感や成就感を味わわせる支援 ○　グループで作ったジュースを試しに味わう場の設定 ○　協力したことへの教師の賞賛

提案学習指導協議会

全体講演

演　題

「今，求められる
　カリキュラム開発と評価」

講　師

国立教育政策研究所　教育課程研究センター
基礎研究部　総括研究官

工　藤　文　三　先生

研究紀要の部

研究紀要 目次

ページ

研究主題構想 …… 96

豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造

－教科・総合の学びを連動する<ふくおかプラン>の展開－

算数科学習の<ふくおかプラン> ……124

－数理的に考える力を高める算数科学習－

音楽科学習の<ふくおかプラン> ……134

－音楽的な感受力と構想力を育む音楽科学習－

図画工作科学習の<ふくおかプラン> ……144

－創造的な感性と技能を培う図画工作科学習－

国語科学習の<ふくおかプラン> ……150

－自他の考えを尊重し言語を駆使する国語科学習－

体育科学習の<ふくおかプラン> ……156

－自ら運動を構想する力を育む体育科学習－

理科学習の<ふくおかプラン> ……170

－科学的追究力を高める理科学習－

社会科学習の<ふくおかプラン> ……176

－社会形成者として社会のあり方を構想する社会科学習－

家庭科学習の<ふくおかプラン> ……182

－家庭生活への参画の仕方をつくり出す家庭科学習－

生活学習の<ふくおかプラン> ……188

－心豊かに生活を拓く生活学習－

あらつ学習の<ふくおかプラン> ……194

－気がかりや願いをもとに自己の生き方を創る総合的な学習の時間－

特別活動の<ふくおかプラン> ……210

－仲間と共に豊かな学校生活を築く特別活動－

道徳学習の<ふくおかプラン> ……216

－豊かな心で未来を拓く道徳学習－

<ふくおかプラン>の全体枠組み

課程	低学年	中学年	高学年
教科の学びの課程	算数		
	音楽		
	図画工作		
	国語		
	体育		
総合の学びの課程	生活学習（生活）	理科	
		社会	
			家庭
		あらつ学習（総合的な学習の時間）	
	特別活動		
	道徳学習（道徳の時間）		

障害児教育部主題構想 ……222

豊かな生活を営む子供をめざす教育課程の創造

教科学習の<ふくおかプラン> ……224

－生活上の基礎的・基本的な力を重点的に高める教科学習－

生活単元学習の<ふくおかプラン> ……234

－生活上の課題を解決し生活力を総合的に高める生活単元学習－

障害児教育<ふくおかプラン>の枠組み

態	低（ふじ組）	中（さくら組）	高（梅組）
教科	国語・算数		
	音楽・図画工作・体育		
総合	生活単元学習		
	合同生活単元学習（異年齢・縦割り）		
		特別活動（クラブ・委員会）	
	日常生活指導・自立活動		

帰国子女教育部主題構想 ……242

自信と誇りを育む帰国子女教育

教科学習の<ふくおかプラン> ……244

－学習適応をめざす教科学習－

国際交流タイムの<ふくおかプラン> ……245

－特性伸長をめざす総合的な学習の時間－

帰国子女教育<ふくおかプラン>の枠組み

態	4年	5年	6年
教科	国語・算数（個別のカリキュラムをもとに）		
	社会（帰国子女教育独自のカリキュラムで）		
	理科・音楽・図画工作・家庭科・体育（通常学級との交流学習で）		
総合	国際交流タイム（総合的な学習の時間）		
	特別活動（学級活動帰国子女学級合同で）		
	道徳学習（体験に応じて柔軟に扱う）		

研究全体構想

豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造

教科・総合の学びを連動する＜ふくおかプラン＞の展開

1 今，求められる，特色あるカリキュラムづくり

1 これからは，学校がカリキュラムをつくる時代

▼ 新教育課程を完全実施するためには

新教育課程を完全実施するということは，昭和60年の臨時教育審議会の答申以降取り組まれてきた一連の教育改革を，さまざまな形で具現化していくことに他ならない。完全学校週５日制に伴う授業時数の縮減と指導内容の厳選，大綱化と弾力化が図られた学習指導の展開，学校の主体性が問われる総合的な学習の時間の運営，目標に準拠した評価による基礎学力の定着など，20世紀には見られなかった新しい課題を，各学校は，子供や地域の実態を見据えながら，よりよく具現化していかねばならない。これらを統括すると，各学校による創意工夫ある教育課程の編成・実施が求められているということに結実する。これまでの横並びの学校ではなく，それぞれの学校に，特色ある教育活動づくり，学校づくりが期待されているのである。

教育課程の編成と実施は，将来を担う子供たちの資質や能力の在り方に直結し，その意味で学校教育の中核となる部分である。この意味からも教育課程の編成・実施，そして，その運営をどのように進めていくかは，各学校における最重要課題である。しかし，これまでの改訂時における教育課程編成の実態を振り返ってみると，例えば，学校としての教育課程編成の基本方針が不明確で，その趣旨が各教科等の計画に具現化されてなかったり，編成がセオリー通りに行われず，その趣旨が各教科等の計画の寄せ集め的なものとなってしまったりする場合が少なくなかったように思われる。これまで各学校においては，授業づくりについての創意工夫は個々に行われていたものの，教育課程の編成や実施についての創意工夫までは十分になされていない傾向が強かったといえる。

▼ 教育課程の編成からカリキュラム開発へ

しかし，新学習指導要領を踏まえ，特色ある教育活動を推進していくためには，学習づくりから教育課程，さらにカリキュラムづくりへと視野を広げた取り組みが強く要求される。特に，生きる力を育むために，また，特色ある学校づくりを進めるために，その中核として創設された総合的な学習の時間については，単にそのねらいが示されたのみで，学習内容や展開方法のほとんどが，各学校に委ねられている。したがって，これからは，下図（図1－１）のように，教育課程の編成，実施，評価，を含め，その全体構想を学校のカリキュラムづくりととらえ取り組んでいかねばならない。これまでの指導計画づくりをさらに広げて，教育課程をどのように編成するか，教育課程をどのように実施するか，そしてそのような教育課程の編成・実施が可能となる諸条件の整備，さらにはその評価も含めて，「教育課程の編成・実施・評価」という全体像を構想し，学校カリキュラムづくりに向かっていくことが大切である。授業づくりを行うにあたっても，教育課程の実施・展開されたものが授業であることを再認識し，教育課程全体を見据えたなかで，進めていく必要がある。また同時に，授業を評価する際は，授業の行い方や教材の善し悪しを検討するに止まらず，教育課程全体としての成果や課題を検討する，教育課程の評価にまで及んで進めていく必要がある。

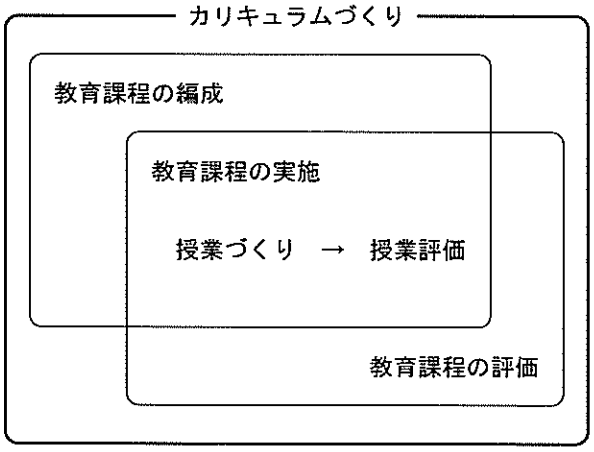


図1－１カリキュラムづくりとは①

これからは，各学校がカリキュラムをつくる時代である。トップダウン的な教育課程の編成よりも，各学校の確かな教育実践を手がかりとしたカリキュラムの開発が求められている。固定的に一定のカリキュラムを理解することにつとめ，それを実現していく学校の在り方やそのようなカリキュラムに関する考え方から，各学校に基礎を置き，その学校の子供や教師の願いを生かしながら，いわばボトムアップ的にカリキュラムを開発していくという考え方へ転換していくことが重要である。

2　子供の目線に立ったカリキュラムづくりを

▼　学校の特色よりも子供を最優先に

学校としてのカリキュラムを開発し，特色ある教育活動を推進していく上で留意すべきは，特色を出すことを最優先の目的としないことである。まずもって最優先すべきは，目の前の子供をどのように育てねばならないか，そのためにどのような力をつけねばならないかである。子供が置かれている現実状況，子供が生きていく将来を見据えた上で，激しく揺れ動く社会を子供が主体的に生きていくための力を，学校としてどう育てていくかという子供からの教育活動づくりの視点こそが重要である。そして，そのための方法として，どのような教育活動を用意し展開すべきかを，子供が生活している家庭や地域の実態を踏まえ構想・展開していくのである。一人一人の子供はかけがえのない存在であるだけに，その結果として展開される教育活動は，自ずから特色が現れることになる。そのことを大事にしようというのが「特色」に他ならない。ともすれば，その点を忘れ，「他校にないその学校の独自なものを」と，奇抜で大がかりな教育活動をもって「特色ある教育活動」と受け止める向きもある。目の前の子供を二の次にした「特色」を求めたとしたら，子供にとっては迷惑な教育活動にもなりかねない。特色ある教育活動は，子供の現実を踏まえた確かな力を育てる視点から生み出されるものでなければならない。

▼　子供のためのカリキュラムづくり

カリキュラムづくりは，子供の側から見れば，毎時の学習であり，学校生活そのものといえる。よりよいカリキュラムをつくれることは，子供にとって分かる学習が提供され，かつ，学校生活が子供の人生のなかで意味あるものになることであり，子供にとって意味の実感できる充実した学校生活を実現することにつながっていく。カリキュラムとは「学びの経験・履歴・軌跡」を意味している。つまり，カリキュラムづくりとは目標や計画の一覧を創ることに止まるのではなく，実際の学びの経験を創造することともいえる。カリキュラムは年度や学期の前に準備されたとしても，本質的には，年度や学期の後に学びの履歴として創造される。そして，カリキュラムの独自性や個性とは，日々追究されている授業と学びの独自性・個性に他ならないのである。

カリキュラムづくり

① 学びの経験のデザイン　（構想）

↓

② 学びの経験を創造する教室実践（実施）

③ 学びの経験の省察と評価　（更新）

図1－2　カリキュラムづくりとは②

3　本校研究の積み重ねを踏まえて

本校では，平成９年度より，「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」を研究の目標に掲げ，人間が人間らしく生きる人間存在の原理を想定し，その原理に基づいた学習指導の在り方を求めつつ，特に教科学習と総合的学習との調和的な展開の在り方を研究してきた。このなかで，本校が終始一貫して大切にしてきた立場は，「教科学習も総合的学習もともに大切にすること，教科学習と総合的学習とを安易に融合・統合させるような関連のさせ方は極力さけるようにすること」である。むしろ，教科学習と総合的学習とは，融合・統合できないことにこそそれぞれの学習のねらいがあるととらえてきたのである。そして，総合的学習に教科学習が吸収されたり，教科学習のなかに総合的学習を取り込もうとしたり，あるいは，教科学習の発展・応用学習として総合的学習を位置づけたりといった関連のさせ方は決して望ましくないという立場をとり続けてきたのである。

こうした研究の積み重ねを踏まえ，昨年度より研究主題を「豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造」と広げ，まず，その一段階として，次の３点からカリキュラム全体のなかで「調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化（前年度副主題）」に取り組んできた。

- ○　豊かな人間の育成をめざす学習として，教科領域と総合的学習の時間はそれぞれに固有の大切な役割・立場を担っていることを大前提として，特に大切にすべき学習内容を明らかにすること
- ○　各教科等の学習において，豊かな人間を育成していくために，自分とのかかわりを強める共通の学習方法原理（自己追究・自己吟味・自己更新）を大切にして展開すること
- ○　カリキュラム全体において，各学習が連動し相互補完・相互促進するなかで豊かな人間を育成していけるような単元構成や年間配列を工夫すること

一年次研究として，いずれの学習においても大切にすべき共通の学びの形態として「自己追究」を設定し，これをどう各教科等で具体化していくか，単元づくりをどう行っていくかに特に重点を置いて究明を進めてきた。その結果，各教科等それぞれに工夫を凝らした教材化や活動構成の工夫については明らかになってきた。また，各教科等の典型的な学習モデルについても一般化を進めることができた。しかし，３点目の各学習の連動のさせ方については，いくつかの実践事例を基にその類型や留意点などは見出せたものの，各教科と総合が具体的に何をどう連動させるのか，その評価をどう行っていくのかといった具体的な方法手順の確立までには至っていない。そこで，本年度は，この「学習の連動」を図るカリキュラムづくりについて究明することを研究の重点とした。

2 21世紀を豊かに生きる人間の育成を
－本校がめざす「豊かな人間」像－

1 本校が大切にしてきた人間存在の原理

カリキュラムづくりにおいて先行するのは，各学校がめざす子供像・人間像（学校教育目標）を明確にすることである。カリキュラムをつくることは，その具現化に他ならない。21世紀を豊かに生きる人間像を考えるには，まずもって「人間としてのあるべき姿（＝人間存在の原理）」をとらえておかねばならない。時実利彦氏は，「人間が生きる」ということを，「たくましく生きる（生命・本能行動）・うまく生きる（適応行動）・よりよく生きる（創造行動）」の３側面からとらえ，「よりよく生きようとする」ことこそ，人間を人間たらしめている最も大切な特質としている。本校ではこうした考え方を了解し人間がよりよく生きる上で対象とするものから，次のように人間存在の原理をとらえ教育の基盤にしてきた。

【本校が考える人間存在の原理】
- ○ 人間は，自分自身を対象化し，絶えず自己を見つめ，よりよい自己を求めながら生きる存在である。（実存的存在）
- ○ 人間は，先人が築いてきた文化を継承し，さらによりよい文化へ発展させながら生きる存在である。（文化的存在）
- ○ 人間は，社会を構成し，その一員として他者とよりよくかかわりながら生きる存在である。（社会的存在）

2 豊かな人間とは

この人間存在の原理を踏まえ，人間が「豊かな人間」として成長していくには，特に次の３つの特性を兼ね備え高めていかねばならないと考えた。（図2－１）

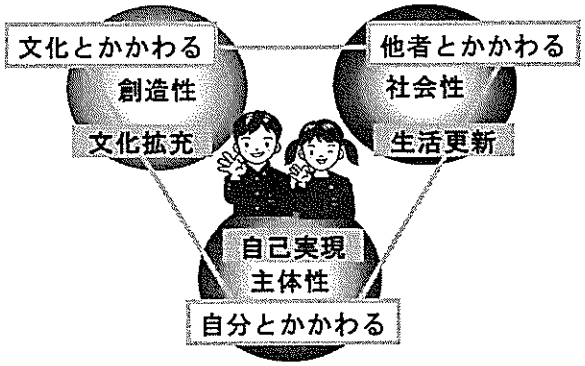


図2－１　３つのかかわりと３つの特性

【豊かな人間が兼ね備えるべき３つの特性】
- ○ 絶えず自分自身にかかわり人間らしい在り方・自分らしい生き方を求め自己実現する「主体性」
- ○ 既存の文化とかかわり，新しい価値ある考え方・行い方を見出し文化を拡充する「創造性」
- ○ 集団・社会の一員として他者や自然とかかわり，生活をよりよく更新していく　「社会性」

▼ 自分とかかわる「主体性」

主体性とは，単に積極的に行動したりただ心の赴くままに能動的に活動したりすることではない。「こうしたい」「こうありたい」といった自分なりの求めや願いをもち，自分自身の現実を絶えず吟味検討しながら，自分の意志や判断に基づいて行動しようとする特性である。具体的には，次のような資質・能力が育ち，人間としての在り方・自分らしい生き方を求め実現しようとする態度や習慣として内面化した特性である。（図2－２）

- ○ 人間としての望ましい在り方・自分の納得する生き方を求める成長への志向性と意欲　（自発）
- ○ 自己を対象化し，真理や規範などとの関係において自分自身の現実を認識し反省する自己認識力・自己評価力　（自覚）
- ○ 他に強制されたり盲従したりせずに行動しようとする意志や判断力　（自主）
- ○ 衝動的にならず，自分自身と対話し，自分を抑制し調整しながら行動しようとする自己抑止力・自己統制力　（自律）
- ○ 他に甘えたり頼ったりせずに，自分の力でやり遂げる自己学習・自己実践技能　（自立）

主体性は，社会性と創造性と密接な関係のなかで自己の生き方の価値体系を形成し高まっていく。また，主体性の発揮によって，社会性と創造性も高まっていく。

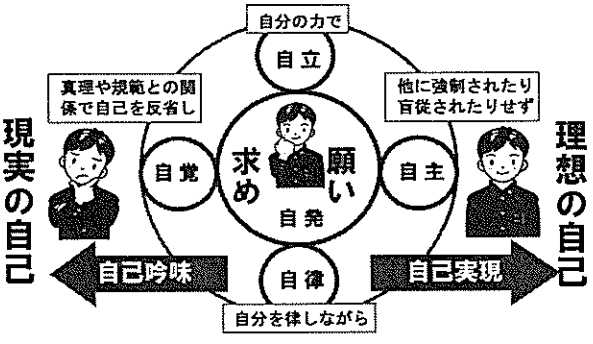


図2－２　自分自身とかかわる「主体性」

▼ 文化とかかわる「創造性」

創造性とは，自分なりに想定した課題の達成や解決のために，①より新しい，②より価値のある，③自分なりの感じ方・見方・考え方を生み出して，それを④具体的な形あるもの・こと（表し方・行い方）として仕上げていくという創造的行為の４つの側面において発揮される特性である。具体的には，次のような資質・能力が育ち，総体として内面化した特性と可能性である。（図2－３）

○　自分の気がかりや願いをもとに創造行為を展開するための課題を想定する力

○　さまざまな知識を組み合わせたり思考方略を活用したりしながら発想・構想して，新しい価値ある感じ方・見方・考え方を生み出す創造的思考力（アイデアやイメージ）

○　抽象的な感じ方・見方・考え方を具体的なものに表したり行い方として具現化したりする創造的な技能

○　創造行為の過程で獲得した知識や技能から形成される知的体系

創造性においては，新しさと価値の有無が大切になるが，これは絶対的なものではなく，個々人ごとに，また集団や社会ごとに決まる相対的なものである。個人の枠内での独善的なもので終始せずに，集団レベル・社会レベルにとって新しく価値あるものを創造できることが大切である。したがって創造性の高まりは，社会性の高まりと密接な関係をもつ。また，気がかりや願いから課題を自分なりに想定し自分の力で創造行為を遂行し続けていく上で，主体性の高まりとも密接な関係をもつ。

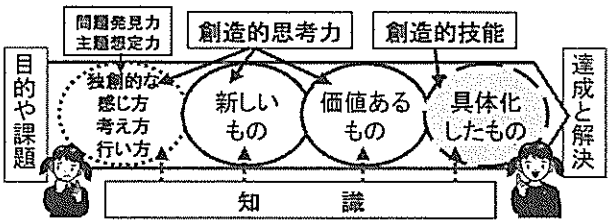


図2－３　文化とかかわる創造性

▼ 他者とかかわる「社会性」

社会性とは，単に社会に受動的に適応する特性ではなく，能動的に対応していく特性を意味する。つまり，自分の所属する社会・集団に能動的に参加し，他者（さまざまなもの・人・こと）とかかわりながら行動すること（共有・共同）を可能にする特性である。そして，さらに他者との間で相互に有益で満足のいく関係を形成・維持・発展させること（共創）を可能にする特性である。具体的には，次のような資質・能力が育まれ，内面化した，共生社会を志向する特性である。（図2－４）

○　社会的生活習慣・価値・規範などの理解と共有

○　他者を認識する能力，他者への共感能力

○　自他の行為の適否を社会的基準に照らして判断する力（社会的判断力）

○　現実社会で生きていくために必要な，実践的な知識や技能（ソーシャルスキル）（社会スキル）

○　有益な社会相互行為とよりよい人間関係を創り出すコミュニケーション力（技能と能力）

社会性が社会や集団への能動的な対応特性として高まるには，主体性の高まりが密接な関係をもつ。また，よりよい人間関係の創造，共生社会（他者との共生，自然との共生）の発展に貢献していくには，個々に創造性が育っていることが不可欠となる。

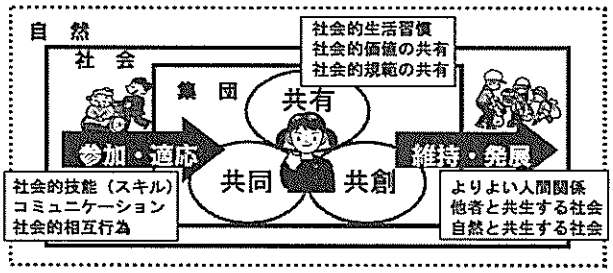


図2－４　他者とかかわる社会性

3　3つの特性を高めていくには

次の２つの点から高まりをねらっていく必要がある。

▼ ３つの特性を調和的に高める

主体性・創造性・社会性の３つの特性を高め，豊かな人間の育成を実現していくためには，まず，カリキュラム全体を見据えて，３つの特性を偏りなく調和的に高められるようにすることが不可欠である。前述したように３つの特性は密接な関係をもっている。例えば，主体性だけが高まると衝動的になりがちに，創造性だけでは独善的に，あるいは社会性だけでは社会埋没的に陥るなどと，いずれかの方向だけに高まりが偏るようでは，真に豊かな人間の特性とは成り得ないのである。

豊かな人間には，３つの特性の調和的高まりが必要なのであり，それぞれの特性は一層高まってくるのである。そのためには，各教科・特別活動・道徳・総合的な学習の時間のいずれにおいても，３つの特性の高まりを意図した学習づくりを行うことが大切となる。

▼ 知と密接に結びつけて３特性を高める

また，３特性は，さまざまな知識や技能を目的や課題に応じ使いこなす特性でもある。知とは知識・技能のみを意味するのではなく，それを獲得し活用する知的能力も含むものである。知識・技能は３特性と密接に結びつくことでこそ，生きて働く「知」となり得るのである。

３特性を発揮して知識や技能を獲得し習熟すること，知識・技能を活用しながら３特性をより高めることを大切にした学習を，各教科等のいずれにおいても具現化することが必要である。

3 教科・総合の学びを連動する＜ふくおかプラン＞の展開

－カリキュラムづくりの基本的な考え方－

1 「学習」を，意味ある「学び」に

知の獲得と関連づけ３つの特性（主体性・創造性・社会性）を偏りなく調和的に高めていくには，学習を単なる「学習（＝Learn)」でなく，自ら努力して追究する過程を含む「学び（＝Study)」として構想する必要がある。本校が考える「学び」とは，一人一人の子供が自分なりの強い求めをもって対象にかかわり，自分の力を精一杯発揮し工夫しながら追究していく学習である。そして，その過程で，学ぶことと生きることとの間につながりを見出していく「子供にとって意味のある学習」である。

2 教科の学び・総合の学び

この学びを構想する際，下図（図3－１）のように，大きく２つのアプローチが考えられる。

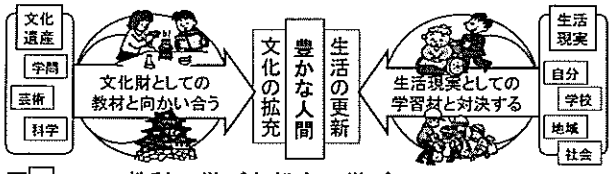


図3－１　教科の学びと総合の学び

１つは，文化材を学習対象とする学び(＝教科の学び)の構想である。先人が長い年月をかけて築き上げてきた文化財や学問（自然科学，社会科学，人文科学など）の成果をもとに学習内容のまとまり（教科）をつくり，文化材（教材）として用意される学習対象についての未知を知にする追究の学びを構想する。そして，この追究のなかで体系的・組織的な知の獲得・活用を促し３特性を高めていく方法である。もう１つは，生活現実そのものを対象とする学び（＝総合の学び）の構想である。生活現実のなかから切実な課題を見出させ子供の本気な努力を引き出すことで，３特性を誘発し高めていく追究の学びを構想する。そして，この追究のなかで，総合的・実践的な知の獲得と活用をねらう方法である。

教科の学びと総合の学びとは，表3－１のように明瞭に区別される固有の学習構想原理から成り立っており，カリキュラムの編成・実施においても，２つの学びの課程として扱うのが妥当である。そこで，カリキュラムの全体枠組みを，下図(図3－２)のように考えた。

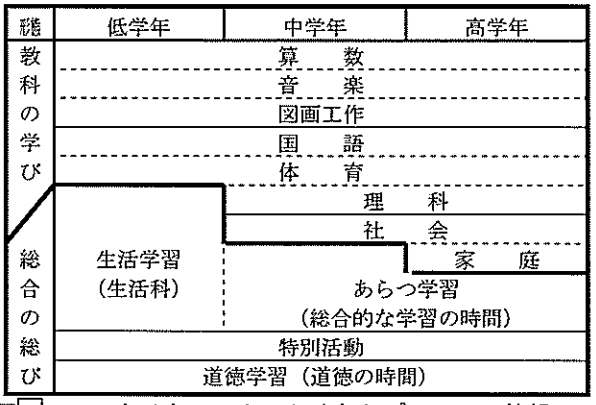


図3－２　カリキュラム＜ふくおかプラン＞の枠組み

教科の学びの課程（教科課程）としては，生活科を除く８つの教科学習を位置づけた。ただし，社会科・家庭科学習は，教科の学びと総合の学びの両特質を併せもつ教科であるととらえ，その役割・立場については十分に考慮が必要となる。これに対し，総合の学びの課程（総合課程）には，その学習構想原理の共通性から，本校の総合的な学習の時間に，生活学習（生活科），特別活動，道徳学習（道徳の時間）を加え位置づけることにした。

表3－１　教科の学びと総合の学びのコントラスト①（学習を構想する原理の違い）

学習構想	教科の学び	総合の学び
学習対象	○　文化財をもとに教師が用意した文化材(教材) （わかりやすく単純化・捨象化されている。） ○　日常ではなかなか出合えない対象	○　本物の生活現実をそのまま学習材に （さまざまな要因が絡み複雑になる。） ○　日常を問い直すことで出合う対象
内容構成	○　文化領域や親学問の成果を背景に，現代社会に必要な共通教養として内容を構成する。 （学習指導要領を踏まえ教師が構成する。） ○　学習内容をもとに子供主体の学習活動を構想する。 「はじめに内容ありき（内容から活動を）」	○　生活現実や社会現実のなかで子供自身が抱く気がかりや願いから価値ある内容を構成する。 （教師の支援を受けつつ子供が創造する。） ○　子供主体の活動から価値ある学習内容を構想する。 「はじめに子供ありき（活動から内容を）」
内容系統	○　文化領域や親学問による体系や系統と子供の発達段階を踏まえることで明確な内容系統を図ることができる。（学習指導要領に準拠して）	○　子供の資質・能力の育ちと他教科等において獲得した知識や技能との関連性を考慮することで内容系統の工夫をする。

3　教科・総合の学びを連動する

教科・総合の学びを連動するとは，２つの学びをともに大切にするカリキュラムの全体枠組みのなかで，各教科等の学びを，統一的に，そして，相互補完・促進的に機能させることである。そのためには，次の２つの方向からのカリキュラムづくりが不可欠である。

①　カリキュラム全体としての統一的連動を図る。
（カリキュラムづくりから単元づくりへ）

学習構想原理が異なる２つの学びは，表3－２のように，３つの特性の高め方も異なってくる。まず，３つの特性を高める上で，各教科等のそれぞれが担う固有の役割・立場と特に大切にすべき資質・能力とを，カリキュラムの横（他教科等相互）と縦（学年系統）との関係から明確にせねばならない。そして，これを踏まえた上で，いずれの教科等も３つの特性を高めることを最重点に置いた単元づくりを行い，カリキュラム全体として統一的に高めていく（統一的連動を図る）のである。

②　各教科等の相互補完・促進的連動を図る。
（単元づくりから再びカリキュラムづくりへ）

教科固有の枠組みで展開する教科の学びは，比較的容易で答えが出しやすい学習となる。しかしその反面，自分の強い求めから学習を立ち上げたり，学習することの意味や生きることとのつながりを見出して，自分なりの応えを創り出すという点では難しい学習に陥りやすい。一方，総合の学びは，複雑な要因が絡んだ生活現実の脈絡のなかで展開するため，子供の強い求めから立ち上がる本物の学習となり，生活現実の課題と対決していく結果，自分なりの応えを見出すことも可能となる。しかし，そのためには，対決できるだけの高度な力を必要とする難しい学習ともなる。そこで，単元の関連づけを考慮しながらカリキュラムをつくり，各教科等の枠を超えた相互補完・促進的な学びの連動を図る必要が生じてくる。

4　学びの連動を図る＜ふくおかプラン＞の展開

＜ふくおかプラン＞とは，先の２つの方向から学びの連動を図ることによって，３つの特性を高めることを特色とする本校のカリキュラムである。その具体的な編成・実施（カリキュラムづくり）にあたっては，下図（図3－３）の手順（ステップ０～６）で進めていく。

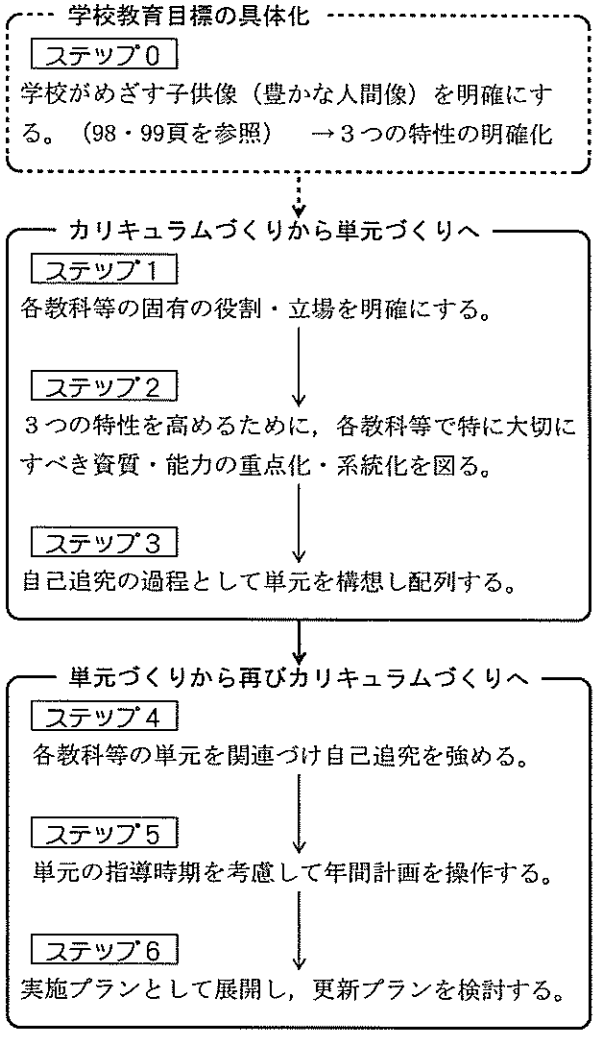


図3－３　カリキュラムづくりの手順（６ステップ）

表3－２　教科・総合の学びのコントラスト（３つの特性の高め方の違い）

３特性	教科の学び	総合の学び
主体性	○　教科の知を学ぶ意味と生活とのつながりの自覚 ○　教科固有の一人学びの力	○　自分のよさの自覚と自分への自信 ○　自らの生き方や人間らしい在り方を考える力
創造性	○　未知を知にするために，進んで文化材（教材）にかかわり追究する力 ○　教科固有の知識・技能とそれを組織化する方法 ○　教科固有の枠組みから分析的・構造的にとらえる力 ○　教科の法則・原理を活用する力	○　自らの生活に課題を見出し，自分の意志や判断に基づきながら追究する力 ○　自分の必要に応じ構成的に知を獲得する力 ○　自らの目的や課題に応じて対象を多角的・総合的にとらえる力 ○　知識や技能を活用しながら問題解決する力
社会性	○　教科固有の，他者とかかわる力や社会の一員として環境とかかわる力 ○　よさを発揮し互恵的・協働的に学び合う力	○　よりよい社会・人間関係を創り出す社会的技能とコミュニケーションの能力 ○　共生社会の創造に貢献する態度

ステップ1　各教科等の固有の役割・立場を明確にする。

ステップ2　特に大切にすべき資質・能力の重点化・系統化を図る。

1　教科の学びにおいて3つの特性をどう高めるか

各教科は，親学問の体系や系統性などに立脚し，分化する形で成り立っている。そして，それぞれ教科独自の目標や内容を所持し，その実現を図るべき内容を構成した学びを展開し，究極は教科の枠組みのなかで豊かな人間の育成をめざすことになる。したがって，専門分化され体系化された知識・技能の習得とそれを獲得し活用する知的能力を確実に育成することが最も大切となる。つまり，教科の学びは，教科固有の創造性を，主体性や社会性と密接に関連づけながら，重点的・系統的に高めていく役割・立場を担うことになる。具体的には，大きく次の３つの学習群に分けてとらえることにした。

▼　算数科・音楽科・図画工作科学習では

これらの教科では，数理や芸術といった先人が築き上げてきた学問や文化財を直接の対象とする。そのため，自己の学び方を評価したり，友達との協働の学びを充実させたりするなど，主体性や社会性を発揮させながらも，優れた文化を享受しさらに発展させていく教科固有の創造性を高めることに特に重点を置く学習といえる。

▼　国語科・体育科・理科学習では

算数科・音楽科・図画工作科と同様に，国語科・体育科・理科も，学問や文化財（言語文化・運動文化・自然科学）を学習の対象とし，創造性を重点的に高める学習である。しかし，国語科では，自他の考えや立場を尊重し伝え合う力を高めることが究極的なねらいとなる。また，体育科では協力や公正といった面から仲間とかかわる力を高めること，理科では自然を愛し自然と共生する態度を養うことも，重要なねらいとする。つまり，創造性の高まりに重点を置きつつも最終的には社会性と密接に関連づけ高めていく学習といえる。（表3－３参照）

▼　社会科・家庭科学習では

これに対して，社会科・家庭科は生活現実を学びの対象とする学習ともいえる。しかし，複雑な要因が絡んだ生活現実をそのまま丸ごと学習の対象とするのではなく，そのなかの文化性を焦点化して，あくまで教科の枠組みでの追究の学びを展開する。つまり，社会科・家庭科は，主体性を発揮させながら，創造性と社会性とが表裏一体となった，社会や家庭を創造する知を，重点的・系統的に高めていく学習といえる。（表3－４参照）

表3－３　教科の学びで大切にする知　　―― 線囲みは学習指導要領に示されている基礎・基本的事項

３特性			算数科	音楽科	図画工作科	国語科	体育科	理科
			・教科の学びの意味を自覚し，生活とのつながりを見出す力 ・自分の学びを見つめ直し，自分の力でよりよい方向に進めていく力					
主体性	創造性	関心意欲態度	・数理的事象への関心 ・数理的な処理のよさに気付き，進んで活用しようとする意欲・態度	・音楽への関心と親しみ ・音楽を進んで表現し，鑑賞しようとする意欲・態度	・自分の思いをもち，進んで表現や鑑賞の創造活動を楽しみ，創り出す喜びを味わおうとする意欲・態度	・国語に対する関心 ・国語を尊重し進んで表現したり理解したりする意欲と態度	・進んで楽しく運動をしようとする態度 ・身近な生活における健康・安全への関心	・自然に親しみ，意欲をもって自然の事物・現象を調べる活動を行う態度
		思考・判断	・数量や図形についての豊かな感覚 ・数学的な考え方の基礎を身に付け，見通しをもち，筋道立てて考える力	・音楽のよさや美しさを感じ取る感性 ・音楽をよりよく表現する構想力 ・音楽鑑賞する力	・感じたことや考えたことをもとに，想像力を働かせながら自分らしい発想をしよさや美しさを考え豊かな表現を構想する力	・自分の思いや考えを豊かにして相手や目的に応じ，筋道立てて表現したり理解したりする能力	・運動の課題の解決をめざし，活動の仕方を考え工夫する力 ・健康や安全についての課題解決をめざし考え判断する力	・自然事象から問題を見出し，多面的（比較・関係・条件など）に追究する力 ・科学的に思考し判断する力
		知識・技能	・数量や図形についての表現・処理技能 ・数量や図形の意味，性質についての知識・理解	・音楽を表現するための基礎的な技能	・造形活動に必要な創造的技能	・言語についての知識・理解 ・言語についての技能	・運動の楽しさや喜びを味わうために必要な動きや技能 ・健康・安全に対する知識・理解	・自然事象の性質や規則性，相互の関係などについての知識・理解
	社会性		・互いのよさを発揮しながら互恵的・協働的に学び合う力			・自他の考えや立場を尊重し伝え合う力	・互いに協力し，公正に運動をする態度	・自然を愛し生活に生かそうとする力

2　総合の学びにおいて3つの特性をどう高めるか

総合の学びは，教科の学びで育んだ創造性をさらに関連づけ高めるとともに，主体性・社会性も意図的・計画的に高めることを重要なねらいとする。そのために「自然，社会，学校，自分自身」などにおける子供の生活現実を内容選択の基準として，子供が自ら３特性を誘発し高めていく活動と内容を選択する。また，内容の系統化においては，教科の学びでの創造性の高まりと，社会性・主体性からみた子供の育ちとを考慮し，子供の経験や興味・関心を中軸に据え検討する。（表3－５参照）

▼　生活学習では

「身近な自然や社会（人々）と自分」を基準に，知的な気づきや自分への気付きが促進され人間関係の向上や自立の基礎の高まりが期待できる具体的な活動や体験を組織する。そして，生活に必要な知を，子供が必要に応じて見出し獲得し総合化していくことをねらうのである。

▼　あらつ学習（総合的な学習の時間）では

生活現実・社会現実を対象に，自分で課題を見出し，追究を時空間的に広げながら，最終的に社会課題に迫る可能性をもった活動を選択する。より広い社会的文脈のなかで，各教科の知の総合化と生活知との総合化を図るのである。また，内容選択と配列の基準については，中学校との連携を考慮した見直しを行っている。特に，あらつ学習で設定している８つの基準を，中学校での総合の学びにうまく連動する工夫を（小中ともに）行っているところである。（あらつ学習要項P194を参照）

▼　特別活動，道徳学習（道徳の時間）では

特別活動では，「学校・学級生活と自分」を基準に，望ましい集団活動を選択する。連帯感や所属感とともに社会的判断力・人間関係力・社会的実践力などの社会性の高まりを重点的にねらっている。

道徳学習では，「他者の生き方と自分」を基準に，自分の心の現実に問いかけ，よりよく自己を更新する内容を選択する。そして，各教科等の学びのなかで育まれた知を，自分の生き方としての知（自分知）や人間らしい在り方（人間知）として自覚し，内面化することで，主体性をより高めることをねらっている。

3　特に大切にする資質・能力の重点化・系統化

各教科等が３つの特性を高める上で担う役割・立場を十分に踏まえた上で，各教科等の学習で特に大切にすべき資質・能力を明らかにし，その重点化（表3 1～３参照）と系統化（各教科等の要項頁を参照）を図る。そして，３つの特性を高めることを最重点にした単元づくりを行い，カリキュラム全体として統一的連動を図る。

○　重点化　→各教科等の相互の関係を踏まえて

○　系統化　→各教科等の系統性を踏まえて

（具体的には，各教科等の要項を参照）

表3－４　教科の学びで大切にする知②

３特性			社会科	家庭科
主体性			・教科の学びの意味と生活とのつながりを見出す力 ・自分の学びを見つめ自分で進める力	
主体性	社会性	創造性	・社会的事象に関心をもち，それを意欲的に調べる態度	・衣食住や家族の生活についての関心
主体性	社会性	創造性	・社会的事象から問題を見出し，追究する力 ・社会的に思考・判断する力	・家庭生活について見直し，身近な生活の課題を見つけ，その解決をめざし考え工夫する力
主体性	社会性	創造性	・観察・調査の技能 ・資料活用・表現の技能 ・社会的事象の様子や働き，特色及び相互関連についての理解	・衣食住や家族の生活に必要な基礎的な技能 ・衣食住や家族の生活に関する基礎的な事項についての理解
主体性	社会性		・社会の一員としての自覚をもって責任を果たそうとする態度	・家族の一員としての自覚
主体性	社会性		・友達と互恵的・協働的に学び合う力	

表3－５　総合の学びで大切にする知

３特性			生活学習	あらつ学習	学級活動
主体性	社会性	創造性	・自分への気付き（自分のよさ）	・追究のよさと自信 ・自らの生き方を考える力	・集団のなかでの自己のよさ（個性）の発見
主体性	社会性	創造性	・身近な環境や自分自身に関心をもち進んでそれらとかかわり楽しく学習や生活をしようとする態度	・身の回りの生活現実や社会現実から課題を見出し，自分のこだわりを発揮しながら追究する態度	・目標を立てて，友達と協力し根気強く取り組む態度 ・学校・学級ためによいことを進んで行う態度
主体性	社会性	創造性	・具体的な活動や体験について自分なりに考えたり工夫したりしてそれを素直に表現する力	・課題を追究するために，既得の知を活用し，新たな考え方・行い方を生み出す力	・学校や学級の課題を解決するために工夫して取り組む力
主体性	社会性	創造性	・生活に必要な基礎的知識・技能	・生活更新のために必要な社会的知識や技能 ・教科の知の再構成（知の総合化）	・集団生活のために必要な社会的知識や技能
主体性	社会性		・身近な自然や社会についての知的な気付き ・さまざまな人とともに，互恵的・協働的に学び合う力	・共生社会によりよく参画し生活更新をしようとする態度 ・よりよい関係を創り出すコミュニケーション能力	・思いやりと感謝の心をもち，相手の立場や考えを尊重しながら，力を合わせて集団生活の向上を行う力

ステップ3　自己追究の過程として単元を構想し配列する。

－どの学びも，３つの特性を高めるための共通の学びとして，統一的連動を図る－

1　教科も総合も同じ学びの形態で

豊かな人間の育成をめざす上で，各教科等の学びは，それぞれに固有の大切な役割と立場を担っている。しかし，どの学びも，３つの特性を高めることを最重点に置いて展開するには，子供が主体性を強く発揮し学びを進めることが共通条件となる。つまり，自分との強いかかわりを誘発する共通の学びの形態が必要になるのである。子供が学習対象に強くかかわり，自ら進んで追究活動を展開することで，３つの特性と密接に結びついた知の獲得と活用が促され，その高まりが期待できるのである。

そもそも，教科の学びと総合の学びとの違いは，学びの形態にあるのではない。２つの学びの違いは，内容と子供の活動を単元に組織化する学習構想原理にある(100頁表3－１参照)。総合の学びは，生活現実のなかから子供が見出した課題を核として子供の活動を優先し，価値ある内容が身に付くように単元を組織化する。教科の学びは，教科の基礎・基本的内容を優先し，それを主体的に学び取る子供の活動を工夫し，単元に組織する。異なるのは，あくまでこの学習構想原理なのである。

2　自己追究の過程としての単元づくり

子供の主体性を誘発し自分とのかかわりを強めるには，学習を子供にとって意味のある学びとして成立させること，つまり，どの教科等の学習も，図3－４のような自己追究の過程として学習（単元）を構想することが必要である。そのためには，次の３つの条件を満たすような，単元づくりを行わねばならない。

- ○　自らの強い求めを土台にした学習であること
  子供が，自らの強い求め（気がかりや願い）を土台に，それを解決・達成していく追究活動に取り組む学習であること
- ○　自分の力を発揮して追究する学習であること
  子供が自分の力（自分自身の力で，自分のよさを発揮して）課題追究に取り組む学習であること
- ○　自分なりの応えを見出す学習であること
  正解である答えだけでなく，自分の判断や思考をまとめ上げた応えを見出す学習であること

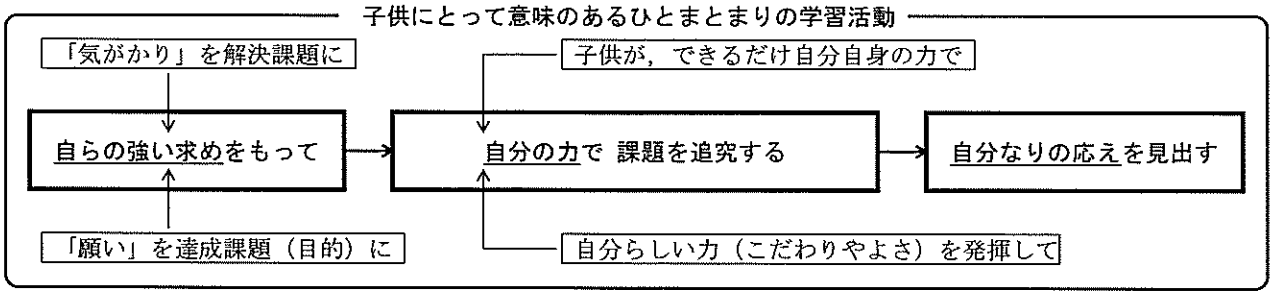


図3－４　自己追究の過程

表3－６　教科・総合の学びにおける自己追究

教科の学び	自己追究	総合の学び
○　教科の基礎・基本的内容をもとに，それを獲得する子供にとって意味ある活動を構想する。	自らの求めをもって	○　まず生活現実から子供が見出す課題を優先し価値ある追究活動へと高まるように支援する。
○　追究方法の違いや，発展・深化する内容において，学習活動が複線化する場合も生じる。 ○　獲得させたい教科固有の知（知識・技能・考え方や学び方)を自ら発揮できるよう支援する。 ○　共通の目的や課題（教科学習の目標）に照応しての自己評価を大切にする。	自分の力を発揮して ・自力で ・自分らしく	○　子供一人一人の追究課題・追究内容・追究方法の違いから学習活動が複線化する。 ○　教科学習で獲得した知を相互に関連づけたり生活知と結びつけたりできるよう支援する。 ○　自分の目的や課題と照応しながら，追究過程（学習履歴）の評価を大切にする。
○　文化材としての教材から見出した知（原理や法則など＝答え）を，生活の実の場で試す。	自分なりの応えを	○　自分なりの追究から見出した応えの有効性をより拡大した場で試しながら一般化する。

ただし，同じ学びの形態で展開するといっても，それぞれの学習が担う役割や立場の違いによって，学習の組織化の仕方は異なってくる。また，自己追究自体も表3－6に示したように異なる点が生じてくる。自己追究の過程を大切にしながらも，具体的に，どのように，単元や題材を構想していくか，単元構成や支援を工夫していくかを究明することで，いずれの学習も３つの特性を誘発し高めていく共通の学びの形態で展開できるのである。

3　2つの自己評価活動を位置づける。

子供の自己追究を強め子供にとって意味のある学習の過程にしていくには，図3－５のように，２つの自己評価活動を位置づける必要がある。１つは，自己追究の途上に位置づける，「自己吟味」としての自己評価活動である。もう１つは，自己追究の終末部に位置づける「自己更新」としての自己評価活動である。

▼　「自己吟味」としての自己評価活動

「自己吟味」としての自己評価活動とは，学習者である子供の論理によって行われる形成的な評価活動を意味している。この評価活動が備えるべき主要な条件として次の３つを考えている。

- ○　（自分の評価基準となる）自分の目的や課題に照らしての評価活動であること
- ○　外的評価，客観的評価を踏まえた自己評価活動であること
- ○　自己追究の見直しや検討を促す，自分のための評価活動であること

この「自己吟味」としての自己評価活動は，自己追究の調節の方向から，次の３つの型が考えられる。

A　再学習型の自己評価

自己評価により，自己追究の過程や結果の不十分な箇所を明らかにして，それを克服するために再度自己追究をやり直してみる（フィードバックを行う）型である。

B　補充・強化型の自己評価

自己評価によって，自己追究を進めていくために，現段階で不十分な点や不足している内容について明らかにして，それを補充・強化していく型である。追究の仕方について確かめ直したり，友達との交流活動で情報を交換したりするなどの活動も含む。（単元や教科枠を超えてのフィードバックにつながる評価にもなる。）

C　学習調整型の自己評価

自己評価によって明らかになった問題点などをもとに，今後の自己追究の方向自体を調整したり変更したりする型である。課題をより深化・発展させたり新たな課題を付加したりすることなども含む。（フィードフォワードを行う評価である。）

▼　「自己更新」としての自己評価活動

「自己更新」としての自己評価活動とは，自己追究の過程と結果とを子供自身が評価しながら，自己追究のよさの自覚や自分に対する自信を高める肯定的な評価活動である。子供の自尊感情を高め「新しい自分」へとより成長させていく点において，「自己吟味」としての評価活動とねらいを異にしている。自分の追究過程や追究結果のよさについては，特に次のような点に気付くことができるようにする。

- ○　自分の追究の仕方（学習の仕方や認識の仕方）に気付くこと
- ○　自己追究のなかで，自分の能力や機能が分かってくること
- ○　自分なりに取り組んだ成果の確認，努力の結果についての確認をすること

自分を対象化できる「もう一人の自分」から「新しい自分」を見出し形成するには，「やったことに価値があった，自分にもやれた，がんばれば自分にもできる」といった，成就感・効力感・有用感などを味わえるような図3－５のａ～ｃのような活動を工夫し，自己追究の過程に位置づけることが不可欠となる。

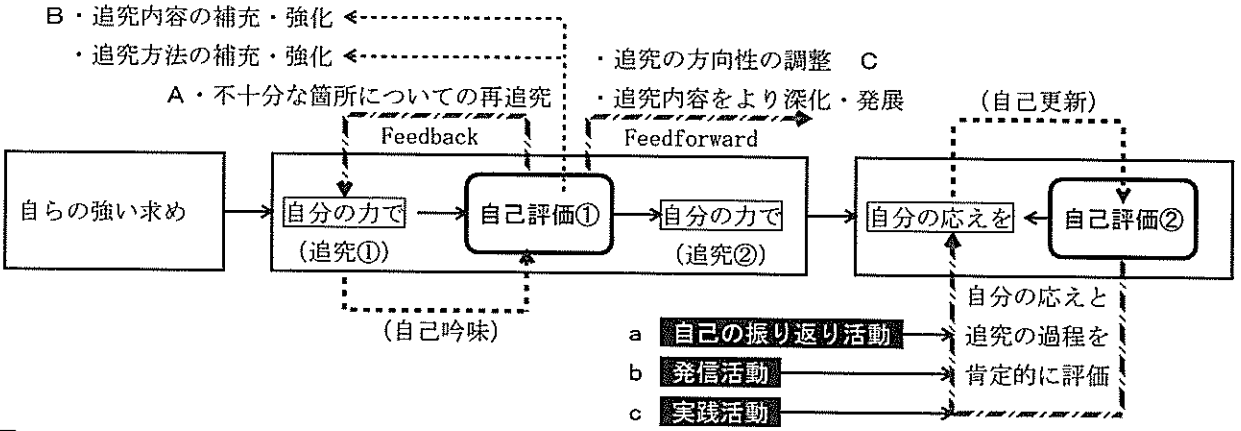


図3－５　自己追究の過程に取り入れる２つの自己評価活動

ステップ4　各教科等の単元を関連づけ自己追究を強める。

－カリキュラム全体のなかで，相互補完・促進的連動を図る－

1　カリキュラム全体で自己追究を強める

どの学びにおいても，自己追究の過程として単元づくりを行うが，表3－7のように，教科と総合の学びそれぞれの特徴から，相互に困難さが生じてくるのは否めない。また，時間数の都合からも，各教科等の全ての単元を自己追究として展開するのは難しい。そこで，表3－7のA～Cの矢印の方向で，カリキュラム全体のなかで教科と総合の学びのそれぞれの困難さを補完し，自己追究をより促進できるように，単元の関連づけを図る。

A　総合の学びにおける強い子供の求めを教科の学びに生かせるように活動をつなぐ。
B　専門分化されてはいるが，教科固有の専門的な知を総合の学びに活用できるように活動をつなぐ。
C　教科枠での学びの成果を，総合の学びをくぐらせながら，学ぶことの意味や生きることとの関係を実感させる。

自己追究における自己評価（自己吟味）活動によって，子供は追究の過程と結果を検討し，その方向性や追究内容・方法を自ら調節する。そして，そこで明らかになった不十分さを解決するために知を求め，さらなる自己追究に向かう。そこで，この自己追究における子供の「知の求め」を生かして単元を関連づけていく。

2　教科の自己追究における「知の求め」

教科の学びにおける自己追究の目的や課題は教科目標に直結しているため，自己評価後の自己追究は，必ず教科学習の枠組みのなかで，図3－6の2方向へ向かう。

① 不十分な知を再追究し補充・強化する方向
② 不十分な知を追究し内容をより深化する方向

したがって，教科学習の側から安易に総合的学習への関連を図ることには，十分に留意せねばならない。安易な関連づけは，子供の自己追究を阻害するだけでなく，学力の低下にもつながっていく。教科学習における自己追究の価値は，まずもって，子供自らが，自分の力で，専門分化した教科の知を確実に習得し創造性を中軸に3つの特性を高めていくことなのである。

表3－7　教科・総合の学びにおける自己追究の問題点（困難さ）

教科の学び	自己追究	総合の学び
△ 教師があらかじめ準備した教材（文化材）とのかかわりから未知を見出しそれを知にしていくための課題を設定する。子供の側からの強い求めは生じさせること最大の努力を要する。	自分の求めをもとに A	○ 生活現実とのかかわりから生じた気がかりや願いを大切にして，そこから学習を立ち上げていくために，子供の強い求めが生まれやすい。（主体性が強く誘発される。）
○ 教科の体系や子供の知の発達を踏まえた内容構成に基づいた学びであり，高度ではあるが，教科の枠組みで単純化された学びであるため，論理的に筋道立った課題追究に取り組める。	自分の力で B	△ 子供主体の課題追究は期待できるが，複雑な要因が絡んだ現実の脈絡のなかでの学習であるため，子供の自力解決が難しい。課題に応じた専門的な知(教科の知)が必要になる。
○ どの子供にも答えを出すことが保証される。 △ 教科枠での学びの成果はあっても，学びの意味や生きることとのつながりについては実感されにくい。（自分の応えを出すのは難しい。）	自分なりの応えを C	△ 正答としての応えでなく，暫定的な応えが子供一人一人に求められる。 ○ 学びの意味を理解したり，自分の追究のよさを実感し自信を高めることにつながる。

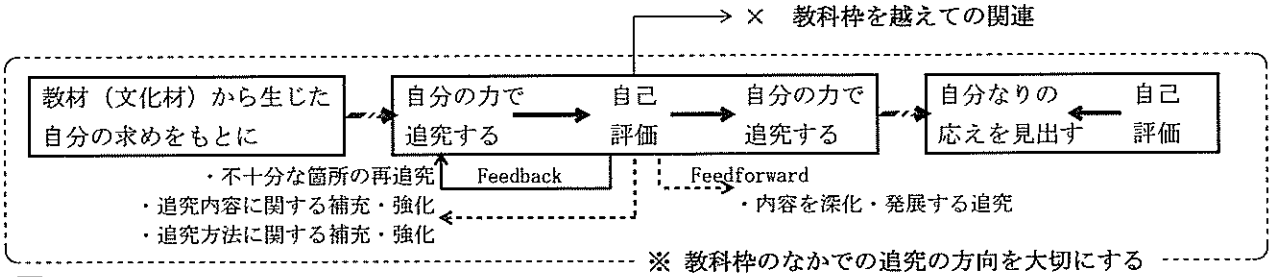


図3－6　教科の自己追究における「求める知」とその方向性

3　総合の自己追究における「知の求め」

教科の場合と比べ，生活現実課題に取り組む総合の学びにおける自己追究では，不十分さの解決のために子供が求める知の方向性は次のように多様となる。

○　高度で専門的な知を求める　　→教科学習へ
○　自分自身の心を課題追究する　　→道徳学習へ
○　学級・学校生活の課題を追究する→特別活動へ
○　あらつ学習（総合的な学習の時間）の課題
　　→他のあらつ学習へ

つまり，総合の学び，特にあらつ学習（本校の総合的な学習の時間）の場合は，求める知の方向は，教科の場合と異なり，総合の学びの枠を広げ，カリキュラム全体に広がっていくことが考えられるのである。このことから，図3－7のように，子供が求める知を基軸とした連動の基本形態に分類することができる。

▼　総合の「知の求め」から各教科の学びへ

子供の求めが，高度で専門的な知，つまり教科の知への求めとなる場合は，図3－8のような形態に具体化される。つまり，求める知が，追究方法か追究内容かによって，関連のさせ方が変わるのである。あらつ学習における追究方法への求めは，各教科の固有の技能や学び方への求めとなる。そのため，国語科や算数科との連動が図りやすくなる。追究内容への求めは，教科固有の知識や見方・考え方への求めとなる。そのため，社会科や理科，家庭科との連動が図りやすくなる。図画工作科や音楽家，体育科については，子供たちの求めに応じて，追究方法や追究内容との連動を図ることが可能となる。

▼　総合の「知の求め」から道徳学習・特別活動へ

子供の求める知が，「自分の心の課題」に向かう道徳学習の場合は，教科・あらつ学習・生活学習・特別活動の学びにおける具体的な体験をどう連動させていくかがポイントとなる。特に，あらつ学習（生活学習）や特別活動の具体的な体験との関連を図って，「生き方の学び」を構想することが大切である。

子供の求める知が，「学校・学級としての共有課題」となる特別活動では，生活学習・あらつ学習のなかで学級全体に共通する願いが生じた場合に，それを集団で追究する学びとして学級活動を立ち上げたり，反対に，学級活動全体のなかで，個々に気がかりや疑問が生じて大きくなった場合に，生活学習・あらつ学習を立ち上げたりする関連のさせ方が考えられる。

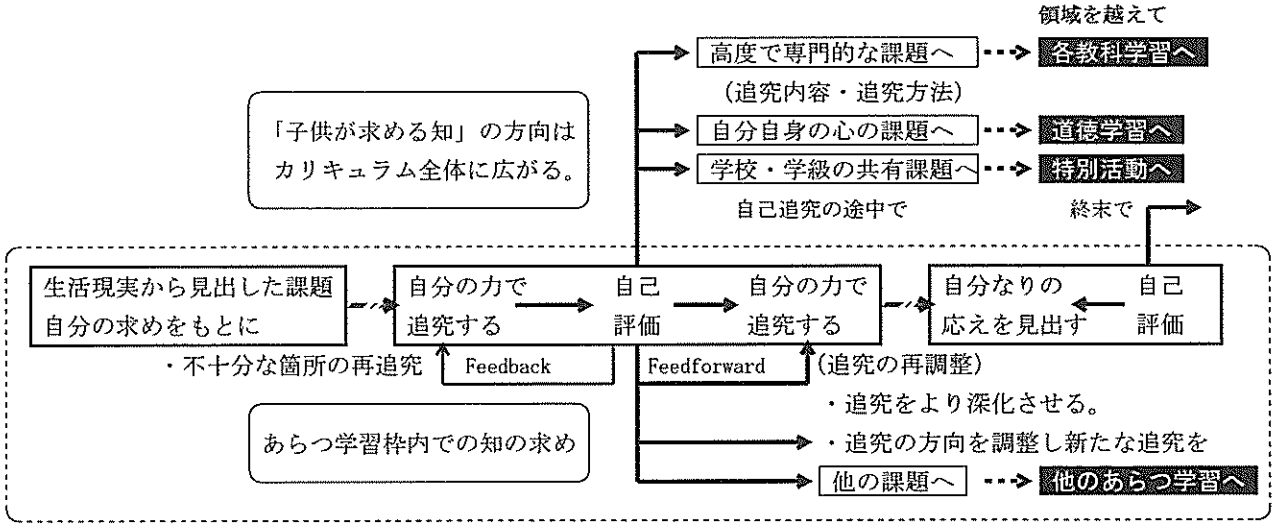


図3－7　総合の自己追究における「求める知」とその方向性

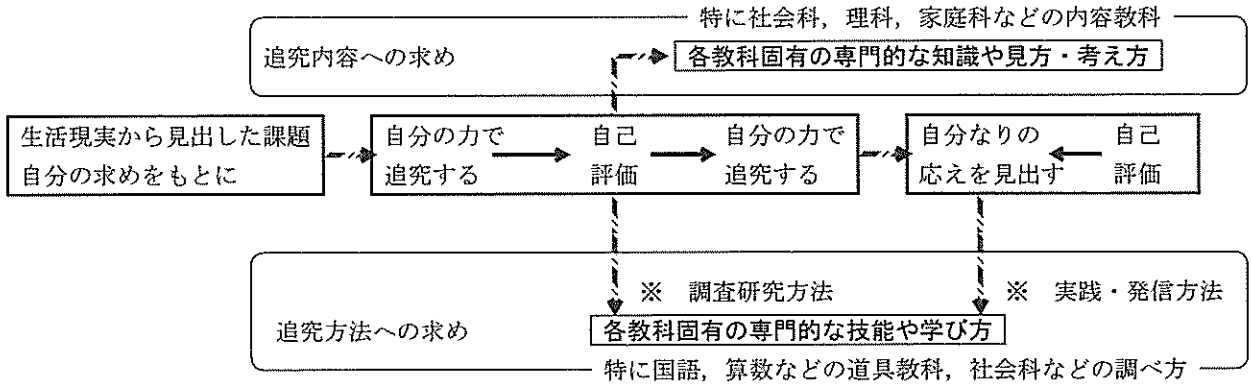


図3－8　教科の学びに「求める知」とその方向性

ステップ5　単元の実施時期を考慮して年間計画を操作する。

－子供が求める知が「既得」か「未得」かを踏まえて－

1　教科・総合の学びの「融合・統合」は避ける

＜ふくおかプラン＞の編成・実施においては，教科・総合の学びを「融合・統合」することは極力行わないようにしている。「融合」とは，教科・総合の学びを解け合わせ１つの学びにまとめるやり方である。例えば，博多湾を学習対象とした総合の学びと，博多漁港を教材に漁業について調べ考える社会科の学びとを融合しまとめて追究していくような展開である。（図3－９左）

これに対して「統合」とは，教科・総合の学びを合併させ１つの単元として展開するやり方である。この段階は総合で，この段階は教科でといったように，教科・総合の学びの枠組みは残すところが「融合」と異なる。例えば，ある調査研究に取り組んだ総合の学びの，研究レポートを書く段階や相互に発表し合う段階は国語科の学びとして統合するような展開である。（図3－９右）

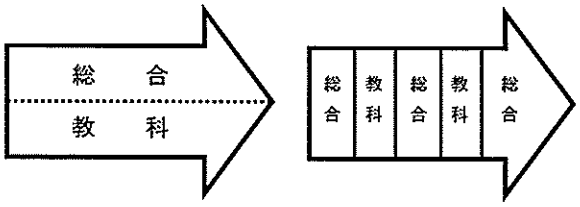


図3－９　融合型（左）と統合型（右）

しかし，これまで述べてきたように，教科と総合の学びとでは，そのねらいも学習の組織化の方法も，根本的に異なる学習であり，もともと融合・統合できないところにこそ，それぞれの固有の役割や立場があると考えている。無理をすれば，教科の学びがいつの間にか「総合化」したり，総合の学びが「教科化」してしまう。特に，教科の学びが成立しない展開に陥りやすい。先の例の場合，社会学習や国語学習にはなり得ても，社会科学習や国語科学習にはなり得ない危険性が生じるのである。したがって，単元相互の関連を図る場合は，まず各教科等の単元は，それぞれ独立したひとまとまりの単元として成立させておくことが大切となる。関連を図ることで，それぞれの学びを歪めたり本質を失わせたりしては本末転倒である。関連づけることは，あくまで自己追究を補完・促進するための方法・手段であって目的ではない。＜ふくおかプラン＞における連動の立場は，このようにそれぞれの学びは独立しながら，相互につながりを見出し，カリキュラム全体のなかで自己追究が相乗的に強まり合うように，実施時期を調整し操作することである。

2　年間計画をどう操作するか

ステップ４で述べたように，自己追究（特に総合の自己追究）における子供の「知の求め」を生かして，単元を関連づけ，年間計画の操作を行っていく。その際，子供が知を求める場合には，教科の学びにおいて「既に知が獲得されている場合（＝既得）」と，「未だ獲得されていない場合（＝未得）」とがある。その「既得」か「未得」かということによって，学びの連動のさせ方と年間計画の操作が大きく変わってくる。

▼　「既得」の場合の連動のさせ方

「既得」の場合は，下図（図3－10）のように子供の求めに応じて，子供の求める知を想起・再追究させる場合を総合の学びで保障していく。また，場合によっては，フィードバックする形で応用的な小単元を構成し，教科の学びで同時展開していくこともできる。

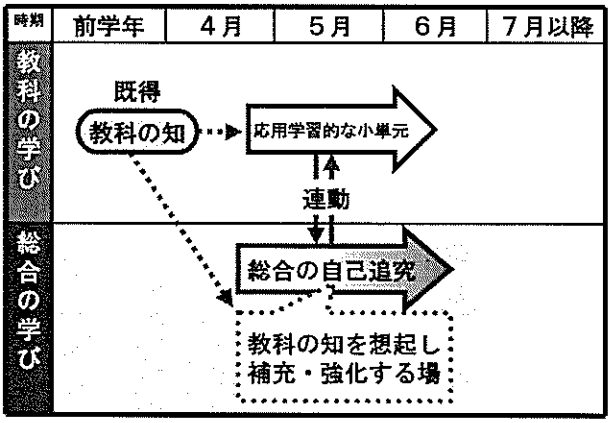


図3－10　求める知が「既得」の場合

例えば，右下表（表3－８）のあらつ学習「あらつカッパ伝説」において，既得の生活学習や社会科の学習内容（校区のようすや地図の見方など）についての求めが生じた場合，それを想起・再追究する活動をあらつ学習の単元計画なかに位置づけ保障する。また，国語科での学習内容（昔話など）への求めが生じた場合，関連する昔話を題材とした応用・発展的読書活動を小単元として同時展開することもできる。

▼　「未得」の場合の連動のさせ方

「未得」の場合は，図3－11・12のように相互の単元の指導時期を調整し，同時展開型の連動を図る。この連

動によって，子供は，強い求めをもって教科の自己追究を進め，専門的な知を進んで獲得し創造性を高めていく。そしてそれを，総合の学びで活用し，総合の自己追究も強めていくのである。

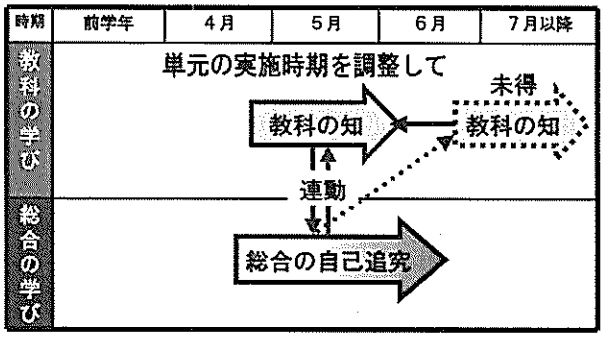


図3−11　「未得」の場合①（教科の単元を調整）

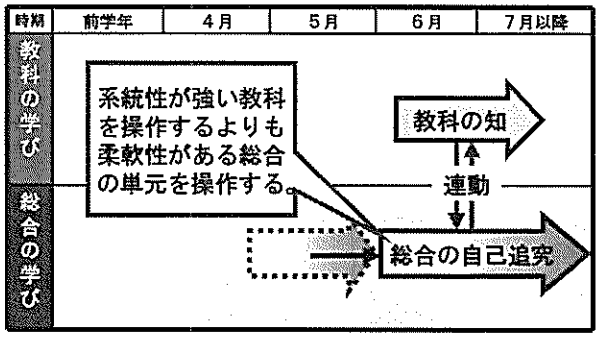


図3−12　「未得」の場合②（総合の単元を調整）

この形態は，通常，総合の学びの展開部分に位置づくが，下図3−13のように，総合的学習における子供の強い求めを教科学習の導入に生かしたり，教科枠での学習成果を総合的学習の発信・実践段階に生かして，成就感や効力感を味わえるようにしたりもできる。

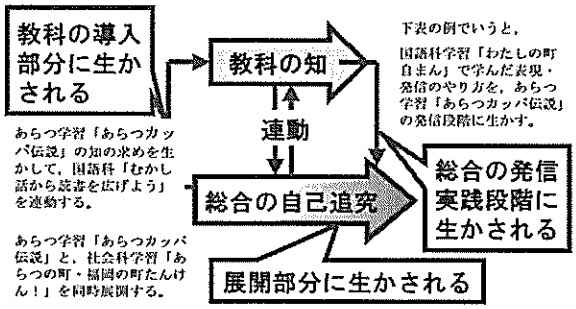


図3−13　知の求めを導入段階や発信・実践段階に

▼ 年間計画を操作する際の留意点

年間計画の操作に当たっては，次の２点に留意する。

① 教科の都合で総合の学びをつくらない。
② 教科の側から総合の学びを積極的に生かす発想で教科の題材（教材）や活動づくりを工夫する。
② 年間計画の操作においては，できるだけ，単元配列や系統が背景学問の体系や子供の発達系統に大きく規制される教科よりも，柔軟性のある総合の単元を組み替えていくようにすること

表3−８　学びの連動を図った年間計画例　（平成14年度　第３学年年間計画の一部）

教科等		4　月	5　月	6　月	7　月
教科の学び	算数		わり算をかたちで考えよう −もようづくりを通して−		生活の時間や時こくを調べよう
	国語		わたしの町自まんをわかりやすく伝えよう	むかし話から読書を広げよう−日本の話・世界の話−	
	理科		カブトムシからのぞく小さな命 −こん虫となかよくなろう−		
	社会	あらつの町たんけん！ −学校のまわりの特色をみつけよう−	福岡の町たんけん！① −福岡市の特色をみつけよう−	福岡の町たんけん！② −福岡県の特色をみつけよう−	
総合の学び	あらつ給	カブトムシ牧場をつくろう	あらつカッパ伝説 −むかし話からたんけん! あらつの町・福岡の町−	元気に育てカブトムシ	夏休み自由研究 ・課題づくり ・計画づくり
			（年間を通じて帯び単元的に展開）		
	特活		係を決めよう	カブトムシたん生パーティーをしよう	
	道徳		生き物を大切にしよう	わたしたちのふるさと	命を大切にしよう

ステップ6　実施プランとして展開し更新プランとしてを検討する。

－カリキュラムの編成・実施・評価－

1　編成・実施・評価のための3つの＜プラン＞を

ステップ１から５までの手順をもとに出来上がるのが＜ふくおかプラン＞における＜構想プラン＞である。この＜構想プラン＞と，実際に子供が学びを具体的に展開していく段階での＜実施プラン＞と，カリキュラムの評価を行い次年度につないでいく段階での＜更新プラン＞の３段階で，下表3－10のあらつ学習のプラン例のように，カリキュラム自体を成長させていく。

▼　４つの＜構想プラン＞

＜構想プラン＞は，先に述べたステップ１から３の手順を進めながら，年度当初に教師側で編成していく指導計画としてのカリキュラムである。本校がめざす豊かな人間を育成していくための各教科等の固有の役割や立場を明確にするとともに，各教科等で特に大切にすべき知を割り出し，学習内容や学習活動として具体化し単元を構想したものである。また，ステップ４・５を踏まえ，子供の知への求めを大いに生かした，学びの連動を計画したカリキュラムである。具体的には，次の４つの＜構想プラン＞を立てていくことになる。

① 学校全体の＜構想プラン＞
② 各教科等における単元レベルでの＜構想プラン＞
③ 総合的学習の時間の＜構想プラン＞
④ 各教科等の学びの連動を図った各学年での＜構想プラン（年間指導計画）＞

▼　＜実施プラン＞から＜更新プラン＞へ

＜実施プラン＞から＜更新プランに向けた評価としては，豊かな人間の育成という本校の特色あるカリキュラムづくりの立場から，次の視点が大切になる

① 教科・総合の学びのそれぞれにおいて，子供が主体性を発揮し，創造性・社会性から重点化された資質・能力をしっかりと獲得しているか。
② ３特性と密接に結びついた知を自ら獲得したり，知を活用しながら３特性をより調和的に高めたりしているか。

表3－９　構想→実施→更新プラン例（平成13～14年度　第３学年あらつ学習）

時期		構想プラン	実施プラン	更新プラン	構想プラン（平成14年度）
1学期	4月	あらつウォークラリー	あらつウォークラリー	カブトムシ牧場をつくろう	カブトムシ牧場をつくろう
	5月	博多のおもしろ外国人さんとふれ合おう	博多のおもしろ外国人さんとふれ合おう	あらつの町をたんけんしよう！	あらつカッパ伝説 むかし話からたんけん！あらつの町・福岡の町
	6月	カブトムシ牧場をつくろう	カブトムシ牧場をつくろう	元気に育てカブトムシ	元気に育てカブトムシ
	7月	夏休み自由研究	夏休み自由研究	夏休み自由研究	夏休み自由研究
2学期	9月	ふやそう！守ろう！カブトムシ	ふやそう！守ろう！カブトムシ	ふやそう！守ろう！カブトムシ	ふやそう！守ろう！カブトムシ
	10月				
	11月			博多のおもしろ外国人さんと，英語でふれ合おう	博多のおもしろ外国人さんと英語でふれ合おう
	12月	ボランティアサークルあらつっ子	あらつの町のお宝発見！		
3学期	1月	伝えよう！わたしたちの町福岡	凧(たこ)から見える日本の伝とう	凧（たこ）から見える日本の伝とう	あらつの凧（たこ）から見える日本の伝とう
	2月				
	3月				

4 障害児教育研究・帰国子女教育研究の取り組み

1 障害児教育研究部の取り組み

障害児教育研究部においては，「豊かな生活を営む子供をめざす教育課程の創造」を研究主題に研究を進めてきた。本年度は，特に一人一人の子供が将来自立し，社会参加するために必要な「生活力」の育成をめざし，各教科及び領域・教科を合わせた指導における役割・立場の明確化を図っている。特に，生活単元学習で育む資質・能力の重点化・系統化を図り，指導領域や指導内容を次のような点から再考することで，その子供にとっての個別の指導計画を更新している。

○ 教科別指導においても指導していく国語科・算数科の内容を，生活単元学習のなかでどう構成的に学び取らせていくか。
○ 教科別指導を行わない，生活科や学級活動（特別活動）の内容をどう構成していくか。
○ 総合的な学習の時間の内容を，生活単元学習のなかでどのように押さえていくか。
○ 自立活動の内容のなかから，生活単元学習で扱う内容をどう設定していくか。

このことにより，各教科の役割も明確になり，指導の重点化が図られた年間計画が更新できるのである。

また一方では，各教科で身に付けた力を生活単元学習のなかで大いに発揮できるように，生活単元学習における単元の内容編成や単元配列を検討するなど，教育課程の再編を進めている。また，障害児学級と通常学級との連動（交流学習）も推進している。

<table>
<tr><td>段階</td><td>低（ふじ組）</td><td>中（さくら組）</td><td>高（梅組）</td></tr>
<tr><td>教科別</td><td colspan="3">国　語
算　数</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">音　楽・図画工作
体　育</td></tr>
<tr><td>領域・教科合併</td><td colspan="3">生活単元学習</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">合同生活単元学習（異年齢・縦割り）</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td>特別活動
（クラブ・委員会・学校行事）</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">日常生活指導・自立活動</td></tr>
</table>

図4－1　障害児教育＜ふくおかプラン＞の枠組み

2 帰国子女教育研究部の取り組み

帰国子女教育研究部においては，主題「自信と誇りを育む帰国子女教育の展開」のもと，主体性・創造性・社会性の面から，育みたい資質・能力を明確化し，研究を進めている。教育課程編成については，次の３側面から，教育内容・方法を進めている。

① 生活適応指導
② 学習適応指導
③ 特性伸長指導

生活・学習適応指導は，次の３つの方向で進めている。

○ 国語科・算数科については，一人一人の実態を踏まえ，個に応じたカリキュラムを作成し指導する。
○ 社会科については，帰国子女学級独自のカリキュラムを作成して指導を進める。
○ その他の教科等については，通常学級との交流を大切にしながら学習指導を展開する。

特性伸長指導としては，帰国子女教育部における総合的な学習の時間としての「国際交流タイム」の展開に重点を置き，子供一人一人の海外の生活経験や学習経験を大切にしたカリキュラムを作成している。また，通常学級のあらつ学習との連携も図っている。

<table>
<tr><td>区分</td><td>４年</td><td>５年</td><td>６年</td></tr>
<tr><td>教科の学び</td><td colspan="3">国　語・算　数
（個別のカリキュラムをもとに）</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">社　会
（帰国子女教育独自のカリキュラムで）</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">理科・音楽・図画工作・家庭科・体育
（通常学級との交流学習で）</td></tr>
<tr><td>総合の学び</td><td colspan="3">国際交流タイム
（帰国子女教育における総合的な学習の時間）
※　帰国子女学級で</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">特別活動
（学級活動は帰国子女学級合同で）</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">道徳学習
（体験に応じて柔軟に扱う）</td></tr>
</table>

図4－2　帰国子女教育＜ふくおかプラン＞の枠組み

参考文献

(1) 工藤文三編「問われる教育課程の編成・運営能力」　教育開発研究所　２００２年
(3) 佐藤　学　「学びの快楽　ダイアローグへ」　世織書房　２０００年
(3) 奈須正裕　「総合的学習を指導できる”教師の力量”」　明治図書　１９９９年
(4) 奈須正裕・寺尾慎一／福岡教育大学教育学部附属福岡小学校
「新世紀の学力づくり　－調和的に展開する教科・総合的学習－」明治図書　２００１年

（研究主任　吉田　正樹）

第１学年の＜ふくおかプラン＞（平成14年度　構想プラン）

【教科の学び】

５つの教科学習（国語科・算数科・音楽科・図画工作科・体育科学習）は，１学年の子供たちにとって，「環境による教育」を教育原理とした幼稚園教育から分化して位置付く学習といえる。国語科・算数科学習では，これからの学習の基盤となる基礎的な資質・能力を大切にし，言語や数理のよさ・おもしろさを実感する楽しい活動を通して体得させていく単元づくりを工夫する。音楽科・図画工作科・体育科学習においては，遊びの原理を加味した活動を通して音楽文化・造形文化・運動文化などに出合わせて，それらに進んでかかわっていく態度の育成に重点を置く。

【総合の学び】

学校生活における自立の面から生活更新に取り組む学習を展開する。はじめての学校生活や学級の仲間との集団生活のなかで生じる思いや願いや気がかりを出発点にして，それをよりよく解決したり実現したりしていくための「遊び・探検」を中軸とした楽しい生活学習・学級活動を展開する。特に，生活学習では，一人一人の興味，ペース，工夫，発見を生かした実感のある活動を大切にし，認識を興味・感動・驚きなどと絡まったものとして捉え，情緒的なところから子供に迫っていくという幼稚園教育との共通性を大切にしながらも，子供の生活圏全体を扱っていく。そのなかで，協力や自分の振り返り，予測，観察，記録などの体験的活動を位置づけ，２学年へとつないでいく。

【学びの連動】

発達段階として，まだ未分化な状態にあることを考慮し，教科の学びと総合の学びの相互の学びのみならず，教科の学びのなかにおいても，合科的な指導を工夫していかなければならない。特に，表現活動においては，言語・音楽・造形・身体表現などを総合的に発揮できる活動を大切にする。また，さまざまな学習の成果や自分への気付きを言葉や絵に表すことで実感できるように，国語科や図画工作科学習との連動を工夫していく。

教科等		時数	4　月	5　月	6　月	7　月
教科の学び	算数	114	なかよしのはなしをつくろう (5)	１０までのかずをかぞえよう (10)	かずあてあそびをしよう (6)	たしざんえほんをつくろう (6)
						ひきざんえほんをつくろう (
	音楽	68	はるかぜさんとうたおう (4)	おんがくのもりであそぼう (6)	リズムであそぼう (6)	どうぶつランドであそぼう (4)
						け きをたお (
	図画工作	68	すきなものがつまったポケット (2)	つなげてつなげて (2)	くるくるぎざぎざからうまれたよ (6)	かぜとおともだち (6)
						ここはぼくのお しのいきものラ ド
	国語	272	えをみてはなそう (16)	あいさつをしよう (10)	おはなしきかせて (16)	みんなにおしえよう (14)
						なかよしのどうぶつさん (12)
						ほんよみ はっぴょ かい (
						せんせい　あのね (20
	体育	90	ゆうぐであそぼう (2)	うんどうのてすと (2)	てつぼうであそぼう (6)	はらはら！どきどき！あてっこにげっこげーむ (6)
						ぶろっくぼーるをたのしもう (6)
						ウォーターランドであそぼう
総合の学び	生活学習	102	ぼく・わたしのふぞくしょうがっこう (8)	なかよしひろばをつくろう (10)	いきもの大すき！どうぶつらでどうぶつとあそぼう (8)	
				・ふぞくしょうをはないっぱいにしよう		
			ぐんぐんのびるぼく・わたしＩ～せいちょうにっき～ (８)			にしこうえんであそう (
	学級活動	34	○ 学校のいきかえり (1)	◎ 係を決めよう (1)	○ 虫歯きんをやっつけろ (1)	◎ 学級の歌をくろう (2
			○ 学校のきまり (1)	○ 給食のよういの (1)	○ 雨の日のすごし方 (1)	○ 水はこわい (1
				○ よいあいさつ (1)	◎ 雨の日の遊びをしよう (2)	○ はじめての夏休み (1
	道徳学習	34	・みんなの学校 (1)	・友達だから (1)	・思いやりの心 (1)	・命の温かさ (
			・時間のきまり (1)	・親切な心で (1)	・植物を育てる (1)	・がんばる心 (
			・元気な声で (1)		・わきでる力 (1)	・自分の成長 (
					・大切に使う (1)	

9 月	10 月	11 月	12月	1 月	2 月	3 月
２０までのかずかぞえよう (13)	たしざんをしよう (12)	ひきざんをしよう (13)	かたちをしらべよう (10)	わかざりをつくろう（ながさ） (6)	すごろくづくりをしよう (100までのかず) (12)	シルエットをつくろう（100までのたしざん・ひきざん） (11)
がっきめじんをめそう (5)	まねっこごっこをよう (3)	ドレミのリズムにのってあそぼう (5)	にしこうえんの音であそぼう (7)	おはなしをおんがくであらわそう (5)	きせつをうたおう (3)	うたのおいかけっこをしよう (6)	リズムにのってたのしもう (5)	おんがくのようすをおもいうかべてえんそうしよう (7)
むろみ川の石をらべて，ならべ (6)	みんなあつまれ！どうぶつランド (6)	くしゃくしゃがみから (6)	つづきえどんどん (4)	かみのつつからうまれたよ (6)	かみぶくろにペッタンコロコロ (4)	すきなものあつまれ (4)	たのしいすごろくづくり (6)	１年○くみアルバムをつくろう (4)
ずきをしよう　大きないぶ (22)	くらべてみよう (16)	おんどくはっぴょうかい (16)	ふぞくしょうカレンダーをつくろう (16)	本はともだち (14)	ふぞくしょうカレンダーをつくろう２ (16)	おみせやさんごっこをしよう (20)	どうぶつの赤ちゃんをしらべよう (20)	かみしばいをつくろう (20)
もちゃはっぴょうかいをしよう (10)								
にあび (4)	マット・とびばこランドであそぼう (6)	ドレミたいそう (6)	もみじだにの虫になろう (6)	とびっこランドであそぼう (6)	けりっこあそびをたのしもう (8)	なわとびあそびかけっこあそび (8)	リズムにのってあそぼう (7)	ゲーム大かいをしよう (8)
ごくおもちゃでそぼう (10)	大すきかぞく (9)	にしこうえんのあきとあそぼう (10)	ようちえんさんとなかよし (12)	あらつのかがやくおじいちゃん・おばあちゃん (10)	みんな大すきにしこうえん (6)	せいちょうにっきをしょうかいしよう (3)
２学期のめあてを決めよう (1) ２学期の係を決めよう (1) はじめての運動会 (1) ありがとうの気持ち (1) わがままな行い (1) 黙っていかないで (1)	○ みんな友達 (1) ◎ 西公園ゲーム大会をしよう (2) ○ 正しいしせい (1) ・いつも正直に (1) ・楽しいお手伝い (1) ・危険から身を守る (1)	○ 本の借り方返し方 (1) ◎ 好きな本の紹介をしよう (2) ・美しい心 (1) ・ぼくの町 (1) ・みんなで守るきまり (1)	◎ 幼稚園さんとなかよし集会をしよう (2) ○ 冬休みのくらし (1) ・何度もねばり強く (1) ・温かい心 (1) ・自分の成長 (1)	◎ ３学期の係を決めよう (1) ○楽しく遊ぼう (1) ○ ありがとう給食 (1) ・きまりを守って使う (1) ・礼儀正しい生活 (1) ・お世話になっている人 (1)	○ もし火事になったら (1) ○ きれいなかたづけ (1) ○ もうすぐ２年生 (1) ・正直で素直な心 (1) ・友達を思う心 (1) ・正しい行い (1) ・家族の人の願い (1)	◎ 新１年生へプレゼント (2) ・楽しい学級 (1) ・星への願い (1) ・自分の成長 (1)

第２学年の＜ふくおかプラン＞（平成14年度　構想プラン）

【教科の学び】

１学年同様，行動と離れた抽象的な思考はまだ十分でないことや子供の興味・関心，実感というものが深い思考を誘発し，確かな認識を獲得する上で重要であることから，具体的・体験的な活動を大切にした単元を構想していく。また，２学年になってくると，具体的なものに対する思考の論理性が獲得されるようになってくることから，生活的な課題を意識した問題解決的な活動を構成した単元も位置づけていく。ただし，教科に進んでかかわわる態度の育成に重点を置き，反復的・螺旋的な学習を通じて，より高めていけるようにする。

【総合の学び】

生活学習では，１学年までに人や物に対する認識が獲得され，それを基盤に，環境への認識が発達してくる。しかし，自然的環境の認識や社会的環境の認識については，明確な区別に基づく認識には至っていない。そこで，人，社会，自然を一体的に扱いながら，取りあげる対象を地理的・精神的に近いものから遠いものへと時間的・空間的に広がるように配列する。さらに，自然環境や社会環境の文化性にも出合わせながら，３年生からの教科学習（理科・社会科）や「あらつ学習」への発展を意識した単元を構想していく。また，学級活動においては，単に，みんなで力を合わせる活動から，役割や分担を位置づけた組織的な活動を重視していく。

【学びの連動】

２学年では，３学年からの「あらつ学習」への発展を考え，特に生活学習を中核とした教科学習との連動を重視し，合科的・関連的な指導の形態を生かした学習活動を工夫していく。ただし，１学年同様に，まだ未分化性が残る発達段階であることを考慮し，知識の総合化よりも，教科で獲得した表現や技能といった機能的学力をより総合的に応用発揮できるように，総合の学びと教科の学びとの連動を重視したカリキュラムづくりを構想する。

教科等		時数	4月	5月	6月	7月
教科の学び	算数	155	とけいを見ながら生活しよう(7) たし算をしよう(7) ひき算をしよう(9) つかみ取りゲームをしよう(7) かたちづくりをしよう(4) 長さをはかろう(8) たし算とひき算をしよう(8			
	音楽	70	音楽かくれんぼをしよう(3) 楽しい歌のおいかけっこをしよう(7) 体でリズム，がっきでリズムを感じよう(6) 音楽であそぼう(4) きせつをうたおう(4)			
	図画工作	70	にじのせかいへようこそ(4) ローラーから生まれたカラフルせかい(6) 外国人さんとおめんカーニバルをひらこう(6) おしゃれなすてきな紙テープ(8)			
	国語	280	よんであそぼう「ふきのとう」(20) とっておきニュース「春号」(20) ちえをくらべてちえずかんをつくろう(20) 自分だけのお話絵本をつくろう「スイミー」(20) とっておきニュース(夏号)(20)			
	体育	90	西こうえんアスレチック(6) うんどうのテスト(4) てつぼうであそぼう(6) たからじまをぼうけんしよう(6) ウォーターランドであそぼう(9			
総合の学び	生活学習	105	あらつの町をたんけんしよう(14) おおきくなれ，みんなの野さいⅠ(継続12) 外国人さんとおめんカーニバルをひらこう！(10)			
	学級活動	35	○学級目標を決めよう(1) ◎係を決めよう(1) ○学習中のやくそく(1)	◎グループのメンバー紹介をしよう(2) ○さそいにのらない(1)	◎教生先生とやってみたいこと(2) ○プールの使い方(1) ○雨の日の遊び方(1)	◎七夕集会をしう(2 ○もうすぐ夏休
	道徳学習	35	・自分できちんと(1) ・きまりをまもる(1) ・小鳥たち元気でね(1)	・楽しい家族(1) ・気持ちのよいあいさつ(1) ・学級のしごと(1) ・進んできれいに(1)	・植物にやさしい心で(1) ・相手を思いやって(1) ・生きるよろこび(1) ・よいことは進んで(1)	・やりぬく心 ・みんな友達 ・自分の成長

9 月	10 月	11 月	12月	1 月	2 月	3 月
○さしを ってくら こう (12)	まとあて ゲームを しよう(8)	かけ算をしよう Ⅰ (20)	かけ算をしようⅡ (24)	三角形と四角形 (7)	かけ算をしようⅢ (14)	大きい数を かぞえよう (11)	長いものさしを作ってくらべよう (9)
っちをそう うしてうた う (6)	すてきな音を見つけよう (7)	タンタンタンのリズムにのろう(7)	けしきをうたおう (5) リズムに合わせて (3)	おはなしを音楽であらわそう (7)	きせつを歌おう (4)	お気に入りの歌はっぴょうかいをしよう (7)
タパタ船をうかべう (8)	あきをあつめてたのしくあそぼう (6)	すてきなペンケース～おりぞめ和 (8)	ぼくのわたしのすてきなぼうし (6)	キラキラシャボンからなにが見えた (8)	手づくりぬの絵本をつくろう (6)	ぼくのわたしのアルバムづくり (4)
っぴょ 名人に ろう (21)	おもちゃの作り方をおしえます (22)	お手紙シリーズを読もう (26)	とっておきはっぴょうかいをひらこう (35)	ことば大会をしよう (25)	2年生の思い出をまとめよう (25)	人形げきをしよう 「スーホの白い馬」ほか (26)
ャングルリーを楽しも (7)	シュートボールを楽しもう (9)	おしあいひきあいあそび (4)	まねっこパークであそぼう (7)	もみじ谷でおにあそびをしよう(7)	チャレンジランドであそぼう (6)	なわとびあそびかけっこあそび (7)	マット・とびばこランドであそぼう (6)	ボールけりゲームを楽しもう (7)
おおきくなれ，みんなの野さいⅡ (継続8)				みんな大すき そうごうとしょかん ～手づくりぬの絵本はっぴょう会をしよう～ (13)		ぐんぐんのびる， ぼく・わたしⅡ (13)
もちゃランドであそう (10)	みんな大すき！ とうにんこうみんかん (10)	あつまれみんなのたまりば ～とう人町かえっこショップをひらこう～ (15)				
2学期のめあて立てよう (1) 楽しい係を決めう (1) チャイムの合図 (1)	○友だちにしてあげたいこと (1) ◎2の○ひみつきちに1年生を招待しよう (4)	○言葉のひみつ (1) ○学習への心がまえ (1) ◎2の○読書まつりをしよう (2)	◎仲良し集会をしよう (2)	◎新年の係を決めよう (1) ○楽しくなる食事 (1)	○心の鬼をおいだそう (1) ◎さよなら6年生 (2)	○もうすぐ3年生 (1) ◎お別れ会をしよう (2)
心を結ぶあいさつ (1) 動植物にもやさい心で (1) 友達への親切 (1)	・たった一つのいのち (1) ・うそと正直 (1) ・健康を守る (1)	・感謝の気持ち (1) ・みんなのものを大切に (1) ・勇気をもって (1)	・清らかな心 (1) ・上手に使う (1) ・自分の成長 (1)	・町のよさ (1) ・ねばり強くがんばる (1) ・助け合う友達 (1)	・生き物の気持ちを考えて (1) ・たのもしいお父さん (1) ・美しさに感動する心 (1)	・命のありがたさ (1) ・やさしく親切に (1) ・自分の成長 (1)

第３学年の＜ふくおかプラン＞（平成14年度　構想プラン）

【教科の学び】

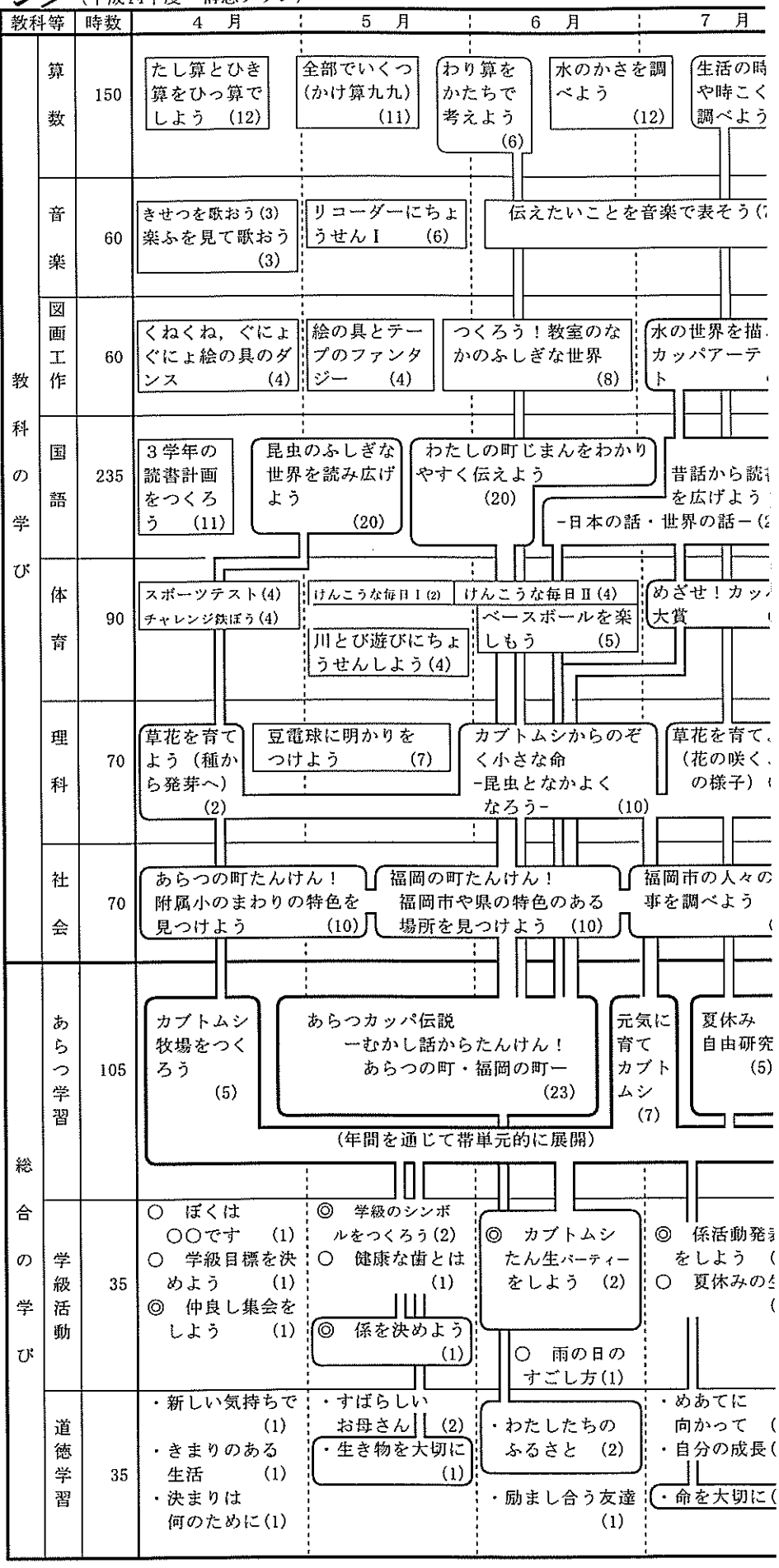
第３学年になると，調べたり観察・見学したりといった追究活動自体への興味・関心が増してくる。低学年までの教科学習においては，どちらかと言えば，遊びの原理を大事にしながら，自己追究の過程として展開できるように単元づくりを行ってきたのに対して，第３学年からは，文化材としての教材とのかかわりを強める学習を展開していくようにする。つまり，言語や数理，芸術や運動文化そのものの機能や特質を考え，価値を見出していくような自己追究を大事にした単元づくりを行っていく。また，この学年から立ち上がる理科，社会科学習においては，地域の自然事象・社会事象を対象とした具体的な活動を展開していく。ただし，ここで対象とするのは，生活現実丸ごとではなく，そのなかの文化性にかかわるものに焦点化して，教科枠のなかでの自己追究を展開できるようにする。社会科学習においては，特に創造性と社会性を表裏一体的に高めていくような内容設定を心がけねばならない。

【総合の学び】

３学年から開始する「あらつ学習」では，特に，総合的な学び方の基礎・基本の定着をめざす単元づくりを行うようにする。個々の求めに応じた支援は何より大切ではあるが，特に学習の手引き（あらつ学習ガイド）を効果的に活用させる。その際，①手引きをもとに，調べ方を工夫させることや，②子供の活動を手引きとしてまとめ一般化することを大切にする。

【学びの連動】

１学期は，生活科からの発展を考え，社会科や理科と連動した単元を設定する。しかし，２学期以降は同じ生活事象や自然事象を対象としながらも，教科の自己追究と総合の自己追究との違いが明確になるように，単元をつくり配列していくようにする。この学年においては，むやみに連動を図ることよりも，理科，社会科学習，あらつ学習がそれぞれどのような学習なのかを理解させることが大切である。



9 月	10 月	11 月	12月	1 月	2 月	3 月
べたことを わりやすく わそう(13)	長いものさし作りをしよう (11)	しきつめもようをつくろう (9)	かけ算九九をひろげよう (11)	大きな数を調べよう (9)	宝箱をつくろう (10)	同じ数ずつわけよう (10)	いろいろな重さを調べよう (10)	かけ算をひっ算でしよう(11)	そろばんで計算しよう (7)
らべうたを楽しう (3)	リコーダーにちょうせん(2) ふしの流れやリズムにのって歌おう (4)	場面を音楽で感じ取ろう (3) 曲の気持ちを感じて歌おう (3) けしきを歌おう(2)	日本と世界の遊び歌集をつくろう(6)	リコーダーにちょうせんⅢ (3) 声を重ね歌おう(4)	ふしや音を選んで表そう (5)	6年生への思いをこめて歌おう(6)
う明カップから まれたものは (6)	動物曲芸ワールド (6)	2つのつつを組み合わせてつくると (6)	くちばしの大きなわたしのわたり鳥 (6)	竹と和紙からつくる，すてきなオブジェ (8)	ダンボール箱から生まれたものは (8)
ぜ ンゼン -Ⅰ (10)	動物と人間のかかわりを読み取ろう (22)	調べたこと，考えたことを多くの人に伝えよう (20)	物語から命の大切さを考えよう (20)	ふじだな文集をつくろう (10) 詩を読もう (10)	大凧の作り方を説明書に書きまとめよう (20)	大凧フェスティバルのパンフレットをつくろう (20)	自分から選んで(選択読書活動) (27)
しく表現・ダンをしよう (7)	遊ぼうチャレンジマット (7) フラッグフットボールを楽しもう (8)	あらつしょうがい物リレーをしよう(7)	チャレンジとび箱で遊ぼう (8)	ちょうせん！なわとび遊び・かけっこ遊び (7)	ハンドゲームを楽しもう (9)	つくろうリズムムーブ (5)
花を育てよう 種取り) (3)	昆虫や植物の成長図鑑をつくろう (8)	日なたと日かげを比べよう (9)	光といっしょに生活しよう (12)	磁石の不思議を見つけよう (12)	自分たちが育てた虫や草花は…(4)
(年間を通じて帯単元的に展開)						
しい買い物唐人町商店街 元気な唐人町のひみつをみつけよう (12)	さぐろう。福岡市の仕事 ～福岡市でつくりだされるもの～ 「かんづめ工場のしごと」 (13)	つくろう火災ゼロのまち福岡 ～荒戸出張所の人々のはたらき～ (11)	ストップ交通事故 ～中央署の人々のはたらき～ (10)
休 自 研 (2)	ふやそう！まもろう！ カブトムシ (18)	博多のおもしろ外国人さんとふれ合おう (20)	あらつの大凧から見える 日本の伝統 (25)
2学期のめあてを決めよう(1) 2学期の係を決めよう (1) 運動会に向けて (1)	○ 正しい言葉づかい (1) ◎ 学年集会をしよう (2) ○ 忘れ物をなくそう (1)	◎ ぼくらのあらつフェスタをつくろう (4)	○ ぼくわたしのいいところ(1) ◎ ふれあい集会をしよう (2)	◎ 3学期の係を決めよう (1) ○ 給食への感謝 (1)	◎ ぼくらの力はどこまであがるか (4)	○ 6年生への感謝 (1) ○ 4年生に向けて (1)
身の回りをきれいに (1) お年寄りに感謝して (1) みんなの使うもの (1)	・ほんとうの友達 (1) ・真心からの行い (1) ① ・正直のよさ(1)	・困っているだれかのために (2) ・正しい心，強い心 (1)	・みんなが使う場所 (2) ・美しくやさしい心(1) ・自分の成長(1)	・友達のよさ(1) ・命を大切に(1) ・礼儀正しく(1)	・みんなクラスの仲間(3) ・くじけない心①	・わたしたちのふるさと (2) ・自分の成長(1)

第４学年の＜ふくおかプラン＞（平成14年度　構想プラン）

【教科の学び】

集団性と個性がともに高まってくる４学年の子供の特性を考慮して，自己追究の学びが展開されるように学習を構想していく。そのため，個の追究と集団での追究が有機的に働くような活動構成の工夫が必要になる。そこで，共通の学習内容である教科の場合は，一人一人の子供の個性が発揮されるように追究方法が複線化した学習の展開も取り入れていくことになる。また，追究方法や結果を見通しながら自分の仮説を検証していくような追究活動が展開できるようにしていく。特に，理科・社会科学習においては，追究の対象を身近な自然事象や社会事象から時間的・空間的にしだいに広げていくように学習を配列していくようにする。

【総合の学び】

あらつ学習を構想していく際には，具体的な体験活動をもとにした追究活動だけでなく，情報活用やデータ分析などを駆使しながら探究的に追究していく学習を構想していくようにする。このことで，これまでに教科で身につけていた知識・技能の総合化だけではなく，教科固有の学び方が総合的に発揮できるようにしていく。そこで，追究課題や方法がより複線化してくることを想定しながら，課題別・方法別のグループ活動を効果的に取り入れ，友達と協力しながら個の追究が行えるように工夫していく。また，特別活動においては，４学年から委員会・クラブ活動に参画していくことを意識し，子供たちの意識が学級生活から学校生活へと広がるような集団活動を展開していくように題材を配列していく。

【学びの連動】

３学年の学びの経験を生かしながら，教師の側からでなく子供の側から「追究内容の連動・追究方法の連動」による学習を求めてくることを大切にしていく。つまり，あらつ学習の課題解決のために教科学習の学びを求めていけるように単元を配列していく。特に，探究的な追究を支える情報処理の仕方や表現方法における連動を意識しながら，教科で培った知が総合の学びに生かされるようにしていく。

教科等		時数	４月	５月	６月	７月
教科の学び	算数	150	大きな数を表そう (9)	表に整理してグラフに表そう(15)	およその数で表そう(8)	コマをつくろう (14)	考え方を式表そう (1
	音楽	60	日本のふし韓国のふしを比べよう (6)	曲の感じを生かそう (6)	歌声をひびかせよう (3)	ふしのまとまりを拍子を感じよう(
	図画工作	60	形や色から生まれたものは (6)	わりばし大変身 (4)	すてきな西公園の木をえがこう (6)	ストローと針金でおもちゃをつくろう (4
	国語	235	４学年の読書計画を立てよう (10)	詩を読もう (15)	生き物の不思議を読み取ろう(10)	新聞記者になろう (25)	ファンタジーの世界を楽しもう (20
	体育	90	スポーツテスト (4)	２種競技に挑戦しよう (6)	私たちの体(4)	つなごう！ねらおう！４の○バウンドゲーム(9)	いろいろな泳ぎに挑戦しよう (7
	理科	90	春の生き物を調べよう (9)	身近な電気のはたらきを調べよう (12)	夏の生き物を調べよう (5)	夏の星の神秘(しんぴ)にふれよう (7)
	社会	85	福岡市のごみはどこへ ～ごみ減量作戦をしよう～ (9)	これからの福岡市の水 ～節水型都市をめざして～ (14)		あらつの今と昔 ～あらつ昔探検～ (7)
総合の学び	あらつ学習	105	４年生あらつ学習オリエンテーション (９) つくろう！あらつふれあいウォーキングコース (２３)			夏休み 自由研究
	学級活動	35	○学級目標を決めよう (1) ◎係を決めよう(1) ○はじめての委員会 (1)	◎ふれあい大作戦をしよう (2) ○学習のかまえ (1)	◎学級のシンボルをつくろう (4)	◎係り活動発表をしよう (○チャレンジ夏み (
	道徳学習	35	・４年生になって (1) ・みんなのために (1) ・ふるさとを思う心 (1)	・身近な動植物を大切に (1) ・あたたかい思いやり (1) ・命を守る仕事 (1)	・学校のよさ (1) ・生きた礼儀 (1) ・友情の大切さ (1)	・まっすぐな心 (・進んで活動す (・目標をもってきる (

9 月	10 月	11 月	12月	1 月	2 月	3 月
のわり算を う (16)	はしたの数の表し方を調べよう(14)	三角形のなかまを調べよう(14)	いろんな数で同じずつ分けよう (18)	角の大きさをはかろう (10)	変わり方のきまりを見つけよう (8)	面積を調べよう (16)
を歌 (2)	カーニバルの音楽をつくろう (8)	曲の気持ちを生かして演奏しよう(6)	景色を歌おう (3)	音楽の情景を感じ取ろう (4)	ふしのちがいを感じ取ろう (3)	気持ちが伝わる音楽をつくろう (6)	音の組み合わせを味わおう (3)	6年生への思いをこめて歌おう (6)
や色から世界をえがこう ・アジアからのおくりもの～ (10)	もみじ谷ワンダーランド (8)	空を見て感じたことをえがこう (6)	オリジナルタングラムをつくろう (4)	スケルトンの世界からやってきたもの (8)	ありがとうの心をこめて（絵手紙）(4)
せプレゼ ーII (10)	戦争について考える読書会をしよう (25)	体のひみつを読み深めよう (26)	調べたことを報告しよう (25)	バリアフリーの生活を考える (23)	西公園の虫を守るガイドブックをつくろう (25)	自分から選んで（選択読書活動） (21)
トオリンピックに よう (7)	レッツダンス(5)	4の○タグラグビーを楽しもう(8)	力試しパーク (5)	挑戦！鉄棒名人(6)	障害物リレーに挑戦しよう(7)	なわとび・持久走に挑戦しよう(6)	君もとび箱マスター (7)	スリーゴールサッカーを楽しもう (9)
と水の不思 ・調べよう(10)	月の不思議を調べよう (6)	秋の生き物を調べよう(4)	ものの温度と体積の関係を調べよう (12)	冬の星の神秘にふれよう(4)	冬の生き物を調べよう (7)	自然の中の水の行方を探ろう (14)
人形芝居を支え 村さん (10)	黒田節を伝えた二川相近 (10)	福岡県はどんなところ (5)	探検どんこ舟で柳川をさぐろう 大島村の人々のくらし(10)	陶の里小石原村の人々のくらし (10)	アジアにひらかれた福岡県 (10)
アジアのひみつをさぐろう ～あらつアジアフェスタ ２００２～ （２０）	附小樹木調査隊 （２０）	ボランティアサークルあらつっ子 （２６）
あてをもった 活 (1) 学期の係を決 よう (1)	◎係活動を見直そう (2) ○目を大切に (1) ◎学級文庫をつくろう (2)	◎樹木ウォークラリーを企画しよう (3) ○友達のよいところ (1)	○男女なかよく (1) ◎年忘れパーティーをしよう (2)	◎３学期の係を決めよう (1)	○食物の秘密(1) ◎福祉プラザを訪問しよう (4)	○けがの予防 (1) ○もうすぐ高学年 (1)
達のよさを知 ・ (1) いやりを行動 (1) 分のことは自 で (1)	・おとしよりを大切にする心 (3) ・日本のすばらしさ (1)	・自然や動植物へのやさしさ (1) ・勇気ある行動 (1) ・何が大切かを考えて (1)	・家族みんなで (1) ・目標に向かって (1) ・目標をもって生きる (1)	・きまりを守る心 (1) ・みんなのために働く (2)	・友達への注意 (1) ・何よりも尊いもの (1) ・古いものを大切にする (2)	・真心の美しさ (1) ・自然を大切に (1) ・目標をもって生きる (1)

第５学年の＜ふくおかプラン＞（平成14年度　構想プラン）

【教科の学び】

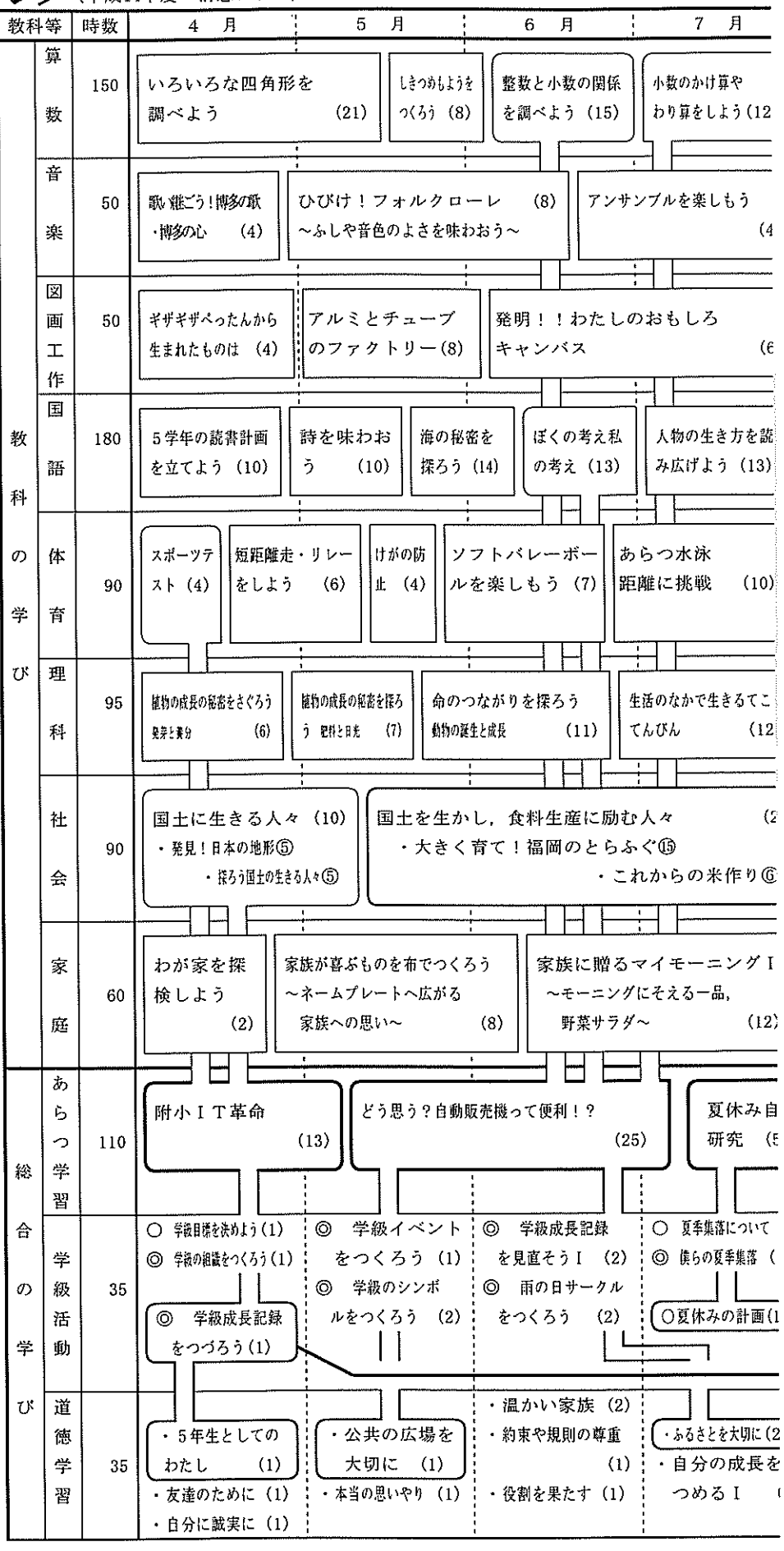
各教科においては，低学年からの積み上げをもとに，より文化追究の学習としての役割や立場を強めていく。例えば国語科学習では，探究活動や文化活動に生きて働くように，言語の論理性や虚構性を追究できる単元を配列する。社会科と５年生から分化して位置付けられる家庭科学習については，教科の学びと総合の学びの両特質をもった教科であるととらえ，中学年における地域や身近な自然についての学習をもとに，学習対象を時空間的に広げ，文化性を焦点としてあくまで教科の枠組みの中で学びを展開していく。

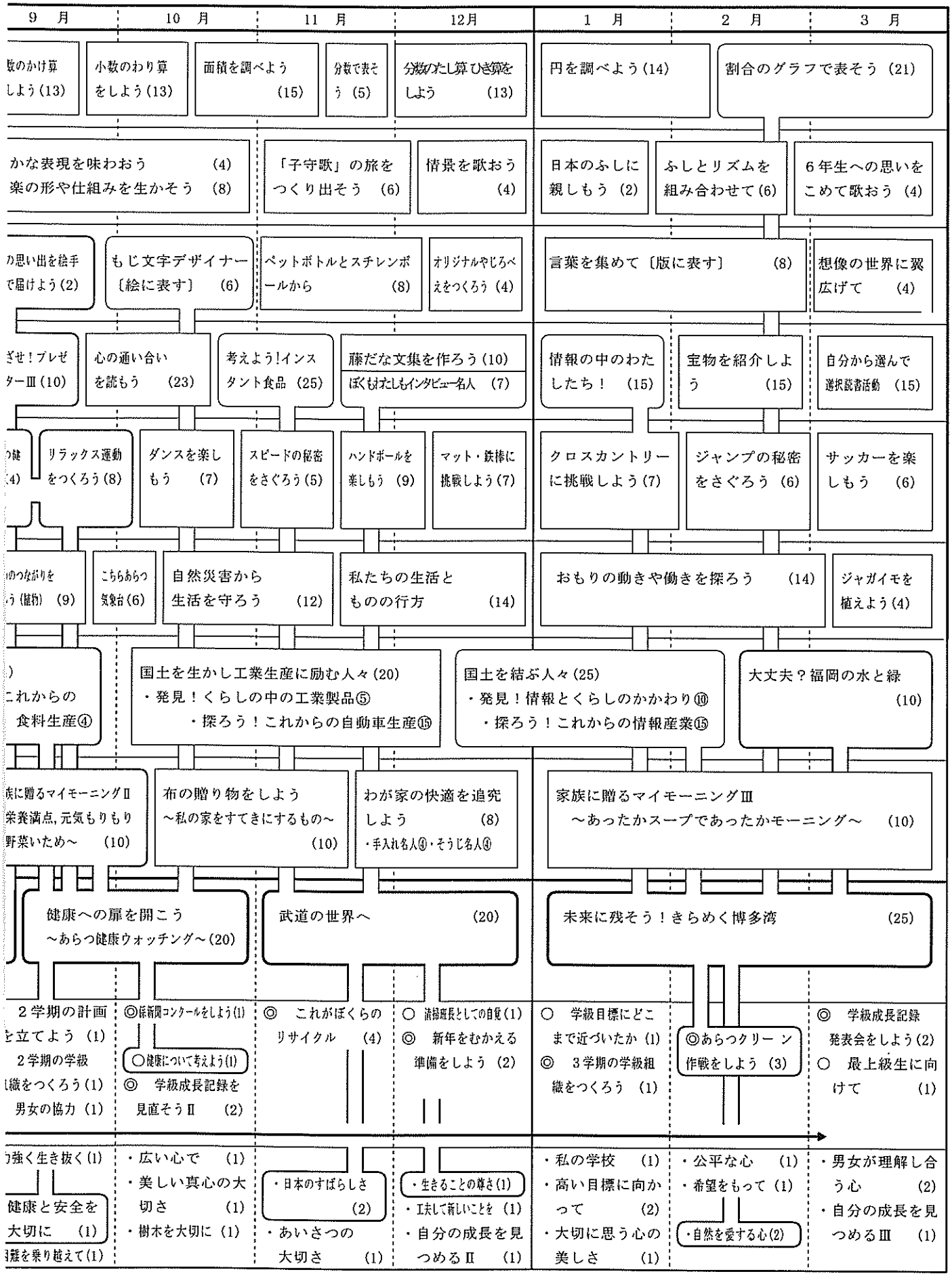
【総合の学び】

高学年の総合の学びにおいては，子供の生活現実をスタートとし，教科の学びで獲得した創造性をさらに関連づけ高めるとともに，主体性・社会性も意図的・計画的に高められるように展開する。「あらつ学習」においては，生活現実をスタートとしながらも，追究課題がしだいに社会課題に迫っていけるように支援していかねばならない。つまり，具体的な体験活動は大切にしながらも，その背景にあるさまざまな構造にも迫っていける学習になるように対象への出合わせ方や追究の過程での支援を工夫しなければならない。

【学びの連動】

５学年においては，教科学習と「あらつ学習」との連動を重視していく。一つは，教科の学習で得た知が「あらつ学習」で総合的に発揮できるように，「あらつ学習」の単元配列を考えていく。また二つ目に，「あらつ学習」から教科の資質・能力を求める連動を考えていく。子供の求めが教科の固有の技能や学び方であれば，国語科や算数科などとの連動を図っていく。一方，子供の求めが教科固有の知識や見方・考え方であったなら，社会科や理科，家庭科などとの連動を図っていけるように単元配列を工夫する。また，「あらつ学習」のなかで，集団での解決を必要とする問題が生じた場合には，特別活動との連動を図り学級活動や児童会活動などの子供の自主的な活動として展開していけるようにする。




9 月
10 月
11 月
12月
1 月
2 月
3 月
数のかけ算 しよう(13)
小数のわり算 をしよう(13)
面積を調べよう (15)
分数で表そう (5)
分数のたし算ひき算をしよう (13)
円を調べよう(14)
割合のグラフで表そう (21)
かな表現を味わおう (4)
楽の形や仕組みを生かそう (8)
「子守歌」の旅をつくり出そう (6)
情景を歌おう (4)
日本のふしに親しもう (2)
ふしとリズムを組み合わせて(6)
6年生への思いをこめて歌おう (4)
力思い出を絵手で届けよう(2)
もじ文字デザイナー〔絵に表す〕 (6)
ペットボトルとスチレンボールから (8)
オリジナルやじろべえをつくろう (4)
言葉を集めて〔版に表す〕 (8)
想像の世界に翼広げて (4)
ざせ!プレゼターⅢ(10)
心の通い合いを読もう (23)
考えよう!インスタント食品 (25)
藤だな文集を作ろう(10)
ぼくもわたしもインタビュー名人 (7)
情報の中のわたしたち! (15)
宝物を紹介しよう (15)
自分から選んで選択読書活動 (15)
の健 (4)
リラックス運動をつくろう(8)
ダンスを楽しもう (7)
スピードの秘密をさぐろう(5)
ハンドボールを楽しもう (9)
マット・鉄棒に挑戦しよう(7)
クロスカントリーに挑戦しよう(7)
ジャンプの秘密をさぐろう (6)
サッカーを楽しもう (6)
のつながりを う(植物) (9)
こちらあらつ気象台(6)
自然災害から生活を守ろう (12)
私たちの生活とものの行方 (14)
おもりの動きや働きを探ろう (14)
ジャガイモを植えよう(4)
)
これからの 食料生産④
国土を生かし工業生産に励む人々(20)
・発見!くらしの中の工業製品⑤
・探ろう!これからの自動車生産⑮
国土を結ぶ人々(25)
・発見!情報とくらしのかかわり⑩
・探ろう!これからの情報産業⑮
大丈夫?福岡の水と緑 (10)
族に贈るマイモーニングⅡ 栄養満点,元気もりもり 野菜いため~ (10)
布の贈り物をしよう ~私の家をすてきにするもの~ (10)
わが家の快適を追究しよう (8)
・手入れ名人④・そうじ名人④
家族に贈るマイモーニングⅢ ~あったかスープであったかモーニング~ (10)
健康への扉を開こう ~あらつ健康ウォッチング~(20)
武道の世界へ (20)
未来に残そう!きらめく博多湾 (25)
2学期の計画を立てよう (1)
2学期の学級織をつくろう(1)
男女の協力 (1)
◎係新聞コンクールをしよう(1)
○健康について考えよう(1)
◎ 学級成長記録を見直そうⅡ (2)
◎ これがぼくらのリサイクル (4)
○ 清掃班長としての自覚(1)
◎ 新年をむかえる準備をしよう (2)
○ 学級目標にどこまで近づいたか (1)
◎ 3学期の学級組織をつくろう (1)
◎あらつクリーン作戦をしよう (3)
◎ 学級成長記録発表会をしよう(2)
○ 最上級生に向けて (1)
力強く生き抜く(1)
健康と安全を大切に (1)
難を乗り越えて(1)
・広い心で (1)
・美しい真心の大切さ (1)
・樹木を大切に (1)
・日本のすばらしさ (2)
・あいさつの大切さ (1)
・生きることの尊さ(1)
・工夫して新しいことを (1)
・自分の成長を見つめるⅡ (1)
・私の学校 (1)
・高い目標に向かって (2)
・大切に思う心の美しさ (1)
・公平な心 (1)
・希望をもって (1)
・自然を愛する心(2)
・男女が理解し合う心 (2)
・自分の成長を見つめるⅢ (1)

第６学年の＜ふくおかプラン＞（平成14年度　構想プラン）

【教科の学び】

各教科では，文化の学習としての集大成を意図した，①各教科において系統的に培ってきた資質・能力が総合的に発揮される学習，②より教科の本質に個性的に迫る学習を設定する。例えば，算数科・音楽科・図画工作科学習では，先人の築いた学問や文化財を直接の対象とし，創造性を高める。国語科・体育科・理科でも創造性を高めるが，国語科では伝え合う力，体育科では仲間とかかわる力，理科では自然との共生から社会性との関連を大切にする。社会科・家庭科では，生活現実を対象としつつも主体性を発揮させながら，創造性と社会性が一体となった社会や家庭を創造する知の高まりをねらっていく。

【総合の学び】

６学年では，課題設定力を重点に主体性を高めていく。「あらつ学習」においては，「卒業研究」を年間を通じ，帯単元的に位置づける。６カ年の教科学習で獲得した知の総合化を図るとともに，「あらつ学習」で獲得した見方・考え方・学び方なども総合化されるように支援し，より社会課題に迫っていく単元を設定・配列していく。また，特別活動では，最上級生として学校生活の更新のため，学校行事や委員会・児童会などと関連を図った題材を設定する。道徳学習では，各教科の知を自分らしい生き方（自分知）や人間らしい在り方（人間知）として自覚し，高める題材を選定し配列する。

【学びの連動】

年間を通じた連動のみならず，学年間での連動も重視する。例えば，５学年の学習から課題が連動したり，先輩の学習を受け継ぎ，発展させたりするような単元も位置づける。また，教科の学びで得た知を総合的に発揮して生活現実の追究を行う「あらつ学習」と複数教科等との連動を工夫し，学習の有用性を実感させる。さらに，小学校での学びが中学校での総合の学びにうまく連動していくよう中学校のカリキュラムとも摺り合わせを行い，共通理解を図り適正に設定，配列できるようにしている。

教科等		時数	４月	５月	６月	７月
教科の学び	算数	150	整数のなかまづくり (12)	分数の足し算・引き算をしよう(15)	立体について調べよう (25)	見積もって調べよう(5
	音楽	50	情景を歌おう (4)	たずねよう 世界の音楽 (6)	創り出そう！ 私たちの筑前今様 (4	
	図画工作	50	すてきな花がさく世界 (4)	カラフルランドのカーニバル (6)	ぼくもわたしもCGデザイナー (8)	
	国語	175	６学年の読書計画を立てよう (10)	短歌俳句集をつくろう (10)	読書から考えを広げ深めよう！ (14)	学校生活を紹介するホームページを創ろう (10)
			宮沢賢治の世界を広げよう (9)	学級討論会をしよう (1		
	体育	90	スポーツテスト (4)	ワープリレーを楽しもう(7)	バスケットボールのプレーの秘密を探ろう！ (9)	あらつ水泳記録に挑戦 (10
	理科	95	私たちの周りの環境を見つめよう(4)	養分のつくられ方について考えよう(4)	ものの燃え方と空気の関係を探ろう (11)	生きるために必要な養分のつくられ方ついて考えよう(6) (動物)
			生きるために必要な養分のつくられ方について考えよう (10) (植物)			
	社会	100	Ⅰ　日本のあゆみ（６７）			
			時代を創った人々Ⅰ 福岡市博物館(4) 板付遺跡 (4)	時代を創った人々Ⅱ 聖武天皇 (4) 藤原道長 (3)	時代を創った人々Ⅲ 源頼朝 (4) 北条時宗 (4)	文化を創った人々Ⅰ 日本文化の源流をさぐろうⅠ (8)
			時代を創った人々Ⅳ 豊臣秀吉 (4)	時代を創った人々Ⅴ 徳川家光 (5)		
	家庭	55	和風の朝食にチャレンジしよう ～私のじまんのふっくらごはん～(5) ～私のじまんの健康みそ汁～(8)		布の贈り物をしよう ～生活に役立つもの (9	
総合の学び	あらつ学習	110	卒業研究を始めよう (10)	レッツ　エンジョイ　コミュニケーション (24)	卒業研究中間報告会をし う (1	
	学級活動	35	○最高学年としての役割 (1)	◎１年生のお世話をしよう (1)	○振り返ろう自分の健康生活Ⅰ (1)	◎ぼくらの夏季落
			○学級目標を決めよう (1)	◎学級改造計画を立てよう (4)	◎ホームページをつくろう (2)	○夏休みの計画
			◎学級組織をつくろう (1)			
	道徳学習	35	・最上級生として出発 (2)	・新しいものを生み出す (1)	・よりよい校風 (2)	・尊敬感謝の心
			・男女の友情と協力 (1)	・人間の力を超えたもの (1)	・役割と責任の自覚 (1)	・生命の尊重
				・公平な態度(1)	・深い思いやり (1)	・何のために生きるⅠ

9 月	10 月	11 月	12月	1 月	2 月	3 月
・して べよう (11)	分数のかけ算・わり算の仕方を調べよう (29)	単位量あたりの大きさで比べよう(16)	比を使って比べよう (4)	比例するものを調べよう (9)	算数のまとめ (24)	
いな表現をざそう(7)	学級の表現を創ろう(3)	心を音楽に託して伝えよう (7)	私たちの音楽アルバム発表会をしよう (7)	学級の表現を創ろう (3)	音楽の形や仕組みを調べよう (5)	卒業式の歌の表現を創り出そう (4)
えよう！私のポスターッセージ (8)		思い出の一枚をかざろう (6)	形と色のファンタジー (6)	学校アートプロジェクト (6)	お世話になった方に絵手紙をおくろう (6)	
ざせ レゼンター Ⅳ (10)	人間の生き方を考えよう (18)	ふじだな文集をつくろう (10) 「言葉と文化」展示館へようこそ(15)	学校全体に呼びかけよう (15)	感動を言葉に表そう (10)	未来に向かって発信しよう (15) 学びを紹介するホームページをつくろう (9)	卒業するあなたたちに〜自分から選んで〜(選択読書活動) (10)
ーマ 現21 (5)	器械運動発表会を開こう(7)	スピードの秘密を探ろう (5)	ソフトボールを楽しもう(9)	健康な生活(8)	リラックス運動をつくろうⅡ (6)	縄跳び・持久走に挑戦しよう (7)	ジャンプの秘密を探ろう (5)	サッカーを楽しもう (8)
地球の神秘を探ろう 土地のつくりと変化 (13)	進む地下水汚染…福岡の水は大丈夫(私たちの生活と水に溶けたものの行方) (14)	私たちの体の不思議を探ろう (13)		生活の中で生かされる電気のエネルギーを調べよう (12)	私たちの周りの環境を見つめよう (8)	
創った人々Ⅱ 時代を創った人々Ⅵ 本文化 伊藤博文 原流を (5) ろうⅡ 文化(5)	文化を創った人々Ⅲ 時代を創った人々Ⅶ 日本文化 陸奥宗光 の源流を (5) 探ろうⅢ 文明開化(5)	Ⅷ 15年 戦争 (7)	Ⅱ 生活と政治(15) ふくふく プラザができるまで (8)	Ⅲ 世界の中の日本（１８） 世界の国を訪ねよう(8)	スポーツ交流会 (4)	世界は一つ 国際連合の働き (6)
い物名 をめざう (4)	家族に贈るマイランチ (5)	わが家の快適を追究しようⅡ すずしさを追究しよう (8)	あたたかさを追究しよう (8)	私の気持ちを伝えよう (8)		
	あらつ遊学ツアー あらつの魅力発信 (23)	歩みだそう世界のなかのわたし (19)		卒業研究をまとめよう (24)		
2学期のめあてを立てよう (1) 2学期の学級組織 (1) 最後の運動会・月見学芸会 (1)	○学習環境をつくろう (1) ◎卒業プロジェクトⅠ (2) ◎思い出をつくる修学旅行 (1)	◎あらつの町への恩返し (4)	○振り返ろう自分の健康生活Ⅱ (1) ◎卒業プロジェクトⅡ (2)	◎３学期の学級組織をつくろう (1) ○自分を見つめて (1)	◎卒業プロジェクトⅢ (2) ○中学校へむけて (1)	◎卒業プロジェクト最終章 (2)
明るく生きる (1) 地球を救う (1) 公徳を守る心 (1)	・郷土を守る(1) ・規律ある生活 (1) ・集団の中での役割 (1) ・率直な反省 (1)	・世界のなかのわたし (2) ・奉仕する心 (1) ・環境と資源を大切に (1)	・生きることの素晴らしさ (1) ・過ちを許す (1) ・何のために生きるⅡ (1)	・すぐれた文化財 (1) ・家族の一員として (1) ・気高い心 (1)	・自分らしさを生かす (3)	・何のために生きるⅢ (1) ・礼儀は心の表れ (1)

算数科学習の＜ふくおかプラン＞

1　数理的に考える力を高める算数科学習を

1　算数科が担う役割・立場

算数科は，ある事実が成り立つというときには，全ての場合において例外をもつことのない，先験的な科学である。論理に緻密性があり，系統性，客観性，合理性の強い教科である。このことを踏まえると，算数科学習に求められているのは，数量・図形に関する知識・技能の伝達だけでなく，豊かな人間を育てるにあたり重要な論理的思考力の育成を重視していくことである。演繹的な考えや帰納的な考え，類推的な考えを活用する場面が多く現れる算数科だからこそ，論理的に考えていく力をより一層伸ばしていくことができると考える。身の回りの物事の状態や変化の様子を数量的に表現したり，表現したことから解決の糸口をつかんだりする算数的活動を通した問題解決を数多く経験させる。その過程で数量・図形の大きさやその関係について論理的に分析し，関係付け，統合していくことのできる創造性を中心にしながら，獲得した数理を積極的に駆使していこうとする主体性，数理を共につくり出すよさを味わう社会性を高めていく。

2　数理的に考える力を高める算数科学習とは

数理的に考える力とは，子供が具体的な事象から自分に問題解決を行っていくために必要な数量や図形を取り出し，事象を変形したり，変化させたり，他のものと置き換えたりしながら既習の数理をあてはめ，より一般性のある数理へと高め，造りかえていくことのできる数学的な見方・考え方である。数理的に考える力を高める算数科学習とは，子供たちが出合った事象をより一般性のある数理へと高め，つくりかえていく問題解決していく際に以下のような力が旺盛に働くようにしていく学習のことである。そのために必要な資質・能力は，①出合った事象を数，量，図形の見方から概括的にとらえ，問題解決に必要な要素へと抽象したり，捨象したりすることができる（数量，図形に対する感覚）②数，量，図形についての見方や性質，法則にあてはめたり，あてはめ方を変えたりすることができる（構成）③取り出した数量，単位の大きさや記号を用いて表したり，図形の構成要素に着目して適切に表したりできる（関係表現），ことで

表１　算数科学習で特に大切にする資質・能力

			低学年	中学年	高学年
主体性		数理創造についての態度	似たような問題の解き方をあてはめながら問題を解決し，自分のしたことを振り返ることができる。	似たような問題の結果や解き方をあてはめ問題解決し，自分の解決の方法や創り出した数理を見直すことができる。	類似した経験や知識を想起しながら問題を解決し，自分の問題解決を見直し，これからの数理創造に生かすことができる。
	創造性	数量や図形に対する感覚	出合った事象の大きさや特徴について概括的にとらえることができる。	出合った事象の大きさや特徴について自分の根拠をもって概括的に捉えることができる。	自分がとらえた大きさや特徴について追究した結果と比較しながら見直すことができる。
		数量や図形に対する見方	演算の数の大きさや単位の大きさをとらえたり，図形の全体や部分に視点をあてて見たりできる。	単位の大きさや図形の構成要素などの視点から見たり，視点を変えたり，いろいろな場合をあげたりすることができる。	数，量，図形についての見方や性質，法則にあてはめたり，あてはめ方を変えたりすることができる。
		関係を表現する力	取り出した数量を絵図や記号を用いて表したり，図形を具体物を用いて構成したりできる。	取り出した数量を絵図や演算の記号を用いて表したり，図形を適切な道具を選択して構成したりできる。	取り出した数量を単位の大きさや記号を用いて表したり，図形の構成要素に着目して適切に表したりできる。
	社会性	共に学ぶ楽しさ	共通の課題について友達の解決した結果や方法について関心をもつことができる。	自分の問題解決の結果や方法と友達との違いを比較し，共通点や差異点を見つけ出すことができる。	自他の解決の方法や結果の違いについて交流し，数理を共に創り出していく楽しさを感じることができる。

ある。このような資質・能力が育つためには，①子供たちが，出合った事象を数，量，図形についての見方からとらえ，課題について自ら追究していこうとする意欲をもつような具体的事象の設定，②既習の内容と比較しながら問題解決についての方法や結果についての見通しをもち，検証していく活動，③有用性，簡潔性，一般性の観点から自他の問題解決の方法について見直す活動，を連続的・発展的に行っていくことが必要である。

以上のような学習活動を行っていくことで，次のような３特性をもった子供を育成していくことができると考える。

◎　未知の事象に出合ったときに，数量や図形に対する感覚を働かせたり観点を変更したりしながら既知の事象と関係付け，数理を再構成していくことができる子供　（創造性）

○　より包括的で一般性のある法則や解決方法を求め，高めていこうとしたり，獲得した数理を活用しようとしたりすることができる子供　（主体性）

○　自他の解決の方法や結果の違いについて関心をもち，数理を共につくり出していく楽しさを感じることができる子供　（社会性）

このような子供の姿をめざすためには，表１にまとめた資質・能力を特に大切にし，意図的，計画的に高めていかねばならない。

算数科学習における学びの連動の考え方

▼　算数科カリキュラムづくりの基本的な考え方

算数科は系統性が明確で，各学年ごとの明確な内容が規定されている数少ない教科である。ある程度単純化された事象を取り扱うことで，論理的に思考していくことが行いやすい教科でもある。それゆえに，様々な諸条件が複雑に混在している日常生活の事象を直接的に取り扱うことについては，算数科としての特質を見失ってしまうことにも繋がりかねないだけに，慎重に行っていく必要があると考える。そこで，まず算数科学習における創造性の育成を中核としたカリキュラムづくりについての考え方を構想し，その上で総合の学びとの連動の在り方について考えるものとする。基本的な考え方は，以下の３点である。

①　各学年において，数概念を拡張していく単元については，学年当初に配列を行う。

②　数量関係のなかの統計に関する単元についても，できるだけ学年の早い時期に実施する。

③　①②を考慮した上で，具体的な活動が比較的構成しやすく，実施時期について融通性のある図形領域の設定を行う。

▼　総合の学びとの連動の考え方

算数科においては，学習対象について関連があり，算数科で培った資質・能力が総合の学びで活用されることが期待できるような場合は，実施時期を考慮し，同時期に配列していくことを考えていくが，数と計算，量と測定，図形の領域については，その学習内容自体が組織化・系統化された知識・技能であるから，そのまま総合の学びと安易に連動させていくことは避けなければならない。ただ，総合の学びのなかで，日常生活のなかの様々な事象を取り上げ，分類・整理などの統計的な処理を行っていく過程で，次への学習課題を生み出したり，自分の生活を見直したりしていくような学習を構想していく場合には，算数科における統計を取り扱った内容の学習が連動していくことが期待できる。ゆえに，統計に関する内容を取り扱った単元については，できるだけ学年の早い時期に実施していくよう計画していく。他にも，数概念を確実に身に付けさせておくことが総合の学びのなかでおきてくる数処理の場面にも生きてくると考えられる。そこで算数科としての総合の学びとの連動のあり方を考える場合の基本的な考え方を以下のものとする。

①　算数科における学習対象と総合との学習対象に関連があり，子供の追究意識が必然として拡がっていくように，算数科学習のなかで獲得された数理を適応範囲が拡がるよう題材の構成と配列を行う。

これによって自分の興味のあることについて，自分なりの見通しをもって追究活動に取り組み，その結果を振り返っていくことができるようになり，学習をよりよく進めていくことができるようになると考える。学習内容から以上のようなことが期待できない場合は次のように考えるものとする。

②　発達段階に応じた問題解決力を育成を目指し，子供が自分なりの見通しをもって追究活動を行うことができるような学習を構成する。（野田真功，澤村重則）

表２　第２学年における算数科と生活学習の学習対象に関連のある単元例

算数科	とけいをみながら生活しよう	ものさしを作ってくらべよう	長いものさしを作ってくらべよう
生活学習	あらつの町をたんけんしよう	大きくなあれ，みんなの野さい	ぐんぐんのびる，ぼく・わたしⅡ

2　感覚を働かせる作業的活動を位置付けた低学年算数科学習プラン

算数科部　野　田　真　功

1　学習プランの考え方

▼　感覚を働かせる作業的活動とは

感覚を働かせるとは，自分とのかかわりを強くもちながら出合った事象を類似した経験や学習と自分なりに関連づけながら概括的に大きさや特徴をとらえることである。ここでは，①追究対象について働く場合（数量や図形そのものについて働く感覚）と，②一つの原理を正しく拡張いくときにとらえる場合（数理的に問題解決していく際の感覚）がある。これらは，物事に対して，適切な判断をしたり，能率的な処理を行いながら数量や図形についての見方，考え方をつくり出していくことにつながる。感覚を働かせる作業的活動とは，身の回りにある具体物・半具体物や自分の手や身体などを使った活動を通して数量や図形についての見方・考え方をつくり出していくことである。事象を変形，変化させたり他のものと置き換えたりするなかで，問題解決に必要な情報を的確に取り出し，解決への方向性が見えるようになる。

▼　感覚を働かせる作業的活動を位置づけた低学年算数科学習プランとは

感覚を働かせる作業的活動を位置づけた低学年算数科学習プランとは，自分とのかかわりを強くもちながら出合った事象を類似した経験や学習と関連づけながら，自ら数理をつくり出してしていくことができるような教材の開発，及び活動構成を行うことである。このような学習を展開するためには，問題解決に必要な情報を自ら補う工夫を具体的に行っていく学習を積み重ねていくことが大切である。そのためには，①子供の活動の目的意識が明確になり，結果像に対して具体的なイメージをもつことができる（具体性），②基本的な図形や単位数量など数理を構成する基本的なものを部分として，全体との関係を追究していくことができる（関係性），③活動しながら追究方法の修正を繰り返し行うことができる（連続性），を大切にしながら学習対象を既習内容との関連付けが起こりやすい単純化されたものから徐々にいろいろな要素が含み込まれた複雑なものへと配列していく。この過程で，自己の問題解決についての明確な根拠をもち，うまくいかなかった場合でもその原因を探り，友達の考えと比較・検討しながら目的に照らし合わせてより簡潔で，的確な方法へと高め，数理をつくることのできた自分自身の価値を実感していくのである。

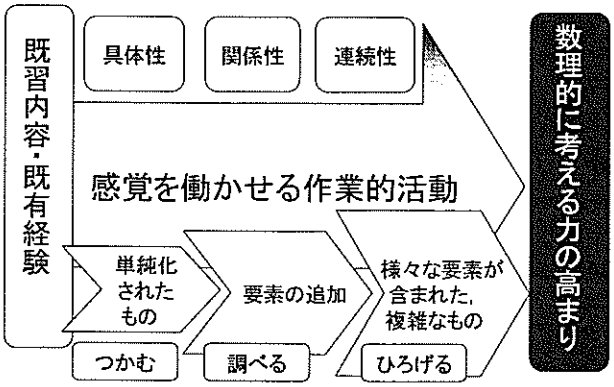


図１　感覚を働かせる作業的活動を位置づけた学習プラン

2　学習プランの具体的構想

▼　教材化について

感覚を働かせる作業的活動を位置づけた算数科学習が成立するための教材化の条件として以下のものを考える。

表３　感覚を働かせる作業的活動を位置付けた活動構成

段階	つかむ	しらべる	ひろげる
活動と内容	１　算数の内容を豊かに含んだ学習場面に出合い，追究課題をつかむ。 ○　自分の算数的課題をつかむこと ○　中核となる見方の獲得 ○　感覚を働かせて見通しをもつこと	２　作業的活動を繰り返し行いながら数理をつくりだしていく。 ○　既習の内容を活用し，数理をつくりだすこと ○　他者の意見との比較・検討による方法や考え方の深化 ○　中核となる見方の発展 ○　感覚を働かせて追究することのよさを感得したり見通しを修正したりできること	３　つくりだした数理を活用する。 ○　あらたな数理への更新と一般化 ○　つくり出した数理を活用することによる充実感 ○　数理の関係を鋭く見抜けるようになった実感
手だて	※　数理生成に発展する単純化された場面の提示 ※　目的意識が明確になる活動の設定	※　既習の数理が繋がっていく問題提示の順序 ※　限定された条件の設定 ※　具体性，関係性，連続性のある活動 ※　単純→複雑へと発展する学習対象の変化	※　既習の数理を活用していく問題場面の設定 ※　より確かになった見通しを振り返る活動の設定

○　結果像に対する明確なイメージをもち，不足した部分を補う活動が構成できること
○　基本的な図形や単位数量など数理を構成する基本的な単位とその組み合わせを意識することができるもの
○　全体像と部分との関係を追究していく活動として構成することができること
○　自分の活動を振り返り，修正したり追究し直したりすることが繰り返し起こるような構成ができること

▼　基本的な活動構成

数理の関係をとらえる作業的活動を位置づけた活動構成については以下のように考える（表３）。

まず「つかむ」段階では，算数の内容を豊かに含んだ学習場面に出合わせ，追究課題をつかむことができるようにする。ここでは，単元をつらぬく中核となる見方を子供たちが獲得していくことができるように，単純化された事象に出合わせ，直接的経験を十分にさせていく。次に「しらべる」段階では，中核となる見方を深化・発展させ，見方を広げていくことができるようにする。ここでは，数量や図形そのものや数理的に問題解決していく際に感覚を働かせながら見通しをもったり，自分の追究活動を振り返ったりすることができるようにする。そのために，子供が出合う事象に含み込まれた要素を徐々に増やしながらも，子供が感覚を働かせて不足した部分を補いながら自己追究していくことができるように，限定された条件の提示などを行う。最後に「ひろげる」段階では，より複雑な事象に対してつくりだした数理の活用を行い，数理の一般化をはかる。そしてより鋭く働くようになった感覚を実感していけるようにする。

▼　年間計画の工夫

子供の数理の関係をとらえる場合について，追究対象について働かせる場合（数量や図形そのものについて）と，一つの原理を正しく拡張していこうとするときに働かせる場合（数理的に問題解決していく際）が考えられる。結果像に対して明瞭やイメージをもつことができる数量や図形そのものについて数理の関係をとらえる単元（特に図形領域）を学年の前半に，学習が進み，子供たちの見方・考え方が多様になっていく学年の後半に，数理的に問題解決していくような単元を配列する。

3　指導の実際

第２学年　単元
形づくりをしよう！
－いろいろな形の構成と分解－

▼　単元の考え方

本単元のねらいは，ずらす，回す，裏返すなどの操作を行いながらいろいろな形を構成したり，分解したりし，動的に見ながら図形を理解したり図形の性質を見いだしたりするための基礎となる経験を豊かにすることである。その中で，これを並べるとあの形ができそうだ，この形の中には，あの形が入っているぞ，などといった図形の構成を関係付けてみていく見通しをもち，図形を操作しながらものの形を認めたり，形の特徴をとらえたりしていくことができるようにする。そのために，図形の構成に対する中核となる見方の獲得⇒活用⇒発展という活動構成を行い，条件を限定したなかで活動を行わせることによって思考のはたらきに方向性をもたせ，見通しをもって活動を進めることができるようにする。具体的には，まず，合同な２枚の直角二等辺三角形２枚のみによる形作りを行う。次に，提示されたシルエットが何枚の色板をどのように並べたものか直角二等辺三角形を二枚だけ使って調べる活動を行う。最後に，平行四辺形を裏返さなければその形とならないようなシルエットを提示し，裏返すという操作を体験させ，図形の理解の基礎となる経験を一層豊かにする。

▼　単元の目標

1　ずらす，まわす，うらがえす，などの図形を構成する活動を行い，図形を構成していく見方を広げていくことができる。（創造性）
2　できあがる形についての見通しをもったり，自分のもった見通しと出来上がった形を比較しながら新しい形を次々に創り出していこうとすることができる。（主体性）
3　形の構成の仕方や変形の仕方について友達の解決した結果や方法について関心をもつことができる。（社会性）

表４　感覚を働かせる作業的活動を位置づけた年間構想

単元	形づくりをしよう	大きな数をくらべよう
ねらい	○　いろいろな形の合成・分解 ・形の移動（ずらす，回す，裏返す）	○　４位数までの数の構成 ・１０ずつまとめて大きな位をつくる
資質能力	図形のなかに他の図形をとらえ，補助線を認めることで問題解決への見通しをもつ 。	一つの位には一つの数字しか置かないという既習の数理を正しい方向に一般化していこうとする。

▼ 学習の流れと考察

第１次：１／５時
形づくりについての基本的な操作を体験する。

① 同じ形になっているかどうか回して確かめる。

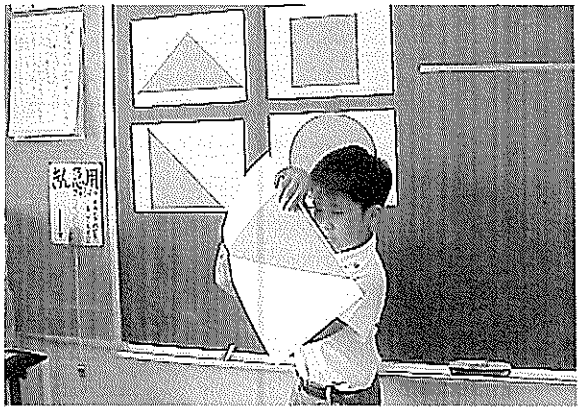


写真１ 回してみたら同じ形になったよ

② ２枚の直角三角形を使って図形を構成する。

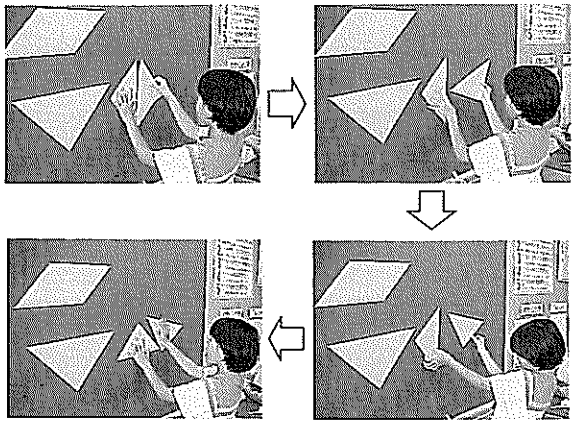


写真２ 回してみると，ちがう形になったよ

第２次：２～４／５時
２枚の直角二等辺三角形の色板をもとに提示されたシルエットのしきつめ方に当てはめていく。

③ かくれている三角形の数を予想する。



写真３ ここにさんかくがかくれています

第１次は，三角形や四角形に対する関心を高め，図形を構成していくときの基本的な操作である「ずらす」，「回す」を体験し，本単元における見通しをもつことができるようにすることをねらいとしている。そこでまず，正方形，直角二等辺三角形，円，に枠がつけられたものの中から，同じ形をさがす活動を設定した。最初，回りにつけられた枠の存在にとらわれ，回転した状態で提示されている形を別の形と認識していた子供たちは，回すと同じ形になることがあるという見方に気付いていった。そこで図形に対する関心を高めている子供たちに，２枚の合同な直角二等辺三角形を使う形づくりの活動を提案した。子供たちは，２枚の色板を使い，ずらしたり回したりする操作を旺盛に繰り返しながら２つの合同な直角三角形でできる３つの図形（正方形，直角二等辺三角形，平行四辺形）を構成していった。その後，できた形を話し合うなかで，違う形として見える図形が，「回してみて同じ形になるものは同じなかまにすることができる」という見方で見直していくことで，たくさんあると思っていた形が正方形，直角二等辺三角形，平行四辺形の３つにまとめられることに気付いていった。

> さんかくの形２まいだけで，こんなにたくさんできるなんて思わなかったので，すごくおもしろかったです。さんかくがしかくになったから，とくにびっくりしました。でも，まわしていくと，みんなおなじ形になったのでびっくりしました。こんどは，２まいよりおおいかずにちょうせんしたいです。

資料１ ２枚の色板でできる形の不思議さに気付いた子供

考察１

ここで子供たちは，２つの直角三角形でできる形は，正方形，二等辺三角形，平行四辺形の３つだけであることに気付いていった。これは，まず，回すということの基本的な体験を積み重ねる場として，向きの異なる合同な図形を同じ形として認めていく見方を確かめる活動を設定し，自分の活動を修正しながら繰り返し行うことのできるような場を保障し，それらを見直していく活動を設定したことが有効であったからと考える。

第２次は，外形のみがしめされた形が三角形や四角形でどのように構成されているのか見通しをもち，補助線を認めながら確かめていくことができるようにすることをねらいとしている。そこでまず，４枚の直角二等辺三角形の色板を敷き詰めて構成されている図形（台形）を提示し，そのなかに入っている直角二等辺三角形の枚数について予想していく場面を設定した。子供たちは，提示された図形のなかに前時学習で構成した２枚の直角二等辺三角形でできる形（正方形，直角二等辺三角形，平行四辺形）が入っているのではないかと関係を見通し，全体を２枚で敷き詰められた部分と残りの部分の総体として見る見方をすることができた。その結果，残りの部分に自分なりに補助線をひき，そこに隠れている直角二等辺三角形の存在を見取り，全体の枚数や敷き詰め方についての見通しをもっていった。その後，実際に２枚の直角二等辺三角形の色板を使いながら自分

④　三角形のおきかたを工夫する。

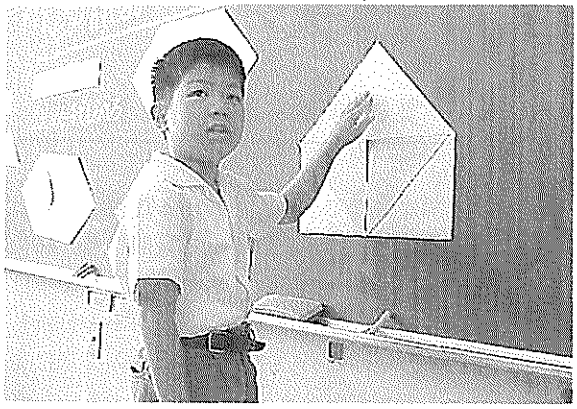


写真４　こんなふうにおくと，残りがすぐわかります

⑤　既出の図形をもとにかくれかたを予想する。

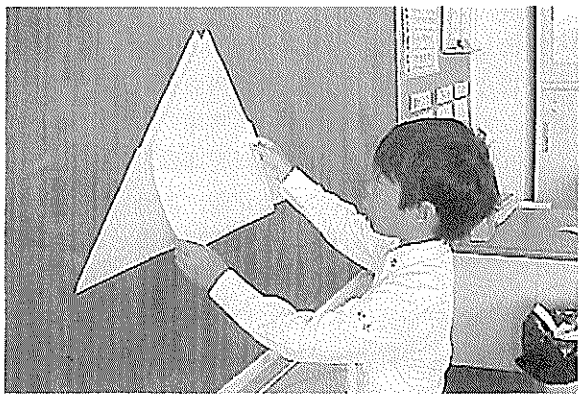


写真５　ここに大きなしかくがかくれています

第３次：５／５時
裏返しながら同じ形をつくっていく。

⑥　「裏返す」という操作を体験する。

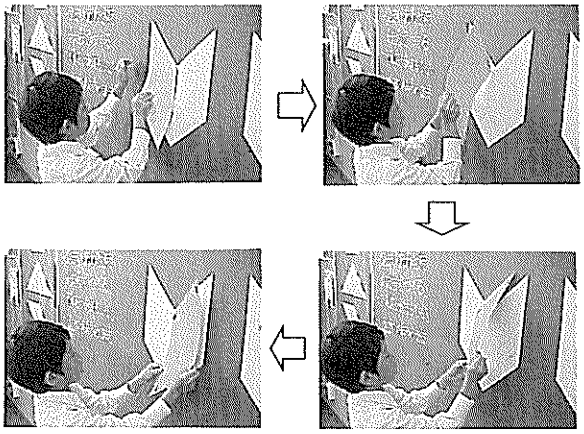


写真６　うらがえすと同じ形になります

のもった見通しの妥当性について確かめていった。その中で，もとの図形の辺と２枚の直角二等辺三角形でできる形の辺とが重ならような置き方に見方をすることもできるようになった。

さんかくはさんかくでも，いろいろつかうと大きなかたちになって，しかくでのかくれかたがじょうずで，ふしぎにおもいました。

資料２　図形の対する見方を広げた子供の感想

更に，より多い枚数で構成された図形についても，４～６枚の直角二等辺三角形で構成された図形として関係付けてみる見通しをもつことができるようになっていった。

考察２

ここでの活動において，提示された図形がどのように敷き詰められているか調べる際，前時までに構成した図形を単位として見通しをもち，それをもとに大きな図形を小さな図形の組み合わせとしてとらえる見方に広げていくことができるようになった。このような子供の姿が出てきたわけは，結果像が明確になりやすい構成されている直角二等辺三角形の数に着目させ，全体を敷き詰めるためには不十分な数の直角二等辺三角形を用いる条件を設定したこと，それを補うための方法について見通しをもつ活動を設定したこと，さらに自分なりにもった見通しをその２枚の直角二等辺三角形を使って確かめる作業的活動を，旺盛に行わせたことが有効であったからだと考える。

第３次は，これまでで体験してきていない「裏返す」という操作を十分に行い，図形に対する見方を一層豊かにすることをねらいとしている。写真６のような図形を提示すると，子供たちはこれまでと同様に回していけば平行四辺形のカードの置きかたがわかるだろうという見通しをもち，カードを使うことでずらしたり，回したりするだけではうまくいかないことに気付き，裏返すという操作を見つけ出していくことができた。

さいしょは，ダイヤみたいな形が２つ入ると思っていたけど，入らなかったのでびっくりしました。カードをうごかしていたら，うらがえしにしないと入らないということがはっきりわかってよかったです。うらがえしにしないと入らないのは，かがみうつしの形になっていたからというのもわかりました。

資料３　作業的活動を通して根拠を確かめた子供の感想

考察３

裏返さなければ構成することができない必然性をもった図形を提示したことで子供は新しい操作を生み出し，図形に対する見方を広げていくことができた。

全体考察

本単元において子供たちは，形作りという作業的活動を行っていくなかで，ずらす，回す，裏返す，などの図形における基本となる操作を旺盛に行いながら（主体性），図形の中に他の図形を見いだし，自分なりに補助線を引いて見通しをもって図形を構成しながら図形についての見方を広げていくことができるようになった（創造性）。これは，問題解決に必要な情報を自ら補いなから関係をとらえるよう，単純化された事象と出合わせ，限定された条件のなかで関係を追究する活動を行わせたこと，自分たちが構成していった図形を活用していくことで新しい図形についての見方を広げていくことができるような活動構成にしたためである。

2 事象を比較し対応付ける算数科学習プラン

算数科部　澤　村　重　則

1 学習プランの考え方

▼ 事象を比較し対応付けるとは

事象を比較・対応付けるとは，考えようとしていることがらの何がどのように関係し合っているかをつきとめることである。そのために，事象のもつ構造を分析する，考えられる場合をいろいろとあげてみる，作業手順を考えるといったことがなされる。

このような活動が誘発されるためには，子供が事象と出合い，働きかける中に，課題解決につながるものを取り扱わせておくこと，課題となっている部分をそれと比較する場が設定されることが必要となる。

▼ 事象を比較し対応付ける学習プランとは

単元の内容を学習していくとき，思考する対象を変更しつつ活動が進められていく。そして，それぞれに課題を解決しながら見方や考え方が身に付けられていく。このとき，追究内容を自ら関連付け，自分なりの背景をもった数理を構築することが大切であると考える。そのためには，未知の内容と既習経験との関連付けを行うなかで，自分の目的をもったり課題をつかんだりことが大切である。そして，自分が身に付けてきた見方で事象に働きかけ，課題を解決しながら追究できるようにしていく。ここで，未知の部分の解決に必要な情報が得られるための比較の場を設定し，既知のものをあてはめたり，見方を変えたりする。そして，解決した結果が一般性をもったものへと高められていくことが必要である。そこで，数量や図形を含み，数量や図形についての未知の部分をもった事象の提示によって，既習経験と関連付けて事象を分析するための比較活動を行い。そして，課題解決しながら追究する過程で，課題の解決に必要な新たな見方をつくりだすための比較活動行われるような場を設定していく。

既習経験と関連付けて事象を分析する比較活動とは，事象に働きかけたときに生まれてくる疑問をもとに，その中の数量や図形が取り出され，数量の大きさや単位，図形の形や構成要素などの共通点や差異点から分析していくものである。そのためには，複数事象の提示によって比較対象とあるものが取り出せるようにすることが必要である。

課題解決しながら追究する過程での比較活動とは，課題を解決していくための既習経験のあてはめがうまくいかない場合に，既習の経験との差異点を取り出したり，問題となる部分と取り扱っている事象との共通部分を見出したりする比較活動である。既習経験との差異点を取り出すためには，流れ図による比較，あるいは関連のある学習経験を想定して，まとめたものを提示することが必要である。また，問題となる部分と取り扱っている事象との共通部分を見出すためには，比較できる対象を事象に働きかける中に含ませておくことが必要となる。

2 学習プランの具体的構想

▼ 数理追究を可能にする比較活動を行うための事象提示の条件について

自らの数理追究を可能にする課題解決の結果像や方法の見通しをうみ出すための比較活動を行うための事象提示の条件として次のことがあげられる。

○ 事象に働きかける中で未知のものと既知のものとの比較が行われること
○ 課題解決のために必要な取り扱い可能な数量や図形を含んだ事象を準備すること

▼ 基本的な活動構成

単元の学習段階を以下の３つの段階にし，追究できるようにしていく。

表３　事象を比較し対応付ける活動構成

段階	つかむ段階	調べる段階	生かす段階
活動	複数の事象を観察したり動かしたりする中で，それぞれの事象の数量や図形を比較し，活動の目的をもったり，追究課題を見つけたりする。	追究対象を変えながら課題を解決する中で，対象を比較し，新たな見方や解決方法を見つけ，解決した行為や結果を振り返って整理し，数理へと高める。	調べる段階で獲得した数理を新たな事象に活用し，有用感を感じることで，身に付けた数理を確かなものにしたり意味を深めたりしていく。
手だて	※ 事象に含まれる数量，図形の大きさや要素を比較できるようなものを提示する。	※ 課題解決した方法や結果を振り返ることができるファイルの準備	※ 獲得した数理をあてはめることができる事象の提示

つかむ段階においては，新しい事象を試し，活動の目的を持ったり，追究していく課題を見つけたりいていく。そのために，子供の興味を引きつけ，「やってみたい」「つくってみたい」といった思いから活動の目的を持てるようにする。また，単位の大きさや構成要素といった多様な観点から見ることができるとともに，複数の事象で互いに比較できるようにする。こうすることで，それぞれの共通点や差異点から事象のもつ特徴をとらえ，解決していく課題を持たせる。

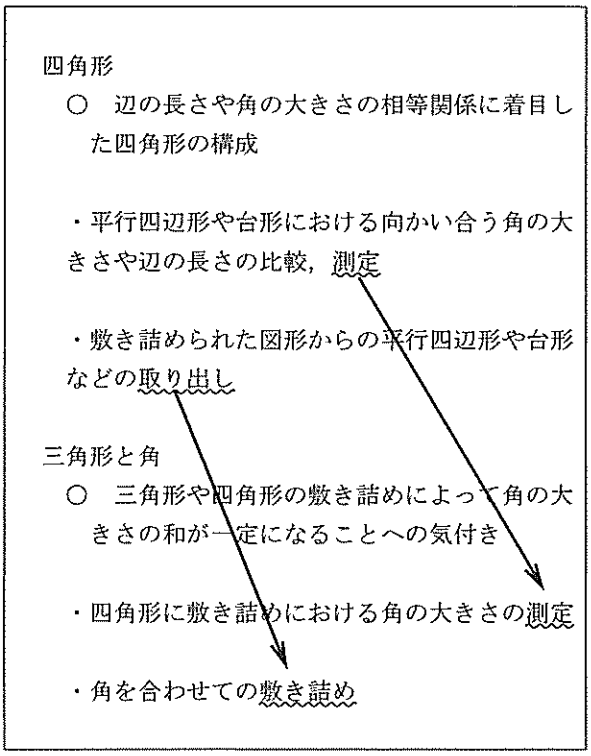
調べる段階においては，つかむ段階において生み出した多様な観点をもとに課題を追究していく。ここでは，追究していく課題を解決していく中で，１つの追究対象での解決の仕方を他の対象にあてはめていくために，つかむ段階で生み出した観点から比較することができるようにする。

生かす段階においては，解決したこと結果や方法を使いこなせるような新たな事象を提示し，数理を一般化できるようにする。そのために，数量の単位の大きさや図形の大きさ，構成要素といった観点から比較しながら解決の結果や方法をあてはめることができるようにする。

▼ 年間計画の工夫

以下の考えをもとに，第５学年における数，量，図形についての数理的に考える力を高める年間計画を工夫していく。

事象に含まれる数量の単位の大きさや，図形の大きさや構成要素といった様々な観点から見たり，見方を変えたり付加ししたりしながら課題の解決を図っていく課題解決のあり方がつながり，数量や図形に対する見方を拡げていくことができるようにする。



3 指導の実際

第４学年　単元

くるりん・ぱたん絵をつくろう（三角形）

▼ 単元の考え方

本単元の指導にあたっては，辺の長さや角の大きさの相等関係から正三角形や二等辺三角形をとらえたり，２つの同じ直角三角形に分けられることをとらえたりできるようにしていく。そのために，くるりん・ぱたん絵を発展させてつくる活動を取り入れる。

そこで，「つかむ」段階では，絵を回したり裏返したりできるくるりん絵やぱたん絵を提示し，三角形を動かす中で，動かし方の違いから辺の長さや角の大きさに着目して，相等関係に目を向けさせる。そして，くるりん絵やぱたん絵をつくることで，正三角形や二等辺三角形のつくり方を調べる課題をつくらせる。

次に，「調べる」段階では，二等辺三角形や正三角形のつくり方を調べる中で，二等辺三角形や正三角形が２つの直角三角形として見る見方をとらえさせる。そのために，二等辺三角形や正三角形を２つに折った新たなくるりん絵やぱたん絵を提示し，２つに折った紙に直角三角形をかいて構成させる。このなかで，二等辺三角形を２つに折った直角三角形と正三角形を２つに折った直角三角形とを比較させながら正三角形を２つに折ってできる直角三角形には，きまりがあることに気付かせる。

さらに，「生かす」段階では，正三角形を並べた新たなぱたん絵を提示し，大きさの違う正三角形のピースで絵を構成していくなかで，大きい正三角形のピースが小さい正三角形４枚でできていることに気付かせ，小さい正三角形と大きい正三角形のピースをつないでいで敷き詰めていくことができることをとらえさせる。

▼ 単元の目標

○ くるりん絵やぱたん絵ができる三角形について，辺の長さや角の大きさの相等関係から三角形を構成することができる。（主体性）

○ 三角形を辺の長さや角の大きさの相等関係で見たり，２つの同じ直角三角形を組み合わせたものと見たりして，図形を弁別したり作図したりすることができる。（創造性）

○ 図形の構成要素である辺や角の形から観察したり，構成したりすることで，二等辺三角形や正三角形の性質をとらえることができる。（社会性）

▼ 学習の流れと考察

第１次：１～２／６時

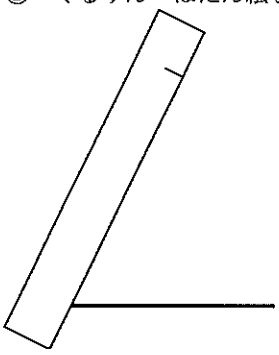
提示されたくるりん絵やぱたん絵を動かして遊び，自分でくるりん絵やぱたん絵をつくり不十分さを感じ，課題をもつ。

① くるりん・ぱたん絵を動かそう

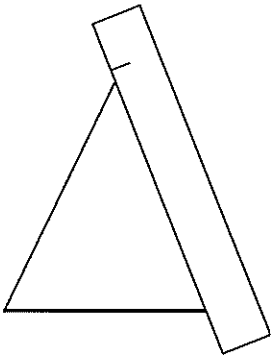


写真１　くるりん絵とぱたん絵の動きによる比較

② くるりん・ぱたん絵をつくってみよう。



もう一つのななめの線が同じになるのはこのあたりかな。



もう一つのななめの線のところに定規をあててみよう。うまくあわないな。

資料３　定規による絵の製作

第２次：３～４／６時

二等辺三角形や正三角形を正確にかくための道具として辺の長さに目を向けたコンパスや角の大きさに目を向けた分度器を選択してかき，そして，提示された新たなくるりん絵やぱたん絵をもとに二等辺三角形や正三角形を２つに折ってつくる。

第１次では，くるりん絵やぱたん絵を提示し，興味を持たせ，くるりん絵が正三角形であることやぱたん絵が二等辺三角形であることをとらえさせ，形を作図するための課題をつくらせた。まず，くるりん絵やぱたん絵を提示して，それを使って自由に動かさせた。このとき，子供たちは，くるりん絵とぱたん絵を動かして遊び。そのなかで，それらの動きの違いを比較していった。そして，くるりん絵やぱたん絵についての発表のなかで次のような発言が子供たちからなされた。「くるりん絵はくるくる回したり裏返したりすることができる。でも，ぱたん絵は裏返すことはできるけど回すことはできない。」そして，動きに違いがでる理由について話し合わせるなかで，辺の長さや角の大きさの関係に着目した次のような発言がなされた。「ぱたん絵は２つの辺の長さが等しく，２つの角の大きさも等しくなっている。」，「くるりん絵は３つの辺の長さが等しく，３つの角の大きさも等しい。」ここで，二等辺三角形，正三角形の用語を知らせた。そして，自分のくるりん絵やぱたん絵をつくらせた。このとき，定規だけを使って二等辺三角形や正三角形をかかせることで，次のような子供の感想が出てきた。

> 下の辺から左の線をななめに引くとき，右と同じ長さになるように引いて，右のななめの線のところに定規をあててみると，同じ長さにならないので，何回も書き直しをました。でも，なかなか同じ長さになりませんでした。一回で同じ長さになるように線が引けると，簡単に二等辺三角形がかけるのになと思いました。

資料１

二等辺三角形や正三角形の頂点の位置が決まらないといった作図の困難さに気付いたり，つくったくるりん絵やぱたん絵を動かしたときにもとの三角形にきちんと重ならないという不十分さに気付いたりしていった。ここで，正確に二等辺三角形や正三角形を作図する必要性から課題を持たせた。

考察１

提示されたくるり絵やぱたん絵を動かすことを楽しんでいる姿が多く見られた。そして，くるりん絵が回していくことで絵が変化すること，ぱたん絵は回すことはできないが裏返すことができることを子供たちがとらえていることは「くるりん絵はくるくる回したり裏返したりしてえきるけど，ぱたん絵はくるりん絵のようにくるくるまわすことはできないけど裏返すことはできます。」といった２つの絵を比較した発言の内容からとらえられた。また，その理由においても「ぱたん絵は３つとも辺の長さが等しいけどぱたん絵は２つの辺の長さが等しい」といった２つの三角形を比較する発言が見られ，２つの三角形の違いをとらえていた。

第２次では，二等辺三角形や正三角形をコンパスや分度器を使って作図していった。そして，二等辺三角形や正三角形を２つに折った，新たなくるりん絵やぱたん絵を提示することで，２つに折った紙から二等辺三角形や正三角形をつくりだしていた。ここでは，まず，二等辺三角形や正三角形を２つに折ると



写真２　半分に折ってくるりん・ぱたん絵をつくろう

第３次：５～６／６時

正三角形をつないだ新たなぱたん絵を見て，大きさの違う正三角形をつないでいったり，正三角形をつないでぱたん絵をつくっていったりする。

④　正三角形のピースをつないでいこう



角の大きさは同じになっている。

写真３　大きさの違う正三角形を比べてみよう

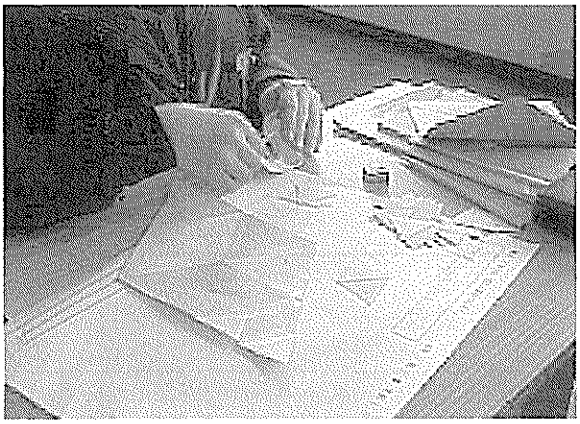


写真４　大きさの違う正三角形を組み合わせる

２つのきちんと重なる直角三角形ができることから，紙を２つに折って，直角三角形をかいて，二等辺三角形をつくった。しかし，正三角形がなかなかできないことで，正三角形と二等辺三角形を２つに折ってできた直角三角形を比較し，辺の長さのきまりを見つけ，正三角形もつくりだすことができた。

考察２

２つに折った新たなくるりん絵やぱたん絵の提示によって，２つに折った紙に直角三角形をかいて，二等辺三角形や正三角形をつくっていった。この中で，正三角形のつくれないことから，二等辺三角形を折った直角三角形と二等辺三角形を折った直角三角形を比較し，正三角形にするには，辺の長さにきまりがあることを見つけ，正三角形をつくりだすことができた。

第３次では，まず，正三角形３枚をつないだ新たなぱたん絵を提示した。子供たちは興味を示しながら，正三角形の動きや絵の面白さを見ていた。そこで，提示した絵と同じにつないだ小さな正三角形のピースに４枚目をつながせた。いろいろつないでみることで，子供たちはいろいろな形になりそうなことに気付いていった。そして，その中に六角形になりそうなつなぎ方があることに着目させ，正三角形のピース５枚をつないで六角形をつくろうとした。しかし，六角形にするには，ピースが１枚分不足することから，不足した部分と最初の小さい正三角形４枚をつないでできた大きな正三角形のピースを比較し，子供たちは，不足した部分と小さい正三角形４枚が同じ大きさになっていること見つけた。そして，小さい正三角形のピースを組み合わせて六角形を完成させた。さらに，小さい正三角形のピースをつないでいくことができそうなことに気付き，小さい正三角形をいろいろなつなぎ方でつないでいった。このなかで，大きな正三角形のピースと小さい正三角形のピースを重ねてみたり並べてみたりして比べ，正三角形は大きさが違っても角の大きさは全て等しいことをとらえていった。そして，このことをもとに，いろいろな大きさの正三角形をつくってつなぎながらぱたん絵をつくっていった。

考察３

六角形の不足した部分と小さい正三角形４枚でできた正三角形を比較することで，小さい正三角形を組み合わせてもきちんとつないで敷き詰められることをとらえ，六角形をつくり上げることができた。また，正三角形を組み合わせていろいろな形にし，ぱたん絵を完成させていた。

全体考察

本単元では，つかむ段階において二等辺三角形と正三角形とでできた絵を提示した。それぞれの絵を動かして遊ぶなかで，動きの違いを比較していった。さらに，動きの違いを辺の長さや角の大きさに着目し，それらの相等関係からとらえている。調べる段階においては，考察２で述べたように，二等辺三角形や正三角形を２つに折った新たなくるりん絵やぱたん絵の提示によって，２つの直角三角形から二等辺三角形や正三角形を見る見方をつくりだした。生かす段階においては，考察３のように正三角形の大きさの違うものを比較したり並べたりしていくことで，正三角形の角の大きさが全て等しいことを見つけている。このように段階に応じた事象の提示によって，既習の図形の見方で考察したり新たな見方をつくりだしたりすることができたと考える。

音楽科学習の〈ふくおかプラン〉

1　音楽的な感受力と構想力を育む音楽科学習を

1　音楽科学習が担う役割・立場

新しい学習指導要領における音楽科改訂の基本方針には，①表現および鑑賞にかかる幅広い活動，②生涯にわたって音楽に親しむこと，③我が国や諸外国の音楽文化の関心や理解の充実が掲げられている。そして，教科目標においては，特に音楽に対する豊かな感性の育成をめざし，情意面と能力面とを同時に育てながら，豊かな情操を養うという情操教育としての教科の立場を明らかにしている。情操は，思考や意思と重なり合って働くものである。それ自体は科学的な精神とは対照的なものだが，論理的な思考や意思を方向付けたり想像的にしたりする力をもっており，豊かな心は，豊かな情操によって育まれると言える。このようなことから，音楽科の究極の目標ともいえる豊かな情操を養うことそのものが〈ふくおかプラン〉における音楽科学習の役割であり，音楽で事物の質を表現し伝える創造性，自分なりの音楽の楽しみ方を見いだす主体性，仲間と共によりよい音楽を求める社会性を調和的に育てる役割を担っているのである。

2　音楽的な感受力と構想力を育む音楽科学習

豊かな情操を養うためには，情意面と能力面を当時に育て，であった音楽の価値に気付いたり価値ある音楽に心を動かされたりすることが必要となってくる。そこで，音楽的な感受力と構想力を育むことを中核に据えた音楽科学習をめざしていきたいと考える。音楽的な感受力とは，音楽的な要素（リズムや旋律，音色など）の特徴を感じ取ったり，音楽そのものの表情を感じ取ったりする能力である。音楽的な構想力とは，表現する音楽のかたちを心の中に思い浮かべたり，描いたりつくったりする能力である。音楽的な感受力は，主に音楽を鑑賞するときに発揮され，音楽的な構想力は，主に自分の思いを音楽として表現するときに発揮されるものである。よって，この２つの力は表裏一体の関係にあり，同時に高まっていくものであるといえる。音楽的な感受力と構想力を育む音楽科学習とは，表現・鑑賞の一体化を図り，音楽のよさ（楽しさや美しさ）に気付き，味わう過程を大切にした学習を展開させていくことである。

表　音楽科学習で特に大切にする資質・能力

		低学年	中学年	高学年
主体性	楽しみ方	・自分にとって価値のあるものとして音楽をとらえ，自分なりの方法で音楽を楽しんだり味わったりする。 （音楽の楽しさ）	（音楽活動の楽しさ）	（音楽の味わい）
創造性	鑑賞能力	・音楽が表す気分を感じ取りながら，楽しく鑑賞することができる。	・曲想の変化を感じ取りながら，意欲的に鑑賞することができる。	・曲想を全体的に味わいながら自分なりに鑑賞を深めていくことができる。
	感受力	・音楽をまとまりとしてとらえ，そこにひたる楽しさを感じ取ることができる。	・音楽の流れをとらえ，そこに音楽の表情を見出すことができる。	・音楽の流れや響きをとらえ，その音楽の表情を味わうことができる。
	構想力	・音楽のかたちを描いたり，つくったりして，表現を工夫する。	・音楽のかたちを描いたりつくったり味わったりして，表現を工夫する。	・音楽のかたちを描き，つくったり味わったり，音楽について考えたりして表現を工夫する。
	表現能力	・拍の流れやフレーズ（刻みや流れ）を意識して，声や楽器で表現することができる。	・よりよい表現をめざして，強弱や奏唱法等の音楽的要素を変えながら表現できる。	・よりよい表現や自分なりの表現をめざして，それにふさわしい表現をすることができる。
社会性		・互いの声や伴奏の響きを聴いながら，その心地よさを味わいながら音楽活動を進めることができる。	・友達と協力して心を合わせて音楽活動を工夫しながら進め，満足感を味わうことができる。	・めざす音楽に向かって，友達と協力して心を合わせて音楽活動を進め，満足感や達成感を味わうことができる。

音楽科学習では，次のような３特性が育った子供の姿をめざしている。

○　自分にとっての音楽の価値に気付き，自分なりに音楽を楽しむ子供　（主体性）
◎　様々なジャンルの音楽の楽しさ・美しさを感じ取り，音楽への自分なりの思いをもって表現を工夫したり，鑑賞を深めたりする子供　（創造性）
○　友達と心を合わせて音楽活動に取り組み，響きの楽しさや美しさを感じ取りながら合唱や合奏などのよさを味わう子供　（社会性）

3　音楽科学習における学びの連動の考え方

▼　カリキュラムづくりの基本的な考え方

①　感受力・構想力の育ちを見据えた題材開発と配列

音楽に出合った子供たちが感受力や構想力を発揮するとき，その２つの力は下図のように，同時にその機能を果たし，音楽活動をつくりだしていく。

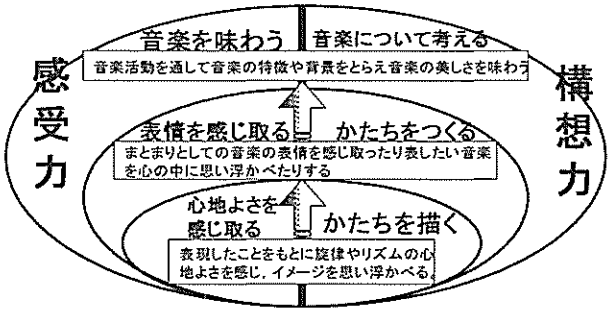


図１　感受力と構想力が果たす機能

これらの機能は，階層をなしてはいるものの，発達段階に直結していたり，一つの題材ですべて果たされたりするものではない。これらの機能をバランスよく果たすことができるように，題材を開発する必要がある。

②　多くの音楽文化（音楽の様式）のよさにふれさせる教材の工夫

子供が幅広い音楽文化を体験し，それぞれの音楽文化のよさを味わうことができるような教材を選択し，各題材に位置付けていくこととする。教材の考え方としては，楽曲のみを教材としてとらえるのではなく，その楽曲に込められた人々の思いや成り立ちにかかわる背景などを含めたものとして考え，教材を工夫していく。そして，年間を通して，音楽文化のよさを幅広く味わうことができるように，偏りなくバランスのとれた配列を行っていく必要がある。

▼　あらつ学習との学びの連動の考え方

①　音楽科における連動の価値

あらつ学習の中で行われる音楽活動は，音楽的な価値よりも，子供がその活動に満足したかどうかによって行われていく。しかし，満足するためには，自分にとって音楽が価値あるものになったかどうかの基準が必要となり，音楽科学習の中で身に付けた知が必要となってくる。また，音楽科学習の学びで身に付けた知と，あらつ学習の中で音楽にかかわる様々な人との出会いや他教科で得たものやことの情報と結ぶことは，音楽科の学びによって味わった音楽文化のよさを更新したり，音楽に対する感じ方や，表現の工夫に対する音楽的な感受力や構想力を高めることにつながるものである。連動することによって，音楽科で身に付けた知を生きて働くものとして活用し，子供自身に音楽科の学びの価値を感じさせることができるところに音楽科としての連動の意義がある。

②　連動を図る２通りの考え方

音楽科学習とあらつ学習の連動には，次の２通りがあると考える。一つは，あらつ学習の追究対象の中に音楽科での追究対象が位置付いている場合である。あらつ学習における追究を深めることが，音楽に対する興味や関心を深めたり，その音楽の味わいを感受し構想する力を高めたりすることにつながるものである。

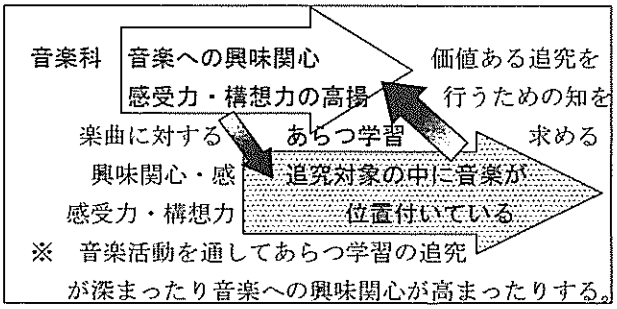


図２　あらつ学習の追究対象の中に音楽がある連動

もう一つは，あらつ学習での人との出会いやふれあいにおいて，音楽表現を用いていこうとするものである。この場合，音楽表現すること自体が問題解決にあたることになる。このことによって子供たちが身につけた表現の能力が現実的な脈絡の中で発揮されることになる。これは，言語を媒介とする交流が困難な異文化をもつ方々や障害をもっている方々との交流を図ろうとする場合にも相当する。このことによって，心と心をつなぐ音楽のよさを子供たち自身が実感することになると考える。

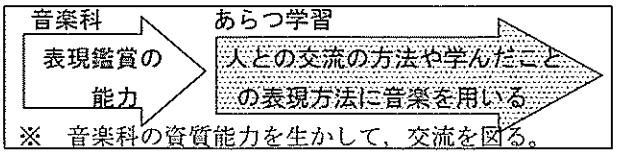


図３　あらつ学習で音楽表現を用いていこうとする連動

この２通りの連動の考え方に基づき，連動を図る際には，次のことに留意して年間指導計画の作成にあたる。①あらつ学習の学びの中で，音楽表現を活用できそうな単元はないか②文化的事象を対象とするあらつ学習単元と音楽科学習の教材で，共通する追究対象はないか③音楽科学習における気づきが，あらつ学習の学びに発展していきそうなものはないかということである。

（音楽科部　原　クミ　豊村　雅義）

2 音楽に多文化的にアプローチする音楽科学習プラン

音楽科部　原　クミ

1 学習プランの考え方

▼ 多文化的にアプローチするとは

多文化的にアプローチするとは，音楽の成り立ちに影響する文化的な要素（踊りや年中行事，歴史的な事象や自然など）と音楽とのかかわりをとらえながら鑑賞や表現の活動を行うことであり，次のように規定される。

> 音楽の旋律やリズム，音色などの構成要素の特徴が，他の文化的要素とかかわっていることをとらえながらその音楽の特徴（文化）を自分なりの表現の方法として用いていくことである。

音楽に多文化的にアプローチをすることによって，音楽的な要素の特徴を感じ取る際に，音楽的な感受力が発揮される。このとき，音楽の背景にある他の文化的な要素と音楽をつなげることによって，さらに感受力が鋭敏にはたらくことになる。そして，自分の表したい音楽のかたちを思い描き（音楽的な構想力の発揮），その実現に向かって音楽の特徴を活用した表現の工夫，つまり自己追究活動が繰り返される。ここでは，音楽の文化的な背景をとらえるという，知的な側面をもった音楽とのかかわり方が，子供の追究意欲をかき立て，自己追究が連続発展するものになってくる。ただ何となく音楽とかかわっているのではなく，音楽と自分とのかかわりが意味あるもの，価値あるものになってくるからである。

▼ 音楽に多文化的にアプローチする音楽科学習プランとは

音楽に多文化的にアプローチする音楽科学習プランとは，音楽と他の文化的要素とのかかわりをとらえながら音楽活動を展開させる教材の開発，及び活動構成を行うことである。また多文化的にアプローチすることを視野に入れた題材を重点題材として年間計画に位置づけていくことをも示している。この多文化的なアプローチの過程で，「未知の音楽・新たな発見がある音楽」と出合うことによって，踊りや歴史，自然などの要素とつなげながら，楽曲の曲想や音楽的な要素の特徴を感受する自己追究が生まれる。また，表したい音楽のかたちを思い描き，その音楽表現を実現するための音楽的な特徴を活用することへの求めや，つくりだした音楽のよさや自分にとっての価値を見いだすための発表，伝え合うことへの求めが生まれ，自己追究が連続発展するものになる。この自己追究を連続発展させるための支援として①子供の発達段階や実態に応じて価値を見いだすことができる音楽の選定と教材化の工夫②本物（人や楽器・原曲音楽）を体験させる場の設定や出合わせ方の工夫が必要となってくる。

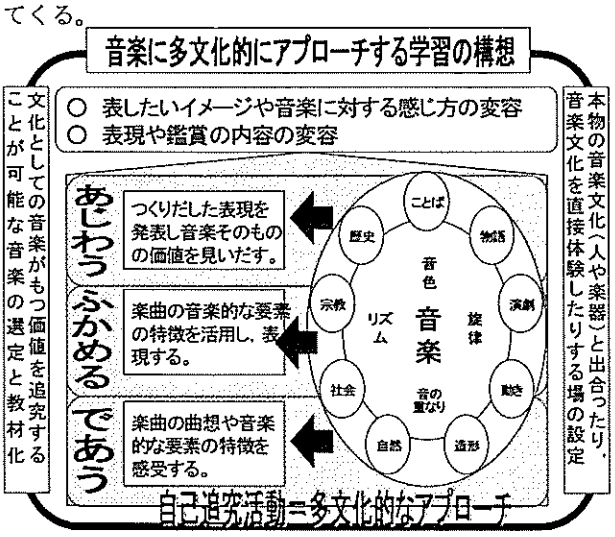


図1　多文化的にアプローチする学習プランの構想

2 学習プランの具体的構想

▼ 多文化的なアプローチの系統性

低・中・高学年の段階における系統を「子供がとらえる音楽の価値」「音楽の成り立ちにかかわる多文化の要素」「アプローチの方法」から次の表のように考える。

表1　多文化的にアプローチする学習の系統性

	教材としての音楽がもつ価値	音楽にかかわる多文化の要素		アプローチの方法
低	【自分にとっての価値】 自分にとっての楽しさ	拍・リズム・フレーズ	遊び 身体の動き	リズムを中心にした遊びなどの身体表現・ふしやリズム遊び
中	【空間的な広がりとしての価値】 多くの人に親しまれる音楽のよさ	拍・リズム・旋律・歌詞・全体的な曲想	祭りの様子 踊りの動き	身体表現・旋律を中心に一つの楽曲の特徴を生かした表現
高	【時空間的な広がりとしての価値】 昔から伝えられたり，発展して伝えられたりしている音楽のよさ	拍・リズム・旋律・歌詞・音色・和声・全体的な構成	自然 歴史的な事象 儀式・祭儀	複数の楽曲を用いての感受・楽曲全体の構成に目を向けた表現・音色を追究しての表現

▼ 教材化について

次のような条件をそなえた楽曲を選定し，身につけさせたい資質や能力をもとにアレンジしたり，着目させたい音楽的な要素が明確になるように楽譜化したりする。

① 楽曲を特徴付けている音楽的な要素が低・中・高学年の学習内容に即したものであるとともに，その要素と多文化的な要素とのかかわりが子供にとって価値があり，興味関心に即した内容である楽曲
② 鑑賞して感じ取った様式の特徴を生かして，自分たちの表現を追究することができるような同じ様式をもつ鑑賞教材と表現教材
③ 子供が音楽を直接体験（楽器の演奏やＧＴなどの本物の音を体験するなど）することが可能な教材

▼ 基本的な活動構成

音楽科の時数削減をふまえ，内容のスリム化を図りながら，確実な内容の習得を行うことができるように，基本的な活動構成を表２のように行う。また，題材によって，音楽そのもののよさを味わうことを重視する題材とつくって表現する活動自体を重視する題材とを設定する。前者では音楽そのものとの出合わせ方，後者ではつくって表現する活動との出合わせ方を工夫する。

表2　基本的な活動構成

	であう ➡	ふかめる ➡	あじわう
自己追究	他の文化的要素と音楽のかかわりをとらえ，出合った音楽の特徴を感受する。	であった音楽の特徴を表現の方法として活用する 表したい音楽にするために工夫し，課題を解決する	自分たちの創造した表現を発表し，互いの音楽のよさを聴き合う
支援	本物体験・モデル提示・学習環境の設定	興味や関心に応じた選択活動・自分の活動を記録するノート	ファイル化した資料の活用・発表の場の設定
自己評価	これまでの経験の中で出合った音楽と比較をする。	つくった音楽を録音したり，聴きあったりしてよさを認め，自分の課題を明らかにする。	音楽や活動のよさから自分にとっての音楽の価値をとらえる

3　指導の実際

第５学年　題材
ひびけ！フォルクローレ
－ふしや音色のよさを味わおう－
（あらつ学習単元；附属の文化を創る！われらあらつフェスタもりあげ隊との連動）

▼ 題材の考え方

本題材は，音楽そのもののよさ，ここでは特に楽器の音色の特徴を生かしながら感受力や構想力を発揮し，３つの教材曲を演奏したり，間奏をつくったりすることをねらっている。そのために，ＧＴがケーナで奏でる「コンドルは飛んでいく」「花祭り」「風とケーナのロマンス」を聴き，その音色のよさを味わわせるとともに「音色によって音楽の表情が変わるのだな」という気づきをもつことができるようにする。その気づきを生かし，旋律とリズム伴奏に合う音色を選択し，３つの教材曲を演奏する活動を設定する。さらに，教師が意図的に表現した３つの教材曲のメドレーを演奏する姿に出合う場を設定し，「自分たちもメドレーづくりをやってみたい」という思いをもたせ，メドレー曲として演奏するための間奏をつくって表現する活動へと向かうようにする。また，本題材は，あらつ学習と連動するものであり，図２のような考え方で連動を図る。

● 題材の目標

① 音色のよさを感じ取り，表したい音楽にするための音色を選んで演奏したり，フォルクローレの旋律の流れやリズム伴奏の特徴をとらえ，間奏をつくって表現することができる。（創造性）
② フォルクローレに対する興味・関心を深め，自分なりの思いをもって音楽活動に取り組み，友達とアンサンブルする喜びを味わう。（主体性・社会性）

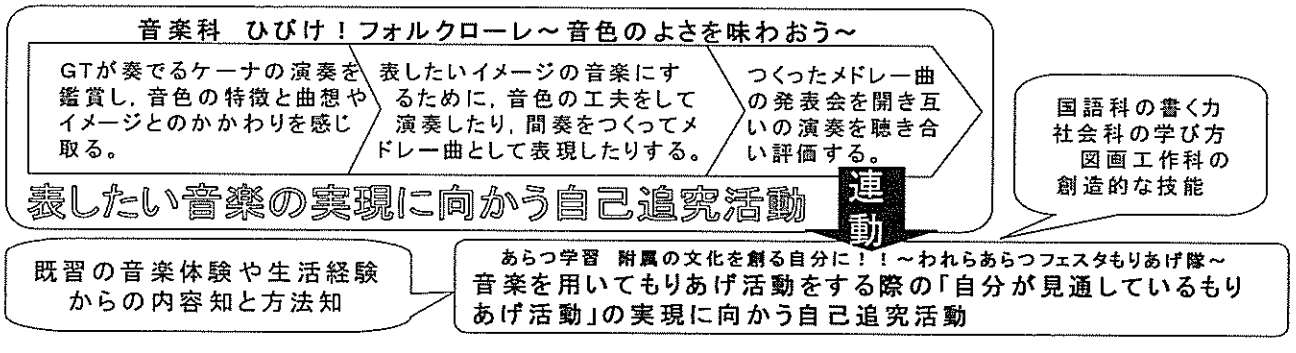


図２　あらつ学習からの求めを生かす音楽科学習の考え方

● 学習の流れと考察

第１次　であう段階１～３／９時

３つの教材曲を聴き教材曲に対する興味や関心をもってこれからの学習について話し合う。

① ＧＴが演奏するフォルクローレを聴いたり，ケーナを演奏したりする。

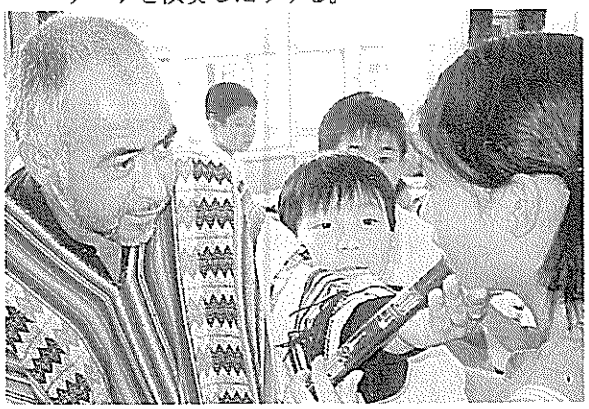


写真１　ケーナの音って風みたいだな

② いろいろな楽器（尺八・リコーダー・フルート・ピアノ）で演奏するフォルクローレを鑑賞し，聴き比べる。

③ これからの活動について，どのような活動をしていこうと思うのかを出し合う。

〈これからの活動の見通し〉

もっとフォルクローレのよさを味わうために，ふしやリズムに合う音色を選んで演奏しよう。

第２次　ふかめる段階４～８／９時

演奏する楽器の音色を選択したり，間奏をつくったりして３つの教材曲のメドレーをつくり自分の表したいイメージを音楽で表現する。

① 旋律やリズム伴奏を演奏する音色を選択し，アンサンブルを行う。

② 曲と曲をつなげる間奏をつくり，メドレー曲を演奏する。



写真２　パンフルートの音が合うみたいだな

であう段階は，ＧＴが演奏するフォルクローレを鑑賞し，教材曲の曲想や音楽的な要素の特徴を感じ取ったり，フォルクローレに対する興味や関心をもちたせることをねらっている。そのために，フォルクローレの演奏者であるＧＴを招いたり，ケーナやサンポーニャなどの民族楽器にふれる体験の場を設定したところ，次のような感想をもった。

マニュエルさんが演奏する「コンドルは飛んでいく」を聴くと，何だかその音楽の中に入っていきそうな気がしました。・・・中略・・・マニュエルさんの演奏の仕方は，とても迫力があって，すごいなあと思いました。ケーナの音は，なんだか優しい風のイメージでした。

資料１　フォルクローレを鑑賞したＡ児の感想

次に，演奏する音色が音楽を特徴づけていることを感じ取らせるために，他の楽器で演奏するフォルクローレを聴く活動を位置づけたところ，次のような気づきをもつことができた。

フォルクローレを演奏するのは，ケーナや尺八がいいと思いました。中でも，ケーナはビデオで見た祭りの様子や風の様子，動物の様子をそのままに表すことができると思います。「コンドルは飛んでいく」だと，ケーナの音色は疲れたような感じだけど，コンドル自体は，偉そうな感じで飛んでいるようにも思えます。

資料２　音色の違いに対するＡ児の思い
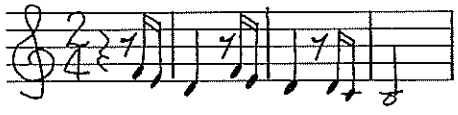
考察１

ここでは，ＧＴがケーナで演奏するフォルクローレを鑑賞する活動を設定することで，資料１のような音楽そのものに対する興味や関心を深めることができた。そして，ケーナやサンポーニャなどの演奏体験や他の楽器で演奏するフォルクローレを鑑賞することで，音色の違いによって，音楽の表情が変わることを感じ取ることができ，深める段階の音色を工夫した表現へと活動への意欲をつなげることができたと考える。

ふかめる段階では，自分たちが表したいテーマをもとに音楽的な構想力を発揮してフォルクローレらしい音楽表現をすることをねらっている。そのために，まずふしやリズム伴奏に合う音色を選んでのアンサンブル活動を設定した。次に教師が間奏をつくってメドレー曲にしたフォルクローレを鑑賞させたところ，自分たちもフォルクローレの３つの教材曲をつなげてメドレー曲をつくりたいという思いをもち，次のような活動を行い，フォルクローレらしいメドレー曲をつくっていった。

♪　表したい音楽のかたちは，「コンドルは飛んでいく」の力強い感じから，「花祭り」へとつなげていってだんだん明るい感じになるメドレー曲

♪　パンフルートの音で「コンドルは飛んでいく」と「花祭り」の間奏をつくる。



資料３　表したい音楽のかたちをもとにつくった間奏

③　つくった音楽を録音して聴き，さらに表したいテーマを表現するための工夫をする。



写真３　途中からリズム伴奏をいれよう

第３次　あじわう段階９／９時
つくったメドレー曲を聴き合う。

①　フォルクローレメドレー発表会を開き，演奏したり友達の表現を聴いたりする。
- それぞれの表現を認め合う発表会
- フォルクローレの価値をとらえる鑑賞の場

あらつ学習の求めによって表現の能力を発揮
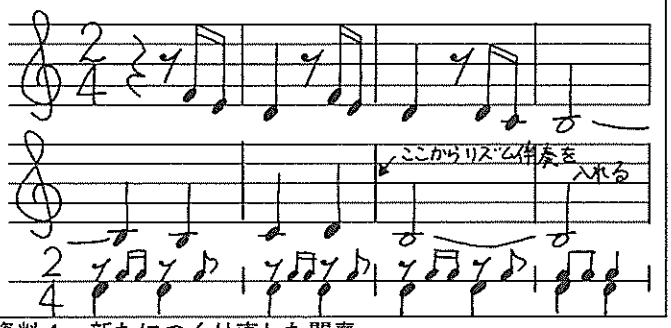


写真４　あらつフェスタのオープニングをもりあげる

私がこの学習をして，学んだことは，協力しないと新しいものは生まれないと言うことです。また，役だったと思うことがありました。それは，音楽の時間にサンバやフォルクローレの学習をしていたから，この短い期間でも，めあてを達成することができたということです。・・・・（以下略）

資料６　もりあげ隊の活動を終えたＡ児の感想

さらに，自分たちの表現を録音して聴く場を設定することで一度つくった資料３の間奏を資料４のように変容させた。

♪　パンフルートの音を使い強弱をつけ，小太鼓の音でリズム伴奏を途中から入れる。



資料４　新たにつくり直した間奏

また，子供たちのアンサンブルする姿を見ると，ｿ♪ｿ♬の休符を強調して演奏したり，アクセントをつけて表現したりする姿が見られるようになった。

考察２

Ａ児は，であう段階で得た「音色の違いが曲の感じを変える」という気づきをもとに，フォルクローレらしさを出すためにふしの音色を工夫したり，資料３の間奏を資料４のように変容させ，リズムのとらえ方を鋭くしていった。録音した自分たちの表現を聴く場の設定や活動構成の有効性を示している。

あじわう段階では，自分たちの活動に対する達成感をもたせ，フォルクローレの価値を自分なりにとらえることをねらいとしている。発表会を終えてＡ児は次のような感想をもった。

この学習をして感じたことがあります。４年の時に学習したサンバやカリプソ・メレンゲよりもいろんなイメージが表せるおもしろい音楽だと言うことです。（中略）フォルクローレは，花祭りのような楽しい曲もあるけれど，コンドルはとんでいくのような勇ましい感じの曲もあれば，風とケーナのロマンスのように悲しいような不思議のような感じの曲もあります。こんなふうになるのも，代表的なケーナの音色があるからだと思います。マニュエルさんのケーナと持丸さんの尺八がメロディーとして混ざり合うと，とてもフォルクローレらしさが出ていて，いいなと思いました。（以下略）

資料５　学習を終えてのＡ児の思い

考察３

発表会の場を設定し，互いの表現のよさを認め合う交流活動や他のフォルクローレを鑑賞する場を設定したことは，資料５のような思いをもつために，有効であったと考える。

全体考察

本題材において，多文化的にアプローチする活動を展開させてきたことで，子供たちの楽曲に対する興味関心を高め，表したい音楽のかたち思い描いたり，音色の特徴を生かすアンサンブル活動やフォルクローレの特徴を感じ取ってフォルクローレらしいメドレーづくりを行ったりする音楽的な構想力の高まりをみることができた。さらに，本題材とあらつ学習単元とが連動する可能性を考えて音楽科学習を展開させたことで，資料６に見られるような学習することの価値を子供自身が感じることができた。このことは，これまでに学習した音楽に対する感じ方や他者と共に音楽活動することのよさ（社会性）を感じることにもつながったと考える。今後も，子供の発達段階や興味関心に応じた教材をさらに開発していくことを課題としてとらえている。

3 自分の楽しみ方を見出す音楽科学習プラン

音楽科部　豊　村　雅　義

1 学習プランの考え方

▼ 自分の楽しみ方を見出すとは

音楽の楽しみ方とは，音楽のよさ（楽しさや美しさ）をとらえていく方法である。それには，子供たちの音楽に対する感性等の違いによって，個人差がある。自分の楽しみ方とは，音楽と出合ったときの個性的な感受をもとに，自分の目的や課題を明確にしながら進める表現や鑑賞を深めていくその子なりの方法のことである。その方法を積み重ねていくことで，出合った音楽から表情を感じ取る感受力と，自分がどのような表現を求めていったらよいかを明らかにしていく構想力を発揮しながら，音楽のよさを表現・鑑賞する方法が経験化される。つまり，「こんなふうに表現したら楽しくなる。」「こんなところに気をつけて聴くとおもしろい。」というように，自分の音楽活動の価値を感じながら音楽にかかわっていくのである。このことによって，音楽への関心や音楽活動への意欲が高まり，音楽のよさをより深くとらえる感受力や構想力を育てることにつながっていく。

特に低学年においては，まだ音楽活動の経験が浅いことから，様々な音楽活動にひたらせ，自分の楽しみ方を見出すことが大切である。つまり「こんなことをすると楽しいよ。」というように，音楽の諸要素に関する刺激に対して音楽的に反応する心地よさを数多く体験させていくことが大切である。それは，表現や鑑賞への期待感（目的意識）を強くもち，直接的に音楽にかかわりながら，音楽のよさを感覚的にとらえさせていくことである。このように，低学年で音楽の楽しさを見出す活動を積み重ねていくことが，表１のように中学年・高学年における自分の楽しみ方を創り出す活動につながっていく。

▼ 自分の楽しみ方を見出す音楽科学習プラン

自分の楽しみ方を見出す音楽活動は，子供たちが表現や鑑賞に対する目的意識をもち，個々の音楽経験や生活経験の違いに応じて，楽曲や表現方法などを自己選択・自己決定しながら進める活動である。その活動を通して音楽的に表現する楽しさを経験していくのである。自分の楽しみ方を見出す音楽科学習プランとは，低学年を中心に，遊び的な音楽活動を中核とした題材を開発し，以下の要件を満たす音楽科学習を展開していくことである。

- ○ 活動目的がはっきりした音楽活動ができること
- ○ 各々の音楽的実態（嗜好／感受／技能）に応じた教材や活動があること
- ○ 自己決定や自己選択の場や時間が保障され，適切な教師の支援が位置付いていること

2 学習プランの具体的構想

▼ 教材化について

歌唱や器楽においては，以下の条件をもつ楽曲と活動を教材化する。

- ○ 拍の流れや拍子などの変化が少なく，それらが明確で子供が把握し易いかたちをもつ楽曲　（発達段階に即した楽曲構造）
- ○ 季節や行事に関係したり，他教科での学びを生かしたりできるような子供の生活に寄り添った楽曲や活動　（表現の目的や見通しのもち易さ）
- ○ 身体表現等の直接的な活動を通して，自分の表現の音楽的価値の評価ができる活動　（評価可能性）

表１　「自分の楽しみ方」の低・中・高学年における段階

学年段階	低学年	中学年	高学年
目的や課題	音楽活動にひたる楽しさ ----	----	---->
		表現の工夫を求める楽しさ ----	---->
			音楽の価値を探る楽しさ -->
楽しみ方の内容	感覚的・直観的 ----	----	-> 次第に論理性を加味
	自分の楽しみ方を見出す ----	----	-> 自分の楽しみ方を創り出す
中心的な活動	遊び的な音楽活動	表現の工夫にむかう音楽活動	研究的な音楽活動
感受力の重点	リズムや旋律のまとまりをとらえ心地よさを感じ取ること	リズムや旋律の流れをとらえ表情を感じ取ること	全体的なかたちや仕組みをとらえ表情を深く感じ取ること
構想力の重点	音色やリズムなどの変化を意識し，音楽のかたちを描いたり，つくったりすること	リズムや旋律の流れを意識し，音楽のかたちを描いたり考えてつくったりすること	全体の構造やモチーフを意識し，音楽のかたちを描いたり考えてつくったりすること

また，つくって表現する活動においては，表２のように低・中・高学年の系統性を明らかし，教材化を図る。低学年においては，音色に変化をつけたりリズムにまとまりをつけたりすることで，自分が表そうとしたテーマが音楽として表すことができることを実感させていく。

▼ 基本的な活動構成と支援

子供の音楽的実態に応じて自己決定・自己選択ができるように次のねらいと活動をもった３段階の学習過程で音楽遊びを中核とした学習活動を構成する。

（１）であう段階
複数の楽曲や音楽活動に出合い，いくつかのリズムや音にかかわる音楽遊びを行い，音楽的に価値ある活動にむけての自分なりの目的意識をもつ。
（２）ふかめる段階
自分に応じた楽曲や活動を中心に，相互交流しながら楽しく音楽遊びを行い，音楽のよさを感じ取りながら表現を深める。
（３）あじわう段階
お互いの表現と活動のよさについて相互評価・自己評価を行い，音楽のよさをあじわう。

これらの各段階に，活動を円滑に進めるための支援，音楽的技能をサポートする支援，そして自分の表現の音楽的価値に気付かせる支援を位置づける。

▼ 題材構成・配列の工夫

伝えたいことやイメージを共有できるように，題材構成やその配列を工夫していく。例えば，行事や季節に応じた楽曲や活動を教材とし，子供の生活に近づけた題材構成を行う。また，他教科の学習対象や活動が音楽科の学びに生かされるものについては，配列を変えて他教科等と同時に展開したり，合科的に指導したりする。このような工夫をすることで，子供の表現目的が明確になり，主体性が誘発された学習が展開できる。

表２　つくって表現する活動の系統性

学　年	音楽づくりのキーワード	発想の基盤	教材化の視点
低学年	・拍やリズムの刻み，規則性 ・音色・リズムと豊かな想像	音源・音素材 テーマとなる事象	一人一人にイメージが共有できること （個の学びと共同の学びの往復）
中学年	・旋律やリズムの流れ，順序性 ・音の組み合わせと音楽の表情	ストーリー	各場面のイメージが一人一人につくられること
高学年	・全体的な形式，構造性 ・総合的表現	音楽的な表現	モチーフが意識できるものであること

3　指導の実際

第１学年　題材

西公園の音で遊ぼう

▼ 題材の考え方

本題材は，子供たちが生活学習で愛着をもっている西公園の様々な音事象に目を向け，リズムや音色を工夫しながら，即興的に音遊びを楽しむことをねらっている。表３に示したように，子供たちは今までの生活学習の中で西公園への愛着や気づきをもっている。その中に「面白い音の発見」を位置づけ，より主体性が誘発された自己追究の学びとして音楽科学習を進めさせていくものである。具体的には西公園で見つけた音を表現したいという求めをもたせ，西公園で音素材を見つけたり，楽器で表現させたりする。また，まとまりのある表現になるように教師自作の「西公園のマーチ」という楽曲に合わせて表現させ，相互評価・自己評価をさせていく。その際，音色やリズムのまとまりに着目できるように，音素材の準備やグループ学習の場の設定などの支援を行う。本題材は，音遊びが楽しかった，だけでなく，色々な音やリズムで表現する楽しみ方を見出せるように活動と支援を構成し，感受力・構想力の発揮・伸長を図るものである。

▼ 単元の目標

○　気に入った西公園の音を見つけ，様々な音素材や楽器を使って楽しく音遊びができる。　（主体性）
○　音素材の選択や音の出し方を工夫し，音色の変化やリズムを感じて即興的に表現できる。（創造性）
○　見つけた音や表現を聴き合い，お互いの表現のよさを認め合うことができる。　（社会性）

表３　本題材と同時期に展開する生活学習との関係

生活学習「西公園の秋と遊ぼう」	連　動	音楽科「西公園の音で遊ぼう」
○　自分の好きな場所や事象への気づき （西公園とのかかわり，愛着）	⟶ 主体性の誘発	○　自分の好きな音見つけ （素材，音の出し方・奏法による音色の変化）
○　西公園の秋についての気づきの広がり （秋らしい音を見つけ，確かめる）	⟵ 創造性の発揮	○　自分が表したい音の音色やリズムの工夫 （リズムや音色を工夫しての表現）

▼ 学習の流れと考察

であう段階：１～２／７時
　教科書の教材曲「音のマーチ」で色々な音を見つける遊びを体験し，西公園で面白い音を見つける。

①　「音のマーチ」に合わせて，色々な楽器や身の回りのものを使って音遊びを楽しむ。

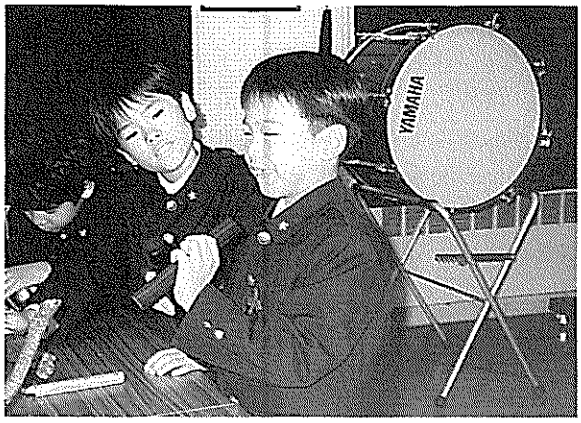


写真１　音楽室には色々な音があっておもしろいね

②　生活学習「西公園の秋と遊ぼう」に続けて，西公園からおもしろい音を見つける。



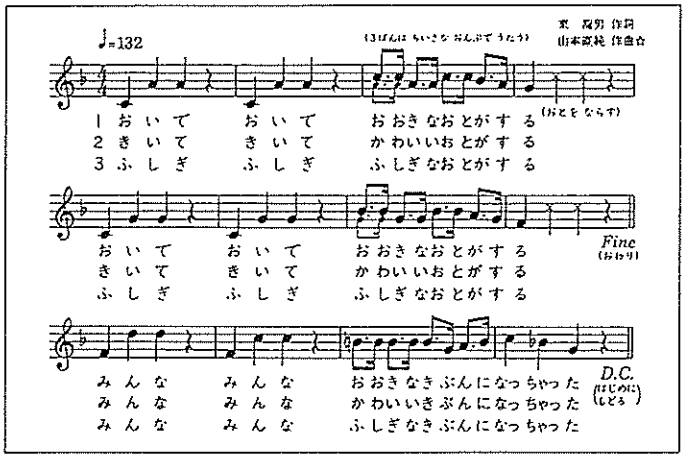
写真２　落ち葉を棒でかき回すとガサガサいうよ

ふかめる段階：３～６／７時
　西公園で見つけた様々な音を「西公園のマーチ」に合わせて即興的につくって表現し，音色やリズムの違いを感じ取り音遊びを楽しむ。

・西公園でおもしろい音を見つけて発表し合う活動と，見つけた音を「西公園のマーチ」に合わせて音遊びとして構成していく活動を往復的に行い，音遊びが音楽的に価値のある表現（音色の違いやリズムへの着目）になるようにする。

であう段階では，身の回りの様々な音に着目し，その音色やリズムに気をつけると楽しく音遊びができることに気づき「色々なおもしろい音を見つけて，音遊びをしたいな。」という強い目的意識をもたせることをねらいとしている。そのために，生活学習「西公園の秋と遊ぼう」と同時期に音楽科学習を展開し，西公園の音探しをさせていく。

第１時は，「音のマーチ」（資料１）に合わせた音遊びで，様々な楽器から色々な音が出せることに気づかせる。子供たちは，教師の助言を受けながら，色々な楽器を選んだり奏法を変えたりして，「色々な音が出るね。」と意欲的に活動した。



資料１　おもしろい音を見つける「音のマーチ」

第２時には，生活学習に続けて時間を設定し，「西公園でおもしろい音を探そう。」と呼びかけ，音探しをさせた。子供たちは「音のマーチ」を歌いながら，色々な音素材を見つけたり，耳を澄ませて聞こえてくる音を聴いたりした。

考察１

音色の違いの楽しさに気づかせる活動のあとで，生活学習の学習の場である西公園で音探しをさせたことで，色々なものから音を出したり，「音のマーチ」を口ずさみながら自分にとってのいい音を見つけたりすることができた。また，カラスの鳴き声など，音素材を持ち帰ることができないものもあったことから，「音楽室の楽器などを使って表現してみたい。」という求めをもたせることができた。

ふかめる段階では，自分が見つけた西公園のお気に入りの音をもとに，即興的につくって表現し音遊びを楽しむことをねらいとしている。その際，多様な音素材を準備したり，奏法を助言したりしながら，教師自作の「西公園のマーチ」（資料２）に合わせた即興的な表現を行わせる。この曲は，自由な音遊びが，４分の４拍子，２小節で２回出てくる。そこで，音色の違いを意識したり，リズムパターンを繰り返したり変えたりと，より音楽的な表現として音遊びができるように助言したり相互評価させたりしていく。Ｏ児は，最初声でカラスの鳴き声をまねしていたが，クラベスと声を合わせる音遊びに変えていった。「楽器と声を合わせるとはっきりしていい。」と音色を変えて表現を工夫するよさを見出す発言をしていた。



写真３　いろいろな音の出し方ができるよ。



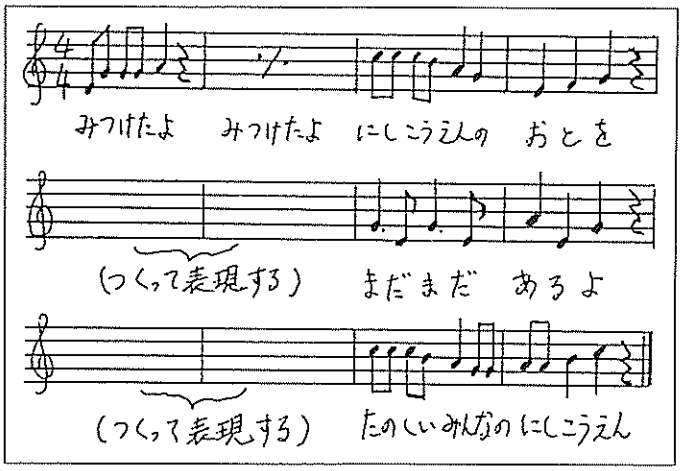
写真４　友達の音遊びのいい所を見つけよう！

あじわう段階：１／７時

友達の見つけた表現を取り入れて，色々な音遊びの楽しさをあじわう。

音楽的に価値がある表現を認め，伸ばしていく。

・音遊び（即興的な表現）は全て認めていくが，その中でも音楽的に価値がある表現は皆の前で発表させたり，模倣させたりしていく評価活動を取り入れ，単なる音の再現ではなく，音楽的に表現する楽しさを味わわせることをねらう。例えば，拍をとらえて表現する，音遊びの２か所に同じリズムを反復する，音色を変えてコントラストをつける，などである。



資料２　音遊びを音楽として楽しむための「西公園のマーチ」

考察２

西公園でただおもしろい音を見つけるだけでなく，「西公園のマーチ」のフレーズの中に当てはめた音遊びにより，ただ音を出すのでなく，音楽的な表現で音遊びを楽しむことができた。また，活動意欲を持続させることができた。さらに，工夫した表現が見られた場合，そのよさを教師が評価したり，歌に合わせやすいかどうか自己評価・相互評価させたりしたことで，Ｏ児のように，音素材を組み合わせて音色の変化を出すなどの音楽的に価値がある工夫が見られた。これらの支援が，西公園で見つけた音をただ再現するのではなく，音楽的に表現するよさを感じ取らせる上で有効に働いたと考える。

あじわう段階では，友達や教師が集めた様々な音素材（楽器も含む）を使い，即興的につくって表現する活動を広げ，音色やリズムを考えて表現する楽しさを味わわせることをねらいとしている。具体的には「カラスの鳴き声」「風の音」「落ち葉や木の枝の音」などの見つけた音ごとに，それぞれが表現できそうな音素材を並べた場を設定し，歌いながら順番に回らせて即興的な表現を楽しむ活動に取り組ませた。子供たちは，ふかめる段階での交流を生かして，音の出し方（奏法）や音素材の選択やリズムなどを工夫して，色々な音遊びを楽しんでいた。

考察３

自分たちがつくり出した音遊びのよさ（楽しさ）を味わいながら，即興的な表現ができた。音色やリズムを考える表現のよさを感じる感受力や構想力が高まってきた姿だととらえられる。これは，音素材の準備等の場の設定や，前段階で出てきた工夫された表現を賞賛するなどの支援が有効に働いたと考える。

全体考察

生活学習でかかわりが深い西公園の音を教材化することで，自分が見つけた音にこだわって自己追究の学びを展開することができた。また，学級全体でかかわっている対象であるため，ふかめる段階において，「こんな感じの音だったね。」「ちょっと違う感じだね。」など，共通のイメージで相互評価をすることができていた。生活学習と同時期に展開することが有効に働いたと考える。また，本題材後の生活学習の中で，「落ち葉の音は秋だけの音です。」など，音を通して季節の変化に気づく発言も見られた。音楽科の知が生活学習に生かされている姿だととらえる。それらの上にたって，即興的な表現においても，音楽的な表現になるように支援を位置づけたことで，音楽の楽しさを感じ取る感受力や楽しく表現する構想力を伸ばすことができた。

図画工作科学習の＜ふくおかプラン＞

1 創造的な感性と技能を培う図画工作科学習を

1 図画工作科が担う役割・立場

造形活動を通して豊かな人間の育成をめざす図画工作科においては，主としてねらわなければならない特性は創造性である。しかし，表現方法や技法などだけを身に付けさせただけでは子供たちの生活に生きる力の育成にはならない。そこで，これからの図画工作科では，創造性を中心に，子供自らの表現の求めである主体性と，つくる過程や作品を通して自分や友達のお互いのよさを認め合っていく社会性をともに培っていくことが必要である。そのことが子供たちにとって，生活に生きる力としての基礎的・基本的な資質・能力となり，豊かな人間の育成につながっていく。

そこで，本校のふくおかプランにおいて，図画工作科が担う役割としては，ものをつくり出すなかで豊かな情操を養う教科の特性から考えて，美的創造性に重点をおくものとする。このプランでは，子供たちが自らの表現欲求をもとに，造形的に自己実現していくことを通して，創造活動を基盤とした創造的な感性や創造的な技能を育てていくことが大切である。以上のことから，図画工作科では，子供自らの表現欲求から，ものや人と造形的にかかわり，自ら創る喜びを味わうことで，ものの見方や，感じ方，行い方といった感性を育て，豊かな情操を養っていくことをめざしていくものとする。

2 創造的な感性と技能を培う図画工作科学習とは

「創造的な感性」とは，子供が材料や造形対象と出合い，感じたこと，考えたことから表現への求めを生み出し，造形的に表現していく際の発想力や構想力であり，「創造的な技能」とは，自らの求めから，色や形で表現していく構成力や，材料や用具を選び使っていく活用力である。展開にあたっては，造形対象と出合い，自らの求めを表現していく過程において，創造的な感性や創造的な技能を培うために，「造形遊び」と「絵や立体で表す」「つくりたいものをつくる」こととの内容の関連を，十分に考えながら，自分の表現を追究していく表現と吟味していく鑑賞の活動を仕組むことが必要である。

表１　図画工作科学習で特に大切にする資質・能力

				低学年	中学年	高学年
主体性				自分にとって楽しい，またはおもしろい表し方や感じ方を，見つけること	自分の思いや願いをもとに，自分なりのいろいろな表し方や感じ方を見つけること	自分の思いや願いを大切にして，その思いに合わせた，自分らしい表し方や感じ方を見つけること
創造性	創造的な感性	発想力		材料や造形対象と体全体でふれ合い，創りたいものを思いつくこと	材料や場所，造形対象の特徴を多面的にとらえ，その特徴や目的からつくりたいものを思いつくこと	材料や場所など，造形対象の特徴と自分の思いを比較しながら，つくりたいものを思いつくこと
		構想力		つくりながら，自分がつくりたいものや方法を見つけていくこと	色や形の組み合わせのおもしろさや美しさを考えながら，つくり方の見通しをもつこと	表現の意図や方法から，形や色，つくりたいものの用途などを考えてつくり方の見通しをもつこと
	創造的な技能	構成力		並べる，積む，つなぐなどして自分の思った形をつくること	表したいことをもとに，形や色，材料を生かし美しさや用途を考えながら形をつくること	自分の表現の意図や方法，伝えたいことに合わせて，色や形を効果的に構成し形づくっていくこと
		活用力		粘土，厚紙，クレヨン，はさみ，のりなどの身近な材料や用具について手を働かせ使うこと	これまで使ってきたものや木ぎれ，板，水彩絵の具，小刀，のこぎりなどの材料や用具のよさを生かしながら使うこと	これまで使ってきた材料や用具にあわせ，自分が選んだ材料や糸のこぎりなどのよさを生かし，自分の表現に適した方法で使っていくこと
社会性				友達の表現のよさに関心をもつとともに，違いを認めともに造形活動を楽しむこと	友達の表現のよさや表し方の違いに気付き，話し合いながらともに造形活動をすること	友達の表現のよさや意図に関心をもち，ともに造形活動をしながら達成感や満足感を味わうこと

そのような図画工作科学習を構想していくことで，子供たちは自分が表現したいことを明らかにしながら，材料や造形対象と主体的に触れ合い，そのよさや美しさを感じ，自分の見方，感じ方，表し方を常にふり返りながら，そこから表現したいものを発想・構想していく創造的な感性を高め，ものに対する感じ方，考え方，行い方など，自分のよさを生かし自己実現していく資質や能力を育て，創る喜びを味わうことができると考える。

そこで，図画工作科学習では，次のような３特性が育った子供の姿をめざしている。

◎　材料や造形対象に対する見方，考え方，感じ方などから自分らしい求めをもち，その求めから関連づけて新しい発想や方法をつくりだす子供
（創造性）

○　自分の求めから積極的に材料や造形対象とかかわり，表現や鑑賞の活動を楽しみながら，造形活動に取り組む子供　（主体性・創造性）

○　造形的なよさや美しさから，ものや人と積極的に対話しながら，お互いのよさについて認め合うことができる子供　（社会性・主体性）

このような子供の姿をめざすためには，表１にまとめた資質・能力を特に大切にし，系統的に高めていく。

3　図画工作科学習における学びの連動の考え方

▼　総合の学びとの連動の考え方

図画工作科と総合課程（生活科・学級活動・あらつ学習）との連動では，①図画工作科で培った資質・能力を，総合課程の学習において総合的に生かし，生きた知としてより具体的で子供の必要感に応じて生かしていく連動のパターン，②総合課程の学習において培われた追究意欲や課題意識を，図画工作科の学習に生かしていくといった２つの連動のパターンが考えられる。

①では，図画工作科で培った創造性（発想力・構想力・構成力・活用力）を総合課程の学習で子供の求めに応じながら生かしていけるようにカリキュラムを編成することで，両者の資質・能力は相乗的に高まっていくものと思われる。

具体的には図１にあるように，第３学年の図画工作科“竹と和紙のカーニバル”において培った構成力や，竹や糸などの材料用具の活用力を，学級活動“大凧フェスティバル”で生かしていく例や，第５学年の図画工作科“もじ文字デザイナー”の題材で培った，色や形の構成力や文字のレタリングの知を，あらつ学習“あらつフェスタ盛り上げ隊”において，衣装づくりや看板やポスターづくりに生かしていく例が考えられる。生活科やあらつ学習では，すべての課題の発表に関して，図画工作科のビジュアルな表現能力（構成力や活用力）が必要となる。例えば，スケッチや絵，イラスト，漫画，図や色，模型，写真，ビデオ，コンピューターグラフィックなどの映像表現などが，生活科やあらつ学習において，追究内容を表現していくための発表の主役となる。そのように考えると，図画工作科の創造性の知は，あらゆる総合課程の学習の単元において生かされていくことから，図画工作科は総合課程における総合表現力の育成には欠かせない教科である。また，総合課程で図画工作科の創造性の知を，応用的に，具体的な生活場面で用いていくことによって，図画工作科の創造性は，子供たちにとって，より生きた知となると考えられる。図画工作科という教科内でしか働かなかった創造性が，総合課程の学習において応用的に生かされることで，その創造性は子供たちにとって，より様々な生活場面で自分の力を確かめることが可能となる。

②の連動パターンでは，図１にあるように，第４学年のあらつ学習“アジアのひみつをさぐろう”において学んだアジア各国の雑貨の主材料である竹や木をつかい，その材料のよさを生かしてつくりたいものをつくる造形活動を展開する題材が考えられる。但し，生活科との連動では，連動というよりもむしろ融合的な考えで合科として構想する。より子供の求めや生活に生きる資質・能力を育成するという立場で，図画工作科と生活科との連動から，生活を楽しくするものや，役立つものの制作などとの関連を強め，合科的な展開を図るようにしていくことが考えられる。

（北田　尚雄）

	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年
【教　科】 図画工作科	外国人さんとお面カーニバルを開こう！ （生活科と図画工作科との合科単元）	竹と和紙のカーニバル	アジアからのおくりもの	もじ・文字看板デザイナー！	ぼくもわたしもCGグラフィックデザイナー
【総合課程】 生活科・学級活動 あらつ学習		【学級活動】 大凧 フェスティバル	アジアのひみつをさぐろう	附属の文化を創る 自分に～われらあらつフェスタ盛り上げ隊～	附小，IT革命
連動される知	生活科の求めや内容と図画工作科の内容を融合	図画工作科で培った竹や和紙の特徴や糸の結束などの創造性を生かす	あらつ学習で学んだアジア各国のものの主な素材である竹や木をつかってつくる	図画工作科で学んだ文字や色の構成の創造性を生かす	図画工作科で学んだパソコンによる色や形の構成の創造性を生かす

図１　学習の連動，図画工作科と総合の学びとの連動の例

2 材料と場所の組み合わせのよさを生かす造形遊びのプラン

図画工作科部　北　田　尚　雄

1 学習プランの考え方

▼ 材料と場所の組み合わせのよさを生かすとは

「材料と場所の組み合わせのよさ」とは，材料と場所を組み合わせたときに生まれる，造形的な要素である，色や形の①対比②調和③リズム④動きによる，色や形の構成のおもしろさや美しさであり，「材料と場所の組み合わせのよさを生かす」とは，材料や場所の特徴から生まれる造形的な要素から，表現方法や表現内容を発想し，自分にとって意味や価値のある場所(空間)を構成していくことである。ここでいう材料と場所には次のような関係がある。①場所が造形対象であり，その場所に含み込まれる材料，②場所が表現活動の場であり，その場所から発想した表現内容から選択された材料という関係がある。このような関係からその場所に合った材料を選択し，組み合わせのよさに視点をあてた教材化を図った造形遊びを構想することで，色や形の構成力や，材料や用具の活用力といった資質・能力を培うことができる。

▼ 材料と場所の組み合わせのよさを生かす造形遊びのプランとは

場所をつかった造形遊びにおける「場所」とは，①造形操作の対象の場所，②造形遊びを行う活動場所，③材料を再構成することで自らつくる場所(空間)の３つの類型が考えられる。ここで材料と場所の組み合わせのよさを生かす造形遊びにおいては主に②の場所の立場で学習を構想する。そこで，学習を構想する上で次のような点に留意していく。①場所との出合わせ方の工夫～子供たちが場所と感動的に出合い，その特徴をつかむために，出合わせたい場所を焦点化し，様々な角度から見つめ，その場所の特徴にあった材料を選択させる，②活動の自己吟味から新たな発想を促す～作品の記録写真，学習カードなどの制作ポートフォリオをもとに，作品や活動の過程をふり返るとともに，友達のよさを見つけ，自分の表現方法や表現内容に取り入れていく交流活動や評価活動の位置づけさせる。以上のことから子供たちの自己追究がはじまり，活動を展開することで表現は練り上げられていく。

2 学習プランの具体的構想

▼ 材料と場所の教材化の条件について

造形遊びでは，材料と場所などの特徴が子供の表現活動に大きくかかわってくる。そこで，その材料や場所の教材化にあたっては，表２のような材料と場所の条件から教材化を図る。この材料や場所の教材化の条件の学年における系統については，子供の発達特性と培うべき内容から考えていく。低学年の造形遊びでは，材料そのもののもつ特徴に注目させていく。その材料の特徴を生かしていくことができる場所の広さの環境を設定することが必要である。中学年では，低学年に比べ，手前にあるものと向こうにあるものを表したり，上下左右前後への空間の広がりに応じて，奥行きや立体的空間に働きかける造形遊びが期待できることから，材料と場所の組み合わせのよさが生かされるような材料と場所の選定が必要であり，高学年では，場所の形状から，周りの環境も取り入れた活動が期待でき，出合う空間の広がりから，光や風などといった環境的な要素が材料の組み合わせによって生かされるような材料と場所の選定が必要となる。

表２　造形遊びにおける材料や場所の組み合わせのよさを生かす造形遊びのプラン

条　件	低　学　年 場所の広さをつかい，材料のよさを生かした構成遊び	中　学　年 材料と場所の相互作用を生かした表現活動	高　学　年 材料と場所や環境の相互作用を生かした表現活動
○　場所の条件	○　造形操作対象の場所 ○　子供の思いを表現できる広さのある場所	○　奥行きや立体的な構造物をもつことから，上下左右への空間の広がりがある場所	○　光や風など，その場所を構成する環境的な要素の作用が顕著にある場所
・具体的な場所	・体育館や自由スペース ・運動場，砂場など	・草むらや岩場や大きな石のかげ，机や棚の中，樹木のある場所，遊具のある場所	・ベランダや屋上，窓，玄関，樹木のある場所など
○　材料の条件	○　並べたり，つないだり，重ねたり，埋めたりできるような棒材や塊材	○　場所との対比や調和が生まれたり，材料を構成することで，空間にリズムや動きが生じるような材料	○　空間を構成する環境的な要素(光や風，水，人の動きなど)から変化が生じるような材料

このような発達特性と，造形遊びにおける子供の発想・構想，表現，鑑賞の内容から材料や場所の教材化のための条件を考えていく。

▼ 具体的な活動構成

材料と場所の組み合わせのよさを生かす造形遊びの活動構成については，表現活動を中心とした自己追究活動を①場所のよさをつかみ材料を選択する段階，②材料と場所の組み合わせ形を構成する段階，③材料や場所の組み合わせのよさを生かしながら表現を練り上げる段階の３段階で構成する。このそれぞれの自己追究の段階に，各自の制作ポートフォリオをもとにした活動のふり返りや友達との話し合いによる交流活動を柱とした自己吟味活動を支援として位置づけ，自分の活動や作品について振り返るとともに，新たな表現方法の発想をしながら表現を練り上げていくことができるようにしていく。

▼ 系統をふまえた中学年のプラン

中学年の材料や場所から発想した造形遊びにおいては，内容の配列と年間配当時数から考え，年間１および２題材おこなっていく。ここでは，子供の発達特性や図画工作科で身に付けさせる内容および表現の高まりをもとに題材を系統化し，年間のカリキュラムに配列していく。また，造形遊びの類型としては，①材料から発想した造形遊びと，②材料と場所から発想した造形遊びの学習活動がある。ここでは②の材料と場所から発想した造形遊びでは，当然材料の分解・構成の資質・能力が必要となることから，年間の配列では，まず①の材料から発想した造形遊びにおいて，材料に対する見方，感じ方，行い方などの資質・能力をしっかりと育成した上で，②の材料と場所から発想した造形遊びの学習に配列する。さらに第３学年から第４学年へは，表現する空間の広がりや，材料と場所の相互作用から生じる造形的な要素の(対比・調和からリズム，動きへ)広がりを考える。

3 指導の実際

第4学年　題材
もみじ谷ワンダーランド

▼ 題材の考え方

本題材は，中学年造形遊びにおける材料の分解・再構成の内容に，場所からの発想を取り入れた内容である。もみじ谷にある木の枝や木の実の材料操作から材料のよさをつかみ，草むらや岩場など焦点化された場所との組み合わせから，その色や形の調和や対比といった造形的な要素から発想を広げ，自分の思いにしたがって材料どうしあるいは材料と場所を組み合わせながら，空間を構成していくことで，ストーリー性のある作品をつくり出すことがねらいである。この題材では，木の枝や木の実などの材料や，もみじ谷の草むらや岩場などを焦点化して出合わせる。そのよさとしては，①材料と場所を組み合わせることから，自然スペースとの調和によって，情景的な場所(空間)を構成することができ，表現内容の発想が促される，②周りに材料としての木の枝や木の実，木の葉が豊富にあることから，表現しながら材料の収集ができるとともに材料を場所と組み合わせることで色の対比のおもしろさを感じることができることである。

▼ 題材の目標

○　木の枝の材料のよさや，場所のよさを生かして，楽しく造形活動することができる。　(主体性)
○　材料どうし，材料と場所の組み合わせを工夫し，形や場所の構成ができる。　(創造性)
○　自分や友達の表現や発想のよさに気付き，自分の表現の参考にすることができる。　(社会性)

表３　材料と場所の組み合わせのよさを生かした中学年におけるプラン

	中学年の系統 →	
○　子供の表現内容から見た系統	○　材料を分解・再構成したり，材料を場所に組み合わせながら，具体的な情景を構成していく	○　その場所の空間を，材料を置き換えたり組み合わせたりしながら，抽象的で幻想的な情景を構成していく
○　材料と場所の組み合わせから生じる造形的な要素の系統	○　材料どうしあるいは材料と場所の形や色の対比や調和の形や色のおもしろさや美しさを生かして表現する	○　材料どうし，材料と場所の対比や調和に合わせて，リズムや動き(動性)のおもしろさや美しさを生かして表現する。
○　表現方法から見た場所の系統	○　おいたり，ひそませたりして，具体的な場所を，つくっていくことができるような場所 (草むら，大きな石のかげ，岩場，机の下，棚の中など)	○　たくさんつなげたり，つるしたり，巻き付けたりして，色や形の変化や連続が表せるような場所 (低構造の樹木のある場所，遊具や立体的な構造物がある場所，)

▼ 学習の流れと考察

第１次：１～２／８時

もみじ谷の場所において，草むらや岩場のかげなどの場所をいろいろな角度から見つめ，場所の特徴から材料を選択し，場所と組み合わせながら表現方法や表現内容を発想する。

① 場所をいろいろな角度からみつめたり，材料を集めて材料操作をする。

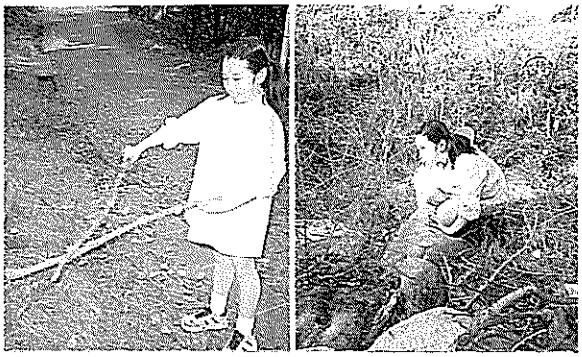


写真1・2 草むらや岩場を下から見つめたり，集めた材料で遊ぶK児

② 材料を場所にいろいろ試しながら組み合わせ，木の枝や葉っぱと岩場や草むらの場所における色や形の対比や調和のおもしろさから，表現方法を発想する。

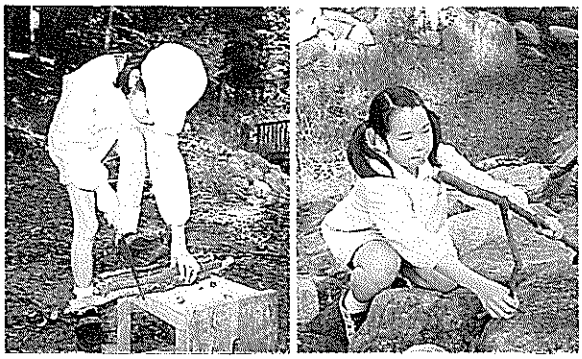


写真3・4 木の枝をのこぎりで分解したり，岩場に組み合わせてみるK児

第２次：５～３／８時

前段階において，場所や材料から発想したものを，材料を分解・再構成しながら形づくったりさらに場所に組み合わせてみる。

・ 材料と場所の組み合わせのおもしろさから，発想したものを，材料を分解・再構成したり，場所に組み合わせてみたりしながら表現内容を発想する。

第１次は，造形活動をおこなうもみじ谷のなかの草むらや岩場などのかげという場所と出合い，その場所をいろいろな角度から見つめ特徴をつかむとともに，その特徴から使いたい材料を集めたり組み合わせたりして，これからの表現方法や表現内容を発想することをねらいとしている。そのために，もみじ谷において，草むらや岩場，大きな石などの場所をいろいろな角度から見つめたり，集めた材料をつかって組み合わせてみたりした。K児は，もみじ谷の草むらや岩場に興味をもち，その場所で立ったり，しゃがんだりしながら見つめたり，集めた木の枝の材料のよさを生かして，その場所においたり，つきさしたり，組んだりして組み合わせてみたりしながら，どのような場所に見えてくるか，また，木の枝がどのようなものに見えてくるか発想した。そして，このような活動のなかで，資料１のような子供の感想が生まれた。

しゃがんで草むらや岩のあるところを見ると，自分が小さくなったような感じがしてきました。そして，木の枝をおいたり，組み込ませたりしていくと，その場所が，自然の大国“ジャングル”に見えてきました。また，組み込んだ木の枝は，生き物のように見えてきて，草むらは，川とか湖のように見えてきました。

資料１ 草むらや岩場に木の枝を組み込んだ子供の思い

考察１

場所を草むらや岩場に焦点化し，いろいろな角度から見つめさせる活動を通して出てきた「自分が小さくなって，この場所を自然の大国にしていきたいな。」という子供の求めを出発点に，木の枝や木の実の収集活動や操作体験活動，材料を組み合わせたときの自然材の調和の美しさ，岩場に木の枝が存在することで，岩場と木の枝，そして周りの草の色の対比のおもしろさに気付き，それを生かして材料を形づくっていこうとする求めがみられた。これは，草むらや岩場などの焦点化した場所に，周りにある魅力的な材料をおいてみることで，形や色の対比や調和から，木の枝を生き物，岩場をそのすみかに見立てていくことができたと思われる。

第２次は，場所や材料のよさから発想したものを，材料を分解・再構成しながら形づくって場所に組み合わせたり，材料と場所を組み合わせたりしながら，作品に題名をつけて，自分なりに意味づけし表現を高めていくことをねらいとしている。そのために，材料と場所を組み合わせたよさから，材料を構成したり，材料と場所を組み合わせて構成したりしてできた形に意味づけするために，題名をつけ，その思いについて明らかにするために制作カードをもとに作品を紹介していった。K児は，自分が興味をもった岩場と草むらのある場所で，前段階で発想した「岩場にいる生き物」を思い描きながら，木の枝を組み合わせて形づくっていった。ここでは，木の枝の剛直性を生かし，木の枝をのこぎりで分解したり，釘やシュロ縄で形を再構成し，できた形を再び岩場に組み合



写真５　岩場に木の枝をくんだり木の枝を再構成してできた形で岩場を構成していくＫ児

第３次：６～８／８時
材料と場所から発想して材料を分解・再構成して場所に組み合わせてつくった作品に，新たな材料を加えながら付加表現していく。



写真６　材料や場所に色や形の対比や調和を考え，もみじやいちょうの葉っぱや木の実で付加表現していくＫ児

この学習を終えて，新しい自分の好きなもみじ谷の場所を見つけました。岩場を色々な方法で見たり，木の枝でつくったものをおいたりすると，自分が小さな生き物になったような気がして，今までとは違う場所に見えました。これからも，大好きな自分の場所を見つけていきたいです。

資料４　学習後のＫ児の感想

わせていった。そこで資料２のような思いをもった。

場所が岩のある場所で，そこに木の枝をおくと木の枝が生き物のように見えてきました。そこで，生き物が水を飲みに行く様子を思い浮かべてつくりました。そこでつくっていると，馬が水をのみにいっているような感じがしてきました。もっと馬の住む岩場になるように，馬や岩場に飾り付けをして明るくしていきたいです。

資料２　材料を形づくり場所を構成した後のＫ児の感想

考察２

場所や材料から発想したものを，木の枝や自然木などを効果的に組み合わせていくことで，表現内容や表現方法を発想しその求めからさらに活動を展開していくことができた。また，制作過程において自分の求めに応じて材料用具をつかっていく創造的な技能を身につけることができた。

第３次は，材料と場所を組み合わせて，形づくった作品から，題名などをつけて表現内容を明らかにし，新たな材料で付加表現しながら表現を高めていくことがねらいである。そのために，自分の表現の求めに応じて付加表現していくために，木の葉や木の実，かずらなどの自然材を選択し，もっと自分の求めにあった作品や場所になるように付加表現していった。Ｋ児は，「岩場にすんでいる馬」という題名から，もっと馬らしくなるように，ドングリや松ぼっくりで，馬の目やしっぽなどを表現していった。また，「馬が水飲みやえさを食べにくる美しい場所」という表現内容から，岩場の場所に，もみじや銀杏が紅葉した落ち葉を拾ってきて，その場所に飾り付けをしながら場所を飾っていった。そこで資料３のように作品にストーリー化していくことができた。

「馬たちの大切な場所」
ぼくは，ポニー。この岩場に住む馬なんだ。ここはぼくの大切な場所。だってぼくはこの岩場で命拾いをしたんだよ。子馬だったぼくは，道にさまよいながらこの岩場についた。そこには大好きな木の実ときれいな水がある沢があったんだ。ぼくは季節の生き物たちと一緒に住んでいるよ。

資料３　材料で岩場の場所を形づくった作品のストーリー

考察３

自分なりの表現内容から材料を選択し，色の対比のおもしろさや美しさから，その場所を飾っていくことができた。その作品からは，表現内容を発想していく創造的な感性や，色や形の構成力といった創造的な技能の高まりが見られた。

全体考察

木の枝や自然木といった材料や，草村や岩場といった場所との出合いから，材料どうしあるいは場所と材料の組み合わせの表現方法や，材料と場所を組み合わせることで，色や形の調和や対比などのおもしろさや美しさから，表現内容を発想し，その表現内容にしたがって一貫して自己追究しながら表現を練り上げていくことで，自分の求めにしたがって形を構成し，自分にとって意味のある場所をつくりだすことができたと考える。また，自分の表現方法の求めに応じて，新たなものを創り出すために，のこぎりやかなづちを用いていく創造的な技能も培われた。これは，第４学年の子供たちにあった木の枝という材料が豊富にあるもみじ谷において，さらに発想が促されるように，草村や岩場に場所を焦点化して出合わせたことが有効であったと考える。

国語科学習の＜ふくおかプラン＞

1　自他の考えを尊重し，言語を駆使する国語科学習を

1　国語科学習が担う役割・立場

書籍，新聞，ラジオ，テレビなどのこれまでの情報手段に加えて，今日ではコンピュータ，高度情報通信網，衛星放送などの新しい情報手段が急速に発達している。また，経済や交通機関，通信の急速な発展に伴い，様々な分野で国際化が進展している。このような時代を背景として，小学校学習指導要領「国語科」の目標に新たに「伝え合う力を高める」ことが位置づけられた。つまり，情報化・国際化が進展する２１世紀を生きていく子供たちには，単なる言語技術としての言葉のやりとりではなく，心と心の交流を図り，豊かな人間関係を培っていく資質・能力が求められているのである。それは，国語科が言語の教育としての立場を重視して，究極的にはコミュニケーションや人間関係をつくり出していく日常的に生きて働く力をめざしていることを意味している。しかしながら，言語の「伝達」の機能だけに着目してはならない。伝え合うためには，相手に応じた伝え合う内容を作り出す力が必要だからである。それが，「思考」の機能である。考えて聞く，考えて話す，考えて読む，考えて書くなど言葉を通して思考する力を高めていくのである。国語科はこの「思考」の機能に重点を置きながら，「伝達」の機能を高めていくのである。そこで，本校国語科部では，相手の考えをより受け止めたり自分の考えを発信したりしていく創造性として言葉の力を高めていこうとしている。そのために，他者の考えや思いを正確に理解する力，自分の思いや考えを適切に表現していく力を重視する。この「思考」「伝達」を重視した創造性に重点をおくことで，他者とのかかわりを大事にした社会性が培われ，見知らぬ人間同士を結びつけ，新たな人間関係を作り出す力にまで高めていくことができる。

つまり，２１世紀を生きる豊かな人間の育成をめざす＜ふくおかプラン＞における国語科学習の役割・立場とは，言語生活や言語文化を学習の対象とし，言葉のもつ本質的機能としての「伝達」「思考」の機能を重視した創造性の高まりに重点を置きつつも最終的には日常生活において生きて働く伝え合う力としての社会性を育てていくことである。

表１　国語科学習で特に大切にする資質・能力

資質・能力			低学年	中学年	高学年
主体性			○　事柄の順序に気をつけて話したり書いたりして，わかりやすく伝えようとする。	○　筋道を立てて話したり書いたりして，適切に言葉を使おうとする。	○　的確に話したり書いたりして，自分の言葉に責任をもとうとする。
	創造性	思考にかかわる	○　易しい読み物を楽しみながら進んで読む。 ○　必要な事柄を見つけたり集めたりする。 ○　目的を考えて想像して，わかったこと，経験したことを表す。	○　目的に応じた本を考えて選び読む。 ○　必要な情報を選び，順序や軽重を考え整理する。 ○　目的達成のために感想を付加し，調べたこと思ったことをまとめて表す。	○　目的に応じて適切な文献を読み，考えを広げ深める。 ○　必要な情報を選び，全体から考えて観点ごとに整理する。 ○　経験や知識と比べ自分の立場から目的に適する方法を考えて情報を作る。
		伝達にかかわる	○　事柄の順序を考えながら，相手にわかるように話したり書いたりする。 ○　文の続き方を考えながら書きまとめる。 ○　順序を考え情報の大体を聞き・読み取る。	○　区切りや中心を考えて筋道を立てて適切に話したり書いたりする。 ○　調べたことに見出しや目次をつけて書きまとめる。 ○　より速く正確に中心的情報を聞き，読み取る。	○　主張点と根拠が明確に表れる構成を考えて話したり書いたりする。 ○　必要に応じて再活用できるように工夫して書きまとめる。 ○　より速く正確に主題や要旨を考えながら聞き・読み取る。
	社会性		○　相手の言葉で大事なところに気をつけて話し合う。	○　相手の話とのちがいやよさを感じながら話し合う。	○　相手の立場や気持ちをつかみながら話し合う。

2　自他の考えを尊重し，言語を駆使する国語科学習とは

自他の考えを尊重し，言語を駆使するとは，言葉を用いている人（自分や相手）の立場や言葉で表現され込められている願いや考えなどを大事にして，話したり聞いたり書いたり読んだりすることである。互いの身になって分かり合おうとする目的をもって，どんな方法で効果的に言葉を使うのか意図的に立ち止まらせ，言語情報を正確に理解したり適切に表現したりしながら言葉を使いこなす力を高めていくのである。つまり，自他の考えを尊重し，言語を駆使する国語科学習とは，以上のように目的的に，効果的に言葉を選んだり使ったりしながら他者の考えを共有しつつ自己の考えをつくり出す学習である。その過程の中で自分の言葉に責任をもつ主体性やわかるまで言葉にこだわったり，納得のいく言葉を選択したりしながら相手を大切にしようという社会性が育っていくと考える。このような創造性，主体性，社会性を育んでいくことは，既存の言語文化を継承しながら情報活用力として適用範囲を広げていき，他教科やあらつ学習との連動を図っていく力にすることができる。

国語科学習では，次のような３特性が育った子供の姿をめざしている。

◎　様々な言語情報から自分の目的に合わせて，できるだけ速く選択，処理して必要な情報を効果的に取り入れ自分の思いや考えをつくり出していくことができる子供　（創造性）

○　言葉との出合いから課題をとらえ，解決の手順や見通しをもって情報を収集したり，自分の考えを表現したりして，自分の言葉に責任をもって的確に話したり書いたりできる子供　（主体性）

○　互いに理解し合うために，自他の立場や考えを大切にして言葉によるやりとりを行い，よりよい人間関係を築いていくことができる子供　（社会性）

そのためには，表１にまとめた資質・能力を特に大切にし，系統的に高めていかなければならない。

3　国語科学習における学びの連動の考え方

▼　あらつ学習との連動についての考え方

あらつ学習でもコミュニケーション力は大切な資質・能力と位置づけている。しかし，あらつ学習は，子供の切実な求めを実現する過程で，自らがもつ資質や能力を最大限に発揮しながら知の総合化を図っていく学習であり，「伝え合う力」そのものを高めていくことに目標をおいた学習ではない。そこで，図１のように国語科とあらつ学習の間で言語活動が繰り返し行われ，着実に言語能力が身に付くように連動を図っていく。連動の方向性は追究内容より追究方法の連動を重視する。教材文の内容が似ているという追究内容の連動は，言語能力として高まりにくいからである。具体的には，７月のあらつ学習「夏休み自由研究」を通して，「自由研究を全校に発信していくための効果的な方法が知りたい」という求めを生み出し，９月国語科単元「めざせプレゼンター」を立ち上げて効果的な発表方法を追究していく連動を図る。また，１１月あらつ単元「武道の世界」においては，インタビューが必要になると想定される。そこで，国語科単元「ぼくも，私もインタビュー名人！」を同時並行的に位置づけ，国語科学習の技能や学び方があらつ学習で生かされるように配列して連動を図る。

つまり，国語科学習とあらつ学習との連動は，追究方法に重点をおいて次の２点から考えていく。

①　国語科学習の技能・学び方が活用される連動

国語科学習で身につけた言語能力があらつ学習で活用され，国語科の知が総合化されて日常生活で生きて働く力になるように，国語科単元のあとに身につけた言語能力を必要とするあらつ学習単元を位置づける。

②　あらつ学習の求めを生かす連動

あらつ学習で言語能力にかかわる追究方法（例えば，依頼状や礼状の書き方，インタビューの仕方や改まった話し方など）の求めが想定される場合，同時期にその内容の国語科単元を立ち上げるようにしておく。

（平島　健二）

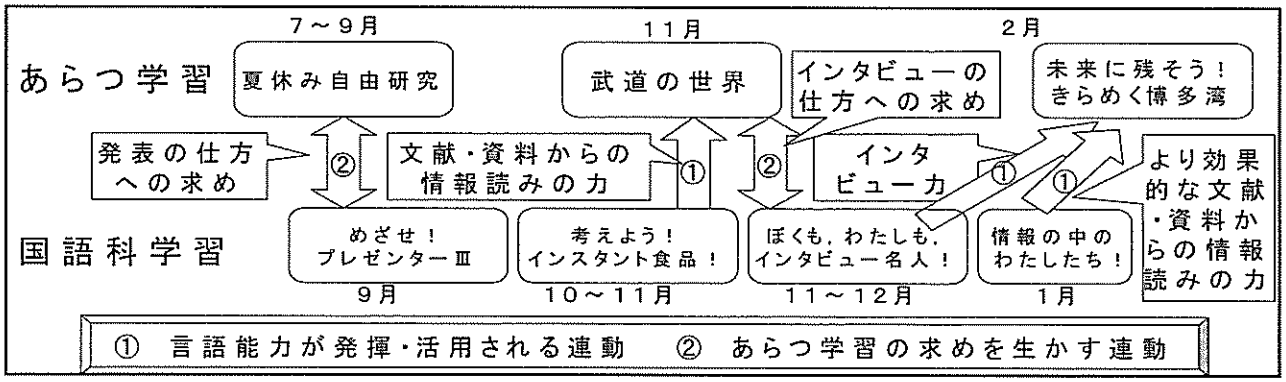


図１　５年生におけるあらつ学習との連動例

2　自ら課題を発展させる情報読書プラン

国語科部　平　島　健　二

1　学習プランの考え方

▼　自ら課題を発展させる情報読書とは

課題とは，その文章を通して解決しようとするものである。それは，書き手が論理の筋道を立てて考えや意見を主張した文章に出合ったときに，自分の生活や既有の知識とのズレや他者との読み方のちがいから書き手の論理を検討し直したいという読み手の気がかりや疑問が高まったものである。自ら課題を発展させるとは，最初に出合った文章から子供の好奇心や問題意識が刺激され「何かを知りたい」という課題をもち，解決する過程において自分の立場からもっとくわしい答えを求める課題に高まったり，新たな課題に変容したりすることである。情報読書とは，あることを知らせようとして提供された情報を，そのことを知ろうとして読んだり，読み手が書き手の意図とは関係なしに，自分の立場から何かを知るために情報を得ようとして読んだりする行為のことである。前者の場合は，提供された情報を，提供者の意図通りに受け取る読み方である。この場合，書き手はどのような情報をどのような意図のもとに情報を提供しているかが読みの対象になる。後者の場合は，文献その他の資料から自分にとっての価値ある情報を発見する読み方である。この場合，読み手の課題に対する応えとなる情報が読みの対象になる。つまり，提供された情報を追究する課題と自分の立場から追究しようとする課題が情報読書の条件となる。いずれの場合も，状況との関係で何らかの情報としての価値を見出さなければならない。そこで，自ら課題を発展させる情報読書とは，筆者の考えを深める課題をもって共通教材を読み，書き手の意図通りに読み取りつつも自分の立場から新たな課題（発展課題）を生み出し，第二教材へ展開して価値ある情報を発見する読書活動である。こうした情報読書によって，自他の考えを尊重する目的的で効果的な読みを展開していくことができると考える。

▼　自ら課題を発展させる情報読書プランとは

課題が発展する情報読書活動を成立させ，目的的で効果的な読み方が身に付くように，「気づく」「深める」「広げる」の３段階で構成し，支援していく。具体的には，「気づく」段階で共通教材と出合い，読書課題をとらえる場，「深める」段階で読書課題をもとに共通教材の筆者の意図を読み取る場，「広げる」段階で自分の立場から課題を発展させ，価値ある教材を選択し，必要な情報を読み取り，整理しまとめる場を位置づける。つまり，自ら課題を発展させる情報読書プランとは，共通教材の読みを通して読書課題を新たに変容させ，第二教材から情報を選択・収集・構成して自己の考えを高めていく学習である。それは，読みの高まりを感じ充実感・満足感を味わっていく学習でもある。この国語科における創造性，社会性を中核に主体性も高めていくようにする。

2　学習プランの具体的構想

▼　教材化について

自ら課題を発展させる内容を発達段階を考慮しながら，共通教材から読書課題さらに発展課題が生まれるような教材を選定していく。具体的には表２のように，低学年では共通教材で事柄に関心をもち，第二教材で事例の種類を広げたり量を豊富にしたりする。中学年では事例を正しく知りたいという思いから共通教材を読み，第二教材で事例をよりくわしくしていく。高学年では筆者の述べた根拠から要旨や意図を読み取り，結論を補う事例や別の見解をもつ第二教材を読み考えを深め広げていく。

以上のような考え方をもとに教材を選定し，子供の実態から経験や既有の知識とのずれ，友達との読みの違い，教材と教材との内容の違いなどを検討し，教材との出合わせ方，活動を工夫し教材化を図っていく。

表２　教材化について

	読書課題の内容	共通教材について	発展課題の内容	第二教材について
低学年	事柄を知ろうとする課題（例）何かな？	興味が高まる事柄が説明された文章	内容の事例を増やす課題（例）他にはないのかな？	共通教材で述べられた事例の種類や量が豊富な文章
中学年	事例を正しく知ろうとする課題（例）それはどうしてだろう？	好奇心が高まるような事例が論理的に述べられた文章	事例をくわしくしていく課題（例）もっとよく知りたいな？	共通教材の事例がくわしく説明されている文章
高学年	結論の根拠を問う課題（例）どうしてそんなことが言えるの？	要旨が論理的に述べられ，筆者の意見が読み取れる文章	筆者の意図に応じるための課題（例）筆者の気持ちに応えるにはどうしたらいいのかな？	共通教材の結論を補う事例や別の見解が述べられている文章

▼ 基本的な活動構成と支援

自ら課題を発展させる情報読書活動を中核とした学習を基本的に図２のように「つかむ」，「深める」，「広げる（広げ深める）」の３段階で構成する。

具体的には，「つかむ」段階では，共通教材に出合い，読書課題をとらえることに重点を置く。そのための中心的活動としては，題名や結論部分から気がかりや疑問をもち，全文を通読する活動である。具体的な支援として，読書課題を生み出すために，子供の実態（既有の経験や知識など）を把握し，教材を表２のような内容と照らして選定する。「深める」段階では，読書課題をもとに書き手の論理から要旨や意図を正しく読み取った上で，筆者の考えをもっとよくわかりたいという求めから課題を発展させることに重点を置く。そのための中心的活動としては読書課題をもとに読み深める活動である。具体的な支援は，筆者を意識させた読み，経験，友達，情報のズレが起きる活動を仕組む。特に，情報のズレを起こさせるために補助教材を提示する。

「広げる」段階では，必要な情報を選び，自分の考えを作っていくことに重点を置く。そのための中心的活動としては，発展課題をもとに第二教材を選択し解決を図る読書活動である。具体的には，文章に見当をつける活動，キーワードによる情報検索，選択活動を行う。そのために，図書やブックリスト，目次集などの準備をする。

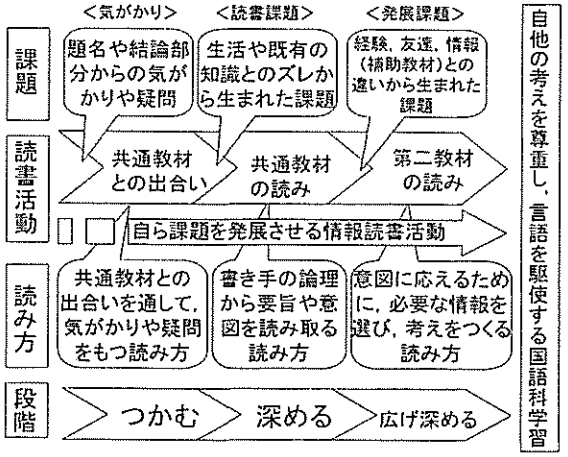


図２　自ら課題を発展させる情報読書の活動構成

▼ 年間計画作成の基本的な考え方

国語科は，「話すこと・聞くこと」，「書くこと」，「読むこと」の指導を意図的・計画的かつ調和的に行っていくものである。そのために，目標・内容などの複数学年の表示にもとづいて，螺旋的・反復的な学習を設定していく。螺旋的とは２学年の間で繰り返されたり，次学年で広がったり深まったりするように，反復的とは帯学習のように回を重ね，基礎的な事項が定着し高まったりしていくことである。また，具体的な言語活動を通してしっかりと言語能力を身につけるための言語活動例の意図にもとづいて，年間計画を作成していく。

3　指導の実際

第５学年　単元
情報の中のわたしたち！
～わたしたちにとって，情報とは？～

▼ 単元の考え方

本単元は，文章の述べ方や筆者のものの見方，考え方を読み取るとともにさらに筆者の意図に応えたいという思いを課題にして第二教材を通して，考えを広げ深め書きまとめていくことをねらっている。具体的には，①共通教材から要旨や文章構成，表現の工夫を読み取ること，②共通教材を通して発展課題をもつこと，③第二教材を選択し，主体的に読むこと，④自分の立場や考えをはっきりさせながら，筆者の願い・思いに応えるために第二図書を読むこと，⑤感想を深め，発表することが主な学習内容である。共通教材は，身近にある日常的事柄を見直し，筆者がそれに意味づけをしていくという論の展開で仕組まれている。しかし，子供たちは情報社会は便利だとは思っているが大変だとは思っていない。そこのズレから読書課題が生まれる可能性がある。また，「創造的な仕事」という部分は，それに結びつく事例が示されておらず，子供たちにとって実感がわきにくいところである。そこで，「創造的な仕事」は自分たちにも関係があるという文章に出合わせることで読書課題を発展させ，追究していくことができる。そして，「筆者の願い・思いに応えたい」という課題を追究し考えを作っていく第二教材の読みにつなげることができる。本単元で取り上げる共通教材と第二教材は，要旨や意図をとらえた上で筆者の願い・思いに応えるための発展課題をとらえ，目的的に，効果的に情報を活用し自分の考えを作っていく読み方を身につけていく上で適した教材である。

▼ 単元の目標

○　「情報社会で生きていくために」で筆者の意図をとらえた上で，「情報」について関心をもち，第二教材を選択し必要な情報を集め，筆者の願い・思いに応える考えをつくることができる。　（創造性）

○「情報社会で生きていくために」を読み，筆者の意図を明らかにしようとする読書課題をとらえ，追究する中で，筆者のメッセージに応えようとする自分の考えをつくり自分の言葉で表すことができる。　（主体性）

○　筆者の考えや意図に対して，より確かに分かろうとしたり，自分なりに応えていこうとしたりすることができる。　（社会性）

▼ 学習の流れと考察

第１次：１～３／15時

「情報社会で生きていくために」に出合い，筆者の意図に対する気がかりや疑問から読書課題をもつ。

①気がかりや疑問をもって，共通教材を読む。
②感想をもとに読書課題をもつ。

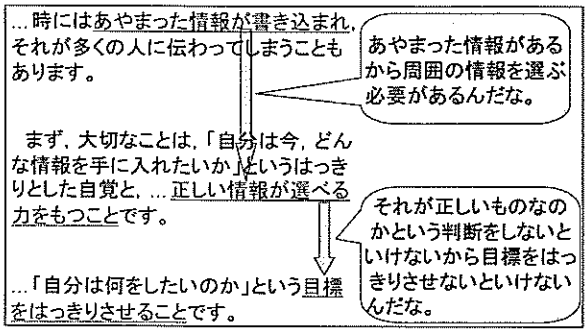


写真１　気になることがあります！

第２次：４～９／15時

読書課題をもとに，筆者の要旨や意図を読み取ることができる。

①筆者の考えとその根拠を関係づけて読む。
②事例を経験に重ねながら読む。
③読書課題の解決を図り，筆者の要旨や意図を読み取る。



資料２　K児の「情報選択力」についての読み取り

「最近の若い人は，情報を多く使い方を知っているのに，仕事や生活で困ったり，情報を整理したりする能力が低いと言われる。
（略）
情報社会の中には，人が集まり，情報が多くの人にとって必要なものばかりではない。
だから，情報を選ぶ力が必要になってくる。
（略）
情報社会で生きていくためには，問題解決力，情報活用力，情報発信力，通信手段活用力の３つの力が必要だ。
これからの社会は，変化が激しいと言われる。
わが社会で生きていくためには，仕事の仕方をかえていかなければならない。
だから，情報を選ぶ力が必要になってくる。」

資料５　情報についての文章（教師自作）

第１次は，共通教材との出合いを通して，気がかりや疑問から読書課題をもつことをねらいとしている。子供たちは，資料１のK児のように情報社会の現実に驚き，情報社会を生きていけるかということに気がかりをもつことができた。そこで，情報社会について，気がかりをもとに話し合いを進めた。

「情報社会で生きていくために」を読んで思ったことがあります。私はコンピュータのインターネットをよく使います。だれでも使えて便利だと思っていたけど，「情報社会を生きていくために欠かせない力が必要」と書いてあったから驚きました。

資料１　K児の初発の感想

その中で，「今まで，今の時代は電話などもあるし，何も大変なことはないと思っていたけれど，大変な気がしてきた。」や「情報発信力は，何を発信するんだろう。発信しなくても情報を手に入れることはできると思う。」など，情報社会に対する疑問や３つの力に対する疑問が出てきた。そして，情報社会に対する課題と筆者の述べている３つの力に対する課題「本当に情報社会は，大変な時代なのだろうか。筆者のいう３つの力は必要なのだろうか。」が生まれた。

考察１

資料１のように，情報社会は「だれにでも便利」という経験上の思いと文章の「力が必要」というズレを起こさせることによって，読書課題を生み出すことができた。

第２次は，読書課題をもとに要旨や筆者の意図を読み取り，さらに課題を筆者の意図に応えようと発展させることをねらいとしている。そこで，読書課題から「情報社会がどのように書かれているか，何を根拠に３つの力が必要と書かれているか」という筆者を想定した観点から読みを行った。その過程で，資料２のように情報社会で起きる事例と筆者の考えとを関係づけ，読書課題の解決を図った。その結果，資料４のような感想を生み出すことができた。

ゲームを買うときに広告で何があるのか，いくらするのかを調べていったので迷わずに買うことができた。身近なところでも情報選択力を使っていると言うことを知って，筆者がいうように情報選択力は大事だなあと思いました。

資料３　K児の経験と重ねた読み取り

筆者は，情報手段が多くなったり，国際化したりして，情報があふれている今の時代を生きていくには情報をうまく使えるようにならなければいけないといっていることがわかりました。そのために，情報選択力，情報発信力，通信手段活用力の３つの力が必要だということがよくわかりました。

資料４　K児の情報社会と筆者の考えの感想

しかし，子供たちは「創造的な仕事」ということばから実感として今の問題としては受け止めてはいなかった。そこで，資料５のような情報についての文章に出合わせ，３つの力の身につけ方への課題へと発展していった。

考察２

読書課題を筆者を想定した観点に具体化したことによって，資料２のように筆者の意見と事実の述べ方に着目し，筆者の考

筆者のいっている３つの力を身につけないと将来困ってしまうなあと不安になりました。筆者は「大人になってからでは間に合わないよ」と教えてくれていたんだなあと思います。私はその筆者の気持ちに応えるためにもこの３つの力を身につけたいです。だから，どうしたら身につけられるのかを調べたいです。

資料６　情報についての文章のＫ児の感想

第３次：10～15／15時

課題を発展させ，課題に応じて第二教材を選択し，情報を収集して筆者の願い・思いに応える考えをつくり書きまとめる。

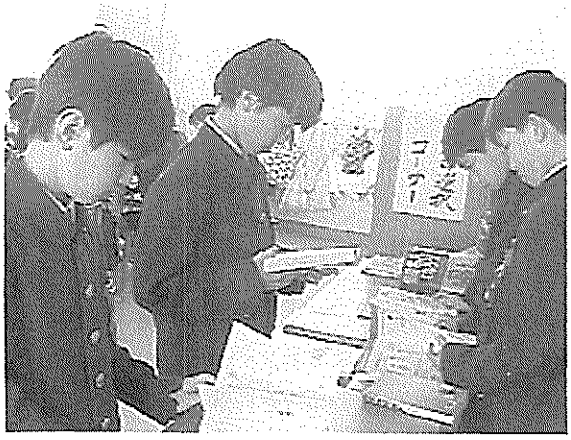


写真２　図書選択の様子

題名や目次から見当をつけると第二図書を２，３冊にしぼりこむことができました。簡単に速く見つけることができました。次にキーワードで探してみると，速くたくさん調べることができました。それは，キーワードを自分の発展課題で考えて作ったから自分にあった追究ができたと思います。筆者の考えがよくわかったと思います。

資料８　Ｋ児の学習の仕方の感想（一部）

（略）筆者がいうように三つの力を身につけておくと将来困らないと思います。

また，筆者の大人になってからでは，間に合わないという気持ちは，わたしたちを大切に考えてくれているんだなあと思います。（略）その筆者の気持ちに応えていくためにこの通信手段活用力，情報選択力，情報収集力を必ず身につけたいです。

資料９　Ｋ児のふりかえりの書きまとめ

えを読み取り，その過程で自分の経験と重ねながら，資料３のように筆者の考えを実感をもってとらえることができた。その結果，資料４のように今の時代の特徴をとらえ，筆者の結論を読み深めている。気がかりから読書課題，さらに筆者を想定した観点に具体化したことは，提供された情報を，提供者の意図通りに受け取る読み方を高めるのに有効である。

また，事例を通して筆者の結論・意図を読み取った上で，「創造的な仕事」が自分たちにも関係がある（資料５）という文章に出合わせることによって，資料６のように将来の自分への不安を気がかりとして，読書課題を発展させた「筆者の気持ちに応えるために３つの力を身につける方法を調べよう」という課題へ発展させることができた。

第３次は，発展課題をもとに第二教材を選択し，情報を収集して筆者の願い・思いに応える考えをつくり書きまとめることをねらいとしている。そのためにまず，題名と目次から自分の課題が解決できそうな文章に見当をつけて，写真２のように第二図書を図書選択コーナーに取りにいき，キーワードを探して読んでいった。さらに，自分が選んだ第二教材から必要な情報を読み取り，自分の考えをつくり書きまとめていった。

＜情報選択力＞
・情報を整理する。（インデックス，仲間わけ）
・必要かどうか考える。
＜情報発信力＞
・情報の使い方を考える。
・相手のことを考える。
＜通信手段活用力＞
・自分や相手にあわせて使うものを考える。

資料７　第二図書を調べたＫ児の読み

考察３

題名と目次から内容を予想し，自分に必要な文章に見当をつける読み方によって，資料８のように自分の課題に合った第二教材に見当をつけ，資料７のように自分に必要な情報を読み取っている。資料９のＫ児の第二教材を読んだ書きまとめは，単に書かれている内容を理解しただけでなく，筆者の意図（気持ち）にまで思いをもって受け止め，その筆者の気持ちに応えようと将来の自分の姿を考えている。

このように課題を発展させ，課題に合わせた読み方の支援を行ったことは，文献その他の資料に，自分にとっての価値ある情報を発見する読み方，目的的効果的な読みの力（創造性）を高めながら，相手（筆者）の願い・思いを受け止め，尊重する社会性を育てることに有効である。と同時に自己追究の活動展開において主体性も育まれていると考えている。

全体考察

気がかりや疑問をもとに課題を発展させる情報読書の活動構成を図り，題名・目次による選択方法やキーワードによる情報検索の読み方など自己追究の活動を位置づけたことは，自他の思いを尊重した目的的な姿や言語を駆使する効果的な姿を見ることができた。また，結論と事例から筆者の意見がわかり，それを補えるような教材を選定し，出合わせ方や取り上げ方などの教材化の工夫をしたことは，既有の知識や友達との読みの違いなどから課題を発展させることができた。以上のことから，活動構成や教材化の工夫が自他の思いを尊重し言語を駆使する上で有効であったと考える。このことは，他者の考えを共有しつつ自己の考えをつくり出す創造性と社会性を，その過程において主体性を育んでいたと考える。課題は，他領域や物語文を対象にした読書活動の構想や具体的指導の在り方を究明していきたい。

体育科学習の＜ふくおかプラン＞

1　自ら運動を構想する力を育む体育科学習を

1　体育科学習が担う役割・立場

現在，教育課程で求められていることは，知・徳・体の調和であり，特に体育科では，「たくましく豊かに生きるために生涯にわたって運動に親しむ子供を育てていくこと」である。つまり，身体面のみではなく知識面・情意面もバランスよく兼ね備えた人間の育成である。そこで，ふくおかプランにおける体育科学習の役割・立場は，「豊かな運動の体験を通して運動による心身への効果や健康が運動と密接に関連していることを体験的に捉えながら，発達段階に応じた価値ある動きを獲得し，生涯にわたって積極的に運動にかかわり続けていく資質・能力を育む」ことである。つまり，体育科は，たくましく生きるための健康・体力を育むという面から，運動に応じた動きや場，ルール，作戦などをつくり出す運動を構想する構想力の創造性を中心に育てる教科である，また，運動への目的意識・課題意識をもって自ら行おうとする主体性，友達と協調して運動を楽しむ社会的態度を中心とした社会性の育ちを支える教科であり，家庭や地域社会における実践化をねらっていく教科である

2　自ら運動を構想する力を育む体育科学習とは

自ら運動を構想するとは，子供が運動の特性を味わい，楽しんでいく過程において発揮する運動へのアプローチの仕方である。具体的には次の２つのアプローチの仕方を考えている。

① 自らが対峙している運動の特性を味わえるように，自他の動きや戦術を工夫するアプローチの仕方。

② 今もっている自他の動きや作戦で運動の特性を味わえるように，運動を構成しているルールや場を工夫するアプローチの仕方である。

そして，自ら運動を構想する力を育む体育科学習とは，運動を構成しているルールや場を工夫したり，自他の動きや戦術能力（作戦をつくり出す力）を高めたりして，運動の特性を広げる体験活動を中核に表１にあるような創造性を高めていく子供主体の学習である。また，その高まりの評価を表１を用い，ルールや場，作戦を構想して運動の特性を味わったり，個人や集団の動きの基盤となる調整力や戦術能力を高めたりする学習を展開し，創造性，すなわち運動を構想する力の高まりをねらう。

表１　体育科学習で特に大切にする資質・能力

学年		低学年	中学年	高学年
主体性	題目意標識課	多様な運動遊びを体験し，自分の今できる動きで，活動を工夫し自ら運動を楽しもうとする。	自分の身に付けるべき価値ある動きの見通しをもち運動の楽しさを味わい繰り返し行おうとする。	見通しをもって運動を行い，自己の動きを高め運動の楽しさや喜びを味わい愛好しようとする。
創造性	調身整体力	運動遊びの基礎となる動きを体験し，自己の体を操作する動きを身に付けることができる。	身体の基本的な動きや運動の基礎となる動きを捉え，動きを結び付け広げることができる。	運動の基本的な技能を身に付け一連の動きにつくりかえ，発揮し体力を高めることができる。
	技個能人	基礎となる走，跳，投，泳等の動きを身に付けることができる。	多様な動きや組み合わせた動きを身に付けることができる。	流れのある動きを身に付け，スピードを伴った動きができる。
	構運想動力	運動遊びがより楽しくなるように，みんなできまりを考え，活動を工夫することができる。	基本となる動きや運動の楽しさから課題を設定し，ルール・場を選択したり工夫したりできる。	連続する動きの分析から課題を設定し，ルール・場を多面的に工夫することができる。
	技集能団	２人組程度の動きでのタイミングを合わせたりはずしたりする。	４人程度の動きで空間を意識した動きをつくり出すことができる	小集団で空間をゲームに利用する流れのある動きができる。
	能戦力術	ボール・身体・ゴール空間の認識と相手と味方の関係を捉える。	簡単な攻防の方法を身に付け，ゲームの全体像をつかむ。	時間的・空間的にゲームを捉えチームの動きを合理的につくる。
社会性	社態会度的	約束を決め誰とでも仲よく運動遊びを行い互いに遊びの方法を教え合ったり助け合ったりできる。	運動のルールやマナーを守り，互いのよさを認め励まし合ったり協力し合ったりして運動できる。	誰にも公正な態度で接し，互いに励まし合い，協力し合いながら気持ちを合わせ運動できる。

そこで自ら運動にかかわる体育科学習では，次のような子供の姿をめざしている。

◎　運動の特性に応じて課題を捉え，自ら場やルールを工夫したり，再構成したりして自他の動きや戦術を高め，運動の特性を味わうことができる子供
（創造性）

○　運動に対する自分なりの求めや関心をもち，課題達成に向かって友達と協力して意欲的に繰り返し追究し，身体活動の直接的体験を通して，積極的に運動に親しみ，自らの体力を向上し生活に生かしていく子供　（主体性・社会性）

そのためには，表１にまとめた資質・能力を特に大切にし，低･中･高の各学年で高めていかなければならない。

3　体育科学習における学びの連動の考え方

▼　体育科カリキュラムづくりの視点

体育科におけるカリキュラムをつくっていく場合，子供たちが自ら運動を構想する力を育むような学びの展開が必然的に起きるように編成しなければならない。

そこで次のような視点をもってカリキュラムをつくっていくこととする。

① 季節や保健安全・体育的行事を中心とした学校行事とのかかわりから運動学習と保健学習の適時性を考え，内容選択・配列を行う。また，子供の実態を大切にし，重点化を行い，「各学年で指導する内容」と「いずれかの学年で指導する内容」について整理する。

② 運動学習の個人種目については，低学年では，運動自体がもつ多様で巧みな体の操作を伴う運動を体験できること。中学年では自分のもっている動きで運動を楽しんだり，より高度な身体操作を身に付けていくこと。高学年になるにつれて，動きの視点（時間的・空間的視点）をもとに動きを分析して課題を捉え，場を工夫しながら価値ある動きを身に付ける運動構想力が高まるように配列する。

③ 運動学習の集団種目（ゲーム・ボール運動）については，ゲームの構造，ボール操作，相手意識・味方意識を含めた戦術能力の高まりを考慮して低学年では，ボール，身体，ゴール空間などの基礎的な運動感覚が身に付くこと。中学年では，３人程度のチーム戦術ができたり，簡単なゲームの記録と分析ができたりすること。高学年では，コート空間や攻・守の機能と役割の認識並びにゲームをチームの課題にそって観察・分析できるようになることを考え，運動構想力が高まるように攻守交代，攻守分離，攻守混合のボールゲームの低・中・高学年や年間の段階的な配列をする。

▼　総合の学びとの連動の考え方

○体育科学習とあらつ学習の連動については，次のような連動が考えられる。

① 体育科学習で獲得した運動の仕組みを分析的に捉えもった自己の運動課題を解決するために，強い自己追究が繰り返されていく運動構想力が，あとに配列されるあらつ学習の「学び」に発揮・活用する連動をし，「知」の総合化・実践化が図られる。

→「学び」が双方に高まる連動，「資質・能力」の連動

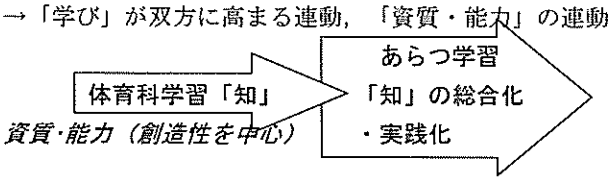


図２　体育科学習→あらつ学習連動

② あらつ学習の追究課題が「健康」への憧れや気がかりから立ち上がり，体育科の保健領域や体つくり運動，ゲーム・ボール運動領域の学習を同時期に展開し，双方向の追究・発展が望めること。そのために相互補完的にその「知」や「学び」が高まる。

→追究課題・方法の連動

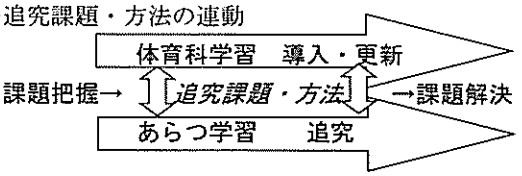


図３　体育科学習←→あらつ学習独立連動

○他に特別活動における保健安全・体育的行事との連動もカリキュラム上に構想していく。

① 体育科の運動学習・保健学習で身につけた「技能」「知」や「資質・能力」が発展的に連動し，体育的行事の中で発揮・活用できる場合や保健的行事で得た体験やデータが運動学習・保健学習での「健康」「保健」の課題意識と結びつくことで連動し，「知」「学び」が発揮・活用できる学習が考えられる。

② 運動学習・保健学習での追究課題が，体育的行事の運動内容や目標と重なるような場合は，体育科学習でスタートし，追究段階で連動したり，更新段階で連動したりする体育的行事の追究課題・内容による融合をする形で連動をすることが考えられる。

（岩城　一磨　稲津　一徳）

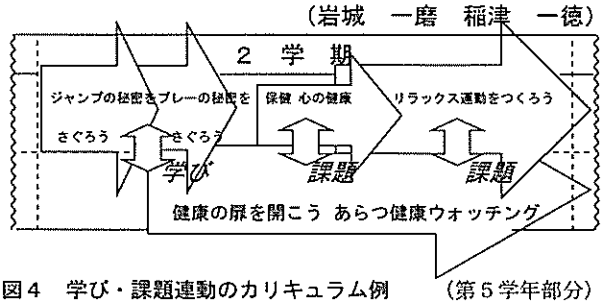


図４　学び・課題連動のカリキュラム例　（第５学年部分）

2 ゲーム・ボール運動の楽しさが広がる体育科学習プラン

体育科部　稲　津　一　徳

1　学習プランの考え方

▼ゲーム・ボール運動の楽しさが広がるとは

ゲーム・ボール運動には，それぞれのルール・場（独自性）に基づく固有の楽しさがあるが，どのゲーム・ボール運動にも生かすことのできる戦術能力や集団技能（共通性）を獲得・発揮していくことで，競い合う楽しさはさらに拡大する。

ゲーム・ボール運動の楽しさが広がるとは，そのゲーム・ボール運動固有の楽しさを追究する目的のもと，楽しさにつながるルール・場（独自性）と中心となる戦術能力や集団技能（共通性）を追究課題と捉え，課題解決を通して相互に高めながら，他のゲーム・ボール運動にも高めたルール・場の構想力や戦術能力，集団技能を適応させ，競争の欲求を充足させていくことである。

▼　ゲーム・ボール運動の楽しさが広がる学習プランとは

ゲーム・ボール運動の独自性と共通性を課題と捉え，課題解決を通してルール・場の構想力や戦術能力，集団技能といった体育科学習でねらう創造性を年間で高めていけるように，次の２点から学習プランを構想する。

○ゲーム・ボール運動領域の教材化とあらつ学習との連動の在り方

○ルール・場の構想力と戦術能力，集団技能を相互に高める活動構成

本年度は，特に１点目の教材化と連動の在り方に研究の重点を置き，以下のような基本的な考え方で体育科の学習プランを具体化していく。

多様なゲーム・ボール運動の種目のなかから，ルール・場の構想力，戦術能力，集団技能の高まりを想定して種目を選択し，配列する。そして，健康への憧れや気がかりから自分の健康プランの在り方を追究するあらつ学習を同時期に展開する。このことで，体育科学習への強い求めを喚起するとともに，獲得した創造性をあらつ学習に発揮していく連動を図る。また，あらつ学習の側からは，追究内容・方法の深まりを保障していく。

2　学習プランの具体的構想

▼　ゲーム･ボール運動の教材化

まず，ねらいとする戦術能力・集団技能の高まりに応じたゲーム形態の割り出しを表１のように行い，ゲーム・ボール運動の素材となる種目を選定し，年間計画に配

表２　ゲーム・ボール運動の教材化の構想

学年	戦術能力・集団技能	戦術能力・集団技能に基づくゲーム形態			ルール・場の構想力
１年	的や相手に応じて２人で動きを合わせて同時に攻める。	攻撃交代（的当て型）	→	攻守分離（投補型）	競争の楽しさの広がりを目的に得点方法を中心に操作する。
２年	相手の動きに合わせて２人で動きを合わせたりずらしたりして攻めたり守ったりする。	部分攻守混合（陣取り型）	→	攻守混合（投補型）（蹴球ゴール型）	ルール・場と競争の楽しさとのつながりに気付き，人数や得点方法を中心に操作する。
３年	空いている味方や空間を意識し，パスをしながら攻めたり守ったりする。	攻守交代（ベースボール型）	→	攻守混合（陣取りゴール型）（投補ゴール型）	ゲーム独自の動きや楽しさを広げる目的から用具や場を選択したり，工夫したりする。
４年	空いている味方や空間をねらって，パスを回しながら攻める。攻守の役割を意識する。	攻守分離（対人ネット型）	→	攻守混合（陣取りゴール型）（蹴球ゴール型）	ゲーム独自の動きや楽しさを広げる目的からルールや場を選択したり，工夫したりする。
５年	空いている味方や空間をつくって攻めたり，相手を分担して守ったりする。	攻守分離（集団ネット型）	→	攻守混合（投補ゴール型）	チームの作戦や動きの課題を解決する目的から，ルールや場を工夫する。
６年	攻守の切り替えをより素早くし，空いている味方や空間をつくって攻めたり，相手や空間を分担して守ったりする。	攻守混合（投補ゴール型）	→	攻守混合（蹴球ゴール型）	チームの作戦や動きの課題を解決する目的から，計画的にルールや場を工夫する。

列する。さらに，ねらいとするルール・場の構想力の視点を加え，子供たちに提示するゲーム・ボール運動を教材化する。

▼ あらつ学習との連動を位置づけた年間構想

第４学年の体育科学習では，戦術能力・集団技能，ルール・場の構想力の高まりを表２のように構想し，教材を位置づける。さらに，健康への憧れから，自己の健康を見つめ，自分なりの健康プランを追究し，生活実践をしていくあらつ学習をオリジナルバウンドゲームと同時期に展開する。オリジナルバウンドゲームについては，少人数で，簡単な技能を使って楽しめるように教材化し，活用を投げかけることで，健康プランへ位置づける楽しく手軽にできる運動として，子供の追究内容への強い求めをもったゲーム学習を構想する。

▼ 運動構想力を育むゲームの活動構成

戦術能力・集団技能，ルール・場の構想力が高まる活動構成を次のように考える。

① ゲームのルールや場を操作した試しの比較ゲームから，そのゲームの戦術や集団技能にかかわる楽しさをさらに味わうことを目的としてもち，自分たちの戦術能力集団技能，ルール・場の見直しを追究課題として捉える比較・交流活動（つかむ段階）

② 今もっている戦術能力や集団技能からルール・場を見直し，自分たちの求める楽しさにつながるルール・場となっているかを戦術能力・集団技能を視点に評価する活動

③ 工夫したルール・場で自分たちの作戦を立て，課題解決ゲームによる練習と高めた戦術能力・集団技能を兄弟チームと対抗戦で試行する活動（つくる段階）

④ 工夫したルール・場で高めた戦術能力・集団技能をゲーム大会において多様なチームを相手に発揮する実践活動 （あじわう段階）

3 指導の実際

第4学年 単元
4の2・3オリジナルバウンドゲームを楽しもう!

▼ 単元の考え方

本単元のねらいは，簡単な打つ，はじく動きでつないだり，ねらったりしながら勝敗を競い合う楽しさの獲得に向けてルール・場を工夫したり，２人でパスを中心とした作戦を立て，動きを高めたりすることである。そのために，①２人でボールをバウンドさせ，パスをつないだり，空き空間をねらったりしながら得点を競う攻守分離型のバウンドゲームを教材化する。②自己の健康プランを実践していくあらつ学習を同時期に展開し，日常生活における可能な運動時間や場所を振り返る活動を設定する。③比較ゲームから，追究する目的と課題について交流し，目的とするゲームの楽しさにつながるルールや場を工夫したり，空き空間を意識した攻守の作戦と２人の動きを課題ゲームや対抗戦で高めたりしながら課題解決を繰り返し，ゲームチェック表や総当たり戦でその高まりを吟味・更新していく活動構成を工夫する。

▼ 単元の目標

○ ゲームの楽しさに向けて，ルール・場を工夫したり，パスを中心とした攻守の作戦を立て，作戦に応じた２人の動きを高めることができる。（創造性）

○ 仲間と協力してルールや作戦を考えたり，練習をしたりして，高まりを相互評価しながら，ゲームを楽しむことができる。（主体性・社会性）

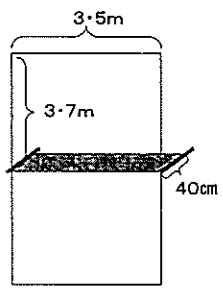
表３ 体育科の運動構想力を高め発揮する年間構想（第４学年）

単元名	４の○バウンドゲーム →	４の○タグラグビー →	４の○スリーゴールサッカー
戦術能力 集団技能 の高まり	攻守が分離した易しい場で，空いている空間を捉えて，打つ方向・守る場所を工夫した作戦を考えて，攻めたり守ったりする。	攻守が混合する複雑な場で，空いている空間や味方を捉えて，ランパスの方向や守る場所を工夫した作戦を考えて攻めたり，味方との空間を意識して守ったりする。	攻守混合の場でやや難しい動きを操作し，空いている空間や味方を素早く判断してパスを使った作戦を考えて攻めたり，分担して守ったりする。
ルール・場の構想力の高まり	ゲーム固有の動きや競争の楽しさを広げる目的から，ルール・場を選択したり，工夫したりする。 →	チームの作戦や作戦を成功させる動きの課題を解決する目的から，ルールや場を工夫する。	
あらつ学習との連動	つくろう！試そう！ぼくの・わたしの健康プラン（４の○バウンドゲームとの連動） 少人数で簡単な技能を使って，手軽に楽しむことができるように教材化したバウンドゲームと同時期に展開する。そのことで，体育科学習への強い求めを喚起するとともに，健康プランの生活実践のなかで，体育科で獲得した状況に応じてルール・場を工夫する力が総合化されていくと考える。		

▼ 学習の流れと考察

第１次：つかむ段階１・２／９時
　１人と２人で試しのバウンドゲームを比較し，追究目的や追究課題について交流する。

① 試しのバウンドゲームを比較する。



○ １人のルール
・自コートでワンバウンドさせ相手コートに返す。
・返せない時は，１得点。
○ ２人のルール
・２回まで打ってよい。２回打つ時は，交互に打つ。

資料１　比較ゲームのルール・場

② バウンドゲームの楽しさを出し合い，追究目的や追究課題について交流する。

私は，１人でするより２人でするほうが楽しいと思いました。それは，1人では返せないボールも2人だとカバーし合ったり，味方のパスを相手の返しにくいところへ打つことができたからです。（中略）私は，健康のプランでする運動がなかなか見つかりませんでした。でも，このゲームは，とても簡単にできるし，人数も少なくてできるから健康プランに取り入れて試してみたいと思います。これからの学習がとても楽しみです。

資料２　バウンドゲームの楽しさは・・・（K児）

第２次：つくる段階３～７／９時
　つなぐ，ねらう楽しさを広げるルール・場を工夫したり，空いている空間を意識した攻守の作戦を立てたりして，対抗戦をする。

③ 動きの実態に応じ，つなぐ，ねらう楽しさにかかわるルール・場を工夫し，ゲームチェック表でよさを評価しながら対抗戦をする。

・コートの広さ（幅３・５m、奥行き３・７m）をそれぞれ４mに広げる。
・ネットの高さを４０cmから５０cmにする。
・２人で打ってよい回数を２回から３回にする。

資料４　見直すルール・場



写真１　ネットの高さでつなぐ楽しさが広がるかな

第１次は，バウンドゲーム固有の楽しさを捉え，その楽しさを追究する目的や目的達成への追究課題をもたせることをねらいとしている。そのために，ネットで仕切られた相手コートに簡単な打つ・はじく動きでボールを送り，得点を競い合うバウンドゲームと出合わせ，資料１のように人数を１人から２人へと変えて味わえる楽しさを比較し，交流する活動を設定した。

比較ゲーム後の交流では，バウンドゲームの楽しさに気付き，（資料２波線部）この楽しさを広げていく目的やそのための課題を捉えることができた。（資料３）さらに，健康プランへの活用を投げかける発問に対し，試行していた健康プランにこの学習を生かしていこうとする姿も見られた。（資料２棒線部）

（追究目的）
　みんながつなぐ楽しさやねらう楽しさを味わうことができる４の２・３オリジナルバウンドゲームにしよう。
（追究課題）
・２人でつなぐ，ねらう打ち方を高める練習づくり
・返しにくい場所をねらって攻めたり，ポジションを分担したりする作戦づくり
・つなぐ，ねらう楽しさを広げるルール・場づくり

資料３　交流で子供たちが捉えた追究目的・追究課題

考察１

ここでは，１人から２人へと人数を変えたバウンドゲームの楽しさを比較させる活動を設定することで，資料２のK児のようなバウンドゲーム固有の楽しさを捉えさせることができた。また，この楽しさを追究目的として，自分たちの動きの実態や今のルール・場への適応について吟味する発問を行い，交流活動を設定したことは，集団技能や作戦，ルール・場の見直しを課題として捉えさせる上で有効であった。（資料３）
さらに，少人数，簡単な動きで楽しめるゲームとして教材を工夫したことで，体育科学習への求めを強めることができた。

第２次は，バウンドゲームのつなぐ，ねらう楽しさが広がるように，ルール・場を工夫したり，空いている空間を意識した作戦を立てたりして課題解決を繰り返すなかで，ルール・場の構想力や戦術能力，集団技能を高めることをねらいとしている。そのために，まず，比較ゲームをもとに，求める楽しさにかかわるルール・場を出し合い，見直しの理由を交流する場を設定すると，資料４のようなルール・場を見直すことを決定した。そこで，兄弟チームで対抗戦を行い，見直したルール・場のよさを得点・パスの回数やつながりからゲームチェック表で調べ，相互評価する活動を設定した。コートの広さを広げたことで，パスの回数が増え，つなぐ楽しさを味わった子供たちは，ネットの高さや打つ回数についても高い意欲と明確な見通しをもって追究していった。そして，得点やパスの回数，つながりの変容（資料５）から，K児のようなルール・場の工夫に対する感想（資料６）をもち，作戦づくりや動きづくりへと課題を発展させていった。

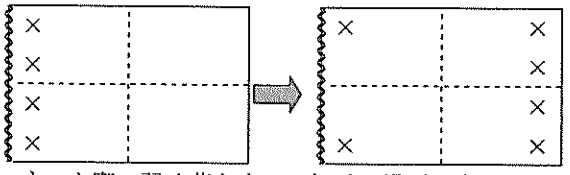
	前時	高さ５０㎝	打つ回数３回
得点	６点	８点	９点
パス回数	１２回	１５回	２０回
パス成功	８回	１２回	２０回

資料５　ゲームの変容



写真２　ねらって打てるようになってきたぞ！

④　空いている空間を捉えた攻守の作戦を立て、ゲームチェック表で作戦や動きの高まりを相互評価しながら課題ゲームや対抗戦をする。



ネット際へ弱く落とすことをねらった作戦　　相手の場所に応じてエンドラインをねらう作戦

資料７　Ｋ児チームの作戦の変容

第３次：あじわう段階８・９／９時
いろいろなチームと総当たり戦をする。

チームでは，ネット際に弱く落としたり，ラインぎりぎりには，勢いよく打ち返したりする作戦を立て，練習するとコントロールがよくなり勝つことができました。（中略）この学習では，オリジナルのルールを工夫したり，チームで作戦を立てて練習したりして，ゲームの楽しさがたくさん味わえました。この学習をしていたので，家でする健康プランでも，壁当てにしたり，１人対１人の時は，コートを狭く工夫したりできました。

資料８　単元終了後のＫ児の感想

ネットの高さを上げることで，低くて打ちにくいボールが減り，２人でうまくパスをつないで相手コートに返せるようになりました。また，打つ回数を１回増やしたことで，それまで，返すことで精一杯だったのに，味方のことを考えてパスできる余裕ができ，ねらって打てるようになりました。（中略）たった１０㎝，１回の工夫だったけど，バウンドゲームの楽しさがとても広がりました。

資料６　ルール・場の工夫に対するＫ児の感想

さらに，空いている空間や相手が返球しにくい空間を意識した作戦を立て，兄弟チームとの対抗戦を進めていった。そこで，攻めの有効空間を探るチェックノートを提示し，作戦を評価するとともに，攻める場所をマーキングし，味方のパスからねらって打つ課題解決ゲームを設定した。Ｋ児たちのチームでは，資料７のように作戦が変容し，課題解決ゲームで打つ方向や力加減，高さなどを工夫し，対抗戦を楽しむ姿が見られた。また，守りのポジションについても意識していった。

考察２

資料５では，自分たちのルール・場の工夫と楽しさの広がりをつないで捉えている姿が見られた。これは，つなぐ楽しさからねらう楽しさへと意識しやすいように段階的にルール・場の工夫を行わせ，ゲームチェック表で具体的な動きの変容から工夫のよさを相互評価させたことが有効であったと考える。また，攻めの有効空間を探るチェックノートと課題解決ゲームを設定したことで，資料７のように返球しにくい場所を付加しながら作戦が多様化し，作戦の多様化に合わせて打つ・はじく動きを工夫する姿につながったと考える。

第３次は，見直したしたルール・場で，これまでに工夫した作戦や動きを発揮して，いろいろなチームと総当たり戦を行い，戦術能力，集団技能の高まりを味わうことをねらいとしている。総当たり戦では，どのチームもこれまで高めてきた得意な攻めや守りの作戦を展開し，ゲームを楽しむことができた。また，相手の位置に応じてねらう場所を判断して攻めたり，それぞれの打つ力に応じて守りの場所を分担する姿も見られた。
総当たり戦の後，Ｋ児は左のような感想をもった。（資料８）

考察３

これまで対戦したことのないチームに，工夫した作戦や作戦に応じた動きを発揮する総当たり戦を設定したことで，資料８（波線）のように学習への成就感を味わう姿が見られた。

全体考察

以上のように，子供たちは，自分たちの動きの実態に応じてルール・場を工夫したり，作戦を組み立てたりしながら２人組で空き空間や返球しにくい場所を狙って打つ・はじく動きを高めることができた。また，健康プランづくりから，ゲーム学習を求めたり，ゲームの学習で獲得した知を健康プランに生かし自分への効力感や学習への成就感を味わう姿が見られた。

このことは，①少人数で，簡単な打つ・はじく動きを使って楽しむ攻守分離型のバウンドゲームを教材化したこと。②ゲームの教材化に併せて，健康プランの自己吟味後にバウンドゲームが始まるように学習の時期を工夫しゲーム学習で獲得した知があらつ学習へ連動しやすいようにしたこと。③ゲーム学習において，自分たちに応じたルール・場づくりから，作戦，動きづくりへと活動を構成したことが有効であったと考える。

3 動きや作戦を分析的に探る体育科学習プラン

体育科部　岩　城　一　磨

1 学習プランの考え方

▼ 動きや作戦を分析的に探るとは

子供に自ら運動を構想する力が育つようにするためには，子供自身が意欲をもって，繰り返し運動を行い価値ある動きを広げ，高めていくとともに，友達と共に今もっている力で楽しむことができる運動学習の場が必要である。ここで，動きや作戦を分析的に探る学習とは，課題設定から解決までの過程において，運動自体がもつ特性を味わえるように自他の動きやチームの作戦を自分なりの根拠をもってルールや場を工夫しながら，時間的・空間的視点で高め，解決していく力を身に付けていくことである。このことは，創造性を中心とした資質・能力を育成する上で価値があると考える。

▼ 動きや作戦を分析的に探る学習プランとは

自ら運動を構想する子供を育てるために，自らの動きや作戦から運動課題を設定し，解決する活動を繰り返し行い，自分の今までの動きや作戦をつくりかえていく力を身に付けていくための教材化の視点の明確化，単元構成の工夫を行うことである。具体的には，高学年において運動との出合いでもった運動の必要感，必然性（運動の目的）から動きや作戦について課題をもち，解決していく過程において，根拠をもって場やルールを工夫する学習を通して動きや戦術能力を身に付け，高める以下のような学習を構想していく。

①教材化については，運動の目標や構造が子供にとってある程度捉えやすいこと，そして，その運動の学び方を明確にし，活動に位置づけること，②単元構成については，段階をみいだす，ひろげる，あじわうで構成し，動きや作戦を分析的に捉える活動としては，まず，動きの局面や運動の場を限定し，運動を成立させる一連の流れのある動きとの自分の動きとのズレ（違い）を運動の視点をもとに動きの課題として捉える。次に，課題解決のために動きを限定し，場の構成を考え，工夫していくことで動きを高め課題解決へ向かう学びを身に付けていく。最後に○○大会を設定し，相互評価・自己評価によって動き，作戦をよりよいものへと更新していく。以上の構想で，子供一人一人が自己の動きや，チームの作戦を高める体験を通して，積極的に運動を行おうとする資質・能力を形成し，子供に自ら運動を構想する力を育てることができると考える。

2 学習プランの具体的構想

▼ 運動の教材化の視点について

動きや作戦を分析的に探る学習を成立させるために次の視点をもとに運動を教材化する。

①自己の動きや作戦の課題を設定し自ら解決していく個人の学びが高まるように個人種目では動きを高める場づくり，集団種目では動きや作戦が高まるよう焦点化する。

②運動種目自体がもつ動きを子供自身が今もっている自分の動きと照らしたり，比較活動によって分析的に捉えることができるようにする。個人種目では，運動局面の分解，集団種目ではミニゲームなど運動の単純化を行う。

③「目標意識～課題設定～課題追究～課題解決～評価」の活動を設定し，単元の過程内もしくは，学習過程内でこのサイクルを繰り返し，自己追究を強めることができるようにする。

表２　動きや作戦を分析的に探る活動を位置付けた単元構成

	みいだす	ひろげる	あじわう
活動と内容	１　運動教材に出合い，目的意識（必然性）をもち，動き，作戦の課題を把握する。 ○　場の限定による運動の構造の分析的な捉えと動き・作戦の追究課題の把握 ・集団種目の運動の単純化	２　動きの視点をもって新たな課題を生み出し，自己追究を繰り返して動きをつくりかえ，自ら学び方を生み出していく。 ○　場の限定，動きの限定による自他の新たな動き・作戦の高まりの気付き ・場の限定：課題把握～追究の過程 ・動きの限定：課題追究～解決の過程	３　課題とした動き，戦術能力の高まりを実感する○○大会を行う。 ○　目標達成の動きの高まり，戦術能力の高まり ○　友達と自己評価・相互評価・総合的評価をし合うこと
支援	課題の把握：場を構成する視点を限定し，模範となる動きと自己の動きのズレから課題を分析的に把握させる。	動き・作戦の追究：動きを分析的に捉え身に付けたり，つくりかえたりする場を設定し，交流タイムで動き・作戦を共に高め合えるようにする。	動き・戦術能力の評価：記録会・ゲーム大会により，総合的に評価させ，動き・作戦の高まりの実感をさせる。

以上の視点をもとに本研究では次の２種目を教材化し，運動の仕組みの分析的な捉えが動きや作戦の高まりを生み出すことを明らかにしていこうと考えた。

走り高跳び

走り高跳びの助走，踏み切り，空中動作～着地の動きの局面の動きと自分の動きのズレから課題設定することができるように模範の動きやＶＴＲを用いて分析する。

課題を解決するために動きに応じた場を構成し動きを時間的に捉え分析的に解決していく構想力を高める。

バスケットボール

ゲームを単純化した３オン３を行い，シュートに結びつくための一連のプレーの動きに着眼し，分析表やＶＴＲを用いて分析的に課題設定する。

タスクゲームを行い，分析表・作戦表を用いてチームの動きを時間的・空間的に捉え，動きや作戦を高める。

▼ 基本的な単元構成

単元構成については，表２のようにみいだす段階での運動の体験的出合いで最初にもった運動を楽しみたいという目的意識から，まず動きの局面や場を限定し，運動を成立させる一連の動きとの自分の動きのズレ（違い）を分析し，課題設定を行う。次に，ひろげる段階で，動きを限定することで，個人種目では場の構成を工夫していくことで動きを高める。集団種目では作戦づくりを行い戦術能力を身に付けていく。最後にあじわう段階で，○○大会を設定し，相互評価・自己評価によって動き，戦術能力の双方をさらによりよいものへと更新していく。以上のように運動を分析的に捉え，課題をもち，自己追究を繰り返し動きや作戦を高めていく。

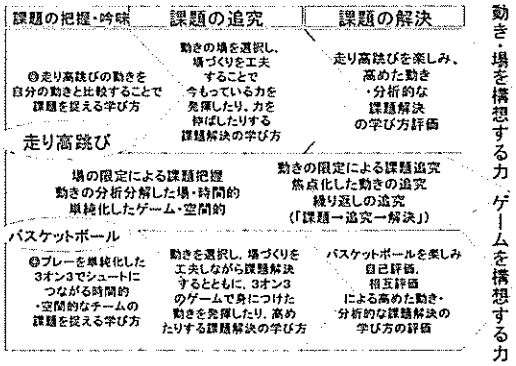


図５　実践Ⅰ・Ⅱで高まる構想力

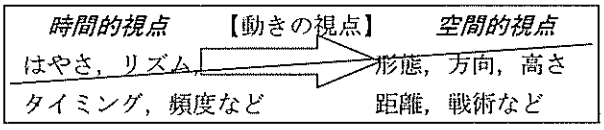


図６　実践Ⅰ・Ⅱで高まる動き・作戦を見るための視点

図５・６に示すように強い自己追究が繰り返され，動きや作戦は高まっていく。

３　指導の実際

第5学年　単元
Ⅰ-ジャンプの秘密を探ろう！ 走り高跳び
Ⅱ-プレーの秘密を探ろう！ バスケットボール

▼ 単元の考え方

Ⅰ-ジャンプの秘密を探ろう！：走り高跳び

本単元のねらいは，高く跳び目標記録を達成しようとする目標をもち，目標達成のために走り高跳びの動きを分析的に捉え，場を工夫し自己の課題を追究・吟味していく課題追究活動を通して，動きを高めることができるようにすることである。主な内容は，記録会における記録の達成を目標に①目標記録を具体的に設定し，達成のために課題を走り高跳びの局面の動きから分析的に捉えること，②方法を工夫しながら課題追究を繰り返し行うこと，③友達との交流で，高まった動きを相互評価し合うことなどである。

Ⅱ-プレーの秘密を探ろう！：バスケットボール

本単元のねらいは，ゲームに勝つためにたくさん得点したいという目標から動きや作戦を分析的に捉えた課題を，友達と協力して追究吟味していくことを通して，より高い動きや戦術能力を生み出すことができるようにすることである。主な内容は，①ゲームでたくさん得点するための動きの課題を分析的にもつこと，②練習方法を工夫し，課題追究を繰り返し行うこと，③友達との交流で，動きや作戦を相互評価し合うことなどである。

▼ 単元の目標

Ⅰ-ジャンプの秘密を探ろう！：走り高跳び

① 課題の解決の方法を選択・工夫し動きを身に付け，走り高跳びの課題を分析的に追究し解決していく運動の構想力を身に付けることができる。（創造性）

② 記録の目標をもち，課題を解決していくために高跳びの技能を身に付けながら記録を高め，友達と走り高跳びを楽しむことができる（主体性・社会性）

Ⅱ-プレーの秘密を探ろう！：バスケットボール

① ３オン３でチームの課題を見出し，練習方法を選択したり，攻・守の作戦を考えたりして動きやを作戦を高め，ゲームに生かすことができる（創造性）

② 友達と協力して，役割を分担し，練習したり作戦を立てたりしながらバスケットボールを楽しむことができる。（主体性・社会性）

▼ 学習の流れと考察

実践Ⅰ-ジャンプの秘密を探ろう！

第１次：１～４／10時

①走り高跳びの試しの活動，②自分の身長と５０ｍのタイムから目標記録を設定する活動，③模範の動きと自分の動きの比較から動きを分析的に捉え，課題をつくる活動を行う。

・　局面の比較活動によって課題を明確にする。

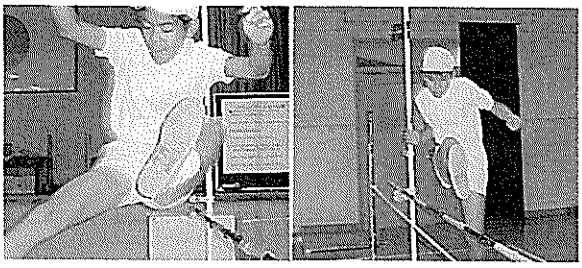


写真１　バー１本と２本を跳ぶ動きを比較するＡ児

第２次：５～９／10時

動きの局面ごとに追究できる場を提示により，場を選択し活用したり，創りかえたりして課題追究する。

・　動きの局面ごとに課題を追究する。

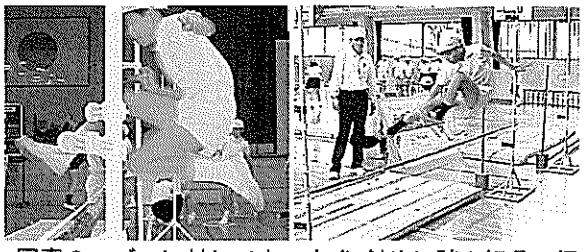


写真２　バーに対してまっすぐ･斜めに踏み切るＡ児

第３次：10／10時

ハイジャンプトライアルを行い記録達成，動きの高まりを評価する。

・　ハイジャンプトライアルを行う。

自分の目標記録を達成するために，走り高跳びのジャンプの秘密を調べました。フォームの課題をもち，ロイター板でフォームつくりをしたり，助走，ふみきりに課題を広げて詳しく調べていくうちに，今の自分の動きがどうなっているのかや，どうすれば高く跳べるのかということがわかってきました。

【中略】最後は目標記録が跳べてとてもうれしかったです。動きを調べてめあてを達成するために場づくりを工夫することができました。動きを調べる方法を他の運動でも生かしていきたいと思います。

第１次は，走り高跳びの動きを分析することで動きの局面を捉え，課題設定することをねらいとしている。子供たちは，模範の動きと自分の動きから「走り高跳びは，助走，踏み切り，フォーム～着地の局面に分けられる」という分析をし，各局面ごとの自分の課題を明確にした。Ａ児は，バー1本と2本を跳んで比較し，足の動きの分析を行っていた。資料１からＡ児は，フォームの大切さを実感し，「より高く跳ぶためには足がかからないようにフォームを改善する」という課題を設定した。

Ａ児「上げる方の足がまっすぐ上がらなかったり，抜き足がうまく抜けなかったりするなあ。」

「幅があるので空中で足の抜き方を右･左のタイミングで素早く大きく抜かないといけないぞ。」

資料１　比較活動でのＡ児の課題意識

考察１

Ａ児は，高く跳びたいという意識から足の動きに着目し，左右の足の抜き方のタイミングを課題とした。これは，フォームの局面の動きを比較し，分析的に捉えたことで，足の振り上げや抜き方の課題へと具体化することができたからだと考える。

第２次は，課題追究のコース（場）・方法を選択したり，つくり出したりして課題解決していくことをねらいとしている。Ａ児は，空中での足の動きをつくるために２本のバーをロイター板で跳んだり，動きをビデオでモニタリングしたりして動きを高めた。さらにＡ児は，振り上げ足を直すために，ふみきりコースに移動して追究していった。「バーに対してまっすぐに跳ぶと，遠くから跳ばないといけないし，抜き足が必ず引っかかるぞ」「助走を斜めにすると，バーに対して平行に跳ぶので引っかからずに跳ぶことができるぞ」と気付き自己追究を深めていく姿が見とれた。新たな要素を解決する場合は同じコースの中で場を工夫し，新たな局面の場合はコースを移動して「課題⇒追究⇒解決」というサイクルで自己追究を繰り返していた。

考察２

Ａ児は，フォームに課題をもっていたが，一つの課題から「ふみきり⇔助走」「ふみきり⇔フォーム」のように往復したり，「助走⇒ふみきり⇒フォーム」というように変わったりした。これは，高く跳ぶことは，単に局面だけの上達で達成されるのではなく動きを時間的視点で捉え一連の流れのなかで解決することの大切さに気付いたからだと考える。また，一度設定した課題が，解決に向かうときに新たな課題が生まれ，連続・発展的に自己追究を強くしていくことができたと考える。

第３次は，ハイジャンプトライアルを行ない，目標記録の達成や動き・学びを自己・相互評価することがねらいである。

考察３

子供たちは，友達と競争したり記録に挑戦したりするハイジャンプトライアルを行い，走り高跳びの目標記録達成や動き・構想力の高まりの実感することができた。

実践Ⅱ-プレーの秘密を探ろう！

第１次：１～４／10時
①試しのゲーム，②３オン３で課題設定する活動，③動きを分析的に捉える活動を行う。

・　シュートまでの動きや作戦から課題を把握



写真３　３オン３で動きと作戦の課題を把握する。

第２次：５～９／10時
３オン３のゲームで分析表から把握した課題を追究しチームの作戦づくりをする。

・　作戦を支える動きから空間的視点に気付く。

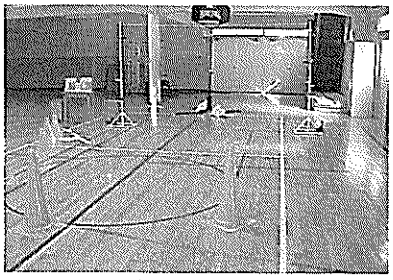


写真４　Ａチームの練習コート

第３次：10／10時
バスケットボール大会を行い，チームの動きや戦術能力の高まりを評価する。

・　バスケットボール大会を開く。

【略】シュートに結びつくパスの課題から練習を工夫したり，作戦をつくったりしていくうちに，チームでもっと動いてパスが通りやすくするという課題に変わり，相手を入れた練習を考えていきました。
【略】自分の動きを調べ繰り返し練習を工夫していくと，課題が変わりこんなにめあてを達成することができるということがわかりました。課題をもって練習することの大切さがわかりました。

第１次は，シュートに結びつく動きや作戦を分析することで課題を捉えることがねらいである。

Ａ児のＡチーム：「シュートはどこからうてばよく入るか」，「パスが何回のときにシュートが多いのか」，「動きながらのパスはどうすればいいのか」　↓
「シュートをたくさん決めるためにはドリブル～パス～シュートの流れをつくることが大切」

資料２　Ａ児がいるＡチームの課題意識

Ａ児のいるＡチームでは，資料のようにシュートやパスの分析から，３対３で行うシュートゲームでチームの動きの流れのデータを調べ，動きながらという点に着目し課題にしていた。

考察１

Ａチームの子供たちは，得点したいという目標意識から，動きを分析表で調べ，時間的な視点で「動きながらボールをつなぐ」ことを課題に設定した。これは，ゲームを単純化し，ゴールを低くした３オン３や分析表を用いたことで，意識がパスに向かい，具体的な課題へと吟味できたからと考える。

第２次は，シュートにつながる動き（時間的・空間的視点）の練習を場を工夫しながら課題解決することをねらいとしている。Ａチームは，シュートへの流れが正確になるようカラーコーンを相手に見立てジグザグドリブルからゴール下の味方にパスしてシュートという一連の練習をしていた。そして，「相手なしで確実にできた」⇒「相手をいれてやってみる」⇒「うまくできない」ことから繰り返し練習し，動きを分析表で記録･分析を行うことで空間的視点に気付いていった。

考察２

Ａチームは，分析表によって動きの流れが大切なことに気づき，練習方法を工夫し，作戦を高めていった。これは，走り高跳びと同様に「課題⇒追究⇒解決」というサイクルを繰り返し行う強い自己追究によって生まれた新たな動きの課題を常にフィードバックして次の活動に生かすことができたからである。

第３次は，バスケットボール大会を行ない，ゲームを楽しみ動きや作戦の高まりを自己・相互評価することがねらいである。

考察３

子供たちは友達とバスケットボールのゲームを楽しみ，たくさん得点するという目標達成や動き・戦術能力の高まりの実感していた。Ａチームは，自分たちの作戦を友達と協力して確実に行うことができていた。

全体考察

２実践を通して子供たちは，動きの比較活動や試しのゲームの分析表から動きや作戦を自己のデータをもとに時間的・空間的視点で分析的に捉え，課題の具体性を生み，課題解決の意欲を高めることができたと考える。また，友達と追究方法を考え，場を工夫しながら協力して解決することができた。（主体性・社会性）そして，「ジャンプの秘密を探ろう！」では，動きを解決するために場を構想する力，「プレーの秘密を探ろう！」では課題を空間的視点で分析的に捉え直しながら動きやゲームを構想していく力である戦術能力(創造性)を高めることができたと考える。さらに，子供の作文より，自己の動きや学びをもとに，自ら課題を追究・解決していく運動構想力の育ちがあらわれていることから，自ら運動を構想していく力を支える動き・戦術能力を総合的に高めることができたと考える。

4 生活習慣を調べ，自らよりよい健康生活を創る保健学習プラン

体育科部（養護教諭） 森 田 常 子

1 学習プランの考え方

▼ 生活習慣を調べ，自らよりよい健康生活を創るとは

生活習慣を調べるとは，生き生きと明るい健康生活を送るために，自己の健康への気がかりや憧れをもとに，「食事」「運動」「休養・睡眠」の三側面から，自己の生活を見つめ健康生活を実現させるための，課題を捉えていくことである。自らよりよい健康生活を創るとは，自分の健康生活の課題に気づき，発見した課題を解決していくための方法を考え実践していくことである。つまり，現在の心身の状態に目を向け健康生活を送るために，自分にあった生活の仕方を創り上げ実践していくことである。生活習慣を調べ，自らよりよい健康生活を創るとは，自分の生活習慣の課題を「食事」「運動」「休養・睡眠」の三側面から捉え，発見した課題を解決していくための改善の具体的目標や計画を考え実践していく中で，自分にあった生活習慣を創り出すことである。このような学習を進める過程で，よりよい健康生活を創り出すための科学的認識や具体的目標の設定力，改善計画の立案力，計画を実行する実践力などのライフスキルを獲得することができる。このライフスキルは生涯にわたり健康を保持・増進する上での重要な社会的能力であると考える。

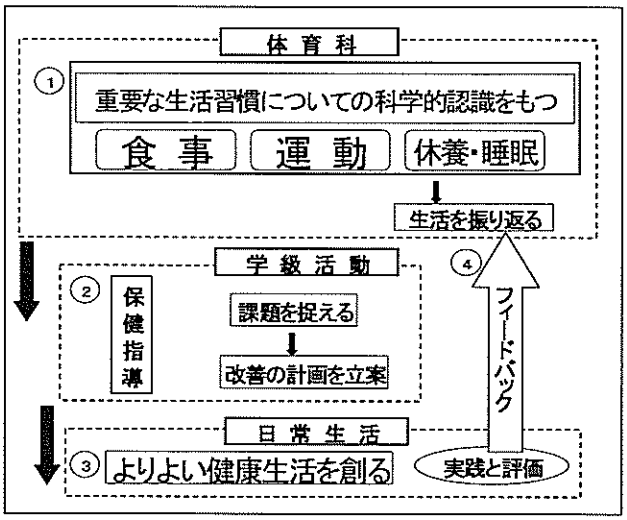
▼ 生活習慣を調べ，自らよりよい健康生活を創る保健学習プランとは

日常生活において，よりよい健康生活を創ろうと実践していくためには次のような学習を構想する。

- ○ 自分の生活習慣の課題を分析し捉える。
- ○ 生活習慣を改善するための具体的な目標や計画を立案する。
- ○ 計画を長期に渡りくり返し実践していく。

そのために，まず体育科保健領域の学習だけでなく，食品や食生活習慣についての知識を得る家庭科学習や，具体的に生活習慣の改善計画を考え実践することができる学級活動との関連が必要である。また，長期に渡って実践していくためには，評価方法の工夫や家庭との連携も必要である。以上のようなことから次の保健学習プランを設定した。具体的には図１のように，①保健学習で，重要な生活習慣についての科学的認識を獲得し，「食事」「運動」「休養・睡眠」の三側面から生活を振り返る場を設定する。次に学習で獲得した科学的認識をもとに生活習慣の課題を捉える。②学級活動の中で，生活習慣の課題について改善を達成するための具体的目標を設定し計画を立案する。③学校や家庭で実践を進め課題解決について，子供による自己評価や相互評価，家庭での評価，教師による評価などの場を設定する。④評価したことをもとに再度生活を振り返る。目標が達成できたことで，新たな課題に気付いたり，より具体的で高まった計画を立案し再び実践を始める。一方，達成できなかった場合には，課題や改善の目標が適していたか，計画に無理はなかったかなどを見直し，新たな実践を進める。このような学習プランを設定することは，生活習慣に関する様々な問題に対して子供自らが主体的に健康を維持・増進する態度を形成することにつながる。これは，よりよい健康生活を創る実践において価値があると考える。

図１よりよい健康生活を創る保健学習プラン



2 学習プランの具体的構想

▼ 題材化の視点

生活習慣を調べ，よりよい健康生活を創るには子供の実態を踏まえ，題材化の条件を次のように考えた。

- ○ 望ましい生活習慣のあり方を理解することができるもの
- ○ 自分の生活習慣を振り返り，健康生活との関連から課題が明確にできるもの
- ○ 自分の努力や工夫で課題の改善計画を立て実践することができるもの
- ○ 学習で得た科学的な知識を，改善計画の中に取り入れ，健康生活を維持・増進させることができるもの
- ○ 生活習慣における自己管理能力を身につけることができるもの
- ○ 学級における健康生活の維持・増進に貢献することができるもの

▼ 活動構成について

表１のように，つかむ，ひろげる，おこなうの３段階とした。まず，つかむ段階では，生活習慣の中から現在や将来の健康生活に重要であると考えられる生活習慣を，健康ビンゴゲームで選択する。これは①毎日の生活のこと②自分が気をつけること③自分でできることの３点を認識し，生活習慣は自分自身が創りだしていくことを捉える。食生活習慣については「食事」の役割について学習することで，課題を捉えやすくする。次にひろげる段階では，事前に生活習慣についての健康アンケートを行い，自分の課題を明確にする。そのために，栄養士の講話や子供達への願いから，自分の生活習慣の具体的な課題に気付く。自分の課題と他の子供達の課題を共通させ，グループで課題について話し合い，改善のための具体的な目標を設定し，改善計画を立案し実践を進めていく。最後におこなう段階では，毎日の生活習慣をカードに記入し生活を見つめることで，改善への意欲を高める。グループでの課題と改善ための目標や改善計画，実践の様子の経過報告会を行い，改善やそのための工夫を明確にする。その上で自己評価，相互評価，教師による評価を行う。また，今後のよりよい生活習慣の維持・増進についての意欲が高まるようにする。

▼ 保健学習における学びの連動について

保健学習では，知識の習得や科学的な理解は十分になされ，日常生活で知識と行動が一致した実践ができるように進められている。しかし，現状は学習した知識が生かされず，なかなか実践までに至らないことが多い。そこで，後で述べる実践のように学級活動との関連を図り，家庭生活と学校生活とが共通する問題を持つ題材を設定する。このことより，改善計画や取り組みの過程で，既習の知識が実生活の中で生かされ，子供がよりよい健康生活を創る実践へと向かうようになる。また，５・６年生における家庭科学習「１食分の食事」の栄養的なバランスの大切さを理解する内容との関連も考え，さらには，すでに本校の総合学習「あらつ学習」で実践されているような「給食から見直そう！私たちの日常生活」のように「福祉・健康」との関連も図っていくものとする。

3 指導の実際

第3学年　題材
けんこうな毎日Ⅱ
－給食から創る健康な食生活習慣－

▼ 題材の考え方

本題材は，よりよい健康生活を子供自らが創りだしていくことがねらいである。まず，現在や将来の健康生活のために重要な生活習慣を捉えさせ，健康生活のための習慣は，自分の努力や工夫で創りだしていくことを理解させる。次に，体育科保健領域で学習した「けんこうな毎日Ⅰ」の重要な生活習慣「食事」「運動」「休養・睡眠」の３側面の中から「食事」について学習を発展させ望ましい食生活習慣を獲得させる。最後に，全員が共通の課題をもちやすい給食を取り上げ，食生活習慣の課題を把握し改善のための具体的な計画の立案を行いグループで実践する。さらに，学級で目標を同じにすることで継続した実践になりやすいことから，学級全体の食生活習慣の維持・増進にも結びついていきやすい。栄養士の講話で，食品の働きや給食の献立を作るときの願いを知ることや，改善の取り組みの相互評価で実践への意欲を一層高めることもできる。

▼ 題材の目標

1　現在や将来の健康生活には生活習慣が重要であることを理解し，よりよい健康生活を創ろうと実践することができる。（主体性）
2　食品の働きや食事の役割を理解し，生活習慣の課題を捉え，改善のための目標を設定し計画を立て実践することができる。（創造性）
3　自分の生活習慣の課題と学級の生活習慣の課題を把握し，改善の実践に工夫をしたり，協力をしたりすることができる。（社会性）

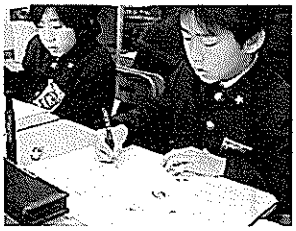
表１　生活習慣を調べ　，よりよい健康生活を創る保健学習プランの活動構成

段階	つ　か　む	ひ　ろ　げ　る	お　こ　な　う
学習活動と内容	1　重要な生活習慣を選択する。 ○　生活習慣は自分の努力で改善することができることを捉えること 2　食事の役割について話し合う。 ○　食事の役割について理解し，役割を分類すること	3　食品の働きや摂取の仕方を，給食の献立を活用して理解する。 4　生活習慣の課題を捉え，改善のための目標をもつ。 ○　改善のための具体的な目標の設定と改善計画を立案すること	5　生活習慣の課題と改善のための具体的な目標と改善計画について実践を発表する。 ○　改善できたこと，できなかったことを明確にすること ○　改善のための努力や，工夫したことを捉えること
手だて	※　健康ビンゴゲームで重要な生活習慣の提示	※　栄養士の講話（食品の働き，献立を考えるときの願いなど） ※　「好き・嫌い」健康アンケートの活用	※　給食もりもりカードの記入 ※　改善できたことを習慣化するように意欲の喚起

● 学習の流れと考察

第１次：１／３時

①健康な生活のために重要な生活習慣を探り，「けんこうな毎日Ｉ」の学習を発展させる。②食べることのよいことを話しあい，食事　の役割について考える。



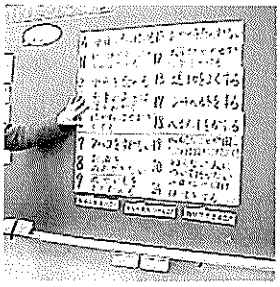


写真１・２　健康ビンゴゲーム

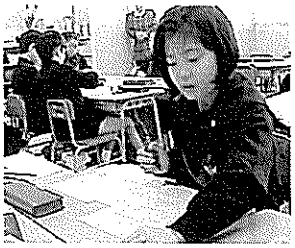


写真３　ブレーンストーミング

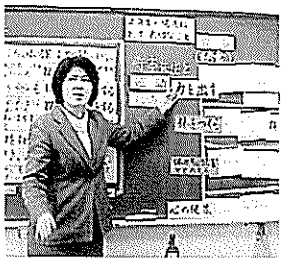


写真４　「食べることのよいこと」の分類

第２次：２／３時

事前の健康アンケートと（好き嫌いと給食の食べ方）と本村先生の講話，「食べ物の働き」と「給食の献立を考えるときの願い」から，自分の良くない食べ方に気付き，改善目標と改善計画を話し合う。

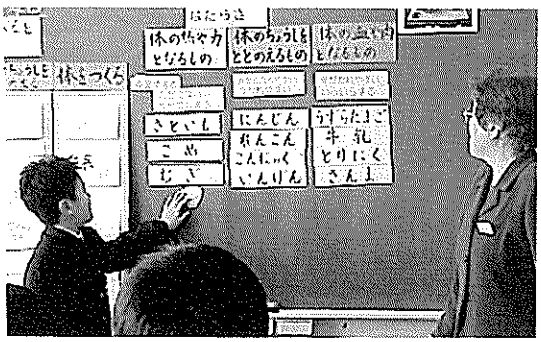


写真　５　栄養士の講話
①　食べ物の働きと分類
②　分類の作業

第１次は，健康な生活にとって大切な生活習慣を把握するために健康ビンゴゲームを行った。ビンゴのために読み上げる生活習慣は，自分の努力で改善できる毎日の生活にかかわる習慣である。健康な生活と生活習慣の関連を再認識させ，「けんこうな毎日Ｉ」で学習した重要な生活習慣である「食事」について学習を深めた。次に「食べることのよいこと」について，グループでブレーンストーミングを行い，「よいこと」をできるだけたくさん出し合った。それらを分類することにより，食事の役割について理解を深めることができた。

最初，けんこうビンゴゲームで，おとなになってからも健康でいるために大切なことをえらびました。・・，「はやねはやおき」「うんどうをする」「あさごはん，ひるごはんを毎日たべる」「おやつをたべすぎない」が３年生くらいでは大事だとわかりました。

資料１　生活習慣と健康生活の関連の理解

ぼくは，ほけんの学習でわかったことがあります。それは，「食べるとよいこと」が４つあります。力をだすこと，体をつくること，体のちょうしをととのえること，心の健康にもなることです。・・・・

資料２　「食事の役割」への理解

考察１

健康ビンゴゲームで，健康生活を送っていくには，生活習慣との関わりが大きいことを捉えることができた。また，「食べることのよいこと」についてブレーンストーミングをすることにより，「食事の役割」についての理解を図った。出された役割を分類したことが効果的であったと思われる。以上のことから，食生活習慣への関心を高めていくことができた。

第２次は，事前に好き嫌いと給食の食べ方についての健康アンケートを行なった。栄養士の講話は①食べ物の働きと分類②給食の献立を使っての食品の分類③子供が実際に行う分類作業④不足することでの体への影響⑤食事としての給食の役割の５点からで，食品の働きや食事の役割についての理解を深めた。献立を立てるときの「すくすく元気に成長して欲しい」の願いも聞き，アンケートの結果を活用しながら自分の良くない食べ方，食生活習慣の課題を明確にすることができた。次に，課題の改善目標を設定し，そのための改善計画をグループで話し合い，給食もりもりカードへ記入し，取り組みへの意欲を高め実践を始めることにした。

・・・私は，たべものに分類があるのは知っていたけど，それがどんなはたらきかぜんぜん知りませんでした。不足したらどうなるかとか考えていなくて友達にあげたりしていました。この学習をして食事のバランスって大事なんだなとおもいました。給食もりもりカードをつけるようになって嫌いなものを人にあげたりしなくなりました。これからも工夫して食べようと思います。

資料２　食べ方の問題点の把握

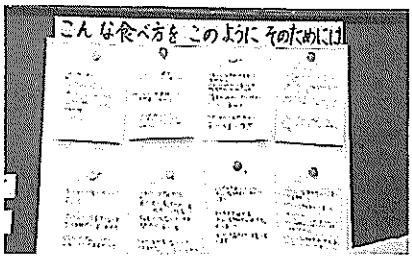


写真６　改善の計画と目標

第３次：３／３時

１週間の改善の取り組みを振り返り，①できたこと，できなかったことを明らかにする。②給食の食べ方を通して，食生活習慣の改善の取り組みを長期に渡り続ける意欲をもつことを話しあう。

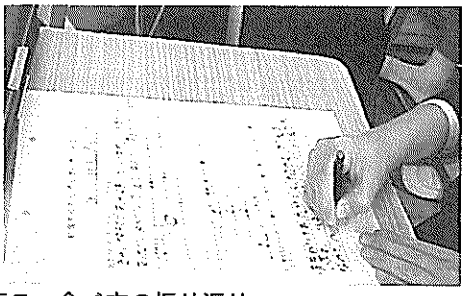


写真７　食べ方の振り返り

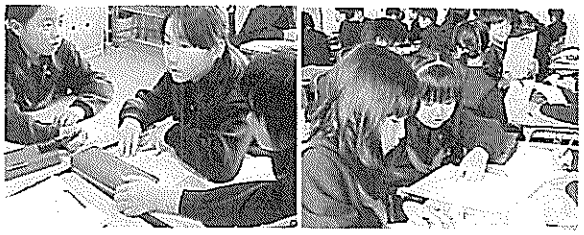


写真８・９　グループでの報告会



写真１０・１１　取り組み後のカードの記入と張り

考察２

食品の働きについて，昨日食べた給食を例にとって学習し，食品の働きを分類する作業を行い，それぞれの食品に働きがあることを捉えることができた。その後，自分の食生活習慣を振り返るようにしたので課題が把握しやすくなった。改善計画も個別に立案せずグループで行ったため，給食でのデザート等のやりとりの減少や，パクパクタイムを作りおしゃべりの減少に工夫や，「嫌いでも少し食べたら・・・」と励ますなど協力の姿が多く見られた。

第３次は，給食もりもりカードで１週間の給食の食べ方を振り返り，①このように直して②改善できたこと③自分で工夫したこと④友達と協力したことをグループで報告し合い，改善できたことを明らかにし評価させた。計画通りに進まなかったことも，適切であったかを話し合うことにより，次の取り組みへのステップとするようにした。グループからの取り組みの様子を発表し，継続した実践になるための意欲を高めるようにした。

わたしが，がんばったことはきらいなものは，組み合わせて食べるようにしたことです。例えば，パンと牛乳だったら，組み合わせておいしいです。わたしは，嫌いなスープとおかずを組み合わせてたべました。

資料３　食べ方の工夫

・・・・，おしゃべりを少なくして，人にもあまり話しかけないで食べられるようにしました。時間内に。

資料４　問題に合わせた工夫した食べ方

ぼくは保健をしてわかったことが４つあります。１つは食べることのいいことです。たべものは黄色，赤色，緑色の３つに分けた働きがあります。食事をとったら，力が出てかぜになりにくいし，運動をしてかぜになりにくくなります。すいみんは元気になるし体のちょうしもよくなるし，運動もできます。食べないと，運動もできなくて，・・・，「食事」も「運動」も「すいみん」もおなじくらい大事だと思いました。

資料５　食生活習慣から生活習慣の重要さを認識

考察３

給食を通して食生活習慣の課題の改善に一人ひとりが取り組み，グループでも声をかけ励ましながら工夫や協力を重ね実践を進めることができた。この活動を通して，自分の食生活習慣の改善目標の達成と生活習慣の向上が進められ，共に学級の食生活習慣の保持・増進にもつながり，よりよい健康生活を創ろうとする子供達の姿が見られた。

全体考察

本題材において，健康ビンゴゲームや健康アンケート，栄養士の講話を通して，食生活習慣の重要性を科学的な知識として理解し，給食を通して自分の課題を把握し食べ方を改善するようになった。自分に合った具体的な改善計画をグループで立案し，実践過程において友達や教師による，相互評価を行うことで，取りへの意欲と自信もつことができた。本実践は，グループでの取り組みを進め，励ましや相互評価が意欲へとつながったが，課題別グループでの取り組みを行う方が意欲や評価の面で効果的であると思われる。今後の課題として実践の長期的な必要もあるが，校外生活についての子供達の，行動の改善や評価を的確に行うまでには至っていないので，家庭との連携を考えた実践が必要である。

理科学習の＜ふくおかプラン＞

1　科学的追究力を高める理科学習を

1　理科学習が担う役割・立場

理科学習の究極的な目標である「科学的な見方や考え方」は，子供が自然事象への働きかけを通して培われていく。しかし，現代社会においては，自然離れや自然体験の希薄さから，自然にふれてみる・さわってみるといった自然への働きかけの機会すら失われつつある。

これからの理科学習においては，「見通しをもって観察，実験などを行い」という言葉に象徴されるように，子供自らが学習課題を設定し，自然事象への働きかけを計画し推進させる思考力・判断力，観察，実験の技能が大切にされる。本校では，これらを創造性（中核は科学的追究力）ととらえる。この科学的追究力は，自分意識を中核にした問題解決活動のなかで発揮されるものであるが，自分の見通しや働きかけを実証性・合理性という観点から絶えず見直しながら自然事象に働きかけようとする主体性を欠くことはできない。また，自分本位に追究結果を判断するのではなく，客観的な事実をもとに，友達と交流するなかできまりを共有しようとする態度や自然を愛する心情といった社会性も必要になる。このように，創造性を大いに発揮し，自分意識をもった追究活動を展開するなかで，絶えず自分の追究の姿をモニタリングする主体性，客観的な事実をもとに友達ときまりを共有しようとする社会性を調和的に高めていくことが，ふくおかプラン上での理科学習が担う役割・立場である。

2　科学的追究力を高める理科学習とは

科学的追究力とは，子供自らが明確な課題意識をもち，自然事象への意図的働きかけを計画したり，推進させたりする思考力・判断力，及び追究技能のことである。具体的には，自然事象との出会いでとらえた事実を解釈し学習課題を明確にする課題設定力，追究の結果を見通したり追究方法を考えたりする計画力，実証性・再現性・

表１　理科学習で特に大切にする資質・能力

<table>
<tr><th colspan="3"></th><th>３　学　年</th><th>４　学　年</th><th>５　学　年</th><th>６　学　年</th></tr>
<tr><td>主体性</td><td colspan="2">追究意識</td><td colspan="4">自然事象に対する自分の見通しや働きかけ，およびその結果を実証性，合理性という観点から絶えず見直しながら追究する</td></tr>
<tr><td rowspan="6">創造性</td><td colspan="2">意　欲</td><td colspan="4">課題意識を連続発展的にもち続け，繰り返し自然事象に働きかけようとする意志・意欲</td></tr>
<tr><td rowspan="5">科学的追究力</td><td>課題設定力</td><td colspan="4">自然事象に出会い働きかけるなかで，自分のもっている既有の知識や見方・考え方で自然事象を解釈し，学習課題を設定する</td></tr>
<tr><td></td><td>自然事象の比較を中心に学習課題を設定する</td><td>要因を取り出し自然事象との関係づけ学習課題を設定する</td><td>自然事象と複数の要因とを関係づけから，学習課題を設定する</td><td>自然事象の変化とその要因との関係付けから，学習課題を設定する</td></tr>
<tr><td>計画力</td><td>差異点や共通点から事象にみられる共通性や性質，特徴などを予想し，簡単な器具や材料を使った実験方法を考える</td><td>事象の性質や変化，働きや規則性などを要因と関係づけて予想し，簡単な器具や材料を使った実験方法を考える</td><td>生命の連続性や変化の規則性について，複数の要因と関係づけた仮説を立て，条件を設定したり，時間的・量的変化に着目した実験方法を考え実験計画を立てる</td><td>事象の相互の関係や規則性について多様な視点から変化と要因を関係づけた仮説を立て，適した実験方法を考え工夫し実験計画を立てる</td></tr>
<tr><td>追究力</td><td colspan="4">自分の考えた予想・仮説・構想のもとに，実験器具や機器などを操作し，実証性・再現性・客観性といった視点をもって観察，実験し，分かりやすく表現する</td></tr>
<tr><td>追究技能</td><td>虫眼鏡，温度計，方位磁針などの操作</td><td>アルコールランプなどの加熱器具の操作</td><td>顕微鏡，液量計，天秤，濾過器具などの操作</td><td>指示薬，気体検知管などの操作</td></tr>
<tr><td rowspan="2">社会性</td><td colspan="2">心　情</td><td colspan="4">生物を愛護し，尊重するとともに，自然環境を大切にしようとする</td></tr>
<tr><td colspan="2">態　度</td><td colspan="4">自他の見通しや追究過程，及び観察，実験の結果などを友達ときまりを相互に話し合い，共有しようとする</td></tr>
</table>

客観性といった視点で観察，実験する追究技能からなる。本研究では，自己の追究意識（主体性）を基盤にし，追究意欲，課題設定力，計画力，追究技能（創造性）を育てることを中核に考える。その結果として，態度や心情（社会性）が身に付いていくのである。

科学的追究力を高める理科学習とは，子供自らが課題設定力や計画力，追究技能を発揮し，追究活動を連続させたり，定性的にあるいは定量的に追究活動を発展させたりして，自然事象に潜むきまりを科学的に明らかにしていくことである。その際，学年段階に応じて科学的追究力を重点化して高めていくことが大切になる。３年生では比較という面から，４年生では要因抽出・関係づけという面から，５年生では計画的追究という面から，６年生では多面的判断という面から重点化する。このような理科学習を構想することは，改訂の趣旨にもあるように「主体的な問題解決活動の充実」「問題解決能力の育成」という点からも価値あることだと考える。

以上のような学習のもと，理科学習では，次のような３特性が育った子供の姿をめざしている。

○　自然事象に対する自己の見通しや働きかけを実証性，合理性という観点から絶えずふり返り見直しながら自然事象に働きかける子供（主体性）
◎　学習課題を連続発展的に創り出し，その解決に向けての予想や方法といった構想を考え，実証性・再現性・客観性という視点で繰り返し自然事象に働きかける子供（創造性）
○　働きかけの過程や結果を相互に話し合い，きまりを共有，吟味する子供（社会性）

上に述べた子供を育てるためには，表１に示した資質・能力を特に大切にし，系統的に高めていかなければならない。そのためには，学習課題が定性的なものからより定性的なものへ，あるいは定量的なものへと連続発展するように活動構成と教材化の面から支援していく。

3　理科学習における学びの連動の考え方

▼　理科の年間計画作成の基本的な考え方

第３学年から始まる理科は，従来通りＡ「生物とその環境」，Ｂ「物質とエネルギー」Ｃ「地球と宇宙」という３領域で内容が構成されている。この３領域で年間計画を作成する際の基本的な考え方は次の通りである。

(1) 各学年において，季節に関わる内容（動物や植物，天気や自然災害など）を最優先し，その時期に合わせて単元を配列する。
(2) 表１に示した各学年で重点化した理科の資質・能力が意図的・計画的に身に付くように，追究活動自体が易から難に向かうように学年内での単元配列を工夫する。（例えば，５年生では計画的追究がより高まるように課題選択単元を学年後半に配列する）
(3) 子供の学びが連続しより主体的なものになるように，内容相互の関連を図ったり，追究技能の定着を図ったりして単元配列をする。（例えば，５年単元「天気の変化」から「流れる水の働き」への内容関連，「てこ」から「物の溶け方」への上皿天秤の技能定着）

▼　学びの連動をはかる基本的な考え方

理科は，自然事象を自分なりの見通しに基づき，観察，実験を繰り返し，科学的に問題解決し自然認識を深めていく教科である。理科は，実証性，再現性，客観性といった科学的問題解決の特徴をもち，総合的な学習の問題解決と異なる点である。つまり理科は，科学的追究力の発揮・育成を目指した学習なのである。理科学習で培われた資質・能力や科学的な見方や考え方が総合的な学習に生きるという点から，理科と総合的な学習との学びの連動を次の点から考える。

(1) 学習内容（科学的な見方や考え方）の連動

理科で培われた自然認識の内容が，総合的な学習の１つの課題解決を図る上での内容として連動を図る。

例）３年理科「光をあてよう」の学習で黒いものは光を吸収するという内容が，３年総合「西公園カブトムシ復活大作戦」の「微生物を活性化させ枯れ葉を早く腐葉土にするにはどうしたらよいのか」という課題解決の方法として想起され，黒いビニルをかぶせて腐葉土の温度を上げ微生物の働きを活性化させるという課題解決に生きて働く。

このように学習内容が連動する場合は，実施時期を合わせ理科学習と総合的学習を同時期に展開していく。

(2) 資質・能力の連動

理科学習で培った科学的追究力を生かして総合的な学習の問題解決を図る。特に，生活現実課題の解決を図る総合では，複数の要因が複雑に絡み合っている。そこで，理科学習で培った要因抽出や条件設定などの科学的追究力が生きて働く。また，指示薬や蒸発，濾過などの科学的な手法も総合的な学習の課題解決に生きて働く。

理科学習では，定性的課題からより定性的なものや定量的な課題に発展していく。その課題解決に向けて計画力が大いに働く。あらつ学習でも，達成的課題追究から探究的課題が次々と生まれたり，探究的課題追究から実践化に向かう達成課題が生じたりする。理科で培われた課題設定力と課題追究に向かう計画力があらつ学習に生きて働くことになる。

以上のような資質・能力の連動が考えられる。このことから，理科部テーマで示している学習活動を計画し推進させる思考力・判断力としての科学的追究力は，総合的な学習の課題解決能力の育成に生きて働くものであると考える。　　（手島　宏樹）

2 自然事象への働きかけが連続発展する理科学習プラン

理科部　手島宏樹

1 学習プランの考え方

▼ 自然事象への働きかけが連続発展するとは

自然事象への働きかけとは，子供が自然事象に対する課題意識を明確にもち，観点や方法を変えながら，意図的に観察，実験，ものづくり，栽培，飼育などを行うことである。自然事象への働きかけが連続発展するとは，子供が課題意識のもと観点や方法を自由に変えたり焦点化したりして，自己の追究活動を連続したり，定性的にあるいは定量的にその働きかけを高めたりしていくことである。そのためには，子供自らが次のように学習課題を設定し，自己追究する学習像を構想している。①自然事象との出会いでとらえた事実をもとに事象が引き起こる理由を既有の知識や見方・考え方で解釈し学習課題を設定する。②働きかける観点や方法を自由に考え，多様に働きかけるなかで新たな事象に出会い，解釈を行い追究活動を連続する学習課題を設定する。③自己の追究活動の実証性・客観性を高めるために，条件設定をして調べる，温度や重さ，大きさや速さなどの量的変化に着目して調べる，類似した事象で確かめるといった観点や方法を焦点化した学習課題を設定する。このように学習課題が連続発展し，自己の追究活動が連続発展することで，課題設定力，計画力，追究技能といった科学的追究力が高まるとともに，子供自らが絶えず自分の追究活動を見直していく主体性も，友達とともにきまりの共有化を図る社会性も高まっていくのである。

▼ 自然事象への働きかけが連続発展する学習プランとは

自然事象への働きかけが連続発展する学習プランとは，追究活動の結果から連続的に学習課題を設定したり，とらえたきまりの不十分さから発展的な学習課題を設定したり等，子供の追究活動が連続したり，定性的あるいは定量的に高まった追究活動に向かうように，教材の工夫，および活動構成を行うことである。また，自然事象への働きかけが高まるように年間計画を作成することである。

学習を展開していく際の基本は，①子供にとって身近な教材で単元独自の具体的な活動を行ったり，イメージ図等を用いて事象を解釈したりする活動，②課題に対して，観点や方法を自由に変えた見通しを立て多様に働きかける追究活動，③追究活動の結果から連続する学習課題を設定したり，きまりの不十分さを意識しより定性的なあるいは定量的な追究活動に向かう学習課題を設定したりする活動，④条件設定や量的変化に焦点化した見通しを立て定量的に追究する活動やとらえたきまりを類似事象で確かめるという定性的な追究活動を行うことである。これら①～④の活動は科学性を求める子供の課題意識により繰り返され高まるのである。さらに，⑤子供が科学的追究力の高まりを意識できるように，個人の学習課題に応じ観点や方法を変えて多面的に追究する活動を行う場合もある。

2 学習プランの具体的構想

▼ 学習課題が連続発展する教材の選定

きまりの不十分さを意識し，より定性的な追究や定量的な追究に向かうように，以下のような観点から教材を選定する。

○　導入時においては，単元独自の具体的活動から課題が連続するように身近な中心教材を選定する。

○　より定性的な追究へと課題が発展するように，中心教材の長さや形状などを変化させた教材を選定する。

段階	つかむ	調べる	まとめる
活動と内容	1　具体的な活動を通して，学習課題について話し合う。 ○　単元独自の中心教材を用いての具体的活動 ○　出合った事象の解釈 ○　学習課題の設定	2　連続発展する追究活動を行い，結果を話し合う。 ○　観点や方法を自由に変えた追究活動 ○　新たな事象との出合いによる課題設定 ○　観点や方法を焦点化した定性的・定量的な追究活動ときまりの把握	3　発展的な自然事象に出会い目的や観点，方法を自由に選択した活動を行い，きまりの有用性を話し合う。 ○　自由課題選択活動 ○　きまりの有用性と一般化
手だて	※　単元を貫く中心教材での具体的活動の実施 ※　イメージ図への表現	※　きまりの不十分さを感じる事象の提示や助言・発問 ※　課題に応じた追究活動の繰り返し	※　発展的な自然事象の提示 ※　自己課題に応じた活動時間と場の保障

図1　自然事象への働きかけを高める学習の活動構成

○　定量的な追究へと課題が発展するように，温度や量，位置や大きさ，重さや速さなどの量的変化が中心教材と大きく異なる教材を選定する。

▼　基本的な活動構成

基本的な活動構成を，「つかむ」「調べる」「まとめる」の３段階で設定する。「つかむ」段階は，中心教材での具体的活動を行い学習課題をつかむ。「調べる」段階には，①観点や方法を自由に変えて自然事象に働きかける追究活動，②条件設定や量的変化に着目し観点や方法をより焦点化した追究活動，③形状や量的変化が中心教材と異なる教材を選定した追究活動を位置づける。「まとめる」段階は，目的や観点，方法を自由に選択した自由課題選択活動を位置づけ，科学的追究力の自覚やきまりの有用性を実感させる。特に，「調べる」段階では，事象と事象とを比較したときに起こる矛盾，事象に対する自分の解釈と友達との解釈の違いで起こる矛盾等から学習課題を設定できるようにする。そのために，上にしめした教材の選定・提示を行ったり，量的変化に向かう助言や発問を行ったり，イメージ図の交流を行ったりする場を設定する。

▼　科学的追究力が高まる年間計画の工夫

理科の年間計画作成の基本的な考え方を受け，第５学年の年間計画を構想する。５年生の自然事象への働きかけは，定性的追究から条件設定や量的変化に着目した定量的追究に向かう。その際，学習課題を設定したり，構想を立てたり，器具や機器を用いた観察，実験など，科学的で計画的な追究力が必要となる。Ｂ領域の３つの単元は科学的追究力がより高まる後半に集中的に位置づけ，子供が取り出すであろう要因が少ないものから多いものへと配列し，計画的な追究が高まるようにする。「おもりの動き」の学習は，課題選択単元であり科学的で計画的な追究力がもっとも高まった最後に位置づける。「物の溶け方」の学習は，「てこ」の学習での上皿天秤の測定技能が生きるように「てこ」の学習の後に行う。

3　指導の実際

第５学年　単元
物の溶け方

▼　単元の考え方

本単元のねらいは，水に物が溶けるときの規則性についての考えをもつとともに，物が水に溶ける現象に興味・関心をもち，それらの規則性を追究する計画的，科学的追究力を育成することがねらいである。この学習での内容は，①ものが水に溶ける量には限度があること，②ものが水に溶ける量は水の量や温度，溶ける物によって違うこと，この性質を利用して溶けている物を取り出すことができること，③物が水に溶けても，水と物とをあわせた重さは変わらないことの３つである。これらの内容を子供自らが主体的に追究していくために，子供たちにとって身近な食塩を中心教材に位置づけ，食塩が溶ける様子を観察するという具体的な活動の中での気づきから学習課題を設定する。そして，自分なりに観点や方法を自由に考えた見通しで多様に働きかける活動を行ったり，水の量や温度に焦点化した見通しをもとに，条件設定をしたり量的変化に着目したりといった定量的な追究へ向かうようにする。

▼　単元の目標

○　水の温度や量による溶け方の違いを追究する過程で，自己の見通しや働きかけを実証性・合理性の観点から見直すことができる。　（主体性）
○　自分の見通しをもとに調べ，物の溶け方の規則性についての考えをもつことができる。　（創造性）
○　物の溶け方の違いを調べた結果や考えを相互に話し合い，物の溶け方のきまりを共有したり，吟味したりすることができる。　（社会性）

単元	B-(2)「てこ」	B-(1)「ものの溶け方」	B-(3)「おもりの動き」（課題選択）
活動の高まり	・体感をもとにした定性的追究から，てこ実験器や天秤を使った定量的追究へ	・溶ける溶けないという定性的追究から，温度や量，溶ける物を変化させての定量的追究へ	・ゲームをもとにした定性的追究から，おもりの重さや速さなどを変化させた定量的追究へ
課題設定	力の加わる位置，大きさの２つの要因からの課題設定	水の温度，量，溶ける物の３つの要因からの課題設定	・重さ，糸の長さ，ふれ幅からの課題設定と重さ，速さからの課題設定
連動の考え	あらつ学習では，達成課題解決を図る上で探究課題が生じる。また探究課題を追究していくなかで実践化に向かう達成課題が生まれる。このように課題は変化するし，それに応じて計画を立て追究していくことになる。本研究での，定性的あるいは定量的な課題設定力，働きかける見通しをもつ計画力といった資質・能力が，あらつ学習を展開していく際に総合的に生きて働くものと考える。		

図２　段階的に学習を高めていく第５学年の年間構想

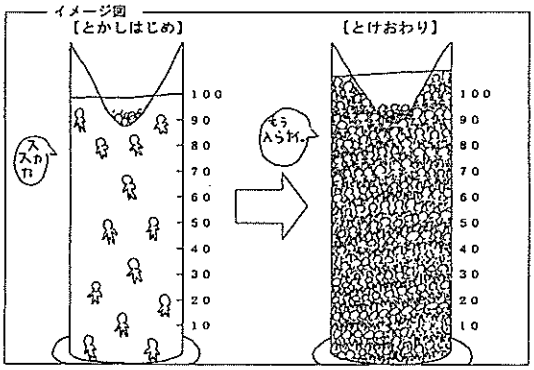
▼ 学習の流れと考察

第１次：１～２／12時
　食塩の溶ける様子を観察し，学習課題について話し合う。

① 食塩が溶ける様子を観察する



写真１　食塩のモヤモヤが少なくなってきた。



資料１　食塩の限界に対するイメージ図

第２次：３～10／12時
　学習課題を連続発展させながら，食塩の溶ける限度，温度や水の量の変化による食塩の溶け方，食塩を溶かす前後の重さ，ホウ酸の溶け方について調べる。

② 食塩が溶ける限度について調べる

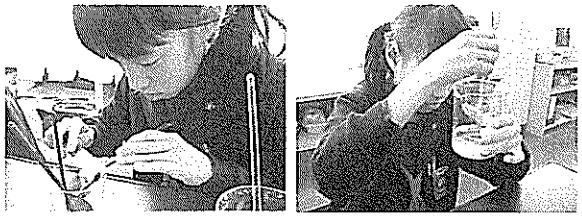


写真２　ここまでが食塩が溶ける限度かな

③ 温度を変化させたときの食塩の溶け方と水の量を変化させたときの食塩の溶け方を定性的・定量的に調べる。

第１次では，食塩が溶ける様子に出合わせ，食塩の溶ける限度についての課題意識をもたせることをねらいとしている。食塩が溶けるシュリーレン現象に出会った子供たちは，「モヤモヤがどんどん下に落ちて溶けていく」「もう食塩がなくなった」と，食塩が溶けることとモヤモヤがでることを関係づけ，時系列的な見方で観察を続けた。しばらくすると「食塩が溶けるのが遅くなった」「モヤモヤも少なくなってきた」と食塩の溶け方の変化に気づいていった。最初はどんどん溶けていた食塩が急に溶けづらくなり，食塩の粒が溶けずに下の方にたまっていく。「どうして」という疑問を抱きながらも溶ける様子を観察する。そしてそのときの様子を資料１のようなイメージ図に描き，食塩が溶ける量には限界があるのではないかという学習課題をつかんだ（資料２）。

> 溶けはじめは水に対して食塩が少ししか入ってなくて，スカスカの状態だったけど，溶けおわりは食塩がいっぱいでスペースがなくなりもうこれ以上溶けない状態になっていると思います。どのくらいで限界になるか調べたいです。

資料２　食塩の溶ける限界に対する学習課題

考察１

食塩が溶けるシュリーレン現象を観察し，その様子をイメージ図に描かせたことは学習課題をつかむ上で有効であった。

第２次では，食塩の溶ける限度を追究する中で，溶け残った食塩を溶かす課題に取り組んだり，温度や水の量を変化させたときの食塩の溶け方を定量的に調べたり，また，溶かす物を変えて溶け方を調べたり等，子供自らが学習課題を連続発展させ自然事象への働きかけが高まることをねらいとしている。

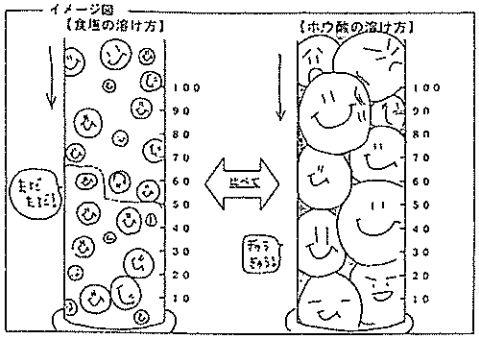
一定量の水に溶ける食塩の量には限度があるという考えをもった子供たちは，「薬さじすり切り一杯が0.8gだからそれで何倍溶けるか調べる」「1gずつ入れて調べる」「食塩はたくさん溶けたからはじめは5gくらい入れてそれから順に減らしていく」などの溶かす方法を自由に変えて，食塩が一定量の水に溶ける限度を調べていった。結果を交流する中で「水100mlには，35g～40gくらい溶ける」というきまりを共有した。しかし，これだけの差があることが問題になり，「薬さじすり切れで調べたからほんの少しずつではあるが誤差がでてきたと思う。上皿天秤で正確に計ることが大事だと思った」と自分の働きかけを客観性という観点から見直そうとする創造性の育ちが見られた。

食塩が溶ける限度をとらえた子供たちには，どうにかして溶け残った食塩を溶かしたいという思いが生じていた。「水の量を増やすと新しく溶けるスペースができるから溶け残った食塩を溶かすことができるはず」「紅茶を飲むとき暖かい方がよくとけるから温度を上げると溶けるはず」と水の量と温度に着目した学習課題をつかみ，観点や方法を自由に変え溶け残りの食塩を溶かしていった。水の量を増やしたり温度を上げると溶け残りの食塩が溶けたが，「何度で溶けたのか」「何ml水を増やすと溶けたのか」という温度や水の量と食塩の溶ける量との定量的な関係が問題になり，「温度を上げたり，水の量を増やし



写真３　温度を12℃から100℃にあげても2.6gだけ

⑤　ホウ酸の溶け方を調べる。

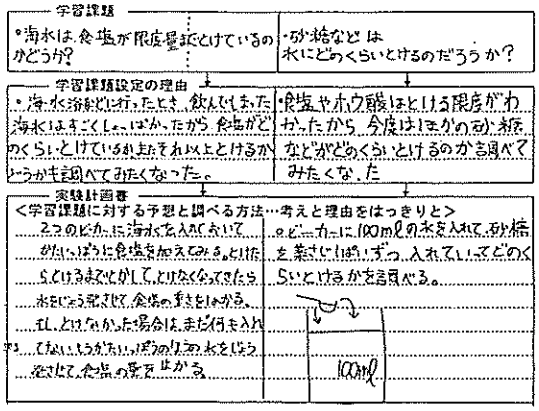


資料３　ホウ酸の溶け方に対するイメージ図

④　食塩を加える前後の重さを調べる

第３次：11～12／12時

自己課題選択活動を行う。



資料４　Ｙ児の実験計画書

たりしたときの食塩の溶ける量を調べよう」というように定量的な学習課題をつかんだ。

食塩の溶ける量と温度との関係を調べるＩ児は「熱していると水が蒸発していくからラップで水が蒸発しないようにして調べる」という計画を立てた。100℃まで温度を上げても2.6gしか増えないことから「食塩は温度を上げても溶ける量はほとんど変わらない」という結論を導き出した（写真３）。また，「水の量を２倍に増やすと溶ける量も２倍になる」という見通しのもと追究し，水の量と食塩の溶ける量との比例関係を見出した。ここに計画力を発揮した自己追究の姿が見られる。

食塩以外の物の溶け方を調べたいという思いを持ち始めている子供たちにホウ酸のシュリーレン現象を提示した。食塩の溶け方とは明らかに違うことに気づき，その違いを資料３のようなイメージ図に表した。そして，「ホウ酸は食塩より溶ける限度が小さい」という考えでホウ酸の溶ける限度調べを行った。さらに，温度変化によるホウ酸の溶け方，水の量の変化によるホウ酸の溶け方という課題を連続させながら，溶ける物の種類によって溶け方が違うことを定量的に追究していった。

考察２

多様な追究から要因を取り出し，より定量的な追究に向かうような発問，子供の追究活動に沿っての問題を喚起させる事象提示などきまりの不十分さを感じさせる発問や事象提示を行ったことは，子供が課題設定力や計画力を発揮し食塩やホウ酸の溶け方を連続発展的に調べていくことにつながった。また，その過程で自己の働きかけをふり返る主体性の高まりも見られた。

第３次では，調べる目的や方法を自由に選択し，物の溶け方を調べる自由選課題択活動に取り組み，子供自らが科学的追究力の高まりを自覚することをねらいとしている。

定性的な追究から定量的な追究へと追究活動を高めたり，食塩からホウ酸へと学習対象を変えたりして追究してきた子供たちに，「もっと調べたいことは？」と投げかけたところ，「砂糖がどれくらい溶けるか調べたい」「海水にどれくらいの食塩が含まれているか調べたい」など自分の学習課題を明確にし，調べる目的や方法を実験計画書にまとめ（資料４），自由課題選択活動に取り組んだ。そして「自分の方法でうまくいった。海水にはもっとたくさんの塩が溶ける」というまとめをした。

考察３

自由課題選択活動を位置づけることで，資料４に示すように課題設定力，計画力などの科学的追究力の高まりが見られた。これが，創造性の育ちと判断できる。

全体考察

以上のことから，活動構成に応じた課題設定の有効性が成果として考えられる。それは，①子供にとって身近な食塩に出合わせ，食塩が溶ける様子を観察しその様子をイメージ図に表現・交流させたこと，②限度の追究からから溶け残るという新たな事象に出合わせたこと，③食塩と溶け方の著しく異なるホウ酸を提示し，食塩の溶け方と比較させるイメージ図に表現させたこと，④自由課題選択の場を位置づけたことなどである。以上のような，活動構成に応じた課題設定の場を位置づけたことで，子供の課題意識が途切れることなく発展し，自然事象への働きかけも定性的な追究から定量的な追究へと高まりながら連続発展したのである。その結果として，資料や写真にあるように主体性，創造性の育ちが発揮された姿が見られたのである。

社会科学習の＜ふくおかプラン＞

1　社会形成者として社会のあり方を構想する学習を

1　社会科が担う役割・立場

「調べて，理解する」から「調べて，考える」へ。これからの社会科の鍵となる言葉である。では「何を」「どのように」調べ，考えるのか。調べる対象は，地域社会であり，国土・産業であり，政治や国際である。調べる方法は具体的な観察，調査，白地図，年表など実に多様である。考える対象は社会的事象の事実相互の関係や特色，意味である。さらに地域社会，国家，国際社会の一員として自覚を高め，これからの社会のあり方や社会での自分のあり方を考えることが社会科の役割である。

このことから，豊かな人間の育成をめざす本校〈ふくおかプラン〉での社会科の役割は大きく二つある。まず社会的見方・考え方を豊かにすることである。価値観の多様化，多情報化社会の現在，一つの情報のみで判断を行うことは偏った社会観や世界観をつくりかねない。社会的事象を様々な立場や側面から詳細に見つめることが求められているのである。二つ目は社会科での学び方，特に調べ方を培うことである。社会的見方・考え方を豊かにし，調べ方を高めていくことで，子供は社会的事象の意味を自らのかかわりから進んで追究し，地域への誇りや愛情をもったりすることができるのである。

2　社会形成者として社会のあり方を構想する学習とは

社会形成者として社会のあり方を構想するとは

> 社会の一員としての自覚をもち，事実を多面的に収集活用したり，事実相互の関係づけを行ったりして今後の社会のあり方や自分の社会とのかかわり方を公正に判断すること

と考えている。事実を多面的に収集活用するとは，社会的事象を立場や側面，条件から調べるということである。事実相互の関係づけを行うとは，事実同士の因果や包摂，理由などの関係を明らかにすることである。今後の社会のあり方を公正に判断するとは，現在の社会の様子を把握し，そのよさや問題点をもとに，これからの社会をどう考えたらいいのかを考えることである。つまり，社会的事象を多面的に分析し，事実相互の関係から現在のよさや問題点を見出すことで，「これからの社会に大切なことは何か」「どのようにかかわればいいか」を客観的に考えることである。そのためには次のような資質や能力を高めることが求められる。すなわち，社会生活の問題を見出し，かかわろうとする当事者としての意識（主体性），社会的事象にかかわる事実を立場や側面から調べていく追究力，事実相互の関連や構造を明らかにし，

表１　社会科学習で特に　大切にする資質・能力

資質能力				中　学　年	第　５　学　年	第　６　学　年
主体性		当事者意識		地域社会の一員としての自覚から地域社会の事象に進んで働きかけ，問題を見出す。	国土保全や産業発展への願いから，社会的事象に進んで働きかけ，問題を見出す。	歴史や政治国際に関わる事実に自分との関わりから進んで働きかけ，問題を見出す。
	創造性	思考・判断	事実判断	地域社会の仕組みを具体的な体験から正確に把握する。	国土保全や産業発展の仕組みを体験や資料からとらえる	歴史の背景や政治国際の仕組みを具体的資料でとらえる
			関係判断	地域社会の仕組みと働きの関係を考える。	国土の保全や産業発展の仕組みと働きの関係を考える	人物の行い，政治国際の仕組みと働きを構造的に考える
			価値判断	現状の特色からこれからの地域社会のあり方を考える。	現状から今後の国土保全や産業発展のあり方を考える。	歴史上の人の業績や政治国際を広い視野から考える。
		理解		地域社会の社会的事象の価値を実感的に理解する。	国土保全や産業発展の事象の価値を実感的に理解する。	歴史や政治国際の社会的事象の価値を実感的に理解する
		追究力		地域社会の事実を具体的な観察調査をして調べる。	国土保全や産業発展の事実を具体的な資料から調べる。	歴史や政治国際の事実を具体的な資料から調べる。
	社会性	愛情		地域社会をふるさととして感じる。	国土の保全や産業発展への願いをもつ。	歴史を尊重し，国際社会を大切に感じる。
		自覚		地域社会創造の役割を実行しようとする。	国土保全や産業に働きかけようとする。	歴史を残し，国際社会に貢献しようとする。

これからの社会のあり方や自分の関わり方を考える判断力と理解（創造性）が求められる。この主体性と創造性が相互に高まる学習を通して，地域社会や国家，国際社会への愛情を抱いたり，一員としての自覚を高めたりすることができるのである。（社会性）

具体的には次のような子供の姿を想定している。

○　社会的事象と自分の生活とのかかわりやズレを見出し，進んでかかわろうとする子供　（主体性）
◎　社会的事象を様々な観点から調べ，それらの関係や構造から社会的事象の意味や特色を見出しこれからの社会のあるべき姿を考える子供　（創造性）
◎　地域社会，国家，国際社会の一員として，よりよい社会を形成しようとする子供　（社会性）

3　社会科学習における学びの連動の考え方

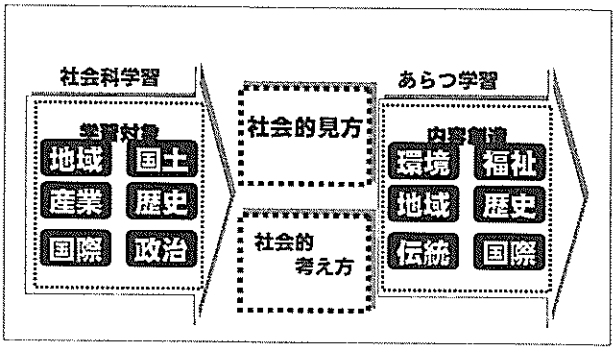
▼　あらつ学習との連動の考え方

社会科学習とあらつ学習は，子供がかかわる学習対象が類似しているため，子供の個々の活動を見ても共通点が浮き彫りにされ，社会科とあらつ学習の相違点を見い出せずにいる場合がある。しかし，学習原理から考えると社会科学習とあらつ学習では大きな違いがある。それは社会科学習が文化の継承，拡充という立場から学習内容が最低基準として学習指導要領に示され，子供が社会的事象の価値を追究していくのに対して，あらつ学習では子供自らが追究したことをもとに内容を創造することである。つまり，社会科学習では学習の到達点が明確に示されている系統的な学びであるのに対して，あらつ学習では到達点が個々で異なるという構成的な学びということなのである。

このようにあらつ学習と社会科学習の違いを明らかにし，さらにこれからの社会科で大切にされる「調べて，考える」力，すなわち「調べ方」と「見方・考え方」の育成ということから，社会科学習とあらつ学習の連動について考えると，次の二つの類型をあげることができる。

① 社会科学習での見方・考え方が生かされる場合

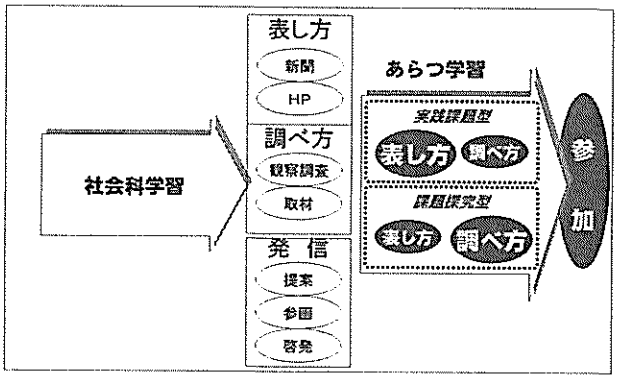
社会科で学習した地域の特色や国土産業，歴史の特色という理解内容についての見方・考え方があらつ学習に連動する。特にあらつ学習では，環境や福祉，国際社会，郷土・歴史・伝統といった内容を包含した素材を対象にした学習の場合に連動することを期待し，あらつ学習を位置づけていく。位置づけ方としては，同時期に位置づけ，見方・考え方が随時連動していく場合と，下図のように社会科学習の後に位置づける場合を構想する。この連動の姿は，特に追究したことから内容を創造していく探究課題型のあらつ学習の場合に見出すことができる。



② 学び方が生かされる場合

社会科学習での資料収集・分析・整理・再構成という資料活用力や，人へのインタビューという取材の仕方，事実を新聞などに考えを織り交ぜながらまとめていくという表し方，社会的事象への提案や参画，啓発といった発信の方法が連動する。資料活用能力や取材の仕方は探究的課題型のあらつ学習の中で，表し方は報告会や提案や社会に参画をする実践的課題型のあらつ学習の中での連動が期待できる。また社会科での地図作製技能といった技能もあらつ学習の中で生かされることになる。

この場合には，中学年では社会科学習での学び方を想起させるような教師の支援を行い，学び方が適宜発揮できるようにしていく。



以上，大きく二つの連動を考えることができる。ここで留意すべきことは社会科学習とあらつ学習を融合したり，統合したりしないように位置づけることである。それぞれの学習の役割や立場，学習原理をふまえたうえで配列していくことで，相互的かつ螺旋的な効果を生み出すことを期待することができるのである。

（藤野　俊明）

表１　社会科とあらつ学習との学びの連動例

社会科学習		あらつ学習
○　第５学年「大丈夫？福岡市の水」の学習内容	⇔	○　「未来に残そうきらめく博多湾」の環境問題へ
○　「アジアに開かれた福岡県」の活動の楽しさ	⇨	○　「博多のおもしろ外国人さんとふれあおう」へ
○　第３学年「あらつ探検！」の地図の読みや作成	⇦	○　「あらつウォークラリー」の地図活用・作成技能

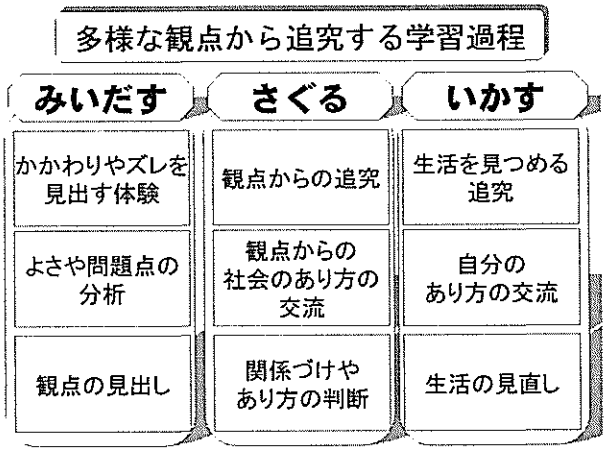
2　多様な観点から追究する活動プラン

社会科部　藤　野　俊　明

1　学習プランの考え方

▼　多様な観点から追究するとは

まず，観点とは「子供が追究する社会的事象の意味や特色をとらえる立場や側面，条件等の着眼点」をいう。立場とは，販売者と消費者といった社会的事象に対する位置である。側面とは火災での消火と防火といった人の営みを形づくる要素である。条件とは工業地帯の分布の立地的・人的などの人の営みを規定するものである。次に，多様な観点とは「社会的事象をとらえる着眼点が一面的なものから複眼的なものになること」ととらえ，多様な観点から追究するとは，「社会的事象を複数の立場や側面，条件から調べることで事象の特色や意味を考えること」である。例えば，地域の販売活動を販売者と消費者の立場で追究すると，価格や鮮度，流通経路といった人々の工夫を見出せる。また消火と防火の側面から追究すると，火災時の取り組みと日常的な取り組みから，消防署の働きや願いを明らかに出来る。さらに工場の立地条件を追究することで，原材料の確保や地域相互のつながりを見出すことができる。つまり，多様な観点から追究することで，社会的事象を多面的に調べ，社会的事象を構成する事実相互の関係を明らかにして事実を構造化し，社会的事象の特色や意味を見出したり，社会への公正な判断をしたりできるのである。



▼　多様な観点から追究する活動プランとは

多様な観点から追究する活動とは，「社会的事象のよさや問題点を分析する活動から学習問題と観点を見出し，観点毎に追究し，今後の社会のあり方を交流する学習」と考えている。具体的には，まず社会的事象の概要の把握とよさや問題点の分析を行うことで，学習問題と観点を見出させる。次に観点をもとに追究させていく。この際，子供がもつ観点は学習内容に応じて一つであったり複数であったりと変化する。観点が立場であれば観点は一つであり，追究後の交流では観点の比較による共通点と相違点の見出しが中心となる。対して側面や条件が観点となった場合には観点は複合的になり，追究後は観点相互の関係を見出す交流となり，事実相互を構造化していくことになる。このように学習内容から追究の観点を細分化して見出させ，追究・交流させていくことで，社会的事象の意味や特色をとらえさせることができる。さらに学習問題と観点の関係を明らかにして追究させていくことで，自分の位置や役割を明らかにし，よりよい社会のため，かかわろうという態度を養うことができると考える。

2　学習プランの具体的構想

▼　教材化について

多様な観点から追究させるため，以下の手順で観点を見出させていく。まず，学習内容から追究する社会的事象を決定する。次に社会的事象を分析し，よさや問題点から学習問題を決定する。そして，以下の学習問題の類型により，追究の観点を明らかにする。

【これからの社会の理想を考える学習問題】
人の立場を追究の観点とする。
【これからの社会の方向性を考える学習問題】
社会的事象を構成する側面を観点とする。
【これからの社会の具体策を考える学習問題】
社会的事象を規定する条件を観点とする。

表２　多様な観点から追究する学習の活動構成

	みいだす	さぐる	いかす
学習活動	1　社会的事象に出あい，社会的事象のよさや問題を見出す。 (1) 社会的事象と出合い，自分とのかかわりをとらえる。 (2) 事象にかかわる体験をする。 (3) 事象のよさや問題を分析し，追究の観点をもつ。	2　社会的事象のよさや問題へのあり方を調べ，意味や特色を考える。 (1) 社会的事象がもつよさや問題の対策を観点にそって調べる。 (2) 社会的事象がもつよさや問題へのあり方を観点にそって出し合い意味や特色を考える。	3　自分の役割について話し合い，生活に戻したり発信したりする。 (1) 自分のできることについて話し合う。 (2) 自分の役割を実行したり発信したりする。

▼ 基本的な活動構成

学習過程を「みいだす」「さぐる」「いかす」の3段階で構成する。

「みいだす」段階では，社会的事象と子供の生活とのかかわりを生み出すように出合わせる。次いで社会的事象にかかわる体験的活動を通して，社会的事象とのかかわりやズレをまとめ学習問題を設定させる。そして学習問題への予想や学習問題解決の計画を立てさせ，立場，側面，条件といった観点を見出させる。

「さぐる」段階では，追究の観点から，単独の観点や複合的な観点からGTへの取材や見学や調査などの追究活動を行い丹念に調べさせていく。そして，これからの社会の理想や方向性，具体策といった学習問題にそって，立場や側面，条件を比較させたり，関係づけさせたりして話し合わせ，社会的事象の意味や特色を明らかにさせるとともに，自分の役割を判断させる活動を行わせていく。

最後に「いかす」段階では，自分の役割でできることを話し合わせ，生活に戻したり，発信させたりしていく。

▼ 年間計画の工夫

中学年では，生活科との接続や子供の空間認識や歴史認識の広がり・深まりを考慮して身近なものから広がり，深まりのあるものへと配列をする。具体的には第3学年では身近な地域，地域の仕事，地域の安全を守る人々の仕事という内容から，第4学年では，健康な生活や安全な生活を守る人々の仕事，地域の人々の願い，県の特色という内容へと配列する。

第5学年では，国土を核としながら，1学期では国土に生きるという主題から第1次産業について，2学期では国土をつなぐという主題から，第2・3次産業について，3学期には国土を守るという主題から公害と水資源について展開をする。第6学年の歴史学習では，歴史のある福岡市の地域教材及び人材を活用して，博多を拓くという主題で学習を展開していく。政治の学習では，地域を拓くという主題で公共施設の建設などを取り上げていく。さらに国際社会に関する学習では，国や世界を拓くという主題で，アジア地区の拠点としての福岡市や日本の役割を他国とのつながりや国際的取り組みから日本の役割を他国との関係や国際的取り組みからとらえるようにする。

3 指導の実際

第3学年　単元
地域のわざを受けつぐ人々
―今津人形芝居を伝える中村さんたち―

▼ 単元の考え方

本小単元のねらいは，福岡県の伝統的な文化財である福岡市西区の今津人形芝居を保存する中村さんの取り組みのよさや願いを，人形芝居を伝承する中村さんたちの立場と人形芝居を見る市民の立場から調べさせ，文化財の保存継承には人々の願いが込められていることをとらえることである。そのために次の活動を設定する。みいだす段階では，実際に今津人形に触れ，中村さんに人形芝居の発祥について取材したりすることで，今津人形芝居のよさを見出させていく。さぐる段階では，中村さんの50年間の継承の理由を中村さんと地域の人々から探らせ，地域の文化財への願いを明らかにさせる。いかす段階では，福岡市の文化財や伝統行事を調べさせ，文化財や伝統行事に共通する願いを見出させていく。

▼ 単元の目標

○ 今津人形芝居に関心をもち，今津人形芝居の保存に取り組む人々の営みを調べることで，地域の文化財や年中行事にかかわっていこうとする態度を身につけることができる。（主体性）

○ 今津人形芝居の保存にかかわる取り組みが続いてきた理由を伝承者の中村さんやお客さんの観点から調べ，文化財に込められた地域の人々の願いについて判断することができる。（創造性）

○ 今津人形芝居を保存する中村さんたちの取り組みや地域の人々の願いをもとに，地域に継承される文化財や年中行事を大切にしていこうとすることができる。（社会性）

表３　段階的に自覚を高めていく年間構想（中学年）

	第３学年			第４学年		
ねらい	地域社会の広がりや人々の仕事について調べ，市町村という地域の特色を空間的にとらえる。			人々の仕事や願いについて調べ，市町村県という地域の特色を空間的・時間的にとらえる。		
	１学期	２学期	３学期	１学期	２学期	３学期
学習内容	地域のひろがりについて調べ，地形的社会的条件について考える。	地域の仕事について調べ，他地域とのつながりや自分とのかかわりを考える。	地域の安全を守る仕事について調べ，関係諸機関の働きと人々の工夫を考える	地域の健康な生活を維持向上させる仕事を調べ計画的協力的な役割を考える。	地域に伝わる人々の業績等を調べ，生活向上への人々の願いを考える。	県の様子を位置生活，産業，他地域とのかかわりから調べ，特色を考える。
自覚	地域社会での自分の位置の自覚 ／ 地域社会での自分の役割の自覚 ／ 地域社会での自分の役割の発信					

▼ 学習の流れと考察

第１次：１～４／13時
今津人形芝居に出合い，今津人形芝居が続いてきた理由をさぐる観点を明らかにする。

① 今津人形芝居にかかわる体験をする。



写真１ なかなかうまく動かせないなぁ。

② 今津人形芝居が続いてきた理由を話し合う。

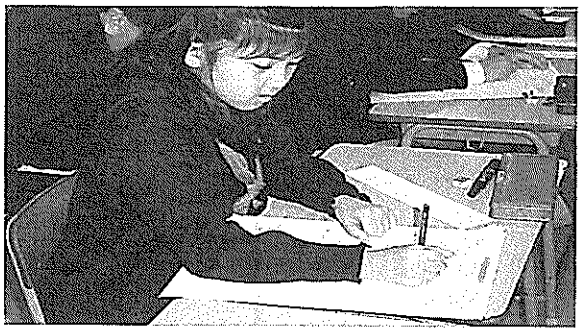


写真２ 昔は楽しみが少なかったからでは？

第２次：５～10／13時
今津人形芝居が続いてきた理由を伝承者やお客の立場から調べ，今津人形芝居に対する人々の願いを明らかにする。

③ 保存会や地域の人に取材をする活動



写真３ どうして何度も見にいくのですか？

第１次は，今津人形芝居や今津人形芝居保存会の中村さんと出合う体験的活動を通して，今津人形芝居のよさを客としての立場から調べていくことをねらいとしている。

そのためにまず，今津人形芝居の様子をビデオで視聴させた後，今津人形に触れたり，今津人形芝居保存会の中村さんに取材する体験を設定した。（写真１）実際に人形にふれ，中村さんに取材する子供たち。取材の中で人形を動かすためにクジラのヒゲを使っていたり，上手に動かすために地域の子供とともに練習をしていることをとらえていった。

クジラのヒゲが使われているなんて知りませんでした。人形をあつかって楽しかったけれど，動きがむずかしいなと思いました。わたしもげきをしてみたいなと思いました。

資料１ 今津人形にかかわる体験後のＮ児の感想

体験後に今津人形芝居のよさを分析する場を設定した。しかけの楽しさや160年という歴史や時代背景から人形芝居が地域の楽しみだったよさをとらえる子供たち。反面「言葉が難しくてわかるのか」「楽しみがある今でも続いているのはなぜか」という疑問も出，学習問題「言葉が難しくてわかりにくい今津人形芝居が今まで続いてきたのはなぜだろう」を設定した。問題解決のために「お客さんに芝居の内容が伝わっているのか聞かないといけない」「中村さんがどうして続けているのかを調べたい」と客と伝承者の立場から追究する見通しをもった。

C1 練習しているのはわかるけれど，言葉が難しいからわからないと思います。ビデオでもわかりにくかったです。

C2 でもお客さんに伝わらなかったら160年も続いていないと思います。昔ならテレビとか楽しみが少ないからいいけど，今はテレビとか楽しみがあるからです。

資料２ 今津人形芝居のよさが伝わっているのかという交流

考察１

資料１からＮ児の今津人形芝居追究への意欲と，人形操作の困難さを客と同じ立場からとらえていることがわかる。これは実際に人形を操作させる体験を行った成果である。また資料２から中村さんへの取材や人形芝居が隆盛だった当時の暮らしをとらえていることがわかる。これらから，人形にかかわる体験後の今津人形芝居のよさの分析が有効であったと考える。

第２次は，学習問題の解決に向け，保存の様子や今津人形芝居の評判を中村さんや地域のお客さんの立場から調べさせ，今津人形芝居への人々の願いを考えさせることがねらいである。

そのために，現地で今津人形芝居保存の取り組みや評判を中村さんやお客さんに取材する活動を設定した。

私は今津人形芝居の楽しさがお客さんに伝わっていると思いました。お客さんは昔の言葉がわかると言っていたし，感動すると言っていたからです。だからお客さんのそんな声があるから今まで続いてきたのだと思いました。

資料３ 地域のお客さんへの取材後のＮ児のノート

④　今津人形芝居が160年も続いてきた理由を話し合う活動

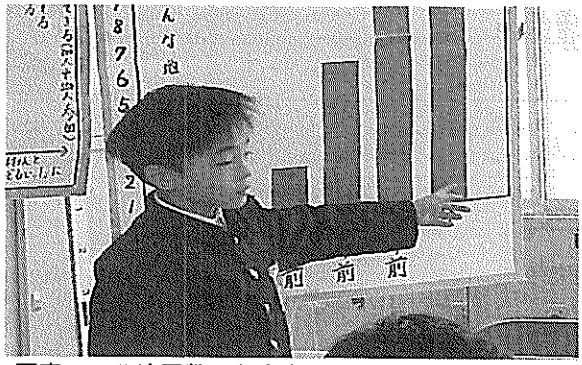


写真５　公演回数でお客さんの楽しみがわかります。



写真６　今津人形芝居の資料館を作ってみなさんにもっと知ってもらいたいのです。

第３次：11～13/13時
福岡市の祭りや技から人々の願いを見出す



写真７福岡市のまつりやわざには願いがあるんだね。

見学後，学習問題について中村さんの立場からとお客さんの立場から話し合わせていった。中村さんを招待し，中村さんの立場（C1）とお客さんの立場（C2）から160年続いた理由を話し合う子供たち。その中で今津人形芝居が中村さんたち伝承者と地域の人々の共通の楽しみだったことをとらえていった。さらに中村さんがお客さんの評判や協力を支えに，より広く長く地域の伝統を継承するために，資料館を建設したいという願いをもっていることに共感していった。

C1　人形芝居を好きだからだと思います。わけは中村さんが道具を作っているからです。それは人形芝居をわかりやすくしたいからだと思います。
C2　わかりやすくに付け加えるのだけれど，お客さんに聞いてみたら，地域のものだからずっと続けてほしいと言っていました。昔はテレビやラジオもなくて，楽しみが少なかったし，お客さんの声を聞いているから中村さんは50年もやってきたのだと思います。

資料４　「なぜ160年も続いているのか」についての交流

考察２

資料３をみると，N児は中村さんが50年間人形芝居を続けている理由をお客さんの評判を励みにしているととととらえており，中村さんたちの努力を別のお客さんの立場から調べたことが有効であったことがわかる。また資料４では追究した立場に当時の生活を付加して考えることもできており，立場での追究の有効性を見出すことができる。

第３次では，福岡市内の年中行事や文化財について調べ，発祥の理由や当時のくらしという視点から話し合わせることで，古くから伝わってきていることは人々の生活安定や向上の願いがあることを見出させていった。

私は今津人形芝居や山笠やどんたくなどの古くからのわざやまつりがあって福岡市のれきしはいいなと思います。それは、人がふれあって、がんばったり協力したりできるし，地域の人たちの大切な願いが込められているからです。私もこのような昔からのわざを大切にしたいです。

資料５　学習後のN児のノートの一部

考察３

資料５からN児が福岡市の歴史につたわる文化財や年中行事のよさをとらえていることがわかり，今津人形芝居を窓口にして福岡市の歴史をとらえさせたことが有効であったと考える。

全体考察

資料５を見ると，地域の伝統を大切にしていきたいという願いをN児が高めていることがわかる。それは今津人形芝居で中村さん達が伝えるための努力をしてきていること，人形芝居存続の理由を伝承者とお客さんたちの立場から追究し，双方の立場に共通した地域発展の願いを見出してきたこと，さらにいかす段階で福岡市のまつりやわざを調べさせ，共通点を話し合わせることで，地域の伝統を大切にしたいという願いを高めることができたと考えることができる。これらのことから，今津人形芝居を伝承者と客という立場から追究させ，共通の願いを見出させることで地域の伝統芸能を大切にしていきたいという願いをもたせることができたと考える。

以上のことから，地域の伝統芸能への今後の自分のかかわり方を判断させるために，伝承者とお客さんという観点から追究させ，願いを見出させたことが有効であったと考えることができる。

家庭科学習の＜ふくおかプラン＞

1　家庭生活への参画の仕方をつくり出す家庭科学習を

1　家庭科学習が担う役割・立場

家族の人数が少なく，生活経験も少ない子供たちに，家族の人間関係や家庭の機能を理解させることは大切である。自分のために何かをする，家族のために何かをする，家族と共に何かをするという経験が少ない子供たちは，積極的に人や物事にかかわり生活をよりよくしていこうとすることができない。家庭科は，よりよい生活を実現していくために，家庭生活をどのように工夫していくかを追究していく教科である。そのためには，自分の家庭生活への関心をもち，家庭生活を工夫するために必要な基礎的な知識や技能を着実に身に付けていくことが必要である。生活をよりよくするためには，その基盤となる家庭生活を見つめることから学習が始まる。家庭生活は家族とのかかわりのなかで営まれているものである。家族の一員としての自分を振り返り，自分の家庭生活の在り方を見直していく。そのなかで自分でできることはないか，自分でできるようになるためには何を身に付けていったらよいのかを考えていく。そして，学習を通して身に付けたことを家庭生活のなかで生かしていくことで，家族の一員としての自覚が高まっていく。家族の一員としての自覚をもてるようになると，子供はもっと家庭生活を工夫したいという願い・思いをもつようになる。このことは，さらに新しい知識や技能を獲得しようとする自ら学ぶ力を高めていく。その意味から，家庭科学習において表１に示したような主体性，社会性，創造性は，密接に関連しながら高まっていくと考える。

2　家庭生活への参画の仕方をつくり出す学習

学習したことを家庭生活で活用できることに気付き，実践する喜びを味わうことができた子供は，家庭生活をよりよくしたいという意欲が生じる。「家庭生活」とは，衣食住などの生活及び時間，家族などがかかわり合って構成されている生活である。自分の生活は様々な生活の事実によって成り立ち，家族などの協力によって営まれている。「家庭生活に参画する」とは，よりよい家庭生活をつくり出すために，衣食住や家族の生活などに関す

表１　家庭科学習で特に大切にする資質・能力

<table>
<tr><th colspan="3"></th><th></th><th>５　学　年</th><th>６　学　年</th></tr>
<tr><td rowspan="8">主体性</td><td rowspan="7">社会性</td><td rowspan="5">創造性</td><td>家庭生活への参画の仕方を自ら学ぶ力</td><td>○　家庭科を学習することの意味が分かり，自主的に学習を進めていく。</td><td>○　自分の学びを見つめ，家庭科を学ぶ意味からよりよい家庭生活をつくり出していく。</td></tr>
<tr><td>家庭生活への関心</td><td colspan="2">○　衣食住や家族の生活や時間など，家庭生活を支えているものが分かる。</td></tr>
<tr><td>家庭生活を工夫する力</td><td>○　家庭生活について見直し，家庭生活の課題を見つけ，その解決をめざし考え工夫する。</td><td>○　家庭生活を取り巻く，近隣の人々とのかかわりについて見直し，身近な生活の課題を見つけ，その解決をめざし考え工夫する。</td></tr>
<tr><td>生活に必要な基礎的な技能</td><td colspan="2">○　衣食住や家族の生活などに必要な基礎的な技能を身に付ける。（易→難）
○　自分の学習の目的に応じて身に付けた製作や調理などの技能を日常生活で活用する。（易→難）</td></tr>
<tr><td>生活に必要な基礎的な事項についての理解</td><td colspan="2">○　衣食住や家族の生活に関する基礎的な知識を身に付ける。（易→難）</td></tr>
<tr><td colspan="2">家族の一員としての自覚</td><td>○　家族のなかの自分をより一層意識しながら，家族とのかかわりを考え実践する喜びを味わう。</td><td>○　家族の一員として，家族と協力して家庭生活をよりよくしようとする</td></tr>
<tr><td colspan="3">学び合う力</td><td>○　友達と協力して学習する。</td><td>○　友達の工夫のよさが分かり，お互いに学び合う。</td></tr>
</table>

る内容について，自分を見つめ，自分らしい家庭生活へのかかわり方を見つけ，実現しようとすることである。「家庭生活への参画に仕方をつくり出す」とは，よりよい生活を実現するために，家庭生活に関する既存の知識や技能を生かし，自分ができる工夫を考え実践することである。また，実現のために必要となる知識や技能を見出し新しく身に付けていくことで，自分の家庭生活に合った工夫を実践できるようになることである。その過程で，家族のなかの自分をより一層意識しながら，家族とのかかわりを通して実践する喜びを味わえることが大切になる。そこで，家庭科学習では，次のような３特性が育った子供の姿をめざしている。

○　よりよい家庭生活をつくり出すために，自分自身の家庭生活へのかかわりを見直し，家族の一員として自分らしいかかわり方を求め自己実現する子供（主体性）

◎　自分や家族の思い・願いをもとに，家庭生活に参画するための自分なりの家庭生活へのかかわり方を見出し，衣食住や家族の生活に必要な基礎的な知識や技能を拡充する子供（創造性）

○　よりよい家族関係をつくり出すために，家族の一員としての自覚をもち，家族とのかかわり方を考えていくことができる子供（社会性）

このような子供の姿をめざすためには，表１にまとめた資質・能力を大切にし，系統的に高めていかねばならない。そのため，家庭科学習では，自分の学習の目的に応じて身に付けた知識や技能を生かすことができるように，実践的・体験的な活動を通して基礎的な技能の定着を図り，技能を活用することで工夫して主体的に生活していけると考える。

3　家庭科学習における学びの連動の考え方

▼　家庭科学習のカリキュラムづくりの視点

家庭科学習は，家庭生活を対象としている教科である。自分の家庭生活をよりよくするために，自分の家庭生活のなかにある課題を見出し追究していく学習である。子供一人一人の生活背景や実態は異なっている。家庭生活のなかから見出してくる課題も多様になってくる。家庭科学習で身に付けた知を生かし家庭実践を行っていくなかで，家族の一員としての自覚が高まっていくためには，次のようなことに留意し，題材を配列していくことが必要であると考える。

○　子供の家庭生活の背景を調査し，興味・関心や知識・技能などの実態をとらえる。その実態をもとにより重点化し，必要となる内容を取り出す。そして，基礎的なものから応用的なもの，単純なものから複合的なものへと内容構成を２年間のなかで考える。例えば，食生活への参画の仕方をつくり出していくためには，「食事への関心」と「簡単な調理」の内容の関連を図ることが必要になる。２年間のなかで，自分ができることを増やしていくことで，一食分の食事を作れるようになることをめざして内容を構成する。そのためには，家庭科の入門期にある５年生では，図１のように題材を配列し，調理操作などの基礎的技能を身に付ける内容で構成する。６年生では，５年生で身に付けたものを応用して一食分の食事を作れるように題材を配列する。

○　「家庭生活と家族」の内容からスタートし，各題材を見通す課題意識をもたせる。年間を通して，常に図１のように「家庭生活と家族」の内容である家族の一員として家庭生活をよりよくするための自分なりの工夫をするための課題を振り返らせ，創造性の高まりを実感させる。

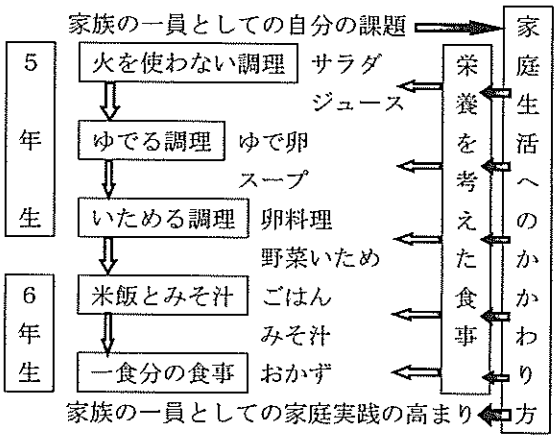


図１　２年間を通した題材の配列

▼　家庭科学習から考えられる内容の連動

家庭科学習とあらつ学習は，子供の生活から求めが想定されるという点では，類似した内容が生じてくる。例えば，「気持ちのよい生活をしたい」「環境を考えた生活を考えたい」という求めに対して，家庭科学習では家庭生活をよりよくすることから考えるとどうか，環境に配慮した家庭生活の工夫から考えるとどうか，ものを大切にすることから考えるとどうかという面から学習をしていくことが必要である。そこから子供自身が，家庭だけでなく地域のごみはどうなっているのだろうと関心を広げていく。このような場合，家庭科学習とあらつ学習を連動させることによって，自己追究を相乗的に高めることが期待できる。類似した内容が想定される求めから考えられる題材として，「栄養（健康）を考えた食事の工夫をしよう」などがあげられる。家庭科学習では，自分や家族，家庭生活を栄養の面で見直すことから内容を追究していく。あらつ学習では自分の体と健康の面から内容を追究していく。

2　家庭実践をめざし，調理を工夫する家庭科学習プラン

家庭科部　木　村　真　美

1　学習プランの考え方

▼　家庭実践をめざし，調理を工夫するとは

家族の一員としての自覚は，家庭で実践するなかで芽生えてくるものである。「家庭実践をめざす」とは，家庭で実践することを目標に，自分が身に付けている知識や技能を駆使したり，新しい知識や技能を身に付けることによって，よりよい生活を実現するための課題を追究し解決していくことである。「調理を工夫する」とは，家族のなかの自分を意識しながら家族のための調理を計画することで，自分らしい家庭生活へのかかわり方を見出していくことである。「家庭実践をめざし，調理を工夫する」とは，家族の一員として食事を作れるようになるために見出した自分の課題を追究し解決していくなかで，家庭生活に必要な技能を使いこなす意味やおもしろさに気付いたり，技能を活用する自信をもったりすることで家庭実践する意欲を高めていこうとするものである。そのためには，子供一人一人の生活に応じた課題を設定することが必要である。子供一人一人の家庭にはそれぞれの生活があり，それぞれの家庭の思い・願いや一人一人に身に付いている技能も異なっている。そこで，自分の家庭生活を見つめ，自分の家庭生活へのかかわりから課題を見つけることが大切になる。

▼　家庭実践をめざし，調理を工夫する学習プラン

家庭実践をめざしていくためには，家庭生活への関心や家族とのかかわりが大切になってくる。自分の家庭生活へのかかわりから見出した個人課題を大切にしていくことが，よりよい家庭生活をつくり出そうとしていくことにつながる。家族の一員として家庭の食生活に協力していくために，家族の健康や好みを考えた調理の工夫を追究していく。そこで，図２のように自分の家庭生活から課題を見出し，自分や家族とのかかわりを考えながら課題を解決していくように学習を構想する。また，自己追究の過程が家族の一員として適切であるか，目的に合っているか自己評価，相互評価することで振り返らせていく。そのなかで，新しく身に付けていく基礎的な知識や技能を共通課題として設定する。共通課題を解決していくことで，個人課題を解決していく方法がさらに明確になるようにしていく。

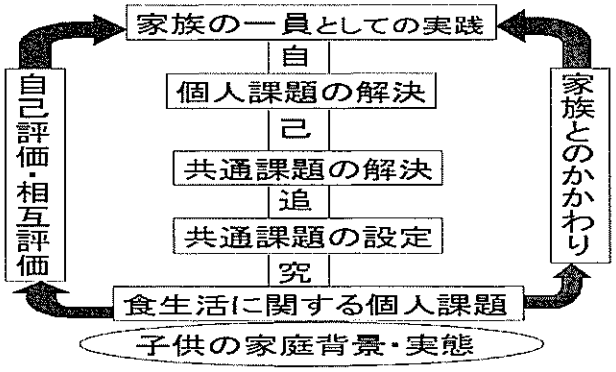


図２　家庭実践をめざし，調理を工夫する学習

2　学習プランの具体的構想

▼　食生活に関する題材化について

家庭実践をめざし調理を工夫していくためには，子供の実態を踏まえ，家族とのかかわりから自分の方法を工夫できる題材の条件を次のように考える。

表２　家庭実践をめざし，調理を工夫する学習の活動構成

	新しいメニューの開発（自己追究） 個人課題の追究 ⟶ 共通課題の追究 ⟶ 個人課題の解決		
段階	つかむ	さぐる	つくる
活動と内容	1　新しいメニュー開発のための個人課題から共通課題をつかむ ○　食生活に参画するための自分の課題をつかむこと ○　共通課題を見つけること	2　個人課題を解決するために克服すべき共通課題を解決するための調理実習をする。 ○　基礎的な知識や技能を習得すること	3　家庭実践のための試しの調理実習を行い，実践の計画を立てる。 ○　家庭の食生活への参画の仕方の自分なりの考えをもつこと ○　家庭実践の計画を立てること
手だて	※　モデル調理の提示 ※　比較活動の設定 ※　家庭科だよりの発行	※　手順表の作成 ※　ペア学習による一人一実習 ※　自己評価，相互評価の場の設定	※　課題別学習の場の設定 ※　家庭実践カードの工夫 ※　家庭科だよりの発行

○　家庭実践の計画を休日に予定し，２年間を通して一食分の食事を整えることができる題材を設定する。
○　調理の操作などの基礎的知識，技能を習得することで作ることができる題材を設定する。
○　家族の健康や好みに合わせた工夫ができる教材を選択できる題材を設定する。

▼　個人課題のなかの共通課題を解決するとは

家庭生活を工夫していくことができるようになるためには，既習を生かしていくことだけでなく，新しく習得していく知識や技能を身に付けることが子供の求めに生じてくる。そこで，新しく習得する知識や技能を共通課題として取り出す。自己追究の過程で課題解決のための方法を，既習と未習から交流し整理していくことで共通課題をつかませる。共通課題は個人課題の一部である。したがって，共通課題を解決したことによって，個人課題の一部が解決し，自分が作ろうとする調理のメニューの具体的な解決の見通しをもつことができる。共通課題を解決する過程で，自分の追究の仕方を振り返り，新たな個人課題を発見したり個人課題を解決する方法を見直していくことができる。

▼　モーニング作りの年間計画の工夫

自分のできることを増やしていく手段として，栄養のバランスや家族の好みに合わせた工夫ができる教材を選び，モーニング作りのメニューをふやしていく年間の計画を立てる。また，新しく獲得するものが含まれた内容のメニューを設定する。また，確実に技能が定着するように繰り返して学習をしていく内容と新しく身に付けていく内容を考えた年間計画を構想する。そして，家族とのかかわりから学習が展開し，家族の一員としての解決を考え家族とのかかわりを更新させていく。

3　指導の実際

第5学年　題材
あったかスープであったかモーニング
－家族に贈るマイモーニング－

▼　単元の考え方

本題材は，家族の一員として基本的な技能を身に付け，日常生活で活用することがねらいである。つまり，①家族のために実践しようとする態度を育てる，②家族の健康や好みを考えたゆでる調理の計画を立て，調理の工夫をしたりする，③調理用具の安全な取り扱いができ，目的に合った洗い方，切り方，味の付け方で調理することができる，④食品に含まれる栄養素の種類や働きとゆでる調理のよさが分かることである。そこで，ゆでる調理を使ったスープ作りを教材とする。家庭生活に参画していく方法を考えてきた子供たちにとって，スープが作れるようになることで，家族の思いや願いを達成できることに気付いていくことができ，自分なりの工夫をする。

▼　単元の目標

○　家族の健康や好みを考えたスープを工夫し，家庭実践しようとする態度を育てる。　（主体性）
○　ゆでる調理やスープのよさが分かり，計画を立てて手順よく調理をすることができる。　（創造性）
○　家族の一員として協力するために，家族のためのスープ作りの計画を立てることができる（社会性）

表３　モーニングのメニューをふやていく年間構想

<table>
<tr><td></td><td>１学期</td><td>２学期</td><td>３学期</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">増やしていく内容</td><td>私の家庭生活</td><td colspan="2">家族に贈るマイモーニング</td><td>私の家庭生活</td></tr>
<tr><td>モーニングにそえる一品，野菜サラダ</td><td>栄養満点，元気もりもり野菜いため</td><td>あったかスープであったかモーニング</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="3">生野菜のサラダ → ゆでる調理 → ゆでる調理
・水からゆでるもの → ・沸騰してからゆでるもの
いためる調理 → ・ゆでる順序
・いためる順序 → ・ゆで汁の味の付け方
味の付け方（調理後） → ・味の付け方
○　自分や家族の思い・願い　　○　家族の一員としての協力</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="4">繰り返し内容</td><td colspan="4">○　栄養のバランス　　○　家族の好み　　○　家庭の知恵</td></tr>
<tr><td colspan="4">○　必要な分量と手順を考えた計画　　○　材料の洗い方，切り方，後片付けの仕方</td></tr>
<tr><td colspan="4">○　盛り付けや配膳</td></tr>
<tr><td colspan="4">○　調理に必要な用具や食器の安全で衛生的な取り扱い及びこんろの安全な取り扱い</td></tr>
</table>

▼ 学習の流れと考察

第１次：１～２／９時

これまでの家族に贈るマイモーニングを振り返り，スープ作ることができるようになることで家族のための朝食のメニューを増やしていこうとする。

① モデルスープや家庭調査から，家族に贈るあったかスープの計画を立てる。

朝食で作るメニューを増やして，いつも忙しいお母さんを楽にしてあげたい	栄養たっぷりあったかスープ
仕事で疲れているお父さんに栄養のあるものを作って元気になってもらいたい。	あったかお腹いっぱい野菜スープ
好き嫌いのある弟でも食べれるようなものを考えて作りたい。	具だくさんほっとHOTスープ
家族の好きなものを使って朝食を作れるようになって喜んでもらいたい	

資料１　家庭生活を振り返ってもった作りたいスープ

② 家族に贈るあったかスープを作れるようになるための共通課題をつかむ。

一人分の分量
ゆでる調理
　水からゆでる食材…にんじん，タマネギ
　沸騰してからゆでる食材…キャベツ
ゆで汁の味の付け方
　コンソメを使ったスープ

第２次：３～５／９時

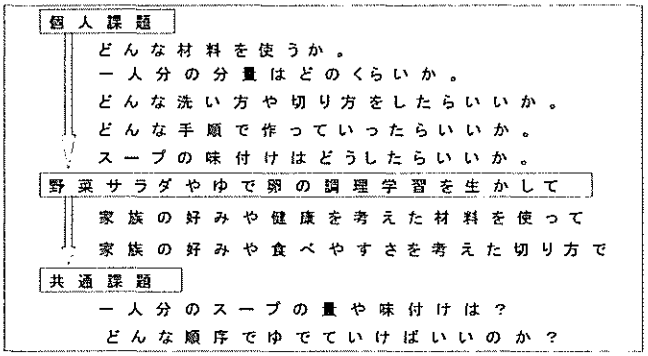
ゆでる調理を使ったスープ作りができるようになるための共通課題として，水からゆでるものと沸騰してからゆでるものを選択して，ゆで汁をコンソメで味を付けたスープ作りをする。

① 家族のために選択した食材から，手順表をもとに，共通課題解決のスープ作りをする。



写真１　次は何を入れるのかな。

第１次は，家族の一員として，朝食のメニューにスープを作りたいという目的をもち，栄養のバランスや家族の好みを考えたスープを作れるようになるための個人課題を見出すことをねらいとしている。そのために，モデルスープを味わったりゆでる調理やスープのよさを考えたりしていった。そのことで，資料１のような栄養いっぱい野菜たっぷりのあったかスープを作りたいという目的意識や栄養のバランスや家族の好みを考えた食材を選び，個人課題をもった。そして，それぞれの個人課題の解決の方法について話し合う場をもったことで，資料２のように既習と未習が整理でき，ゆでる調理を使ったスープが作れるようになるための共通課題があることに気付いていった。



資料２　個人課題から共通課題へ

考察１

モデルスープを試食させたことは，ゆでる調理やスープのよさを体感させることができ，これから自分が作ろうとするスープの具体的なイメージをもつことにつなげていくことができた。また，既習と未習を整理させたことは，共通課題の存在を感じ取らせることに有効であった。

第２次は，個人課題を解決するために克服しなければならない共通の課題を解決し，ゆでる調理の基礎を身に付けることがねらいである。そのために，家族のために選択した食材から水からゆでるものと沸騰してからゆでるものから各１つずつ選択し，ゆで汁にコンソメで味付けをしたスープ作りに取り組んでいった。また，同じ食材を選択した子供同士でペア学習を行い，手順表をもとに相互評価しながらスープ作りを行っていった。そして，整理した課題を記したチェックカードで自分の共通課題に対する追究の仕方を自己評価していった。そのことで，資料３のように個人課題を解決するための方法が分かり，資料４のようにレシピを完成させて家族のためにおいしいスープを作りたいという思いをもった。

あったかスープが作れるようになるための項目	自分	友達
にんじんはサイコロ切りにできたか。	◎	◎
キャベツはななめ切りにできたか。	△	○
にんじんは水からゆでたか。	○	○
キャベツは沸騰してから入れたか。	○	△
ゆで汁の味はよかったか。	◎	◎
飲みやすいスープになっていたか。	△	△

資料３　チェックカードによる自己評価・相互評価

② 自分や友達の課題解決の仕方を振り返る。



写真２　私の作り方はどうだった。

第３次：６～９／９時
家族の健康や好みを考えたあったかスープの試し調理を行い，家庭実践の計画を立て直す。

① 家庭実践のための試しの調理をする。



写真３　刺さった，にんじんがきれいに煮えた。

② 課題解決したことから，家庭実践の計画を見直す。

学校で作ったのよりずいぶんうまく作れ，家族も喜んでくれたのでとてもうれしかった。家族みんなが喜んでくれる食べ物を自分一人で作れたことが，自分でもすごいなあと思う。

資料６　家庭実践した後の子供の感想

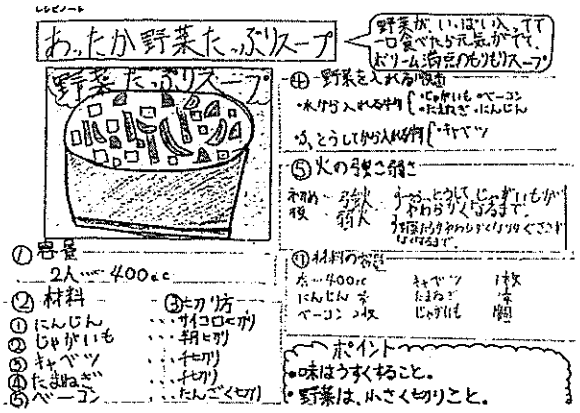
私が作ろうと思っていたスープのことがもっと分かってきました。にんじんに火が通ってなかったので，もっと小さく切って煮えたかどうか味見をしてからタマネギを入れていきたいと思います。キャベツも少し生っぽかったので，もっと小さく切って時間を決めて，家族が喜ぶスープのレシピを完成させていこうと思います。

資料４　共通課題を解決した後の子供の感想

考察２

家族のために選んだ食材から，共通課題を解決する試しの調理実習を行ったことは，ゆでる調理の順番やゆで汁の味の付け方を実感することに有効であった。また，相互評価を取り入れたことは，計画に沿った調理実習を促し，切り方によるゆでる時間や味の違いに気付くことができたとともに自分の調理に対する自信をもたせることができた。

第３次は，共通課題で解決したことをもとに家庭実践をめざす個人課題を解決するためのスープ作りをねらいとしている。そのため，家族の健康や好みを考えた食材で，家庭実践のための試しの調理実習を行った。資料５のように改善したレシピをもとにスープ作りに取り組んでいった。



資料５　家庭実践をめざして改善したレシピ

考察３

自分の調理の課題からレシピを改善していくことは，自分の課題が明確になり，自分に合ったスープ作りをする上で有効であった。家庭に合ったスープの試し作りを行ったことは，目的をもってスープ作りに取り組むことにつなげることができた。また資料６のように役立つ喜びを味わい，自分ができるものを増やしたいという意欲を高めていくことができた。

全体考察

自分の家庭生活を見つめ，自分の家庭生活から個人課題を見出し課題解決していったことは，家庭実践への意欲をもたせることに有効であった。個人課題を解決する上で，未習の内容を共通課題として設定し解決していったことは，調理の基礎的な技能を身に付けていくことができ，個人課題を解決するための方法の見通しをもつことにつなげていけた。課題解決する過程で家族とのかかわりを考えていったことは，誰のためのどういう工夫を考えていくのか目的が明確になり，家庭実践への意欲を高めていくことができた。また，家庭実践をめざしたことで，家庭実践することに意欲的に取り組むことができ，家族からのアドバイスや賞賛を受けたことで，家族の中の自分の存在価値に気付くことができ，家族の一員として家庭生活への参画の仕方を工夫しようとする態度を育てる上で有効であった。

生活学習（生活科）の＜ふくおかプラン＞

1　心豊かに生活を拓く生活学習を

1　生活学習（生活科）が担う役割・立場

現代社会においては，少子化や地域社会の喪失などの状況が子供たちを取り巻き，自然体験や勤労体験，人とふれ合う体験など様々な体験不足が指摘されている。

しかし，子供たちは，元来，自分を外の世界に解放し，積極的にまわりとかかわっていこうとするエネルギーに満ち溢れた存在である。そのエネルギーは，惜しみつつ使うといったものではなく，使って面白ければ，さらに力が湧いてくるという無限の広がりを秘めている。低学年の子供たちが具体的な活動や体験を通して学ぶ生活科学習は，この子供の大いなるエネルギーを生かし，自分自身が為すことを通して，「気付き・知り・分かる」ようになり，生活や学習において「できる・使える」ようになることが大切である。そこで，私たちは，教科としての特質に十分配慮しつつも，子供にとっては総合の学びとして展開する学習としてとらえ，生活科を「生活学習」として〈ふくおかプラン〉に位置付けることにした。

2　心豊かに生活を拓く生活学習とは

生活を拓くとは，子供が意欲をもって活動に取り組み，そこで身に付けたことを，その後の生活や学習に自覚的に生かしていくことである。それは，自分の目で見たり手で触れたりするなど，対象への働きかけ(主体性)を基盤に据えるということである。子供たちは，具体的な活動や体験を通して，身近な環境とのかかわりを拡げていく。そうして，身の回りには様々なもの・ことがあり，いろいろな人々がいることに気付くとともに，それぞれに独自な対応を考えていく必要性を学んでいくのである。そこで，心豊かにとは，「常に他者に配慮しながら」という感性や態度(社会性)を重視することである。そして，心豊かに生活を拓くなかで，子供が「とらえた感じ方・見方・考え方」や「生み出した気付きや工夫」（創造性）を大切にしていきたいと考える。特に，生活学習においては，低学年児童の発達段階や具体的な活動の重視といった側面から，３特性をバランスよく高めるとともに，

表１　生活学習で特に大切にする資質・能力

		第　１　学　年	第　２　学　年
主体性	かかわり方	○　自分なりの思いをもって，進んで対象に働きかけることができる。 [興味・関心，素朴な疑問からのかかわり]→	○　自分なりの切実な問題意識をもって，対象に進んで働きかけることができる。 [より切実な問題意識からのかかわり]
	試し方調べ方	○　見る，聞く，触れる，作る，探す，育てる，遊ぶなどの具体的な活動や体験を通して，試したり調べたりすることができる。 ※　２年生では，より多様な活動を通して，試したり調べたりできるようにする。	
	表し方伝え方	○　活動の楽しさやそこで気付いたことを言葉や絵，動作，劇化などによって進んで表現し伝えることができる。	○　活動の楽しさやそこで気付いたことを言葉や絵，動作，劇化などの表現方法を選択・工夫して，分かりやすく表現し伝えることができる。
創造性	感じ方	○　対象との出合いにおける驚きや感動，不思議さを素直に感じ取ることができる。 [ある対象から，一時点で]　→　[様々な対象・多方面から，時間的変化から]	
	見　方	○　対象の特徴をとらえたり関係付けたりし，自分にとっての意味を見出すことができる。 [直感的に・実感的に]　→　[振り返り，こだわりやその根拠をもって]	
	考え方	○　自分なりの気付きをもつことができる。（・実感を伴って・自分とのかかわりで） [気付きや工夫の獲得]　→　[気付きの活用，問題解決的な学び方の獲得]	
	見直し方	○　気付きや工夫を表現することで，自分の知恵として獲得することができる。	○　問題を克服している自分自身に気付き，新たな課題追究の方向性を見出すことができる。
社会性	自分らしさ	○　自分自身や生活についての気付きをもち，自分がこれからも伸びていく存在であることを感じることができる。［自分を高めていこうとする感性や態度(自己肯定感，有用感)］	
	他者との協調	○　他者への愛着をもち，調和的に働きかけることができる。 ○　身近な環境とかかわり，生活上必要な習慣や技能を身に付けることができる。	

子供の学びの場面において，より密接に結び付けて高めていくことを大切にしていきたい。具体的には，次のような３特性が高まった子供の姿をめざすものである。

○　自分なりのかかわり方，調べ方，表し方・伝え方などを発揮しながら，思いや願いの実現に向けて働きかけを行っていく子供　（主体性）
○　自分なりの気付きや行動の仕方を見出し，それを身近な人々，社会及び自然とのかかわりのなかで活用していこうとする子供　（創造性）
○　身近な人々，社会及び自然に愛着をもち，他者への優しさを発揮しながら協調的に活動し，自分自身を高めていこうとする子供　（社会性）

このような子供の育成をめざして，「心豊かに生活を拓く生活学習」では，①学校及び地域の特色や子供の実態を十分に踏まえ，子供の生活現実における切実な課題や求めから学習をスタートさせること，②身近な人々とのふれ合いや協同活動を重視すること，③具体的な活動や体験における子供たちの試行錯誤を見守り，課題解決的な学びを支援・保障することを大切にするものである。

３　生活学習における学びの連動の考え方

生活学習における学びの連動を考える際，最も重要なことは，「生活科の基礎・基本の獲得」と「総合としての学びの展開」の両立を図ることである。そこでまず，〈ふくおかプラン〉構想における生活学習の年間計画を具体化する。その上で，子供にとって意味のある活動の展開に沿った学びの連動を図っていくことになる。

▼　生活学習年間計画作成の考え方

①　特に大切にする資質・能力を育む単元開発を行い，系統性を考慮した単元配列を工夫する。
②　児童の実態や地域の特色から，「人とのふれ合い」や「町づくり」を活動の中心に位置付ける。
③「生活科の８つの内容を網羅しているか」という視点から，単元目標や学習内容の再編成を行う。
④「教科・領域との学びの連動」という視点から，単元配列を組み替え，年間計画を作成する。

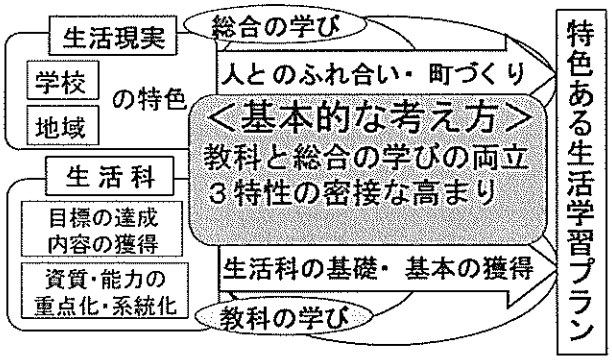


図１　生活学習年間計画作成の基本的な考え方

▼　教科・領域と生活学習の学びが連動する〈低学年ふくおかプラン〉構想

①　特別活動・道徳との連動

子供の学びとしては総合課程の仲間に入る生活学習では，同じ総合課程に属する特別活動や道徳との連動を大いに図っていくことになる。特別活動については，主体性と社会性をより密接に結び付け高める活動レベルでの連動を構想する。また，道徳については，生活学習における体験を基盤に，自分自身の心を問い続けていく連動を構想する。

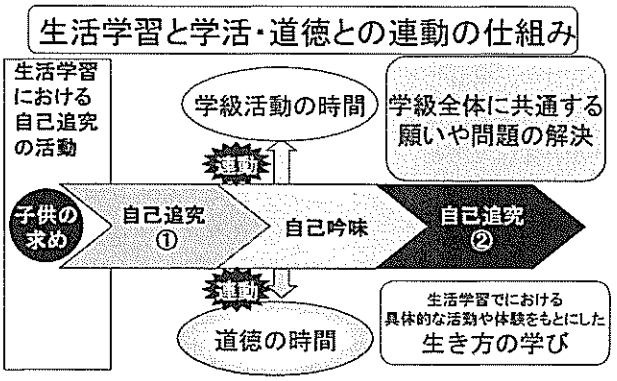


図２　生活学習と特別活動・道徳との連動の仕組み

②　教科との連動

教科学習との連動については，教科学習で培われた知識や技能（創造性）を生活学習において大いに発揮させる連動や，生活学習における対象への興味・関心を教科学習の意欲付けに生かす連動が考えられる。

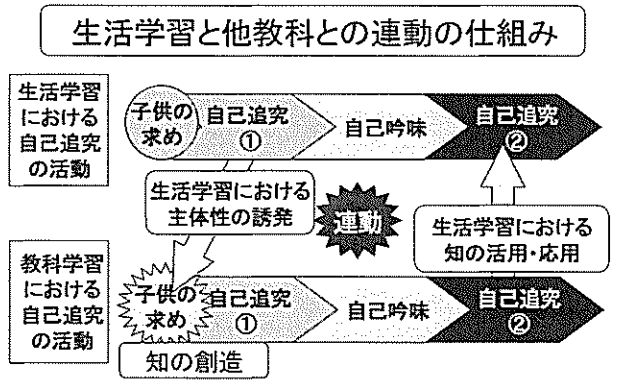


図３　生活学習と他教科との連動の仕組み

▼　あらつ学習への発展についての考え方

あらつ学習への発展とは，〈ふくおかプラン〉構想の「《縦》の連動」を具体化することである。「何が」発展するかということについては，〈ふくおかプラン〉構想における３特性の連続・発展的な高まりに他ならない。そこで，生活学習において特に大切にする資質・能力が，あらつ学習で培いたい資質・能力へと連続・発展するよう配慮している。また，「具体的な活動や体験を通す」という学び方や，「子供の自己追究に基づく意味ある連動の学び」の経験を豊かにしておくことが，あらつ学習の学びの基盤ともなっていくのである。（石田　耕一）

2　身近な対象とのかかわりを創り出す生活学習プラン

生活科部　石　田　耕　一

1　学習プランの考え方

▼　身近な対象とのかかわりを創り出すとは

本研究における身近な対象とは，子供の生活空間としての場や子供を取り巻く具体的な人・もの・ことである。

そこでは，本校周辺の「あらつ」の地域性を十分に生かしつつ，それらを一体的に取り扱うことにより，子供たちが一層多様な活動や体験をできるように配慮する。

この多様な活動の一つ一つには，子供たちと対象とのかかわりが生じる。このかかわりとは，今，目の前にあることとぶつかり，そのものの変容を共にすることである。全身で相手と組み合い，そのなかで自分も相手もごく小さなことであれ，変化していくことを経験していく。その時に，目の前の人やものも変わっていくことが分かっていく。そこに自分も関与し，確かに関与した感覚があり，その手応えを感じることがかかわりの実感であり，かかわりを創り出すことなのである。具体的に，身近な対象とのかかわりを創り出すことを，あらつの地域における人・もの・こととの心的なつながり(愛着)や知的なつながり(気付き)，働きかけの行為としてのつながりを子供が進んで築いていくことであると捉えている。

▼　身近な対象とのかかわりを創り出す学習プランとは

対象への関与の仕方という側面から，子供の活動の姿がより高まっていくように，２年間を構想する。つまり，「より強い求めをもって」「より自分自身の力で」活動を展開していけるように高めていく。例えば，「町づくり単元」についての活動像としての年間の高まりとしては，次のような構想をもっている。(第２学年)

> ○　地域における利用者から，自分の思いや願いをもって進んで働きかける活用者へ　[自己追究]
> ○　地域における自分の楽しみから，明確な相手意識や地域の特色を踏まえたものへ　[自己吟味]
> ○　地域への愛着を深め，地域における有用感・効力感に向けて　[自己更新]

特に本年度は，①自己更新への思いを教科学習への強い求めとして生かしたり，②教科学習で得た知識・技能を自己追究の活動に生かしたりする「子供の求めによる・子供にとって意味のある」連動の在り方を〈低学年ふくおかプラン〉構想において具体化することに研究の重点をおき，３特性の高まりをめざすものとする。

2　学習プランの具体的構想

▼　教材化について

教材化については，①日常生活における何らかのかかわりや対象に対する潜在的な求めがあるか（生活性），②活動における楽しさや素晴らしさなど，子供を揺さぶる内面的価値があるか（感動性），③子供と対象との継続的なかかわりや応答的なふれ合いが可能であるか（継続性・応答性）という３つの視点から「あらつ」の対象の生活学習としての価値を検討する。そこでは，子供にとって，精神的・物理的に身近な対象からはじまり，しだいに対象の範囲を広げていけるように配慮する

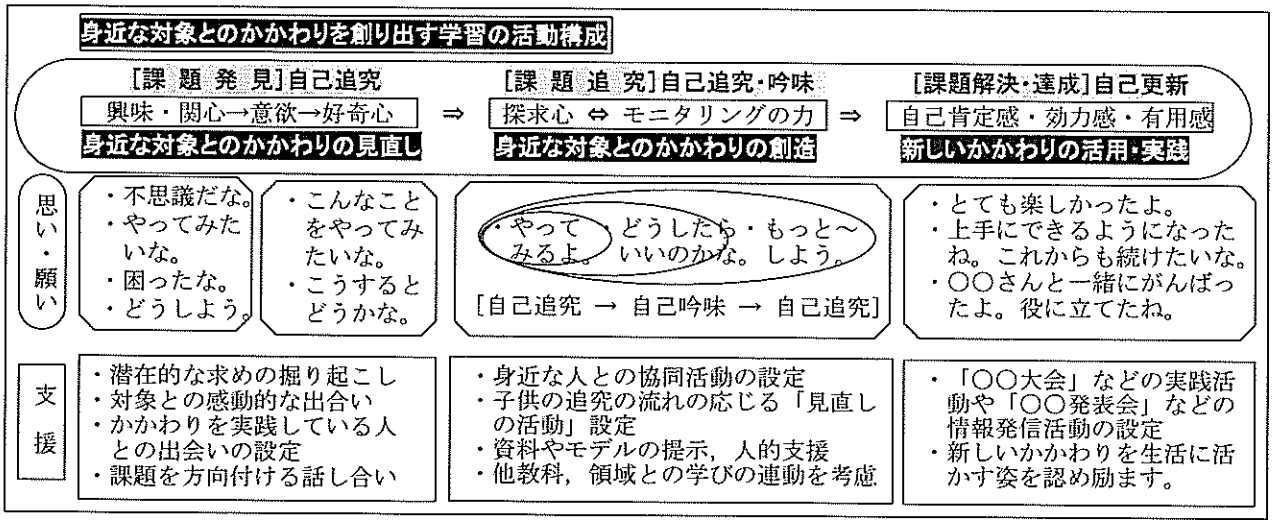


図１　身近な対象とのかかわりを創り出す学習の活動構成

▼ 基本的な活動構成

身近な対象とのかかわりを創り出す学習の活動構成は，「①身近な対象への子供の潜在的な求めや対象との感動的な出合いをもとに，興味・関心，意欲，好奇心，課題意識をもつ活動（自己吟味から自己更新に向けた思い），②対象とのかかわりにおける思いや願いの実現に向けて，身近な人々と力を合わせて課題解決していく協同活動（自己追究），③対象とのかかわりにおける学びを生活に生かしたり，新しい生活を創り出したりする活動（自己更新）」という過程をたどっていく。（図１参照）

そして，このような学びをそれぞれの単元に位置付けることにより，年間を通じて対象とのかかわりを創り出しながら，主体性・創造性・社会性の３特性を密接に結び付け高めていくことができると考える。

▼ 年間計画の運用

２年間の生活学習の年間計画（構想プラン）をもとに，子供とともに活動を展開していく。（実践プラン）そこでは，子供たちの学びの足跡を生活マップや生活暦などに継続的に蓄積し，随時評価を行いながら，次年度への〈更新プラン〉へと発展させていく。また，学びの連動の側面からは，学級担任・専科併用制の利点を生かして，総合課程と教科課程の両面から連動の価値を吟味・検討し，〈低学年ふくおかプラン〉を練り上げていく。

▼ 教師の支援

基本的な３段階の活動構成において，次のような支援を大切にしたいと考える。まず，対象との出合いの場面においては，子供の生活経験や対象へのイメージなどの実態把握を細かく行い，潜在的な子供の求めを掘り起こすような活動を仕組んでいく。また，対象とのかかわりが薄い場合は，対象に対する感動的な出合いを演出する。次に，自己追究の場面においては，試しの活動と見直しの活動が連続・発展するように，つまずきの場面を重要な学習場面として大切にしていく。そこでは，子供自らが課題を克服していく姿を認め励ますとともに，必要に応じてモデル・資料の提示や場の変化など新たな気付きを引き出す支援も積極的に行っていくものとする。最後に，自己更新の場面では，「○○大会」などの実践活動や「○○発表会」などの情報発信活動を設定し，満足感や成就感を十分に味わえるようにするものである。

▼ 生活学習の評価

本研究における評価については，生活学習で特に大切にしたい資質・能力をもとに，各単元において評価基準を作成し，育ちを見取っていく。そこでは，子供一人一人の学びの過程やその子なりの見方・考え方を大切にした肯定的な評価を心がけていくものである。

3 指導の実際

第２学年　単元
ぐんぐんのびる！ぼく・わたし
－成長アルバム発表会をひらこう－

▼ 単元の考え方

本単元は，生まれてから今までの自分自身の成長に気付くとともに，これからの自分を高めていこうとする思いをもつことをねらいとしている。子供たちは，身の回りのもの・こと・人には興味旺盛だが，日常生活において自分自身を意識することはあまり無いと言える。そこで，「自分自身」が子供の求める学習対象として位置付くことが，単元づくりの第１のポイントとなる。そのために，赤ちゃんと出会ったり生まれた頃の様子が分かる具体物に触れたりする感動的な出合いを設定する。第２のポイントは，アルバム作りを子供にとって意味のある自己追究の活動として保障することである。「過去の自分」という時間的変貌のなかでの対象を追究することは，２年生の子供たちにとって難しい活動となる。当然，追究内容の選定や情報収集の仕方，表現の仕方など様々な困難に直面することが予想される。しかし，そのようなつまずきの場面こそが，総合課程の学びを実現する最大の機会なのである。また，そこでは，他教科の学びを子供自らが求めたり，教科で獲得した知識・技能を表現活動で発揮したりする学びの連動の姿を引き出せると考える。それが，第３のポイントである。実践では，国語科学習や学級活動との連動を図っていきたいと考える。

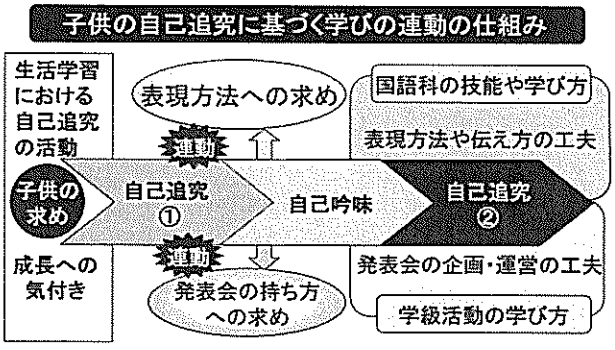


図１　子供の自己追究に基づく学びの連動の仕組み

▼ 単元の目標

○　自分の成長についての気付きを深め，互いを尊重しながら，これからの自分を高めていこうとする思いをもつことができる。（社会性・創造性）

○　自分のテーマに沿った情報収集を進んで行い，表現の仕方を工夫しながら成長アルバムを作り上げることができる。（主体性・創造性）

▼ 学習の流れと考察

第１次：１～３／12時
赤ちゃんと出会ったり，生まれた頃の様子が分かる具体物に触れたりして，赤ちゃんの頃の自分について話し合う。

① 赤ちゃんと出会い，赤ちゃんだった頃の自分について話し合う。

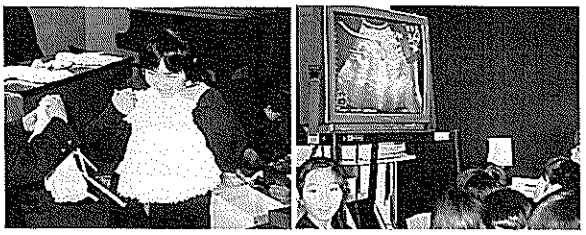


写真１　N．Hくん(赤ちゃん)との出会い

② 思い出ボックスを開けて，生まれた頃の様子が分かる具体物に触れる。



［ボックスを開けたよ］　［手形を重ねたよ］



［服は着れるかな？］　［お母さんの袋の中だよ］

写真２　思い出ボックスを開けたよ

第２次：４～10／12時
家庭における具体物の収集や家族への聞き取り調査を行いながら，工夫して成長アルバムを作り上げる。

○ 共通ページ作り「赤ちゃんの頃の自分」
↓・製作方法や情報収集の仕方の獲得
○ 家族との協同製作活動場面の設定
○ 個人主題ページ作り（テーマ別主題の設定）
○ 他教科・領域との学びの連動
・表現の方法→国語科，会の持ち方→学級活動

第１次は，自分たちが命を受けて生まれてきたことを実感し，生まれた頃の自分について調べようとする意欲をもつことをねらいとした。まず，赤ちゃんと出会ったり(写真１)，自分が赤ちゃんだった頃の写真を見たりするなかで，赤ちゃんなりに精一杯生きていることや自分にもそのような時があったことに気付いていくことができた(M児の感想)。次に，思い出ボックスがあることを告げると，子供たちは目を輝かせながら，赤ちゃん時代の具体物に触れていった(写真２)。このような活動のなかで，Y児のように，「自分の赤ちゃんの頃の様子や現在までの成長について調べていきたい。」という子供の思いが生まれてきた。このような思いを受けて，教師の成長アルバムを提示すると，子供たちは自分の成長について調べたいという意欲や具体的な活動の見通しをしっかりともっていった。

赤ちゃんは，ほっぺたがふわふわしていて可愛いです。手も足も小さいけれど，とても元気がいいです。わたしも，N．Hくんのように，「赤ちゃんの時があったんだな。」と思うと，ちょっと不思議な気がします。（M児の感想）
ぼくは，思い出ボックスを開けたとき，「６年前に使っていた洋服が小さく見えるな。」と思いました。それは，今使っている洋服と比べると，ずいぶん小さいからです。
（中略）赤ちゃんの頃の様子やどんなふうに大きくなってきたのか調べてみたくなりました。（Y児の感想より）

資料１　自分の命や成長を感じ取る子供

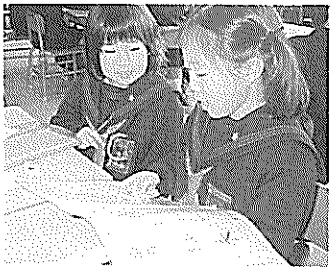
考察１

「過去の自分」，特に「赤ちゃん時代の自分」に興味・関心をもたせる上では，N．Hくんとの出会いの場を設けた後に，子供一人一人に赤ちゃん時代の写真を提示したことが有効であったと考える。また，資料１のように，自分の命や成長の感じ取りをするなかで(創造性)，自分の成長について調べていきたいという思いを膨らませる姿(主体性)が多く見られた。それは，写真２にあるように，「命や成長の感じ取り」という観点から具体物を厳選したことや，成長を体感できる試しの場の設定をしたことが有効であったためと考える。

第２次では，成長アルバム作りを通して，家族の支えのなかで自分が成長してきたことへの気付きを深めていくことをねらいとした。まず，自分の成長アルバム作りについての思いを話し合った。すると，表現内容・方法にそれぞれ違いがあると同時に，共通する思いがあることにも気付いていった。そこで，「赤ちゃんの頃の自分」という主題を共通ページとして一斉に作っていくことにした。その過程において，子供たちは，ページ作りに必要な物や情報は何か，それらをどのようにして集めればよいか，どのような表し方がよいかについての気付きを深めていくことができた。また，家庭における情報収集活動への協力依頼や，協同製作の場(写真３)を設けることで，自分に対する家族の思いや愛情を感じ取りながら，追究を進めていくことができた。そして，共通ページ作りにおいて獲得した追究の



写真３　赤ちゃんの頃の自分ページを一緒に作ろう



見出した改善点

○絵や写真の使い方
○文章表現の仕方
・くわしく
・分かりやすく
［様子や気持ち］
○ページ構成の仕方

写真４　中間発表会での相互交流

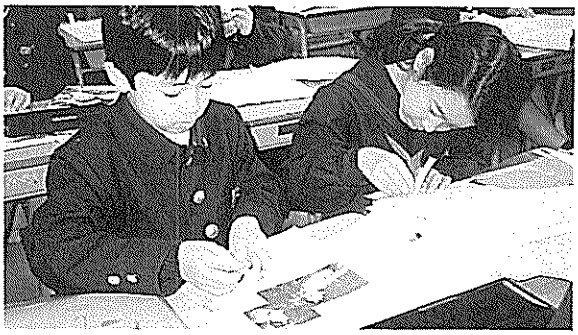


写真５　国語科の学びから表現を練り上げるＹ児

第３次：11～12／12時

成長アルバム発表会を開き，共に成長してきたこと実感するとともに，これからの生活や自分の希望について話し合う。

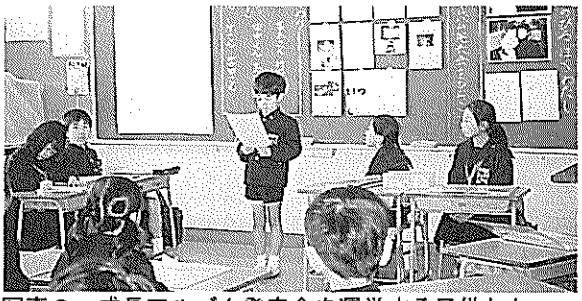


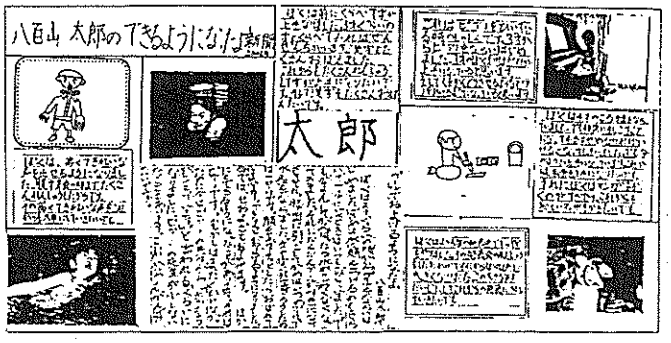
写真６　成長アルバム発表会を運営する子供たち

仕方を活用しながら，それぞれの主題ページについて製作を進めていくことができた。ある程度製作が進んでくると，子供たちは友達同士でアルバムを見せ合っていった。この期をとらえて，中間発表会を開くことを提案した。子供たちは，互いの表現のよさに気付くとともに，なかなかうまく伝わらないという問題点やその原因にも気付いていった(写真４)。そこで，国語科「できるようになったよ」の学習について投げかけると，子供たちは早くその学習を行いたいと乗ってきた。実際，国語科の学習を意欲的に進め，そこで獲得した表現の仕方を自分のアルバム作りに活かし，写真５のように表現を練り上げていく子供の姿を引き出すことができた。そして最後は，子供一人一人が，自分の力で成長アルバムを作り上げることができた。

考察２

成長アルバム作りの見通しを話し合う場面において，共通する主題を見出し，表現内容や表現方法，情報収集の仕方についての気付きを深めさせたことで，子供たちは，そこでの気付きを活用しながら，その後の製作活動を進んで行うことができたと考える。そして，子供の求めに応じる形で中間発表会を設けたことは，友達の表現のよさに気付くと同時に，自分の成長アルバム製作における問題点を浮き彫りにしたり，解決の見通しをもったりする上で有効であった。また，そこでは，自らの学びとして他教科の知識を求め，そこで獲得した知識や技能をアルバム作りにおいて発揮する姿が見られた。子供の自己追究に基づく意図的・計画的な連動の在り方が明らかになってきた。

第３次では，学級活動での学びの力を発揮しながら，成長アルバム発表会を自分たちの力で企画・運営していった。そこでは，「できる自分」という主題のもと成長アルバム作りを行ってきたＹ児(資料２)のように，自分の成長の手応えを自信をもって表現する姿が見られた。(写真６)



資料２　Ｙ児の「できるようになったよページ」

全体考察

子供たちは，自分の表したい主題に向けての情報収集を旺盛に行い，成長アルバムを意欲的に作っていった。うまく表現ができないという場面では，国語科の学習を求めたり，そこで獲得した表現方法を活用したりする姿が見られた。また，発表会では，学級活動で培われた自治的・自主的な運営の力を発揮することもできた。そして，アルバムには，自分が成長してきたことへの気付きや，身近な人々ともにこれからも伸びていこうとする思いが詰まっていた。

これらのことから，①自分自身と出会う際の導入の工夫や「過去の自分」を追究する上での家族との協同活動，②共通課題ページについての一斉解決を行った後に，そこでの知恵を活用して個人主題に取り組ませる活動構成③自己追究の流れに寄り添う生活学習と他教科・領域との連動が有効であったと考える。

あらつ学習の＜ふくおかプラン＞
（本校の総合的な学習の時間）

1　気がかりや願いをもとに自己の生き方を創るあらつ学習を

1　本校の総合的な学習である「あらつ学習」とは

本校は，福岡市のほぼ中央，博多湾に面した所に位置している。この地域は，昔から「あらつの丘」と呼ばれ，外交貿易の窓口として数多くの人に親しまれてきた歴史ある地域である。一方，福岡市の副都心として着実に成長し続けている所でもあり，近代的設備を有した様々な施設を目にすることができる。このように本校が位置する地域は，自然環境，社会環境，文化環境に恵まれた素晴らしい地域である。そこで本校では，このあらつの地名にちなんで総合的な学習の時間を「あらつ学習」と呼び学習を展開している。しかし，あらつ学習は，あらつのもの・人・ことだけを追究の対象にしているわけではない。子供自身が生活の中で直面する様々な出来事を対象に，子供が自ら抱く気がかりや願いを出発点に，自分のこだわりを発揮し，自己を見つめ直しながら生活をよりよくしていこうとする学習として展開されるのである。

▼　あらつ学習の基本的な考え方

小学校学習指導要領に示されている総合的な時間では，①問題解決力の育成②学び方やものの考え方の獲得③意欲的に問題解決活動に取り組む態度④自己の生き方に対する考え方をもつことの４つがねらわれている。本校では，このねらいを自己追究による学びの姿と自己の生き方の更新という２つの側面から考えている。

自己追究による学びとは子供が抱く切実な問題を解決していく活動の姿であり，教科等で培ってきている知を総合化しながら問題解決力を高めている姿でもある。そして，学び方やものの考え方は子供が自分の意志で問題解決的な活動に取り組む過程において培われる創造的な学力であり，意欲的に問題に取り組む態度に支えられていると考える。

自己の生き方の更新とは，自分にとって切実な生活課題を克服し，自分自身のあり方をとらえ直していく姿である。そこには，問題解決的な活動で培われてきた見方や考え方が大きく作用していると考える。

そこで，本校の総合的な学習の時間である「あらつ学習」では，自己追究による学びの姿と自己の生き方を更新している姿を目指し，学習を構想していくことにする。

▼　自己追究による学びの姿が見られること
～スタートは子供たちの足下から～

子供は，「自分らしさ」を見つけ，自分の可能性を引き出し「自分らしくありたい」という自己実現への欲求をもっている。あらつ学習は，この「自分らしさ」を大切にしている。つまり，子供が自ら求め，課題追究を行うときに生じる個性的な思いや願いである「こだわり」を中核にした学習を展開していくのである。

そのため，あらつ学習では，子供たちの足下である生活現実に対する自分の求めである「やってみたい」という実践的な求めや，「どうしてだろう，調べたい」という探究的な求めを出発点に学習を展開していく。このような子供たちの強い求めに支えられた問題解決的な学習の姿こそが自己追究の姿であり，この過程で子供たちのこだわりが発揮され，自分の生活や生き方をよりよく更新していくための問題解決力を培うことができると考えている。

▼　自己の生き方を更新する学習であること
～ゴールは社会課題へと向かうものへ～

子供たちにとって，生活していく上で克服しなければならない社会課題は山積している。しかし，そこには明確な答えは見あたらず，常に，自分自身が思考し判断しながら導き出した自分なりの応えが重要になってくる。つまり，現在取り上げられている社会課題を解決していくために直接その課題に働きかけるのではなく，自分たちの身の回りに存在している問題を自分なりに着実に解決していくことを積み重ねていくことが，結果として社会課題の克服につながるのである。

そこで，あらつ学習では，子供にとって切実な生活課題を対象に，自分なりの見方・考え方や行い方である応えを見出していく学習を展開していく。そして，この応えが単なる自己満足に終わらず，結果的に社会課題へとつながり価値づけられていくような自己の生き方を更新する内容をもつように学習を構想するのである。

このような価値ある応えを獲得していく姿が自分の生き方を更新していくことであり，その過程で，本校が目指す「主体性・創造性・社会性」といった豊かな人間性が育まれていくものと考えている。

2　あらつ学習が担う役割・立場

豊かな人間の育成をめざす教育課程を創造する上で，総合的な学習の時間は，自分の強い求めのもと教科等の学習で培ってきた資質や能力を生活現実という実の場で発揮しながら再構成し，自分の生活を更新していくための資質や能力を伸長することを担う学習である。

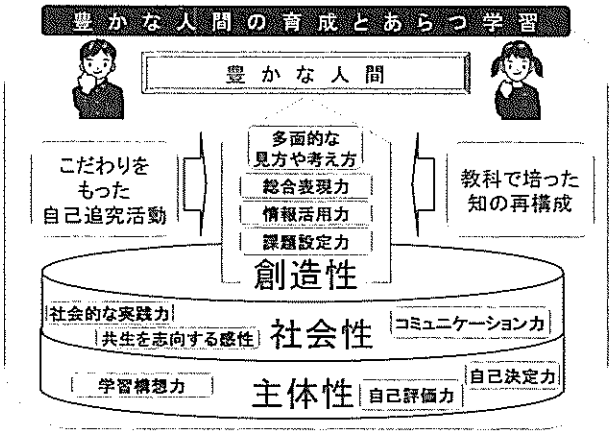


図１　あらつ学習で発揮される３特性

あらつ学習は，教科課程の学習と異なり，複雑で総合的な生活現実を対象に学習を展開していく。そこで，子供が設定した課題に対して学習の主体者である子供自身が自分の状況を的確につかみ，コントロールしていく力（主体性）の育成が重要になる。そして，それらの課題を自分なりに解決していく過程で，自分と社会とのかかわり方（社会性）を身につけ，知の総合化を行いながら追究していく学び方（創造性）を高めていくことを目指すのである。（図１）

▼　あらつ学習で育む子供の姿

あらつ学習は，子供自身の切実な求めを，こだわりを発揮しながら追究したり行動したりする学習である。この問題解決的な学習を通して，教科等の学習で培ってきた知を総合化し，表１にあげるような３特性を調和的に育みながら，自分の生き方を更新していくのである。

あらつ学習では，豊かな人間が兼ね備える３特性が育った子供の姿を次のように考えている。

○　疑問や願いから学習を構想し，自分の追究を価値づけ，今後の指針を見出す子供　（主体性）
○　自分で課題を設定し，情報を活用したり表現したりしながら，既有の知識を活用・応用し，物事を多面的・総合的に捉えることができる子供（創造性）
○　共生の生き方のよさを実感し，よりよい社会や人間関係を創り出そうとする子供　（社会性）

表１　あらつ学習で特に大切にする資質・能力

			中　学　年	高　学　年
主体性		学習構想力	企画…課題解決の予想をもとに計画する。 修正…自分の追究の状況をとらえ，行き詰まったとき新たな方法を考える。	企画…課題に対する応えを想定し計画する。 修正…追究の方法や内容を客観的にとらえ，今後の追究の方法や方向を定める。
		自己評価力	自己理解…自分の取り組みを他者から助言を受けながら客観的にとらえる。 価値把握…自他の追究のよさをとらえる。	自己理解…自分と他者の取り組みを比較しながら分析的にとらえる。 価値把握…追究の応えを肯定的にとらえる。
		自己決定力	他者の生き方のよさを取り入れ，自分の生き方を方向づける。	自分の長所や不十分さを理解し，その原因を考え，生活をよりよくしようとする。
	創造性	課題設定力	興味や疑問から追究可能な課題を設定する。	追究の価値を考え追究可能な課題を設定する。
		情報活用力	媒体選択…取材や体験から情報を収集する。 収集技能…見学や観察，インタビュー，電話の技能やマナーを身に付ける。 情報選択…必要な情報かどうか判断する。	媒体選択…施設や情報機器を有効に活用する。 収集技能…施設利用や情報機器活用の技能やマナーを身に付ける。 情報選択…複数の情報を関係付け，選択する。
		総合表現力	構成…伝えたいことを決めて，順序や事実と意見を区別して表現する。 方法…目的に応じた表現媒体を選択する。	構成…目的意識や相手意識，状況意識をもちこれまで身に付けた表現を工夫する。 方法…自分の意図に応じて効果的に表現する。
		多面的な見方・考え方	経験を基に，情報を比べ，考えを広げる。	得られた事実を分析，関係付け，構造化する。
	社会性	共生を志向する感性	自然や社会と調和する生き方に気付き，規範やルールを自覚する。	様々な社会課題に直面して生きる人間のよりよい生き方について考える。
		コミュニケーション力	周りの状況や相手の立場を考えながら，自分の思いを伝えたり相手の話を聞く。	自他の目的に応じて，自分や相手の立場を明確にしながら他者と意志の疎通を行う。
		社会的な実践力	周りの状況を意識しながら，活動内容を決定し，他者と協力しながら活動する。	周りにどんな影響が生じるか考え，自分の活動を客観的な視点で捉えながら活動する。

2 子供の学びを高める単元づくりと年間計画の作成を

1 あらつ学習の単元づくりの考え方

▼ 単元設定の手順

あらつ学習は，内容先にありきの学習や活動先にありきの学習ではない。子供の強い求めを優先した子供ありきの学習である。そこで，単元設定の手順については以下のように子供の実態に合わせて行うことになる。

① 子供の実態の把握…興味・関心や生活現実の把握
② 内容と活動の想定…高められる３特性の明確化
③ 課題の想定…課題による追究の方向性の想定
④ 出合わせ方の想定…もの・人・ことの活用
⑤ 教師の支援の想定…体験の場や与える情報の整理

また，単元を構想していく上で留意することは，発達段階を考慮し，中学年では，自然体験や社会体験といった具体的な体験が位置付くように学習を構想し，高学年になるにつれて自由課題選択や社会課題に向かっていく探究的な追究が可能になるように学習を構想していくようにしている。

▼ 自己追究を中核に据えた学習の展開

あらつ学習は，子供自身が見出した課題をこだわりを発揮しながら粘り強く解決し，価値ある内容を創り出していくといった，子供にとって意味のあるひとまとまりの自己追究活動を展開していく学習である。

そのためには，①価値ある内容につながる課題設定に対する支援，②自分なりの応えを導き出すための支援，③子供の応えを価値づけていくための支援といった教師のかかわりが大切となる。

▼ 価値ある内容につながる課題設定のために

あらつ学習では，子供自身の生活現実を学習の対象としている。そのために，まず，自分が生活を行う上で生じる気がかりや疑問，興味・関心を掘り起こし，自己追究の方向を決定する課題を設定する活動を大切にしていく。ここでは，主に２つの支援によってあらつ学習で目指す課題設定力を高めていく。

○ 子供たちが疑問を抱くような，もの・人・ことに出合わせること（出合わせ方の支援）
○ 子供たちが取り組みたくなるような，活動のヒントを提案すること（活動提案による支援）

しかし，子供の気がかりや疑問，興味・関心だけでは，子供にとって価値ある課題へとは高まっていかない。そこで，単元を構想していく際には，次の３つの可能性から対象を選定していくようにする。

○ 目標の達成可能性
　子供に身につけさせたい資質や能力が高まるか
○ 追究の実行可能性
　自力での追究が可能であるか
○ 内容が深化・発展する可能性
　価値ある考えや行動に結びつくか

本校では，単元設定について８つの視点を定め，子供の追究内容が深化・発展していくように単元を構想し，子供の生き方の更新を目指している（表２）。しかし，８つの視点を直接の学習内容とするのではなく，結果的にその内容へと結びつく活動を構想していくようにする。

表２ 単元設定の８つの視点 （スコープ）

環境と自分	郷土・歴史・伝統と自分
福祉と自分	生命と自分
健康と自分	情報と自分
国際理解と自分	自分自身の夢や生き方

▼ 自分なりの応えを導き出すために

子供自身が見出した課題をこだわりをもって粘り強く解決していけるように以下のような支援を行い，あらつ学習で目指す問題解決力を高めていくようにしていく。

○ 人材バンクづくり
○ 情報機器を活用した情報提供
○ 「あらつ学習ガイド」の作成と提供
○ ティーム・ティーチング体制の充実
○ ポートフォリオによる評価の重視

あらつ学習で子供が求める応えの方向は，子供の求めによって大きく２つの課題で類型化される。

① 実践的課題型…出合った対象のおもしろさや行った活動の楽しさから，「やってみたい」「自分もそうなりたい」という目的を抱き，その結果生じた課題を実践していく学習
② 探究的課題型…子供が対象と出合ったときに感じる矛盾や驚き，不思議さから課題を設定し，自分が納得のいく応えに向かって探究的に追究する学習

生活科とのつながりから，中学年では実践的課題型，高学年では探究的課題型の学習が展開されがちである。しかし，実践的課題型でも単に行って終わりではなく，その過程に探究的な課題が生じる場面を設定しながら学習を展開していくように支援し，同様に探究的課題型の場合でも実践的な活動を位置づけながら，自分なりの応えを深められるように支援していくことが大切である。

▼ 子供の応えを価値づけていくために

自分なりに導き出した応えに価値を見出し，自分の生き方や生活の仕方に働きかけていくように，以下のような活動へと発展するように支援していく。

○ 自分の見出した応えによって，自分や自分の生活を再度見つめ直し考えていく活動
○ 自分の見出した応えを，より多くの人たちに伝えたり呼びかけたりして，広げていく活動
○ 自分の見出した応えに基づいて，自らの生活や地域をよりよくするための実践に取り組む活動

これらの活動を通して，自己追究の過程における自分のがんばりを肯定的にとらえさせていく。

2 子供の学びを高める年間計画作成の考え方

あらつ学習は，子供一人一人がこだわりを発揮しながら，より納得のいく「応え」を求めて学び続ける体験そのものが学習内容となる。そのため，教科等の学習でいう学習内容とはそのとらえ方が大きく異なってくる。

そこで，あらつ学習の年間計画を作成するにあたっては，子供たちに育むべき資質や能力を明確にし，次の２つの側面から考えることになる。１つは，各学年で育む資質・能力から考えるあらつ学習の学年の系統と配列である。２つは，各教科・領域との連動から考える学年の配列である。この２つの側面に季節や学校行事にかかわる単元，自由課題選択単元，学校課題単元を配置しながら，あらつ学習の年間計画を設定していくことになる。

▼ 資質・能力から考える学年の系統と配列

あらつ学習における単元の学年系統は，系統化した資質・能力に応じて行っていく。具体的には，主体性，創造性，社会性の面から，学年での妥当性を判断し，学年の系統を決定していく。そして，季節や関係付けられる学校行事の時期性を加味しながら配列を検討していく。

【主体性の側面から】

主体性の面からは，自分の具体的な行動を評価できるという点から中学年では実践的な課題を中心に計画する。そして，高学年に進むにしたがって自分の課題に応じた追究を内省的に評価していくことが要求される探究的課題を中心に計画する方が望ましいと考える。

その際，実践的な課題を解決するために探究的課題を設定したり，探究的課題の応えをより深めていくために実践的課題を設定したりしながら，追究内容や方法がより高まるようにしていくようにする。

【創造性の側面から】

創造性の面からは，具体的な観察や調査の能力を重視する中学年では，子供自身の身近な生活や対象を取り上げ，見たり聞いたりする具体的な活動を伴う単元を設定することが望ましい。一方，高学年では，具体的な体験もさることながら，インターネットやメールなどの操作技能やネチケットといったメディアリテラシーを含めた情報活用力の育成が重視されてくる。このことから，子供たちが情報機器を積極的に活用し，資料を収集しながら追究していく単元設定が望ましいと考える。

また，中学年では自分の体験を基盤に，収集した情報を比較・関係付けながら教科で培ってきた見方・考え方を高めていくことが中心になるのに対して，高学年では目的意識や相手意識をもちながら表現したり，分析的・科学的な追究を可能にする見方・考え方が要求される。このことは，単元設定において対象そのもののよさや不思議さを追究していく中学年と対象の背景や対象間の関係を追究していく高学年の活動像の違いとして現れてくると考える。

【社会性の側面から】

社会性の面からは，中学年では対象のもつ価値，伝統や自然などに直接ふれたり体験したりといった活動をもとに，まわりの状況や相手の立場を共感的にとらえていく単元が考えられる。そして，高学年に向かうにつれ次第に他者との意志の疎通を図りながら解決していくべき社会課題にふれるような単元設定を行うことが必要であると考える。

以上のことに季節や学校行事，学校単元といった要素を加味しながら，学年配当・配列を行っていく。

▼ 活動の様相から考える学年の系統と配列

３年生では生活科との関連を考慮し，子供の興味・関心を高める自然体験，社会体験を効果的に取り入れた単元を位置づけていく。そして６年生に向かうにつれて，より社会課題を意識した単元を増やすとともに，学校で定番的に取り組む単元を「学校単元」として意図的・計画的に配置していくようにしていく（図１）。

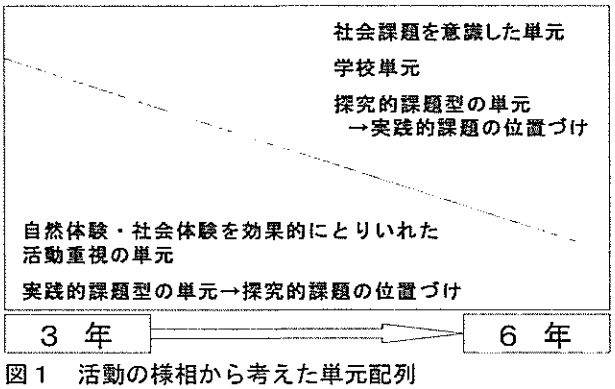


図１ 活動の様相から考えた単元配列

また，この流れの中に，自由課題選択単元である「夏休み自由研究」や季節や学校行事と関わりの深い単元を位置づけながら，年間配列の枠組みを決定していく。特に６年生では自由課題選択の単元を重視し，これまでに培ってきている問題解決の能力をいかんなく発揮できるように年間を通して卒業研究に取り組むようにしている。

【学校単元の位置付け】

本校のあらつ学習は基本的に子供とともに活動や内容をつくっていく学習であるが，英会話力と情報活用力を育成していく単元を学校単元として特定の学年や全ての学年に定番的に位置づけ取り組んでいる。

本校のあらつ学習で培う英会話力については，「国際理解」の視点からあらつ学習を構想し，追究過程において外国語会話（主に英会話）にかかわらせていきながら異文化の方とのコミュニケーション力を高める学習として展開する単元を位置づけていく。

また，本校では，英会話に楽しく慣れ親しむ時間として学級創意の時間（朝の活動）をあらつタイムと命名し活用している。この時間は，子供たちが英語に慣れ親しむための歌やゲームを中心にプログラムを作成し，学年間で系統性をもたせながら活動を展開している。この活動は，子供の主体的な活動を意図しているために，学年を追うごとに自分たちでプログラムを構成していきながら活動していくようにしている。そして，この活動とあらつ学習が有機的に関係付くように学校単元を設定し，配列していくようにしている。

情報活用力については，あらつ学習における個々の課題を解決したり表現したりしていく過程で情報機器を扱いながら機能的に身に付けていくように構想していく。そして，更に高学年に「情報」の視点から情報活用におけるモラルやネチケットに気づかせていく単元を意図的に位置づけ，相手意識をもった情報活用力を培っていく。

英会話力，情報活用力のいずれにおいても，基本的な事項の習得を目標として設定していくのではなく，子供の強い興味・関心や問題意識に支えられた活動をもとに単元を構成していくようにしていきながら機能的な力として身に付くように単元を位置づけていく。

▼ 教育課程全体から見た年間配列

単元の学年配当・配列が決定されると，次に，教育課程全体からみて年間の配列を再考していく。ここでは，連動の考え方を基に計画していくことになる。

基本的には，高めたい資質・能力から割り出したあらつ学習の学年配当・配列に対し，該当学年における教科等の年間配列を重ねて考えていく。そこで，教科等の学習とあらつ学習との間に効果的な連動が考えられる場合，あらつ学習の実施時期を動かしながら配列を見直し，年間計画を決定していく。

その際，留意しておくことは，あらつ学習も教科等の学習もどちらも独立した自己追究活動として成立するように計画しておくことである。教科等の学習と関連を図らないとあらつ学習が成立しないということではなく，子供の求めが教科等の内容を必要としたり，教科等の学習で培った資質や能力をあらつ学習で発揮できるようにしたりしながら相乗的に学習効果を高めていくのである。

【他教科との連動を意図して】

他教科との連動を意図して年間計画を作成していく際には，２つの側面から考えていくことが可能である

(1) 資質・能力の面からの連動

あらつ学習の中では，内容的な系統性をもつことはできない。そこで，教科の内容や技能の面から，子供たちの自己追究が保障されるための学習の系統化を図っていくことになる。つまり，あらつ学習によって教科等の学習で獲得した知識・技能・見方や考え方などの知が総合化されていくように，あらつ学習の単元配列を考えていくのである。

(2) 追究課題の類似性による連動

教科学習とあらつ学習で，類似した対象を追究する場合，あらつ学習における子供の強い求めを各教科の学習に活用することで教科学習の意欲を高めることが可能になることがある。このような場合，あらつ学習の単元と教科課程の単元とを同時期に行うと効果的であると考える。しかし，ここで大切なことは，教科もあらつ学習もどちらの学習も子供たちの手で自己追究の学びが展開されるということである。

【道徳の時間との連動を意図して】

道徳の時間は，学校の教育活動全体での道徳的な体験やものの見方，感じ方，考え方を補充・深化・統合する役割を担っている。具体的な学習の姿としては，あらつ学習という子供たちの体験的な学びの中において道徳的体験となり得る経験を掘り起こしながら道徳性を追究したり，学習で出会った人物を対象にその生き方を自分の中に取り入れていくような展開が考えられる。このような，あらつ学習の価値ある体験と道徳の時間を関係付けられるような年間配列の検討が必要になってくる。

【特別活動との連動を意図して】

特別活動の学習では，あらつ学習が展開していく過程で学級や学校全体に共通の課題が生じた場合の特別活動の展開や学級全体の思いや願いを実現したいと子供たちが求めた時にあらつ学習で活動を展開していくといった場合が考えられる。このように，学級活動や学校行事とのかかわりを考慮しながらあらつ学習の年間配列を検討していくことが大切になってくる。

▼ 年間計画における配当時数の考え方

年間計画に時間数の配当については，子供の求めが基盤となるものの，一般に１単元の配当時間を２０時間から２５時間程度で考えていくようにしている。そのため本校では，一つの学期に１単元から２単元が位置付くように単元を配列している。その際，学年によって軽重はあるものの，２－１－表２に示している８つの視点に関わる単元を，年間計画にバランスよく位置づけていく。

このことで，本校が目指す３特性の伸長につながる価値ある内容を子供たちの手で創造できるようにしている。

3　子供の学びを高める評価とカリキュラムの更新を

1　あらつ学習における評価のありかた

あらつ学習では自己追究を保障していくための形成的な評価を個に応じて行っていくとともに，カリキュラムの更新に向けて，子供が創造した内容の価値（単元の価値）について評価していくことを大切にする。

▼　形成的評価の方法と機能

あらつ学習は主体的な自己追究の活動を保障していく学習である。そのため，評価は重要な役割と機能をもつことになる。大きくは以下の３つの機能をもたせていく。

① 自己追究を行う上で不十分な点（内容・方法）を明らかにし，再追究や補充のための追究に取り組むための評価→自己評価，相互評価

② 自分の追究を，さらに深化・発展させていくための自己追究の方向を検討していくための評価→自己評価，相互評価（中間交流会等）

③ 自分の自己追究から得られた応えをもとに追究過程を振り返り，学習の価値を肯定的にとらえるための評価→自己評価，相互評価（発信・実践活動等）

①と②は自己追究の過程において適宜位置づけていき，③は学習の終末に位置付くことになる。

▼　子供自身の形成的評価

あらつ学習は，子供自身が価値ある内容の創造を行い，自分の応えに価値を見いだす学習である。そのためには，自分の活動を目的に照らして評価していく自己評価力を高めていくことが必要となる。ここでは主に，ポートフォリオを用いながら評価を行っていく。評価の観点は，課題の類型によって異なるものと考える。探究的課題の場合は，子供自身の情報活用の方法や自分自身の考え方を評価していくのに対し，実践的課題の場合は，自分自身の目的達成のための技能や目的に応じた行動になり得ているかどうかを評価していくことになる。

▼　教師による評価

教師による評価は，教師が子供の自己追究を保障するために行う支援にかかわる評価とカリキュラムを更新していくために行う単元レベルでの評価の２つを考える。

(1) 支援の評価

支援の評価は，学習のためのアセスメント評価のことである。そこで，子供の学習状況を示しているポートフォリオと教師の行動観察をもとに行っていくことになる。ここでは教師が子供の自己追究の状況に応じて行った具体的な支援と子供の活動の変容を関係付けながらおこなうことになる。

(2) 単元の評価

単元の評価は，単元で育てるべき主体性，創造性，社会性にかかわる資質・能力が身に付いているかどうかを指導案に具体化した評価の観点に照らして行っていく。あらつ学習では，子供の活動の様相から評価していくことになるために，子供の行動観察や子供が作成したポートフォリオ，子供が導き出してきた応えが評価の重要な資料となる。これらの評価は，単元の事象選定そのものや実施した学年が適切であったかという年間計画修正の視点として機能し，カリキュラムの更新に生かされることになる。

▼　カリキュラムの更新につなぐ評価

評価規準は，子供たちに育てようとする学力の指標である。本校では，表１にあげている育てたい資質や能力の観点をもとに評価規準を作成し，あらつ学習における学力の育成を図っている。この評価規準は，単元ごとの学習指導案において，子供の実態に即して具体化されることになり学習過程における支援へと生かされていく。また，この評価規準に対する子供たちの到達度から単元の有効性を計ることで，カリキュラム更新の視点としての役割をもつことになる。そのため，年度末に，実施プランをもとに教科等で培う資質・能力と照らし合わせながら年間配列を見直すとともに，あらつ学習で高める資質・能力と単元の内容を検討し，実施カリキュラムを毎年更新していくようにしている。

2　実施プランから計画プランへ

子供の実態をもとに作成した計画プランをもとにあらつ学習を実施していく。そして，授業のなかに現れてきた具体的な子供たちの姿をもとに単元の有効性，効果的な配列という観点で実施プランを次年度の計画プランへと更新していくことになる。

しかし，ここで留意しておかないといけないことは，あらつ学習の単元が単元の内容や教科等との連動ありきではないということである。そのため，子供の求めを大切にした単元設定の手順をもとに単元の有効性を検証し，次年度の子供の実態を考慮しながら計画プランの更新を行っていくことが必要である。例えば，３年生で行った単元を継続・発展できる可能性があり，子供たちが引き続き追究していきたいという意向が感じられているならば，引き続きその内容を継承していく単元を４年生に位置付けていくというように子供の求める方向を考えながら作成していくことが大切なのである。（野口　信介）

4　子供の求めを大切に内容を創造していくあらつ学習の展開

総合部　　野　口　信　介

1　自分の求めを実現する評価活動の考え方

●　3つの学習段階に位置付く評価活動

３つの学習段階において以下の評価活動を位置づける。

○　課題を設定する過程

子供が今後の学びの方向性を定め，自分なりの学習目標を設定し，学習の見通しをもつための評価活動

○　課題を追究する過程

子供が設定した課題に対して，追究の進行状況や解決のための方策の修正や調整を行うための評価活動

○　応えを表現する過程

単元全体を通した自分の学習状況を振り返り，他者に表現することで学習の意味を実感する評価活動

▼　具体的な評価方法

評価の方法として，自己評価・相互評価を位置づける。

(1) 自己評価

【自己評価カードの蓄積】

自己評価カードを各学習毎に記録させ，ファイルさせていく。自己評価カードには，学習活動に対する４段階の満足度評価とその評価の要因を記述させていく。

教師は，このカードにコメントを書き込み，子供の自己追究を支援していくようにする。

【色つき付箋紙を活用した自己評価】

学習の方向や方法に対して行き詰まりを感じた場合には，黄色い付箋紙に行き詰まったことを記録させる。次に，行き詰まりに対して教師や友達から受けたアドバイスをピンクの付箋紙に記録させる。そして，どのように解決していったかををグリーンの付箋紙に記録させファイルにはらせていく。このことで，どの場面で新たな課題が生じ，どのように解決したのかという学びの高まりに対する振り返りが容易になると考える。

教師は，黄色の付箋紙の数から，目標の達成可能性や追究の実行可能性，子供にとっての学習に対する負荷を看取り，単元の評価として活用していく。

(2) 相互評価

課題設定の過程では同質のグループによる相互評価を行い，学習の見通し（方向・方法）を明確にもたせていく。課題追究の過程では，異質グループで編成した小グループでの中間交流会を位置づけることで，見方や考え方の違いを交流させ，新たな課題設定，追究方法の検討などを行わせていく。応えを表現する過程では，最終報告会を位置づけ，学びのよさを評価する。

2　子供の素朴な疑問から内容を創造する実践事例

第６学年　単元

あらつ版「学問のすすめ」

－なぜ人は学び続けるの？－

▼　単元の考え方

子供たちは学校や家庭で勉強を行っている。しかし，大半はなぜ勉強をしないといけないのかという疑問を抱いている。本単元は，このような生活現実から生じる子供の素朴な疑問を出発点に，自分の将来の夢や希望につながる，勉強することの価値や意味について自分なりの応えを見出していく探究的課題型のあらつ学習である。

本単元を展開して行くにあたっては，３つの学習過程において自己評価・相互評価の評価活動を適宜位置づけ，子供の自己追究の姿を引き出していく。

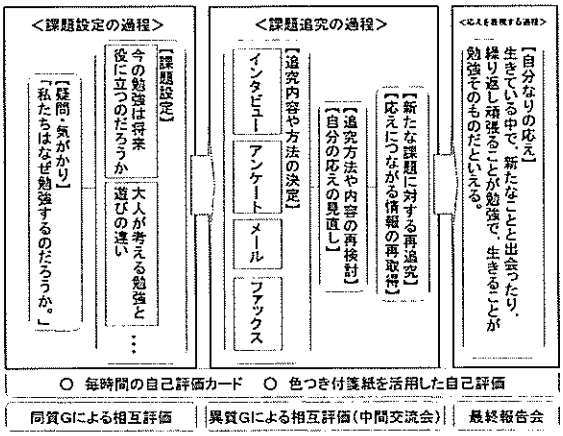


図１　３つの学習過程における自己評価・相互評価

▼　単元の目標

○　勉強することの意味や価値を計画的に追究し，自分なりの応えを見いだすことができる。（主体性）

○　勉強の意義や価値を感じている人に対して，パソコンや電話，Ｆａｘなどの情報機器を活用したり，実際にインタビューしたりして調べ，見出したことを効果的に表現することができる。（創造性）

○　課題追究のために友達や学び続けている方々と交流しながら，生涯にわたって学び続けることのすばらしさに共感することができる。（社会性）

▼ 学習の流れと考察

第１次：１～４／21時
大学の先生が企画するおもしろ実験に参加し，勉強に対する課題を設定する。

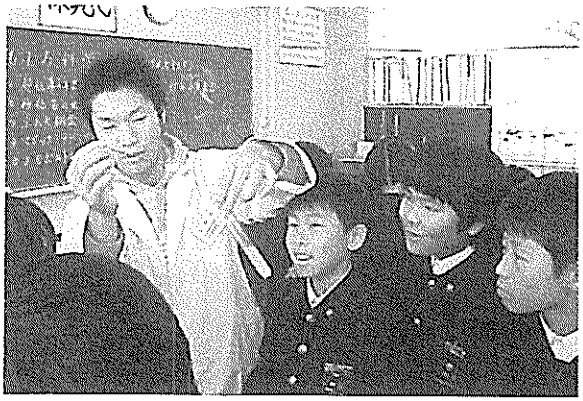


写真１　おもしろ実験は勉強とはいえないよ。

第２次：５～16／21時
９０歳で大学に入学した野瀬さんや課題に合った人から情報を収集し中間交流会を開く。



写真２　勉強は私の生き甲斐なんです。

第３次：17～21／21時
自分が見いだした応えについてまとめ，最終報告会を開く。

まとめ

結果から言えること

私は、このアンケート調査の結果から次のような事がいえると思います。
子供（３・４・５年生）は勉強について、家でする家庭学習や、学校でする授業についてと思ってる人が多いのに対し、大人の方は自分をみがくことと考えている人の方が多かったまた、大人の方が子供のときは、「勉強が嫌い」だったのに、今はもっとしとけばよかったと思っていたり、やりたくても、昔はできなかったから、私達の事をうらやましがっていたりしていたので、勉強というのは、とても大切なものなのかなと感じました。

自分の考え

私は、この学習を始める前は、勉強というのは、国語・算数・理科・社会の事だけだと思っていたけど、このアンケート調査で、それだけじゃない事に気がつきました。また、私達に対して、「あなた達は勉強をできていいわね」といってくださる人が多かったので、実は、私達が考えている勉強というのは、範囲が狭くもっと、いろいろな事を指しているのではないか？と感じました自分の興味のある事、世の中のためになることを、勉強を通してする事が本当の勉強で幸せな勉強なんだと考えました。これから私はこの考えをもち続けていきたいです。

END

資料１　勉強に対する考え方が変わったよ。

第１次は，子供たちが日頃感じている勉強に対する疑問や気がかりをもとに課題を設定することをねらいとしている。そこで，まず，国語科で学習した「石うすの歌」の一文を取り出し，勉強をすることについて話し合った。ここでは，「勉強は嫌いだけれど，家の人が勉強しなさいと言うからしている。」「いつまで勉強しないといけないのだろう。」といった素朴な感想や疑問を聞くことができた。その一方で，クラス全員の子供たちが大学進学を希望しているという現実も見られた。しかし，大学ではどんなことを勉強しているのか知らない子供たちがほとんどであったために，大学の秋永先生と一緒に勉強をする機会を設定していった（写真１）。この活動を通して，「この実験は楽しいけれど勉強とはいえない。」と感じている子供の姿も見られ，勉強に対するとらえ方の違いに対する課題や将来の夢に向かうために必要な勉強とは何かといった課題を設定していく子供たちの姿が見られた。

第２次は，自分の課題を見通しをもちながら追究し，自分なりの応えを見出すことをねらいとしている。ここでは，子供たちが追究活動毎につけている自己評価カードをもとに，行き詰まりを感じている子供に対して，同じ課題の子供同士のグルーピングや追究対象となる人の情報提供を行いながら追究に取り組ませていった。中でも，勉強を生き甲斐だと語れる９０歳の大学生である野瀬さんとの出会い（写真２）は，「勉強の楽しさ」を追究している子供たちにとって大きな影響を与えることになった。また，電話帳などを活用して様々な人に取材を試みていた子供の中には相手に断られる場面もあり，調査の難しさを自己評価カードに記録している姿が見られた。ここでは，相手の都合を考えながら調査できるＦａｘやメールなどのよさに気づくことができた。また，違う課題の子供たちで編成した少人数で行う中間交流会（写真２）を設定することで，追究方法や自分の考えを見直していく子供の姿を見ることができた。

第３次は，これまでの追究から得られた自分なりの応えを相手にわかりやすく伝えることをねらいとしている。ここでは，これまでに調査してきた結果を整理した学習ファイルをもとに模造紙や新聞にまとめたり，パソコンによるプレゼンテーションを用いたりして，自分なりの応えを表現し，友達と意見を交換している姿を見ることができた（資料１）。その中で，自分が生きていく中で経験することが勉強であるという捉え方のもと，勉強することの意義を感じている子供の姿が多く見られた。

また，本単元を通して，色付箋紙を用いた学習の振り返りを行っていった。その結果，全体の５１％の子供が計画の段階で黄色の付箋紙をつけていた。また，追究の段階では４８％の子供が黄色の付箋紙をつけていた。このことは，追究可能性からみた課題設定が十分でなかったと考察できる。しかし，最終的にはどの子供も課題や追究方法を見直しながら自分なりの応えを導き出すことができているという点から，子供の求めに合った支援が有効に機能していたと考えることができる。

第4学年　単元
アジアのひみつをさぐろう
―あらつアジアフェスタ2001を開こう―

▼　単元の考え方

福岡市は，現在アジアの玄関口として，国際都市をめざし発展を続けており，子供たちの日常でもアジアの異文化に触れる機会は多く，その異文化への子供たちの興味・関心は強い。そこで，本単元では，自分たちの生活のなかのアジア探しや，福岡市で毎年９月から１１月にかけて開催される“アジアマンス”のイベントから，子供一人一人が異文化への興味・関心をきっかけに，アジアのもの・人・ことについて明らかにしていきたいという追究課題から，学習を展開し，最後に自分たちが調べて出した応えについて，本校の文化祭“あらつフェスタ”において，友達や他学年の子供たち，親など多くの人に発信していこうとするものである。

▼　単元の目標

○　アジアマンスで見学体験から追究課題を設定し取材しながら必要な情報を集め，自分の応えを見いだすことができる。　（主体性・創造性）

○　アジアの国の人々に共通する思いや願いについて，新たな見方や考え方ができる。　（社会性）

▼　学習の流れと考察

第１次：１～８／22時

自分の身近な生活のなかのアジア探しや，アジアマンスを見学体験から生じた，気がかりや疑問について話し合い，自分たちでは明らかにならないことについての追究課題を設定する。



写真１　アジアマンスでアジアの料理を試食する子供

アジアに興味をもった子供たちはアジアマンスでの見学体験から，「どうしてタイの料理は辛いのだろう」や「インドの女の人はどうして額に印しをつけているのか。飾りなのかそれともほかにも意味があるのか。」などの疑問や気がかりについて，自分の予想をもとに話し合い，そこで新たに生じた疑問や気がかりについて追究課題を設定していった。

第２次：９～18／22時

自分の課題にしたがって，追究の計画を立て，施設やお店などの取材や，アジアの留学生にインタビューなどして課題を明らかにしていく。



写真２　アジアの雑貨店で取材をする子供たち

ここでは，自分たちの調べる課題に応じて，福岡市博物館やアジア美術館，アジア各国の料理店，雑貨店などを訪問し，実際にものを見たり，お店の人に尋ねたりしながら取材したりした。

その取材活動から生じた新たな課題や解決できないことについて，アジアの留学生を招いて，自分たちが調べたことの中間報告会をするなかで，まだ自分たちでは明らかにならないことをインタビューしたりしていった。

ここで，アジアの留学生との交流から情報を収集する姿も見られた。この活動から，アジアの新たな文化を知り，自分たちの生活や文化との相違点を発見していくことで，異文化への興味・関心をもつことができた。

第３次：19～22／22時

自分たちが追究してわかったことや考えたことを，広く発信していくために，表現物にまとめ，“あらつアジアフェスタ２００１”を開催して，発表していく。

ここでは，自分たちが追究したアジアのもの・人・ことについて，自分たちなりの応えを見いだし，“あらつアジアマンス２００１”を開催し，他学年の子供たちや保護者，アジアの留学生を招いて，ポスターやパソコンでプレゼンテーションしたり，アジアの料理試食コーナーや民族衣装試着コーナー，アジアの雑貨見本市などを通じて，多くの人に広く発信した。　（北田　尚雄）

第5学年　単元
あらつタイムプロジェクト
－英語の歌や遊びのプログラムをつくろう－

▼　単元の考え方

本単元は，現５年生がこれから附小の高学年になっていく自覚をもち，自らの願いから，あらつタイムの活動案として英語の歌や遊びの活動を調べ，他の学級に活用してもらうため，英語の活動プログラムをつくり，紹介を行っていくものである。また，このことにより学校生活の朝の活動を自らの手で創り出す関心・意欲（主体性）や英語の歌や遊びの内容を方法を自己選択して調べるなかで方法的に英語にかかわり（創造性m），英語の歌や遊びに対しての願いや気がかりを解決していくためにコミュニケーション能力（社会性）を高め更新し，あらつ学習で学んだことを今後の学校生活に生かしていこうとする意欲・態度を高めるものである。

▼　単元の目標

1　英語の歌や遊びの活動で生じた気がかりや疑問から，追究していく自分なりの課題を設定し，英語の歌や遊びについての情報を収集していくことを通して，そのよさについて新たな見方や考え方ができる。（主体性・創造性）

2　英語の歌や遊びと日本の歌や遊びとの違う点，同じ点からの英語の歌や遊びのよさを見つめるとともに英語の活動に対する関心をもち，他者にひろげることができる。（社会性）

▼　学習の流れと考察

第１次：１～５／23時
ＧＴの紹介する英語の歌や遊びの活動を体験し，英語活動をつくっていこうとする願い・気がかりにより課題を設定する。

・　楽しい英語の歌や遊びの活動を体験する。

ここでは，「朝の活動のための楽しい英語のプログラムをつくりたいな。」という子供の求めを出発点に，下田先生・マイケル先生をＧＴとしてまねき，英語の歌や遊びの活動を体験し，英語活動の楽しさを味わい，プログラムづくりの興味・関心を高め，楽しい活動を紹介したいという願いをもち，自己追究の課題づくりをしていった。



写真１　楽しい英語活動にはどんなものがあるのかな

第２次：６～11／23時
５の２に自分たちの英語活動を発信し，ＧＴに評価してもらい，つくりかえる。

・　５の２に英語の活動案の提案を行い，方法と内容についてＧＴに評価してもらう。



写真２　僕たちのつくった英語活動は楽しいかな

ここでは，今まで自分たちでつくってきたあらつタイムのプログラムを５の２に発信し，相互評価並びにＧＴによる評価をすることで自分たちのプログラムの内容を振り返り，活動自体を見直したり，説明・表現の仕方を見直したりする姿が見られた。

第３次：12～23／23時
自分たちが追究してきた英語の歌や遊びの活動を表現物にまとめたり，実際にインストラクトするあらつタイムのワークショップを開き，英語のプログラムを他の学年，学級に発信する。

計画→準備→あらつタイムのワークショップ

・　答えをひろげる段階での評価・改善を経てできあがったみんなが楽しめる英語の活動をあらつタイムのワークショップを開き，他の学年・学級に発信していく。

ここでは，あらつタイムのプログラムをひろげるために休み時間を使って実際にみんなでゲームをする，ガイドブックやビデオ紹介，インストラクターとなっての実演などをする，英語活動のワークショップを開いていった。また，実際に各学年学級の朝の活動の時間に参加し，自分たちのつくった，英語の歌や遊びを学年に応じて発信していった。（岩城　一磨）

5 教科・道徳・特別活動と連動を図るあらつ学習の展開

総合部　高　野　誠　一

1　あらつ学習から見た連動の考え方

▼　特別活動を生かす連動

学校行事は，教師の意図が強く反映された教育活動であり，種類も多様で，学校生活に秩序と変化を与えることができる。あらつ学習が学校行事を生かす連動は，次の２つが考えられる。

①　学校行事での体験を生かす

学校行事があらつ学習よりも先行する場合である。学校行事は，各教科ではなかなか得られない教育的価値をもつ体験的な活動であるため，子供たちが感動したり，気がかりをもったりすることが数多く見られる。そこで，学校行事を通しての気がかりをきっかけとして，あらつ学習を立ち上げ，有機的な関連を図ることができる。

②　学校行事を表現の場や実践の場として活用する

あらつ学習での追究を校内に伝えたり具体的な実践をしたりする場としての連動である。つまり，あらつ学習の後に学校行事を設定している場合である。学校行事は，各教科等で学んできたことの成果を総合的に発展させる場として考えられるため，主体的に表現発表する活動や生産・奉仕などの実践活動を取り入れられる。

▼　各教科を生かす連動

あらつ学習が各教科の知を生かす場合を，あらつ学習の活動構成に応じて，次のように考える。

①　課題設定の段階で生かす

子供たちが各教科での経験をもとに，あらつ学習の活動の見通しをもつことが考えられる。この場合，各教科の内容から発展した課題では自己追究が保障できないため，あくまでもあらつ学習が先に立ち上がる必要がある。

②　課題追究の段階で生かす

〈知識として〉

社会事象を取り上げたあらつ学習では，社会科で獲得された認識が活用される。

〈調べ方として〉

社会科で身に付けられている観察力，資料活用力を生かすことが考えられる。

③　課題をまとめる段階で生かす

社会科での関係的な考え方，算数科で身に付けられている統計的な処理能力，国語科での論理的な文章構成力などは，子供たちが集めた情報をもとに，課題をまとめる活動を保障する力として生かされると考えられる。

2　連動を重視した実践事例

第５学年　単元

相撲大会あらつ場所から武道の世界へ

▼　単元の考え方

本校では，120 年以上の伝統を誇る学校行事「相撲大会」が毎年開催され，福岡では大相撲 11 月場所，国際柔道大会も催されている。学校や地域での行事を生かすことで，我が国の文化から国際理解へとつながる学習を展開することができると考え単元を設定した。また，武道という社会事象の追究から，社会科との連動を考え，課題をまとめる段階では，国語科での文章構成力や算数科での統計処理の能力が生かされると考える。

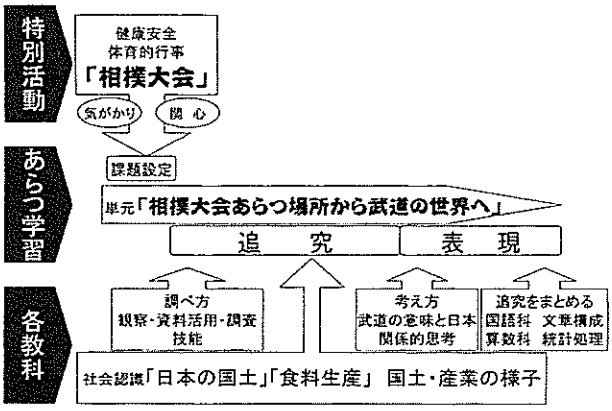


図１　本単元における特別活動・各教科との連動

●　単元の目標

○　武道と日本人とのかかわりなどについて意欲的に追究し，自分の追究を評価できる。　（主体性）

○　武道と日本の国土や産業との関係について考えたり，外国の文化と比較して考えたりすることができる。　（創造性）

○　日本の国土や文化に対する関心を深め，伝統をを守り続ける人々の思いに共感することができる。　（社会性）

▼ 学習の流れと考察

第１次：１～８/19時
　相撲大会を振り返り，大相撲や剣道との出合いから，追究課題を設定する。



写真１　剣道のかけ声は，すごい迫力だな

第２次：９～16/19時
②　見学や資料で課題を追究する。

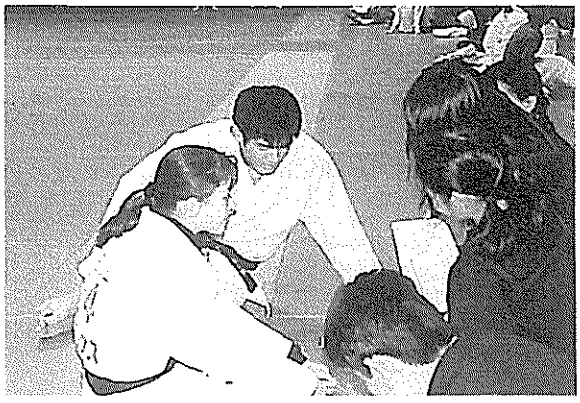


写真２　なぜ，武道を学んでいるのですか。

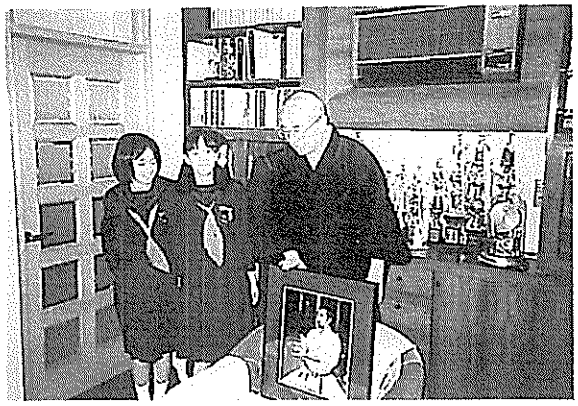


写真３　武道が，どうして生まれたのですか。

第３次：17～19/19時
追究してきたことを文章やグラフに表現する。

第１次は，日本の武道にかかわる探究的課題を設定することをねらいとしている。そこで，まず，学校行事である「相撲大会」のビデオや写真を視聴させた。このことで，「相撲というスポーツがどうして日本にあるのかな。」「そう言えば，日本のスポーツは，相撲や剣道，柔道のように格闘技が多い。」などといった関心をもたせることができた。そこで，実際の日本の武道にふれることを教師から呼びかけ，11月場所の際，唐人町で部屋を構えている高砂部屋と，全国でも名高い福岡教育大学剣道部を紹介した。子供たちの「ぜひ，本物を見たい。」という声のもと，高砂部屋での見学・体験と剣道部を招いての見学会を実施した(写真１)。この体験の後，子供たちに，相撲と剣道を比較させる話し合いを仕組み，共通点を取り出すことで，子供たちの課題を生み出すようにしていった。この後の子供の課題は，次の３つの方向性をもった。

○　歴史　どうして日本に武道があるのか。
○　作法　礼などには，どんな意味があるのか。
○　人々　日本人や外国人が武道を学ぶ意味は。

第２次は，自分の課題に応じて，追究方法を計画し，情報収集を繰り返し，課題に対する応えをつくることをねらいとしている。そこで，まず，自分の課題に対する予想を出させていった。特に，「日本になぜ武道があるのか。」といった課題をもった子供たちは，「日本は米作りなどがさかんにおこなわれてきたので，産業と関係があるのではないか。」といったように，社会科での認識を生かした発言が見られた。次に，どんな追究方法が望ましいか計画を立てさせていった。このとき，社会科との連動を考え，一人一人に『調べ方の宝箱』カードをもたせ，自分が追究する方法についての自分の傾向や過去の経験を振り返るようにした。子供たちは，課題に応じて取材先を決めたり，インターネットで関係のあるページを検索したりして追究を進めることができた。外国人が武道を学ぶ意味を課題にした子供たちは，福岡武道館に出かけ，福岡国際柔道大会で来日中のブルガリア代表に通訳の方を通してインタビューをするなどの活動をしていた(写真２)。また，武道の歴史について調べる子供たちは，歴史に詳しい空手道場「正剛館」の三木和信さんに尋ねたり(写真３)，モントリオールオリンピックの金メダリスト二宮和弘さんに尋ねたりしていった。

第３次は，自分たちが追究してきたことを表現物にまとめ，友達と交流し合う「武道研究発表会」を開いた。その際，アンケート等を実施した子供たちには今まで算数科で学習したグラフの資料を提示し，処理の目的に合うグラフを選択することを助言した。また，まとめを文章化する段階では，文章全体の組み立てをカード化して段落構成を考えて書くことを勧めた。武道を通して，日本文化や日本人の考え方に出合うとともに，日本という国と武道の関係に気づき，武道が我が国の文化として息づく大切さを感じ取っていった。

3　学級活動との連動を図る実践事例

第３学年　単元

凧からみえる 日本の伝統

▼ 単元の考え方

本単元は，凧の種類や作り方，竹の性質，和紙の特徴などを追究し，日本の伝統文化のよさを感じ取ることができる総合的な学習である。また，学級活動と連動を図ることで，学級活動のイベント「大凧フェスティバル」を発想し，あらつ学習において大凧を作成するといった双方向的な関連により，両者の活動を一層充実させることができる単元である。

▼ 単元の目標

○　正月の遊びとして古くから行われている凧に対する疑問から，自分なりの追求課題をもって，追究することができる。（主体性）

○　福岡凧の会の方への聞き取りや実際に凧を作って揚げるといった体験的な活動を通して，日本の文化のよさを感じ取ることができる。（創造性）

○　追究したことを相互に交流したり，力を合わせて大凧を作ったりして，協力して学習ができる。（社会性）

▼ 指導の実際

第１次：1～6／25時

実際にダイヤ凧を作って揚げる活動や，凧の会の方と一緒に凧を揚げる活動から，追究していく課題を設定する。

凧を揚げた経験について話し合った後，実際に自分で簡単なダイヤ凧を作った。「簡単そうだったけど，意外に難しいな。他にどんな凧があるのだろう。」という感想をもった。そこで，福岡凧の会の方を招いて，いろいろな凧を見たり，実際に揚げる体験活動を行ったりして，凧に対してさまざまな関心をもっていった（写真１）。そして，もっと調べていきたいことを自分の追究課題として設定していった。



写真１　凧の会の方との凧揚げの様子

第２次：7～15／25時

自分の課題を追求し，交流する。

凧の種類や作り方，凧絵の秘密，竹の性質，和紙の特徴など課題の類似した子供たちでグループをつくり追究を行っていった。調べる方法としては，文献やインターネット，凧の会の方への聞き取り，実験など多様な追究方法で調べていった。



写真２　和紙の強度を試している様子

そして，調べて分かったことを中間報告会で交流し，今まで気付かなかった凧の魅力や日本の伝統文化のよさを味わっていった。

第３次：16～25／25時

大凧を協力して作成して揚げ，本単元を通して感じたことを発表する。

さらに，調べてきたことを生かして，学級活動の大凧フェスティバルに使う大凧の作成を行い，大だこフェスティバルを開催していった。子供たちは，「凧には，みんなを一つにする力がある」「凧には人を引きつける不思議な魅力がある」といった日本の伝統文化の新たなよさを実感した感想が多く見られた。

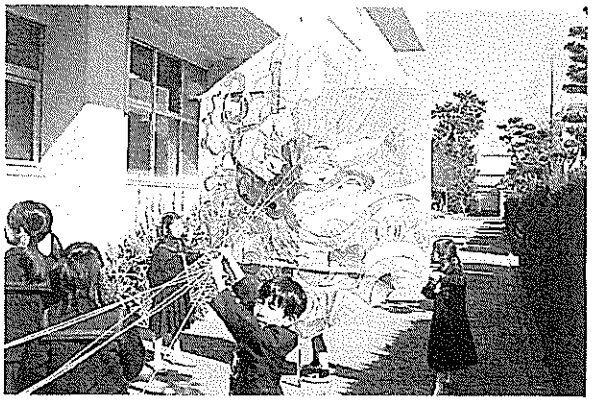


写真３　大凧を作成している様子　（矢野　俊次）

第５学年　単元
附属の文化を創る自分に！
－われらあらつフェスタもりあげ隊－

▼　単元の考え方

本単元は，学校全体での文化的な事象である「あらつフェスタ」という学校行事をもとに創るあらつ学習である。子供たちが，活動することそのものが文化を継承発展させていく活動にあたり，活動を通して自分が附属の文化をつくり出している一人であることを自覚すると共に，これからの自分自身のあり方を考えることができるという価値をもっている。本単元のねらいは，「あらつフェスタ」のねらいやあらつフェスタ委員さんと自分たちの活動にズレを感じたことから，「自分たちで創り上げることができる何かをしよう」という実践的な課題を見いだし，その課題を解決することで，自分自身のこれからのあり方をつかむことができるようにすることである。また，本単元は音楽科との連動を図ったものであり，音楽科学習で身につけた「自分たちの表したい音楽をつくったり演奏したりする能力」を発揮したあらつフェスタのもりあげ活動を展開させていくことになる。

▼　単元の目標

○　自分たちの学校の行事を自分たちの手でつくる一人になろうという思いからの課題をもち，その思いの実現に向けて，課題を解決することができる。
（主体性・社会性）

○　あらつフェスタにかかわる情報やイベントを盛り上げるための方法についての情報を収集したり，課題解決のために活用したりして，自分なりの発想やアイデアを見いだすことができる。　（創造性）

▼　学習の流れ

第１次：１～５／20時
　これまでのあらつフェスタでの自分を振り返ったり，イベントのオープニングでの　様子や音楽の用い方などに出合ったりして，これからの自分たちの活動への思いをも　ち，あらつフェスタ委員さんとの交流を通して課題を明確にする。

【課題設定までの流れ】
　まず，あらつフェスタでのこれまでの自分をふり返る活動を通して，もっと自分たちで何かをつくりあげたいという思いをもち，様々なイベントの活動の様子をＶＴＲで視聴したり，あらつフェスタ委員さんとの交流を通してあらつフェスタについての情報を得たりして，次のような活動の目標を設定した。

あらつフェスタを盛り上げる活動をし，附属の文化をつくる一人になろう。

そして，作成した企画書をもとに，あらつフェスタ委員さんに活動を交渉し，課題を設定する。



写真１　ぼくがつくったのは，こんな企画です

第２次：６～18／20時
　課題の解決に向けて，これまでに出合ったＧＴから情報を収集したり，友達やあらつフェスタ委員さんと協力したりして，あらつフェスタをもりあげる活動を行うための計画を立て，実行する。

【子供たちの活動の内容】

オープニングを盛り上げる	イベント会場を盛り上げる	昼食会場を盛り上げる	校内をパレードをする

第３次：19～20／20時
　あらつフェスタで自分たちが追究してきたもりあげ隊の活動を行い，活動の評価をする。



写真２　昼食会場の雰囲気を盛り上げよう

（原　クミ）

5　道徳の時間との連動を図った実践事例

第6学年　単元
始めよう！あらつに住むわたしがアジアの中でできること
ー道徳「世界の中のわたし」との連動ー

▼　単元の考え方

本単元は，アジアの友達の困窮を知った子供が，自分なりの国際援助・協力を実践する国際理解の内容をもつ。実際に援助活動に取り組んでいる人の生き方を通して自分を見つめることで道徳的課題を感じ，あらつの追究の中で行う道徳的実践を深化できると考え，道徳重点主題「世界のなかのわたし」（２時間）との連動を図った。

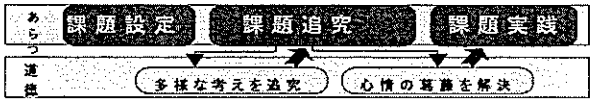


図１　本主題におけるあらつ学習と道徳との連動

▼　単元の目標

○　自分にできる国際協力の在り方を意欲的に追究し，実践を通して自分の貢献を評価できる。（主体性）
○　どのような援助が望ましいのか目的に沿う方法を調べたり，行ったりできる。（創造性）
○　国際援助・協力に取り組む人の思いに共感し，援助の輪を広げる活動ができる。（社会性）

▼　学習の流れと考察

第１次：１～４／17時
アジアの子供への援助や協力の実際を知り，問題意識をもつ。

第１次では，自分の住む地域やくらしとアジアのつながりを，既習経験をもとに文化・交通・貿易・歴史等の面から振り返らせた。子供から「あらつに身近なアジアだけど，援助を必要とする国が多いと聞いたことがある。本当にそうなのか。」という疑問が発せられた。そこで，ユニセフやＯＤＡ，ＮＧＯの活動の様子を提示し，アジアの国々が多くの援助を必要とし，現在多くの日本人がそれにかかわっていることに気づかせた。さらに子供は，ＮＧＯ活動に取り組む地域の人との対話から，自分にもなにかできることはないだろうかという思いをもち，①どの国が，どんな理由で援助を必要としているのか②援助に取り組む人の思いや願い，メッセージは何か，③自分にできる協力や援助の方法として何があるかといった追究課題を設定していった。

第２次：５～12／17時
様々な方法を駆使して自分の追究課題を調べたり実践したりする。　　道徳との連動

第２次では，インタビューやＨＰ・メールやＦＡＸの活用を通して，自分の追究課題を調べていった。早く自分たちも援助に取り組みたいという願いを高めた子供に対応し，道徳との連動１を取った。ＮＧＯ活動とユニセフのどちらに参加したいかを，ＧＴと共に話し合う中で，「自分の喜びが強くある方を選びたい」と考えていた子供が，「助けたいという願いは共通でありどちらも大切だが，相手に学ぶ姿勢で相手を尊重する心が根底に必要である」ことに気づいていった。

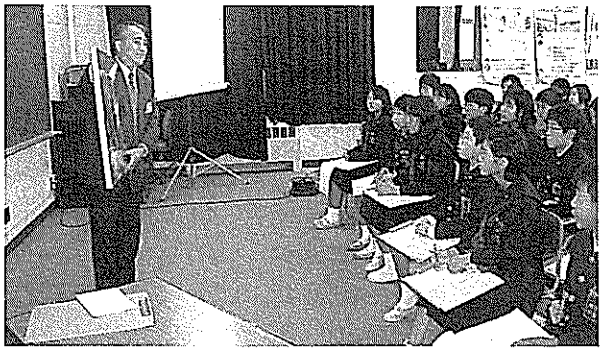


写真１　援助に取り組む！先生の気持ちは？

中間報告会の後，自分たちにできることを実践し，さらに全校に広げていきたいという思いを高めた子供は，葉書やテレホンカード，古切手の回収等様々な援助方法を調べ取り組んでいった。その中から「活動そのものの面白さや成果に目を奪われ，大切な心を忘れているような気がする」という子供の気づきが生まれた。そこで道徳との連動２を取り，自作資料「本当の国際協力ってなんだろう」を用い，援助に取り組む上で大切な心について話し合っていった。子供は「自分たちも苦労するからこそ相手の痛みや素晴らしさが分かるのではないか」と考え，援助活動の方法を見直していった。

第３次：13～17／17時
援助活動を行ったり全校に広げたりする。

第３次では追究成果を生かしてグループでワークショップを行い，活動を全校に広げ，成果をもとにユニセフやＮＧＯと交流し，達成感を味わうことができた。



写真２　私達にもできるよ！　　（石硯　昭雄）

第６学年　単元

卒業研究発表会

▼　単元の考え方

本単元は，これまでの学習や生活の中から，気がかりになっていることや調べてみたいことを卒業にあたって追究していく自由課題選択の総合的な学習である。この単元は，第６学年一年間の帯単元として設定し，一学期にプレ追究と課題設定，夏季休業中の自由研究と連動しての追究，第３学期の発表会の設定と進めていく。このなかで，家庭での追究も合わせて行っていくものである。

▼　単元の目標

○　自分の気がかりや夢などから自分の課題を選択し，追究の応えと方法との関係を照応させて自分の追究を評価することができる。　（主体性）
○　自分の課題に合わせた情報収集や実践活動を通して，将来の生き方や自分の見方をつくることができる。　（創造性）
○　情報収集の相手とかかわり　社会課題への応えを見つけることができる。　（社会性）

▼　指導の実際

第１次：1～6／25時
　これまでの自分の学習や生活の中から，課題を設定し，プレ追究を通して，自分の課題や課題追究の方法について見通しをもつ。

自分の課題について，見通しをもたせるために，大きく２つの活動を行った。１つは，自分のこれまでの学習を振り返ったり，将来の自分の夢について話し合ったりすることである。子供たちは，教室内に貼られた今までの各教科の学習やあらつ学習(総合的な学習の時間)で取り組んだ学習の様子の写真の掲示物を見たり，自分の夢について書き表したりしながら，自分の課題について考えていった。そして，２つ目として，実際に自分が追究していける課題かどうかプレ追究としての時間を設定し，自分の課題についての情報収集と応えに対する見通しをもたせるようにした。この段階では，過去，本校で卒業研究に取り組んできた先輩(附属福岡中の生徒)と現在，卒業論文に取り組んでいる前年度の教育実習生(福岡教育大学の４年次生)を招き，自分の卒業研究についての相談ができるような場を設定した。子供たちは，自分の課題が卒業研究として価値があるか，追究方法として効果があるかといった観点から，先輩の卒業研究に取り組んできた経緯と比べながら考えることができた。

第２次：7～15／25時
　自分の課題を追究し，まとめる。

テーマ別に課題を追究していく。

「弁護士になるためには」，「国際ボランティアの現状」などの課題について，「あいれふ」という福岡市の施設を活用して食生活を見直したり，直接，弁護士の方に会って，疑問をぶつけたり体験的な追究ができた。

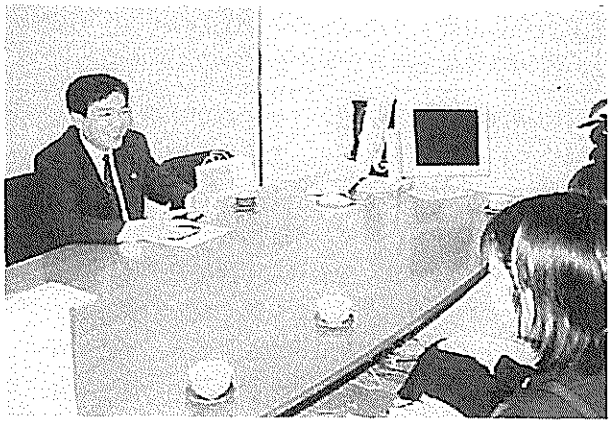


写真１　どうして　弁護士になったのですか。

追究してきたことをまとめる。

追究してきたことをワープロや模造紙，アルバムといった思い思いの方法でまとめていった。

第３次：16～25／25時
　卒業研究をしてきたことを卒業していく仲間として学級全員での発表会を行う。

学級を３つのグループに分け，それぞれの卒業研究について発表し合った。子供たちは，自分の追究に自信をもったり，自分の将来の夢に対しての見通しをもったりして，自分の生き方を考えることができた。



写真２　私は介護福祉士をめざして　　（髙野　誠一）

特別活動の＜ふくおかプラン＞

1　仲間と共に豊かな学校生活を築く特別活動を

1　特別活動が担う役割・立場

豊かな人間の育成のために特別活動に求められているものは，望ましい集団活動を指導原理とするその特性を生かして，集団を形成する仲間と協力して，自分たちの生活をよりよい生活へと自主的につくり直していく実践的な生活者を育成していくことである。

特別活動は，教科と違い子供の必要や選択が大幅に許されている教育活動である。しかも，特別活動でかかわる対象は子供の学校生活そのものである。この特質を生かすことによって，環境に順応したり，支配されたりするだけでなく，自分たちの意志で環境をつくりかえようとすることが可能になる。しかも，他と協調しながら一人一人の個性が発揮できる場を提供でき，集団に埋没するのではなく集団の中で生き生きと活動し個性を伸ばすことができる。また，集団で活動を行う過程では，ルールを守ること，共通の感情体験をもつこと，思いやりの心をもつなど協力の精神を培うことができる。このように，特別活動は，学校という小社会を営む教育活動であり，民主社会を営んでいく上で基礎となる自治的な力を育てる活動である。学校教育においては，この力を育てる場は，特別活動が大きな役割を担っている。

2　仲間と共に豊かな学校生活を築く特別活動とは

豊かな学校生活とは，①自分の役割があり，自分の個性を発揮できる場がある，②自分もよくみんなもよい学校生活をめざして創意工夫できる環境がある，③互いの特性を認め合える心理的な結びつきの強い集団がある学校生活のことである。仲間と共に豊かな学校生活を築く特別活動とは，学校生活の主体者である子供が，豊かな学校生活をめざして，「やってみたい」とか「解決したい」という事柄を仲間と協力して実際にやったり，解決したりしていく自主的，実践的な集団活動のことである。このような自分たちの生活をつくり直す集団活動を行っていくためには，自分の考えや行動を自分で決め，集団の中の自分の役割を果たすといった主体性が大切である。また，学校生活の中から問題を見つけ出し，その解決方法を考えるといった創造性も大切になる。しかも，これ

表１　特別活動で特に大切にする資質・能力

学年		低学年	中学年	高学年
主体性	意思決定力	自分の思いや願いをもとに，考えや行動を決めることができる。	まわりのことを考えながら自分の考えや行動を決めることができる。	多様な考えの中から他者への影響を考えて，自分の考えや行動を決めることができる。
主体性	役割遂行能力	自分の仕事をあきらめないで行うことができる。	集団の中の自分の役割を理解し，最後まで責任もって行うことができる。	自己の役割が集団に及ぼす影響を考え，責任もって遂行することができる。
社会性 創造性	問題発見力	学級生活の中でもっとよくしたいと思う問題に気付くことができる。	学級生活の中で改善することが望まれる問題に気付き取り上げることができる。	学級や学校生活の向上をめざして生活をみつめ，問題を取り上げることができる。
社会性 創造性	創造的思考力	学級生活上の問題を解決するための集団活動を考えることができる。	学級生活上の問題を集団で解決する活動を根拠をもって考えることができる。	学級や学校生活上の問題を解決する集団活動を多面的に考えることができる。
社会性	共感力	自分の経験をもとに，友達の気もちを考えることができる。	相手と同じ立場に自分を置いて相手のことを考えることができる。	相手の立場と自分の立場を相互に関係付けてとらえることができる。
社会性	人間関係調整力	友達の話を聞いたり，友達に自分の思っていることを話したりすることができる。	自分の欲求を適度に押さえながら，相手と協調していくことができる。	自我を適度に抑制しながら，相手と調和・協調していくことができる。

らの資質や能力は集団の一員としての主体性であり，集団の一員としての創造性である。つまり，価値ある集団活動を体験したり自主的に展開したりする中で，集団の一員としての主体性や創造性を発揮し，共感力や人間関係調整力といった社会性も同時に培っていくことができるのである。子供の学校生活は，その大部分が学級という集団を基盤にして展開されることを考えると，学級活動においてこれらの資質や能力を育て，それを学校行事や児童会活動，クラブ活動で発揮させていくことが大切である。そこでは，次のような子供の姿をめざしている。

○ よりよい学校生活をめざして，自分の役割を責任もって果たす子供 （主体性）
○ 学級や学校生活上の問題を見出し，それを解決する方法を考える子供 （創造性）
○ 友達の考えや行動を共感的に理解しながら，好ましい人間関係をつくれる子供 （社会性）

3 特別活動における学びの連動の考え方

▼ 資質・能力レベルでの連動の考え方

特別活動の特性である「望ましい集団活動」を通すことによって培われる資質や能力が教科やあらつ学習に生かされていく。例えば，生活の中から問題を見つけ出す力や，みんなで取り組む事柄について自由に相互交渉を行う力，集団の一員として何らかの役割を受けもちそれをやり遂げる力，他と自分との接点を見出してよりよい方法を見つけ出す力，自分を律して他と協調しようとする力などである。これらの資質や能力が，教科やあらつ学習の中で，特に他とかかわる場面において生きてくる。

▼ あらつ学習との連動の考え方

特別活動は，集団活動を指導原理として展開される教育活動であるが，めざしているのは自主的・実践的態度の育成である。これは，あらつ学習が育成しようとしている子供像と同じ方向をもっている。また，取り扱う対象が子供の生活現実というところも共通しており，共に総合の学びといえる。しかし，特別活動は，集団の問題を集団で解決していく活動であるのに対し，あらつ学習は一人一人の課題を解決していく学習である。また，特別活動もあらつ学習も体験を重視するが，前者は集団で体験すること自体に意義をもっており，後者は課題解決の中での体験である。このように特別活動とあらつ学習の特質をとらえた上で，次のような連動を図っていく。

① 子供の問題意識が発展するように連動を図る

子供は，日常生活や学校生活の中でさまざまな事象に出合い，問題意識を高めている。それらには，自分たちの集団生活にかかわりのあるもの，テーマ的な問題追究にかかわるものなど混在している。その問題の質によって，特別活動を解決の場にするか，あらつ学習を解決の場とするか，子供の追究の場を位置付ける。そこでは，特別活動で集団で取り組んだ問題解決の活動から個々の気がかりやこだわりが生じ，それをあらつ学習へと発展させる場合がある。例えば，図１のように学級活動の栽培活動において，校庭の植物に気がかりをもち，そこからあらつ学習としての樹木調査へと発展させていくことができる。また，逆に，あらつ学習の追究から生じる気がかりを自分たちの生活問題として，特別活動で自発的・自治的に取り組む場合がある。例えば，あらつ学習で追究した国際援助活動から，自分たちにも何かできることはないかといった集団の問題が生じ，それを児童会活動として，全校をあげてユニセフ募金に協力していく活動を生み出すことができる。このような連動のあり方は，より主体性を誘発した自己追究を可能とする。

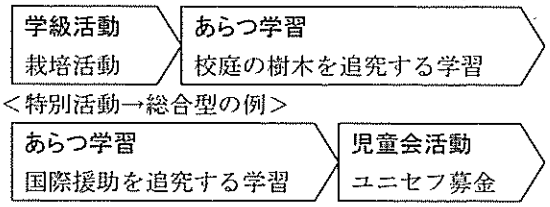


図１ 問題意識が発展する連動パターン

② 特別活動とあらつ学習が双方向的に関連する連動を図る

総合的な学習の時間は，「生きる力」を育むため，既存の教科等の枠を超えた横断的，総合的な学習が実践できるように創設された。特に，特別活動とあらつ学習は，共に子供の生活現実を対象とした総合の学びであるので，両者の課題は関連を図りやすい。例えば，図２のように学級活動で集団の凝集性を高めるために何かできないかと考えたときに，あらつ学習で追究している凧が使えるかもしれないと発想する。そして，協力して大だこフェスティバルを企画・運営しようといった学級活動が展開されていく。さらに，その材料や作り方などをあらつ学習で追究して，学級活動に生かしていくといった，学級活動とあらつ学習を双方向的に関連づけることができる。このような連動は，双方の主体性や創造性を相乗的に高める可能性をもつ。ここで気をつけなければならないのは，特別活動では，望ましい集団活動の育成を意識した支援を行い，あらつ学習では，学び方やものの考え方などの育成を意識した支援を行うということである。そうすることで，子供の活動が這い回ることなく，双方のねらいを効果的に達成することができる。（矢野 俊次）

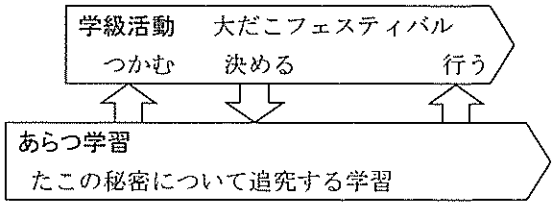


図２ 双方向的に関連する連動パターン

2 集団活動を協働的に展開する学級活動プラン

特別活動部　矢　野　俊　次

1 活動プランの考え方

▼ 集団活動を協働的に展開するとは

協働的とは，集団を形成する個々の成員が，集団の目標に向かって役割を分化しながらも，活動内容を共通理解し合いながら一体となって取り組む活動の様のことである。そこには，集団規範といわれる集団のきまりが生まれ，それを守っていくことが要求される。この集団のきまりは，集団目標を達成するために成員がしなければならない行動，してはならない行動の基準となる。しかし，子供たちは，自分の欲求にかられてこのきまりを守れない状況も出てくる。集団活動を協働的に展開する学級活動とは，そのような状況を集団活動を実践していく過程において解決しながら，よりよい学級生活をつくり直していく自治的な集団活動のことである。そのためには，子供たちが何をめざすのか目標を明確にすること，役割を分化し責任の所在を明らかにすること，活動の過程で自我を抑制して仲間と協調しなければならない場面を設定することが大切となる。つまり，自分たちの学級生活で生じる問題を自分たちの手で協力して解決を図っていく活動を通して，特別活動で大切にしている主体性，創造性，社会性を育てていくことである。

▼ 集団活動を協働的に展開する学級活動プランとは

子供たちは，学級編成により同じ学級になったとしても，当初は個々の成員はばらばらであり，集団で活動を行おうとしても，その活動は協働的な集団活動にはなり得ない。集団活動を協働的に展開する学級活動プランとは，集団の高まりを見極め，学級の実態にあった集団活動を積み重ねていくことで，学級集団を所属集団から準拠集団へ，さらには連帯意識をもった集団へと高めていくことである。そのために大切なのは，集団の高まりに応じて，集団で活動するよさを体験できる活動から，集団の価値を理解し集団に所属することの誇りを感じる活動へと，段階的に集団活動の質を高めていくことである。そこで，本校特別活動部では，図３のように題材を構想し，低，中，高学年を通して集団活動の積み上げを図っていく。

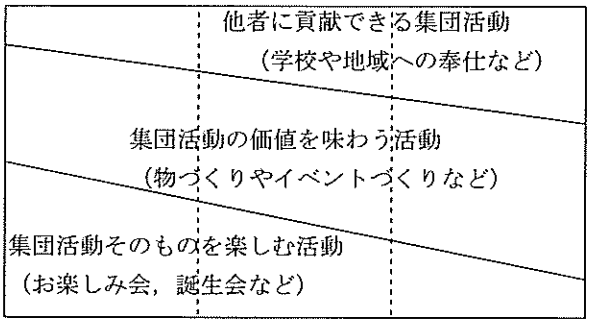


図３　集団の高まりに応じる題材構想

また，それぞれの学年においても，図４のように重点題材を設定し，学級集団の高まりに応じる年間構想を考える。それぞれの重点題材においては，①子供にとって魅力ある活動であるかということが，集団活動を主体的に取り組む(自己追究)原動力となり，②活動目標を学級の全員が共有化し，③役割の分化と明確化を図ることが，協働的な集団活動を展開する上で大切となる。そこで，この３点を中心に題材選定の条件を設定し，活動構成を考える。そして，活動目標を達成できたよさや，集団の中の自己の役割を責任もって果たせた有用感を実感することで，自分や集団への自信を高めていく(自己更新)。これが，豊かな学校生活を築こうとする実践的な態度を高めていくことにつながる。

	１学期	２学期	３学期
題材	学級のシンボルつくり	筋肉番付ジュニア	大だこフェスティバル
協働的な集団活動の高まり	＜集団活動に対する意欲や，責任もって自己の役割を遂行する態度の変容から＞ 個人としての責任性から ⇒ 仲間としての責任性へ		
	＜学級の問題に気付く力や，集団決定を生み出す討議力の高まりから＞ 自分の思いや願いをもとにした話合いから ⇒ 共通の目標を達成するための話合いへ		
	＜集団規範を生み出し，自我を抑制し仲間と協調したりする態度の高まりから＞ 学級への安定感を実感できる活動から ⇒ 学級への有用感を実感できる活動へ		
支援の重点	題材を立ち上げて，実践活動を行っていくまでのシステムづくりに重点をおいた支援 ⇒		題材選定や話合いの柱，実践の仕方など集団活動の質に重点をおいた支援

図４　段階的に集団活動を高めていく重点題材の年間構想（第３学年）

2　活動プランの具体的構想

▼　重点題材設定の条件

自主的に友達と役割を分担したり活動の過程で生じる問題を解決したりして，協働的に集団活動を展開していくために，次のように重点題材の条件を考える。

○　子供たちが経験したことのない活動であり「やってみたい」「挑戦したい」といった魅力のあるもの
○　活動を進めるにあたって，役割を分担して活動を行うことができ，その分担した仕事の一つでも欠けると実現が不可能となるもの
○　活動にある程度の困難さがあり，活動を進めていくためには，友達に進んではたらきかけたり，問題をみんなで解決したりしすることが必要となるもの

▼　活動構成と手立ての工夫について

集団活動を協働的に展開していくために活動構成を図５のように「つくる」「決める」「行う」の３段階で構成する。「つくる」段階では，子供から立ち上がってくる題材を題材選定の条件から精選させ，活動の意義と活動の具体的内容の２つに分けて提案させていく。「決める」段階では，活動内容を決める話合いにおいて活動目標を意識し，集団での取り組み方が論点となる話合いの柱を設定する。また，活動を行う際の係については，全員でその必要性を検討する場を設定する。実践活動の準備をする際には，活動状況が分かる掲示物を提示したり，新たに生じた問題について各係間の連携を図って解決したり，全体で話し合って解決の糸口を見つけたりしていくことで，各係が一体となって活動している意識をもたせる。「行う」段階では，実践活動を協力して行わせ，これまでの一連の活動を振り返る場を設定する。その際には，活動の過程が分かる資料や他者の肯定的評価を与え，活動目標をみんなでやり遂げた達成感や，自分が行った活動への有用感を味わうことができるようにする。

3　指導の実際

第3学年　題材
3の1の力はどこまであがるか
－大だこフェスティバル－

▼　題材の考え方

本題材のねらいは，「大だこフェスティバル」をつくり上げる活動を通して，仲間と協力してやり遂げた達成感や自分の仕事を責任もって行った有用感を味わい，学級の連帯感を高めることである。具体的には，①今の学級の問題に気付き，その問題を解決する方法を発想すること，②活動目標を共有化し，その達成に向けて活動内容を集団決定すること，③分担した役割を全員が理解し，自分の仕事を責任もって行い達成感や有用感を味わうことである。そのために，あらつ学習「凧から見える日本の伝統」と相互促進的に連動を図りながら，活動を展開させていく。また，「決める」段階では，どんな凧にするのか，どんなフェスティバルにするのかという柱で話合いを行っていく。準備をする過程においては，活動状況がわかる掲示物を提示し，準備を進めていく過程で生じる問題を係が相互に連携を取って解決したり，全体で話し合って共通理解を図りながら解決したりしていくことができるようにする。

▼　題材の目標

○　「大だこフェスティバル」に向けて，役割を分担して活動を行い，仲間と協力してやり遂げた達成感や有用感を味わうことができる。（主体性，社会性）
○　活動目標を達成するために，よりよい活動の内容を決めたり，活動の過程で生じる問題をみんなで解決していくことができる。　（創造性，社会性）

	子供の学級生活（自己追究）		
	つくる（自己吟味）	決める（自己吟味）	行う（自己吟味・自己更新）
ねらい	大だこフェスティバルを行う意義を共通理解し，活動目標を設定する。	大だこフェスティバルの内容や方法を集団決定したり，準備の過程で生じた問題を集団で解決したりする。	役割を分担して実践活動に取り組み，学級や自分のよさを味わう。
主な活動	1　原案の提案を受け，活動目標を設定する。 ○ 活動する意義の把握 ○ 活動目標の設定	2　活動内容や生じた問題について話し合いながら，実践の準備をする。 ○ 活動目標の達成という観点から集団決定し，協力して活動すること	3　実践活動を行い，活動の過程を評価する。 ○ 自己の役割の遂行 ○ 自己や学級の向上の実感
手立て	※　原案を分けての提案 ※　子供が評価可能な具体的な活動目標の設定	※　活動目標を意識できる柱の設定 ※　活動状況や問題が分かる掲示物の設置 ※　新たな問題を解決する場の設定	※　ポートフォリオ評価 ※　肯定的評価

図５　集団活動を協働的に展開する基本的な活動構成

▼ 学習の流れと考察

つくる段階：１/４時
イベント係からの「大だこフェスティバル」の提案を受けて，活動に対する思いや願いを集約して活動のめあてを設定する。

① イベント係は，「大だこフェスティバル」の原案を作成する。

あらつ学習との連動から，大だこフェスティバルを発想した。

② 学級のみんなに「大だこフェスティバル」の提案を行う。



写真１　どうして「大だこフェスティバル」をするの

② みんなで「大だこフェスティバル」の活動のめあてを話し合う。

＜活動のめあて＞

みんなで力を合わせて，たくさんの人が見に来てくれる大だこフェスティバルにしよう。

決める段階：２・３／４時
具体的な活動内容について話し合い，役割を分担して「大だこフェスティバル」の準備をする。

① どんな大だこにするか話し合う。



写真２　六角凧の方がいいんじゃない

つかむ段階は，「３年生最後の思い出に残るイベントを計画したい」というイベント係の願いをもとに，学級で取り組む活動を発想し，その活動に対するめあてを設定することをねらいとしている。イベント係の子供たちは，あらつ学習の「凧からみえる日本の伝統」の学習をヒントに，「大だこフェスティバル」というイベントを発想した。学級のみんなへの提案に際しては，事前に教師とイベント係とで，学級目標と今の学級の姿から活動の意義を明らかにした上で提案を行わせた(写真１)。子供たちは，提案されたイベントに対する個々の願い(資料１)を出し合い，それを集約して活動目標を設定していった。

・３の１のダイヤが輝く活動にしたい。
・みんながびっくりするような大凧を作りたい。
・たくさんの人に３の１が協力してつくった大凧を見てもらいたい

資料１　「大だこフェスティバル」に対する子供の願い

私は，「大だこフェスティバル」が楽しみです。しかし，ほんとに大凧が作れるのか心配でもあります。だけど，活動のめあてのように，みんなが協力してつくるんだという思いがあれば，きっとつくれると思います。(抜粋)

資料２　活動目標設定後のＫ児の感想

考察１

イベント係の子供たちは，あらつ学習の追究をヒントに学級集団の高まりをめざす「大だこフェスティバル」というイベントを発想することができた。これは，凧を追究するあらつ学習をこの時期に位置付け連動が図れるようにしたからだと考える。また，活動目標を設定する話合いにおいては，資料１のような一人一人の子供の思いから目標を設定したことで，資料２のように，その達成に向けて協力し合おうという意識をもたせることができたと考える。

決める段階は，活動目標の観点から具体的な活動内容を決定し，役割を分担して協力してイベントの準備をしていくことをねらいとしている。そのために，話合い活動では，活動内容の原案を事前に掲示し，付箋紙を使って質問や意見を集約してから話合いに臨んだ。そのときの話合いの様子が写真２と資料３である。子供たちは，四角凧，六角凧のそれぞれにこだわりをもっていて，どちらにするのかなかなか決まらず，自分の考えを主張したり，友達の意見に納得したりしながらやっと六角凧をつくることに決めることができた。製作においては，あらつ

C１ 六角凧は，この前あげて揚がりやすかったけど，四角凧はむずかしいのであげようと思ってみんながんばるから四角凧の方がよいと思う。
C2 この前の凧は，江口さんの凧だからあがったんで，ぼくたちが作るんだから六角凧でもむずかしいと思う。
C3 やっぱり，あがった方がうれしいし，見に来てくれる人もあがらないとがっかりして，３の１の力を見せることができないと思う。

資料３　どんな凧にするか決める話合い

② 必要な係について話し合い，役割を分担する。
③ 各係ごとに，準備を進める。

大凧は，あらつ学習で追究したことを生かして作成していった。

④ フェスティバル当日の役割分担について話し合う。



写真３　時間が足りないぞ，どうしよう

行う段階：４／４時
「大だこフェスティバル」を開催し，これまでの活動の振り返りを行う。

① 「大だこフェスティバル」を開催する。



写真４　やった！大だこが空にあがったぞ！

② これまでの活動の過程を振り返る。
・達成感，有用感の感受

学習で追究したことを生かして大凧作りを行った。そして，他の係の進行状況が分かるように進行表をつくり，どんな活動をしたのか記録していった。子供たちは，各係ごとに仕事の内容や時間を決め，細かく仕事を分担しながら活動を進めていった。準備が進んでくると，フェスティバル実行係より，フェスティバル当日のことについて問題が出された。それは，たくさんの人に大凧あげを体験してほしいが，時間が足りなくて10人ぐらいしかできそうにないというものであった。写真３，資料４は，その問題を解決する話合いの様子である。

C4 見に来てくれた人は，凧をあげたいと思うから，20人ぐらいは凧あげ体験をしてもらったらどうだろうか。
C5 でも，時間は10分ぐらいしかないから無理だよ。
C6 一人一人体験していくのではなく，何人かずつグループを組んで凧あげ体験をしていったらいいのじゃない。

資料４　フェスティバル当日の問題を解決する話合い

考察２

どんな凧を作るかの話合いにおいては，資料３の下線部分のように，活動目標の観点から意見を述べている姿が現れている。このことは，活動目標を再認識し，めざす活動の姿を共有化している姿だと考える。また，資料４の話合いでは，何とかたくさんの人に凧あげ体験をしてもらおうと知恵を絞っている姿が見られる。

行う段階では，「大だこフェスティバル」を協力して運営し，これまでの活動の過程を振り返ることで，自分や学級に対する自信をもつことをねらいとしている。当日は，予想以上の参加者にうれしい悲鳴をあげながらも，できるだけたくさんの人に凧あげ体験をしてもらおうと，積極的に声を掛け合ったり，自分の係の枠をこえて参加者に対応したりしている姿が見られた。資料５は，フェスティバル終了後の子供の感想である。

たこあげ体験コーナーも，たくさんの人が参加してくれて大盛況でした。私は，凧あげ係だったけど，凧をあげてからは，サービス係と一緒になって来てくれた人のお世話をしました。大変だったけど，楽しかったです。（抜粋）

資料５　活動後の子供の感想

考察３

資料５からも分かるように，予想していなかった出来事にも臨機応変に対応し，学級が一体となってフェスティバルを運営することができた。これは，活動目標を共有化し，時間という問題の解決を全員で話し合ったことが有効だったと考える。

全体考察

本題材では，子供たちが活動目標を明確にもって，自分や友達の係の必要性を感じながら，一体となった集団活動を展開することができた。これは，活動の意義や活動目標，活動内容，各係の必要性について学級のみんなで情報交換できる場を設定し，共有化できたためだと考える。また，フェスティバル当日の，予期せぬ事態に対しても，係の枠をこえて的確に対応できたのは，協働的な集団活動の高まりに応じて重点題材を設定し，活動を積み重ねてきたからだと考える。

また，あらつ学習「凧からみえる日本の伝統」との連動については，あらつ学習で追究したことが，「大だこフェスティバル」の活動に生かすことができ，双方の主体性を高め，強い求めをもって自己追究を押し進めるができたと考える。

道徳学習（道徳の時間）の＜ふくおかプラン＞

1　豊かな心で未来を拓く道徳学習を

1　道徳学習（道徳の時間）が担う役割・立場

価値観が多様化し，価値の相対化，さらには価値喪失と呼ばれる社会状況の中で，人々は，他とのかかわりの中で生きている自分を見失いがちであり，よりよく生きることの価値や意味を見いだしにくくなっている。虚しさや無力感から自己肯定感をもてない子供や，逆に他者と調和できずに自我肥大に陥る子供が増加している。豊かな人間の育成に向け，道徳学習においては，子供に人間らしい生き方への憧れや問題意識をもたせるとともに，道徳的価値の素晴らしさや自己のよさを感得しつつ自らの生き方を逞しく創ることができる力を育成することが求められている。そのためにふくおかプランにおいては，教科・特別活動，あらつ学習の時間等で得た価値ある体験を積極的に生かし，人間としての在り方や生き方という視点から道徳的価値の全般にわたって自覚を図る授業を展開していくことが必要となる。

2　豊かな心で未来を拓く道徳学習とは

豊かな心は，人間として自分らしく生きたいという求めと，他者と共によりよく生きたいという内面的な求めから生まれる。豊かな心で未来を拓くとは，このような求めをもって自らの道徳的課題に向き合い，よりよく生きようとする意志を発揮し（主体性），そのための適切な行為を思考・選択し（創造性），積極的に実践しようとすること（社会性）である。つまり，ふくおかプランにおいては，道徳学習を通して次のような３特性が育った子供の姿をめざしている。

◎　自らの道徳的課題を把握し，人間らしく生きることへの憧れや喜びを感じながら，よりよい自分づくりに向けて意欲を高める子供　（主体性）
○　道徳的問題を生じさせている状況をとらえ，他者の心情を推し量ったり価値への理解を深めたりして自らの生き方・在り方を判断できる子供（創造性）
○　自らの価値意識や規範意識を周囲とのかかわりの中で見直し，自他共によりよく生きる上で大切な行為を積極的に実践しようとする子供　（社会性）

このような子供が育つためには，従来からいわれている道徳的実践力（道徳的心情，道徳的判断力，道徳的実践意欲・態度）に加えて，実践の方法・技術の獲得や，価値についての知識・理解，さらに自分のよさを育んでいくことに対して喜びを感じる自己効力感をも含んだ多面的な力の育成が必要となる。そしてこのような力が高まった結果としての価値意識や規範意識を，将来にわたる基盤として子供の内に育んでいくことが必要である。

豊かな心で未来を拓く道徳学習は，子供がこのような力を獲得し発揮することのできる学びの姿である。そのためには，道徳的価値を自分の体験に照らして内面的に

表１　道徳学習で特に大切にする資質・能力

学年		低学年	中学年	高学年
主体性	道徳的心情	・心地よさ，相手の喜びを求めてよさを追究する。	・協同し，共に生きる喜びに向かってよさを追究する。	・理想や目標に向かってよさを追究する。
主体性	自己効力感	・快感情をもとにして自分自身への気づきをもつ。	・内にあるよさへの気づきをもとに自身を見つめる	・未来志向的な意志を育みながら自分を見つめる。
創造性	道徳的判断力	・大人の支持・援助・意味づけを支えに，善悪を判断する。	・比較や共同によって判断を吟味し，強化や修正を行う。	・自律的に判断するとともに自分の判断を論理的に検討する。
創造性	道徳的知識	・基本的生活習慣やルール等，善悪の区別が自覚できる。	・自分や所属集団のよさや問題について検討できる。	・価値をより一般化・普遍化し自己の変容を自覚できる。
社会性	実践意欲態度	・大人の賞賛や価値づけを支えとして実践する。	・相手の喜びや心のすがすがしさを支えとして実践する。	・役割と責任を自覚し，理想や目標を感じて実践する。
社会性	実践のための技術	・大人の示唆を受けて方法を見出し，身近な対象に向かってできる。	・協力したり結果の予測をしたりながら，相手の気持ちを考えてできる。	・多面的に行為を検討するとともに，広範囲を対象にしてできる。

自覚し納得することで，価値への見方・考え方をさらに広げ深める道徳学習を行うと同時に，他方では教科・特別活動・あらつ学習の時間等との連動を積極的に図り，直面する道徳的課題に対して実際に対処する中で課題の発見と解決のプロセスを志向する問題解決的な道徳学習を行い，身に付けた道徳的価値への理解を深めさせ，その有用性を実感させることが必要となる。いわば価値に目覚め納得する道徳学習と，価値を実現する自分づくりの道徳学習が相互補完的に高め合うことで，子供は自らの生き方・在り方を道徳的価値に照らして追究・吟味し，自らの理想に向かって自己を更新していくことができるのである。

道徳学習における学びの連動の考え方

▼ 道徳カリキュラム編成の視点

以下のような視点をもってカリキュラム編成を行う。

① 全教育活動における子供の道徳的体験を可能な限り生かす形で道徳の時間を構成する。
- 総合的な学習の時間等との連動を位置づけた問題解決的な重点主題を年間３～５設定する。
- 重点主題以外の道徳の時間においても，導入・展開・終末のいずれかの中で，想起・追究・発展の内容として子供の具体的体験との関連が図れるようにする。
- 以上のために，他教科・他領域の学習や学校行事との時期関連性を考慮して主題を配列する。

② 自己評価を重視し，子供とともにつくる教育課程をめざす。
- 年度当初に，オリエンテーションの時間をおき自己の道徳的課題や理想について見つめさせる。
- 中・高学年は各学期に自己評価の時間をおき，自己の高まりを振り返らせる。
- カウンセリング的手法や道徳ノートの継続的活用を図り自己内省・統制の力を高めていく。

③ 発達課題を重視し学年における内容の重点化を図り，学習の発展性をもたせる。
- 低学年においては，基本的生活習慣や社会規範等の善悪の獲得を，中学年においては人間関係の広がりにおける他者受容や共感性の獲得を，高学年においては自己の理想や目標，役割や責任の内容を重点化する。
- 高学年においては複数価値の関連化や総合的取り扱いを行う。
- 同一学年においては重点主題を中心に，異学年間については，そこでの価値の獲得の仕方が他律から社会律，社会律からより自律へと向かうよう，価値についての見方や考え方，感じ方を広げ深める主題配列を行う。

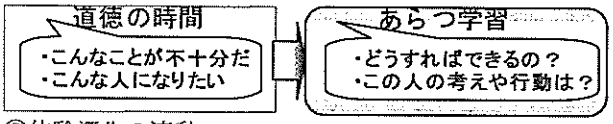
（以上，図１を参照）

▼ あらつ学習への連動の考え方

道徳の時間は、本来的に学校の教育活動全体連動全体での道徳的体験を基盤に，見方・考え方・感じ方を補充・深化・統合する役割を担っている。したがって前述したように，道徳の時間の学習においては，常に子供の具体的体験との関連が図れるように考えていく。しかし，特にあらつ学習との連動において重点主題を設定した問題解決的学習を行っていく場合は，機能面から以下の３類型の展開をとって行う。

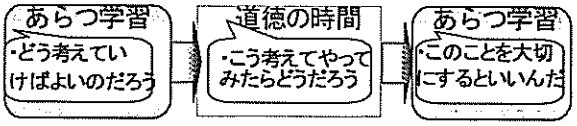
①体験喚起の連動

道徳の時間を通して自己の道徳的課題に気づいたり，具体的な人物の生き方との出会いから自己の生き方への課題意識や展望をもった際に，実践課題の追究をあらつ学習へと発展させていく連動がある。



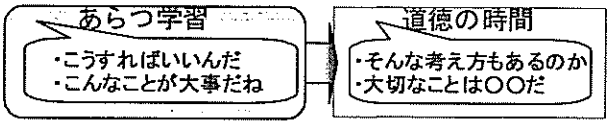
②体験深化の連動

あらつ学習の中で感じた価値葛藤や個々の子供による価値のとらえ方の違いを，対立的な討論によって話し合ったり関連づけたりすることにより，見方・考方・感じ方を見直し，その後の追究を深化させる連動がある。



③体験整理の連動

あらつ学習の中で各自が感じた価値の多様性や価値のとらえ方の違いを交流し，補充・深化・統合を図る連動がある。



※ これらは機能面からの類型であり，実際の単元においてはこれらの組み合わせもあり得る。

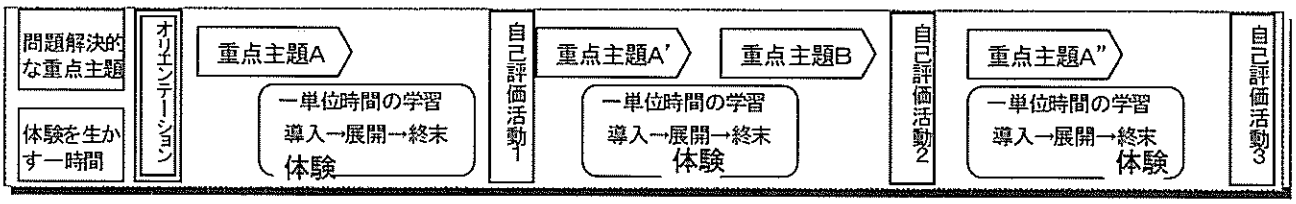


図１ 一学年における主題配列モデル

2 生き方への自信を育む問題解決的学習プラン

道徳部　石　硯　昭　雄

1 学習プランの考え方

▼ 生き方への自信を育むとは

生き方への自信を育むとは，自分の内にある人間としての在り方や自分らしい生き方のよさに肯定感をもち，理想や目標に向かって達成や向上への意欲を深めていくことである。人間は他者とともに手をつなぎ合って生きる存在であり，また自分らしさを求めて旅する存在である。他者にも喜ばれる望ましい自分像と，自分が納得する自分らしい自分像が合致した時，子供は，さらに自分はどうあるべきかを問い，他から取り入れたいよさや伸ばしたい自分のよさを明らかにしながら，豊かな心で未来を拓く道徳的実践力を培かっていくことができる。

▼ 生き方への自信を育む問題解決的学習プランとは

子供が自己の生き方に自信を感じるためには，自分にとって切実な道徳的課題を自力で追究し，自分なりに解決することや，追究を通してこれまで気づかなかった自分の内にあるよさを見出すこと，さらには道徳的価値に照らしてより望ましく変わることができた自分の成長に喜びをもつこと等が必要である。このような「よくなる自分」を実感させるためには，道徳的課題に対して働きかける体験の場と，そこから自己を見つめ問い直す学びの場を連動させ，価値追究させることが重要となる。具体的には，①教科課程・生活課程の学習での体験と，道徳の時間との連動を図った重点主題を設定することにより，体験をもとに見出した道徳的価値について自覚したり，感得した道徳的価値を生かして問題解決的に次の体験へと向かう構えをもたせたりする体験連動型の道徳学習を行うこと，②学年の発達段階を見通した調和的な学習を計画し，これまで意識していなかった自己のよさを具体的体験との関連で気づかせること，③道徳的に成長を遂げた自己の変容を自分自身で評価する能力を育て，成長への願いや喜びをもたせること等に取り組んでいくことが重要である。道徳の時間の学習がこのような立場から構想されることにより，子供は，自分の生き方・在り方の課題に向かって自己追究し，その姿を対象化して自己吟味し，自分への自信を高める自己更新へと進んでいくことができるのである。

2 学習プランの具体的構想

▼ 道徳学習の機能面からの類型化

教科課程・生活課程の学習や学校行事等での具体的な価値ある体験との連動を図り，自己追究・自己吟味・自己更新の原理を位置づけた問題解決的な道徳学習を行う。具体的には，①道徳の時間を通して実践への意欲を喚起し，実践課題の追究を生活課程の学習へとつないでいく連動（体験喚起型），②教科課程・生活課程での具体的な追究の中で生じた葛藤を吟味したり見出した複数価値の関連について把握したりすることにより，見方・考え方・感じ方を強化し，再び教科課程・生活課程の追究を深めていく連動（体験深化型），③教科課程・生活課程で体感した多様な価値を練り上げることにより価値のとらえ方の多様性や違いに気づき，見方・考え方・感じ方

表２　重点主題における問題解決的な道徳学習の類型

	ねらい	学習過程モデル	教材化の工夫
体験喚起	価値高い生き方への感動や憧れをもったり，日常的な道徳的課題に気づく。	①自分のありのままの姿を振り返る。 ②価値高い生き方を資料や対話から知る。 ③生き方の背景にあるものを推しはかる。 ④自分にとっての課題を明らかにする。	・子供の現状での課題の教材化 ・子供との体験との類似性がある題材の物語化 ・道徳的実践の資料化（映像・作文）
体験深化	体験で得た価値葛藤を吟味したり複数価値の関連について把握したりする。	①複数価値の存在や葛藤を明らかにする。 ②対立討論による交流や，カードによる関連づけにより価値を吟味する。 ③見方・考え方を広げて価値を見直す。	・モラル・ジレンマ的に価値の対立や葛藤が明らかになる教材化 ・現実的な自己決定の場の設定がある教材化
体験整理	各々がもつ多様な価値のとらえ方の違いを練り合い，補充・深化・統合する。	①個々が感じた価値を明らかにする。 ②価値の多様性や違いを交流し，見方・考え方・感じ方を補充・深化・統合する。 ③自分なりの応えや課題を明らかにする。	・現実的な自己吟味ができる主人公設定のある教材化 ・子供との類似性だけでなく価値高さにつながる超越性が見とれる教材化

を補充・深化・統合する連動（体験整理型）の３つが考えられる。それぞれの場合において，道徳の時間の果たす機能が異なることから指導過程もそれに応じたものになる。従ってそれに応じて，そこで取り上げる教材の要件も異なってくる。（表２を参照）なお，ここでいう教材とは狭義の読み物資料を指すものではなく，子供の体験そのものを映像化したものや児童作文，ＧＴ等との直接対話を含んでいる。

▼ 主題設定における発達段階に応じた重点化

豊かな人間育成のための資質・能力の重点化に沿って，各学年で取り上げる重点内容を以下のように設定し，体験との関連を生かして重点主題とする。

表３　発達段階に応じた主題の重点化

年	内　　容
低学年	・学校生活における友だちとの人間関係 ・動植物の愛護による生命への素朴な愛情 ・社会生活上の習慣やルール　等
中学年	・集団生活における協力 ・自己の消費や廃棄と環境との関連 ・思いやりを生かした他者受容や福祉　等
高学年	・学校や社会生活における自己の役割や責任 ・国際平和や国際理解 ・自分の夢，生き方の理想や目標　等

例えば第６学年では，最上級生としての責任の大切さを実感した子供が，歴史や世界の中での自分の立場や役割に気づき，実践を通して自己効力感をもち，さらに卒業研究と連動して，自己の理想や目標に向かって生きる意欲や態度を高めていくように配列する。つまり資質・能力の重点化によって主題間の連動も図る。（図３）

▼ 自己評価活動の工夫

「よくなりつつある自分」を実感させるために以下のような自己評価活動を年間計画に位置づける。

○道徳ノートの継続的活用による自己評価・自己内省
○オリエンテーションによる自己の道徳的理想や目標の顕在化，及び毎学期ごとの自己評価
※　低学年においては教師の評価を生かし，高学年においてはセルフカウンセリング的手法を活用する。
○重点主題学習におけるポートフォリオの導入と展開

3　指導の実際

第６学年　主題
歩みだそう！世界のなかのわたし
－始めよう！わたしにもできる国際協力－

▼ 主題の考え方

本主題は，世界の人々と相互に理解し協力し合うことのよさを求め，そこで必要な考え方や行い方について具体的に判断し，積極的に国際理解・協力に努めていこうとする意欲や態度を高めていくことをねらいとしている。指導にあたっては，自分たちの国際協力の在り方について見出していくあらつ学習と２時間の道徳学習，自分たちなりの国際協力を実践していく学級活動を連動させた。あらつ学習「始めよう！あらつに住むわたしがアジアの中でできること」において，自分の生活とつながりの深いアジアの国々の人々の多くが援助を必要としている事実や，福岡の人々が人類愛に基づいて積極的にアジアの隣人への援助に取り組んでいる生き方と出会った子供が，自分なりの国際協力への応えを見出していく構成を取った。本主題での道徳学習の連動は，体験深化の連続を取っている。道徳の時間１では，「何のために国際協力を行うのか」という問いを通して，協力方法選択の根拠の根底にある自分の見方・考え方・感じ方を見つめさせた。道徳の時間２では，自作資料を通して本当の国際協力とはどうあるべきなのかを考えさせ，その後の活動の中味や方向性がより深まっていくようにさせた。

▼ 主題の目標

○　外国の人と相互に助け合おうとする心情をもちそのような感じ方ができる自分のよさを把握し，自信を深めることができる。　（主体性）
○　相手を大切にしつつ，協力・貢献することの意味を理解し，自分はどのようにかかわっていくべきかを判断することができる。　（創造性）
○　相互を大切にできる国際交流の仕方や技術を身につけ，進んで広く世界にかかわっていこうとする意欲や態度をもつことができる。　（社会性）

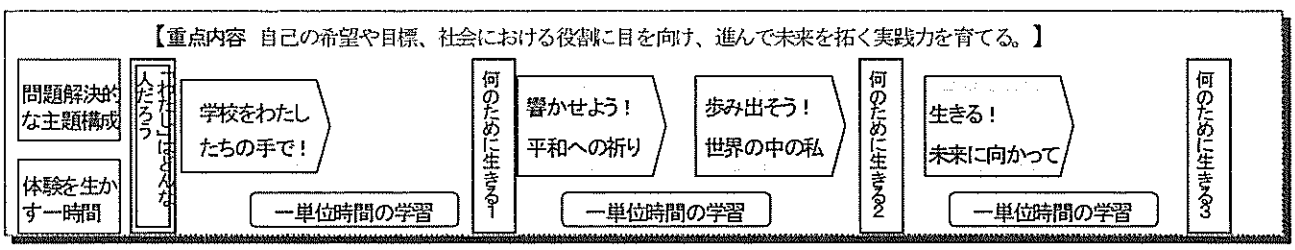


図３　自分への自信を段階的に育む第６学年年間構想

▼ 学習の流れと考察

事前のあらつ学習での追究

アジアの国々の現状を調べた結果，多くの人々が援助を必要としていることを知り，自分も援助・協力をしたいという願いをもつ。

道徳の時間１

ＮＧＯに取り組むＩさんと対話し，国際協力で大切にしたい見方や考え方を話し合う。

① 自分が取り組みたい援助方法とその根拠を対立的に話し合い，それぞれの特質を明らかにする。

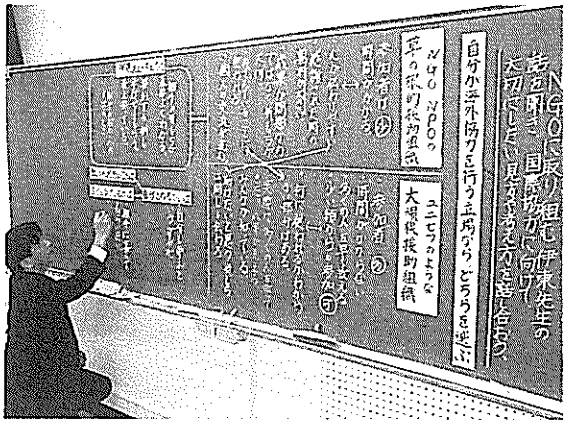


写真１　なぜその方法で援助したいと思ったのか

② ＮＧＯに取り組むＩさんと対話し，自分たちとの共通点や差異点について話し合う。

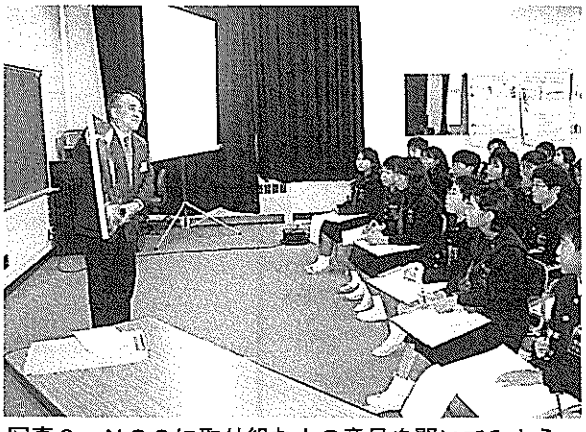


写真２　ＮＧＯに取り組む人の意見を聞いてみよう

③ 国際協力をするときに大切にしたい自分の見方や考え方を，価値概念図にまとめる。

事後のあらつ学習での追究

自分たちなりの援助方法について調べ，実践を通して問題点や成果を明らかにする。

道徳１に至るまでのあらつ学習で子供は，自分が住むあらつとアジアのつながりの深さに気づき，アジアの人々，とりわけ同世代の子供の多くが援助を必要とする状況にあることを調べた。そして，国際援助・協力には，ＯＤＡやユニセフのような公的機関が行うものとＮＧＯで行うものとがあることや，福岡でも多くの人々がこれに参加していることを知り，自分も何らかの方法で援助・協力に参加したいという思いを高めたきた。しかし以下のような疑問や課題が子供から発せられた。

資料１　あらつ学習の中で子供の心に生じた疑問

- みんな援助・協力をしたいと言っているけれどその理由が人によって違うような気がする。どうしてなのか。
- ＯＤＡやユニセフによる大規模な援助があるのに，ＮＧＯに取り組む人が年々増えているのはなぜなのか。

そこで本時では，ＮＧＯに取り組むＩさんとの対話により，自分とＩさんとの違いや共通点を話し合う中で，国際協力を進めていく上で大切な見方・考え方・感じ方を明らかにしていくことをねらいとした。まず，自分が援助・協力を進める立場なら，ユニセフのような大規模な組織と草の根的なＮＧＯのどちらで取り組みを進めたいか，その根拠を交流していった。

資料２　援助方法選択に込められた見方・考え方・感じ方

Ｃ１　大規模な組織で取り組みたいと思います。社会の信用もあり多くの協力が得られ，早く援助できるから。

Ｃ２　ＮＧＯのやり方は時間はかかるかもしれないけれど，相手と直接触れあい感謝されるので，自分の喜びも大きいのではないかと思います。

Ｃ３　相手に感謝されるためにやっているわけではなく，助けたいという気持ちでやっているのだから，大勢の参加があり早く成果が上がる方がいいと思います。

Ｃ４　助けたいという思いはどちらも同じで，同じようにどちらにも心がこもっていると思います。どちらかに決めるのにはもっと別の理由があると思います。

ここで，Ｉさんとの対話をもった。Ｉさんは「草の根的なＮＧＯもユニセフも，相手を助けたいという思いは共通。自分がＮＧＯに取り組むのは直接的な触れあいを通して，相手に学ばせられることの喜びがあるから。」と語った。子供は，生き方見つめシールを用いてＩさんと自分の国際協力に対する考えを比べ，「相手を尊敬し，相手に学ぶことの喜びを大切にする」点に違いがあることを見出した。終末では，価値概念図をまとめる中で，「お互いに理解して」「相手のよさに学んで」等をキーワードに，大切にしたい心を明らかにする姿が見られた。

考察１

援助方法の選択とその根拠を対立的に話し合わせたことで，援助・協力に臨もうとしている自分の中にあるよさや問題点を明らかにすることができた。Ｉさんとの対話の中から，相手を尊重する態度の大切さを導き出せたことや，本時以降のあらつ学習において，子供の意識が「自分にとっても喜びがあり，相手を大切にできる援助・協力の方法を考えよう」と傾いていったこと等から，本時の有効性が伺えると考えられる。

事前のあらつ学習での追究

自分たちなりの援助・協力活動を進める中での問題点を明らかにする。

道徳の時間２

自分の国際協力がよりよいものになるために大切にしなければならない心を話し合う。

① 資料「本当の国際協力とは」を読み，Ｙさんと自分たちの共通点や差異点を話し合う。

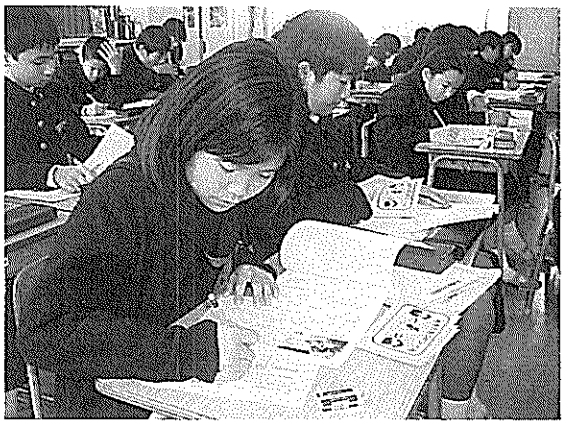


写真３　生き方見つめシールを使って考えよう

② 「活動で集めたお金だからこそ値打ちがある。」というＹさんの気持ちを推し量り，自分たちの追究に何を加・修正していくべきなのか話し合う。

③ 大切にしたい心を価値概念図にまとめる。

事後のあらつ学習の追究

国際協力ワークショップを開いて活動を全校に広げ，その成果をユニセフやＮＧＯと交流する。



写真４　ワークショップで活動を広げる

道徳２に至るまでのあらつ学習の中で子供は，自分たちにもできる国際協力の方法をインターネットやＮＧＯへの聞き取りを通して調べたり，試しの実践をしたりしながら追究してきた。しかし，追究を進める中で新たな葛藤が生じてきた。それは以下のような子供の発言をきっかけとして生まれた。

資料３　援助活動を進める中で生じた葛藤

相手を助けたくて始めた活動だったのに、何だかこのごろ目的がずれてきているような気がします。集まったものを数えているときにわたしも、「あっ、これで○円だ」と喜んだりして．．．本当にそれでいいのかなと悩みます。

ここで，活動の意味や意義をもう一度問いなおし，本当の国際協力とはどうあるべきなのか，どんな心を大切にしなければならないのか話し合うことをねらいに道徳の時間２を設定した。子供は，資料「本当の国際協力とは」を読み，生き方見つめシールの活用を通して，自分のよさや不十分さを見つめていった。

資料４　資料「本当の国際協力とは」（教師自作）の概要

Ｙさんたちは，回収した古紙を換金して学校建設の募金をしている。なかなか成果が上がらない状況の中で、「募金を集めた方が早いのでは」という声に対し，Ｙさんは「自分たちが汗を流した活動で集めたお金だからこそ価値がある」と仲間を説得し，協力して活動を実らせる。

生き方見つめシールを用いた追究で子供は，「相手を助けたい」という願いは同じだが，「できるだけ楽な方法で」と考えた自分に対して「苦労するからこそ価値がある」と考えたＹさんの違いを見出し，その心情を推しはかった。成果を優先するあまりに，相手の立場に立って理解をすることの大切さを忘れかけていた自分たちの不十分さに気づき「同じ立場で」「相手の身になって」をキーワードに，大切にしたい心を価値概念図にまとめた。学習終了時には，以下のような感想が見られた。

資料５　学習終了時における子供のまとめ

取り組んでいく中で，例え成果は小さくても，自分だからできる援助を地道にし，世界の人と仲良くしたいと思いました。自分が誰かを助けられることを学べたし，アジアの友達が本当に欲しいのは，ものやお金ではなく，自分のことを考えてくれる人の「思い」だと思ったからです。

考察２

子供が葛藤から見出した自己の課題を取り上げ，自作資料を通した追究を行わせたことで，あらつ学習での実践を見直し，道徳的価値に根ざした見方・考え方・感じ方を獲得させることができた。以後の実践活動が，もの集めに留まらない方向で広がったことも本時が有効に働いたためであると考えられる。

全体考察

自分たちにできる国際協力を進めようとする実践的課題を追究するあらつ学習と道徳の時間を体験深化型で連動をさせたことにより，子供は問題解決的な過程を通して，国際協力の重要性やそこで大切にしたい見方・考え方・感じ方を獲得し，そのようなよさをもつ自分への自信を深めることができた。また，体験連動を図る際に，子供の求め応じて柔軟に対応できる自作資料や生き方見つめシールの活用が，役割に合った道徳の時間を機能させる上で有効であることが明らかになった。国際理解の単元として考えた場合，相手の素晴らしさに直接触れたり学んだりすることから自分を見直すという部分において，あらつ学習における追究内容の付加とそれに合わせた連動への改善が課題として残った。

豊かな生活を営む子供をめざす教育課程の創造

～各教科及び領域・教科を合わせた指導における役割を明確にして～

1　本校特殊学級の考え方

1　主題設定の理由

▼　生きる力の育成から

現在，障害者の自立と社会参加の一層の促進を図るため，障害者基本法が制定され，教育，福祉，労働など各分野にわたって中・長期的な観点からノーマライゼーションの理念を実現するための取り組みが進められている。児童の障害の種類，程度に応じて特別の配慮のもとに手厚くきめ細かな教育を行うことが特殊教育においては特に不可欠であるといえる。つまり，障害のある児童の視点に立って一人一人のニーズを把握し，必要な支援を行うという考えに基づいて対応をはかる必要がある。そうすることが，子供たちの現在の豊かな生活につながり，その豊かな生活を繰り返すことで卒業後の生活及び子供たちの将来の生活を豊かにしていくことにつながっていくと考える。

2　主題についての説明

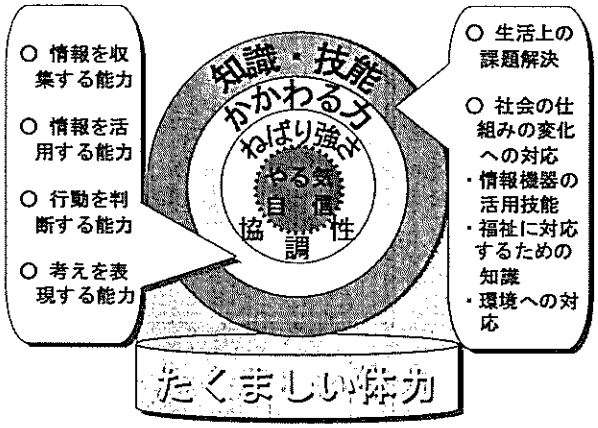
▼　豊かな生活を営む子供をめざす教育課程の創造とは

豊かな生活とは，子供たちが楽しさや喜びを感じながら自ら対象に働きかけ，自分なりに工夫し，自己のもつ能力や可能性を最大限に発揮し，友達と一緒に活動することの喜びを感じながら自分の活動への満足感を味わうことである。つまり，活動することに対して，自分なりにおもしろさを感じ，させられるのではなく，したくてたまらないというその子自身の欲求をもち，もの・人・ことへ積極的に働きかけていくなかで，友達と一緒に活動することのよさを味わえるようにすることである。

豊かな生活をめざす教育課程の創造とは，障害のある子供たちを生活の主体者として，成長・発達の可能性を引き出すために，各教科及び領域・教科を合わせた指導のそれぞれを通して，どのような生活力を身につけていかなければならないかを明確にすると共に，目的的・計画的な教育的働きかけ方を究明していくことである。

▼　生活力とは

知的障害のある子供たちにとっては，原理・原則を学習して，生活のあらゆる場面で遭遇するいろいろな問題解決に応用することに困難があるという特性がある。そこで，この困難を克服できるようするために，生活力を身につける必要がある。そのために，子供たちに培いたい生活力とは，将来自立し，社会参加するために必要な知識や技能，態度といった資質や能力の基盤となる力である。つまり，子供たちが，個々の障害の状態や特性に応じて身辺処理の自立や社会的自立，経済的自立を図り，地域社会の一員として生きていくために必要な様々な事柄を学んでいくことで身につく資質や能力のことである。



具体的には，①日常生活や社会生活を営む上で，基礎となるたくましく生きるための健康や体力，②興味・関心に伴うやる気や，達成感・成就感による自信，③主体的に取り組む中で最後までやり遂げるねばり強さ，④集団参加の基礎となる協調性，⑤生活上の課題を解決するために身の回りの事象にかかわる力，⑥生活上の課題解決や社会の仕組みの変化に対応するための知識・技能などの総体である。以上のような生活力を，領域・教科を合わせた指導の形態や，各教科ごとの学習の中で「できる・わかる」状況を設定し，子供たち自身が身につけていくことができるようにする。

▼　めざす子供の姿

豊かな生活を営む子供の姿を，次のように考える。

○　学校の中で，教師や友達と協調的にかかわりながら，日々の活動へ積極的に取り組み，生活への充実感や満足感，期待感をもつ子供

○　家庭の中で，自分のことは自分で行い，家族の一員としての役割を果たすことができる子供

○　地域社会の中で，社会事象のもつ意味や価値を知り，自分の生活向上のためにそれを利用することができる子供

2 本校特殊学級の教育課程

3 副主題についての説明

▼ 各教科及び領域教科を合わせた指導における役割を明確にするとは

一人一人の子供が将来自立し，社会参加するために必要な「生活力」を身につけるために，それぞれの教科及び領域・教科を合わせた指導において「なにを」「どのように」身につけていくかを明らかにしていくことである。「なにを」については，培われる生活力を明らかにすることであり，「どのように」とは，その生活力を培うために，どんな内容の活動を行っていくかを考えて指導することである。特に，知的障害のある子供たちの教育課程は，生活中心と個に応じた指導に特色がある。そこで，次のような内容を選択し，重視する。

○子供たちが主体的にかかわっていこうとする意欲や自発性を育てる内容，○集団生活を送っていく上で必要な人と協調的にかかわっていくことができるような集団参加の基礎的能力を育てる内容，○地域社会の中で生活していく上で必要な基本的生活習慣を身につける内容

▼ 教科別の指導について

教科別の指導として，国語・算数・音楽・体育・図画工作を設定する。各教科の内容は，生活上の基礎的・基本的な力となる言語・数量に関する能力，表現力，体力の育成を重視する。それは，子供たちが現在及び将来の生活の中で直接かかわる内容であり，子供たちが学校生活において活動し，経験すべき内容である。その指導については，生活単元学習に生かされる内容として関連して位置づけられることもあれば，教科の系統性を重視して位置づけられることもある。

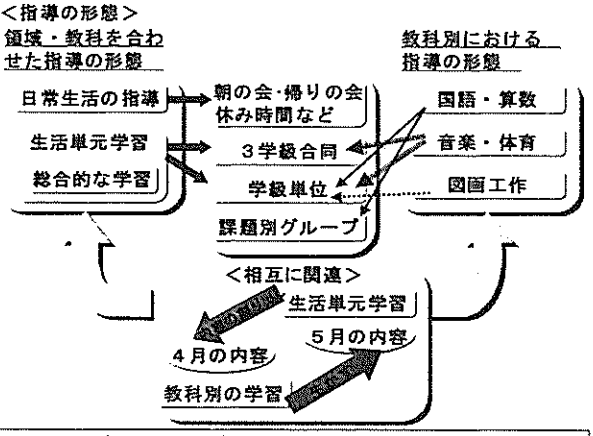
▼ 領域・教科を合わせた指導について

領域・教科を合わせた指導の形態として生活単元学習と日常生活の指導を設定する。総合的な学習の時間については，生活単元学習の中で，題材に応じて子供たちの選択の幅を広げるなどして，子供たちがより主体的に課題解決できるようにし進めていく。

生活単元学習では，子供たちの実際生活上の課題を解決するための目的活動を経験させることにより，課題解決の力や実際生活に必要な知識・技能を身につけさせるとともに，生活への積極性を培い，自分の生活への満足感や充実感を味わわせることを重視する。この活動は，子供たちの生活に基づいており，各教科，領域の内容が，課題解決の過程における活動の中に含まれるということである。領域・教科を合わせた指導と教科別の学習については，生活する上で必要となるかかわり方や基礎学力の定着をはかり，可能な限り題材に応じて関連し教科別の学習で学んだことが生活単元学習の中で生かされるようにしていく。

▼ 教育課程の枠組みについて

各教科及び領域・教科を合わせた指導における役割を明確にすると共に，目的的・計画的な教育的働きかけ方を行っていく上で，次のような教育課程が必要となってくる。具体的には，教科別の指導（国語・算数・音楽・体育・図画工作）と領域・教科を合わせた指導があり，生活単元学習と音楽・体育については，学級単位で指導を行う場合と，より集団を意識できる３学級合同で行う形態がある。また，国語と算数においては，学級単位で個に応じた指導を行う形態と，言語・数量に関する基礎的事項の指導の徹底を行うために，課題別のグループ編成による国語グループ・算数グループを位置づける。日常生活の指導については，特設の時間はもうけないが，朝の会や帰りの会，給食の時間や掃除の時間及び休み時間において継続的に指導を行い，自立活動についても同じように特設の時間はもうけないが，全教育活動の中で配慮的に内容を取り上げ指導を行う。



▼ 教育課程編成上の留意点

上述した内容を身につけていくために，次の点に留意しながら教育課程を編成し実施していく。

① 教育課程の中心は，生活中心と個に応じた指導の重視である。そこで，具体的な生活上の課題を解決していく学習を教育課程の中心にし進めていく。

② 生活上の基礎的・基本的な力となる言語・数量に関する能力，表現力，体力の育成を重視し，基本的な生活習慣については，継続的・配慮的に行う。

▼ 個に応じた指導の工夫について

個に応じた指導を行う場合に，①培いたい力の設定，②児童の実態の把握，③個別の指導計画に基づく一人一人の具体的な指導内容の設定，④教材化の工夫，⑤活動構成の工夫，⑥個に応じた教具，教師の個に応じた支援の工夫という観点から行っていく。（舛元俊文）

障害児教育における教科学習の＜ふくおかプラン＞

1　生活上の基礎的・基本的な力を重点的に高める教科学習

1　教科学習が担う役割・立場

知的障害をもった子供たちは，認知，記憶，言語，思考などの知的機能が遅れていることや社会生活に必要な感覚・運動，自己統制などに関する技能の獲得や適応行動の困難性が特徴としてみられる。また，学習上の特性として，学習によって得た知識や技能が断片的であったり，生活の場面で応用されにくかったりする傾向にある。

教科学習は，めざす生活力を育成するために，主体的な学習の過程で，生活上の基礎的・基本的な力を高めることが望まれる。基礎的・基本的な力は，たくましい体力，やる気・自信，ねばり強さ，協調性を基盤にしながら，生活上の課題を解決するために生活事象にかかわる力として，表１に示すようにとらえる。この力は，生活上の基礎的・基本的な力を育てることを重視する必要から，教科の学習内容に照らし合わせ，特徴的な力をとらえ学ばせることもあれば，子供の実態や学習内容によって，教科別に系統的に育成する必要もある。

基礎的・基本的な力を育むことは，問題解決的な学習を進めることへの可能性が生み出される。子供たちは，学習対象にかかわりとらえて，問題を解決することで豊かな生活を営むための生活力を身に付けていく。

2　基礎的・基本的な力を重点的に高めるとは

生活上の基礎的・基本的な力を重点的に高めるとは，子供たちが豊かな生活を営むために必要とされる力を，教科としての言語，数量，芸術，運動等の内容によって取り出し，重点的・系統的に積み上げることである。

教科学習は，子供の精神的な発達を考慮しながら，親のニーズや学校生活に必要とされる内容を，各教科ごとの学習内容に応じて精選しなければならない。また，学び方の面からも，日常生活における身の回りの事象にかかわり，課題解決の力を系統的な段階のなかで，経験的に積み上げていくことが必要である。

そのためには，子供の実態を適切にとらえ，各教科の学習内容を生活から精選する。そして，内容に照らし合わせて，表１にかかわる力を分析し，具体的な活動と個に応じた教材・教具によって学習を繰り返す。かかわる力を教科の内容に応じて，分析的にとらえて特徴的な力として構想することは，具体的な活動のねらいを焦点化でき，段階的な指導ができるようになる。具体例として，算数科の数と計算領域の学習内容を数の系統性に従って配列したものに，かかわる力として分析した４つの力を対応して示したのが図２である。教科の内容を系統や子

表１　教科学習で特に大切にする資質・能力

教科の資質・能力			具体的な内容
生活力	やる気・自信		いろいろな数量に囲まれた事象や状況から驚き，疑問，新鮮さ，親近感などからの「やる気」自らできた達成感や成就感からの「自信」
	ねばり強さ・協調的なかかわり方		目的や課題をもち，自分で選び，決定して活動する力や自分も友達もできた喜びを共に認め合い，決められた時間をねばり強く最後まで取り組む忍耐力
	かかわる力	国語	基礎的な力（文字力・語彙力・文法力），文字による表現力（取材力・構想力・記述力），読みの力（語と語を関連づける力，意味を再生する力，音声で再生する力）
		算数	記号や数字等に抽象化する力，対応したり比較したりする力，数量の関係を把握する力，一般化する力
		音楽	場面や曲から動きをイメージする力，音楽的要素を感じ取る力，表現する力（身体表現する力，歌唱表現する力，器楽表現する力）
		図画工作	生活から表したい対象を選ぶ力，表したいことをイメージする力，色や材料を選択する力，作品のもつよさや美しさを感じる力，
		体育	調整力・持久力・瞬発力を中心とした体力，課題克服への意志力・集中力，ゲーム構成力（ボディーコントロール，きまりの理解力，状況判断），運動対象に働きかける力（用具・道具の操作，友達への働きかけ，運動の選択）
	知識・技能		国語（聞く・読む，話す，書く），算数（数量の基礎・数と計算，量と測定，図形・数量関係，実務），音楽（鑑賞，身体表現，器楽，歌唱），図工（表現，材料・用具，鑑賞），体育（基本の運動，いろいろな運動，きまり・安全）

供の実態を受けて，数の内容の系統で配列し，具体的な活動に応じて身につけられる４つの力を位置づけていく。

このような指導を繰り返すことは，子供の内面の充実を促し，子供の新しい世界を切り開くだけでなく，生活の豊かさを広げていくことからも意義がある。

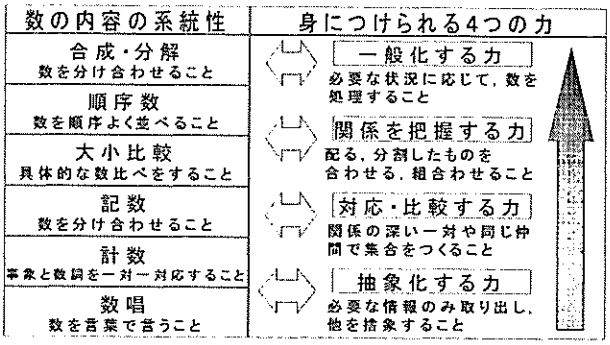


図２　算数科における学習内容とかかわる力の関係

３　具体的な指導の構想

▼　年間の内容構成について

年間構想は，本校独自の個別の指導内容表をもとに，子供の実態を生かしたり，教科のもつ領域の系統性を受けたりして，題材を表３に示すように個別の指導計画に示し配列する。算数科の例は，数と計算領域を中心にして，個の数範囲を限定し，数唱から合成・分解までの領域の内容を深めるように計画し，子供の興味・関心や課題意識を喚起する題材選定を進めていくようにする。かかわる力は，前項に示したように内容に対応して設定し，意図的・計画的進められるようにする。

▼　具体的な学習指導の工夫について

①　教材開発

ア　子供たちの生活経験があり興味・関心の高いもの

イ　子供たちの実態に応じることのできる多様な活動が内包されているもの

ウ　子供たちが意識しやすい解決の目的があるもの

②　活動構成

ア　個に応じた学習対象や学習方法を子供たち自身が判断・選択でき，行為として表すこと

イ　活動に繰り返しの必然性や繰り返しのなかに変化があり，ある程度の試行が積み上げられること

ウ　子供たちの働きかけが可能なもの・ひとが準備されている環境であること

具体的には，動機・熱中・発展という３段階の学習過程で構成する。

○　動機段階：学習課題を意識し学習への動機をもつ。

○　熱中段階：課題に熱中して取り組み，課題を解決したり，解決達成した成果を実感したりする。繰り返しの活動のなかで，学習対象や学習方法を知り，それを使うなかで，活動の判断選択を行っていく。

○　発展段階：学習してきた成果を日常の生活に近い場面で生かしたり，日常生活に生かしたりする。

③　個に応じた教具，教師の個に応じた支援の工夫

ア　子供たちの力で操作ができるもの

イ　操作をした結果や成果が子供たちに意識できるもの

ウ　子供たちに自己評価ができるとともに，子供たち自身でフィードバックが可能なもの

（塩田　利彦）

表３　算数科における年間計画の例　（第３・４学年）　※数と計算領域だけを表記しています。

月	年間指導題材	算数科の数と計算領域（個別の指導内容例）		数と計算領域のかかわる力
4	おもちゃはいくつ	数と計算（数唱）	Ｂ－イ－２Ｂ－ウ－２	個別化する力
	ボウリング大会をしよう	数と計算（計数）	Ｂ－ウ－２　Ｂ－エ－２	個別化する力・類別化する力
5	まめをかぞえよう	数と計算（記数）	Ｂ－オ－１	個別化する力・類別化する力
6	コロコロ島をぼうけんしよう	数と計算（大小比較）	Ｂ－カ－１	分類・整理する力
	数パズルして紙芝居をつくろう	数と計算（順序数）	Ｂ－キ－１　Ｂ－ク－１	分類・整理する力
9	かぞえっこをしよう	数と計算（合成）	Ｂ－ク－１	分類・整理する力
	うみのおさかなをふやそう	数と計算（合成分解）	Ｂ－ク－１Ｂ－ケ－１	対応する力
10	はいたつごっこ	数と計算（計算）	Ｂ－コ－１	対応する力
	たしざん絵本	数と計算（計算）	Ｂ－コ－１	対応する力
11	クルクルランドのおせわをしよう	数と計算（計算）	Ｂ－コ－１	対応する力
2	どうぶつえんのおせわをしよう	数と計算（計算）	Ｂ－サ－１	対応する力

領域	段階	1	2	3	4	5
Ｂ数と計算	ア　数　唱	１～３の数詞を唱える	１～５の数詞を唱える	１～10の数詞を唱える	１～50の数詞を唱える	１～100の数詞を唱える
	イ　数　字	１～３の数字を読み書きする	１～５の数字を読み書きする	１～10の数字を読み書きする	１～50の数字を読み書きする	１～100の数字を読み書きする
	ウ　１つずつ数える	１～３の個数を数える	１～５の個数を数える	１～10の個数を数える	１～50の個数を数える	１～100の個数を数える
	エ　直観的に数える	１を見取って数える	２までの数を見取って数える	３までの数を見取って数える	４までの数を見取って数える	５までの数を見取って数える

2 数概念を確かにする算数的活動の構成の学習プラン

障害児教育研究部　塩　田　利　彦

1 学習プランの考え方

▼ 算数科学習におけるかかわる力

算数科学習におけるかかわる力とは，子供の生活を基盤とした実態をもとに，記号や数字に抽象化する力，対応したり比較したりする力，数量の関係を把握する力，一般化する力を大切にし，日常生活に必要な数量や図形に関する初歩的な知識・技能を身につけることである。その子供の実態は，事象をとらえるための認識の初歩まで対象範囲を広げ，個々の子供のニーズを具体的に把握する必要がある。そのニーズに近しいものを培うために，算数科としてのかかわる力を育みつつ，算数科の基礎・基本を学習内容として身につけさせるために算数的活動の構成を大切にする。

▼ 数概念を確かにする算数的活動とは

数概念を確かにするとは，未測量を含んだ事象から数量を的確にとらるため，量，色，形，位置の理解をもとに算数的活動を数理の系統性に沿って進め，４つの個別化する力，類別する力，分類・整理する力，対応する力を備え，初歩的な数量が分かることである。ここでの数理の系統性とは，数範囲を拡大すること，対象を具体物から半具体物，へ抽象化することなど，具体的操作対象の処理から形式的操作対象の処理へといった系統である。また，数理の系統は，数の内容の系統としての数唱から合成・分解に従って高められる。

数概念を確かにする算数的活動とは，数を理解する前提として，量，色，形，位置といった対象から得られる第一次情報の理解をもとに，事象を比べる，並べる，分ける，合わせるの算数的活動を経験することで未測量を的確にとらえ，その過程で個別化する力，類別する力，分類整理する力，対応する力を身につけることができる主体的な活動である。それを通して，日常の生活を営む上で，必要な身の回りの事象の数量的な処理が可能となり，数量を活用した豊かな生活を実現することができる。

▼ 数概念を確かにする算数的活動の構成の学習プランとは

年間を通したプランは，まず，数の内容を年間で構想し，「数唱」，「計数」，「記数」，「大小比較」，「順序数」，「合成・分解」の内容に応じた題材をストーリーを変えて設定し，算数的活動を段階的に組み合わせて構成する。そして，個々の子供の実態を把握し，個々の実態から数の範囲を限定する。数範囲を限定し，一連の内容を受けて数の意味を理解した上で，数範囲を広げていくようにする。

各題材におけるプランは，「比べる」，「分ける」，「並べる」，「合わせる」の４つの算数的活動を段階的に組み合わせて活動構成することである。活動構成は，複雑にならないように，段階的にパターン化する必要がある。そして，子供の興味・関心からストーリーの設定と算数的活動を引き出す教具の２つの側面からの工夫をすることである。ストーリーは，問題解決的な流れで，子供の目的意識を大切にすること等の条件が必要である。

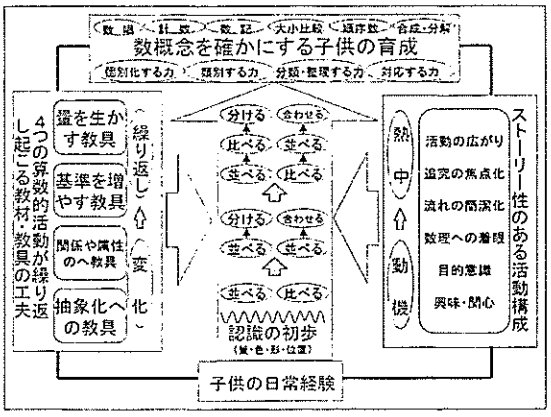


図１　数概念を確かにする算数的活動の構想

段階	で　あ　う	ひ　た　る			ま　と　め　る
	場面の状況を理解し，「やりたい」課題にであう段階	課題に変化を与え認識の初歩を生かす４つの算数的活動を繰り返す中で活動に熱中し解決していく段階			課題を振り返り，高められた活動や内容を自覚する段階
活動と内容	１　場面の状況を把握し，課題をもつ。 ○　課題に対する解決の活動を見通すこと ○　ストーリー性のある活動の内容をつかむこと	２　ストーリーの流れに応じ，具体的な数や活動の変化から繰り返し解決する。 ○　数を限定し２つの活動から数の意味をつかむこと	○　数の範囲を広げ，３つの活動から意味とらえること	○　これまでの数の範囲で活動を深め意味を分かること	３　活動を振り返り，まとめる。 ○　具体的な活動をふり返ること ○　課題の解決を評価すること
支援	※　ＶＴＲや場からの課題に迫る状況の設定 ※　コーナーを回る動的な設定	※　認識の初歩を生かす行為の設定と個に応じた教具の工夫 ※　ストーリーからの問題意識の流れを生かした活動構成とランゲージマスター等の活用			※　振り返るための資料や具体的な場面の提示 ※　活動を見せ合い，相互に評価し認め合う場の設定

表２　量・色・形・位置を捨象する算数的活動を位置づけた活動構成

2　学習プランの具体的構想

▼　4つの算数的活動の構成について

４つの算数的活動の構成は，年間の数の内容の深まりに応じて活動の組み合わせを段階的に多く設定する。また，一題材の設定においても，同様の設定が考えられる。

組み合わせには，内容によって複雑に考えられるが，図３に示すように，基本的な組み合わせをもとに設定するように進めていった。

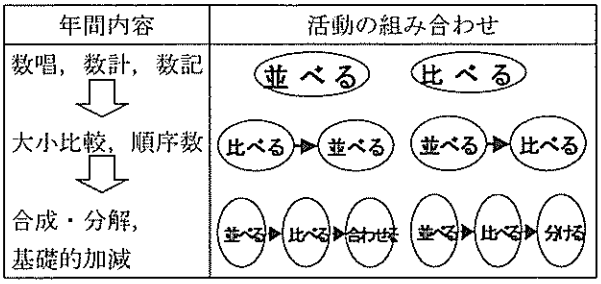


図３　４つの算数的活動の組み合わせの構想

▼ ストーリーの設定について

そのストーリーは，活動の目的があり見通しをもたせる流れの中で，認識の初歩を繰り返し行うことや組み合わせた算数的活動を自然に引き起こすこと，ねらいとする数の意味に向かい捨象していく設定にする。

ストーリーによって問題解決の学習を具体化するためには，子供の興味・関心を引き出す設定が重要になる。

▼　算数的活動を引き出す教具について

算数的活動を引き出す教具は，個々に応じた数の設定や活動の組み立てによって，教具のもつ機能が設定されるように工夫する必要がある。個々に準備し，試行の数にも応じるために設定に変化も加えなければならない。

教具の条件は，①子供の興味・関心を引き付け，「やってみた。」「おもしろそうだ。」という思いをもたせること，②教具を操作する中で，数の意味につながる活動が必然的に起こるようなものであること，③数の設定に変化が与えられ，繰り返し働きかけること，④身の回りや生活経験でイメージがもてて，操作が簡単であること，⑤数の意味をとらえることへの自己評価機能があることが考えられる。

3　指導の実際

第３・４学年　題材
ランドのおせわをしよう
－あわせていくつ・ふえるといくつ－

▼　単元の考え方

本題材は，子供たちが観覧車等の場に出会い，園長のランド君のお願いを受けて「ランド君を助けるため，子供の世話して楽しませよう。」という意識のもとに活動が始まる。そして，入場・観覧車・おやつ・汽車ポッポのお世話の各設定において，子供，観覧車のゴンドラ，お菓子，列車等を２種類で構成し，数を合併したり，数を増加したりする活動によって，「合わせる」「増やす」などのたし算の考えを繰り返し進めていけるようにストーリーを展開した。さらに，入場・観覧車・おやつ・汽車ポッポ等のお世話から，全体数をとらえたり，加数や被加数で分けたり，全体数と加数・被加数の関係をとらえたり，言葉や数式に置き換えたりするために「並べる」「比べる」「合わせる」算数的活動を繰り返すストーリー展開を行った。その算数的活動にひたることで，たし算の状況をつかんだり，数の変化に気づいたり（個別化・類別化），全体数と２つの部分の数をとらえたり（分類・整理），数を合わせたり，数を増やしたり（対応）して，数の合成・分解を生かしながらたし算の意味を理解できるよう構想した。

▼　単元の目標

① ランドを楽しみ，並べる・比べる・合わせる活動に繰り返し取り組み，「あわせていくつ」「ふえるといくつ」のストーリーにひたることができる。
② ランドの事象から数を取り出し，合わせたり，増やしたりの活動から，合併・増加の意味を理解する。
② ランドの場の状況に応じて，合併や増加の計算の意味を考えて，全体数を求めたり，全体数から加数と被加数を確かめたりすることができる。

認識の高まり	数の意味の獲得への内容設定	教材・教具の工夫	４つの活動の設定
認識の初歩	比較されるものが単純で属性が単一の色，形，量の観点で特定の物に着目する	具体物同士の教具，カード等の抽象化への教具	・比べる ・並べる ・分ける ・合わせる すべての過程でくり返し行うような位置づけをする
	比較するものの違いを見分け，必要な情報を取り出し，他の属性を捨象する	関係性のある教具，異なる属性をもつ教具	
	違いを見分ける分類から分類の基準を変えて集合数についての認識をする	基準を増やし複数の教具，位置や方位を示す教具	
数の意味の理解	分ける基準を変えて，基準の同異で合成・分解を認識する。	分離量等の具体物，長さや量を生かし分割の教具	

表４　認識の高まりに応じた教材・教具の工夫と４つの活動の設定

▼ 学習の流れと考察

第２次：２～４／５時　ストーリーをつかみ，合わせる状況に応じて，子供のお世話をする。

【２／５時】

①　子供の人数を合わせて観覧車お世話をする。

並べる活動→合わせる活動

・Ａグループ：４，５の数範囲を合わせていくつ

ストーリー：「Ａグループは，男の子と女の子を合わせ，チケットを買って乗せてね。頼んだよ。」

＜合わせていくつ：Ｔ児の活動の姿＞



図１　並べる活動を行う教具の例

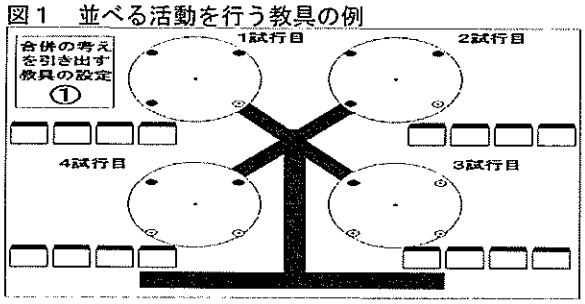


図２　あわせる活動を行う観覧車の教具

ゴンドラ赤１，青３取る。子供赤１，青３取る。（並べる）①の観覧車に赤１，青３をぶら下げて数える。「１，２，３，４。」と数える。（合わせる）４台の観覧車まで繰り返し進む。

考察１

Ｔ児は，１試行目は子供を男女の色で１と３でとらえて並べ，２色に対応してゴンドラも並べることができた。観覧車に合うように全体数を合わせて数えることができていた。しかし，２試行目以降は，ゴンドラの取り違いや色の対応ができていなかった。色を意識して並べる活動を重視し，数える活動へとつないだ。

第２次：２～４／５時　ストーリーをつかみ，増やす状況に応じて，子供のお世話をする。

【２／５時】

①　子供の人数を増やして観覧車お世話をする。

並べる活動→合わせる活動

・Ｃグループ：７，８の数範囲を合わせていくつ

ストーリー：「Ｂ，Ｃグループは，子供を増やして，乗せてね。頼んだよ。」

＜増えるといくつ：Ｋ児の活動の姿＞

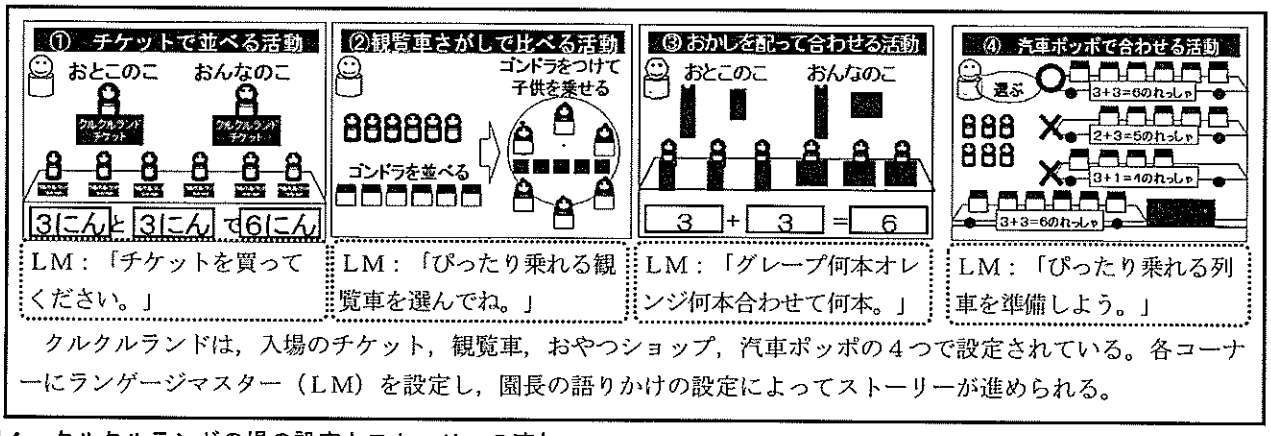
子供の乗った青ゴンドラを４つ持ってきて置き，さらに，４つ持ってくる。（並べる）観覧車の釘の数を数える。子供の残ったゴンドラを１つ追加する。数えながら，すべてかける。７（青）＋１（黄）＝８と言う。（合わせる）８試行進む。



写真３　観覧車で合わせる活動をするＫ児

考察２

Ｋ児は，８試行まで進み，比較的容易に活動することができた。始めの人数と増えた人数を数図板に並べることで容易に個々の数をとらえた。観覧車の選択の時は，全体数を合わせて考えるため，子供を数え直し，観覧車の釘の数を数えることで合わせる活動を進めた。並べる活動で数をとらえ，合わせる活動によって，増加した全体数をとらえることができた。



クルクルランドは，入場のチケット，観覧車，おやつショップ，汽車ポッポの４つで設定されている。各コーナーにランゲージマスター（ＬＭ）を設定し，園長の語りかけの設定によってストーリーが進められる。

図４　クルクルランドの場の設定とストーリーの流れ

【第３／５時】

② 子供の人数を合わせたり，増やしたりしてランド全体のお世話をする。

並べる活動→比べる活動→合わせる活動

・Ａグループ：５，６の数範囲を合わせていくつ

＜合わせていくつ：Ｔ児の活動の姿＞

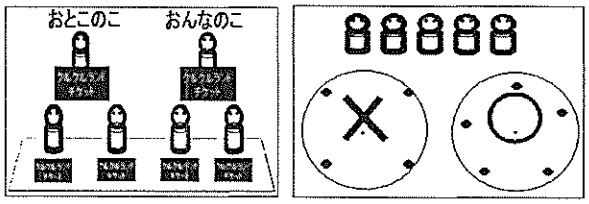


図５ 並べる・比べる活動を行う教具の例

青２，赤３の子供を数表板に乗せる。（並べる）数表板にチケットを４枚順番に入れる。青２，赤３の観覧車を探し，教師が５人乗りの観覧車に行き選ばせると，自分で指さし見つけだす。（比べる）ゴンドラを青２，赤３取り出す。ゴンドラに子供を乗せて，観覧車に付ける。（合わせる）おやつコーナーのＬＭを聞く。１枚ずつ取り出して入れる。汽車コーナーのＬＭを聞く。式で列車を選べず列車を取り出し数えて選ぶ。

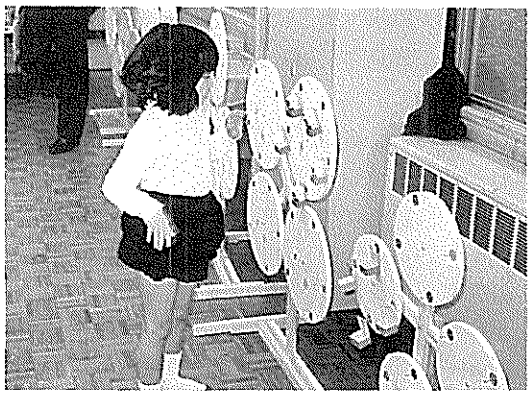


写真６ 観覧車で合わせる活動をするＴ児

考察３

子供，チケット，ゴンドラ，観覧車それぞれは，並べる活動を基にして数をとらえることができている。しかし，事象が変わることで，別々のものとしてとらえ関連した一連の活動になりにくかった。合わせる活動は，始めから数えて，数えたしながらすすめていった。焦点化して，合わせる活動を進める必要があった。

【第３／５時】

② 子供の人数を合わせたり，増やしたりしてランド全体のお世話をする。

並べる活動→比べる活動→合わせる活動

・Ｃグループ：９，１０の数範囲を増えるといくつ

＜増えるといくつ：Ｋ児の活動の姿＞

青の子供を４数表板に入れる。チケットコーナーで青４枚取る。ＬＭを聞きゲートをくぐる。黄の子供を５とらえ数表板につける。（並べる）「あった。」と観覧車を決める。（比べる）ゴンドラを５個取る。観覧車に５個付ける。残りの分を取りにいく。４個取り観覧車に４個付け子供を乗せる。（合わせる）青の4，黄の5のカードを付け「４＋５＝９」と言う。グレープ４，オレンジ５枚取って入れる。「４＋５＝９」と言って確認し，９人用の列車箱に乗せる。

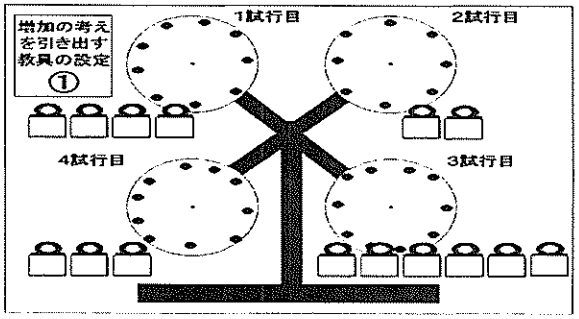


図７ 並べる・比べる・合わせる活動の教具

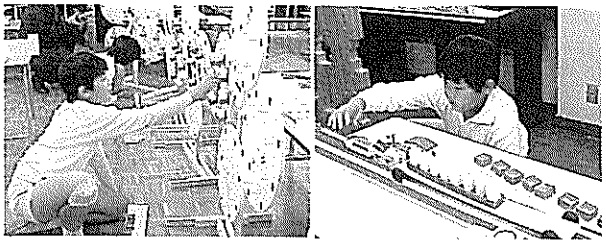


写真８ 場を回り３つの活動を進めるＫ児

考察４

Ｋ児は，４と５で全体数９を並べる活動でとらえることで，複数の観覧車から比べながら９を選択することができた。また，観覧車とゴンドラ，子供を対応して合わせることができた。その後のコーナーでも，合わせることを確かにしていった。３つの活動を組み合わせ，教具に働きかけることによって，段階的に増加の行為ができ，Ｋ児に有効にはたらきかけたと考える。

全体考察

本題材の子供たちは，クルクルランドという遊園地をストーリーの流れに従って進みながら，増加や合併の意味を具体的な活動に置き換えて，段階的にとらえることができた。「並べる」「比べる」「合わせる」の３つの算数的活動を「並べる」「合わせる」から「並べる」「比べる」「合わせる」へと２段階で組み合わせた構成により，Ｋ児のように，繰り返し数に働きかけ数を増やして全体数をとらえることができた。Ｔ児のように，「並べる」「比べる」段階を重視した活動構成や教具を工夫し，より個に応じる必要もあった。

算数科の数と計算領域でのかかわる力は，数の系統性にあった算数的活動を組み立て，繰り返すことで子供の行為として高まる姿がみられるようになった。

今後，数の意味にせまるために，個々の実態に応じた４つの算数的活動の複線的な組み合わせのあり方と，教具を工夫しながら算数的活動がよりよく数をとらえられる活動になるように工夫する必要があると考える。

3 言葉を使って遊び語彙力をつける国語科学習プラン

障害児教育研究部　原　口　和　美

1　学習プランの考え方

▼　国語科におけるかかわる力

国語科におけるかかわる力は，大きく次の３つの力に焦点化する。①基礎的な力（文字力・語彙力・文法力），②文字による表現力（取材力・構想力・記述力），③読みの力（語と語を関係づける力，意味を再生する力，音声で再生する力）である。

その中でも基礎的な力は，３つの力の土台となるものであり，そのなかでも「語彙力」をつけることは，言葉の獲得期にある子供にとって，まず一番に大切になってくる力と考える。言葉の獲得期にある子供たちは，言葉を身近な人との間で，文脈にそって使っているので，言葉の広がりがなかなかでてこない。社会で自立した生活を送っていくためには，より多くの語彙力の獲得が必要なのである。ここで言う語彙力とは，一つの言葉をいろいろな物・事に対応させたり，物・事をいろいろな観点の言葉を使って表現することができる力である。

▼　言葉を使って遊び語彙力をつけるとは

「言葉を使って遊ぶ」とは，言葉を文字や写真や絵のカードや文字のチップ等の形にして，子どもが手に取って集めたり並べたりという操作をしながら遊ぶことである。その遊びの中で，子どもは言葉を読んだり聞いたりその意味を考えたりするように，遊びを組み立てていく。

子どもにとって「遊び」は，自主的に取り組むことで新たな力や知識を身につけることが期待できるものである。従って，「言葉を使って遊ぶ」ことで，子供が自主的に言葉を「読む」「聞く」「意味を考える」活動をして，言葉を理解する力や言葉を表現する力をつけることが期待できると考える。

「言葉を使って遊び語彙力をつける」とは，子どもが言葉を使って遊ぶなかで，自然と言葉と触れあい，子ども自ら多くの言葉を獲得して，言葉の活用範囲をひろげていくことである。

さらに，「言葉を使って遊ぶ」体験を積ませることで，言葉をもっと「知りたい・使いたい」という思いを高め，子どもが自主的・意欲的に語彙力を身につけていくことになると考える。このことは，日常生活での言葉の獲得にも反映し，語彙力をさらにつけることになると考える。

▼　言葉を使って遊び語彙力をつける国語科学習プランとは

「言葉を使って遊び語彙力をつける国語科学習プラン」では，表１に示すように年間を通して計画的に言葉を取りあげて，語彙の活用範囲や活用できる語彙を段階的に増やしていく。

活動構成は，ゲームなどの遊びの要素を取り入れて，子供たちが言葉を使ってみたい状況づくりをする。その中で，必然的に読んだり，聞いたりするしくみをいれて，言葉を使わないと活動ができないなどの状況づくりをしていく。また，繰り返し活動する中で，語句や語彙の難易度を段階的に高くしていくようにする。子供自らが，一人で活動を続けることができるよう，正誤に気づくような自己評価の機能をもたせるようにする。

学習内容は，言葉を読んだり，聞いたり，言葉の意味を考えたりするような活動をしくんでいく。

語彙の広げかたについては，子どもが学校の日常生活で必要となる言葉を中心に，家庭や社会で使う言葉へと広げていく。

表1　言葉のカリキュラム　（１・２年生用）

		1年			2年		
		1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期
語句指導	学校で使う物に関する言葉（名詞，動詞，形容詞）難易度を以下の順で高くする。音節数が小→大，清音→濁音→半濁音→促音→長音→拗音	○登校時の服装の名称 ○かばんに入れてもってくるものの名称 ○関する動詞 もつ，いれる等， ○関する形容詞 あかい，くろい等	○教室で使うものの名称 ○関する動詞 あらう，あける等 ○関する形容詞 きいろい，あおい等	○教室の道具箱やロッカーの中のものの名称 ○関する動詞 かく，きる等 ○関する形容詞 まるい，しかくい等	○学習で使うものの名称 ○関する動詞） ひく，ひらく等 ○関する形容詞 おおきい，ちいさい等	○遊びに使うものの名称 ○関する動詞 のる，おりる等 すべる等） ○関する形容詞 たかい，ひくい等	○給食やそうじで使うものの名称 ○関する動詞 はく，あつめる等 ○関する形容詞 おおい，すくない等
語彙指導		○生活空間の広がりに伴って，場所に合った使用語句をひろげていく ○具体的なものから抽象的なものにひろげていく。 ○属性をつけた言葉へひろげていく。 ○指定した仲間分けができるようにしていく。			○下位概念から上位概念へひろげていく。 ○全体の名称から局部的な名称にひろげていく。 ○物を見ていろいろな言葉を選びだすことができるようにしていく。 ○自分で仲間分けができるようにして，名前から用途による仲間分けができるようにしていく。		

2　学習プランの具体的構想

▼　語彙力をつける活動構成の工夫

言葉を使って遊び語彙力をつける活動を，であう・ふかめる・いかすの各段階で構成する。

「であう」段階では，言葉を使って遊ぶことに，意欲をもたせ，活動内容の見通しをもたせるため，教師が扮装するなどして案内人として登場し，言葉の遊びの世界に誘い込み，試しの活動をする。

「ふかめる」段階では，文字を並べて言葉づくりをしたり，言葉のカード集めをする。これらの言葉を使った遊びをする時のヒントとして，「語句カード」を提示して，必然的に言葉を「読む」「聞く」場面を設定する。また，一つの言葉を具体物→写真→絵と結ぶ活動へと難易度を変えて提示し，段階的に語彙力をつけるようにする。そして，個に応じた支援をして，子供自ら自己評価しながら，繰り返し活動に取り組むようにする。この個に応じた支援は，語句カードに絵をつけて覆いをしたり，絵カードの裏にヒントとなる言葉を書いたりする。また，物→言葉，言葉→複数の物，物→複数の言葉という段階で，個に応じて活動内容を変えていく。

「ひろげる」段階では，「ふかめる」段階で使用した言葉を全て使用して，拡大した活動をすることで語彙獲得を確実にするようにする。

▼　教材化の視点について

物と言葉を結ぶ活動に繰り返し取り組む中で，語彙力をつけるため，次のような視点で教材となる語句や物を考える。以下の教材を段階的に使うことで，難易度を上げながら，言葉の一般化をはかる。

○　子どもが名前や用途を知っている身の回りの物で，色や形といった形状が違う物。（赤いくつ，黒いくつ，長い鉛筆，短い鉛筆等）

○　同じ名前の物でも具体物，写真，絵で表現した物。（具体物→写真→絵と難易度があがる。）

○　いろいろな角度で捉えた具体物，写真，絵。

○　３音節～６音節の中で，子どもの平仮名の読み（清音・濁音・半濁音・促音・拗音の順に難易度があがる）の実態に合った音節数の語句。

○　子どもが日常生活を送る上で必要度の高い物。（学校生活から，家庭生活で使っている物へ）

表２　言葉を使って遊び語彙力をつける活動構成

	であう段階	ふかめる段階	ひろげる段階
活動	案内人の説明を聞き，試しの活動をし，活動の見通しをもつ。	繰り返し言葉を読んだり聞いたりして，文字を並べたり，カードを集めたりして，言葉を使って遊ぶ。	既習の言葉を全て使って，言葉を使って遊ぶ活動に取り組む。
支援	※　案内人の設定 ※　ＶＴＲや試しの活動の設定	※　個別の語句や絵や写真カードの段階的提示と，ヒントや自己評価機能の設定	※　既習の言葉を使った遊びの場や教材の設定

3　指導の実際

第１・２学年ふじ組　題材
「なんだろう」くいずをしよう

▼　題材の考え方

本題材のねらいは，「言葉のクイズの王様」に挑戦することばを使った遊び「なんだろうくいず」を設定し，身近な物の名前や色・用途による物の意味を表す言葉の読みを身に付けたり，意味を理解させることをねらいとしている。具体的には，①身近な物を表す言葉の読みを聞いて模倣すること，②身近な物を表す言葉の読みを獲得すること，③身近な物を表す言葉の意味を捉えることをねらいとしている。このような学習で，子供たちの語彙力を増やし，言葉の意味理解を助けることができることは，豊かな言語能力の基礎を育てる上で意義深い。

本題材では，子供たちが，日常生活で使う身近な物や状態を表す言葉を取りあげ，語句を拾い読みしたり，語句として言葉の意味を捉えたり，言語表現に活用できる言葉の数を増やしていくことをねらっている。このように，日常生活を営む上で必要な物や状態を表す言葉を読めるようにすることは，文の読みをより深め，自己表現をより詳しくできることにつながり，絵本を一人で読んで楽しみ，周りの人とのコミュニケーションを円滑にし，将来の子供たちが自立した生活を送る上で，子供たちが積極的に周りの環境に働きかける自信にもつながっていき，価値あることと考える。さらに，状態を表す言葉を使いこなすことができることは，豊かな表現力を身に付けることにつながり，より思考活動を深め，自己統制をし社会の中でより適応しかつ豊かに生きていくことができると考える。

▼　題材の目標

○　身近な物の名前を言ったり，身近な物の名前を読んで，模型や絵カードを集める，「言葉のクイズ」の遊びを楽しむことができる。

○　身近な物を，名前や色・用途によって，仲間分けできる。

▼ 学習の流れと考察

＜T児の語彙力の実態＞

自分が日常的に使っている物ならば，身近な物の名称を言うことができる。「赤・青・黄・緑」などの色の名前は理解しているが，色で物を仲間分けすることができるまでにはいたっていない。

第２次：２～４／５時
２種類の「なんだろうクイズ」に答えて，模型や絵や影絵から言葉，言葉から具体物や写真を選びだす活動に取り組む。（「たべるもの」「みにつけるもの」「がっこうでつかうもの」）

【４／５時】

① なんだろうくいず１

・Ａグループ：「がっこうでつかうもの」の具体物や写真や絵や影絵の部分を見て，名前をあてる。また，その物の特徴を言う。

＜支援＞　色を答えやすい問題提示と発問。

＜なんだろうくいず１：T児の姿＞

「のり」「はぶらし」については注目するが，物を表す言葉は出てこない。友達の発表に耳を傾けている。「くれよん」の時は，じっと注目してつぶやく。指名されて大きな声で「クレヨン」と発表する。クレヨンの実物を近くで提示されて，２回「何色？」と聞かれてクレヨンを指さして「赤」と答える。

考察１

T児は，なんだろうクイズ１の活動で，色を答えることができた。このことより，T児の「クレヨン」に対する表現力を広げることができたと考える。

＜Y児の語彙力の実態＞

日常的によく使う物に関しては，絵など一般化したものでも，身近な物の名前を言うことができる。求められれば，色等の知覚的な特徴や用途によって説明ができる。

第２次：２～４／５時
２種類の「なんだろうクイズ」に答えて，模型や絵や影絵から言葉，言葉から写真や絵を選びだす活動に取り組む。また，具体物から多くの言葉を選びだす活動に取り組む。

【４／５時】

① なんだろうくいず１

・Ｃグループ：「がっこうでつかうもの」の具体物や写真や絵や影絵の部分を見て，名前をあてる。また，その物の特徴や用途を言う。

＜支援＞　用途を説明させる発問。

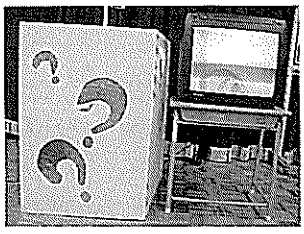
＜なんだろうくいず１：Y児の姿＞

「はぶらし」について，先端にカバーの掛かっている物を提示すると，「はみがき」と答える。「どうやって使うの。」と聞くと，（カバー）をとって使うの」「はみがきするの」と使う身振りをしながら説明する。「はさみ」についても，名称だけでなく「きるの」と使う身振りをして説明できた。

考察２

Y児は，なんだろうクイズ１の活動で，物の名称を答えるだけでなく，使う身振りをしながら説明することができた。このことより，Y児の「はぶらし」「はさみ」の表現力を広げることができたと考える。

なんだろうくいず１



実物投影機の映像を見る

なんだろうくいず２



写真２
問題カードを聞く

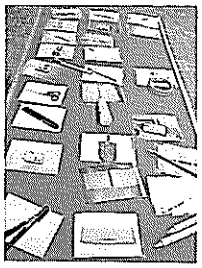


写真３
答えを選ぶコーナー

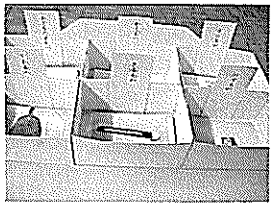


写真４
仲間分けする整理箱

「なんだろうくいず１」では，実物投影機で映し出された，実物や模型や写真や絵や影絵の一部を見て，何かをあてるというクイズで，物の名称や特徴を表す言葉や用途を表す言葉で表現させる。（物→言葉，一対一対応）

「なんだろうくいず２」では，はてなボックスから問題の語句カードを選び出し，聞いたり読んだりして，答えとなる物を具体物や写真や絵カードから選び，仲間分けして整理箱に入れる。（言葉→複数の物）

また，さらに具体物を見て，表現する語句カードを複数選ぶ。（具体物→複数の言葉）

図１　なんだろうくいずの場の設定

② なんだろうくいず２

・Ａグループ：「がっこうでつかうもの」の名前を聞いて，具体物や写真のカードを取る。

＜支援＞　問題カードに線画を描いて紙で覆う。
具体物・写真・絵カードと段階的に選択する物を準備した。

＜なんだろうくいず２：Ｔ児の姿＞

「まじっく」の問題では，「もう一度カードを聞いて」「ヒントをみよう」という助言による支援で，もう一度問題カードを聞きなおし，「ヒント」の絵をオレンジの紙をめくって見る。写真と実物を提示してあったが，実物を手に取る。また，「はんかち」については，写真カードが見つからず，実物を手にとる。「のり」「はさみ」「とけい」等については，数回問題カードの音を聞いてから，カードの文字を見て声に出して読み，写真カードを探しに行く。写真カードを選び出すと「あった」と言って喜んで，取ったカードを得意げに見せた。

考察３

問題カードを音で聞くことで，模倣して文字を読む姿が見られたことより，平仮名の読みを確認できたと考える。また，答えを具体物と写真カードの両方用意したことで，Ｔ児の言葉の理解度によって答えを見つけだすことができたと考える。このことで，具体物から写真への橋渡しをすることができたと考える。また，ヒントとして問題カードに書いた絵も，Ｔ児が見て物を探す手がかりにしており，有効に働いたと考える。ヒントの出し方を減らすと，言葉の獲得を促すことができると考える。

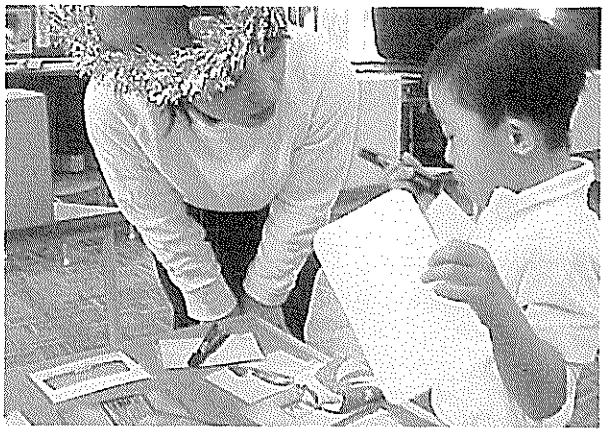


写真１　ヒントを見て具体物を選ぶ

② なんだろうくいず２

・Ｃグループ：がっこうでつかうもの」の名前を聞いたり，読んだりして，写真や絵のカードをたくさん取る。また，Ｙ児は，実物を見て名前や用途の書かれた文字カードを選ぶ活動も設定した。

＜支援＞　写真や絵カードの裏に名称と用途を記入。
一つの問題に複数の答えカードを準備し，「もっとある」等の声かけをした。

＜なんだろうくいず２：Ｙ児の姿＞

最初は，一枚の問題に一枚の答えを選び出していた。そこで，より多くのカードを選ぶように「もっとあるよ」と声かけをした。また，集めたカードは，仲間分けをして整理させることで，再度物の名前以外の用途等による物の見方を確認させた。すると，カードの裏の文字を確認しながら，「きるもの」で「カッター」や「はさみ」を複数枚選ぶようになった。また，実物から文字カードを選択する活動では「カッター」を見て「きるもの」を選択する等，用途の言葉を選ぶことができた。

考察４

一対一でしかカードを選んでいなかったが，複数枚の答えのカードを選び出すことができるようになったことにより，Ｙ児の一つの言葉に結び付ける対象の物が広がり，語彙がの広がりが促せたと考える。カードの裏文字のヒントや「もっとある」の声かけや，カードを複数枚用意したことが，有効であったと考える。

さらに，具体物から言葉を選ぶクイズで，用途を表す言葉を選んでいたことにより，物を表現する言葉の広がりが出て，語彙力をつけることに有効に働いたと考える。

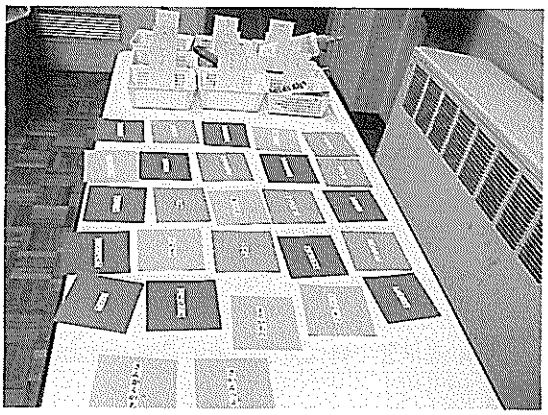


写真２　具体物から複数の言葉を選び出すコーナー

全体考察

「クイズの王様」の出会いを出発点として，「クイズの王様」の出す「なんだろうクイズ」に答えていくことで，名前や状態や用途などを表すいろいろな言葉と，具体物や写真や絵カードを結び，語彙力をつけていくことをねらいとした活動を構成して，子供たちに取り組ませた。

その結果，クイズの王様に注目させて，子供たちの意欲を充分引き出すことができた。また，２種類のクイズに答えさせていく中で，一つの物を表すいろいろな言葉や，一つの言葉で表されるいろいろな物を理解させることができた。

よって，クイズの仕組みや個別の絵カード，語句カードの選択や個別の支援が有効に働いたと考える。

今後，更にクイズの内容面と試行回数を充実させることで，より子供の語彙力を高めていけると考える。

障害児教育　生活単元学習の＜ふくおかプラン＞

1　生活上の課題を解決し総合的に生活力を高める生活単元学習を

1　生活単元学習が担う役割・立場

一般化や抽象的な思考の困難さ，記憶痕跡の弱さ，活動の見通しが立ちにくいといった学習特性のある子供たちの発達や成長を促すためには，生活中心で経験のまとまりを重視した教育課程を編成し，現在の生活を充実させていくことが大切である。つまり，具体的な生活目的を達成，実現し，生活を更新していく生活単元学習を教育課程の中核とし，教育活動を展開していくことが望ましいと考える。そして，現在の生活を主体的に更新し，自己への有能感を感じることが，生活への積極性を生み出すことになっていく。

生活単元学習とは，実際生活上の課題を解決するための目的活動を組織的に経験させることにより，自立的な生活に必要な力を身に付けさせる指導の形態である。また，①めあてと見通しをもった主体的な学習，②生活上の課題を成就するための総合的・実際的な学習活動，③具体的な活動に取り組む能動的な学習，④共通の課題意識をもって，仲間と協同で取り組む協同的な活動，⑤一人一人に合った活動に取り組む個別的な学習といった特徴をもっている。このような特徴をもつ生活単元学習を通して，生活への積極性を培い，自分の生活への満足感や充実感を味わわせていくことができる。そうして身の回りのもの・人・ことに自分からかかわるなかで，「粘り強さや協調性」，「かかわる力」，「知識・技能」といった生活力を培うことになる。生活単元学習において，子供たちの活動は生活そのものであるため，様々な情報や条件が入り交じった生活事象の中で，行動を判断・選択していかなければならない。つまり，生活事象を構成する要素が絡み合い，状況が変化していく中で課題をとらえ解決していくことになる。そのような営みを通して，生活力を幅広く多面的に高めていくことになる。

2　生活上の課題を解決し総合的に生活力を高めるとは

生活上の課題とは，身の回りのもの・人・こととの出会いから「○○をしよう」などの目的意識をもったときに，その目的を達成するために必要な活動そのものを指している。例えば，「誕生会をしよう」という目的を達成する際には，「買い物をする」，「料理をする」，「プレゼントを作る」などの活動が，課題として子供たちに意識される。そして「買い物」をするときに，「お金の支払い方」や「店員とのかかわり方」などがさらに必要な活動として洗い出され，個々の実態に応じて課題とされる。つまり，生活上の課題は，活動そのものと，活動するための細かな知識や技能などの２つを指している。生活単元学習の展開にあたっては，子供たち自身が切実感をもって，それらの課題を「解決したい」といった意識をもつことがまずもって大切である。

総合的に生活力を高めるとは，表１に述べている生活力を総合的な活動を通して，身に付けていくことである。総合的な活動とは，各教科・領域の内容が課題解決の活動の中に含まれることであり，様々な要素（もの・人・こと）で構成されている事象に対して，自分が今までに身に付けている知識や技能，態度を結集して適切に対応していくことである。そのような営みを通して生活力が身に付いていく。

よって，生活上の課題を解決し，総合的に生活力を高める生活単元学習とは，一連の目的活動において，子供たちが生活力を発揮するような場や状況を位置づけるとともに，年間を通して意図的，計画的に生活力の育ちを図る営みである。

表１　生活単元学習で特に大切にする資質・能力

資質・能力			具体的な内容
生活力	やる気自信		身近な事象にかかわる意欲（やる気），生活目的を実現することで感じる自己有能感（自信）
	ねばり強さ		目的達成に向けて行動を持続させる意志，耐性
	協調性		人との協同活動における意思表示や要求の抑制
	かかわる力	もの	身の回り（学校，家庭，地域）における事物（自然物，人工物）への興味・関心，認識
		人	身の回りの人（家族，友達，教師，地域の人）との意思の疎通
		こと	行事や催し，集会など，集団による活動における役割意識，責任感
		課題への取組力	目的や課題への意識，解決の方法や結果の見通し，人との協力，情報を収集・活用，場面や状況に応じた行動の判断・選択，自分の考えの表現
	知識・技能		日常生活に必要な生活習慣，身近な自然事象や社会事象への認識や理解，情報機器の活用技能，福祉や環境への対応

3　具体的な指導の構想

▼　単元づくりについて

生活単元学習の単元作りを行う際には，まず領域・教科を合わせた指導の形態であるという，教育課程上の位置づけを踏まえることが必要になる。つまり，領域・教科で取り扱う指導内容を「教科別の指導」や「領域別の指導」，「領域・教科を合わせた指導」という指導形態に分けて指導するということを十分に考慮し，「領域・教科を合わせた指導形態」である生活単元学習において，どのような内容を身に付けさせるべきかを明らかにしなければならいない。但し，教科学習のように，内容を身に付けさせるための活動を繰り返し位置づけるのではなく，内容を具体的な活動として位置づけ，首尾よく成し遂げることで，結果的に身に付けるという考え方である。

生活単元学習で取り扱うことで，子供たちが効果的に身に付けることができる内容は，知的障害者を教育する養護学校の生活科の内容が中心となる。それは，生活科の内容が，基本的生活習慣や遊び，役割，手伝い，きまりなど，実際の生活場面から取り上げられたものであるからである。また，それらの内容を指導する際には，多種多様な生活活動を通して指導することが望ましく，生活科のいくつかの内容の他に，国語，算数，体育，図画工作などの内容，さらには，道徳，特別活動，自立活動の内容も含む総合的・実際的な活動が大切である。そのようなことから，生活単元学習の役割が明確になる。

生活単元学習の実際の指導に当たっては，生活科や他教科の内容を教えるために，特定の単元を組むのではなく，子供の興味・関心に基づいた生活活動のまとまりの中で生活科や他教科の内容が，一人一人の指導内容として取り上げることができるかという観点をもつことが大切になる。

子供の興味関心に基づいた具体的な生活活動については，次のように考える。

栽培，飼育，製作，調理，集会，大会，発表会，旅行，買い物，バザー，ボランティアなど

これらの活動から単元の中心になるものを選定し，その他の付随する活動とつながりをもたせることで，生活としてのまとまりをもった単元となる。

年間でどのような単元を設定するかについては，季節や行事，子供の興味・関心，課題への取り組み方の育ちを考慮する。（表２）

▼　具体的な学習指導の工夫について

①　教材化について

子供たちの現在及び将来の生活を想定し，生活に生きる価値ある経験ができる対象を選定する。具体的には，次のような点に留意する。

ア　日常生活や地域生活，職業生活，余暇活動などにつながるもの

イ　子供たちの興味・関心や経験の度合いから，活動や結果へのイメージがもてるもの

ウ　集団で取り組むからこそ，経験できるもの

②　活動構成について

目的の達成を目指すための問題解決の過程を大切にし，子供たちが単元終了後に満足感，成就感を味わうことができるように活動を構成する。具体的には，次のような３段階の学習課程を考える。

動機段階：対象への思いや願いから集団による目的や課題を意識する。

熱中段階：集団や個人の課題を意識し，集団または個人で課題に取り組む。課題に取り組む際には，対象を変えることで，身に付けた知識・技能や課題への取り組み方を生かしていく。但し，教科学習のように，内容を身に付けるために繰り返しの活動を位置づけるのではなく，子供たちの生活のまとまりとして自然な活動として展開することを考慮する。

発展段階：課題解決の過程や結果から生み出された新たな環境（もの・こと）を利用したり，そこで活動したりして，目的達成の満足感，成就感を味わう。

③　指導形態について

集団としての目的を達成するために，子供の課題解決の力や集団参加の状況などの実態を考慮し，小集団やペアでの活動，個人での活動を位置づける。単元の中にそれらの活動を多様に位置づけるようにする。

④　個に応じた教具，支援について

課題解決に必要な情報を個の実態（認識力や手先の巧緻性，数量や言語の力など）に応じて提示し，主体的な活動を促す。

ア　活動の順序や必要な用具等の使い方などを示す手順表やパネルの提示

イ　公共物の利用の仕方など，内容を絞って繰り返し活動するための模擬活動の場の設定

ウ　教師による促しやモデル演示，動作補助など

（谷崎　和一郎）

表２　生活単元学習の単元設定の考え方

			3　4　5　6　7　8　9　10　11　12　1　2
子供の生活	季節		春 ┆ 夏 ┆ 秋 ┆ 冬
	行事	学校生活	学芸会，遠足，七夕，宿泊訓練，運動会，もちつきなど
		地域生活	清掃活動，レクリエーション，スポーツ大会，祭りなど
	興味・関心		遊び，公共物・施設，ニュース，人，テレビ，本など
	課題への取組		小集団での課題解決，ペアでの課題解決，個別の課題解決

2 身近な自然事象とのかかわりを深める生活単元学習プラン

障害児教育研究部　谷　崎　和一郎

1 学習プランの考え方

▼ 身近な自然事象にかかわるとは

知的障害のある子供たちの現在及び将来の自立的な生活を考えたとき，身近な自然事象への興味・関心をもち，自然の事物や現象に進んでかかわりをもつことは，大変意義のあることである。なぜなら，子供たちの生活には数多くの自然事象が何らかの関係をもって存在しており，それらの特徴や価値をとらえることができれば，子供たちの生活の幅は広がり豊かなものへと更新されていく。

身近な自然事象とは，子供たちが生活する空間（家庭，学校，地域）における事物や現象であり，子供たちの生活に関係の深いものである。具体的には，植物や昆虫，動物，気候，天候，物質などである。

身近な自然事象とのかかわりを深めるとは，子供たちの身の回りにある様々な自然事象の存在を生活の中で感じ，その良さをあじわったり，生活に利用したりすることである。そのためには，自然事象の特徴や性質，働きをとらえることが大切である。そこで，生活目的を達成するための活動を通して，自然事象への興味・関心を高め，子供たち自らが課題を解決する経験を重視する。

▼ 身近な自然事象とのかかわりを深める生活単元学習プランとは

身近な自然事象とのかかわりを深める生活単元学習プランとは，子供たちの身近に存在する自然の事物や現象への興味・関心を出発点として，子供たち自身がそれらの特徴や価値をとらえることができるような活動を展開していくことである。また，動植物への認識や身近な季節，天候，物質への認識が高まるような年間構想を展開することでもある。

子供たちが，自然事象とのかかわりを深めていくためには，まず自然事象と出合い，その形や性質などにかかわる特徴を見いだし，それらに対して興味・関心を持つことが大切である。しかし，自然事象をダイレクトに子供に出合わせることは，好ましくなく，子供の興味・関心や経験の度合いから，子供たちなりの試行錯誤が展開されながら，楽しく操作したり，体験したりできる活動を設定する必要がある。そして，子供たちが魅力を感じるような目的が生み出されるようにしなければならない（出合う段階）。次に，目的を達成するために必要な活動を想定し，子供たち自身が課題を意識していく必要がある。この際，子供たちの経験の度合いから，必要な活動を想起できる場合もあるが，教師の活動提案などによって，課題を意識することも必要になってくる。

目的達成のための必要な活動については，課題解決のための情報を提供し，子供たちなりに必要な情報を収集したり活用したりして，主体的に課題解決に取り組むことができる場を構成する。具体的には，個の実態に応じた手順表やモデル演示，教師の声かけなどを行う。手順表については，個に応じて，写真や絵図，言語による情報を提供したものを準備する。また，子供たち同士の集団性の傾向をとらえて，意図的にグループを作り，お互いにかかわりをもちながら活動できるような工夫も必要になってくる。さらに，繰り返しと変化のある活動を構成することで，必要な知識や技能，態度を身に付けていくことができるようにする。（深める段階）

目的の達成のために必要な活動を一人一人が実態に応じて首尾よく成し遂げた後は，活動の成果を友達と共にまとめたり，発表したり，成果を生かした活動を展開したりする。その際には，植物の栽培や動物の飼育などの活動では，活動の記録を新聞などのまとめるといった表現活動を行ったり，野菜などの栽培を行った場合には，収穫の喜びを味わうパーティー等を行ったりする等して目的達成の喜びを仲間とともに喜び合うことになる。また，遊びやゲーム的な要素を含んだ活動においては，他のクラスの友達を招いて集会や○○大会といったイベント的な活動で締めくくることになる。いずれにしても，仲間とともに目的の達成を喜び合うことが大切である。（ひろげる段階）

以上のような一連の目的活動を年間を通して繰り返し展開していくことで，身近な自然事象への関心を高めることになり，子供たちの経験を豊かにし，生活を潤いのあるものに更新していくことにつながっていく。

表３　自然事象とのかかわりを深める生活単元学習の年間構想（高学年）

	1	2	3
自然事象とのかかわりの高まり	自然の事物や現象への興味・関心 （植物の開花，結実など）	自然の事物や現象の特徴や変化への関心や気付き （食べる，鳴くなどの様子）	自然の事物や現象の働きへの関心や気付き （エネルギーの利用）
課題解決の力の高まり	集団での課題解決，体力を必要とする活動を伴う課題解決	ペアでの課題解決，空間概念を生かす活動を伴う課題解決	個別の課題解決，手先の巧緻性が必要な活動を伴う課題解決

2　学習プランの具体的構想

▼　教材化について

子供たちの身近な自然の事物・現象の中から，次の点に留意して学習対象を設定する。

○　色や形の変化が分かりやすいもの
○　利用することによって，子供たちの興味・関心に応じた活動が展開されるもの
○　子供たちにとって，空間的，または心情的に身近であるもの
○　イベントや大会などの集団活動の場につながるもの

なお，単元を立ち上げる際には，生活の流れやまとまりを考慮し，次のような視点を大切にする。

○　学校行事や学級での行事とのかかわり
○　季節の変化や季節に応じた催しとのかかわり
○　子供たちの興味・関心や生活経験とのかかわり

▼　自然事象へのかかわりを促す支援

自然事象に子供自らかかわることができるように，次のような支援を行う。

①　自然事象が関係している事象との出合わせ方の工夫
②　自然事象とのかかわり方を示す手順表やパネルの提示

▼　活動構成について

目的を達成に向けて活動する中で，必然的に自然事象にかかわることができる活動を構成する。そのために，自然事象と関係の深い事象との出合いを設定し，出合いから生じた思いや願いから目的をもたせる。次に，目的の達成のために必要な活動を意識させ，繰り返し取り組ませる。最後に，解決した課題を生かす場を設定し，目的達成の満足感・成就感を味わわせる（表３）。

表３　身近な自然事象とのかかわりを深める活動構成

階	であう段階	ふかめる段階	ひろげる段階
活動	目的達成に向けて活動を見通し計画を立てる。 ・直接体験 ・計画表作り	模擬の場や実際の場で，課題解決に取り組む。 ・　実際の場での作業的活動，観察活動など ・　模擬の場での体験活動，直接体験など	活動の過程や成果を表現する。 ・　活動記録，観察記録，新聞作り，大会，集会など
支援	※　対象への興味・関心を引き出す体験的な場の設定 ※　目的意識や課題意識を生み出す資料の提示（写真やビデオ） ※　活動への見通しをもつための具体物や映像等の提示	※　活動の順序や必要な道具の使い方などを個の発達段階や障害の状況に応じて示した手順表やパネルの提示 ※　実物や模型などの具体物や写真，絵などのモデル ※　繰り返し模擬の場 ※　課題解決の力の育ちや人へのかかわり方を考慮したグルーピングの工夫 ※　個の活動や子供同士のかかわりを促す声かけやモデル演示，動作補助	※　活動の過程や結果を発表する場の設定 ※　絵や写真，文章を使った表現のモデル提示 ※　活動の成果を生かした発展的な活動の場の設定 ※　他学級の友達との交流の場の設定

3　指導の実際

第５・６学年梅組　単元
実践１　秋の虫たちを育てよう！
実践２　ロボットすもうたいかいをしよう

▼　単元の考え方

本単元は，自然事象とのかかわりを深めることをねらいとした年間単元構想に基づいている。実践１は，①昆虫への興味・関心を喚起し，生き物の生活についての認識を深めることができる，②中期的なスパンで継続的に世話をすることで，仕事への責任感を育てることができる，③友達と作業を分担して取り組むことができる，④昆虫が生きていくために必要な事柄をとらえることができる，などの価値があると考える。実践２は，身近な事物である電池やネジの働きへの関心や気付きをもつことができる，②ロボットへの興味・関心を高める，③手の巧緻性を高めたり，前後の方向をとらえたりすることができる，といった価値があると考える。

単元の目標

（実践１）
○　虫を育てる目的意識をもち，飼育するために必要な課題を解決して，目的達成の満足感，成就感を味わう。
（実践２）
○　ロボット相撲大会への目的をもち，ロボット製作や他の準備にかかわる課題を解決して目的達成の満足感を味わう。

▼ 学習の流れと考察(実践1)

(単元の成り立ち)

本単元は，秋の虫の声が聞こえる季節の生活をテーマとし，「秋の虫たちの鳴き声を教室で聞きたいな」といった子供たちの願いを実現することを単元のまとまりとして考えた。単元の中では，飼育活動（生活科の内容）を中心とし，新聞作りといった表現活動も設定した。

第１次：１～２／８時
秋の虫に出会い，飼うための計画を立てる。



写真１　このあたりにコオロギさんがいるみたいだ

第２次：３～６／８時
秋の虫たちを飼うために必要な事柄に取り組む。

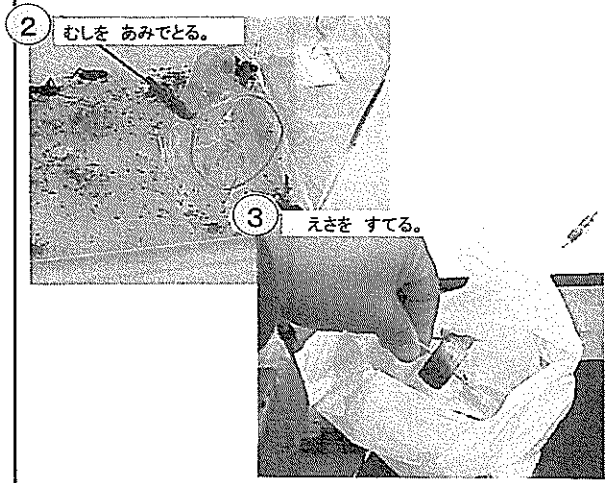


写真２　活動の手順を示す手順表

a児の実態と指導内容

（実　態）

○　課題に対して意欲を示し，進んで課題に取り組む。手順を示す資料をもとにしながら，課題を解決していく。
○　昆虫を自分から触ったり飼育したりする経験は少ない。
○　相手を意識せずに一方的に話す傾向がある。

（主な指導内容）

○　秋の虫に興味・関心をもち，進んでかかわること
○　果物用ナイフを使ってリンゴやなすびを切ること
○　新聞に書いた文を聞いている人を意識して発表すること

第１次は，「秋の虫の鳴き声はきれいだな」といった関心を出発点として，秋の虫たちをみんなで飼育する意欲や目的をもつことをねらいとしている。そのために，秋の虫に実際に見つけに出かけたり，鳴き声を聞いたりする体験を仕組んだ。

子供たちに，スズムシやコオロギを見せると，飼育箱をのぞき込んだり，鳴いている虫を探したりする姿が見られた。教師が「虫さんたちが教室にきてくれたらどうかな？」と投げかけると，「いいね。鳴き声を聞かせてほしい。」と答えた。さらに，裏の草むらから，鳴き声がよく聞こえているという気付きから，みんなで虫を見つけに出かけ，コオロギやマダラスズといった秋の虫を運動場で見つけることができた。

次に，虫たちを教室で育てるために必要なことは何かについて話し合った。子供たちは，図鑑に載っている飼育箱の絵をもとに，なすびやりんごなどのえさや隠れるための植木鉢，産卵箱などが必要であることをとらえていった。

考察１

下線部の反応から，自分たちの教室に秋の虫たちが来ることのよさを感じ，教室での飼育活動への目的意識をもつ様子がうかがえる。

第２次は，秋の虫たちを飼育する目的を達成するための課題に友達と一緒に取り組み，えさを交換したり，飼育箱を掃除したりすることをねらいとする。そのために，活動の順序やえさの用意の仕方，飼育箱の掃除の仕方を写真や文で示した手順表を提示したり，一緒に活動する友達の組み合わせをを工夫してグルーピングを行った。

子供たちに数日たった飼育箱を提示すると，じーっと中の様子を見つめていた。教師が「えさはどうなっている？」と投げかけると，a児は「ちょっとごみは捨てようね。」とつぶやいた。また，他にも枯れたりんごを見て，「このままにしてるとくさるから，新しいのに取り替える。そうしないと，こおろぎさんが死んでしまう。」とつぶやく子供も見られた。

a児の活動：スズムシのえさの交換と飼育箱の掃除

a児には，１ページに１つの活動を取り上げ，写真や文で活動を促すタイプの手順表を提示した（写真２）。また，各ページに番号を付け，活動の順序を示した。



写真３　スズムシさん引っ越しですよ。けがをしないようにきをつけて。

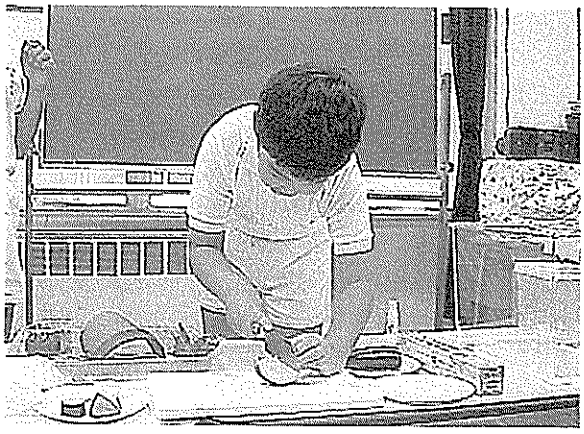


写真４　指を切らないように気をつけよう

第３次：７～８／８時

飼育活動を秋の虫新聞にまとめ，他学級の友達に発表する。

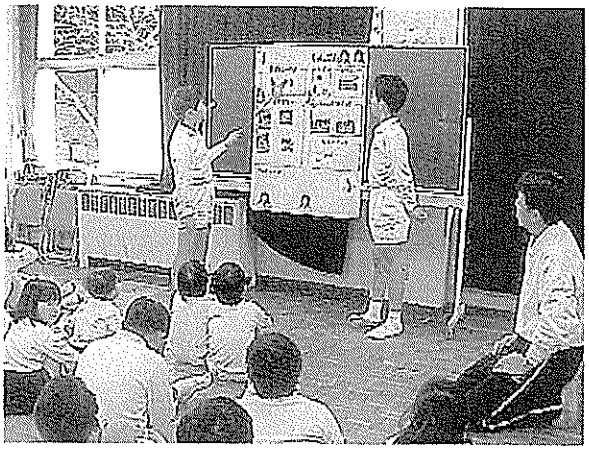


写真５　これがスズムシのおすです。りんごやなすびをたべます。

グルーピングについては，手順表をもとに自分なりに活動を進めていくｄ児と一緒に活動することにした。

ａ児は，ｄ児が手順表を見るのを見て，同じように手順表をめくり，「虫を別の入れ物に入れる。」とつぶやいた。そして，ｄ児と一緒にスズムシを移動させることに取り組んだ。移動させる際には，「おい。こっちに入れなさいよ。」や「急がないと。」，「おっ，つかまえた。」などどつぶやきながら，ｄ児と一緒に捕獲し，別の容器に移していった。スズムシがａ児の網からなかなか離れないときには，ｄ児が手で取ってやる姿も見られた（写真３）。

えさの準備では，ａ児はりんごやなすびを包丁で切ることに取り組み（写真４），モデル図をもとに，左手の指を丸めながら切ることができた。

考察２

ａ児の反応から，「虫たちの家をきれいにしよう」という意欲をもたせるために，黒ずんだり，食べて少なくなったりしているえさを提示したり，Ｔ「このままで，いいかな」と投げかけたりしたことは，子供たちなりにえさの交換や糞の処理の必要性を意識し，虫たちの家を自分たちできれいにしようという意欲をもつことにつながったと考える。また，同じグループのｄ児とかかわりながら共に課題に取り組む姿が見られたことは，課題の取り組み方を考慮したグルーピングが有効に働いたと考える。さらに，手順表をもとに，活動の順序ややり方を捉える姿からは，活動の順序ややり方を個に応じて示した手順表が活動を促すことに有効性がうかがえる。

飼育活動に取り組む中で，自然にりんごやなすびの状態に目を向け，しわがれていたり黒ずんでいたりする変化に気づいていくことができた考える。

第３次は，自分たちの飼育活動を振り返り，えさやりや掃除の仕方を壁新聞にまとめていった。飼育活動をしている写真を「虫の体」「えさ」「飼育箱」「えさやり」「掃除」「虫の様子」といった項目に分けて模造紙に貼り付けていった。また，自分たちが活動している写真に吹き出しを書いたり，飼育活動の感想をまとめたりした。まとめた壁新聞は，特殊学級の低学年と中学年の子供たちに発表した。ａ児は，ｄ児と一緒にスズムシ新聞を発表した。ａ児は，スズムシの体の絵を指し示し，雄と雌の違いなどを説明していった。（写真５）他にも，「春になったらコオロギさんの赤ちゃんが産まれます。」とうれしそうに感想を発表する児童が見られた。低学年や中学年の児童は，発表を静かに聞き，中には「これが，虫さんのたまご？」といって，写真に近づいてくる児童も見られた。

考察３

子供たちは，継続的な飼育活動を壁新聞という形式でまとめていったが，えさやりや掃除の仕方について，身に付けた事柄を発表していった。

秋の虫の飼育活動に取り組む中で，虫が住む環境の変化といった自然事象への気付きが生まれたと考える。また，友達と共に課題に取り組み，力を合わせて解決することができた。

▼ 学習の流れと考察(実践2)

〈単元の成り立ち〉

本単元は，卒業を控えた生活をテーマとし，「たくさんの友達とロボットすもう大会をしたいな」といった子供たちの願いを実現することを単元のまとまりとして考えた。単元の中では，製作活動（生活科の内容）を中心とし，大会といった集会活動も設定した。

第１次：１～２／８時
ロボットすもうを体験する。



写真６　はっけよい，のこった。ロボットすもうっておもしろいね。

第２次：３～７／８時
ロボットすもう大会の準備をする。

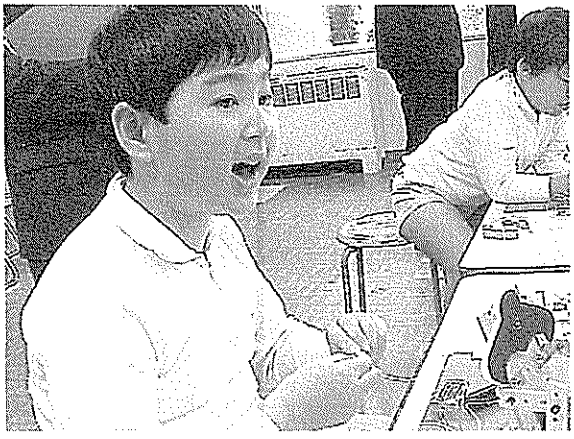


写真７　せんがつながったよ。

a児の実態と指導内容

（実　態）

○　課題に対して意欲を示し，繰り返し課題に取り組む。手順を示す資料をもとにしながら，課題に取り組む。

○　電気機器への興味・関心が高い。釘やネジを使って木材を組み合わせる経験がある。

○　相手に物を渡すときに，相手をあまり意識しない。

（主な指導内容）

○　電線コードの指でねじって結びつけること

○　ネジやナットの締め方や機能をとらえること

○　賞状を相手を意識して，はっきりと読み上げること

第１次は，ロボット力士への関心を高め，ロボット相撲大会をする意欲や目的をもつことをねらいとしている。そのために，実際にロボットを操縦して相撲をする体験を仕組んだ。

子供たちに，ロボット力士を見せると，すぐに「ロボットだ！」「おすもうですね。」とつぶやき，ロボットを興味深く見ていた。そして，早速，ロボット相撲を体験した。手元のスイッチを動かすと，ロボットが動いたり止まったりすることに気付き，ロボットの動きを見ながらスイッチを操作する姿が見られた。また，友達と相撲の取り組みをするときには，進んで行司の役をしたり，手を挙げて取り組みを希望したりする姿が見られた。（写真６）さらに，ロボットが前や後ろに歩いたり，倒れたりする動きを見て喜ぶ姿も見られた。ロボット相撲をした感想を尋ねると「またしたい。みんなでロボット力士を作りたい」とつぶやいた。

考察１

子供たちの反応から，ロボット力士での相撲を取ることの楽しさを感じたり，ロボット作りやロボットすもう大会への意欲をもつ姿がうかがえる。このことは，実際にロボットを操作する体験活動を仕組んだことが有効に働いたと考える。

第２次は，ロボット相撲大会の準備として，ロボット力士を作ったり，ポスターや賞状作りに取り組んだ。

ロボット力士の製作の際には，電池ボックスに線をつないだり，ネジで力士の頭や手をつけたりする活動に取り組んだ。

a児は，コードを電池ボックスにつけようとするが，コードの先をうまく穴に入れることができないでいた。すると，「あれっ」とつぶやき，コードの先端をねじって電池ボックスの穴に入れた。次に，「２番電池を入れる。」と手順表を読み，電池を入れた。白いコードが残っていることに気付き，「白いのねじって」とつぶやきながら，電池ボックスに自分でねじってつなぐことができた。その後，スイッチを入れるが，ロボットが動かないため，さらに，電池ボックスの白コードとロボットの白コードを指でねじってとめた（写真７）。そして，スイッチを入れ，ロボットが動く様子をうれしそうに眺めた。教師が「動いたね。」と投げかけると，「はい！」と大きく答えた。

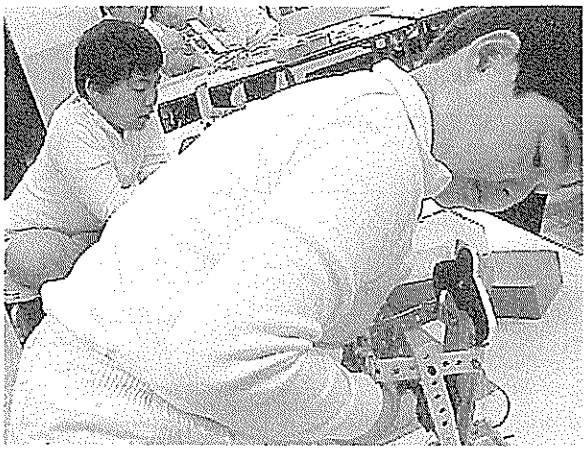


写真８　うらからネジをしめるとグラグラしないぞ。

第３次：８／８時
　他学級の友達や中学生の先輩たちと一緒にロボットすもう大会をする。



写真９　みんなですもうたいかい。たのしいな。



写真10　おめでとう！しょうじょうです。

さらに，力士のまげをネジ止めするときには，逆にまわしてしまい，うまくとまらなかったが，裏側にナットが必要なことに気付き，ナットをとって裏側にまわすことができた。手をネジで取り付ける際には，始めはネジとナットを最初に取り付けていたが，うまく取り付けられないことから，自分なりに試行錯誤し，逆にまわすことに気付き，「おー。ねじった。ねじった。できた。できた」とつぶやく姿が見られた（写真８）。

逆の手のパーツをつける際には，ネジのまわし方をとらえて，素早く止めることができた。

考察２

ａ児の反応から，ロボット力士を動かすために，ねばり強く線をねじったり，配線の仕組みをとらえたりする姿がうかがえる。また，ネジの形状をとらえ，ナットの用途に気づく姿がうかがえる。これらのことから，配線の仕方のモデル演示や繰り返しネジを使う活動構成が有効に働いたと考える。

また，自分の行為の結果をもとにしながら，試行錯誤して電池やネジといった身近な事物へのかかわりを持つ姿がうかがえる。このことから，個に応じて課題解決のための情報を提供したり，繰り返しコードをつないだりネジを取り付けたりする活動を仕組んだことが有効に働いたと考える。ロボット力士を作ろうという目的意識のもとにコードをつないだりネジを付けたりし，結果として身近な事物である電池やネジの取り扱い方を身に付けていくことができたと考える。

第３次は，他のクラスの友達と一緒に相撲大会を行った。子供たちは，「行事」「呼び出し」「結果」といった役割を分担し，相撲大会を開催した。

ロボットすもう大会には，交流学級の友達や特殊学級の低学年・中学年の友達，同じ校舎で過ごしている中学校の先輩，総勢３０名程度が参加した大規模なイベントになった。

ａ児は，行事の役に取り組み，「はっけよい，のこった！」「○○さんの勝ち！」と大きな声を出して，取り組みを進めていった（写真９）。　全ての取り組みが終わった後の表彰式で，ａ児は，「○○さん，おめでとう」と優勝や準優勝した友達に賞状を渡した（写真10）。

考察３

子供たちの姿から，多くの友達とロボットすもう大会をすることができた喜びを感じていることがうかがえる。ａ児は，行事や賞状渡しといった役割を一生懸命に果たすことができた。

また，中学生や交流学級の友達と活動する場となり，梅組の子供たちが主体的に活動しながら交流することで，子供たちの願いを実現することにつながったと考える。

全体考察

子供の姿から，飼育活動では，必要な課題を意識し，友達と一緒に課題を解決する姿が見られた。そして，必要な活動に取り組む中で，生き物の様子に気づくことができた。ロボット相撲では，ロボットへの興味・関心をもとに，電池や配線，ネジ止めといった課題に一人でねばり強く取り組む姿が見られた。そして電池やネジの働きに気づいく姿が見られた。

このような姿から，①自然とのかかわりを深める年間構想の有効性や②生活事象にかかわる力や課題解決の力といった生活力の育ちといった成果が上げられた。今後は，教科別の指導との関連について究明していきたい。

帰国子女教育の＜ふくおかプラン＞

1　自信と誇りを育む帰国子女教育を

1　本校帰国子女教育の役割・立場

本校において帰国子女教育研究が取り組まれること20年，海外において児童のおかれる教育状況は大きく変化した。帰国児童が日本の学校で不適応を起こしやすいという状況は以前に比べ改善されてきている。しかし今日においても，２つの文化の中で成長してきた子供たちの生活課題や心理的不安が全く解消されたわけではなく。また，以下のような新たな課題も生じている。

① 海外での在留国が広域化し，様々な言語・風俗・習慣を身につけた児童が帰国することで，一斉的・全体的な指導が困難になっている。
② 海外に在留する期間，年齢，理由等の多様化により児童の適応課題が個別化している。
③ 国際化が加速する社会において，帰国子女に寄せられる期待が，日本への適応よりもむしろ特性の伸長に重点を移行しつつある。

以上のことから，ふくおかプランにおいて帰国子女教育が果たす役割は，児童が，安定した気持ちの中で明るい希望と学習への意欲をもって生活を送ることができるよう，適応の促進を図るとともに，海外での貴重な体験や身につけた能力を保存させ，進んで国際理解に役立てることができる力を育んでいくことにある。

2　自信と誇りを育む帰国子女教育とは

自信と誇りを育むとは，帰国児童という他の人には見られない自分の特性に肯定感情をもち，進んで伸ばそうとする意欲を子供の内に育むことである。帰国児童は，日本と外国の２つの文化に触れ親しみ，その境界を自身の中で解消することで自己同一を図っているため次のような特性を備えている。

① 日本と滞在国の２つの国の言語を理解することができる。
② 滞在国の風俗・習慣を直接体験するとともに，地理・歴史などの現地理解の学習をしており外国の国民生活・文化を実感をもって理解している。
③ 相互のために，異文化を理解・受容し，それを尊重できる態度を身につけている。

そこで，ふくおかプランにおける帰国子女教育では，以下の３特性が育った子供の姿をめざしている。

○ 帰国児童である自分のよさや課題に気づき，特性を生かすことに喜びを感じ，自分への自信や誇りを高める子供　（主体性）
○ 様々な立場から，日本と外国の違いや共通点を見つめ，相互が理解し共存・共生していくために必要な見方や・考え方をつくり出す子供　（創造性）
○ 身につけた外国語や外国の人との接し方を駆使して相手の心情や考えを理解・共感し，親しくふれあっていこうとする意欲や態度をもつ子供　（社会性）

このような資質・能力が育つためには，現在の学習や生活への適応を図ることで心身の安定を保つ指導を大切にする一方で，帰国児童ゆえの特性が自分にあることを意識させ，積極的に伸ばそうとすることが必要となる。そこで，①日本語の段階的指導により認識を深めさせるとともに，人間関係を調整できるようにし，心の安定をもたせる，②日本の生活・風俗・習慣などの文化に対する理解を深め，我が国への愛着と理解を深める，③個人

表１　帰国子女教育で特に大切にする資質・能力

主体性	成長への志向 達成意欲	・日本と外国，或いは日本と世界をつなぐことができる国際人としての在り方や自分の生き方を求める。
	課題発見力	・自分自身の帰国児童としての現実に気づき，自己と対話しつつ課題を見出す。
創造性	国際理解のための知識	・自らが体験したことをもとに，グローバル化した社会について自分なりの理解を再構成するための知識を身に付ける。
	思考力	・一つの事象を複眼的・多元的に見つめる見方・考え方を生み出すことができる。
社会性	文化調整力	・自分がもっているものとは異なる文化やそれをもつ人々の心情に共感し，受容することができる。
	コミュニケーション能力	・異なる言語・文化をもつ人とも人間関係をつくり出すことができる。

差に応じた教科指導を行い学習への適応を図る，④外国での体験を生かして他に働きかけていくことで，相互啓発を通じて国際社会に生きることの素晴らしさに感動させるといった４つの柱をもとに学習を構想していく。

3　帰国子女教育における教育課程編成の考え方

前掲の４つの柱を具体化する方策として，生活適応指導，学習適応指導，特性伸長指導の３側面から教育内容・方法を設定し，指導形態を目的に合わせて適用して指導を行う。

▼　生活適応指導の面から

①小集団サポート体制の充実

生活習慣や日本語への適応学年の枠を取り払って，在外国が同じであった児童による小集団をつくったり，言葉の面での手助けができるような児童相互のサポート組織を設ける。

②交友関係拡充の支援

帰国子女学級のなかでの交友関係の充実とともに，交流学級でのグルーピングに配慮する。また，その実態を担任との交換ノート等により把握しカウンセリングを行う。

▼　学習適応指導の面から

①個別カリキュラムの作成

未習内容や，日本と外国の学校の指導の違いによる混乱を是正するために，特に国語・算数については個別カリキュラムを作成し指導にあたる。

②学習内容のパッケージ化

パッケージ化とは，各教科の学習する内容について学年の枠をはずし，児童の実態・到達度に応じて内容を選択しながらまとめて指導を行うことである。

○　算数科におけるパッケージ化

「数と計算」領域について内容のパッケージ化を図った個別カリキュラムを編成する。

例）公約数・公倍数の指導と通分の学習のパッケージ化を行い，分数の加減を理解させる。

○　国語科におけるパッケージ化

学習指導要領における当該学年のねらいに応じた学習指導とは別に，漢字・語彙・短作文など児童の日本語習得の実態に合わせた学習指導を設定する。言語事項についてはパッケージ化を行い，文字の習得にあたっては，必要に応じて学年の配当漢字の枠を取り払い語彙を増やすことと平行して漢字の習得ができるようにする

③学習形態の工夫

子供の実態に応じて，個別指導・帰国子女学級単独指導・異学年間交流指導・同学年間交流指導・帰国合同指導などの形態を随時選択しながら時間割を編成する。

▼　特性伸長指導の面から－国際交流タイム－

前掲した帰国子女の３つの特性は教科・領域・学校行事等のあらゆる場面を想定して育んでいくが，特に帰国子女学級の総合的学習である国際交流タイムでは，児童が海外で身に付けてきた特性を保持・伸長すること，また，滞在国や日本の文化・伝統について学習，交流し，様々な国の理解をはかるというねらいの達成に向けて子供たちが将来出合うであろう４視点から学習内容を選定し，それぞれの課題を単独，或いは複合する形で学習する単元を３領域から設定する。

学習内容における４視点とは次の通りである。

①文化理解
・自文化と異文化の比較視点の獲得による特徴の把握
②相互依存関係
・生産・消費・廃棄など人間の諸活動における依存性の把握
③グローバル・イッシュー
・地球規模の人類共通の問題の解決に向けて自分なりの考え方や行動の仕方の獲得
④共生
・交流・平和・共存など共によく生きる在り方の追究

内容追究を保証し，同時にこれらを子供の興味・関心や願いをから発生する自己追究の原理に根ざした単元として設定するために以下の３領域から単元設定を行う。

① 行事や伝統文化・郷土の理解
海外および地域の季節行事・伝統文化・国際理解にかかわる行事への参加・体験，郷土であるあらつに見える国際性の追究を通して内外の文化比較を行い，自国・他国理解を図る。

② 国際理解
外国の人々との交流により，互いの見方・考え方・感じ方の違いに目を向けたり，皆がよりよい関係を築けるために，自分はどうあればよいか追究し，発信する。

③ 外国語
英会話を中心としながら外国語の物語や劇などを行ったり，歌やゲームを行ったり，外国の方との会話交流をしたりしながら，語学力の保持・伸長を図る。

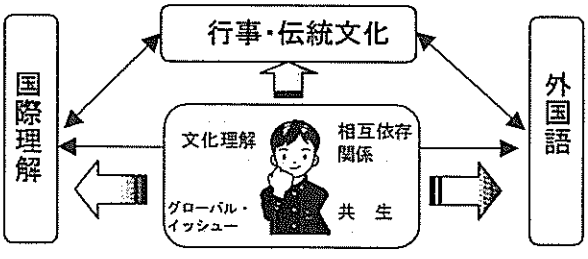


図１　国際交流タイムの単元設定

2 子供たちに確かな学力を身に付けていくために

1 子供の特性に応じた授業形態について

教科・領域を，①日本と海外での教育の内容の違いから学習適応上，帰国子女学級単独での学習が好ましいもの（国語科，算数科，社会科）②具体的な活動があり，通常学級との合同学習を行うことで，帰国子女としての特性がより伸ばしていけたり，人間関係をひろげたりできるもの（理科，音楽科，図画工作科，家庭科，体育科，道徳）③類似した特性をもつ帰国子女の集団での学習が好ましいもの（学級活動，国際交流タイム）の３群に分け，授業形態を適切に設定する。

2 個別のカリキュラムづくりについて

▼ 子供の学習実態の把握と指導方針の決定

個別カリキュラムの設定については，海外において日本人学校に通っていたか，または現地校においてのみ学習を行ってきたのか，補習校の経験はあるのか，といったことで獲得してきた学習内容についての一般的な傾向が異なる。特に，現地校においてのみ学習してきた子供は，国語科においては，読むことよりも，書くことや言語事項について，算数科では，特に，図形領域，数量関係について，日本とのカリキュラムの違いからくる影響を大きく受けている。例えば，文章を書くことについては，日本人学校のなかには，帰国子女の課題として重点的に指導に取り組んでいるところもあるが，海外での学習を現地校のみで行っていた児童は，その学習経験が不足していることが多く，自分の思いを日本語の文章に表すことに抵抗を感じる場合が多い。そこで，まず入級調査時に把握した子供の実態を分析し，個別カリキュラムづくりの方針の決定を行う。

（A児の例）
- 国語科は，ひらがな，カタカナの表記，語彙の獲得など，日本語の能力に関して日本語の能力について個別的な指導が必要であり，漢字の力，文章表現力ともに１年生程度内容からの補充が必要
- 算数科は，乗法，除法の筆算など３年生程度の内容からの補充が必要
- いずれの場合も，学力実態が同学年の子供たちと差がみられ，一斉指導は困難である。

↓

○ 人間関係おける生活への適応も課題の一つであるが，国語科，算数科についての学習適応についての指導を最優先課題とし，カリキュラムの弾力的運用を行う。

▼ 内容選定，配列の決定

子供の実態により個別カリキュラムづくりの方針を決定した後，学習内容の選定と配列を決定していく。その際には，各教科の学習する内容について学年の枠を取り払い，子供の実態に応じて内容の選択し，いくつかの内容を関連的に取り扱い指導していく（学習内容のパッケージ化）。

○ 国語科学習におけるパッケージ化
学習指導要領における当該学年のねらいに応じた学習指導とは別に，漢字，語彙，短作文など子供の日本語習得にあたっては，必要に応じて学年の配当漢字の枠を取り払い語彙を増やすことと平行して漢字の修得ができるようにする。

○ 算数科学習におけるパッケージ化
「数と計算」領域について内容のパッケージ化を図った個別カリキュラムを編成した。他の領域についても課題に応じた指導を行う。

▼ 内容（時間）配分と段階的な指導

個別のカリキュラムづくりを行う一方で，できる限り多様な子供たちと交流できる機会を設けていくことも定説であると考える。その授業形態の段階としては，①個別指導を中心に学力の補充を行い，そのなかで可能な限り他の児童と共に学習していく段階②帰国子女学級内の下学年学級において学力の補充を行いながら，通常学級との交流学習の時間を増やしていく段階③他の児童と共に交流学級での学習を行う段階，の３段階を考える。

（A児の例　５年生）
① 個別指導中心の段階
② 帰国４年生学級での学習を行う段階
③ 帰国５年生学級での学習を行う段階

- ５年３組で行っている国語科・算数科の学習（帰国単独）については，同室で個別の課題を設定する複式学級的な指導を行う。
- 社会科，理科，道徳については，個別指導の時間として国語科・算数科の指導にあてる。

▼ 指導の記録と保護者との連携

指導にあたっては個別のカルテを作成し，学習の積み上げを明らかにしながら，複数教官での指導の連携を図る。また，学習状況については保護者との連絡を密にし，カリキュラム運用の仕方を適宜更新していく。また，家庭学習等についての協力を仰ぎ，適応指導としての充実を図る。

（野田真功）

3 「国際交流タイム」学習の構想

帰国子女教育部　野　田　真　功

学習プランの具体的構想

▼ 単元設定の条件

① 海外生活を行なうなかで身に付いてきた知識，見方，考え方，感じ方を更に深めることのできる内容の創造があること

② 滞在国と日本，または滞在国と日本以外の国というように２つ以上の国の生活習慣，文化について比較・追究していく活動があること

③ 異文化についての理解を深め，従来自分がもっていた外国の文化を大切にしながら日本の文化を受容することで，自分を更新していくことができること

▼ 基本的な活動構成

まず，課題を設定する過程では，子供たちが体験してきている２つの文化を比較し，追究対象を明らかにしていくことができるようにする。そのために，自文化と異文化とを比較していく視点を明確にし，滞在国で得た体験や情報を資料化していく活動を行う。次に，課題を追究する過程では，個人や異年齢によるグループでそれぞれの課題について追究していく。ここでは目的に応じて情報活用ができるようにしたり，調べたこと，考えたことを外国語の活用も含めて表現物としてまとめていくことができるようにしたりするために，インターネット，電子メール等の活用や，海外生活体験をもつ人や国際交流に努める人などの招聘などを行う。最後に，課題をまとめる過程では，追究内容をもとに実践活動や発信していく活動を行う。そのための発表会の場の設定や，子供たちが用いる相互評価シートの準備などを行う。

▼ 年間計画の工夫

国際交流タイムの学習は，４，５，６年生の帰国子女の子供たちによる異年齢集団で行う学習であるため，単年度ごとの年間指導計画では，同じ学習内容が重複して指導されていくことになる。そこで，３年間分をもって１サイクルとなるような３カ年指導計画を立案していくものとする。但し，毎年行われている学校行事との関連が強い単元については重複を構わないものとする。

○ 子供たちが実際に体験を通して学習していく単元については実施時期を考慮し，配列を行っていく。

○ 前年度取り組んだ内容を次年度以降，本人が更新していくことができるものも取り上げ，自己の成長を感じ取ることができるようにする。

指導の実際

第４・５・６学年　単元
つくろう！あらつの魅力本・外国語版

▼ 単元の考え方

本単元は，あらつのもの，人，ことについての見方，考え方が深まったり，あらつのよさを伝えたいという願いをもっている子供たちが，外国人留学生の人たちや日本語訳付き英文観光ガイドの制作を行った人たちとの出会いをきっかけとして，あらつの魅力を外国語で紹介するガイド本づくりを行う学習である。そのなかで，自分たちが海外で身に付けてきた外国語の力を生かしていくことができるよさを実感するとともに，自分たちの生活基盤であるあらつへの愛着を深めることができると考える。それらは，自分の願いをもとに課題を設定し，追究方法を考えていく主体性，外国人留学生の人たちの思いや，自発的に国際交流を求め活動を推進している人たちの思いについて考えることのできる創造性，自分たちと同じように海外での生活体験を持つ在留外国人の人たちに共感したり，国際交流を目指して努力している人々と交流していく社会性を育むことにつながるものである。そのためには，自分たちがもっている特性である外国語の力を生かしていくことを自覚させる活動や外国語を使って積極的に交流を図る活動を仕組むことが大切となる。

▼ 単元の目標

1　あらつの魅力をまとめたガイド本の外国語版を作製していく課題を設定し，あらつにあるものや人についてその魅力について追究したり，よりよい活用の仕方を工夫したりすることができる。（主体性）

2　外国から来た人に勧めるという観点からあらつのよさを取り上げ，それらを外国語訳の説明を添付しながらガイド本としてまとめるとともに，あらつに対する愛着を深めことができる。（創造性）

3　外国人留学生の人や日本語訳付き英文観光ガイドの制作を行った田畠さんたちなど，国際交流に努める人たちの願いに共感し，異文化理解に努める人々との関係をつくろうすることができる。（社会性）

▼ 学習の流れと考察

第１次：１～３／15時

外国人留学生や，英文観光ガイド本を制作した人と出会い，あらつの魅力を外国語を使ってまとめたガイド本をつくっていく課題をもつ。



写真１　みなさんにもできると思いますよ

- 福岡を紹介している様々な市販のガイド本との出合い
- 留学生の体験談との出合い
- 日本語訳付きの英文ガイド本と制作に携われた田畠先生，中島先生との出会い

第２次：４～12／15時

あらつのよさについて取材し，日本語と外国語を活用しながらあらつの魅力本・外国語版をつくる。

①　あらつの魅力について調べ直していく。



写真２　外国の人が喜びそうなものがたくさんあります

- 西公園
- 唐人町商店街とその周辺
- 伊崎浜と港付近

第１次は，あらつについて自分たちが今感じているよさを人に伝えたいという願いを出発点として，外国語訳を入れたあらつのガイド本をつくっていく活動への意欲をもつことをねらいとしている。そこでまず，福岡を紹介している様々なガイド本と出合う場，次に，日本語以外で紹介されたガイド本が余りにも少なく困ったという体験談を，これまでの学習でお世話になった留学生から聞くことのできる場を設定し，あらつの魅力を外国語を交えたガイド本の形でまとめていくことに対する意識を生み出すようにしていった。更に，福岡市を紹介した日本語訳付きの英文ガイド本が作られていることを紹介すると，子供たちは「そのガイド本を見たい。」「作った人の話を聞いてみたい。」という関心を示した。そこで，制作メンバーであった方を招き，ガイド本づくりについての質問をしたり，話を聞いたりする活動を設定した（写真１）。そこで，外国語を使うことができるという自分たちの特性を再意識し，「外国で生活してきた経験を生かし，あらつを初めて訪れる外国の人に役立つような外国語によるあらつの魅力を紹介したガイド本をつくろう」という課題を設定することができた。

今日は，私たちがまだ知らなかったガイド本の作り方や大切なポイントを知ることができて，どんどん作っていこうという気持ちになってきました。中島先生が，私たちは外国でくらしたことがあるので英語などがわかるし，有利ではないか，と話してあったのを聞いて，確かにそうだな，よし，やってみようという気持ちが高まってきました。

資料１　魅力本づくりへの意欲をもった子供の思い

考察１

あらつのよさについて見方，考え方が深まっている子供たちに，① 市販のガイド本，②留学生の人の体験談③日本語訳付きの英文ガイド本と制作に携われた方々，という３つの出合いを設定したことで，外国語がわかったり日本との違いを感じたりしている自分たちの姿を振り返り，自分たちだからこそできるあらつの魅力本・外国語版を作っていきたいという課題をもてるようになった。（資料１）

第２次は，自分の課題に応じて追究方法を計画し，外国語を活用しながら，あらつの魅力本・外国語版をつくりあげていくことをねらいとしている。そのためにまず，「魅力本をつくるためには，もっとあらつの魅力についてくわしくなっておかないといけない。」という子供の願いのもとに，あらつの魅力について調べ直す活動を設定した。子供たちは，自分たちがこれまでに感じ取っていたことをもとに，西公園，唐人町商店街とその周辺，伊崎浜と港付近を魅力本に取り上げていきたい場所として選択し，見学を行っていった（写真２）。

その後魅力本の制作を進めていった子供たちは，自分たちがつくった魅力本について外国の人はどのように思うのだろうか，外国語にしたところは本当に正しくかけているのだろうか，等

② 魅力本つくりを進め，外国の人に感想や外国語訳をみてもらう。

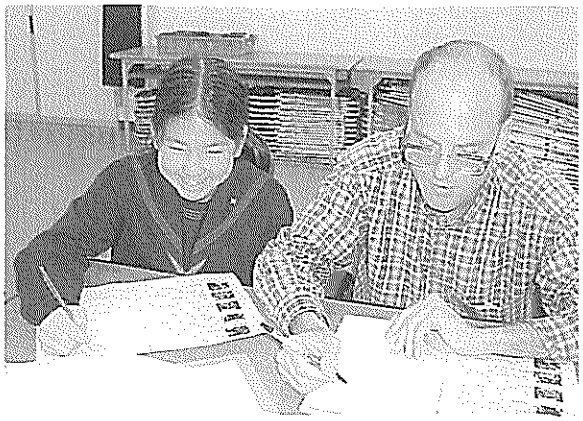


写真３　ここの英語は正しくかけていますか

第３次：13～15／15時
あらつの魅力本・外国語版を活用し，つくってきた活動を振り返る。

① 田畠先生と中島先生を招いて魅力本完成の報告会を開く。

最初はフランス語で書けるか不安だったけど，ゲストティーチャーの方に手伝ってもらいながらがんばり，田畠先生や中島先生たちにもほめられたので，とてもうれしかったです。外国に住んでいたことで，外国語が話せなくて困った経験と，話せるようになった両方の経験が魅力本づくりに生かせて，本当によかったなと思いました。

資料３　魅力本完成の報告会を行うことができた喜び

② 外国の人たちに魅力本を渡し，感想を尋ねる。

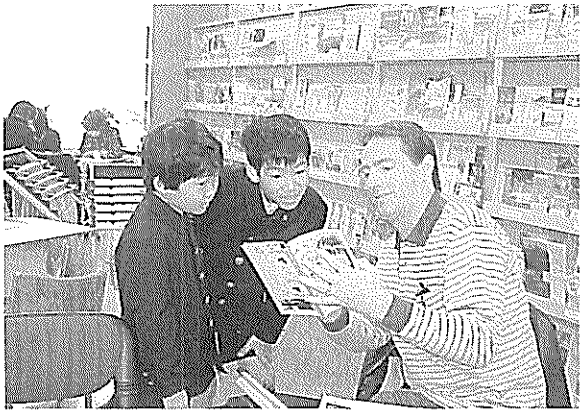


写真４　僕たちがつくった魅力本はどうですか

のことについて確かめてみたいという願いをもった。そこで，実際に来て福岡に住んでいる人を招き，魅力本についての感想を聞いたり，自分たちが使った外国語訳についてみてもらったりする活動を設定していった。子供たちは，海外で身に付けてきた英語や中国語などを活用しながら魅力本について見直していった（写真３）。

ゲストティーチャーの人から英語や中国語，フランス語を直してもらって，ちゃんとできているつもりでも，外国の人からみるとこう思うんだろうなということがわかりました。日本語の意味のわからないところも教えてもらったのでとてもよかったです。だから次はそこを修正したり書き加えたりしたいと思います。

資料２　魅力本を外国の人と見直した後の子供の思い

考察２

自分たちがつくったものを実際に外国に人にみてもらう場を設定したことで，魅力本づくりに対する自分たちの目標を再確認することができ，完成への意欲を高めていくことができた。

第３次は，つくりあげたあらつの魅力本・外国語版を活用しながら自分たちの活動について振り返り，その価値について実感していくことをねらいとしている。まず，田畠先生と中島先生を招き，魅力本完成の報告会を行った。子供たちは，「調べていくうちに，前よりもっとあらつがすばらしいところだと気付くことができた。」「あらためて外国で暮らしていてよかったなと思った。」といった感想を伝えていった。その後，より多くの外国からきた人に見てもらいたいという願いのもと，福岡在住外国人の交流の窓口の一つであるレインボープラザに完成した魅力本を届けにいった。子供たちは，そこにおられた人たちに魅力本を手渡し，自己紹介やこれまでの経過などについて外国語を使いながら交流していった（写真４）。

今日，イムズにいって外国の人に魅力本を配ったら，感想はみんな"It's great!"と言って下さいました。また，"I will go there"と言って下さった方もいました。たくさんの人に英語を使いながら配ったり話したりできて，とても楽しかったです。いろんな外国の人にわかってもらえたので，本当にうれしかったです。

資料４　魅力本を外国の人に渡した子供の思い

考察３

田畠先生と中島先生を招いて評価していただく場や，目的としていた福岡に住む外国の方に魅力本をみていただき，外国語を活用しながら交流をもち，評価していただく場を設定したことで，子供たちは自分たちに対する自信を深めることができた。

全体考察

帰国子女としての特性を生かすことのできるような活動の提案を行ったことで，自分たちの姿を見直し，自分たちならばできるのではないかという課題意識をもたせることができた。また，実際に外国の人と外国語を活用しながら直接的に交流していくことのできる活動をもち，評価してもらう場を設定していくことで外国語を活用していくことのできる自分の特性を振り返り，そのよさを伸ばしていこうとすることができた。

メ　モ

おわりに

新学習指導要領が完全実施となり，完全学校週５日制の下で，「ゆとり」ある，しかも「特色ある教育」を展開し，自ら学び自ら考える「生きる力」を身につけた子供を育成していかねばなりません。そのために，新しい教育課程の創意ある編成とその確かな実践が求められています。とりわけ，新設の総合的な学習の時間の計画と実践は，これから期待される教育の鍵を握っているといえます。総合の学びは教科の学びと両輪をなし，相互に補完し合ってこそ，その理念が具現化され子供の力となっていきます。したがって，教科の学びと総合の学びのそれぞれの特質を大切にした連動のあり方を明らかにすることが，これからの学校教育の重要な課題であるととらえています。

本校では，今日の教育課題に対応すべき新世紀の教育のあり方を求めて，「豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造」の研究主題のもと，教育研究と実践を積み重ねて参りました。本校の研究は，「豊かな人間の育成」のために，－教科・総合の学びを連動する＜ふくおかプラン＞の展開－という研究の視点を明確にしながら，子供にとって意味ある学びを生み出すためのカリキュラムづくりのあり方を追究するものです。

本年度の研究では，特に次の３つの主張を込めて，カリキュラムづくりのあり方を究明してきました。

① 豊かな人間の育成をめざす学習として，各教科等がそれぞれに担っている固有の大切な役割・立場を明確にすること

② 各教科等のいずれにおいても，子供たちが「主体性」「創造性」「社会性」を発揮し高めていく「自己追究の学び」として学習を展開すること

③ 教育課程全体において，各教科等の学びが連動し，相互補完・相互促進するなかで，資質・能力が高まるように配当・配列を工夫すること

こうした考え方を＜ふくおかプラン＞として具体化し展開していくことで，子供の課題追究や実践活動の姿のなかに「主体性」「創造性」「社会性」の３つの特性の高まりがみられるようになりました。成果の一端ととらえています。

本校はまた，帰国子女学級及び特殊学級を併設し，それぞれの教育研究と実践をおこなっています。一人一人の子供が学習や生活への適応を図ると同時に，特性伸長の方針のもと，個のよさを生かすべく，独自のカリキュラムの作成と実践に取り組んでいます。

最後になりましたが，本校研究の深化・充実のために，ご指導を賜りました国立教育政策研究所の工藤文三先生，福岡教育大学の先生方及び本校先輩をはじめ関係の先生方に深く感謝申し上げます。また，わたしたちの研究に各方面から，厳しいご指導・ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

平成１４年６月

副校長　　久　門　　隆

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校・福岡教育大学研究同人(平成14年度)

◎学　　長　　松尾　祐作

◎大学教官

(国語科)	前田　眞證	(理　科)	中村　重太	(図画工作科)	草尾　和之
	山元　悦子		宮脇　亮介	(体育科)	兄井　彰
(社会科)	中野　和光		田中　浩朗	(家庭科)	柳　昌子
(算数科)	山下　昭	(生活科)	森藤　義孝	(道　徳)	堺　正之
	飯田　慎司	(音楽科)	平井　建二	(特別活動)	高田　清
	山口　武志		岩﨑　洋一	(障害児教育)	藤金　倫徳
	清水　紀宏		木村　次宏	(養　護)	照屋　博行

◎附小教官

(職名)	(担任)	(専　攻)	(氏　名)	(出身地区)
校　長		国　語	中谷　雅彦	大　学
副校長		国　語	久門　隆	福岡市
教　頭	専　科	理　科	手島　宏樹	筑　紫
研究主任	専　科	国　語	吉田　正樹○	福岡市
教務主任	専　科	音　楽	豊村　雅義	糟　屋
教　諭	1の1	音　楽	原　クミ	糸　島
教　諭	1の2	生　活	北島　孝徳	八女・筑後
教　諭	2の1	体　育	稲津　一徳○	糟　屋
教　諭	2の2	算　数	塩田　利彦	糸　島
教　諭	3の1	国　語	田渕　聡	宗　像
教　諭	3の2	図画工作	北田　尚雄	福岡市
教　諭	4の1	理　科	野口　信介○	福岡市
教　諭	4の2	社　会	藤野　俊明	宗　像
教　諭	4の3	算　数	澤村　重則	筑　紫
教　諭	5の1	特別活動	矢野　俊次○	甘木・朝倉
教　諭	5の2	社　会	髙野　誠一○	筑　紫
教　諭	5の3	道　徳	大近　正博	福岡市
教　諭	6の1	体　育	岩城　一磨	三井・小郡
教　諭	6の2	国　語	平島　健二	筑　紫
教　諭	6の3	家　庭	木村　真美	福岡市
教　諭	専　科	算　数	野田　真功	山門・三池・柳川
教　諭	ふじ	障害児教育国語	原口　和美	福岡市
教　諭	さくら	障害児教育算数	園田　洋一	筑　紫
教　諭	梅	障害児教育生活単元	谷崎和一郎	久留米
教　諭	専　科	障害児教育体育	舛元　俊文	糟　屋
養護教諭	養　護		森田　常子	糸　島
研　修	専　科	音　楽	関屋　成久	福岡市
研　修	専　科	図画工作	豊田　達之	浮　羽
研　修	専　科	障害児教育音楽	江頭　美佳	糟　屋
研　修	専　科	理　科	松永　清隆	糸　島
研　修	専　科	社　会	近藤　暢威	嘉穂・山田
講　師	専　科	体　育	寺本　智範	熊本市

※　○印は平成14年度研究部員

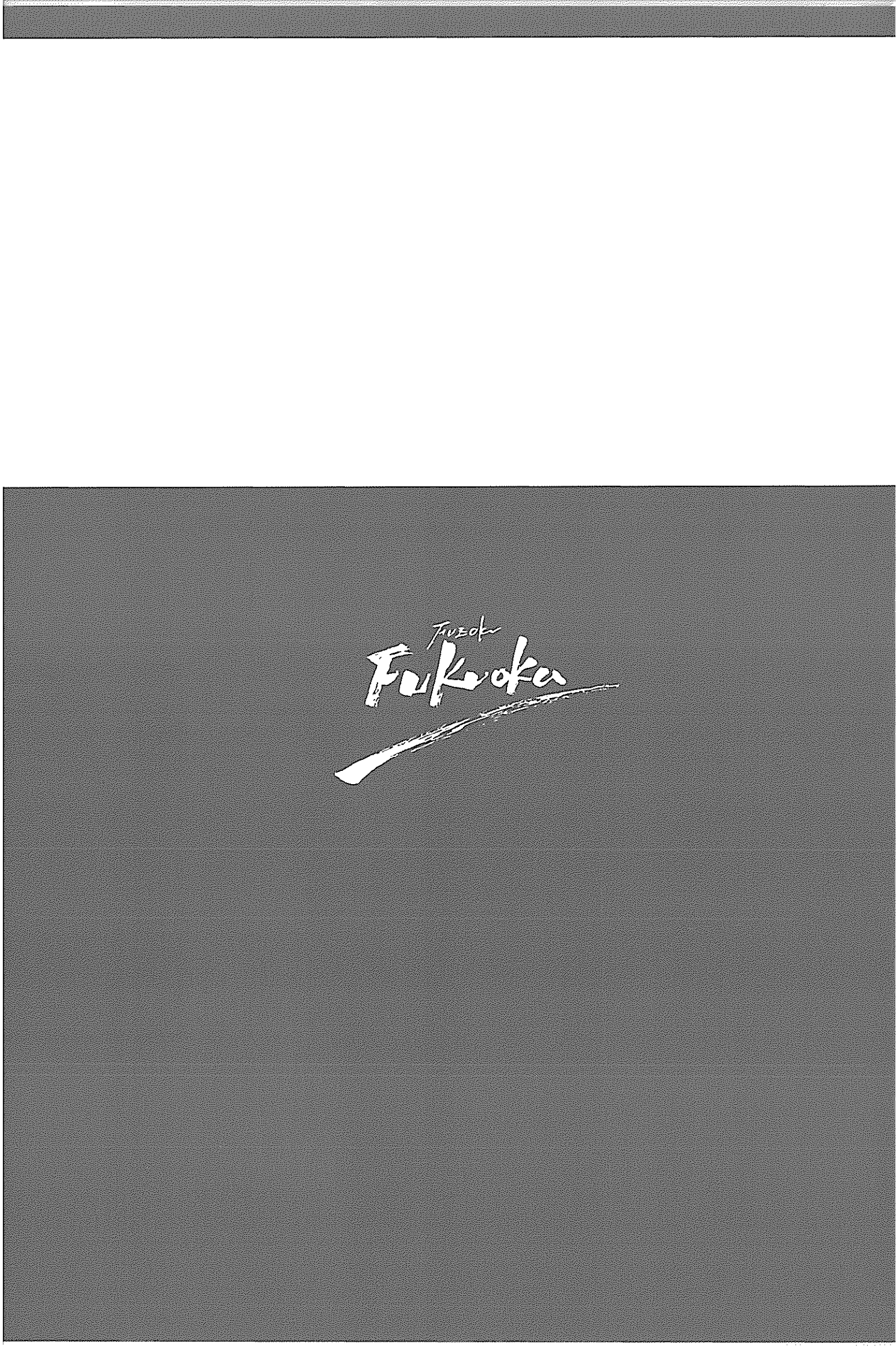
平成１３年度　附属福岡小学校転出教官

小森　晃（筑　紫）	石田　耕一（糟　屋）	石硯　昭雄（糸　島）
島﨑　儀郎（三井・大川）	光延正次郎（糟　屋）	中山　朗（筑　紫）
大坪　和之（甘木・朝倉）	石橋　剛克（福岡市）	長濱　恵美（嘉穂・山田）
河野　智子（嘉穂・山田）		

平成14年6月　印刷・発行
福岡教育大学教育学部附属福岡小学校
研究紀要 No.33

発行者　福岡教育大学教育学部
附属福岡小学校
〒810-0061　福岡市中央区西公園12番1号
TEL 092(741)4731(代)

印刷所　㈱ネオ・プリンティング
TEL 092(511)8941(代)


Fukuoka
Fukuoka